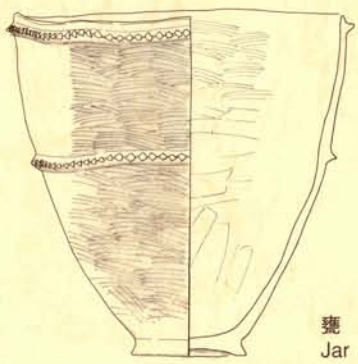
福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

雀居 7

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第746集



2003

福岡市教育委員会

『雀居7』正誤表

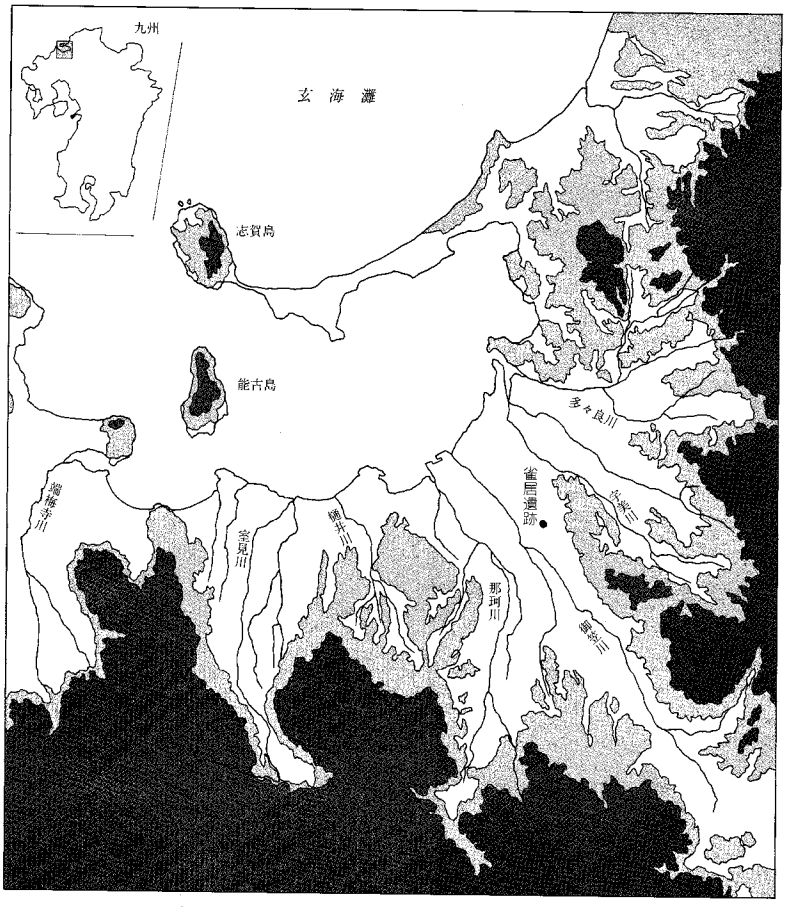
頁	行 Fig.	誤(斜体文字は修正指示)		正(太文字が修正部分)
Ⅱ	下17	金属製品1/2である。	挿入	金属製品、**骨角製品**1/2である。
Ⅳ	左下1	Fig.28　SC02検出作業	挿入	Fig.28　**SC01**・SC02検出作業
Ⅵ	右下9	Fig.137　SC08の遺物**(縮尺1/2)**	削除	Fig.137　SC08の遺物
Ⅷ	左9	Fig.244　SK123～SK147の遺物	訂正	Fig.244　SK**151**～SK**200**の遺物
	右12	Fig.277　円形溝分布図（縮尺1/100）	訂正	Fig.277　円形溝分布図（縮尺1/**200**）
5	Fig.5	*⑩・⑫の北側の発掘区に「⑬」の文字を挿入*		
13	Fig.12	*タイトルの下に「**赤線は下面水田を示す**」の文字を挿入*		
16	表	*中央最下段の[次欄]の「**12次**」の文字を削除*		
18	下14	SF074、075を	挿入	SF074、**SF**075を
20	Fig.19	*「**1**」の文字を右下に挿入*		
	Fig.20	*スケールの下に挿入*		**(13・14はS＝1/2)**
25	Fig.25			**(23～25はS＝1/2)**
28	Fig.28	Fig.28　SC02の検出作業	挿入	Fig.28　**SC01**・SC02の検出作業
32	Fig.34	*スケールの下に挿入*		**(28～35はS＝1/2)**
36	Fig.38			**(39はS＝1/2)**
		*遺物番号「３８」の断面図を**網ナシ**に訂正*		
	下11	O-25グリッドで検出した。	削除	O25グリッドで検出した。
41	下8	P-24グリッドに当たる。	削除	P24グリッドに当たる。
55	Fig.60	*スケールの下に挿入*		**(43はS＝1/2)**
56	Fig.61	*遺物番号「5」内、上図の**天地を逆位置**に訂正*		
57	Fig.62	*遺物番号「3」内、右側写真の**天地を逆位置**に訂正*		
63	Fig.72	Fig.72　SN01下棺	訂正	Fig.72　SN01**上**棺
70	Fig.83	*スケールの下に挿入*		**(31はS＝1/2)**
75	Fig.87			**(63～67はS＝1/2)**
77	Fig.90			**(49はS＝1/2)**
80	Fig.95			**(7はS＝1/2)**
90	Fig.109			**(29はS＝1/2)**
	Fig.110	*「**26**」の文字を右下に挿入*		
104	Fig.133	*スケールの下に挿入*		**(23はS＝1/2)**
106	Fig.136			**(10はS＝1/2)**
	Fig.137	Fig.137　SC08の遺物**(縮尺1/2)**	削除	Fig.137　SC08の遺物
	下12	土壙SK018-④内にある	訂正	土壙SK018-**②**内にある
	下11	SK018-④は整った	訂正	SK018-**②**は整った
108	6	N-85-W	訂正	N-**85°** -W
117	Fig.158	*スケールの下に挿入*		**(36はS＝1/2)**
118	Fig.160			**(12はS＝1/2)**
120	Fig.164	*「**3**」の文字を左端土器片右下に移動*		
122	Fig.166	*スケールの下に挿入*		**(81はS＝1/2)**
123	Fig.169			**(12はS＝1/2)**
127	Fig.176			**(23・24はS＝1/2)**
130	Fig.180			**(18はS＝1/2)**
138	Fig.198	Fig.198　SK026・027の遺物（縮尺1/4）	挿入	Fig.198　SK026・**SK**027の遺物（縮尺1/4）
142	Fig.206	*「**18**」と「**19**」の文字を入れ替え*		
	Fig.207	***縮尺1/4の20cmスケールの挿入***		
		*「**18(SK039)**」と「**19(SK040)**」の文字を入れ替え*		
147	Fig.212	*スケールの下に挿入*		**(64はS＝1/2)**
150	Fig.218			**(19はS＝1/2)**
151	Fig.220			**(10はS＝1/2)**
155	Fig.226			**(4はS＝1/2)**
156	Fig.228			**(3・15はS＝1/2)**
160	Fig.234			**(45～47はS＝1/2)**
165	Fig.243	*遺物番号「9」上の遺物の右下に「**7**」の文字を挿入*		
166	Fig.244	*スケールの下に挿入*		**(26はS＝1/2)**
		Fig.244　SK123～SK147の遺物	訂正	Fig.244　SK**151**～SK**200**の遺物
171	Fig.253	*スケールの下に挿入*		**(10・11はS＝1/2)**
		Fig.253　SK219の遺物（縮尺1/2）	挿入	Fig.253　SK219の遺物（縮尺**1/4**・1/2）
176	Fig.261	Fig.261　SP0085・0086・0097土壙実測図**（縮尺1/40）**	挿入	Fig.261　SP0085・**SP**0086・**SP**0097土壙実測図（縮尺1/40）
183	Fig.271	*スケールの下に挿入*		**(4・21はS＝1/2)**
184	Fig.272			**(37はS＝1/2)**
185	Fig.273	***縮尺1/4の20cmスケールの挿入***		
187	Fig.277	Fig.277　円形溝分布図（縮尺1/100）	訂正	Fig.277　円形溝分布図（縮尺1/**200**）
196	Fig.294	Fig.294　第Ⅱ面の掘り下げの遺物	挿入	Fig.294　第Ⅱ面の掘り下げの遺物**(縮尺1/2)**

福岡市博多区

雀居 7

雀居遺跡第10次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第746集



遺跡名	雀居遺跡　第10次調査		所在地	福岡市博多区大字雀居正フリ川	
調査番号	9609	遺跡略号	SAS－10	開発面積	31,000㎡
調査対象面積	2,800㎡	調査面積	1,310㎡×4面	調査期日	960513～970131

平成15年

福岡市教育委員会

序

九州の北端部に位置し海に開かれた福岡市は、アジア各地の文物や人々を受け入れる門戸としてわが国の歴史、文化形成上きわめて重要な役割を果たしてきました。わが国における稲作発祥の地として教科書にも掲載されている板付遺跡や奈良、平安時代に華やかな国際外交の舞台となった鴻臚館跡などは、この地の盛んな対外交渉を物語っています。

現代の国際交流の場である福岡空港は、乗降者数、輸送貨物が激増し、空港施設の整備、拡張が急務となりました。このため運輸省（現国土交通省）は、国際線ターミナル建設を中心に「福岡空港西側整備」を計画しました。このため埋蔵文化財課では試掘を実施したところ弥生時代以降の各遺構面が重層的に保存されていることが分かり、運輸省第四港湾建設局や防衛施設局等と協議を重ね、建設工事に先立って発掘調査を年次的に実施することになりました。

発掘調査は平成３年より開始し、平成10年度の第13次調査で終了しました。弥生時代初め頃の豊富な木製農具の出土、弥生時代後期の環溝集落など考古学の新資料が相次ぎ、特に環溝集落が中国史書『魏志倭人伝』に記録されている時期に当たり、環溝から出土した木製短甲や楯などの武器類は当時の緊張した社会状況を物語る資料として注目されました。

このたび未刊となっていた第10、12、13次の調査報告書を発行することになり、本書は第10次調査の報告書です。発掘によって弥生時代初め頃から古代、中世に至る遺構と遺物が発見され、大きな成果を上げることができました。特に家畜小屋と推定される遺構は、当時の食生活や弥生ムラの様子を具体的に想像する資料として注目されます。

調査から整理、報告に至るまで、国土交通省九州地方整備局（旧運輸省第四港湾建設局）や福岡空港関係者の皆様にはさまざまな面でご協力をいただきました。また発掘作業員をはじめとして多くの方々にもご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。また、本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成15年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

Fig.1　福岡平野と福岡空港

例言・凡例

1．本書は、国土交通省九州地方整備局（旧 運輸省第四港湾建設局）による福岡空港内西側整備の建設工事に先だって実施した博多区雀居遺跡第10次調査の報告書である。

2．雀居遺跡の発掘調査は、平成３年の試掘調査を第１次として、平成10年第13次調査で終了した。このうち第２～９、11次調査分については、すでに出土資料、記録類の整理を終え、調査報告書を発行している。なお、平成13年度末に、雀居遺跡の紹介や第10、12、13次調査分の整理作業の途中報告として『雀居遺跡６－雀居ムラのガイド・データーブック－』を発行している。

3．未報告であった第10、12、13次調査の出土遺物や図面、写真類などの記録資料については、平成11年より整理作業を開始し、平成14年度に終了したので、各次調査を３分冊にし、さらに、人類学、昆虫学、動物学、植物学、放射性炭素、ガラスなど関連科学分野の先生方に分析、研究をお願いし、その結果を別冊として加え計４分冊とした。

4．各次とも検出遺構は、次のようなローマ字をつけ、遺物を取り上げている。本報告書では、遺構の内容が分かるように、遺構名称とローマ字２文字（遺構名英文の略ではない）とを併記して第１号井戸SE01、第12号土壙SK12のように表し、各遺構番号は、各次で完結させている。なお各遺構は、次のような縮尺で統一している。

竪穴住居跡SC（1/60）　掘立柱建物跡SB（1/60）土壙SK（1/40）　ピットSP（1/40）　井戸SE（1/40）　甕棺墓SN（1/20）　木棺墓SA（1/20）　土壙墓SH（1/20）　溝SD（1/40）窪地(凹地）SW（1/100）　土器溜SJ（1/80）　土器群SG（1/40）　方形周溝SR（1/60）　円形溝SS（1/40）　水田跡SF（1/400）　杭列SX（1/40）　自然流路SL（1/100）

5．本書に掲載している地図、遺構図は、すべて磁北（真北より西に６度20分偏っている）である。またグリッドの縦線（アルファベット）は磁北より59度西に偏っている。

6．遺物のうち石製品、木製品等については、遺物実測図の断面に網かけをしている。また実測図の基本縮尺は、土器、土製品、木製品1/4、石製品、土製品（紡錘車）、金属製品1/2である。また、木製品については測定数値（単位mm）を図に記入している。なお、出土遺構や遺構面ごとに通し番号としているが、遺構と同様に各次に渡っての通し番号にはなっていない。

7．遺構・遺物撮影、原稿執筆、割付・編集は、主に力武が当たり、古墳時代土師器については、西堂将夫調査員が担当した。発掘現場での遺構実測から資料整理の遺物実測、分類、登録、さらに報告書作成のトレースなどの各作業については、主に瀬戸啓治、北村幸子、羽方誠、境聡子、野田和美、西堂将夫調査員と分担して行った。また石製品の実測、作図、及び土器割付図のトレース業務のうち一部を外部委託した。

8．木製品、漆製品、金属器、およびガラス製品など特殊遺物については、保存処理やクリーニング、分析などを福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏と片多雅樹調査員にお願いし、その結果報告も掲載することが出来た。

9．英文要約の作成は林田憲三氏にお願いした。

10．出来るだけ多くの遺構、遺物実測図を掲載するように努めた。また各遺物の分類や数値的な検討、比較等に活用していただくために遺物の観察表をＣＤ-Rに収録した。また調査期間中毎週月曜日に発行していた「雀居遺跡週刊ニュース」も収録している。

11．今回の発掘調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2-1-9　TEL092-571-2921）に収蔵、保管する。誰もが検索し、実見することが出来るので、考古学などの学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

本文目次

第１章　はじめに …… 1

第１節　調査にいたるまで …… 1
第２節　発掘調査の組織と構成 …… 7
第３節　雀居遺跡の位置とこれまでの調査報告 …… 10

第２章　発掘調査の記録 …… 11

第１節　調査の概要 …… 11
第２節　グリッド設定と基本層序 …… 11
第３節　第Ⅰ面（古代～中世）の調査 …… 13
　１．概　要 …… 13
　２．水田跡 …… 16
　３．第Ⅰ面の掘り下げ …… 24
第４節　第Ⅱ面（弥生時代後期～古墳時代前期）の調査 …… 26
　１．概　要 …… 26
　２．竪穴住居跡 …… 28
　３．井　戸 …… 36
　４．土器溜 …… 42
　５．墓（方形周溝、甕棺墓） …… 60
　６．第Ⅱ面の掘り下げ …… 65
　　SC01、SC02下とSC04～SC06の遺物 …… 66
　　土器群 …… 79
　　その他の遺物 …… 88
第５節　第Ⅲ面（弥生時代中期～）の調査 …… 101
　１．概　要 …… 101
　２．竪穴住居跡 …… 103
　３．墓（木棺墓、土壙墓、甕棺墓） …… 106
　４．土　壙・ピット …… 112
第６節　第Ⅳ面（弥生時代早期～前期）の調査 …… 186
　１．概　要 …… 186
　２．円形溝 …… 187

第３章　おわりに …… 196

小　結 …… 196

挿図目次

Fig. 1　福岡平野と福岡空港 …… Ⅰ
Fig. 2　福岡空港と御笠川 …… 1
Fig. 3　月隈丘陵上空から福岡平野を望む …… 2
Fig. 4　空から見た福岡空港 …… 4
Fig. 5　雀居遺跡の発掘調査地点（縮尺1/12,500） …… 5
Fig. 6　那珂遺跡上空より福岡空港を望む …… 6
Fig. 7　発掘作業員の皆さん …… 7
Fig. 8　昭和はじめ頃の雀居遺跡周辺図（縮尺1/25,000） … 8
Fig. 9　雀居遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000） …… 9
Fig.10　基本層序 ……12
Fig.11　土層写真 ……12
Fig.12　第10・12・13次調査水田跡全体図 ……13
Fig.13　水田跡 ……14
Fig.14　水田跡平面図（縮尺1/400）……15
Fig.15　水田跡検出作業（北西から）……17
Fig.16　SF063実測図（縮尺1/100）……18
Fig.17　水田跡実測作業 ……19
Fig.18　水田跡実測作業 ……19
Fig.19　水田跡の遺物 ……20
Fig.20　水田跡の遺物（縮尺1/4・1/2） ……20
Fig.21　水田跡の遺物（縮尺1/2） ……21
Fig.22　水田跡の遺物 ……22
Fig.23　水田跡の遺物（縮尺1/4・1/2） ……23
Fig.24　水田跡の遺物（縮尺1/4） ……24
Fig.25　第Ⅰ面掘り下げの遺物（縮尺1/4・1/2）…25
Fig.26　第Ⅱ面検出作業 ……26
Fig.27　第Ⅱ面遺構全体図（縮尺1/300） ……27
Fig.28　SC02検出作業 ……28
Fig.29　SC01・SC02（西より）……28
Fig.30　SC01・SC02実測図（縮尺1/60） ……29
Fig.31　SC01の遺物（縮尺1/4）……30
Fig.32　SC01の遺物（縮尺1/4）……31
Fig.33　SC01の遺物……32
Fig.34　SC01の遺物（縮尺1/4・1/2）……32
Fig.35　SC02の遺物（縮尺1/4）……33
Fig.36　SC02の遺物（縮尺1/4）……34
Fig.37　SC02の遺物（縮尺1/4）……35
Fig.38　SC02の遺物（縮尺1/4・1/2）……36
Fig.39　SC02の遺物 ……36
Fig.40　SE01実測図（縮尺1/40）……36
Fig.41　SE01上部 ……37
Fig.42　SE01下部 ……37
Fig.43　SE01の遺物（縮尺1/4・1/2）……38
Fig.44　SE01の遺物 ……39
Fig.45　SE01・SE02の遺物 ……40
Fig.46　SE02実測図（縮尺1/40）……41
Fig.47　SE02上部 ……41
Fig.48　SE02遺物（縮尺1/4）……42
Fig.49　SJ01実測作業（北東から） ……43
Fig.50　SJ01上層実測図（縮尺1/80）……44
Fig.51　SJ01下層実測図（縮尺1/80）……45
Fig.52　SJ01上層（南西から） ……46
Fig.53　SJ01上層（北東から） ……46
Fig.54　SJ01 ……47
Fig.55　SJ01の遺物（縮尺1/4）……48
Fig.56　SJ01の遺物（縮尺1/4）……49

Fig.57 SJ01の遺物 ……50
Fig.58 SJ01の遺物（縮尺1/4） ……51
Fig.59 SJ01の遺物 ……52
Fig.60 SJ01の遺物（縮尺1/4・1/2）……55
Fig.61 SJ01の遺物（縮尺1/4・1/2）……56
Fig.62 SJ01の遺物 ……57
Fig.63 SJ01の遺物 ……58
Fig.64a SJ01の遺物（縮尺1/2）……58
Fig.64b 把頭飾のスケッチ図……59
Fig.65 SJ01の遺物 ……59
Fig.66 SJ01の遺物（縮尺1/2） ……59
Fig.67 墓の分布図（縮尺1/300）……60
Fig.68 SR01 ……61
Fig.69 SR01実測図（縮尺1/60）……61
Fig.70 SR01の遺物（縮尺1/4） ……62
Fig.71 SN01実測図（縮尺1/20）……62
Fig.72 SN01下棺 ……63
Fig.73 SN01 ……63
Fig.74 SN01上下棺実測図（縮尺1/4） ……64
Fig.75 竪穴住居跡の配置図（縮尺1/200）……65
Fig.76 第Ⅱ面の掘り下げ作業 ……65
Fig.77 SC01・SC02下の遺物（縮尺1/4） ……66
Fig.78 SC01・SC02下の遺物（縮尺1/4） ……67
Fig.79 SC01・SC02下の遺物 ……68
Fig.80 SC01・SC02下の遺物（縮尺1/4） ……68
Fig.81 SC01・SC02下の遺物（縮尺1/2） ……69
Fig.82 SC01・SC02下の遺物 ……69
Fig.83 SC04の遺物（縮尺1/4・1/2）……70
Fig.84 SC05の遺物（縮尺1/4） ……72
Fig.85 SC05の遺物（縮尺1/4） ……73
Fig.86 SC05の遺物（縮尺1/4） ……74
Fig.87 SC05の遺物（縮尺1/4・1/2）……75
Fig.88 SC05の遺物 ……75
Fig.89 SC06の遺物（縮尺1/4） ……76
Fig.90 SC06の遺物（縮尺1/4・1/2）……77
Fig.91 第Ⅲ面の検出作業 ……78
Fig.92 SC06の遺物（縮尺1/4） ……79
Fig.93 SG01の遺物（縮尺1/4） ……79
Fig.94 SG02の遺物（縮尺1/4） ……80
Fig.95 SG03の遺物（縮尺1/4・1/2）……80
Fig.96 SG04の遺物（縮尺1/4） ……81
Fig.97 SG05の遺物 ……81
Fig.98 SG05の遺物（縮尺1/4） ……82
Fig.99 SG06の遺物（縮尺1/4） ……82
Fig.100 SG07の遺物（縮尺1/4） ……83
Fig.101 SG08の遺物（縮尺1/4） ……84
Fig.102 遺物出土状況 ……84
Fig.103 SG09の遺物（縮尺1/4） ……85
Fig.104 SG10～SG13の遺物（縮尺1/4） ……86
Fig.105 SG14の遺物（縮尺1/4） ……87
Fig.106 SG15の遺物（縮尺1/4） ……87
Fig.107 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4） ……88
Fig.108 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4） ……89
Fig.109 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4・1/2）…90
Fig.110 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……90
Fig.111 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4） ……90
Fig.112 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2） ……91
Fig.113 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2） ……92
Fig.114 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……92
Fig.115 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2） ……93

Fig.116 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……93
Fig.117 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２） ……94
Fig.118 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……94
Fig.119 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２） ……95
Fig.120 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……95
Fig.121 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２） ……96
Fig.122 第Ⅲ面検出の遺物 ……97
Fig.123 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２） ……98
Fig.124 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２） ……99
Fig.125 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……99
Fig.126 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２）……100
Fig.127 第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……100
Fig.128 第Ⅲ面遺構発掘作業 ……101
Fig.129 第Ⅲ面遺構全体図（縮尺１/300） ……102
Fig.130 第Ⅲ面遺構 ……102
Fig.131 SC07実測図（縮尺１/60） ……103
Fig.132 SC07（北西から）……103
Fig.133 SC07の遺物（縮尺１/４・１/２） ……104
Fig.134 SC08実測図（縮尺１/60） ……105
Fig.135 SC08（南東から）……105
Fig.136 SC08の遺物（縮尺１/４・１/２） ……106
Fig.137 SC08の遺物（縮尺１/２） ……106
Fig.138 SN03実測図（縮尺１/20） ……107
Fig.139 SN03の遺物（縮尺１/４） ……107
Fig.140 SN03の人骨 ……107
Fig.141 SN02実測図（縮尺１/20） ……108
Fig.142 SN02 ……108
Fig.143 SN02の遺物（縮尺１/４） ……108
Fig.144 SA01実測図（縮尺１/20） ……109
Fig.145 SA01検出作業 ……109
Fig.146 SA01（人骨取り上げ後）……110
Fig.147 SA01（人骨取り上げ前）……110
Fig.148 SH01検出作業 ……111
Fig.149 SH01実測図（縮尺１/20） ……111
Fig.150 第Ⅲ面土壙分布図（縮尺１/300） ……112
Fig.151 北拡張区の発掘作業 ……112
Fig.152 SK001実測図（縮尺１/40）……113
Fig.153 SK001の遺物（縮尺１/２）……113
Fig.154 SK001の遺物（縮尺１/４）……114
Fig.155 SK001の遺物 ……115
Fig.156 SK002実測図（縮尺１/40）……115
Fig.157 SK002の遺物（縮尺１/４）……116
Fig.158 SK002の遺物（縮尺１/４・１/２）……117
Fig.159 SK006実測図（縮尺１/40）……117
Fig.160 SK006の遺物（縮尺１/４・１/２）……118
Fig.161 SK007実測図（縮尺１/40）……118
Fig.162 SK007 ……119
Fig.163 SK007の遺物 ……119
Fig.164 SK007の遺物（縮尺１/４）……120
Fig.165 SK007の遺物（縮尺１/４）……121
Fig.166 SK007の遺物（縮尺１/４・１/２）……122
Fig.167 SK007の遺物 ……122
Fig.168 SK008実測図（縮尺１/40）……123
Fig.169 SK008の遺物（縮尺１/４・１/２）……123
Fig.170 SK009実測図（縮尺１/40）……124
Fig.171 SK009の遺物（縮尺１/４）……124
Fig.172 SK010実測図（縮尺１/40）……124
Fig.173 SK010の遺物（縮尺１/４）……125
Fig.174 SK011実測図（縮尺１/40）……126
Fig.175 発掘作業風景 ……126

Fig.176 SK011の遺物（縮尺1/4・1/2）……127
Fig.177 SK012、SK013の遺物（縮尺1/4）……128
Fig.178 SK014実測図（縮尺1/40）……128
Fig.179 SK014の遺物（縮尺1/4・1/2）……129
Fig.180 SK015の遺物（縮尺1/4・1/2）……130
Fig.181 SK015の遺物（縮尺1/4）……131
Fig.182 SK015の遺物 ……131
Fig.183 SK016の遺物（縮尺1/4）……131
Fig.184 SK018実測図（縮尺1/40）……132
Fig.185 SK018上部の遺物（縮尺1/4）……132
Fig.186 SK018上部の遺物 ……132
Fig.187 SK018-①の遺物（縮尺1/4）……133
Fig.188 SK018（南より）……133
Fig.189 SK018-②の遺物（縮尺1/4）……134
Fig.190 SK018-②の遺物（縮尺1/4）……135
Fig.191 SK018-②の遺物（縮尺1/4）……135
Fig.192 SK018-③の遺物（縮尺1/4）……136
Fig.193 SK018-④の遺物（縮尺1/4）……136
Fig.194 SK018の遺物（縮尺1/2）……137
Fig.195 SK020実測図（縮尺1/40）……137
Fig.196 SK019の遺物（縮尺1/4）……138
Fig.197 SK023の遺物（縮尺1/4）……138
Fig.198 SK026・SK027の遺物（縮尺1/4）……138
Fig.199 SK028の遺物（縮尺1/4）……139
Fig.200 SK034・SK035の遺物（縮尺1/4）……139
Fig.201 SK037実測図（縮尺1/40）……139
Fig.202 SK037の遺物（縮尺1/4）……140
Fig.203 SK038実測図（縮尺1/40）……140
Fig.204 SK038の遺物（縮尺1/4）……141
Fig.205 SK039～SK084出土の遺物(縮尺1/4・1/2)…141
Fig.206 SK039・SK040の遺物 ……142
Fig.207 SK039・SK040の遺物（縮尺1/4）……142
Fig.208 SK041実測図（縮尺1/40）……143
Fig.209 SK041の遺物（縮尺1/4）……144
Fig.210 SK041の遺物（縮尺1/4）……145
Fig.211 SK041の遺物（縮尺1/4）……146
Fig.212 SK041の遺物（縮尺1/4・1/2）……147
Fig.213 SK070実測図（縮尺1/40）……147
Fig.214 SK070の遺物（縮尺1/4）……148
Fig.215 SK070の遺物（縮尺1/2）……149
Fig.216 SK070の遺物 ……149
Fig.217 SK071実測図（縮尺1/40）……149
Fig.218 SK071の遺物（縮尺1/4・1/2）……150
Fig.219 SK072実測図（縮尺1/40）……151
Fig.220 SK072の遺物（縮尺1/4・1/2）……151
Fig.221 SK072の遺物 ……152
Fig.222 SK080実測図（縮尺1/40）……152
Fig.223 SK080の遺物 ……152
Fig.224 SK080の遺物（縮尺1/4）……153
Fig.225 SK080の遺物（縮尺1/4）……154
Fig.226 SK085の遺物（縮尺1/4・1/2）……155
Fig.227 SK091の遺物 ……155
Fig.228 SK091～SK122の遺物(縮尺1/4・1/2)…156
Fig.229 SK124実測図（縮尺1/40）……157
Fig.230 SK124・SK125（北東より）……157
Fig.231 SK124の遺物（縮尺1/4）……158
Fig.232 SK124の遺物（縮尺1/4）……159
Fig.233 SK124の遺物 ……159
Fig.234 SK124の遺物（縮尺1/4・1/2）……160
Fig.235 SK124の遺物 ……160

Fig.236 SK125実測図（縮尺１/40）……161
Fig.237 SK125遺物出土状況 ……161
Fig.238 SK125の遺物（縮尺１/４）……162
Fig.239 SK125の遺物（縮尺１/４）……163
Fig.240 SK125の遺物 ……163
Fig.241 SK125の遺物（縮尺１/２）……164
Fig.242 SK125の遺物 ……164
Fig.243 SK123～SK147の遺物（縮尺１/４）……165
Fig.244 SK123～SK147の遺物（縮尺１/４・１/２）…166
Fig.245 SK152実測図（縮尺１/40）……166
Fig.246 SK152 ……167
Fig.247 SK152の遺物（縮尺１/４）……167
Fig.248 SK161の遺物 ……168
Fig.249 SK161の遺物（縮尺１/４）……168
Fig.250 SK196～SK221の遺物（縮尺１/４）……169
Fig.251 SK214の遺物（縮尺１/４）……170
Fig.252 SK219実測図（縮尺１/40）……170
Fig.253 SK219の遺物（縮尺１/４・１/２） ……171
Fig.254 SK219の遺物 ……171
Fig.255 SK220実測図（縮尺１/40）……172
Fig.256 SK220 ……172
Fig.257 SK220の遺物（縮尺１/４）……173
Fig.258 SP0110 ……174
Fig.259 SP0110実測図（縮尺１/40）……174
Fig.260 SP0110の遺物（縮尺１/４）……175
Fig.261 SP0085・SP0086・SP0097土壙実測図（縮尺１/40）…176
Fig.262 SP0085・SP0086・SP0097 ……177
Fig.263 SP0085・SP0086・SP0097（南東から）…177
Fig.264 SP0085土壙の遺物（縮尺１/４） ……178
Fig.265 SP0086の遺物（縮尺１/４） ……179
Fig.266 SP0085・SP0086の遺物 ……179
Fig.267 SP0097の遺物（縮尺１/４・１/２）……180
Fig.268 SP0097の遺物 ……181
Fig.269 SP0136の遺物（縮尺１/４） ……182
Fig.270 SP0136実測図（縮尺１/40） ……182
Fig.271 ピットの遺物（縮尺１/４・１/２） ……183
Fig.272 ピットの遺物（縮尺１/４・１/２） ……184
Fig.273 ピット・第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/４）……185
Fig.274 ピット・第Ⅱ面掘り下げの遺物 ……185
Fig.275 SA01下の円形溝 ……186
Fig.276 円形溝全景 ……186
Fig.277 円形溝分布図（縮尺１/100） ……187
Fig.278 円形溝上部の遺物（縮尺１/４）……188
Fig.279 SS01～SS14の遺物（縮尺１/４）……188
Fig.280 SS01～SS14の遺物……188
Fig.281 SS01～SS03……189
Fig.282 SS01～SS03実測図（縮尺１/40）……189
Fig.283 SS04実測図（縮尺１/40） ……190
Fig.284 SS04 ……190
Fig.285 SS10 ……191
Fig.286 SS05・SS10実測図（縮尺１/40）……191
Fig.287 SS06～SS09実測図（縮尺１/40）……192
Fig.288 SS06～SS09……193
Fig.289 SS06 ……193
Fig.290 SS11の溝 ……194
Fig.291 SS11～SS14実測図（縮尺１/40）……194
Fig.292 SS11～SS14……195
Fig.293 円形溝の検出作業 ……195
Fig.294 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２）……196

第１章　はじめに

第１節　調査にいたるまで

福岡空港の歴史は、席田（むしろだ）飛行場の建設に始まる。終戦間近な昭和19年（1944）、旧陸軍は本土防衛、特に北部九州の製鉄工業地帯や筑豊などの炭坑地帯、そして福岡の市街地などを守る目的で、面積2,215,000㎡、600m滑走路１本の飛行場を急遽建設した。昭和初期の地図によると、この地一帯は、長方形に区画された水田が筵を並べたように整然と並んでおり、「むしろだ」という地名の由来になったと言われている。稲穂の波の上に浮かぶかのようにいくつかの集落が点在するのどかな田園地帯であった。戦後、飛行場用地は旧所有者に返還されたものの、占領軍の進駐と同時に接収され、長く米軍の基地として使用され、強制移動させられた集落は元に戻ることはなかった。昭和26年（1951）に米軍の了解のもとに国内線が開設され、民間飛行場として使用開始されるようになり、昭和47年（1972）には全面返還され第二種空港として告示、さらに昭和55年（1980）には、国際線ターミナルビルも竣工し、アジアのゲートウェイとして重要な役割を果たしている。

新しい世紀を迎えた平成13年（2001）のデーターでは、年間乗降者数1,958万人（国際線230万人、国内線1,728万人）で羽田、成田に次ぐ国内３位、年間離発着回数は143,074回で羽田に次ぐ２位と急増している。このため運輸省（現国土交通省）はこれまで空港面積を3,530,850㎡と当初からすると約1.6倍に拡大し、施設整備、機能アップを図ってきたが、将来的に一層激増することが予想され、国際線エプロン、ターミナルなどを西側に移動する「福岡空港西側整備」計画を立てた。

ところで福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、市内で行われる各種開発でやむなく地下の埋蔵文化財が破壊、消滅する場合、その開発工事に先行して発掘調査を行い、記録保存に努めている。発掘調

Fig.2　福岡空港と御笠川

査費用の内容や契約相手の違いによって、民間受託調査、公共受託調査、令達調査、国庫補助対象調査などと呼び分けている。民間企業による開発や個人専用住宅などは、能動的、計画的に受付を調整できるものではなく、きわめて突発的である。工事期間や費用の制限があり、速やかな対応が求められる。一方、各種公共機関における開発行為も、その緊急性や即応すべき対象であることには変わりがない。ただ対象面積が広く、数年に渡って継続されることが多いので、開発計画の調整は可能である。このため各種公共機関については、前年に今後の事業計画についての照会を行い、事前協議で遺跡保存に努め、発掘調査の場合も十分な調査準備を経て発掘に着手し、正確な記録保存を行うようにしている。

運輸省第四港湾建設局に対しても、他の公共機関同様に平成２年８月16日付けで事業計画の照会を行ったところ、先に述べたように急激な航空機の増便に伴い、運輸省第６次空港整備事業の一つとして福岡空港西側整備を進めようとしている旨の回答があり、また予定地における埋蔵文化財事前審査の依頼を受けた。このため平成３年（1991）６月15日～８月３日、西側全域において39か所の試掘トレンチを設け遺跡の確認調査を行った。**（第１次調査）**

試掘では、弥生から中世に渡る遺物が数地点で出土した。特にエプロン増設工事予定地で平安時代後期を中心とする遺構、遺物がまとまって出土し、この時期の集落遺構と水田跡が存在していることが予想され、平成３年（1991）10月18日～12月28日の３か月、国際線エプロン増設工事範囲8,364㎡のうち遺跡の分布する1,739㎡を対象として本調査を行った。**（第２次調査）**

引き続き翌年の平成４年８月３日～平成５年３月22日まで第２次調査区の西、北側で約3,590㎡を発掘した。**（第３次調査）**

これより先の平成２年（１９９０）９月27日付で航空自衛隊春日基地司令より、福岡空港西側にある

Fig.3　月隈丘陵上空から福岡平野を望む

航空自衛隊施設の移転計画が回答された。航空自衛隊の施設が、福岡空港西側整備計画の国際線ターミナルと駐機場建設予定地に当たることから、南側約500mに移転し、新たに格納庫などを建設するという内容であった。平成3年（1991）2月22日付けで埋蔵文化財確認の依頼があり、平成3年4月16日～17日に1回目の試掘調査を実施し、春日基地司令に遺跡を確認したことを回答した。平成3年10月30日には、福岡防衛施設局長から当該工事区域内での本調査の依頼があり、平成4年（1992）10月1日に埋蔵文化財調査に関する協定書を締結し、平成4年10月19日～平成5年3月31日の8か月に渡って発掘調査を実施した。**（第4次調査）**

第4次調査では、水稲耕作開始期である弥生時代早期の木製農耕具や漆製品が多量に出土し、また弥生時代後期の環溝と大型掘立柱建物跡などを検出した。着柄のままの石斧や鍬、えぶり、そして組合せの方法が分かる机など初めて目にする事実が次々に明らかになり、環溝はさらに滑走路部分まで拡大している可能性が強まった。このために関係機関と再度協議を行い、平成5年6月15日から翌平成6年2月28日まで滑走路側に拡張して発掘調査を行った。**（第5次調査）**

第5次調査でも「最古の織物具」や無文土器、木製短甲や組合せ式大型机などが出土し、第4次調査と合わせて大きな成果が得られた。

一方、エプロン部では平成5年6月16日から平成6年2月28日の9か月間発掘調査を行い水田跡を検出した。**（第6次調査）**

さらに運輸省第四港湾建設局より、年度の変わった4月12日に福岡空港西側整備に当たり福岡市博多区大字雀居正フリの31haについての埋蔵文化財有無の確認調査（試掘・調査）の依頼が出された。その内容は次の通りである。

1．エプロン部の新設工事を平成6年9月から平成7年2月まで予定しているので事前調査を平成6年7月末までに完了させてほしい。

2．その他の部分については、平成7年2月までに事前調査を完了させてほしい。

これを受けて、申請地の試掘調査を平成6年7月13、14日の2日間に渡って実施し、遺跡であることを確認した旨の回答を7月19日に送付するとともに、文化財保護法第57条の3第1項の規定により文化長官への通知と同条第3項の規定により埋蔵文化財課との協議を依頼した。

その後協議を重ね、エプロン部とその他の施設予定地に分かれて交互に発掘調査を進めることにした。海上保安庁、福岡県警航空隊格納庫の西側一帯は、福岡空港の機能支援・厚生施設や燃料タンクなどのＰＯＬ用地に計画されており、平成6年8月1日から12月26日まで発掘調査を実施した。現在はグランドになっている。**（第7次調査）**

第7次調査では、微高地上に営まれた弥生時代早期から古墳時代前期の集落跡を確認した。弥生時代前期から中期前半に至る墓地から10体の人骨が検出され、その抜歯の様子から渡来系的特徴を持つ弥生人に縄文的な風習が依然として残っていることが分かった

一方のエプロン部は、平成6年11月7日から平成7年3月20日まで約4,850㎡の発掘調査を行い、水田跡を検出した。**（第8次調査）**

翌年はグランド部に戻り、第7次調査の第2面とその北西側に拡張して発掘した。期間は平成7年5月8日から平成8年3月25日までの11か月間である。**（第9次調査）**

第7次調査で把握されていた微高地上の集落跡が、遺物量や検出遺構などから、相当に大きな規模であったことが推測された。

このように発掘を重ねるたびに、新しい知見が掘り出され、雀居遺跡の規模が予想を遥かに上回り、しかも貴重な遺物の出土が相次いだことから、本調査と同時並行で綿密な試掘調査を行い、翌年の本

Fig.4　空から見た福岡空港

Fig.5　雀居遺跡の発掘調査地点（1/12,500）

調査の協議に備える事にした。

エプロン部以外の試掘調査を平成７年５月31日、６月21日の２日間に渡って実施し、発掘中（９次グランド部分）からの遺跡の広がりが確認されたことを平成７年６月30日に回答をした。この時の試掘トレンチ設置部分は、第７、９次調査区の西側で、第10、12調査地に当たる。

平成８年度４月より、それまで担当していた松村道博主任文化財主事に代わり、文化財整備課から異動した力武卓治が引き継ぐことになった。

早速、榎本義嗣事前審査係員と平成８年以降の発掘計画について打ち合わせを行い、まずPOL（燃料タンク）用地約2,800㎡を対象にし５月から８か月間の予定で第10次調査に着手することにした。

Fig.6　那珂遺跡上空より雀居遺跡を望む

第２節　発掘調査の組織と構成

調査委託　運輸省第四港湾建設局

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　西憲一郎

調査総括　福岡市教育委員会　埋蔵文化財課

課長　荒巻輝勝　　調査第２係長　山口譲治

事前審査係　　松村道博　田中壽夫　榎本義嗣　長家伸

調査庶務　小森彰　　**調査担当**　力武卓治

発掘作業　池田福美　石屋四一　梅崎元　榎田信一　浦伸英　甲斐康完　蒲池雅徳　亀井薫
川井田明　河野一一　高着一夫　酒井次憲　島津明男　堤篤史　豊丸秀仁　中川祥一
長野嘉一　西川譲　羽方誠　別府俊美　松永七郎　松永正義　安高精一　山田正治
吉田博明　脇坂勇　渡辺純夫　中尾良蔵　高橋章浩　黒木良太郎　萩尾政士　柳原一雅
服部真和　植松雅子　内山和子　大石アヤ子　遠藤貞子　奥田弘子　兼田ミヤ子
川井田ムツ子　小島キサ江　後藤タミ子　小松冨美　嶋ヒサ子　世利陽子　高手与志子
砥板春美　富田千栄子　中村由紀　野口リュウ子　平田百合子　福田美星　松尾文江
安高久子　脇坂サツキ　渡辺淑子
中国吉林大学　陳国慶　　九州大学　金宰賢　大森円　益原祐介　安永浩
早稲田大学　梅林秀行　　東京工業大学　小林真由美

室内作業　清水啓子　江田のり子　山野祥子　藤野真紀　桑野正子

整理調査　坂本幸子　羽方誠　境聡子　野田和美　西堂将夫

整理作業　池田由美　宮崎まり子　渡辺敦子　城後渡　柴田志乃　生垣綾子　藤元香子　安部国恵

この他にも多くの方々よりご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

Fig.7　発掘作業員の皆さん

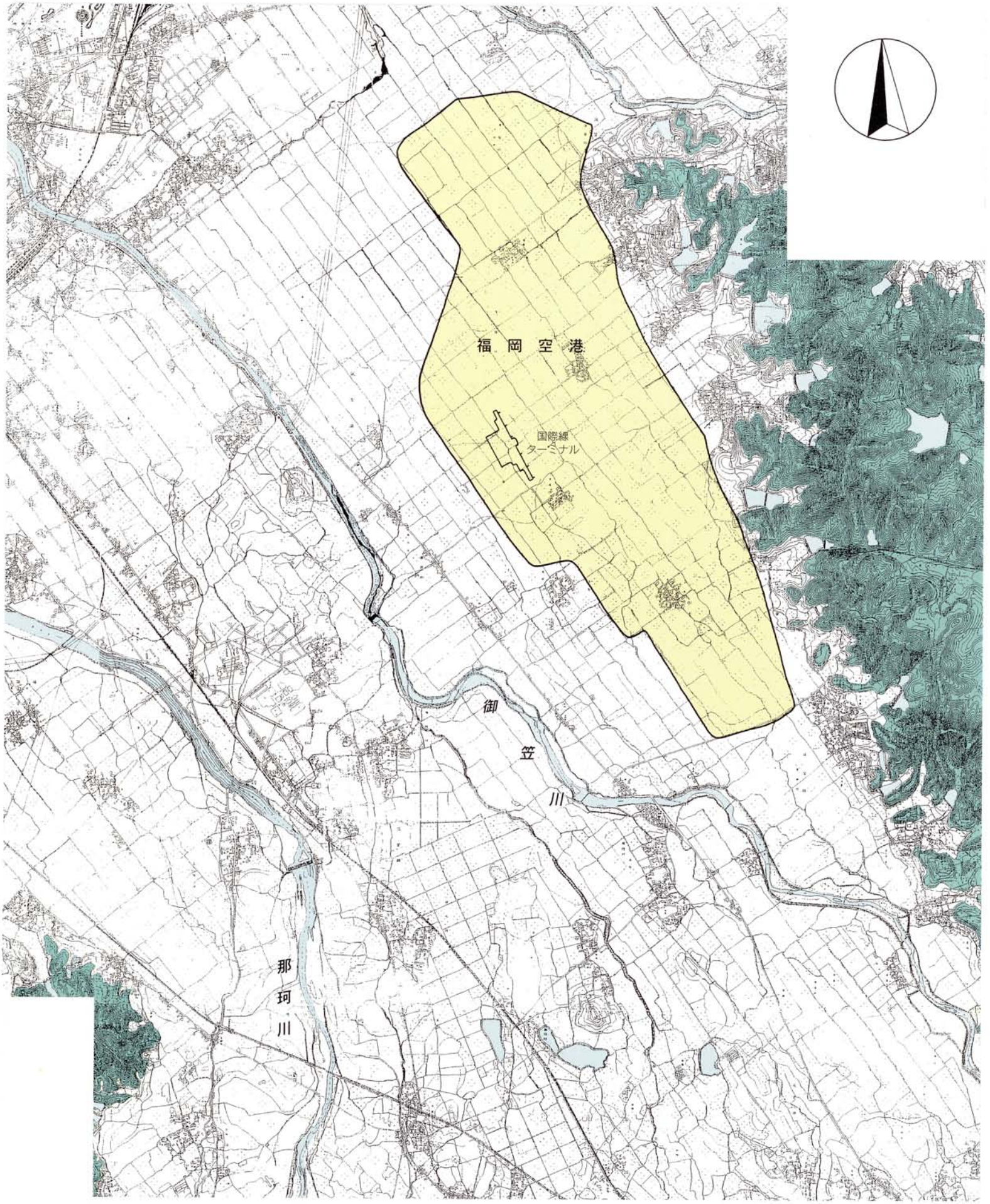


Fig.8　昭和はじめ頃の雀居遺跡周辺図（縮尺1/25,000）

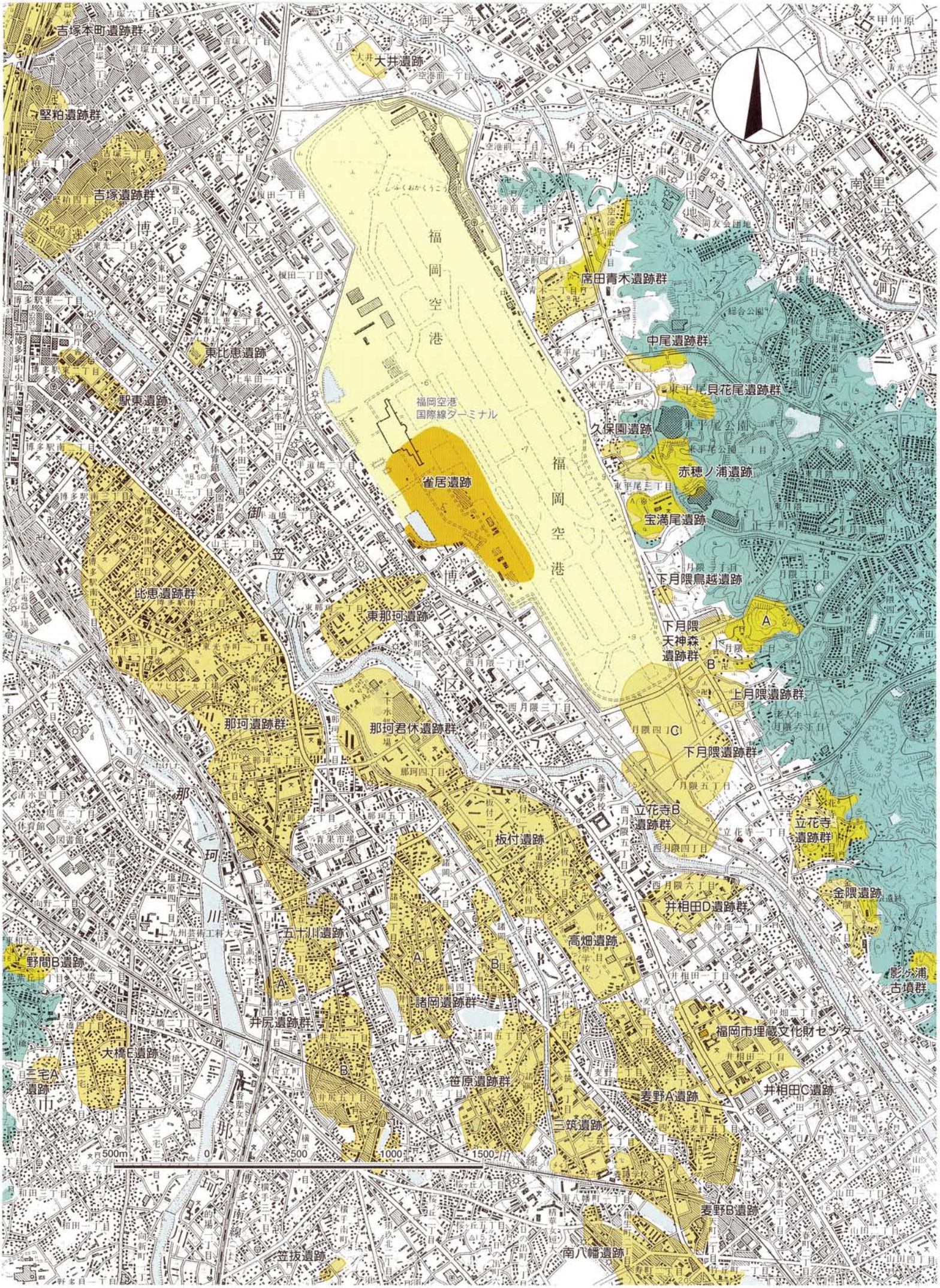


Fig.9　雀居遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺１/25,000）

第3節　雀居遺跡の位置とこれまでの調査報告

発掘調査対象地は、昭和19年の席田飛行場建設以来、関係者以外の立ち入りが禁止されてきたために、埋蔵文化財に関してはまったくの空白地帯であった。平成3年6月から実施した試掘や本調査によって予想もしなかった遺構や遺物が姿を現してきた。米軍基地時代には各種施設の建設がなされ、その後も自衛隊や海上保安庁格納庫などの建設が行われたものの、市街地のような開発を受けることがなく、ある意味では席田飛行場以前の遺構面がそっくりそのままの姿でパックされていたのである。平成3年の福岡空港西側部試掘では少なくとも3か所に遺構、遺物が集中することが分かり、字名から雀居（ささい）遺跡群と命名した。平成10年12月で福岡空港西側整備に先行する発掘調査は一応終了したが、最初の試掘を除く2次から第9次、11次調査については調査報告書を発行し、その成果を公表するとともに、出土遺物や実測図、写真などの記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、さまざまな活用に提供されている。しかしながら発行した雀居遺跡の調査報告書は5冊でいずれも大冊であり、出土遺物も膨大な数量であることから、雀居遺跡の全貌を把握し、理解することは容易でない。また第10次、12次、13次は未刊ということもあって、その欠を補うものとして雀居遺跡の成果を平易に解説した『雀居遺跡6－雀居ムラのガイド・データーブック－』を平成13年（2001）に発行した。

雀居遺跡の位置や歴史環境、これまでの発掘成果については、これらの報告書に詳しく紹介、記述されており、新たに加えることも少ないので本書では重複を避けるが、板付遺跡、那珂遺跡群、比恵遺跡群、席田遺跡群など弥生時代の有名な遺跡に取り囲まれていることから、雀居遺跡の全容解明は、弥生時代の研究、特に初期水稲耕作の様子を具体的に理解することに直結するものとして大いに期待される。特に御笠川東岸の低平地での遺跡のあり方、また板付遺跡との比較検討など興味や疑問が次々に湧き出し尽きることがない。

雀居遺跡に関する報告書および文献など

1．『雀居遺跡1　－第2次調査の報告－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第322集　1993年
2．『雀居遺跡2　－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第406集　1995年
3．『雀居遺跡3　－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第407集　1995年
4．『雀居遺跡4　－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第565集　1998年
5．『雀居遺跡5　－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第635集　2000年
6．『雀居遺跡6　－雀居ムラのガイド・データーブック』
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第677集　2001年
7．『雀居遺跡週刊ニュース』第1～101号　雀居遺跡発掘調査事務所　1996年6月～1998年12月
8．「弥生時代にブタ小屋はあったのか」『歴史九州』1998年8月
9．『発掘福岡空港－雀居遺跡－』　福岡市博物館　部門別展示室解説140　1999年2月

第２章　発掘調査の記録

第１節　調査の概要

第10次調査対象地は第７、９次調査区と道路を挟んだ西側の約2,800㎡である。福岡空港西側整備計画ではPOL（燃料タンク）用地として予定されており、米軍基地時代は兵舎が建ち並んでいた。現況は標高6.2m前後の平地である。事前審査係による試掘は、前述したように平成７年５月31日と６月21日の２日間実施された。対象地に設定した17本のトレンチで土層観察と遺構検出を行い、その結果を平成７年６月30日付けで運輸省第四港湾建設局博多工事事務所長宛に回答（福市教埋第251号）している。この回答書によると、土層は上部より客土、旧表土下に粗砂（洪水砂）が認められ、黒（灰）褐色土包含層、青灰色粘土層と続いている。粗砂層下の黒（灰）褐色土層上では水田遺構存在の可能性が強いこと。またピットなどの遺構は、黒褐色粘質土層上面より切り込まれたものと考えられるが、その下の青灰色粘質土層まで掘り下げると明瞭に確認することができること。黒褐色粘質土層は弥生時代中期、もしくは弥生時代終末から古墳時代前期の包含層で、部分的に多量の遺物が包含されていると報告されている。この試掘所見を基に第四港湾建設局と協議を重ね、発掘対象面積、調査期間、予算などを決めた。

この試掘報告だけでなく、東側に隣接するグランド予定地では２か月前まで第９次調査が実施され大きな成果が上がっていたことから第10次調査の発掘目的と計画を立てた。まず第９次調査で行われたように一気に黒褐色粘質土に掘り下げないでエプロン部で発掘された古代の水田跡の広がりを把握することにした。また席田飛行場建設で移動した近世以降の集落、さらに飛行場関係施設の遺構確認も発掘目的の一つに加えた。

発掘調査の成果は、調査担当者の問題意識や発掘方法などによって左右されることが多いが、実際に発掘作業を行う調査員や発掘作業員にかかっていると言っても大袈裟ではない。発掘作業に対する意欲的でひたむきな日常の作業によって小さな発見が大きな成果に繋がる。発掘目的を達成するには発掘関係者全員が一体感を持って同じ方向を目指すことが望まれる。このためその日その日の出来事や疑問を確認し、解決、解説しようと調査期間中の毎週月曜に「雀居遺跡週刊ニュース」を発行し続けた。今回、編集仕直して発行しようと準備したが、印刷費の関係で果たせず、CD-R化した。発掘作業の進捗状況、遺構や遺物を掘りだした時の発掘作業員の感激ぶりや苦労、安全対策や安全教育の実践活動、そして作業員との雑談や季節の変化など記録している。本報告書の副読本的に利用してほしい。

第２節　グリッド設定と基本層序

グリッド設定　第９次調査の発掘所見によると、発掘区の東西に古墳時代前期の土器を大量に廃棄していることから集落は62m×48mの微高地上に営まれており、今回の調査区には拡大しないと予想された。しかしながら試掘では第９次調査と同じように突帯文土器から古墳時代土師器まで出土しており、別集落が存在している可能性が強く、両者を比較、検討する必要があることから、第９次調査で設定されたグリッドを延長して使用することにした。グリッドは５m方眼で南東隅から北へ数字、西へアルファベットがついている。第12次調査の最西端は、第９次調査区から130mの距離があり、26字のアルファベットでは足りなくなり、カタカナを冠している。

基本層序　図示した柱状土層図は、N24グリッドの発掘区東壁で実測したもので、第10次調査区の基本層序と考えている。現地表面から2.8mの深さまで掘り込み、土層の観察を行った。同時に東京工業大学理学部の小林真由美研究員が分光測色計で測定し、水田跡の新しい検出法を提案している。その分析結果については『雀居遺跡４』に収録している通りである。

１～３層は席田飛行場以降の整地層で、３層にはバラスや石炭ガラが敷き詰められている。４層は水田耕作土で５層はその床土。鉄分などでわずかに赤みを帯びた黄色を呈している。４層は昭和19年まで耕作されていた水田ということになる。８層の薄い土層は５層よりも赤みがないが水田の床土と判断した。６、７層が水田耕作土ということになるが、時期を示す遺物の出土はない。16層の水田が古代であり、昭和の水田に挟まれていることから、中～近世の水田としておく。13～16は粗砂層で下部ほど粒子が細かくなっている。この粗砂層は第10次調査区だけでなく雀居遺跡の全面にわたって堆積しており、洪水の激しさや被害の大きさを物語っている。この洪水に見舞われ耕作断念に追い込まれたのが、16層の水田である。現地表から深さ15mで今回の発掘ではこの面を第Ⅰ面とし、パワーシャベルで粗砂層を取り除き、水田跡の検出作業を始めた。17層は暗褐色シルト層でこれを剥ぐと18層黒色粘質土が現れる。この土層も雀居遺跡のほぼ全面に見られ、第７、９次調査区では１面として調査され、古墳時代の遺構が確認されている。今回は第Ⅱ面と呼び、古墳時代前期～弥生時代後期の遺構面とした。この黒色粘質土自体も削平を受けており、上面にすでに弥生時代後期以前の遺構も顔を出し、やや混乱することになったが、古い時期の遺構ほど下部で見つかる傾向であった。土層では20層を第Ⅲ面とし、弥生時代中期～弥生時代前期の遺構面とした。しかしながら黒色粘質土面で遺構埋め土を判別することは容易でなく、遺物が出土することによってその周囲を清掃し、遺構輪郭を確認するという場面もあった。22層の青灰色粘質土までに掘り下げると土層色調が極端に異なることから、上部からの遺構を明瞭に識別することができる。弥生時代後期の方形周溝SR01はこの面まで達しているが、古墳時代の遺構はほとんど見られなくなり、円形溝という新たな遺構が初めて現れてくることから第Ⅳ面の遺構面とした。調査終了後に22層より下部を掘り下げたが遺物の包含はなく、22層を雀居遺跡の基盤（地山）とした。

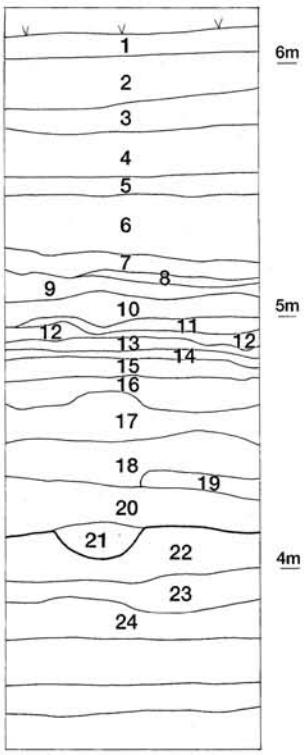


Fig.10　基本層序

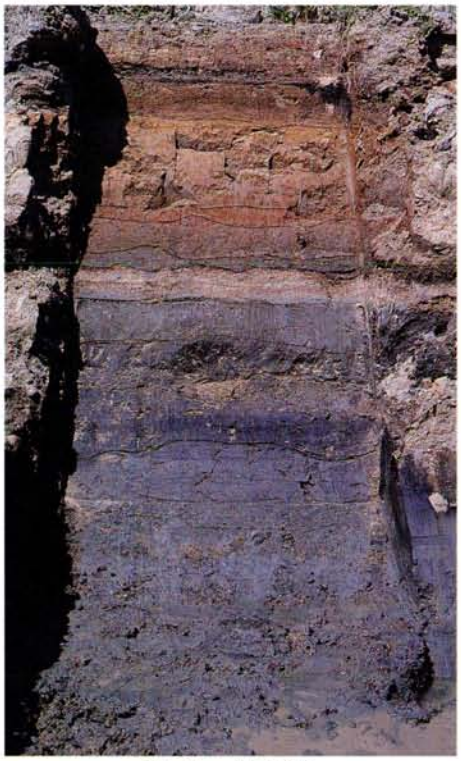


Fig.11　土層写真

土層名
1．砂利、白色砂
2．白色砂
3．黒色砂質土（石炭殻など）
4．褐色土（水田耕作土）
5．黄色砂質土（床土）
6．褐色砂質土
7．褐色砂質土
8．褐色砂質土
9．暗褐色シルト
10．黒灰色シルト
11．黒灰色シルト
12．黒色粘質土
13．砂層
14．灰色砂質土
15．青灰色砂質土
16．黒色粘質土（第Ⅰ面）
17．暗褐色シルト
18．黒色粘質土（第Ⅱ面）
19．白色砂質土
20．黒色粘質土（第Ⅲ面）
21．暗褐色粘質土
22．青灰色粘質土（第Ⅳ面）
23．青灰色砂質土
24．緑灰色砂質土

第３節　第Ⅰ面（古代～中世）の調査

１．概　要

先に記したように表土下約150cmで検出した水田跡を第Ⅰ面の遺構面とした。第10、12、13次の発掘区面積は、計約9,000㎡に及ぶが、保存状態の差はあるものの下図のように各次調査区において計54枚に区画された水田跡を確認した。それぞれの区画形状、面積、水口の数、水田面の標高などは表の通りであるが、１枚として同じものはない。ただ東西南北の畦畔方向には一定の強い区画意思を読みとることができるが、水害に遭うたびに地形の変化が生じ、その対応、解決策として、水田面の大きさ、区画形状、さらに水掛かりを微妙に調整し、その積み重ねの結果、不揃いの水田区画となったと推測される。したがって畦畔が流失している部分については、規格的な長方形区画ではなく、あえて不整形であったと想定し54枚をカウントしている。

各次調査区水田跡の特徴、出土遺物などについては、各次数の報告書に詳しく記述する。

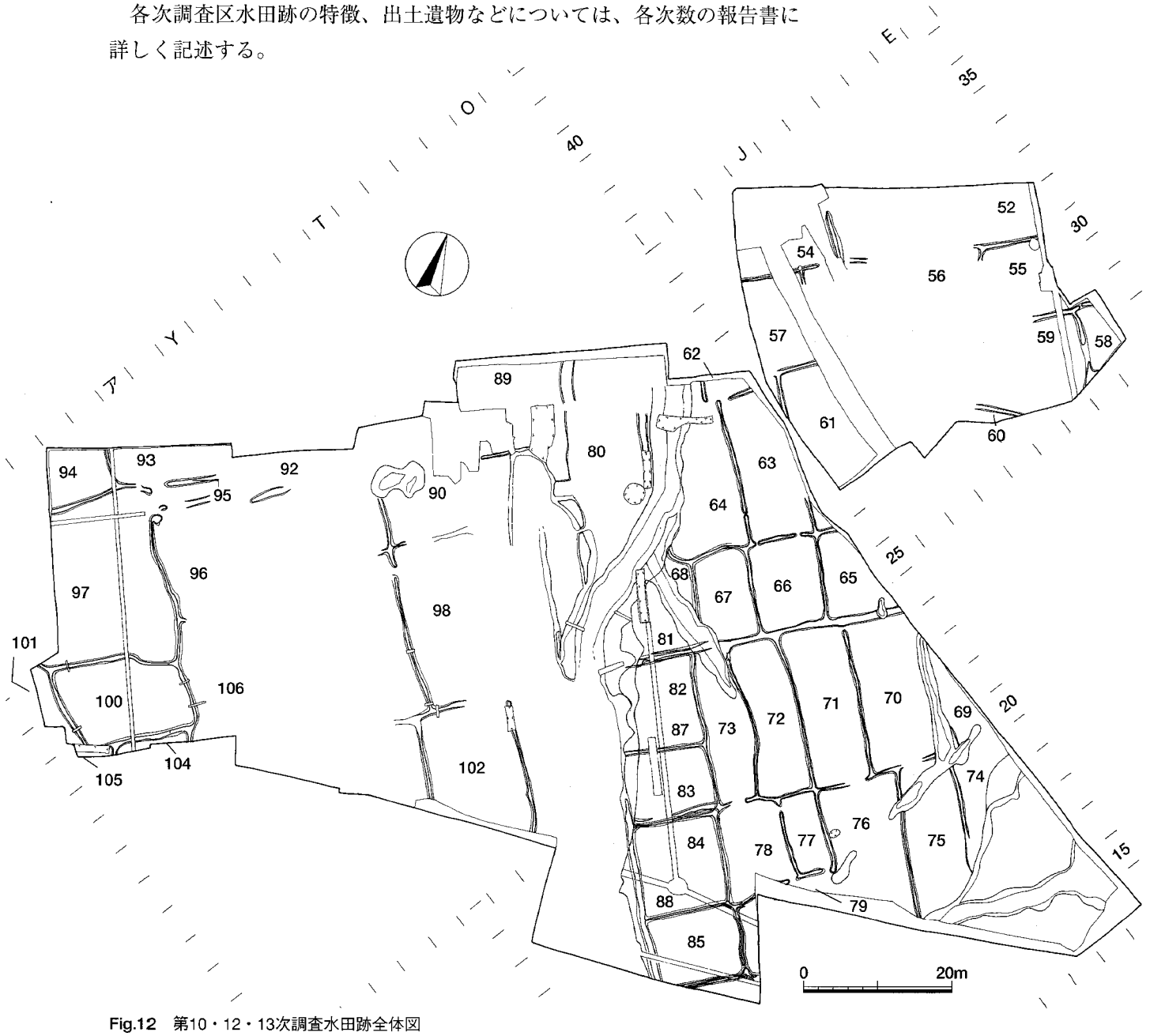


Fig.12　第10・12・13次調査水田跡全体図

Fig.13 水田跡

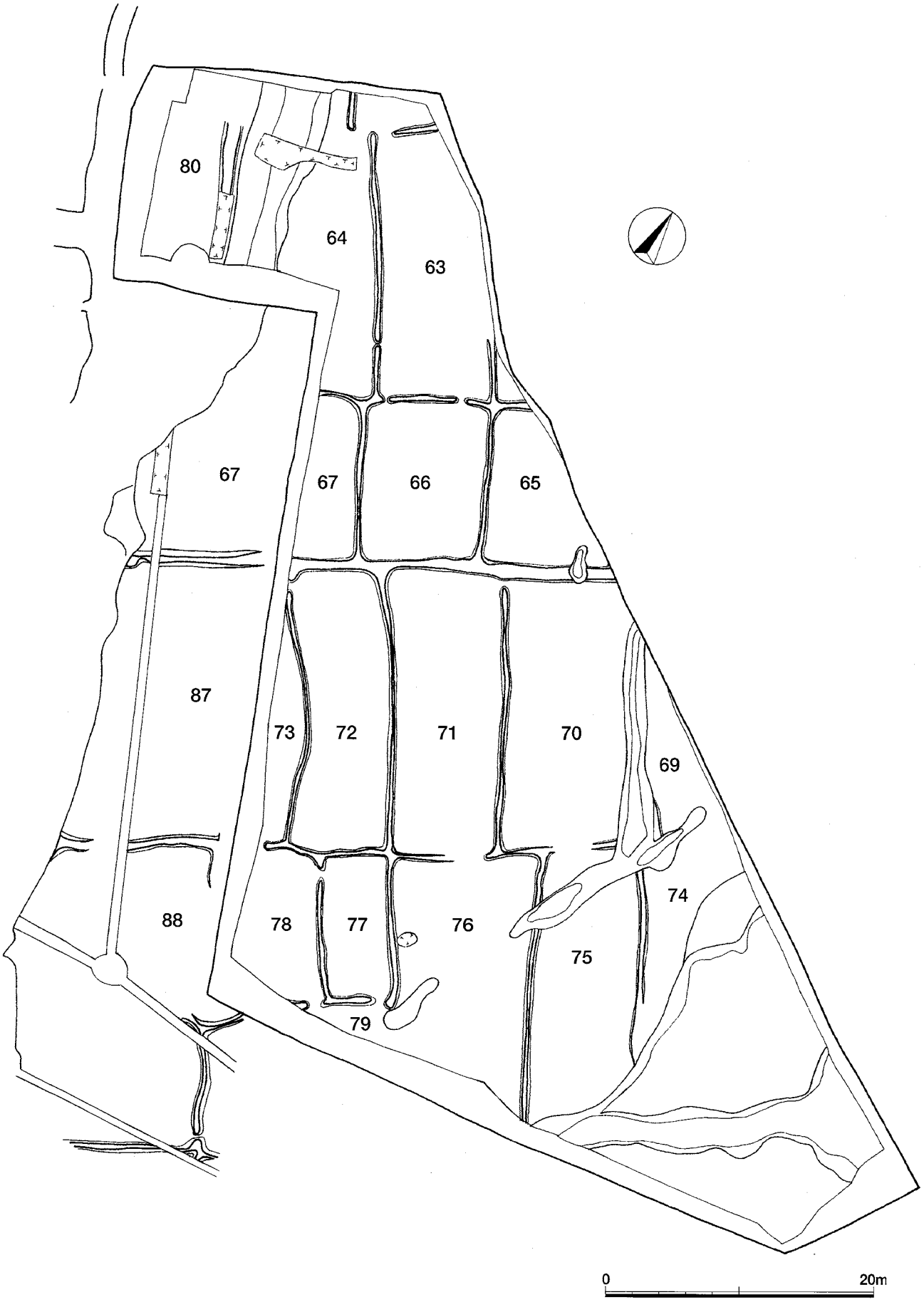


Fig.14 水田跡平面図（縮尺 1 /400）

2．水田跡

水田跡は、表土下約150cmで確認した。洪水で堆積したと思われる砂層で全面が覆われ、水田の耕作を不可能にしている。砂層の厚さは、南北端に大きな差はなく約80cmを測る。砂層があまりにも多量であることからパワーショベルで取り除いたが、この作業だけで数日を要する量で、その洪水の凄まじさを示している。当時の農民にとっては被害甚大でまさに廃村に追い込まれたに違いない。しかし皮肉にもこの厚い砂層のために現代まで水田跡の保存に役立ち、今回の発掘によって当時の水田区画を具体的に知ることができる。

第10次調査は、北側拡張区と合わせて18枚の水田跡を確認した。発掘区東西の側辺部の水田は、第12次と第13次に接しているために、単独で１枚の水田となるのは６枚である。発掘作業時には各水田跡に、東側より縦にＡ列、Ｂ列、Ｃ列、、、横列に１、２、３、、、の記号を付けて、撮影、遺物取り上げに利用したが、本報告書ではエプロン部での検出水田51枚からの通し番号とし、東側の第13次調査区より水田跡１枚ごとに遺構略号SFを冠して番号を与えた。

水田跡の形状　第10次調査区は、３次の中では最も保存状態が良い。水田の形状ばかりでなく、畦畔、排水施設（水口・水尻）などの水田施設遺構がそろっている。また水田面には人の足跡も無数に認められ、これらから当時の水田風景や農作業のようすを具体的に想像することが可能である。

各水田跡は、南北（正確には北西－南東）方向に長い形状となっている。長方形にも２種類あって、水田跡SF71のように短辺と長辺との比が１：2.6のものと、水田跡SF66のように１：1.29と差がなく正方形に近いものがある。全体にはこの２種の形状を東西に繋げており、南北方向に長方形水田と、正方形に近い水田との組合せを繰り返している。第12次調査の報告書に記すが、第12次調査で検出確認した下層の水田跡によると、正方形水田を南北に２枚結合して長方形としており、本来は水田跡SF066（第12次調査SF081～SF085）のような正方形区画であった可能性がある。

水田面の標高は、南端の水田跡SF75が、4.53m。北端のSF063が4.46mであることから、南北の高低差は７cmである。一方東西は、東端の水田跡SF074が4.60cm、西端の水田跡SF087が4.74cmで、その差は、14cmを測る。

畦畔の方向　南北の畦畔と東西の畦畔が十字に直交していないので、南北一直線に通る畦畔はないが、東西方向の畦畔は、よく筋が通っている。中でもSF065～SF067とSF070～SF073を区切る東西畦畔は、他の畦畔の幅が約50cmなのに比べ、約120cmと幅広く大畦的な形状をしている。畦畔は、通常水田区

水田の計測表　東西に長い長方形を横長方形・南北に長い長方形を縦長方形とする

次	No.	形　状	大きさ	水口	面積㎡	標高m	次	No.	形　状	大きさ	水口	面積㎡	標高m	次	No.	形　状	大きさ	水口	面積㎡	標高m
13次	52	?	7.95×8.90	0	75+	4.62	10次	72	縦長方形	21.60×9.20	192+	2	4.46	12次	90	不　明	9.00×11.00	86+	0	
	53	?		0				72	縦長方形	21.80×7.50	159	1	4.42		91	不　明	13.80×8.50	46+	0	
	54	横長方形?		145+				73	縦長方形	21.70×7.15	128	2	4.38		92	不　明	5.30×9.50	58+	0	4.65
	55	縦長方形	10.50×8.10	61+	0	4.65		74	縦長方形?	30.00×8.00	58+	0	4.60		93	不　明	5.00×12.50	74+	1	4.59
	56	横長方形	4.00×2.50	－	0			75	縦長方形	20.40×4.00	156+	0	4.53		94	不　明	8.00×9.30	64+	1	4.68
	57	横長方形	12.80×5.10	111+	0	4.62		76	縦長方形	20.20×11.40	182+	2	4.52		95	縦長方形?	2.80×8.00	136+	3	4.69
	58	横長方形	9.00×4.80	33+	1			77	縦方形	11.00×5.30	56	2	4.45		96	縦長方形?	15.50×9.00	361+	1	4.75
	59	?	13.00×14.00	146+	0			78	縦方形	13.60×10.00	119	3	4.48		97	縦長方形?	24.10×16.10	361+	1	4.76
	60	?	7.50×1.80	11+	0			79	不　明	3.60×7.20	13+	3	4.42		98	縦長方形?	22.50×11.50	278+	1	
	61	?	22.40×11.40	122+	0	4.68	12次	80	不　明	30.00×12.00	－	1	4.53		99	不　明	22.60×5.50	117+	1	
10次	62	縦長方形	3.00×6.50	15+	2	5.10		81	不　明	13.20×12.50	81+	0	4.53		100	横長方形	11.80×16.30	183+	0	4.75
	63	縦長方形	19.80×8.80	159+	3	4.46		82	方　形	12.35×10.00	127+	0	4.58		101	不　明	11.30×3.50	30+	0	4.71
	64	縦長方形	22.70×11.20	166+	1	4.44		83	方　形	4.40×12.30	115+	0	4.47		102	縦長方形?	18.00×13.30	227+	0	
	65	縦長方形	12.40×9.95	87+	0	4.51		84	方　形	12.45×12.00	167	0	4.38		103	不　明	12.00×3.50	43+	0	
	66	縦方形	12.35×9.40	126+	2	4.50		85	方　形	9.90×12.50	125+	1	4.32		104	不　明	1.70×10.00	17+	0	4.80
	67	縦長方形	12.80×8.00	94+	0	4.61		86	不　明	4.00×9.00	22+	0	4.28		105	不　明	5.50×1.20	8+	0	4.87
	68	不　明		81+			(上面)	87	縦長方形	21.30×11.80	239+	0	4.74		106	不　明		－		
	69	縦長方形?		56+			(上面)	88	縦長方形	23.20×13.90	284+	1	4.85							
	70	縦長方形	21.65×9.70	195+	1	4.50	12次	89	不　明	11.20×13.00	125+	1	4.78							

Fig.15 水田跡検出作業（北西から）

画と貯水機能を同時に併せ持っているが、この幅広の畦畔は、農道的な利用がなされていたのであろう。さらに条里制の坪境の畦畔の可能性もあるが、発掘区の範囲が狭いために南北側に位置する次の坪境畦畔が確認できないので断定はできない。

また先に述べたように各水田跡は、水害などの影響によってその都度改変されたと思われるが、この大畦は、途中流失しているものの第12次調査区の西端の水田跡SF100までほぼ直線的に達していることから、水田形状の変化は、このような大畦で区切られた大区画内での変化であって、大畦自体の移設、方向の変換までには至っていないと推測される。

水田耕作土と畦畔の断面

畦畔は、稲作付け前に耕作土を塗りつけ、保水の効果を高めるのが普通である。また水害によって流失すればその都度補修が繰り返されたはずで、断面土層にはその回数や作り替えの痕跡が確認できると期待した。しかし畦畔断面で、耕作土と畦畔の盛り土とを区別することは困難であった。水田面を掘り下げた（畦畔を削りだした）とは考えがたく、水田耕作土を盛り上げたために、長い間に土質が安定し、土層として識別ができなくなったのであろう。

水田耕作土は、わずかに灰色を帯びた黒色粘質土で、各水田ともほぼ共通している。その厚さを確かめるために数本のトレンチを升目に設定し断面観察を行った。厚さは約13cmで、東西南北端にほと

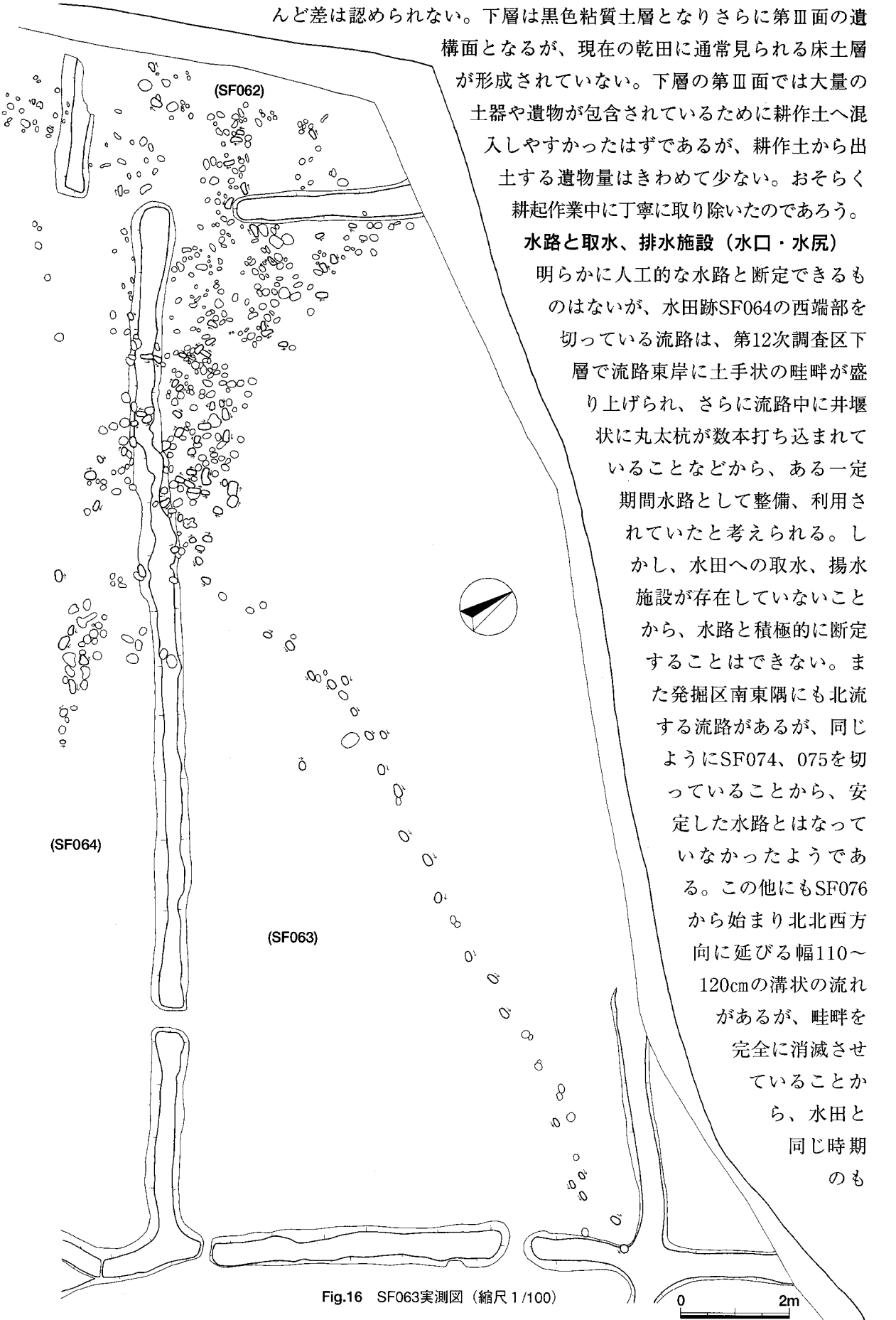


Fig.16 SF063実測図（縮尺1/100）

んど差は認められない。下層は黒色粘質土層となりさらに第Ⅲ面の遺構面となるが、現在の乾田に通常見られる床土層が形成されていない。下層の第Ⅲ面では大量の土器や遺物が包含されているために耕作土へ混入しやすかったはずであるが、耕作土から出土する遺物量はきわめて少ない。おそらく耕起作業中に丁寧に取り除いたのであろう。

水路と取水、排水施設（水口・水尻）

明らかに人工的な水路と断定できるものはないが、水田跡SF064の西端部を切っている流路は、第12次調査区下層で流路東岸に土手状の畦畔が盛り上げられ、さらに流路中に井堰状に丸太杭が数本打ち込まれていることなどから、ある一定期間水路として整備、利用されていたと考えられる。しかし、水田への取水、揚水施設が存在していないことから、水路と積極的に断定することはできない。また発掘区南東隅にも北流する流路があるが、同じようにSF074、075を切っていることから、安定した水路とはなっていなかったようである。この他にもSF076から始まり北北西方向に延びる幅110～120cmの溝状の流れがあるが、畦畔を完全に消滅させていることから、水田と同じ時期のも

のではなく、砂層堆積時の洪水による浸食溝の可能性が強い。

以上のように第10次調査区内では、明らかに用・排水路と断定できる施設がないことから、上流側（南側）の標高の高い水田から下流側に向かって水口、水尻を通過して順次水が掛かっていたことになる。ところでこのような水掛かり方法とすれば、各水田の畦畔には、少なくとも取水口（水口）と排水口（水尻）の2か所で開口していることが必要条件となる。しかしながら発掘した各水田跡のどれもが完備しているわけではなく、畦畔で完全に閉ざされた水田跡もある。取、排水口が石や杭などを利用したものではなく、単純に水田耕作土で閉塞していたとすれば、あるいは発掘で開口していることを見逃したとも考えられる。いずれにしても取、排水口は、稲の生長、雨量などに応じて開閉が行われるので、発掘した状況そのものが、砂層埋没時の気候、季節を示していることになる。

▲Fig.17　水田跡実測作業

▼Fig.18　水田跡実測作業

足　跡　水田面には無数の小さな窪みが残っており、その形状から明らかに人の足跡と断定できるものがある。人の足跡は、左右交互に歩行し、その方向を辿れるものもあるが、各水田に均一に見られるのではなく、加えて不規則で断続していることから、とても農作業の足跡とは考えにくい。むしろその混雑ぶりからすると農作業とは無関係ではないかと思われる。

特にSF063は興味深い。この水田跡は、北東隅が発掘区外に出ているが短辺9.0m、長辺19.3mの長方形であろう。とすると面積173.7㎡と計算できる。この水田の北東隅には足跡が無数に集中しているが、水田内にはただ一人だけの足跡が残っているにすぎない。足跡は、北西隅から対角線的に南東隅を目指している。水田の泥濘みに脚を取られたせいかわずかに蛇行しているものの、約60㎝の歩幅はほぼ一定しており、確たる目的で歩行していることを伺わせる。この足跡も含めて他の水田の足跡も、農作業の様子を直接物語るようなものはない。これら各水田跡の状況から厚い砂層で水田が埋没したのは、水稲栽培中ではなく、農閑期の出来事ではなかったかと思われる。とすると田植えから取り入れまでの農作業の痕跡が存在しているはずで、水口のほとんどが閉じていることからするとむしろ休耕していた可能性が高い。

水田跡の遺物　水田跡と流路などの第Ⅰ面からは、土製品、石製品、木製品、植物種子などの遺物が出土した。うち土製品13点、石製品15点、木製品５点を実測、図示した。

土製品　**1**は弥生時代中期前半の甕。口辺部は厚みがあり外方へ小さく延びL次形の口辺部を作る。上面は水平でなく内側に傾いている。口辺部下に貼り付けられた三角断面の突帯は、通常一巡するが、本例は結合しないで離れている。右からの突帯は下方に屈曲し、左からの突帯は上方に屈曲し、両端とも先端を細く作っている。雀居遺跡第13次までの調査では突帯を折り曲げ鉤状にした土器は第５、７、12、13次で出土例があるが、点数的にはきわめて珍しい遺物である。本例は器面の色調が他の弥生土器と異なり薄い茶色を呈している。あるいは、製作、使用目的の違いによる意図的なものかも知れない。**2**は古式土師器で、庄内式系（C系）加飾二重口縁壷の肩部。博多遺跡群や那珂遺跡群などの墓域で類例がある。頸部に薄い台形状の突帯を巡らせ、櫛目状工具で波状文を描き、さらに２個１組の円形浮文を貼り付け、竹管を押している。**3**、**4**は中世の土師皿。いずれも底部は回転ヘラ切りである。**5**は大畦部の窪みから出土した須恵質の高台付坏。**6**～**11**は、弥生時代の投弾。大きさ、形状ともよく類似しているが、整った楕円形のもの、全長に比べ直径が小さいもの、両端の形状が尖っているもの、あるいは一方だけが尖ったものなど微妙な違いがある。雀居遺跡では、遺構からの出土は少なく、ほとんどが水田面や第Ⅲ面包含層から出土している。**12**は、土器の注口部の破片。雀居遺跡では同じように接着部から離脱した注口部が数点出土しているが、注口部が離脱した本体の土器は確認できなかった。おそらく西区吉武遺跡、小葎遺跡などで出土例のある弥生時代の脚付壷や短頸壷の注口だったと思われる。**13**は直径5.2cmの紡錘車。端部の厚さ0.6cm。紡茎を挿入する中央の孔は垂直。周縁部断面は丸みがある。**14**は碧玉製の管玉。上下の切断面は平行でなく、断面も正円ではない。孔も中心からずれて穿っている。長さは7.5mm、径は4.3mm。

Fig.19　水田跡の遺物

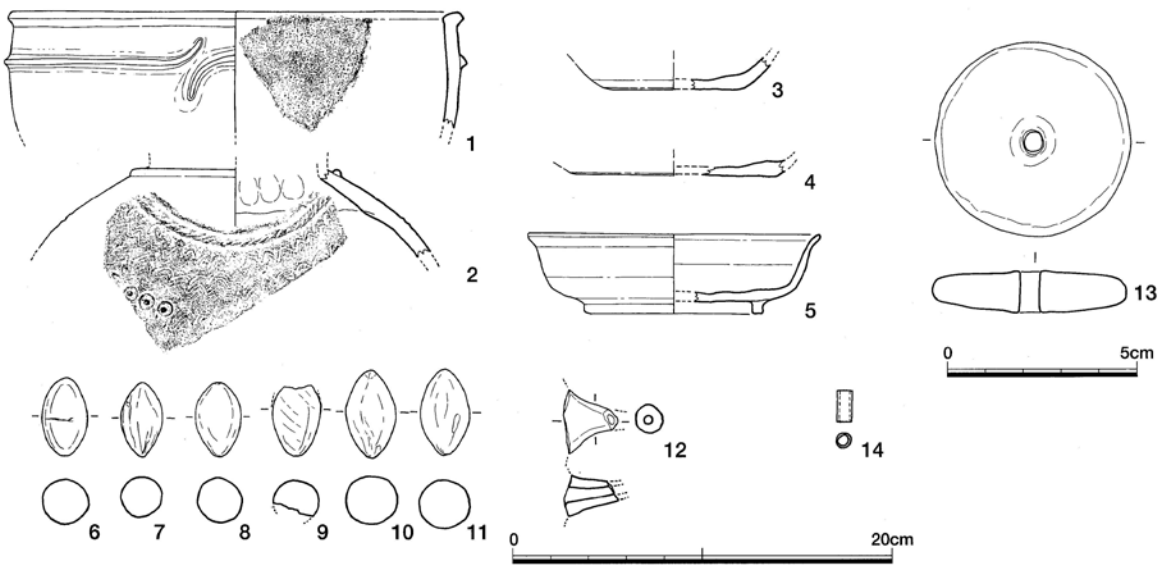


Fig.20　水田跡の遺物（縮尺１/４・１/２）

石製品　1～9は黒曜石製の打製石鏃、1～7は無茎式、8は抉りが少なく基部が直線に近い。9は小型ポイント状である。10は柳葉状の磨製石鏃で、厚みは2㎜ときわめて鋭利に研ぎ出している。11、12は、鑿状で2点とも丁寧な細かな研磨が加えられている。13は磨製石斧の頭部。損傷が激しいが表面には敲打されている。14は、砂岩質の砥石。断面方形で4面が研ぎ面となっている。15は一種の斧と考えたが、3側面が刃部のように加工され、身が扁平であることから、別の用途であろう。

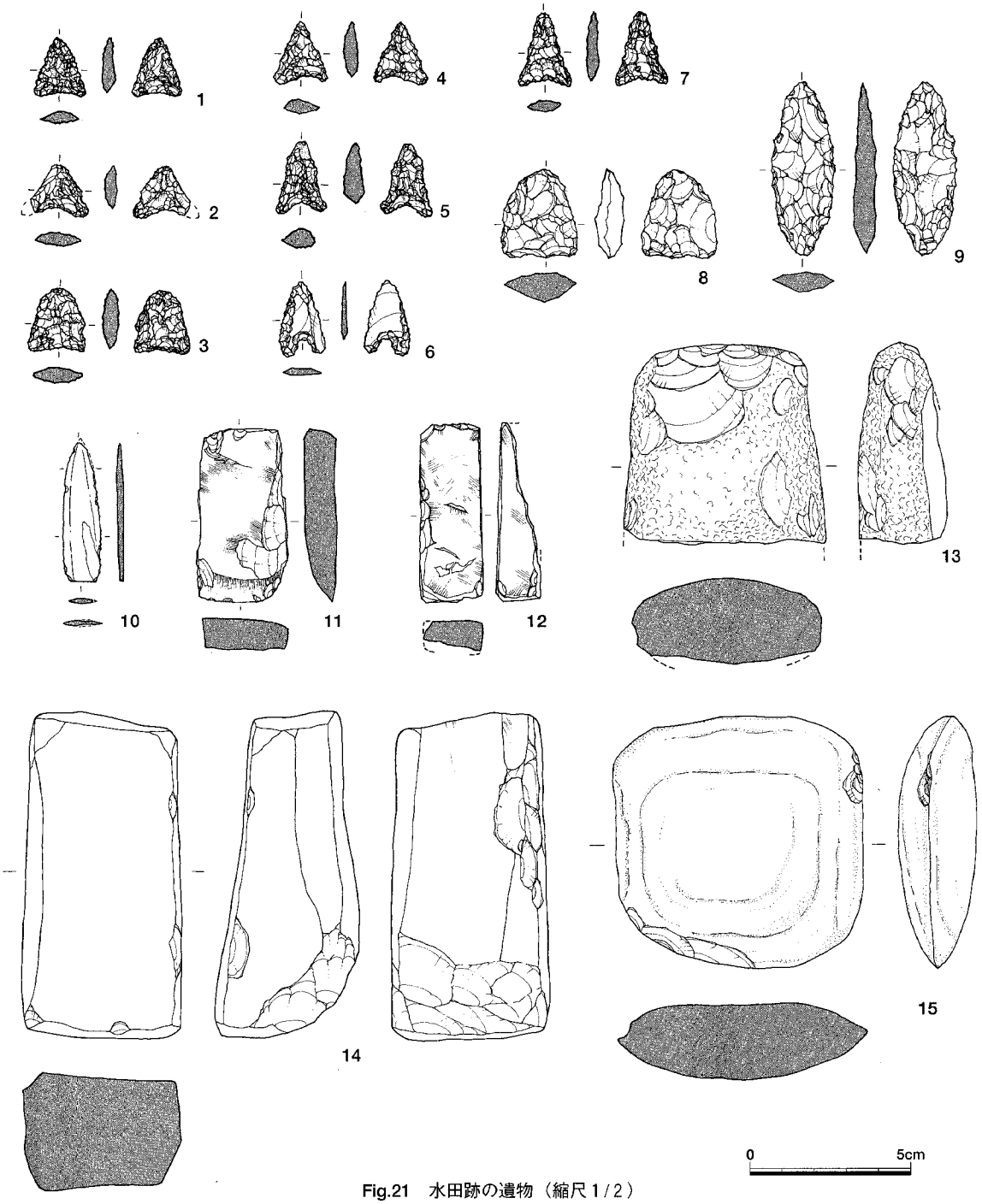
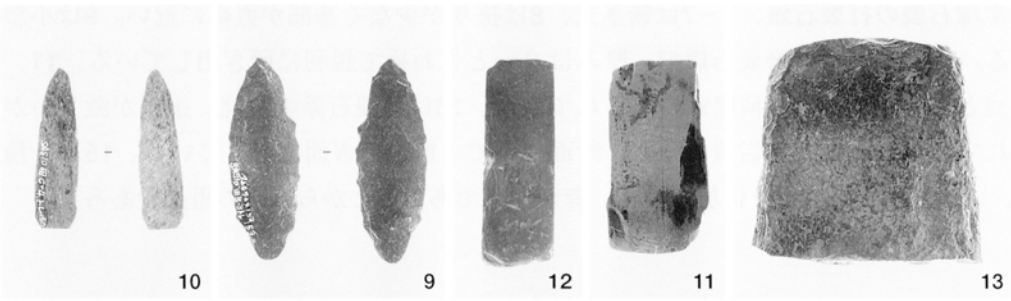
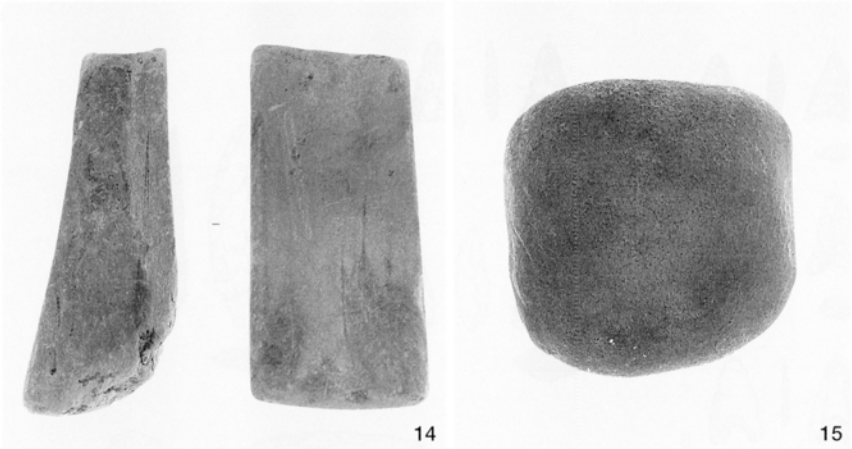


Fig.21　水田跡の遺物（縮尺1/2）





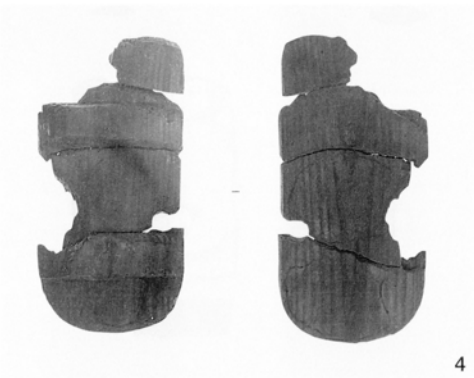


Fig.22　水田跡の遺物

木製品　木製品の出土は少ない。辛うじて水田面や流路の水分で守られていた5点を図化した。

1はヘラのように図下方が幅広になっているが、厚みがあることから刃部ではない。身部は削り痕が顕著に残っている。**2**は厚みのある板材で、全面に細かで丁寧な削り痕があり、側面には方形の窪みがある。壁や扉などの建築材の一部と考えた。**3**は流路の東岸から出土した竪櫛。完形品ではなく乾燥で変形しているが、元は頭部がやや丸みのある形状

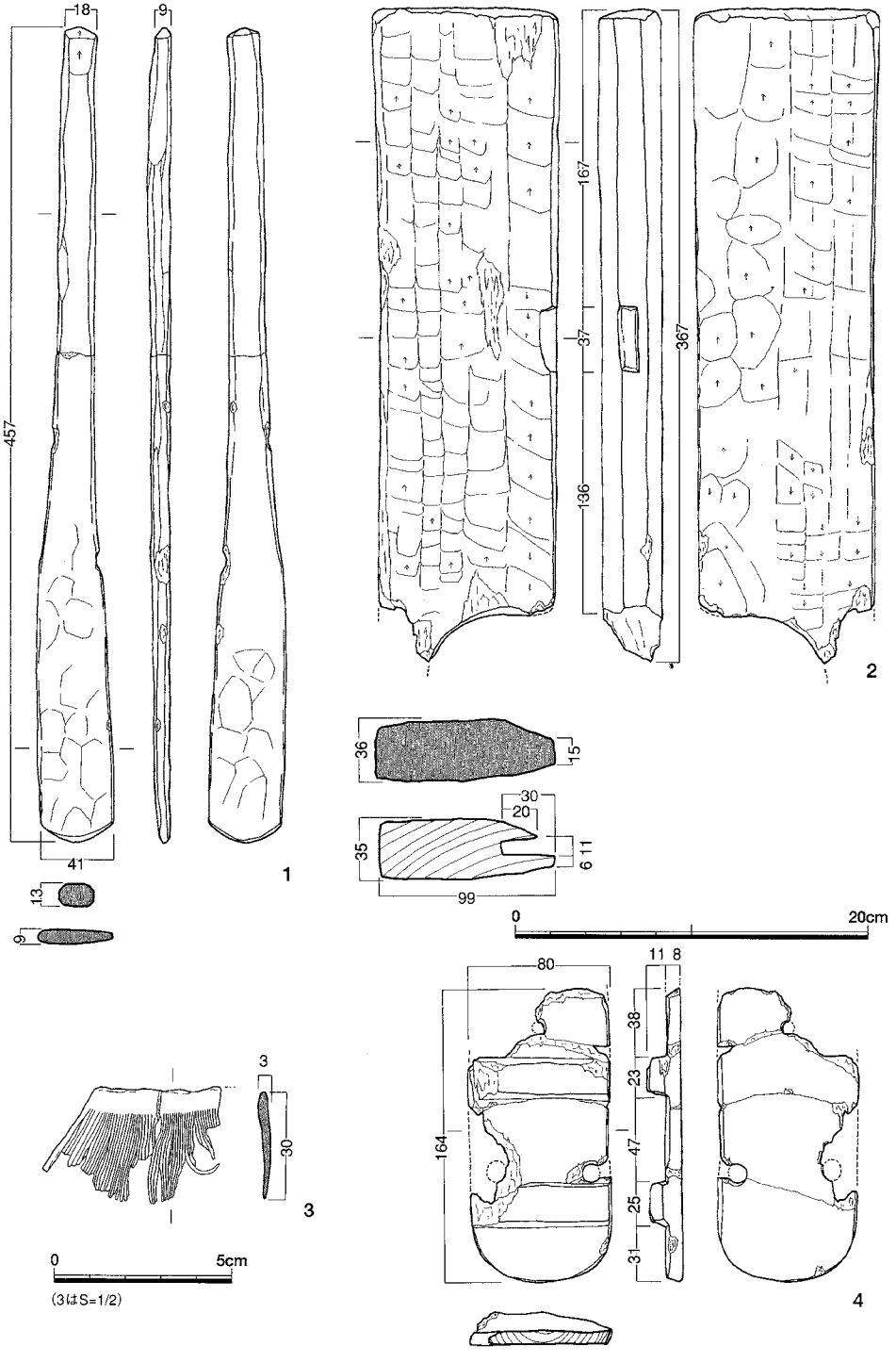


Fig.23 水田跡の遺物（縮尺1/4・1/2）

だったのだろう。**4**は2本歯の下駄。その大きさから小児用だろう。前方の鼻緒は中央にある。後歯は磨り減っている。片側だけが磨り減っているので、よほど癖のある歩き方だったのだろう。**5**は？字状製品を作っている。図上半の湾曲部には何かを挿入するのか中空となっており、その上下に小さな孔を貫通させている。この孔は中空部の外側に当たるので、目釘孔ではない。図下端の形状が柄端のような加工であることから、鎌の柄や組合せ式の人形などを想定したが、用途不明である。

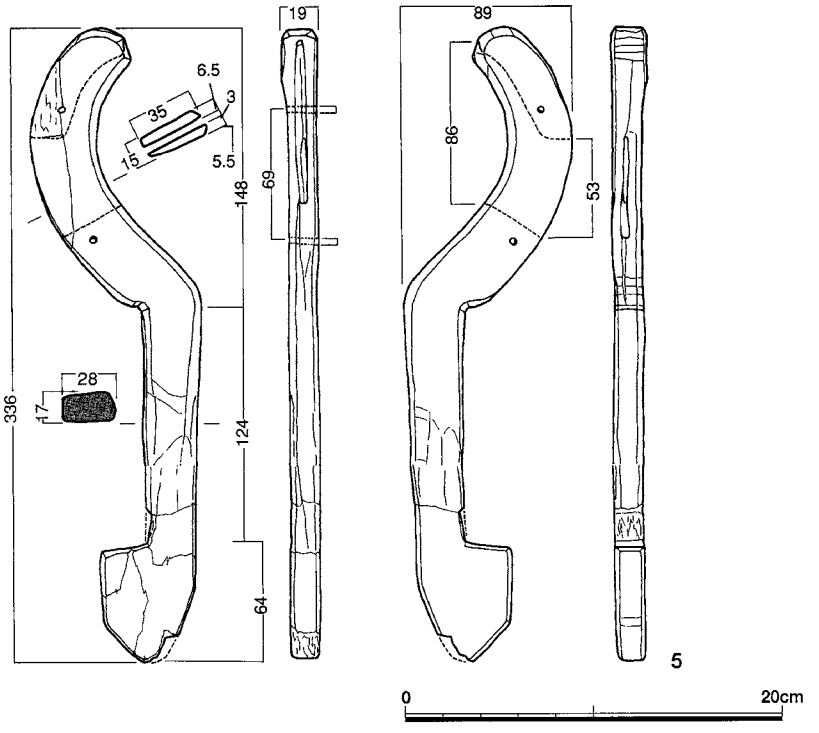


Fig.24　水田跡の遺物（縮尺１/４）

３．第Ⅰ面の掘り下げ

水田面の精査を済ませた後に、耕作土の厚さや畦畔の断面観察のために、各水田跡に十文字のトレンチを設定した。このトレンチでは試掘で確認していた第Ⅲ面の遺構の深さや広がりを再び確かめる目的もあった。

耕作土や畦畔の断面については先に記した通りであるが、発掘区の中央より南側には土器、石器などの遺物が大量に包含されており、さらに発掘区北側、水田跡SF063下部には竪穴住居跡と思われる落ち込みもあり、集落の存在も予想された。掘り下げ作業の結果、第Ⅰ面水田跡より約25cm下部で第Ⅱ面古墳時代～弥生時代後期の遺構面を検出した。この掘り下げと遺構検出作業で出土した各種の遺物をここでまとめて報告する。弥生時代前期から古墳時代までの各種の遺物が相当量出土した。しかし遺構確認する前の取り上げであることから、本来属していた遺構から遊離することになり、ここでの図示は25点に止めた。1は大型伝統的Ｖ様式系（Ｂ系）二重口縁壷。形態・文様に山陰的傾向も見えるが、調整は外面がナデに近いミガキで肩部横ハケがなく、内面は粗いハケ目、とＢ系技法である。2は庄内式系加飾二重口縁壷であろう。3は有段高坏である。胎土は精良ではなく、調整もやや雑であり、Ｂ系であろう。4は如意形口縁の弥生時代前期後半の甕。口辺部下はわずかに締まっているが、胴部の最大径は口辺径より小さい。5～19は投弾。20は蛤刃石斧。刃部には細かな研磨が施されている。21は黒曜石製の打製石鏃。21、22は土製の装身具。22は土錘。23は土製紡錘車で直径は3.64cm。正円ではなく、厚さも均一ではない。

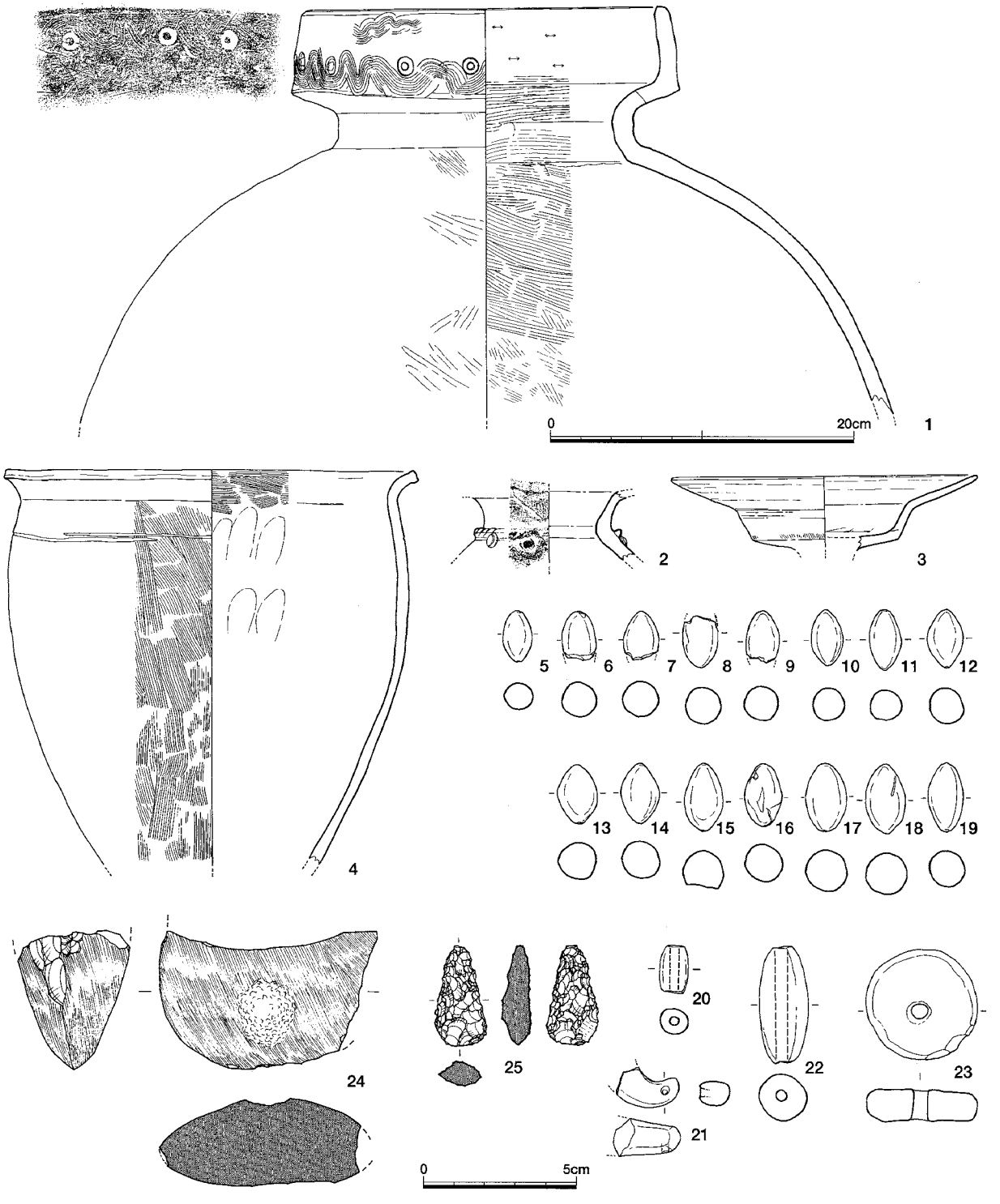


Fig.25 第Ⅰ面掘り下げの遺物（縮尺1/4・1/2）

第4節　第Ⅱ面（弥生時代後期～古墳時代前期）の調査

1．概　要

第Ⅰ面の水田面は厚い砂層で覆われていたために、検出作業がきわめて容易であったが、第Ⅲ面の土層との間には、砂層は介在していないが耕作土下部の土層と第Ⅲ面の黒色粘質土とは比較的よく見分けが付く。しかしながらこの黒色粘質土に掘り込まれている遺構の埋め土のほとんどが黒色粘質土とほとんど差がなく、検出作業に多くの時間を費やした。またこの黒色粘質土の上面（表面）で最初に検出したのは古墳時代の竪穴住居跡SC01であるが、すぐ近くで弥生時代後期の甕棺墓SN01が見つかったことから、当初は、黒色粘質土の表面が古墳～弥生時代の遺構面とし、遺構面は先の水田跡の第Ⅰ面と合わせて2枚だけと考えた。しかし、竪穴住居跡調査後、黒色粘質土を数cm位で掘り下げたところ、新たな遺構が姿を現し、基本的には古い時期の遺構から新しい時期の遺構へと混乱することなく順に重なっていることを確認した。だが黒色粘質土は、本来はさらに厚みがあったと思われるが、すでに上部の大半を削平されてしまっている可能性が強く、また地山の起伏に合わせて水平な堆積をしていないにもかかわらず、私たちの遺構検出作業は表面を水平に削り出しているために、上部にあった古墳時代の竪穴住居跡の掘り込みが深い結果、弥生時代の遺構面と同じ面で検出される、つまり時期の異なる遺構を同一レベル面で掘り出すという結果となった。このように発掘現場では、時期ごとの遺構面の把握が困難であったために資料整理を進める過程で、出土遺物や遺構の切り合い、重複などから検討を重ね、意図的に時期ごとの遺構面を決めた。以上のような理由から第Ⅱ面の遺構として抽出したのは、古墳時代前期の竪穴住居跡、井戸、土壙、土器溜、そして弥生時代後期の方形周溝、甕棺墓である。次ぎにこれらの遺構と出土遺物について記す。なお、資料整理の時間的な制約から、発掘作業で検出したすべての遺構、遺物を報告できないことを先に断っておかねばならない。

Fig.26　第Ⅱ面検出作業

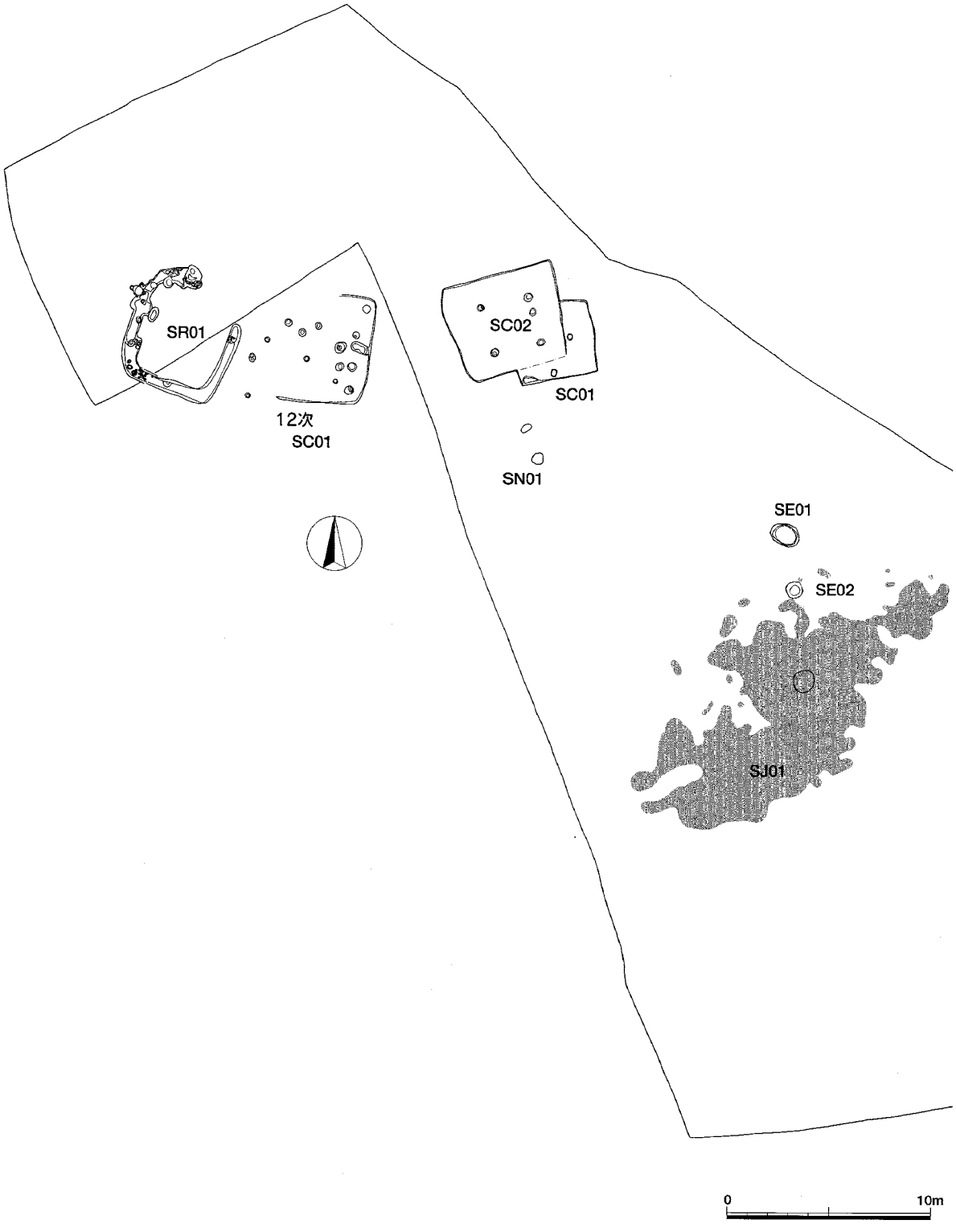


Fig.27 第Ⅱ面遺構全体図（縮尺1/300）

2．竪穴住居跡（SC）

2軒の竪穴住居跡は、O・P28・29グリッドで切り合った状態で検出した。切られている古い時期の竪穴住居跡をSC01、切っている新しい住居跡をSC02と名付けた。水田跡SF063の掘り下げでその存在を予想したのは、SC02の方である。

第1号竪穴住居跡SC01　SC02に切られ時期的に古いSC01は、その長軸がSC02の長軸よりわずかに東に振れている。北壁315㎝、東壁277㎝の長方形。床面積は87.3㎡なので、SC02よりも約73%小さい住居である。床面はSC01が低いが、その差は数㎝しかない。床面には小ピットが数個見つかったが、その位置や深さなどから主柱穴として断定できるピットはなかった。

Fig.28　SC02検出作業

Fig.29　SC01・SC02（西より）

SC01の古墳時代遺物は、決して多くはない。可能な限り細片も実測するように努めた。床面には下方の第Ⅲ面包含層の遺物がすでに顔を出しており、埋め土にも弥生土器の破片が多かった。いまは下部から水が浸み出し、住居に適しているとは思えない。もちろん古墳時代から、地形、水脈などが大きく変化した可能性はあるが、竪穴住居跡の選地、集落展開を考える上で重要である。

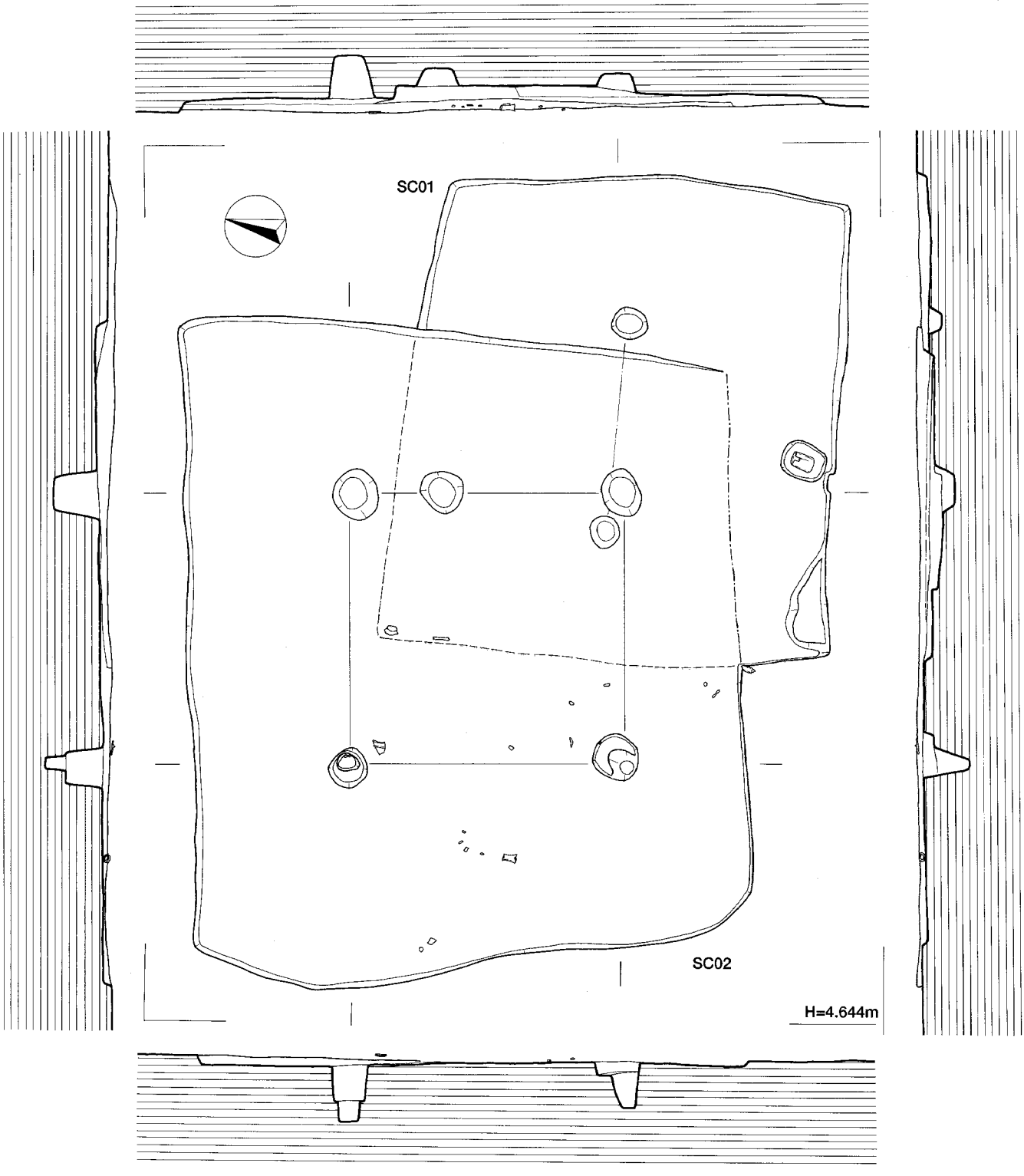


Fig.30 SC01・SC02実測図（縮尺1/60）

出土遺物　竪穴住居跡内埋め土から古墳時代土師器、弥生時代土器と石製品などの遺物が出土したが、SC01に伴うと考えた遺物は、次の１～16で全体の数量からすると決して多くはない。

土　器　**1～5、9～16**は古式土師器である。これらの甕・椀・小型丸底壷（鉢）・小型器台・高坏はそれぞれ布留式併行期のもので、製作技法も庄内式系（Ｃ系）・布留式系（Ｄ系）であろう。これらの遺物の時期は、どれも小破片ばかりで難しいが、Ｄ系甕の口縁部形態やその立ち上がり角度、小型丸底壷（鉢）の新しい傾向を示す特徴であるより「鉢」的な外反口縁鉢の存在などから、久住編年のⅡＢ～ⅡＣ期の時期であろう。今回の調査で出土した古式土師器もⅡＢ～ⅡＣ期のものが多く、重複関係から時期的に新しい２号住居がおそらくⅡＣ期であることからもそうである可能性が高い。**1～5**はＤ系甕。**1**は凹凸が目立たず微妙に内湾する形態、**2**、**3**は凹凸が目立たず直線的な形態で、博多、比恵・那珂遺跡群でよく見られるとされ、このようなＤ系甕の口縁部形態の在り方は比恵・那珂、博多、他に西新町・藤崎遺跡群でそれぞれ特徴があるとされる。雀居遺跡出土のＤ系甕の口縁部は**2**、**3**の形態が多く、比恵・那珂、博多集落との交流を示すものであろうか。**4**、**5**は胴の肩部の小片だが、ともに外面はタタキ仕上げではなく、**4**は頸部内面の屈曲部まで削りが及ばず屈曲が緩やかで、**4**、**5**ともにＤ系甕・壷類によくみられる波状ハケ目が施されていることからＤ系とした。**9**・**10**は胎土が精良で、器壁が薄く、調整も丁寧であることから小型丸底壷（鉢）であろうか。**11**は小型丸底壷小片と思われるが、**12**と共伴する型式には重藤編年によれば壷４・５式があるが、小型精製器種にしては作りがやや雑である。**12**は小型丸底鉢（久住分類[註1]Ⅲ類、重藤分類[註2]では鉢３式）で、重藤編年では西新町４式（久住ⅡＣ～ⅢＡ期相当）である。**6**～**8**は弥生後期土器の小破片で混入品と思われる。これらは弥生後期の在地系甕であろう。**6**は頸部まで残っており、はっきりと屈曲している。内面は器表面の大半が剥離している。**8**は頸部に接合痕がかすかに認められる。

註１　以下記す古式土師器についての分類・時期区分は、久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究19』1999に拠る。
註２　重藤輝行「第５章　考察」『西新町遺跡３』福岡県文化財調査報告書第157集　2001

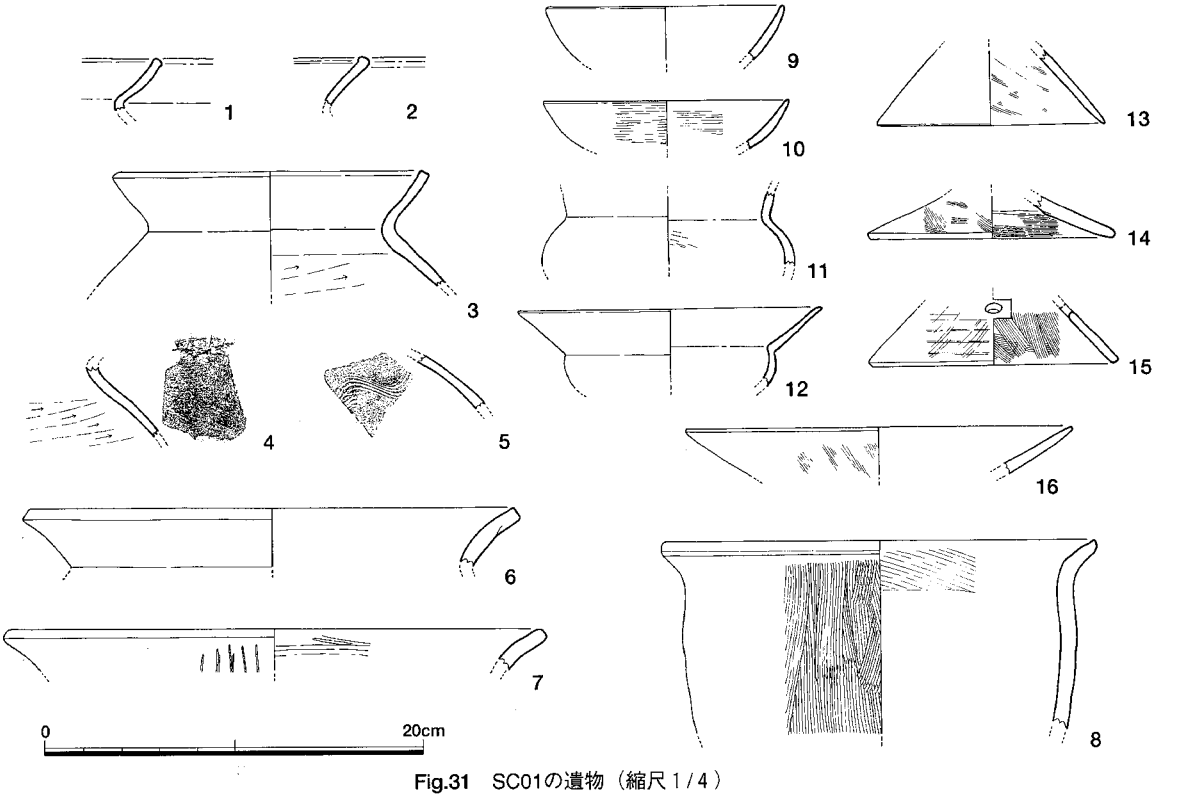


Fig.31　SC01の遺物（縮尺１/４）

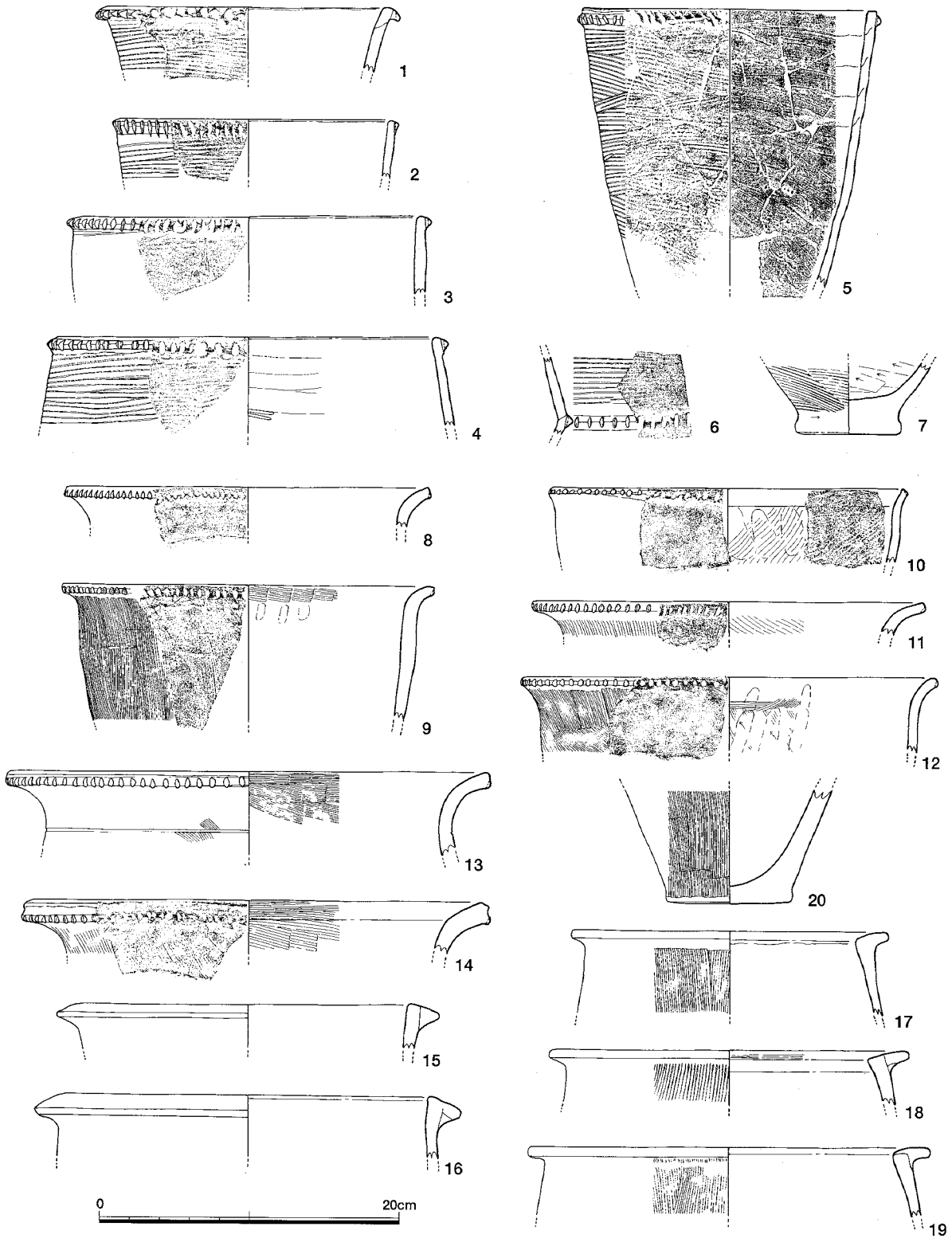


Fig.32 SC01の遺物（縮尺 1 / 4 ）

SC01とは直接の関係はないが、埋め土、床面から出土した弥生土器、石器類も、黒色粘質土の堆積状況やこの地一帯の土地利用のようすを知る手がかりになると考え実測、図化した。

1～**7**は口縁部に粘土紐を貼り付け、刻み目を加えたいわゆる突帯文土器の甕である。突帯の貼り付け位置や口縁部の傾きなどで多様な器形となっている。**1**の体部は逆ハ字形に直線的に開き、断面蒲鉾形の突帯は、口縁端部から下方に垂れ気味になっている。外面は貝殻条痕が鋭く残っている。**2**、**3**は体部上半が真っ直ぐに立ち、口縁端に小さな断面三角形の突帯を巡らしている。**2**の突帯刻み目は細く鋭い。**4**は体部上半が直線的に内側に傾いている。体部中位で反転し底部へと続く器形であろう。口縁上端は、平坦ではなく丸みがある。**5**は砲弾形のやや長めの体部で、口縁端よりやや下方に突帯を貼り付けている。刻み目は左斜行で、粗雑だが深く刻み込んでいる。**6**は甕の反転部。**7**の底部底面は粗い削りで凹凸が目立つ。**8**～**14**は口縁が緩やかに湾曲して外に開くいわゆる如意形口縁の甕で弥生時代前期の土器である。その湾曲の度合いがそれぞれ異なる。**8**は滑らかな湾曲であるが短

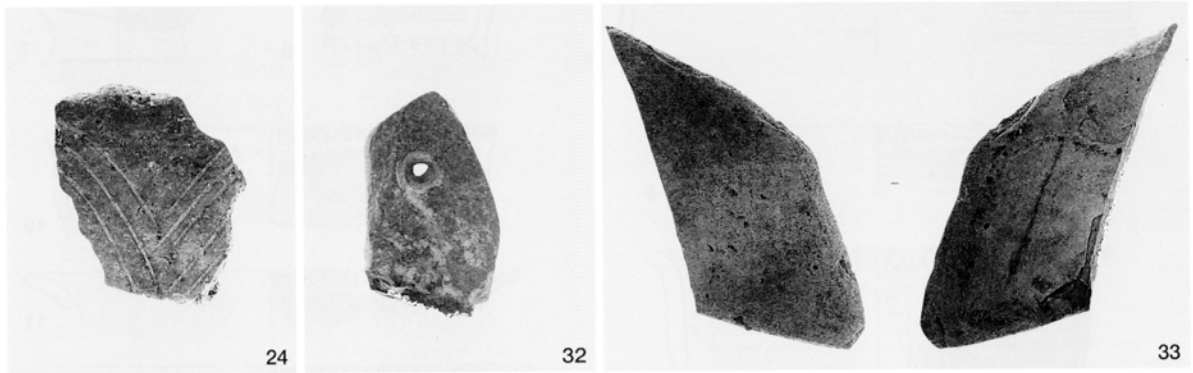


Fig.33　SC01の遺物

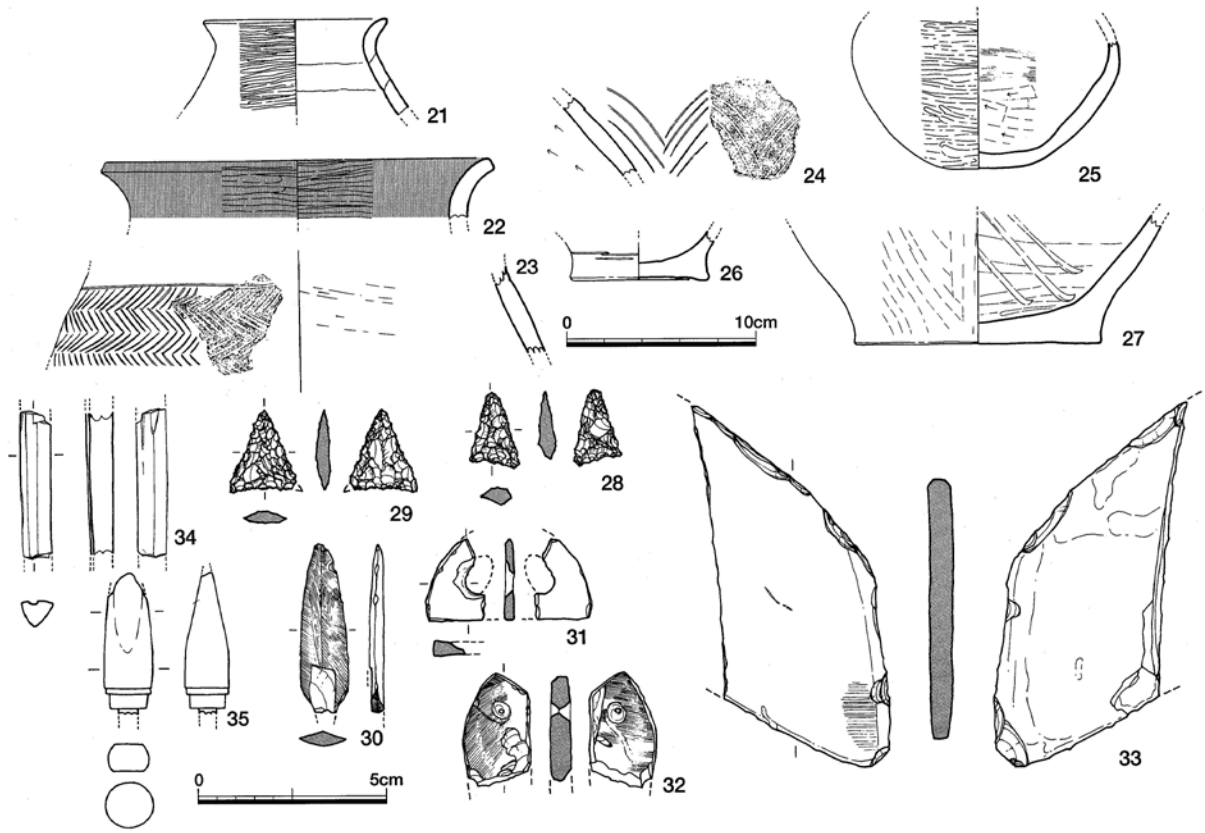


Fig.34　SC01の遺物（縮尺1/4・1/2）

く小さな口縁である。刻み目は口縁端部の下端側だけに付けている。その間隔は密で、その断面観察によると左方向から工具を当てていることが分かる。**9**は口径24.60cm、同じように口縁は小さく外湾する。器壁はやや厚みがる。外面は細かなタテハケ目調整。口縁部内面は、右から左へ横方向に粗いハケ目を施している。その下方、湾曲部は指頭圧痕が見られる。**13**、**14**も如意形口縁の甕であるが、口径が30cmを超す。**13**の口縁内面の横ハケ目は、逆時計回り方向。**14**の口縁部は厚みがあり、その端部は横ナデで口唇状の断面となる。**15**～**19**の口縁端は断面三角形、あるいはL字形で、弥生時代中期前半の甕である。**15**、**16**は断面三角形の粘土紐を貼り付け、口縁上面が下方に傾斜する。口径25.4cm。**17**～**19**は器壁よりやや薄い粘土板を貼り付けて、L字形の口縁を作っている。体部上半が内傾しているので、く字形に近い。体部は倒卵形の器形になるのであろう。**21**～**27**の7点は壺の各部破片。**21**は口径9.60cmの小型壺で、直線的に内傾する頸部に小さく外反する口縁が付くという弥生時代前期壺の特徴をよく持っている。口縁の屈曲部には明瞭な段や境はなく、やや後出的である。外面は細かな横ミガキが施され滑らかな仕上げとなっている。**22**は細片のために器形が分からないが、外湾する口縁の内外面ともに細かな横ミガキが施されていることから壺とした。**23**、**24**は胴上半部を飾った文様。**23**は細かな沈線の下に2段の羽状文。**24**は3本沈線による連弧状文。細片のために傾きは不正確である。**25**は弥生時代前期特有の円盤状の底部ではなく、胴部からそのまま丸みのある底部となる。胎土には精良土が用いられ、堅緻な焼成となっている。器面の調整は外面が横ミガキ、底部周辺は削り状の強いミガキ。内面は上半部が丁寧な横ナデ、下半がヘラ状工具によるナデである。**26**、**27**は底部。**27**の底径は12.8cmあり、中型の器形となるのだろう。外面は板状工具によるナデ、内面は棒状工具で強くナデており、左上がりの沈線が無造作に入る。

石製品　**28**、**29**は黒曜石の打製石鏃、基部の抉りは弱い。**30**は柳葉状の磨製石鏃。基部を欠いており、現長4.45cm。断面は扁平な菱形で、全面細かな研磨が施され鏑も通っている。**31**、**32**は小孔が穿たれていることから垂飾品と考えた。大半が欠損して全形を知り得ない。**33**は石鎌の基部破片。厚さ6.5㎜の板状で、基部に当たることから刃部の研ぎ出しは見られない。

骨角製品　**34**はシカの中手骨か中足骨を断面三角形に加工している。縦に細い溝があるがこれは素材の本来のもの。両端は折れており、用途不明。全面に滑らかとなっている。**35**はシカの角を加工している。いま両端を欠いており、長さは3.7cm。上半部は両側から研ぎ、基部は断面円形となっている。形状から弓弭と考えた。

第2号竪穴住居跡SC02　SC02は長方形でその長軸が磁北に対しほぼ直交している。上部が激しく削平されており、壁の高さは10cm前後にすぎない。四壁の長さは、北壁4.27m、南壁3.23m、東壁3.25m、西壁3.26mを測り、台形状となっている。床面積は、約12㎡。各コーナーは丸みがあり、ややいびつな形状である。床面にはSC01の小ピットもあり、このうち4個を主柱穴とした。これら4個の柱穴は、長さ1.90cmの正方形の位置に正確に掘り込まれている。不整形な四壁に比して内部構造はかなり計算された作りだったのだろう。

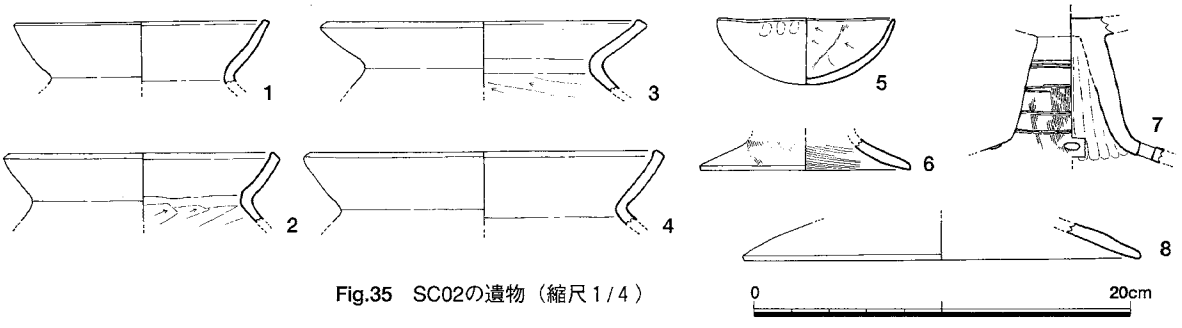


Fig.35　SC02の遺物（縮尺1/4）

土師器　1～8は古式土師器である。布留式系（D系）である甕・高坏・低脚高坏、他に小型椀や台部片がみられる。これらの遺物の時期はD系甕から、先のSC01の土器と同じくⅡB～ⅡC期のものであろう。ただ遺構の重複関係から、このSC02の土器の方が新しいといえる。　1～4はD系甕の口縁部である。口縁部形態はどれも凹凸が目立たず直線的あるいは微妙に内湾しており、SC01で述べたような特徴から同じく比恵・那珂、博多遺跡群との関係がみられる。端部は面取りされていて、久住編年Ⅱ期古相に多くみられる端部の沈線はない。ただ2は左上がりの内面ケズリである。7はD系高坏の脚部である。胎土は精良、やや膨らんでいる脚柱部が特徴で、そこに横方向の筋状のミガキが施されている。装飾的な意図もあると思われる。8は4㎝の小破片で低脚高坏の脚部である。胎土が精良で小型丸底鉢とも考えたが器厚が厚く、あと内面の調整具合からこう判断した。

弥生土器　9～11は突帯文土器の甕。10は口径21.4cm。突帯は断面蒲鉾形で細い棒状工具を右に傾けて右方向より押しつけている。体部外面は横条痕ではなくヘラ状工具によるナデ調整。11の口径はやや大きく22.6cm。体部は微妙に湾曲しながら開き口縁となる。突帯断面は低い三角形で、口縁端に接して下方に垂れ気味に貼り付けている。外面の横条痕は、口縁直下にはなく約3㎝下から付けられている。12～14は如意形口縁を持つ弥生時代前期の甕。3点とも口縁部の刻み目は下端のみに付いている。12は口径20.2cm、体部上半に張りがなく、直線的な如意形口縁となる。内面の調整は、丁寧なミガキ状の右上がりナデ。13の体部上半は内傾していることから倒卵形に近い体部になるのであろう。15は口径27.8cmと大きめの甕。口縁端部中央は横ナデで凹状となり、その上下に刻み目を入れているが、上端は右から、下端は左から刻んでいる。16～31は弥生時代中期前半の甕で、L字形の口縁となっている。16～18の口縁は、三角形の粘土紐を貼り付けており、分厚い断面となる。24～31はどれも口縁上面が水平な作りとなっている。24の口縁部は断面からその作りが観察できる。口径24.4cmに対して幅広の口縁となっている。26の丸みのある口縁部は他と粘土の貼り付け方が異っている。

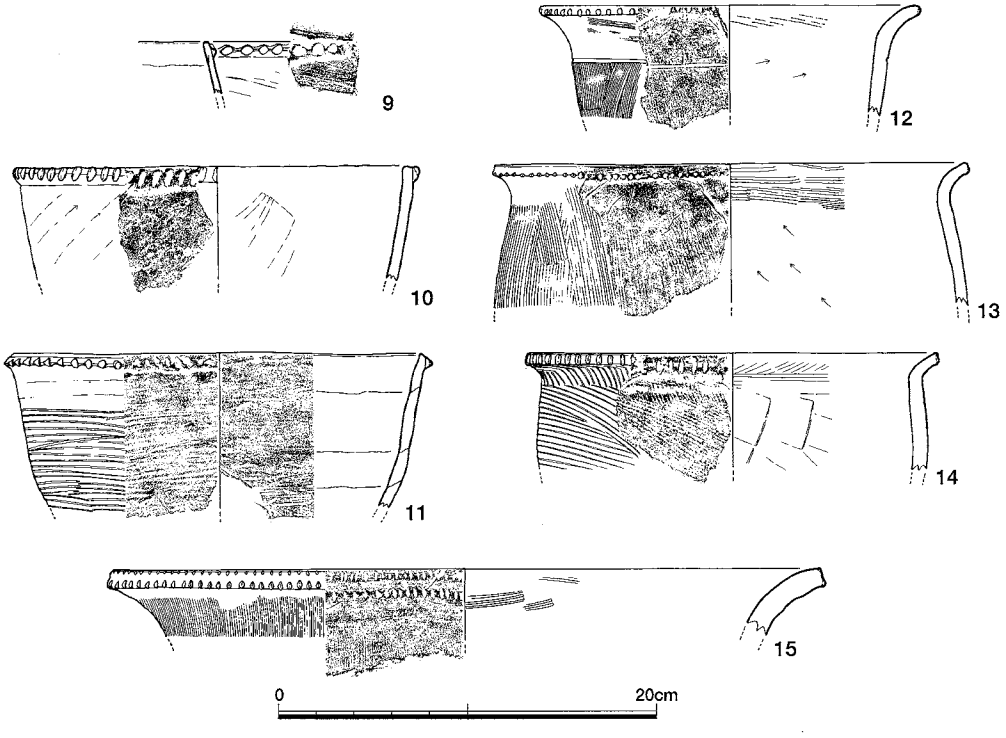


Fig.36　SC02の遺物（縮尺1/4）

19～23は、体部上半が内傾し、さらに口縁上面も内傾しており、丸みのある体部となる。また口縁端部にタテの刻み目を加え、口縁下には三角形突帯を１条巡らす。外面調整は縦のハケ目を数回重ねている。31の体部上半は内湾気味にのび、その端部に幅３cm程の粘土板を貼り付け、さらに下方から粘土を貼り付け支えている。このため台形状の厚みのある断面となる。胎土に砂粒を含み、焼成はよく外面は赤茶色を呈する。内外面とも丁寧な作りである。32、33は甕の底部。33の底径は10.4cm、体部の器壁は分厚いが、底部中央は極端に薄い。底部外面中央部はヘラ状工具によるナデ、外縁の18mmは輪状に丁寧にナデている。33は弥生時代中期前半の甕。底径は11.4cm、胎土に１mmより小さい砂粒を含む。外面のくびれ、底部の凹みも小さい。34～37は壺の各部破片。34は頸部が朝顔状に大きく開く器形で、口縁端に粘土板を貼り付けている。外端は強く横ナデして断面が口唇状となり、その下端だけに細かな刻み目を加えている。35は体部上半の装飾文。小片なので全形を知り得ないが、縦に２本の沈線があり、この両側に羽状文を少なくとも６段重ねている。文様の１単位は小さく、整然と並んでいない。おそらく沈線で区画された中を羽状文で充填するようにして施文したためであろう。36は体部上半を欠いているが、小型壺の底部とした。底径3.6cm、胎土は砂粒が少なく精良土に近い。

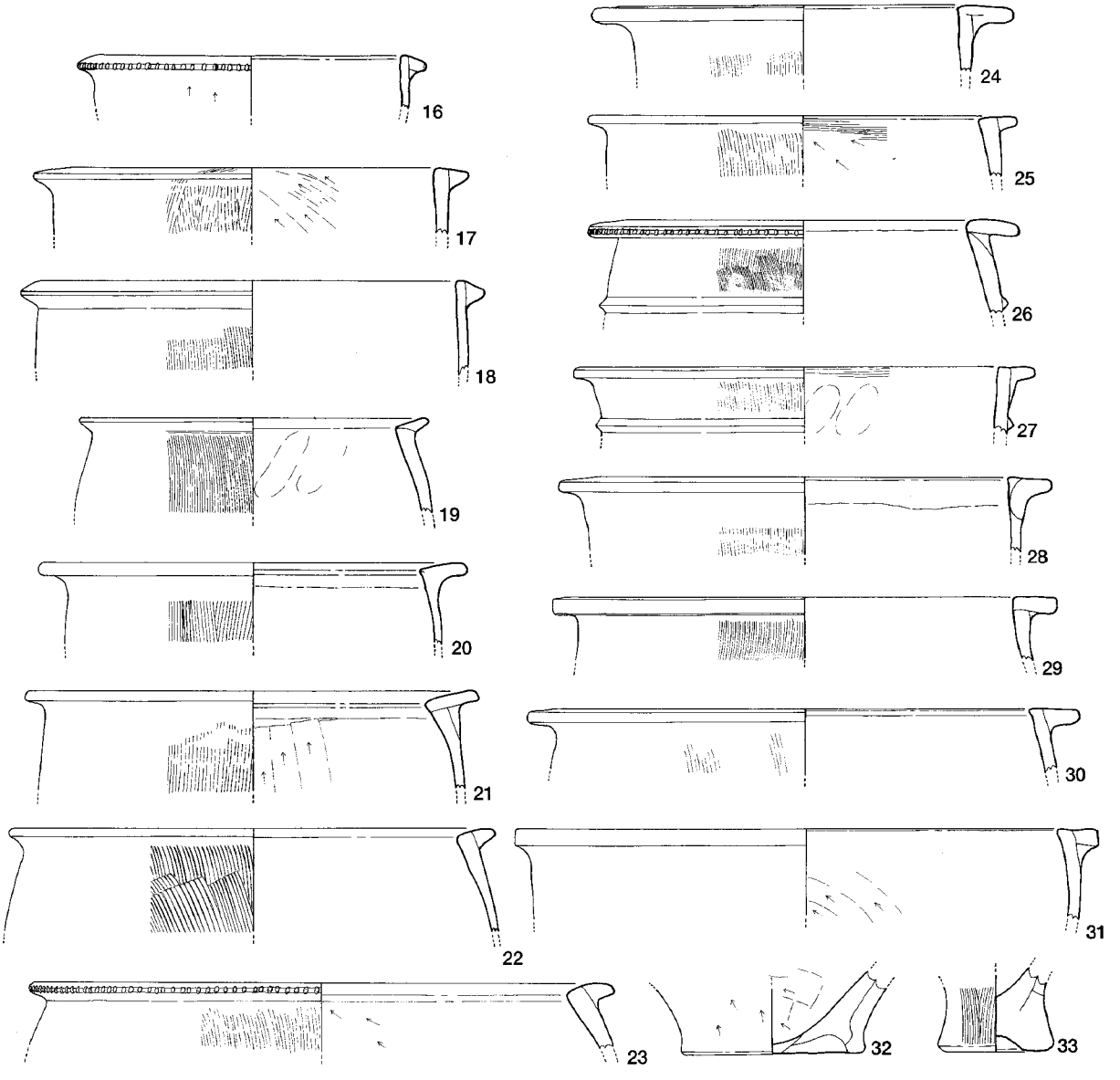


Fig.37　SC02の遺物（縮尺１/４）

器面は内外面とも灰色で、やや軟質の焼成となっている。**38**は投弾、長さ3.82cmの楕円形で、中央断面径は2.17cm×2.13cmと正円に近い。両端はやや潰れているが、焼成前に付いた傷も残っており、器面の摩耗、風化はほとんどない。**37**の底径は10.2cmあり、やや中型の壺となるのであろう。外底部は平坦ではなく、体部への屈曲部も丸みがありシャープではない。壺であるが砂粒が多めの胎土が用いられている。外面はミガキ状の調整で滑らかな器面となっている。

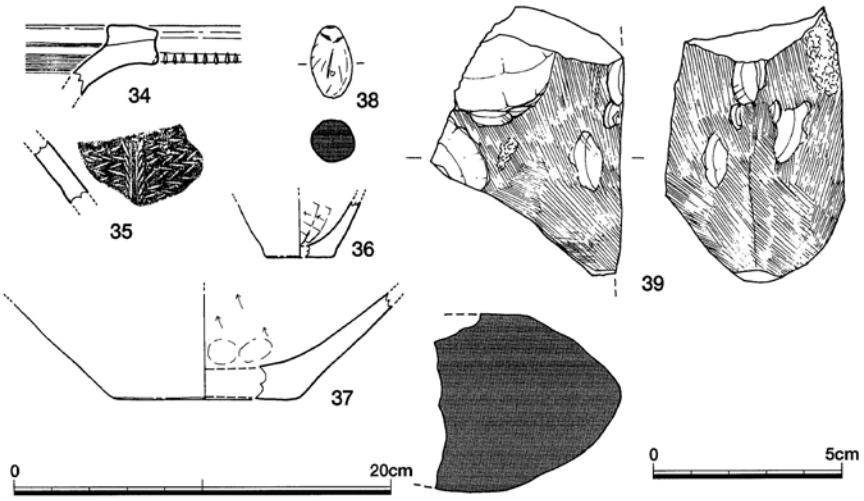


Fig.38　SC02の遺物（縮尺1/4・1/2）

土製品　**38**は投弾。絵画のような沈線があるが、断定はできない。

石製品　**39**は磨製石斧の破片。側縁は平行して長方形の形状となるのだろう。全面に丁寧な研磨。

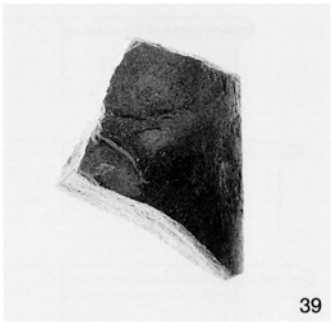


Fig.39　SC02の遺物

2．井戸（SE）

第10次調査では、2基の井戸を検出した。これらは上面プランが割りに整った円形で、深さが1m近くあり、さらに祭祀行為と思われる完形土器が投げ込まれた状態で出土したことから井戸と判断した。もちろん今もある程度の湧水がある。数多く検出した土壙の中には、井戸の可能性が強いものもあるが、これらの条件をそろえていないことから、ここでは2基のみに止め報告する。

第1号井戸SE01　O-25グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸168cm、短軸126cm。検出面より33cmの深さまでは逆円錐形状に掘り込み、あとは円筒状に垂直に約98cm掘り込んで底面としている。井戸埋め土の土層は上部で3層がレンズ状に落ち込み、その下部は土層の変化はない。このことから短期間に埋没し、凹んだ上部だけがある程度の時間をかけて平坦になったと思われる。遺物の出土状況もこの予想を裏付けており、完形の土師器甕は底部に横たわり、途中からは出土していない。また底部より高さ約85cmに角材や板材、土器破片などが集中して折り重なっているのはこのためであろう。

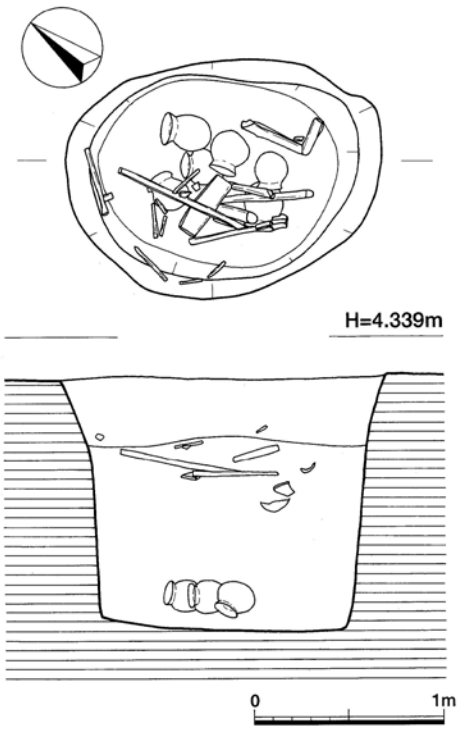


Fig.40　SE01実測図（縮尺1/40）

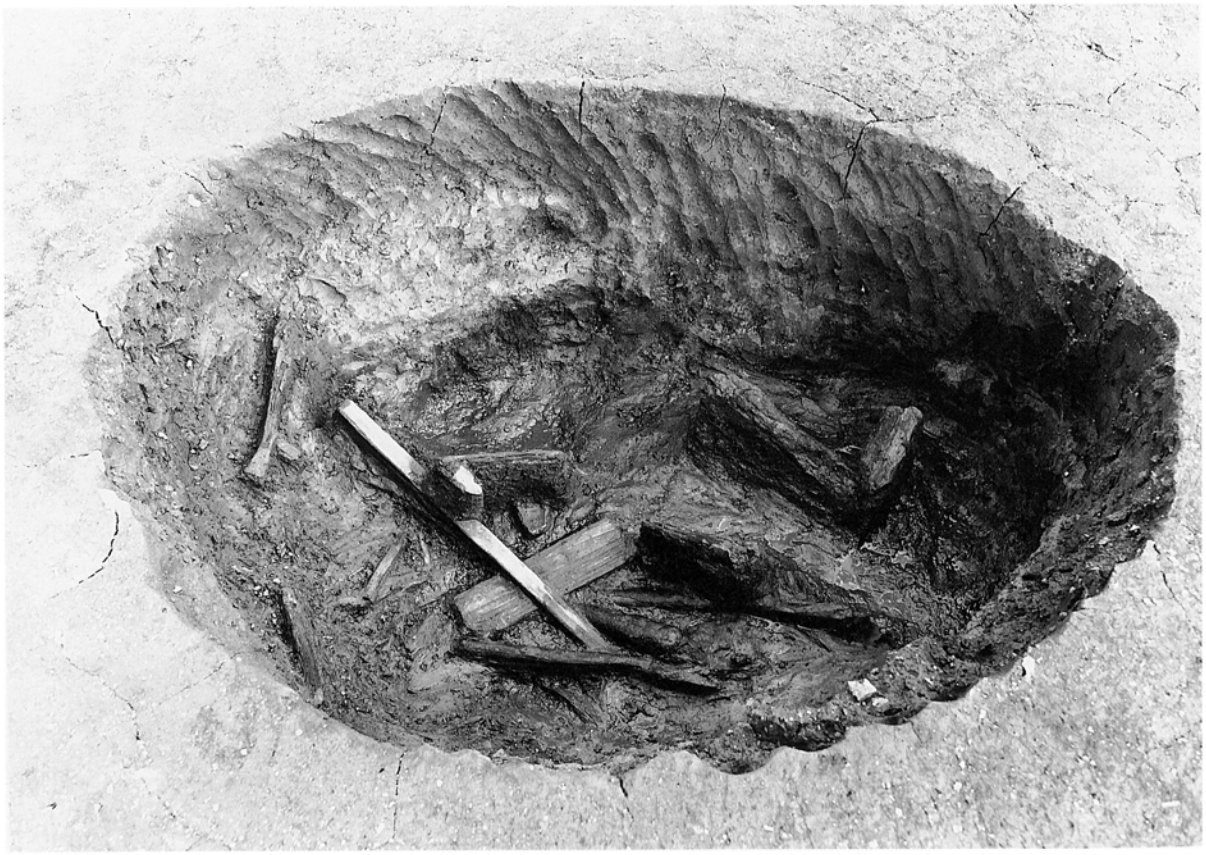


Fig.41　SE01上部

Fig.42　SE01下部

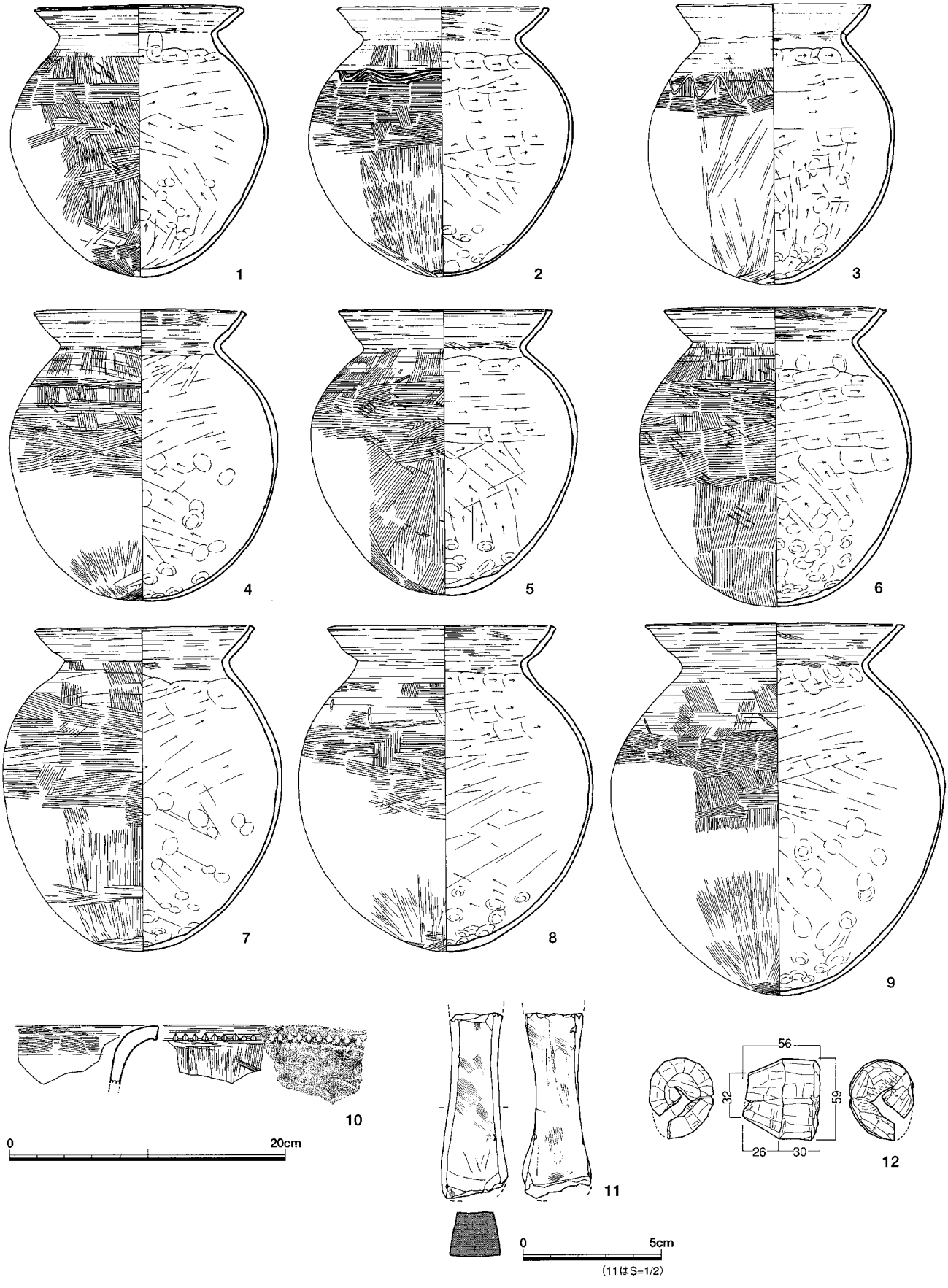


Fig.43 SE01の遺物（縮尺1/4・1/2）

2

4

8

7

9

Fig.44　SE01の遺物

底面から出土した9個の土師器甕は、無傷の完形品がほとんどである。その祭祀行為が井戸使用中のことなのか、井戸廃棄時のことなのかまでは決めがたい。

古墳時代の井戸分布を見ると第10次で3基、第13次で3基、第12次では検出していないので計6基となる。これらの井戸が竪穴住居跡に付属するのか、あるいは共同的な使用となっていたのか明らかでないが、水脈の場所が優先したとは言え、竪穴住居跡から離れているのは集落全体で使用、管理する機会が結果的に多くなったであろう。

出土遺物　図示したのは弥生土器、土師器、砥石、木製品の計12点である。

土　器　**1～9**は布留式系（D系）甕である。このD系甕について、久住1999は北部九州内でも遺跡ごとに特徴がみられることを、当時の大集落（比恵・那珂、博多、西新町・藤崎の遺跡群）を例に

Fig.45　SE01・SE02の遺物

次のように指摘している。口縁部は、比恵・那珂では微妙な凹凸はあるものの直線的で（次いで内湾気味のものが多い）、博多には凹凸のある外湾・内湾気味のもの両方有り、西新町・藤崎では凹凸があり山陰系土器の二次口縁部のような形態である。胴部形態は、比恵・那珂では肩部が「なで肩」のものが多く、時期が下ると底部に広く指オサエ技法を施すものが多いが、博多、西新町・藤崎（特に西新町）では肩部の張る倒卵形や球胴が多い（ただ底部は西新町・藤崎のものは指オサエ技法を施す範囲が狭い）。一方、当遺跡のD系甕を観察すると、胴部外面調整や底部指オサエ痕跡に特徴がみられる。

1～**9**のD系甕をみると大きく二つの調整方法に分けられる。一つは、外面下半の縦ハケ調整がおそらくある程度乾燥した段階で施されたためナデのように浅くかすれており、丁度その調整範囲に対応するように内面指オサエ技法が施されているもの（**2**～**4**、**7**～**9**）で、タタキ痕も見られる場合は上半部のみであることが多い。もう一つは、外面

調整全体の調整痕は明瞭でタタキ痕も全面にみられるもの（**1**、**5**、**6**）で、中には底部が分厚いものがある。この違いについては土器溜まりの所で後述する。ただ**3**は外面胴中位以下が工具ナデ仕上げで、底部にも若干タタキ痕跡がみられ、頸部に接合痕が残るなどやや雑な部分も有り、D系甕の影響を受けたB系甕（久住分類の甕B(D)）の可能性もある。またこれらのD系甕を先に述べた遺跡ごとの形態的特徴に照らしてみると、ほとんど「なで肩」であったり、微妙な凹凸があり直線的あるいは内湾気味の口縁部形態であったりと同平野内集落である比恵・那珂、博多との関係が窺える。ただそこからの搬入品か、工人の伝来によるものか、雀居工人の作かは判らないが、この井戸において共伴した時期は久住ⅡC期と思われる。**10**は如意形口縁の甕。口縁部は小さく外湾し、その端部は断面方形となり、下端に細かな刻み目を入れる。内外面ともハケ目、口縁下は横ナデを加えている。

石製品　**11**は流紋岩質凝灰岩の石材を用いた砥石。方柱状で両端が折れている。4面が研ぎ面として使用されており、よく使い込まれて各面ともへこんでいる。

木製品　**12**は木錘の再加工品と考えたが、通常よりやや小さい。図右端の断面形は楕円形。全面が細かな削りで加工されている。コモ編みの木錘と断定することはできない。この他に折り重なった状態で出土した木材には、板材や角材があるが、用途を明らかにできるような特別な加工がないことから図示しなかった。廃材を投棄したように雑然とし、上部の遺物は祭祀行為とは考えにくい。

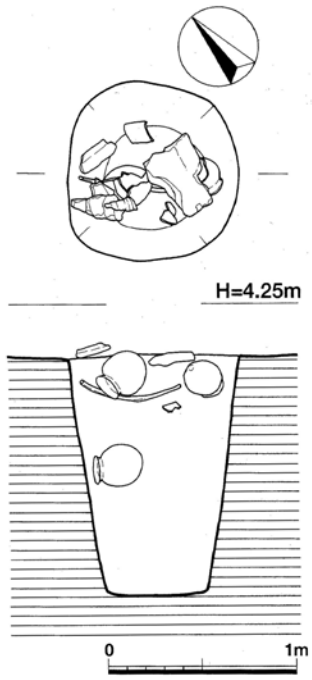


Fig.46　SE02実測図（縮尺1/40）

Fig.47　SE02上部

第2号井戸SE02　SE01の南約3m離れて検出した。グリッドはP-24に当たる。上面は91cm×95cmで正円に近い平面プランである。やや斜めに深さ126cmまで掘り込んでおり、底面の標高は約4mを測る。底面は砂層に達し、SE01と同様であるが、遺物の出土状況が異なっている。SE01の主立った土器が底面近くに沈んだような状況で出土したのに対し、SE02ではほとんどの遺物が上面に集中している。図示した3個の土師器甕のうち1個が上面より50cmの途中で出土し、残りの2個は上面で木材片の間から出土した。SE01では、井戸使用中か廃棄時の祭祀行為を想定したが、SE02の遺物出土状況からすると、ある程度埋まった後に行われたことになる。

出土遺物　3個の土師器甕と木製品1点を図示した。写真のように螺旋状の木根があり、祭祀行為と

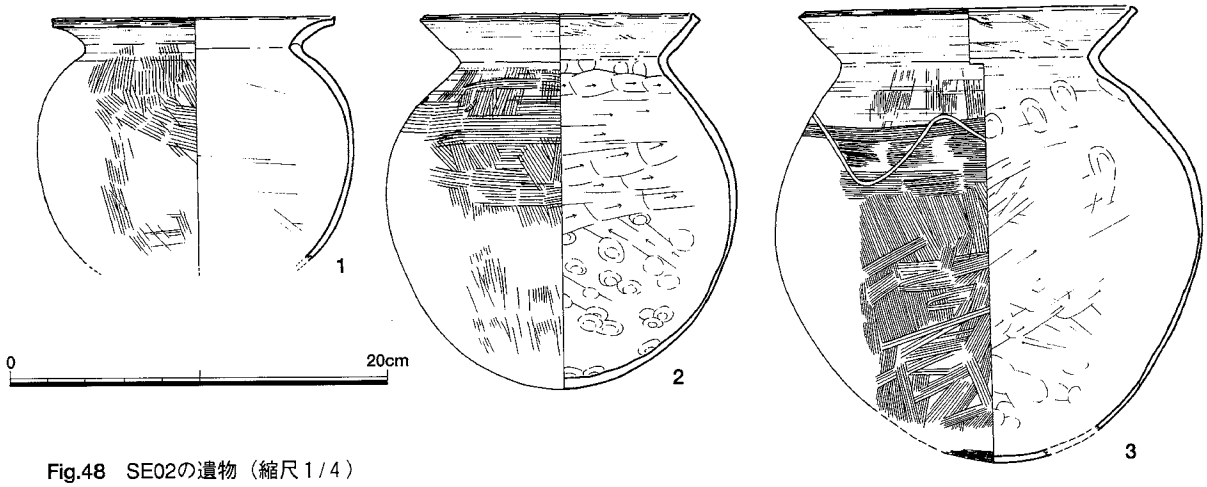
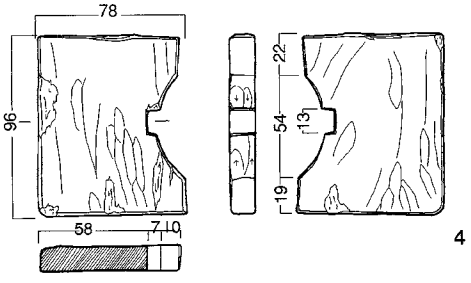


Fig.48 SE02の遺物（縮尺1/4）



何か関係がありそうな気がしたが、不確定なために図化しなかった。

土　器　SE02も同じく甕から成る。**1**は伝統的Ｖ様式系（Ｂ系）甕であるが、その割にはＤ系甕のように頸部～口縁部に回転的横ナデ調整が施され、タタキ痕が無く、内面は接合痕が無くなるほど丁寧な工具ナデで丁寧な作りである。**2**、**3**はＤ系甕でともに胴の球形化が進んでいる。両方ともタタキ痕は見られないが、**3**は球形の胴に対して底部に微妙な小さな面もみられる。また２個体とも肩部はナデ肩状、口縁部は微妙な凹凸はあるが直線的で、端部は沈線があるが面取り、という形態であり、SE01出土土器と同様に比恵・那珂集落との関係を示すのだろうか。SE01・SE02のどの甕も外面全体に（特に胴部下半に）きれいに煤が付着している。埋没時期はSE01同様久住ⅡＣ期か。

木製品　4は針葉樹の柾目材。板材を方形に作り、その１辺を加工して完成させている。まず円形に切り込み、その中央をさらに小さな方形に刳りぬいている。表面には削り加工痕が明瞭に残る。腰掛けの脚だろう。

４．土器溜（SJ）

第１号土器溜SJ01　第Ⅰ面の水田耕作土を掘り下げる段階で、グリッド25列南側に土師器片が異様に出てくる場所があり慎重に検出作業をしたところ、南北はグリッド22～24の約22m、東西はグリッドＮ～Ｒまでの約20mの範囲に大量の土師器が集中していることが分かった。土師器のほとんどは破片になっているものの、破片の間に完形の小型土器も見られ、なかにはその場で潰れた状態のものもあり、少なくとも流れて移動してきた状態ではなかった。また折り重なっているものの長期間にわたって堆積したとは思えなかった。

このような土器群は、東地点と呼んだ第７次調査１号溝状遺構、第９次調査Ⅱ区１面でも見つかっている。東地点ではこれらの土器群が集落の縁に沿ってあたかも取り囲んでいる様子が伺われたことから、東地点は第10、12、13次調査区とは別の独立した微高地であったと思われた。とすると今回検出の土器群は東地点に対峙する西側斜面に当たる可能性が強くなった。

土器溜はR23グリッド西側当たりで希薄となるものの、その東端はやや北に湾曲しながら北東方向に延びていることが予想された。２年後に発掘調査した第13次調査区はその延長部に当たるが、

Fig.49　SJ01実測作業（北東から）

先の予想通りに土器溜が現れた。果たして連続している遺構としていいのか確かめようがないが、直線で約28mを測る。また東地点の土器溜とは約40mの距離があり、この間に遺構が存在しないのかも未確認であるが、両地点を分けるような窪地があり、相対する斜面に土器溜が形成されていた

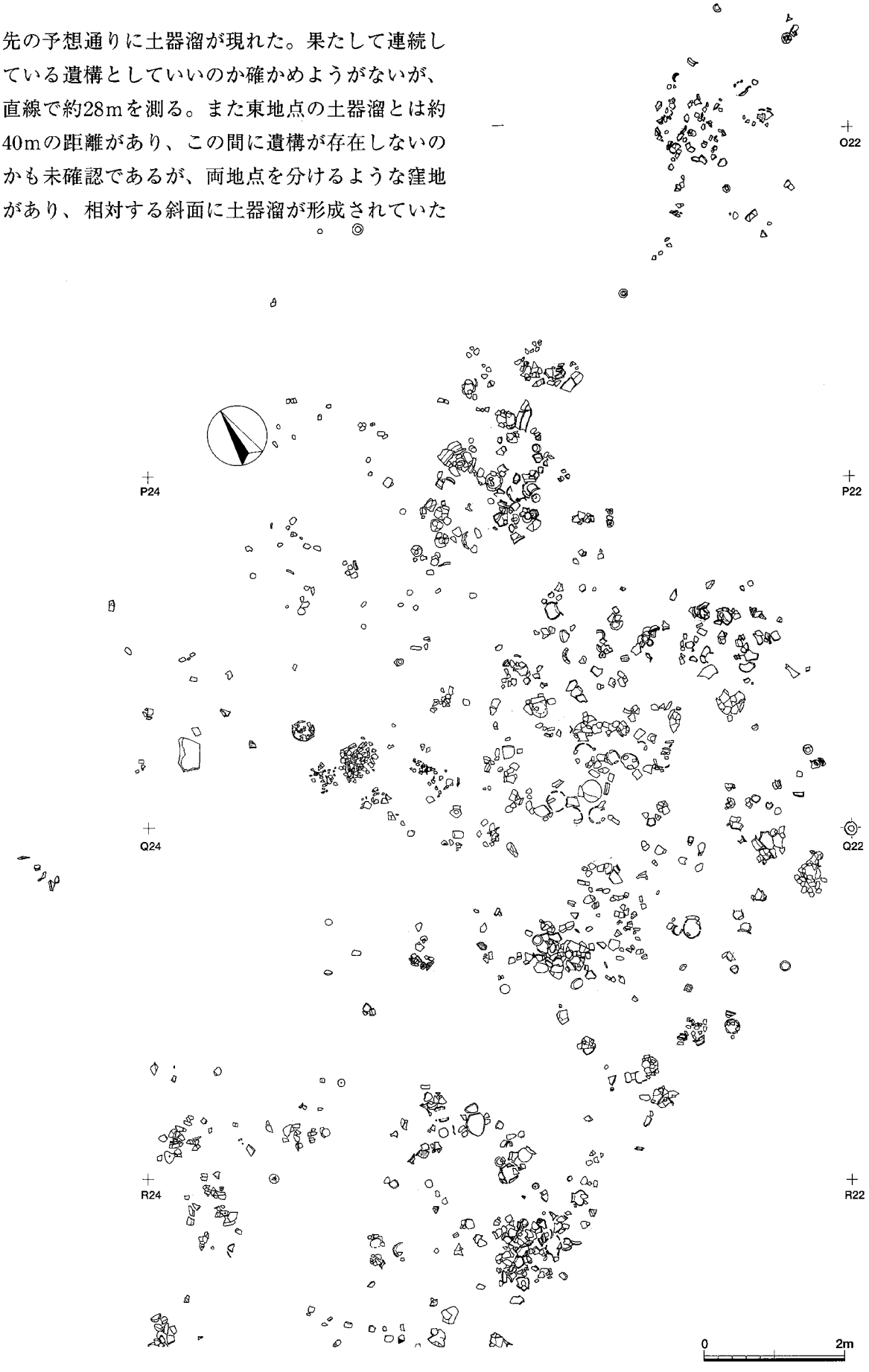


Fig.50　SJ01上層実測図（縮尺1/80）

可能性が強くなった。

確かに第13次調査区の土器溜では、東側に接して自然流路があり、その岸に沿って土器溜が形成されていた。第10次調査区では、そのような流れや窪地、あるいは掘り込みなどの存在を示すもの

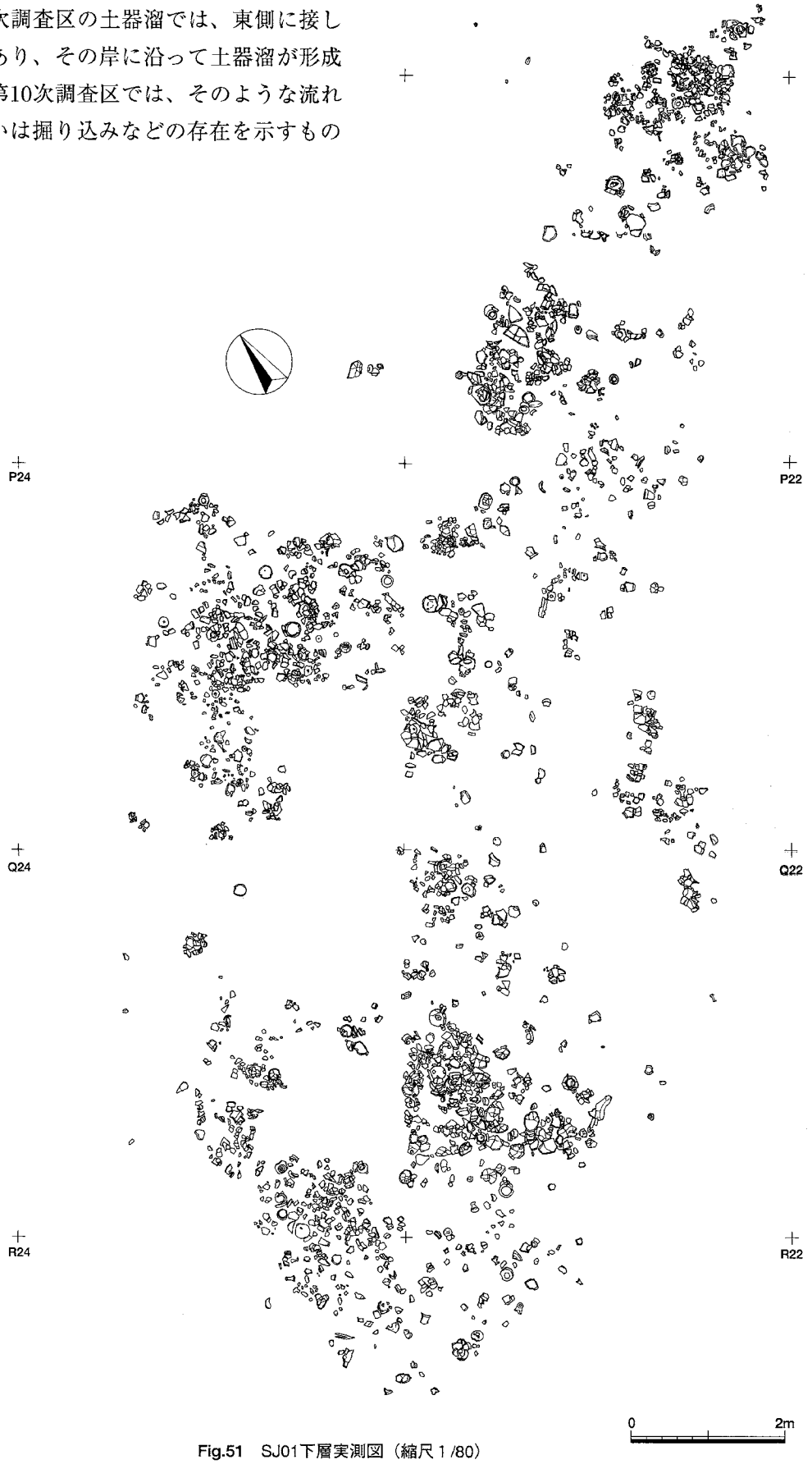


Fig.51 SJ01下層実測図（縮尺1/80）

Fig.52 SJ01上層（南西から）

Fig.53 SJ01上層（北東から）

はなく、土器溜の出土レベルからすると平坦な場所にいくつかのまとまりを持って拡がっている状況である。

ところでこの土器溜にどのような遺構名を付けるのか悩んだ。「土器溜まり」、「土器溜め」、あるいは「祭祀土器群」などの用語を考えたが、自然作用なのか、人為的なものか、人為的とすればどのような意図、目的なのか。不用要品としての土器の廃棄場所なのか。しかし廃棄、投棄は、ある行為の最終の姿であることも考えられ、土器溜としての結果は、その前の行為や目的を示してくれるものではない。無造作に捨てられている土器も、祭りや祈りに使われたかもしれない。逆に整然と並んだ土器が、ただのゴミである場合もありえる。もちろん特定の土器が選ばれ、また非日常的な土器で構成されていたり、土器に穿孔や打ち欠きなどの二次的な加工が施されていたり、さらにある一定の行為を推測させるような出土状況であれば、意図や目的を明らかにできるであろう。

このような注意をしながら発掘作業を進め、また出土遺物の種類、器種の偏り、土器の割れ方などさまざまな視点から整理作業を行ったが、残念ながら断定できる結果を得ることができなかった。ここでは「土器溜」という遺構名、およびSJという遺構略号を付けることにした。本書では別に土器群の遺構名も用いているが、面積的に狭く、小さくまとまって出土する場合は土器群SGとした。次にSJ01土器溜の出土遺物について記述する。

出土遺物　SJ01が200㎡を超す広い面積であることから、遺物の出土量はきわめて多い。パンコンテナ（38×57cm、深さ10cm）に195箱という膨大さである。土器溜まりの原因を解明しようと現地ではその出土状況を1/20縮尺で実測し、高さを測りながら番号を付けて取り上げたが、さらに下部から新たな土器が面的に現れてきたことから再度平面図を作成した。これをSJ01土器溜下層とし、最初に遺物を取り上げた面を上層として区別するようにした。

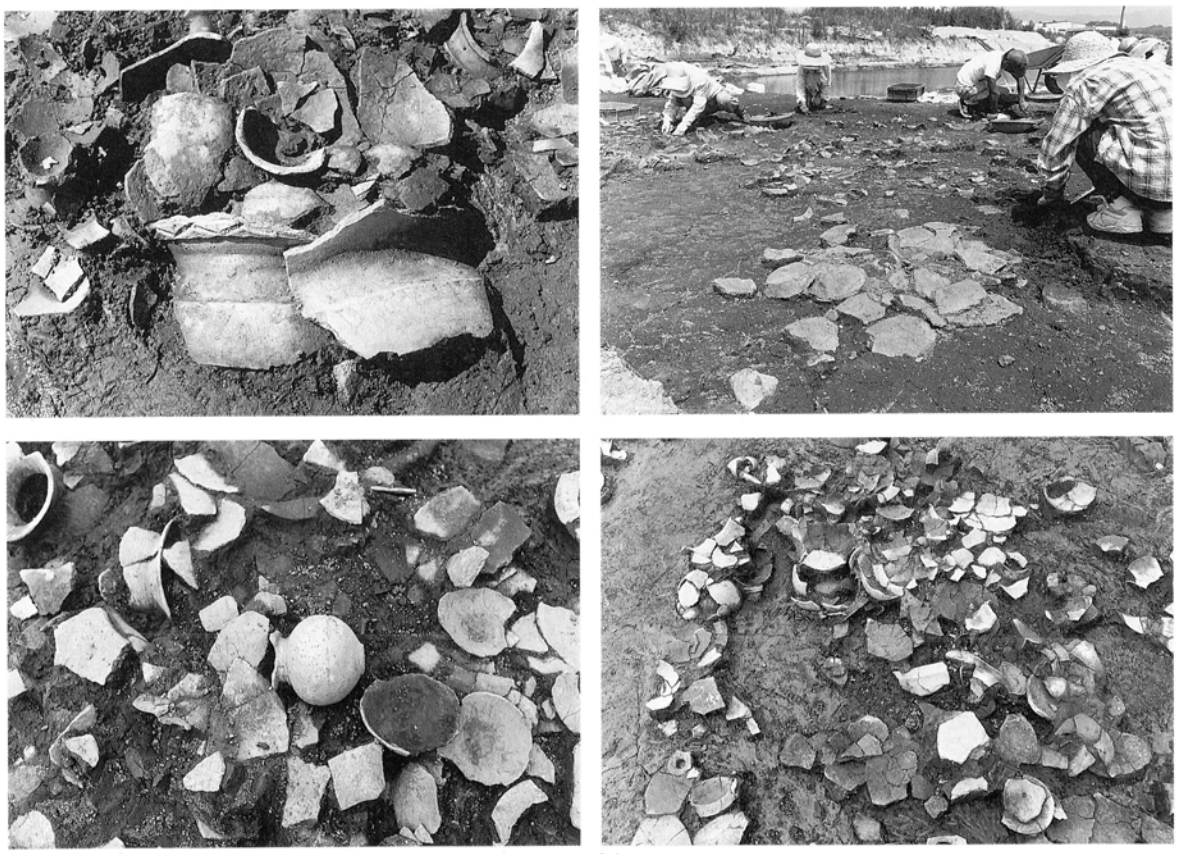


Fig.54　SJ01

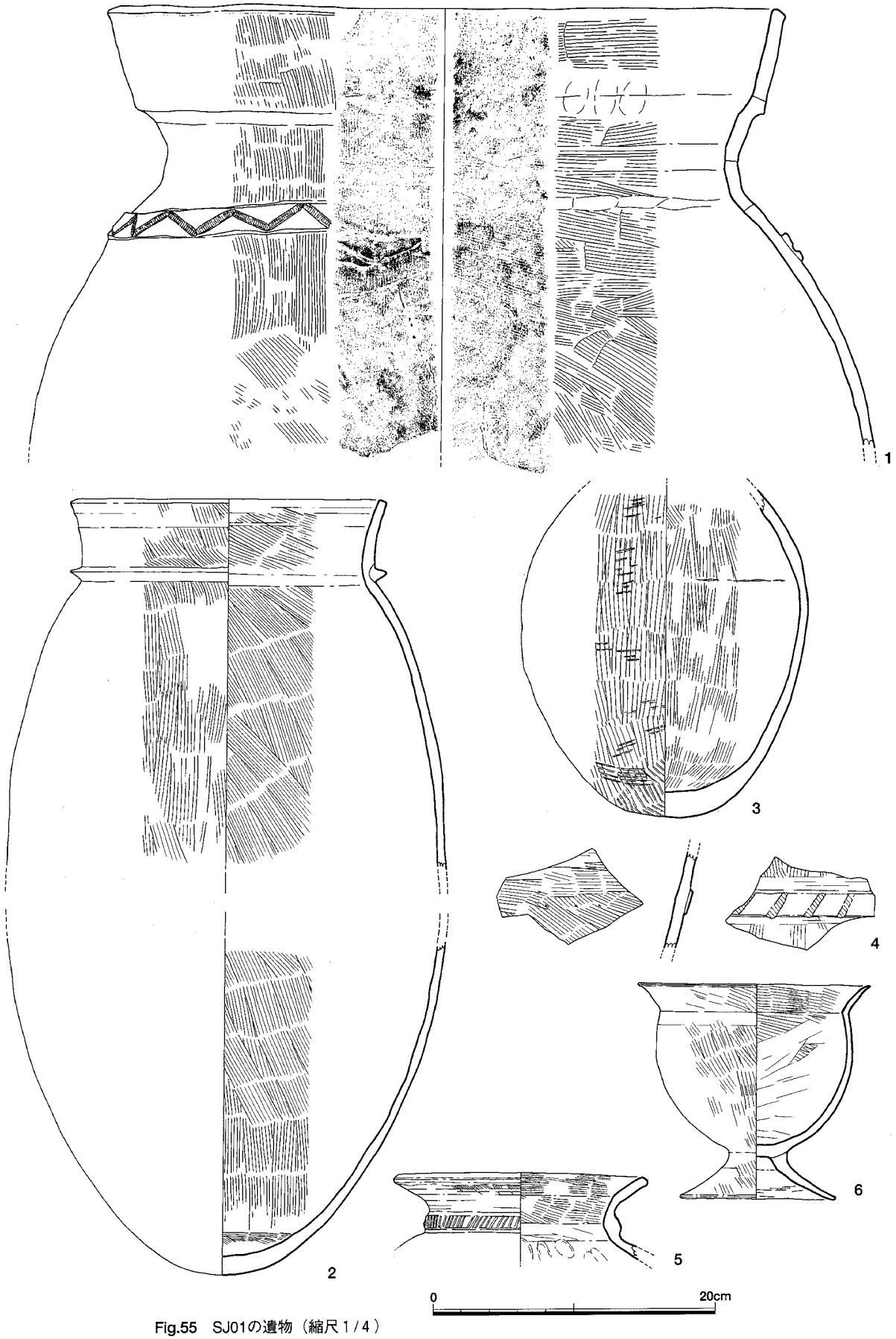


Fig.55 SJ01の遺物（縮尺 1 / 4 ）

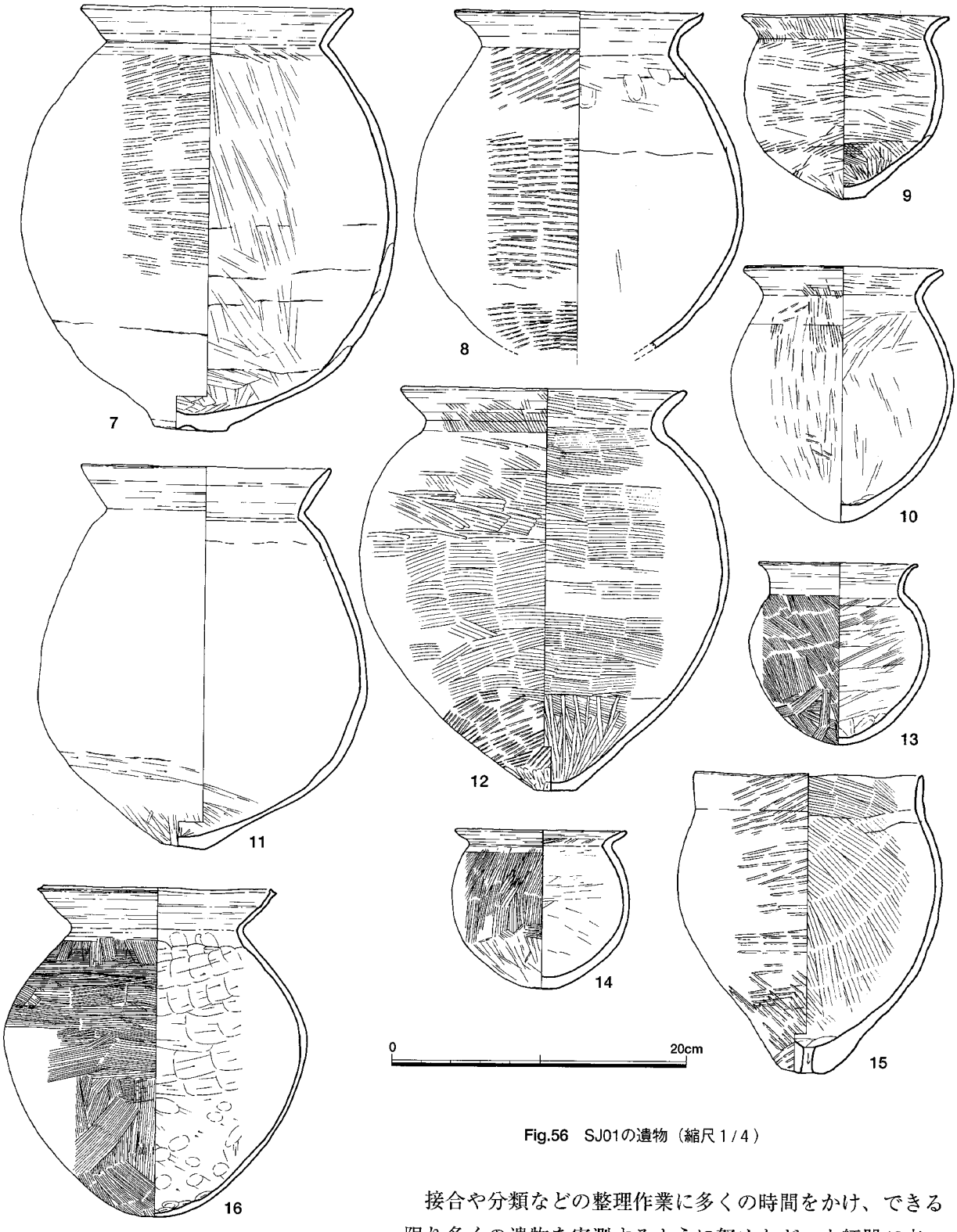


Fig.56 SJ01の遺物（縮尺1/4）

接合や分類などの整理作業に多くの時間をかけ、できる限り多くの遺物を実測するように努めたが、土師器42点、石製品9点、土製紡錘車1点、鉄斧1点の計53点を図示したにすぎない。出土総量からするとあまりにも少なく、SJ01の時期だけはある程度示せるものの、土器溜まりの意味を解明するに足りる点数でないことを大いに反省している。

19

12

23

21

18

7

Fig.57 SJ01の遺物

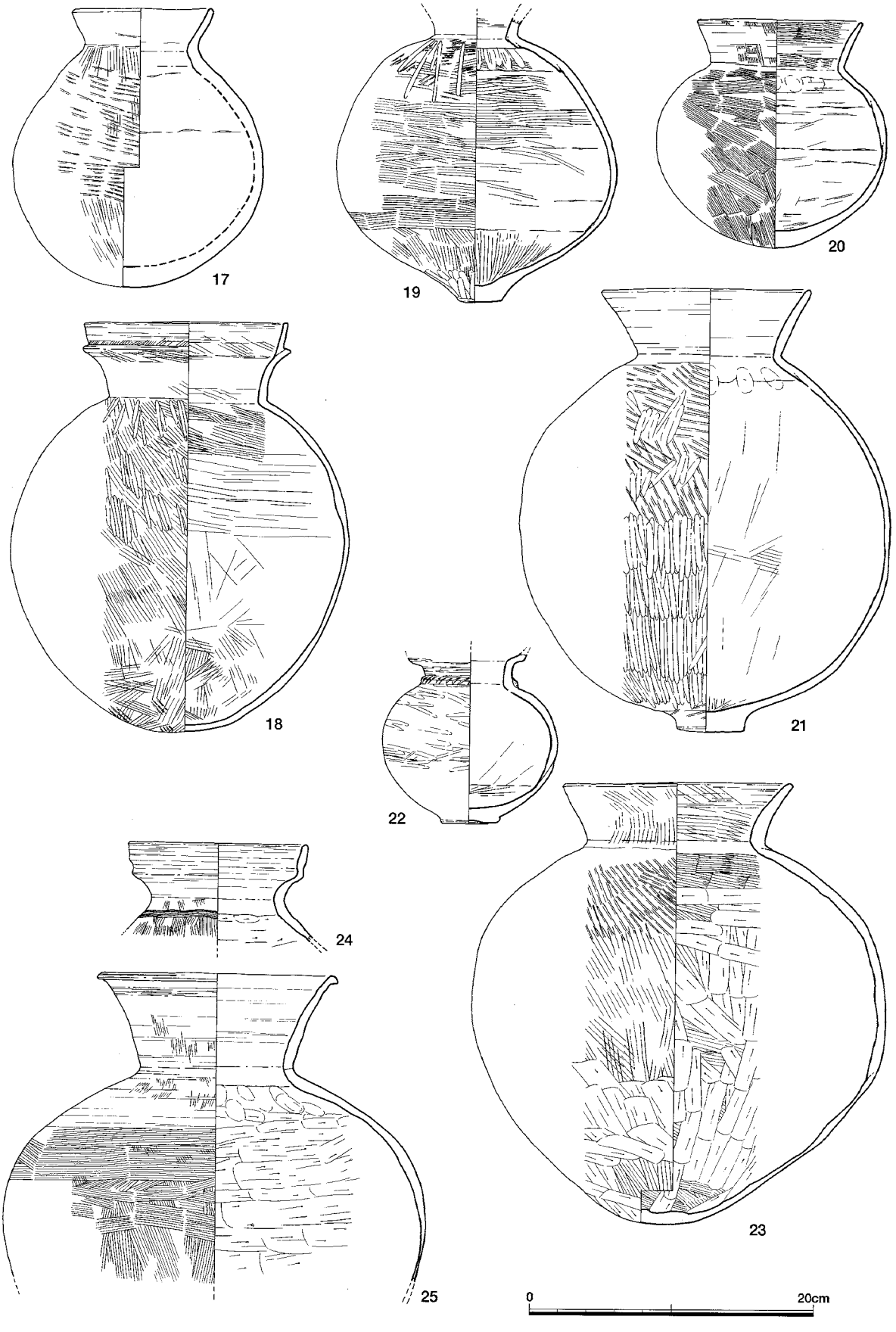


Fig.58 SJ01の遺物（縮尺 1 / 4 ）

土　器　出土土器は、ここまでに紹介した例でも判るように多種多様な古式土師器が出土している。ここで筑前地域で見られる器種の分類、そしてそこから導き出された編年観について示しておく。この庄内式・布留式併行期について、当地域では現時点で、久住1999編年（出典はSE01で述）がそれまでの研究を総合的にまとめ、最も大系的に整理したものといえ、以下これに拠って述べていくが、この久住編年の特徴は、いくつかの属性を組み合わせた型式分類や、系統や跛行性の考慮、といった点にある。

この時期の北部九州には、在来系（A系）、伝統的V様式変容系（B系）、庄内式系（C系）、布留式系（D系）がある。結果的には「布留式系」が他を駆逐する形になるが、その過程は複雑で土器群の様相には著しい跛行性があり、集落間や集落内でも同時期に跛行性が存在するので、それぞれの系統ごとに各器種の型式組列と組み合わせを検討する必要がある。そこで、以下の解説の前提となる、（土器の製作技術伝統としての）各「系統」の内容だけは簡単にまとめておく。

「A系技法」は代表的器種の甕でいうと、底部は元々一枚の平板粘土からタタキ、削り、掻き取り、ハケ目により丸底化し、胴部のタタキは水平か左上がりで粗いものが多く、口縁部は多くが端部に面取りし、仕上げ横ナデは無いあるいは顕著でない、器壁の厚さも相対的に厚いものが多い、というもので、甕以外の器種の製作技法も上記に準じる。A系技法はこのように全体的な印象として粗雑な作りで、同時期同集落内の住居址間で土器の「形態・法量・癖」に個性が多く見られる（特に中小集落）。

「B系技法」は、甕の底部は輪台充填技法でタタキの駆使とハケ・ナデで丸底化、底部内面は規則的なすだれ状ハケ・板ナデ、胴部内面も規則的な左やや上のハケ目、胴部外面は畿内V様式甕のように多くは粗い右上がりタタキ、口縁部は外反形に非回転的な丁寧な横ナデ、端部は丸くおさめる・すぼめて終わるものが多い、というもので、B系も他の器種の製作技法は甕に準じる。B系技法も相対的に厚いが、調整はA系よりも規則的で、胴部内面などに接合痕の残る例がよく見られる。またA系土器同様に同時期同集落内の住居址間で形態・法量・癖に個性が多く見られる。

「C系技法」は、内面削りによる薄い器壁とタタキによる球胴傾向・尖底化の庄内甕を代表とし、左上がりタタキが主体（大和甕系）で、口縁部に非回転的だが丁寧な横ナデが巡るものが多い、などC系技法は他の器種も含めB系と共通する特徴が多いが微妙に異なり（例えば高坏や小型器台の接合が脚頂部凸面の付加法、次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究40-2』など）、相対的に器壁が薄く、多くは精良な胎土で、作りが丁寧である。

「D系技法」は、出現の背景は不明である甕（北部九州型布留式甕）や壷、高坏に見られる。回転的な横方向の調整（肩部横ハケ、口縁部横ナデ）や丸底・球胴化の技法が特徴で、久住1999曰く、

28

30

32

Fig.59　SJ01の遺物

C系甕の製作技法や形態を基盤に、山陰系甕の製作技術の影響を受けて成立したもの、である。高坏もC系に対し器形が丸みをもち、脚柱状部もエンタシス状にふくらんでいる。また、山陰系土器の製作技術として前述した特徴以外にも、久住Ⅱ期以降の高坏や小型器台の脚頂部内面に観察される軸芯痕などもその影響とする説がある。C・D系技法はA・B系のような土器の「形態・法量・癖」にみえる個性は希薄ではあるが、それでも例えば甕・壷の口縁部形態のヴァリエーションは多いなどの特徴があり、これらから一系的な編年は困難である。また家内生産的な周辺集落では一個体で時期比定するのも困難である。

以上が久住氏が製作技術にみられるとした「系統」の内容を簡単にまとめたものである。雀居遺跡では良好な古式土師器資料は主に土器溜まりや井戸、土壙から出土している。ところでこれらの技法のうち、D系の甕の形態的特徴は、今までの諸研究で明らかなように、比恵・那珂、博多、西新町・藤崎といった大集落ごとにタイプ分けできることなどが言える（SE01に先述）。さらに製作技術をみると、前のSE01で紹介したが大きく分けて2種類の調整方法がみられたため、そこから先ず次のような成形技法を考えてみた。外面下半の縦ハケ調整が浅くかすれており、丁度その調整範囲に対応するように内面指オサエ技法が施されているものを「胴下半外型作り成形技法」(1)、外面調整全体の調整痕が明瞭でタタキ痕も全面にみられるものを「平底押出し作りタタキ成形技法」(2)である。10次SE01資料（2～4、7～9）を例に上げると、仮に平底押出しタタキ成形技法だったとして、なぜ乾燥時のハケ調整（当然軽いナデ状になってしまう）でタタキ成形時の痕跡が消えてしまうのか、また条痕のないタタキ板による成形だったとして、なぜ胴外面上半部ではタタキ痕がみられるものがあるのか、と。しかし久住氏も述べるようにD系甕の胴部形態は「小平底→尖底→丸底→下膨れ胴」と変化する傾向にあり、仮に型作りだとしたらその段階にあたる丸底以降の形態は一定ではないか、また実測していて胴下半形態が全く同じというものがあるのか、という疑問が残る。さらに岡山県教委の宇垣匡雅氏が『百間川原尾島遺跡3－岡山県埋文発掘調査報告88－』（1994）の報告の中で吉備甕について、内面ケズリの後に胴内面下半に密集して円形圧痕を施していること、この円形圧痕には指頭圧痕とみるには小さすぎるものが多く、爪痕もなく、圧痕内に木目が残るものがある、器厚も胴下半に密集する円形圧痕に応じるように底に向かって薄くなるものが多いこと、などの特徴から型作り説を否定して、むしろ大まかな成形ののちに押出しによって胴部下半の成形を行なった、と主張している。確かに内面ケズリの後に指頭圧痕というのはおかしい。この(1)の型作りにあたると考えたD系甕はこの雀居遺跡でもこのSE01・02のものくらいで少ない。成形技法の変異型とも考えられ、もっと総合的に考えなければならない。C系甕は平底に近い小さなレンズ底から押出し技法による丸底へと変化する底部成形技法だが、この直接的系譜上のものであろう底部押し出し作り技法がD系甕の成形法と考えられるのではないか。

久住氏の編年は、在来系から外来系主体へと置換変容していく過程の当該期全体を、外来系も含めた＜様式＞としての「西新町式」として捉え、大きく2期に分けている。Ⅰ期は在来系主体で、点的に伝統的第Ⅴ様式や庄内式が伝播・受容される時期である。Ⅱ期は庄内式系土器群から北部九州型ともいうべき布留式類似土器群が成立し、他系統の土器群と共存しながら最終的にはそれが席捲していく時期である。この背景には、Ⅱ期になって地域を超えての本格的な汎列島的関係の存在することが考えられる。成形技法でみれば、平底押出し作りタタキ成形技法が席捲する、ということになる。ただし他の成形技法が存在してもこの時代状況からすれば不思議ではない。他の器種も同様である。

これらを考慮しながら、この10次土器溜まり遺構の古式土師器の在り方をみていく。この土器溜まり遺構は2面に分けられる。これらの土器は発掘時において、土器群が層的に2層に重なっている

と判断したうえで分別したものであり、このような土器溜まりという遺構の性格上、これらの土器は型式組列の新旧判断の根拠とすることは難しい。実際、土器溜まりⅡ面（下面）に新しい傾向を示す形態のものが、あるいは第Ⅰ面（上面）に古い傾向を示す形態のものが若干見受けられる。しかし総体的に観察すると、2層間の土器群の在り方に違いがみられる。2面間の土器を見比べて、その特徴をいくつか挙げてみよう。

1．技術系統で言うと、土器溜まりⅡ面（下面）の土器は多くがB系統、次いでA系統であるが、第Ⅰ面（上面）でもC・D系統や山陰系が存在するが、B系土器は依然として主体的な存在である。しかし、それらB系土器の形態をみると、例えば底部は、第Ⅱ面では厚く突出する明確な平底を呈しており、一方第Ⅰ面では尖底や丸底といったものが多いというように時期差が指摘できる。下面から弥生後期後半～久住ⅠB期のものが、上面からは（ⅠB期～）ⅡA期～ⅡB期に当たるものが出土。

2．下面はB系土器が多いが、それらはヴァラエティーに富む、個性的な形態のものが多いというか、言い方を変えれば、形態が整っておらず、崩れており、バラバラのものが多い傾向にある。上面もA・B・C・D・山陰系があるが、こちらは全体的に形態が整っている。

これらの特徴を12・13次土器溜まりの土器群と比較すると、結論を先に述べるが、時期差や傾向差、位置関係から同一の遺構である可能性は低い。この10次土器溜まり土器群の在り方を含めた他地点の土器溜まりとの関係については13次土器溜まりで後述する。

ここまでに述べたことも踏まえ、出土土器の中で特筆すべき特徴をもつものを紹介しておく。**2**は技法はA系だが、径1～2㎜の軽石のような粗砂を最も多く含む胎土であることなどから福岡平野外からの搬入品と思われる。**3**はタタキ痕のあるA系甕だが、外面調整の工具が共通と思われる。**9**は典型的なB系小型甕で、胎土にアスファルトみたいな黒色砂礫（8㎜の塊もある）が若干みられ、搬入品か。**11**はB系甕で、内外面ともケズリ・タタキ・接合痕も確認できないほど丁寧なナデだが、内外面の底部や胴下半におそらく稲藁の茎のようなもので強く掻き取りナデた痕跡がある（ここでは「カキナデ」と呼ぶ）。**12**は典型的なB系甕だが、外面のタタキ・ハケ目の工具はおそらく同じで、内面底部の放射状ナデと外面上半の不規則なナデは稲藁の茎のようなものでナデている。**16**の甕は、外面はストロークの短い不定方向ハケ目の後に胴部上半に長めの横方向ハケ目を施し（上半にタタキ痕があり、肩部施文はない）、内面はケズリの後に下半に指頭圧痕、丁寧に薄く作られたD系甕である。口縁上半が若干内湾し、肩部が張らず直線的な特徴から比恵・那珂、博多遺跡的な甕と言える。**17**はA系？壷で、器厚が5～10㎜以上と厚く、内外面に円形黒斑がみられる。**22**はB系小型二重口縁壷だが、上げ底でミガキ仕上げの後に刻目突帯が貼り付けられる。**23**はB系壷だが、胴部内面の仕上げに雑なケズリを施しており、C系の影響を受けた新しい傾向がみられる。また、外面のタタキ・ハケ目の工具はおそらく同じだろう。**24・25**は口縁部～肩部の回転横ハケ目・横ナデ、波状ハケ目などから山陰地方系とも考えられ、**25**は胎土から搬入品の可能性もある。**26**は角閃石とガラスが多いという胎土から搬入品と思われる。**27・28**はC系小型丸底壷だが、この器種については重藤編年[註1]がある。**27**は氏分類の鉢1式、**28**は壷2式で、ともに西新町3式後半（久住ⅡA～ⅡB期相当）。**31**は坏部と脚部を凸面付加接続しているD系高坏だが、脚頂部に新旧二つの軸芯痕がある。**32**のD傾向のC系高坏にも軸芯痕があり、二つは山陰の影響だろうか。**34・35**は**33**と同じB系小型器台だが、畿内系（精製器種B群）の形態的影響を受けたもの（B(D)系小型器台）である。ただ技法はB系で、受部から脚部への成形も同じく充填法によるものであり、軸芯痕に見えるのは充填後の成形痕跡である。**36**はB系脚付椀だが、脚内面以外は赤色顔料を塗っている。

註1　重藤輝行「第5章　考察」『西新町遺跡3』福岡県文化財調査報告書第157集　2001

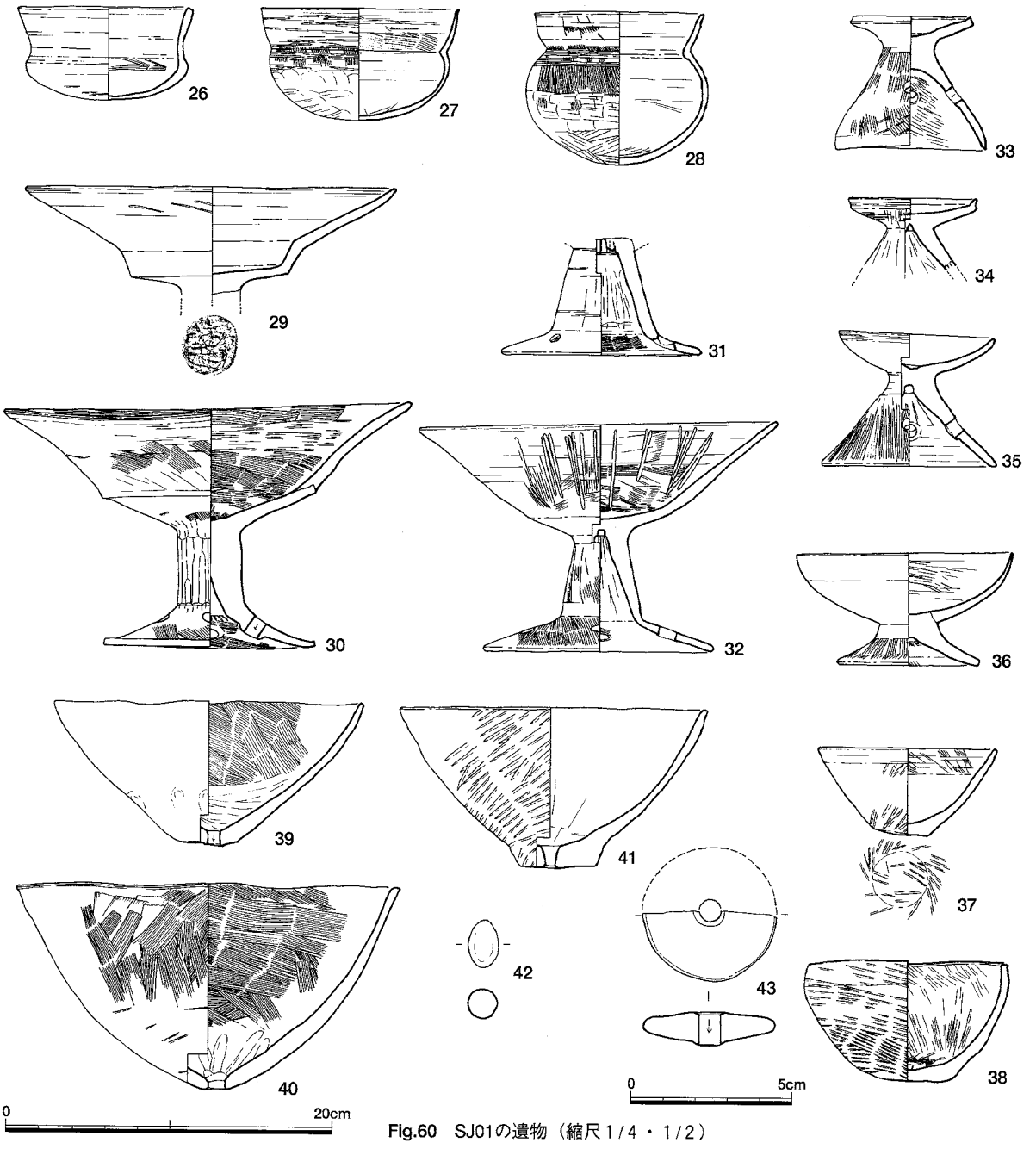


Fig.60 SJ01の遺物（縮尺1/4・1/2）

37、**38**は小型鉢。**37**は右上がり、**38**は左上がりの太筋の螺旋タタキ成形。内面も両方とも螺旋状の工具ナデであるようにB系の成形・整形技法が見られる。底部も小平底や丸底ぎみの平底でB系的であることからB系器種と判断した。

土製品 **42**は投弾。長さ2.24cmで一端がやや尖り気味の楕円形。中央部の断面は1.75cm×1.79cmで正円に近い。表面はやや摩耗し、調整痕不明。**43**は土製の紡錘車。中央部が厚く、周縁に向かって薄くなる。直径4.1cm。

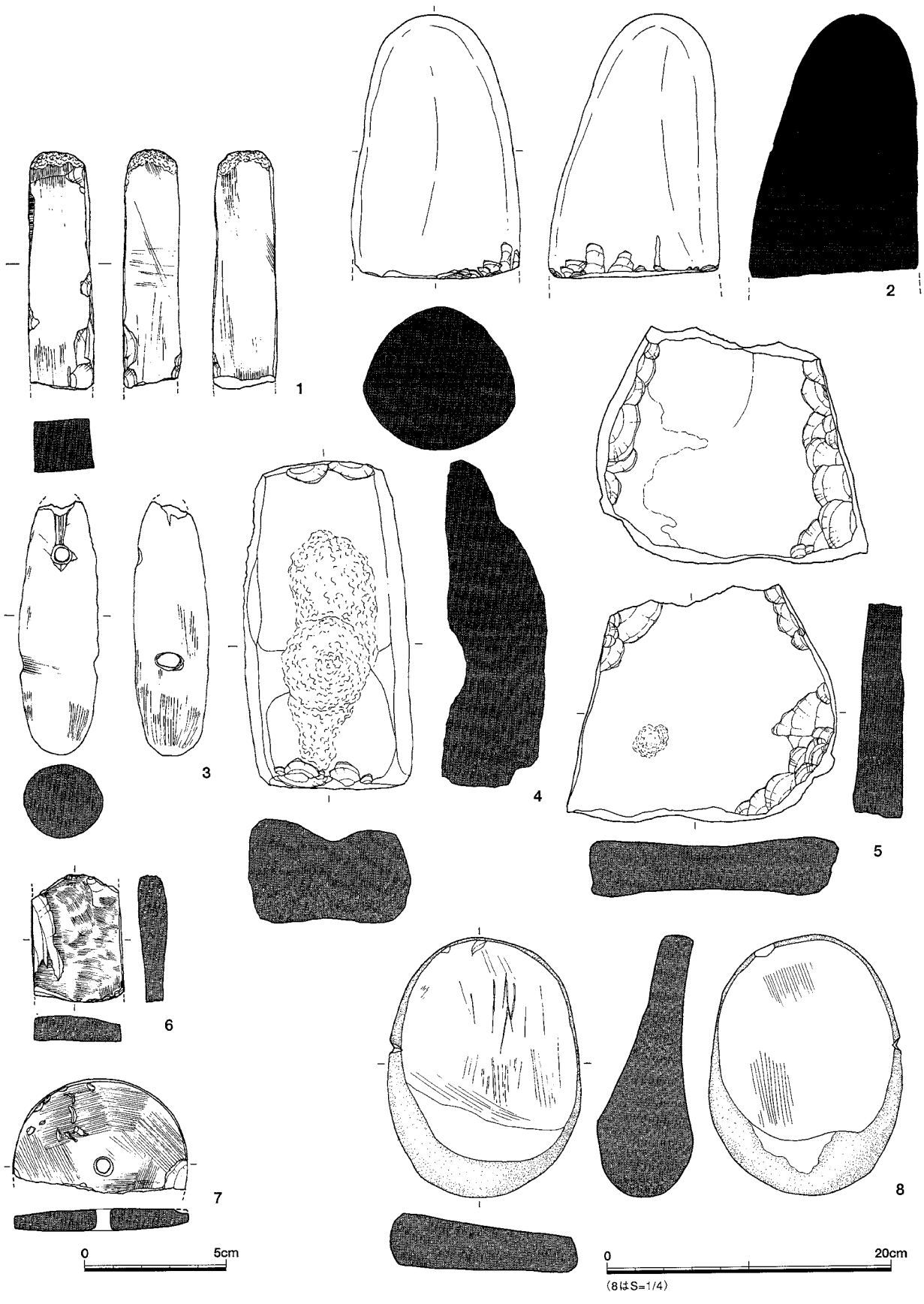


Fig.61 SJ01の遺物（縮尺1/4・1/2）

石製品　大量の土器に混じって各種の石製品が出土した。数量は少ないが砥石、片刃石斧、石皿、石錘、紡錘車、十字型把頭飾がある。土器のほとんどが古墳時代の土師器であったのに対し、石製品には片刃石斧や十字型把頭飾のように明らかに弥生時代の遺物が含まれている。

1は泥岩質の砥石。方柱形で長さ9.5cm、断面は四角形で2.25cm×1.80cmである。一端は折れ、頭部

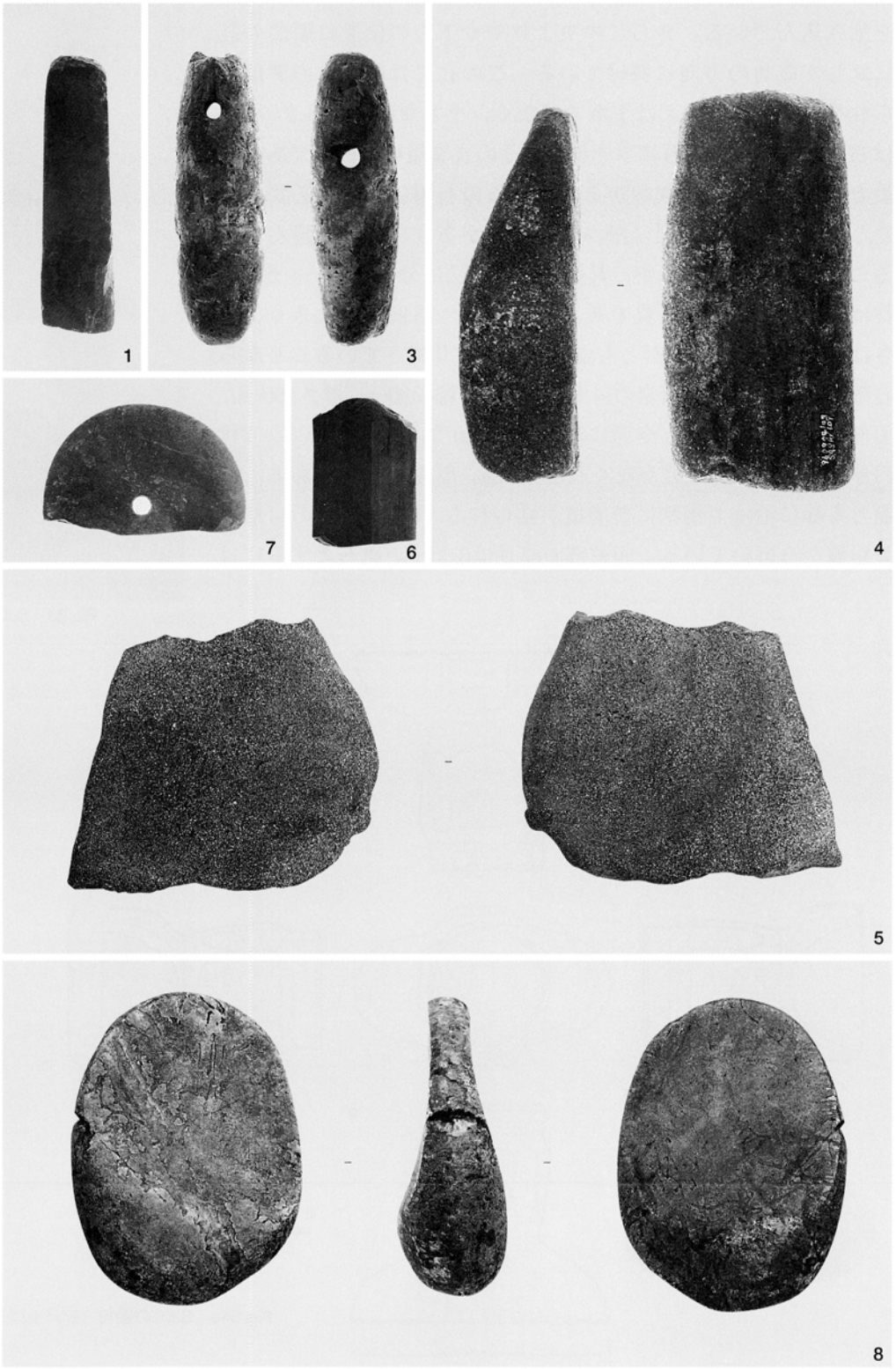


Fig.62　SJ01の遺物

は自然面のままで丸みがある。４面とも研ぎ面として使用されており、石質から中研ぎ用であろう。**2**は凝灰岩質の石材の擂り石。下半分が欠損しているが、全面が滑らかで、石の微妙な形状もちょうど握りやすいことから擂り石とした。**3**は漁労具の石錘。滑石を長めの楕円形に加工し、一端に小孔を穿ち、紐かけの溝を刻み込んでいる。さらに中央よりやや下方の位置に頭部の孔に対して直角の方向に開けている。この孔には紐かけの溝は見られない。表面の加工は丁寧ではなく、小さな凹凸が目立つ。**4**は粗い砂岩質の自然石に手を加えずそのまま用いた凹石である。長方形の両端に打ち欠きがあるが、この石器の機能に必要だったとは思えない。一面に細かな敲打痕があり、凹状に窪んでいることから凹石としたが、具体的な使用法は分からない。**5**の石材はきめの細かな礫岩質である。16.70cm×18.90cmと大きく、厚さは中央で4.10cm。両面ともなめらかにすり減っていることから石皿とした。**6**は珪質頁岩の扁平片刃石斧、幅42.90cm、厚さ1.00cm、刃部を欠いているが、全面に細かな研磨が加えられている。**7**は円形の紡錘車。約半分がなく直径6.10cm、厚みは0.8cmである。両面とも縁に沿って傷状に研磨痕が見られる。**8**は楕円形の自然石を両側から磨いている。図頭部の厚さは6.60cm。砥石とするには

Fig.63　SJ01の遺物

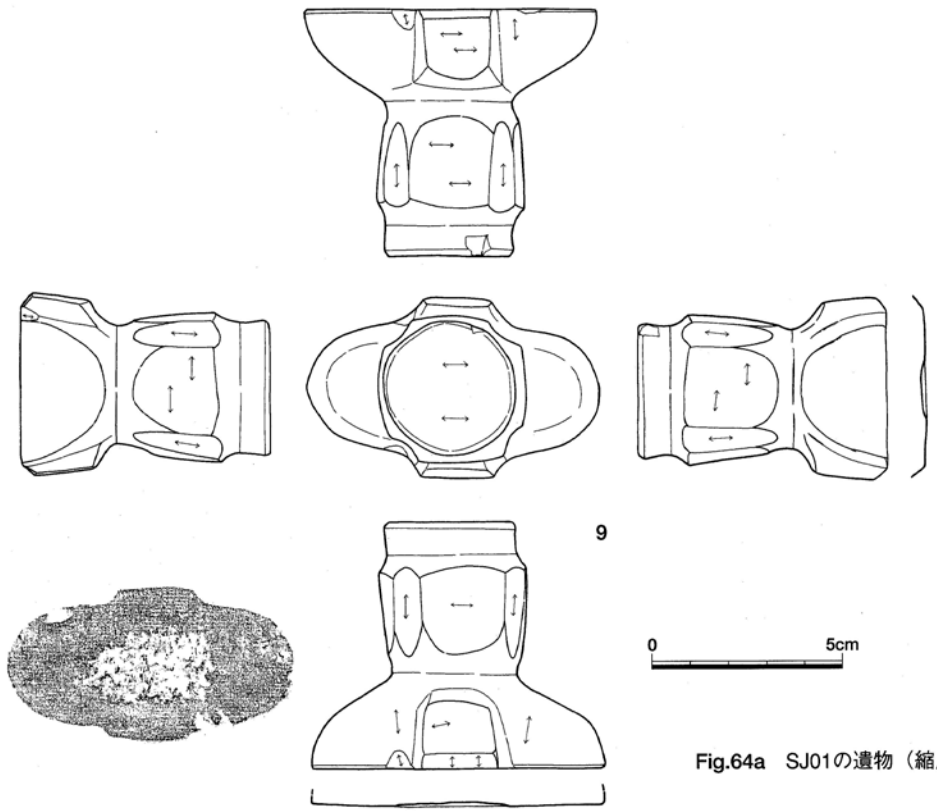


Fig.64a　SJ01の遺物（縮尺１/２）

楕円形の形状が気になる。**9**は土器溜の間から出土した組合せ式短剣の柄端部を飾った十字形把頭飾であるが、装着されていた短剣そのものは出土していない。石材は不明、239ｇあり、重量感がある。枕形の長楕円形の中央左右に方形の突起を付けて十字形となるが、方形突起は数㎜出ているに過ぎない。十字に交差する上に方柱が付き、その四隅を上下に溝状に研磨し、四つの側面を作り出している。この方柱の上面は円形に加工されている。短剣の柄端と接する下面中央部は敲打してわずかに窪んでいる。紐擦れなど短剣把頭との装着方法を推測出来るような痕跡は認められない。全面に丁寧な研磨加工を施しており、かつよく整った姿をしている。十字枕部の長さは7.7㎝、方形突出部の長さは4.8㎝、方柱の高さは6.5㎝である。国内でも把頭飾の出土例はあるが、よく類似しているのは朝鮮半島黄海南道信川、京畿道上読書里、忠清南道秀木里出土例などが知られている。おそらく第13次調査出土の馬鐸と同じように朝鮮半島より伝わり、弥生時代終末から古墳時代初めにかけて祭祀行為の一つとして土器溜の中に入り込んだのだろう。

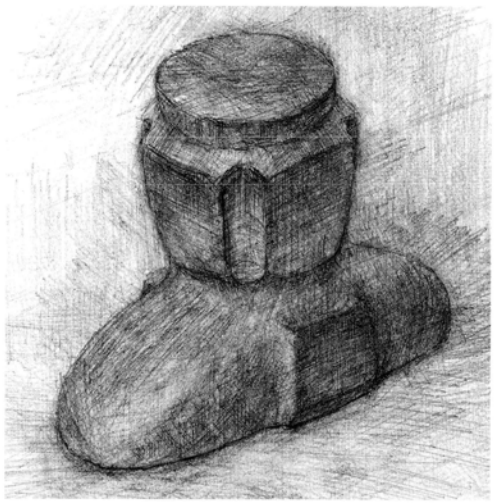


Fig.64b　把頭飾のスケッチ図

Fig.65　SJ01の遺物

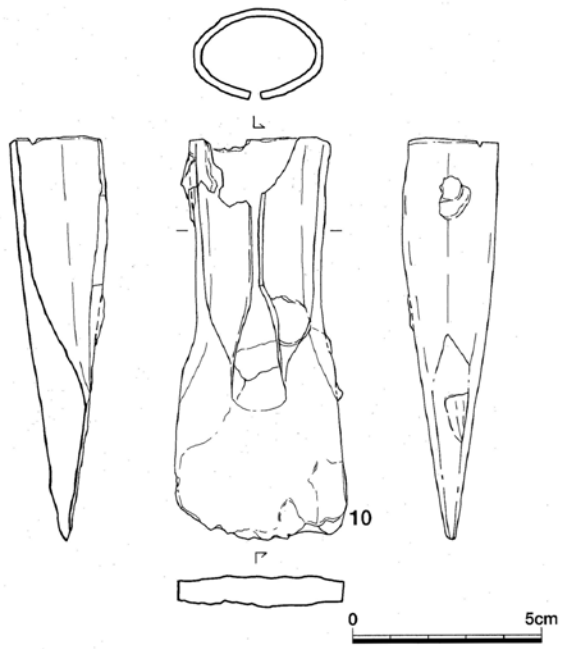


Fig.66　SJ01の遺物（縮尺１/２）

鉄製品　**10**は鉄斧。土器溜の中から出土したもので、特別な遺構からの出土ではない。出土時には全面に錆が進んでいたが、福岡市埋蔵文化財センターで保存科学処理を施した。長さは11.6㎝、図上半は折り返されて柄を入れ込む袋部が作られている。身部はほぼ同じ幅で続き、中央部で幅を広げて刃部となる。刃部は直線ではなく弧状となっている。袋部外形は4.6㎝×2.6㎝の楕円形で、袋部の折り返しは完全に閉じていない。

5．墓（方形周溝、甕棺墓）

第10次調査区では、第Ⅱ面の墓関係遺構として方形周溝と甕棺墓のそれぞれ１基がある、同じような方形周溝は、第５次調査でも見つかり、さらに福岡空港南側の調整池建設地で発掘調査が継続している下月隈Ｃ遺跡第６次調査でも検出され、類例は増加しつつある。しかしながら、いずれも上部が大幅に削平されていることもあって埋葬施設があったのか、あるいはもともとないのか確認されていない。したがって、いわゆる墓としての方形周溝墓とは断定できない。もし墓でなければ、別の目的や機能を提示しなければならないが、これもいま明らかにできる資料と根拠を持たない。そこで方形周溝墓の可能性も残しておく意味から、あえて墓の項に入れて、規模や出土遺物について記述する。

Fig.67は第10次調査区のみの墓関係遺構の配置図である。第13次調査区において甕棺墓４基が固まっている他は拡散して分布し、一か所に集中することはない。また弥生時代終末では甕棺墓であるSN01のようにただ１基のみが存在する。時期的には、弥生時代前期から弥生時代終末まで断続しており、この間墓地としての占有意識がなかったようである。

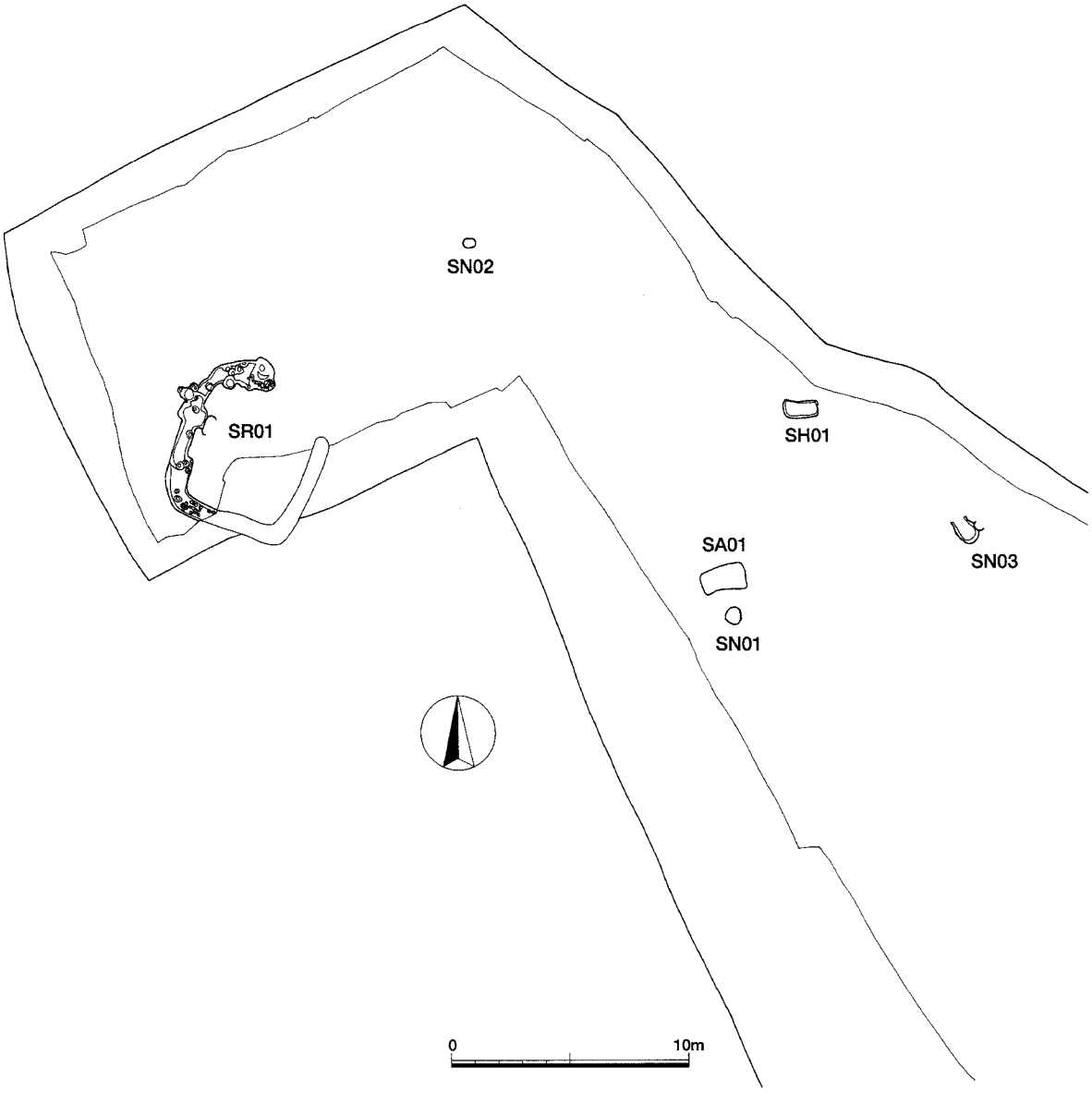


Fig.67　墓の分布図（縮尺１/300）

第１号方形周溝SR01　北拡張区O・R31グリッドで検出した。幅65㎝、断面台形状の溝がコ字形に延びている。この形状であれば、方形周溝の一部と気が付くはずだが、北拡張区の遺構の大部分が弥生時代前期の遺構で、溝自体がピットや土壙の間に辛うじて延びていたことなどから、方形周溝の一部だとは迂闊にも思わなかった。これに接して南側を発掘した翌年の第12次調査で、その延長部が見つかり、互いの遺構実測図を合成して初めて方形周溝であることを確認した。

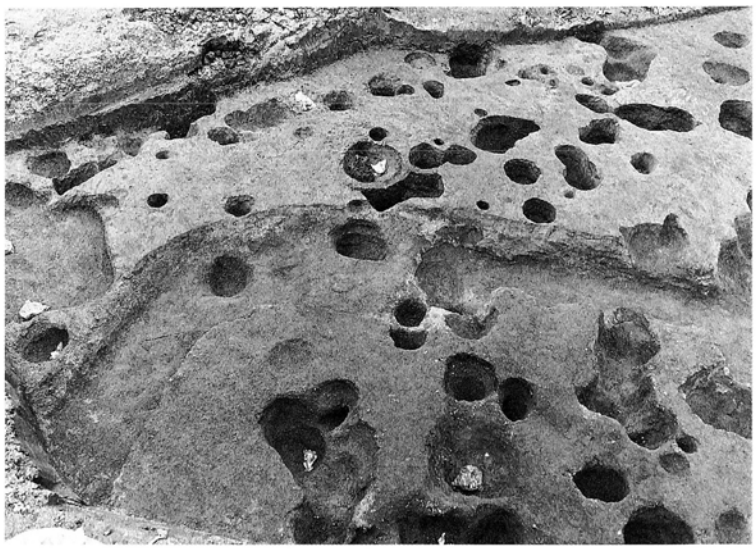


Fig.68　SR01

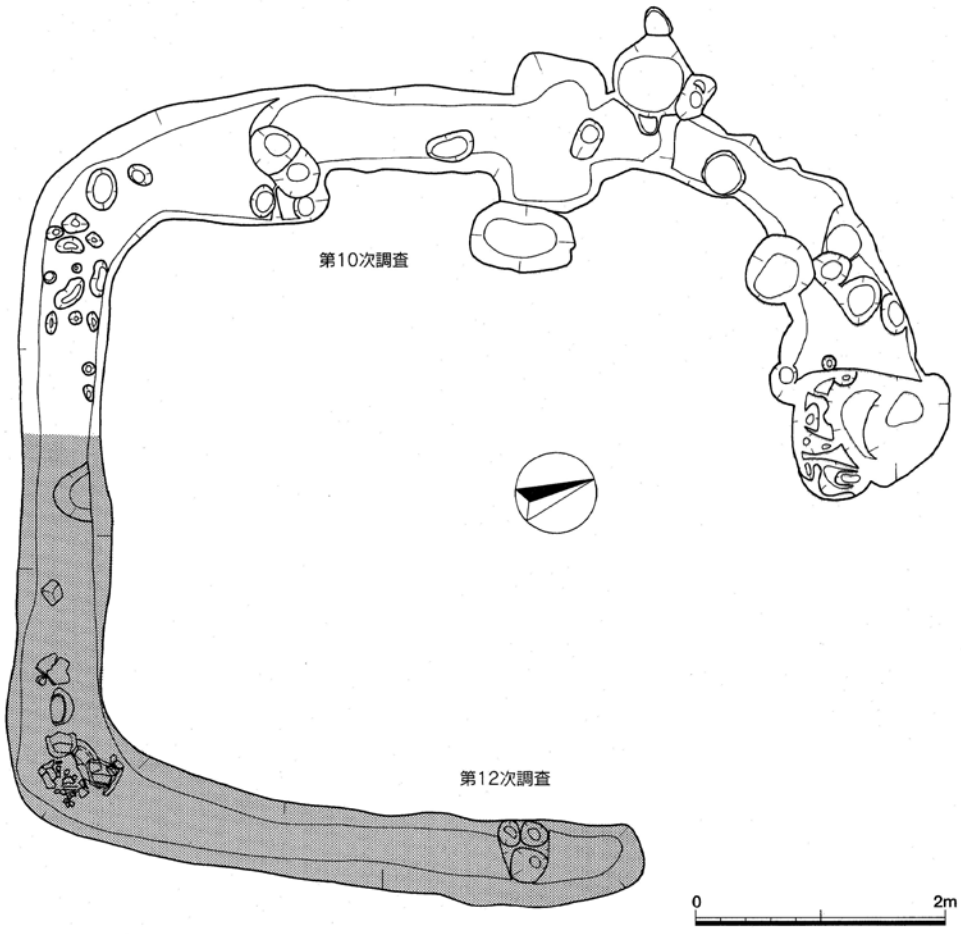


Fig.69　SR01実測図（縮尺１/60）

全体の規模や溝の形状などについては、第12次調査報告書で詳細に記述することにし、ここでは第10次調査の出土遺物について報告する。

出土遺物 1～8は溝内のピットや溝と重なっている土壙から出土した遺物である。方形周溝との切り合い、先後関係が不明なので、明らかに方形周溝に伴う遺物というわけではない。1は如意形口縁の弥生時代前半の甕。体部はわずかに張りがあり、如意形の湾曲は弱い。外面は灰褐色、内面は灰色。胎土に1～3㎜大の砂粒を含んでいる。外面の調整は、口縁部を幅広く横ナデした後に左斜行の細かなハケ目を施している。2は壺か鉢の底部で、わずかに円盤状の特徴を残している。細かな横ミガキは内面にも及んでいることから、器種は口縁が開いている鉢が適当か。3は高坏の口縁部、口径29.8cm、精良土ではないが、砂粒の少ない胎土である。口縁部は厚みがあり、上面は水平ではなく、やや内側に傾斜している。丁寧な横ナデ調整。4は口縁部の小破片。く字形に強く屈曲した内面は鈍い稜となっている。外面は左斜行のハケ目調整。弥生時代後期の甕。5は弥生時代中期前半の甕であるが、特徴は口縁部である。通常の甕口縁部に比べると、異様に分厚い粘土紐が貼り付けられている。口径は20.2cm、体部外面の調整は粗い縦ハケ目。内面は右上がりのナデ、わずかにハケ目も残っている。6は破片で、緻密な胎土が使われ、内外面とも細かな横ミガキが加えられている。美しい印象の土器である。口縁部外面には、断面蒲鉾形の小さな突帯が1条巡っている。刻み目はない。外面に比べ内面が滑らかになっており、甕ではなく鉢であろう。7は口径25.6cmの高坏。3と同じように口縁上面に粘土を貼り付け、厚みのある口縁部を形作っているが、坏部が膨らみがあり深い坏部となっている。

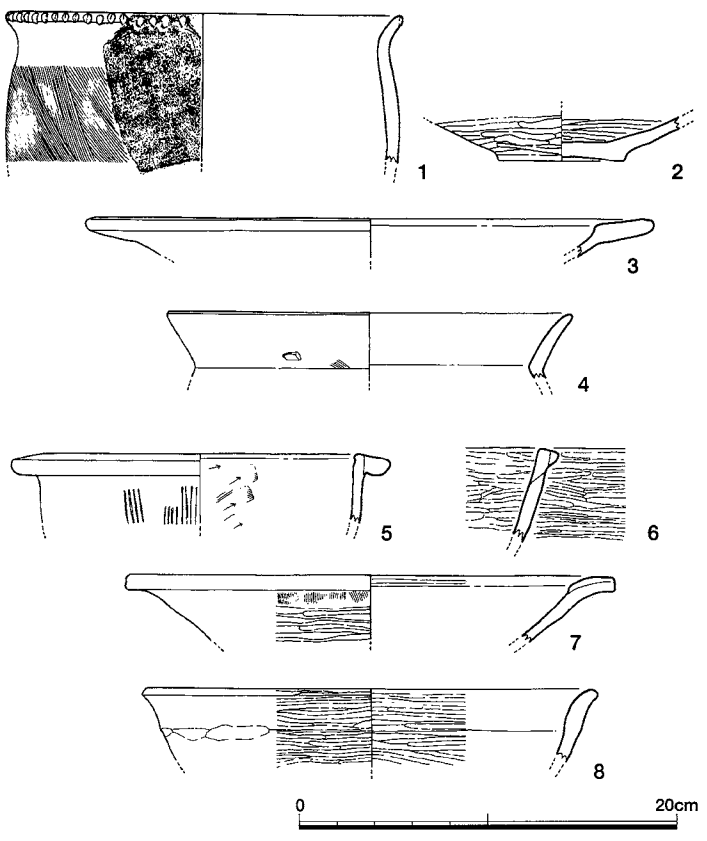


Fig.70 SR01の遺物（縮尺1/4）

第1号甕棺墓SN01 竪穴住居跡SC01の南に約6m離れて埋置されていた。弥生時代後期終末の大小2個の甕を用いた複棺の甕棺墓である。SC01との間には、後で述べる弥生時代前期後半頃の木棺墓SA01も並んでいる。これら時代を異にする三つの遺構は、発掘作業面としては同一レベルで検出されたことから、その時代判定にやや混乱を招いた。古墳時代の竪穴住居跡SC01、02は、床面の高さからすると少なくとも50cm以上高い地表から掘り込まれていたはずで、後に開田や水害などによ

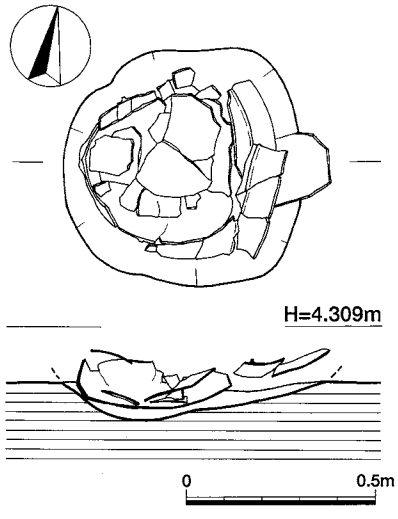


Fig.71 SN01実測図（縮尺1/20）

って激しく削平されたものの、深く掘り込まれたために床面が残り、下部の黒色粘質土にあった木棺墓と同一面で確認されることになった。なお第10次調査では、計3基の甕棺墓が見つかり、時期の新しい甕棺墓から順に番号を付している。

SN01の本来の墓壙掘り込み面は、SC01と同じような高さであったと推測され、検出した墓壙は壙底の形状を留めているにすぎない。この壙底に接して大きめの甕を横たえて下棺にし、小振りの甕を上棺にして埋置している。大きく潰れた状況であったことから、二つの甕の組合せ方がよく観察できなかったが、上棺の口縁部が完全に打ち欠かれ、互いの口径も大きく異なることから上棺を下棺に挿入する組合せ方だったと判断した。埋置角度は26度、埋葬方位はN-85°-Wである。上下棺の器高を足しても1mに満たないので、小児が埋葬されたのであろう。

Fig.72　SN01下棺

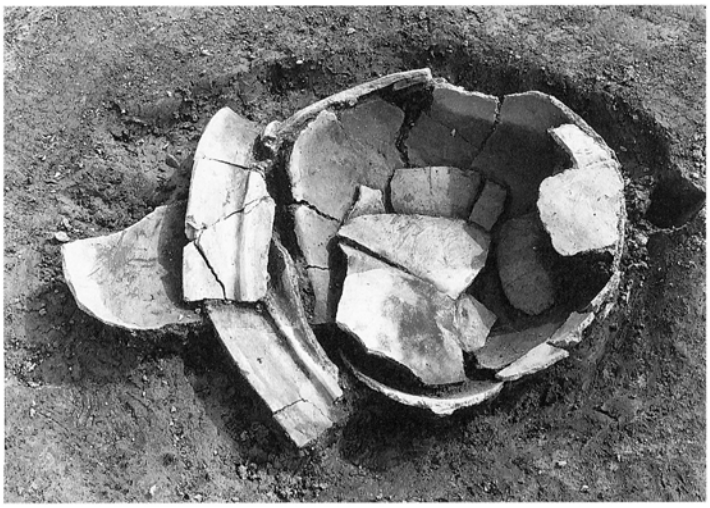


Fig.73　SN01

上　棺　口縁部はおそらく埋葬時に打ち欠かれているので口径は不明。体部最大径は35.2cm、底径約7cm、現在の器高は34.6cmである。器形は最大径の位置が中位よりやや上方にあるために下棺に比べ丸みが強い。突帯は2条あり、頸部屈曲部には断面三角形突帯、体部下半に断面台形突帯を巡らしている。2条とも下方に垂れ気味に横ナデして貼り付けている。胎土には4～5mm大の砂粒を含んでいる。良好な焼成で、外面の色調は赤みを帯びた茶褐色を呈する。外面には写真のように大きな黒斑が明瞭についている。

下　棺　口径45.6cm、底径5.8cm、器高62.1cm。胎土には小砂粒が少なめに混入している。焼成は良好で、器面の色調は橙色がかった明るい茶色。器形は砲弾形で、体部下半は強くすぼまり丸底状の小さな底部が付く。一方、体部上半は中位からほぼ垂直に上方に立ち上がり、その上端でわずかに内傾し、屈曲してく字形の長めの口縁部となる。頸部屈曲部外面には幅広の断面台形の突帯が巡っている。その貼り付けは力強いが粗雑で波打っている。断面台形の突帯は、体部下半にも1条巡らせている。内外面ともハケ目調整で、部分的にナデ消している。器形とその特徴から弥生時代後期終末とした。

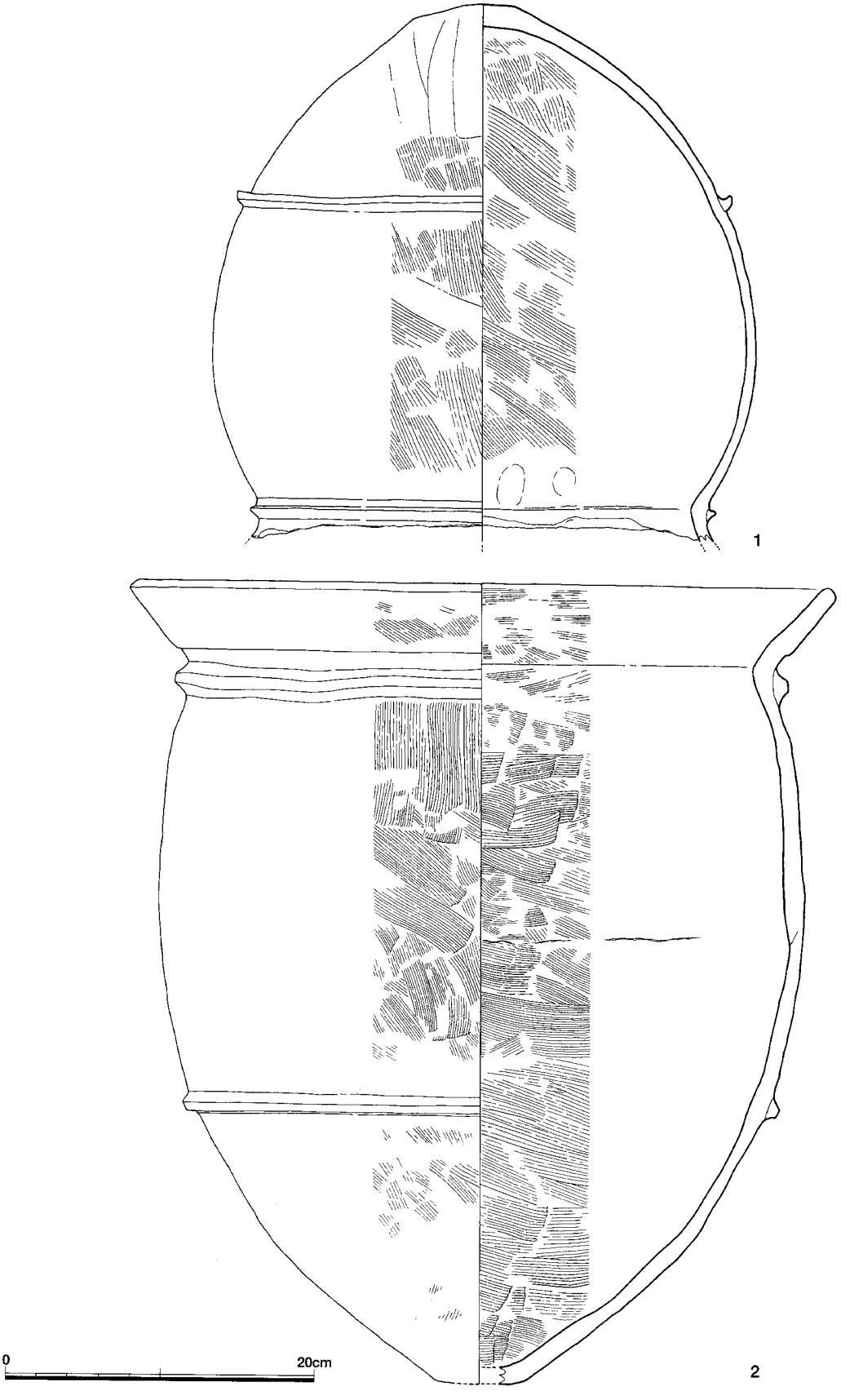


Fig.74 SN01上下棺実測図（縮尺1/4）

6．第Ⅱ面の掘り下げ

第Ⅱ面の竪穴住居跡SC01、SC02の実測、撮影、さらに遺物の取り上げを終えて、住居床面の掘り下げとともに周囲でも掘り下げを行い次の遺構の検出を試みた。前記したように竪穴住居跡の近くには、弥生時代の甕棺墓や木棺墓もあり、さらにグリッド27列より南側では、弥生時代前期から中期前半の遺物を出土する多くの土壙群があり、すでに弥生時代の遺構面が現れていることから、掘り下げ作業は、SC01より北側に絞った。作業は、地面を移植鏝で数cm掘り下げては平らに削り、土色の変化で遺構を見つけることを繰り返した。土中には主に弥生時代の遺物が多く包含されており、その分布からも容易に遺構の発見ができるものと期待した。このため５ｍ四方のグリッドをさらに１ｍに区切りそれぞれに番号を付け、遺物出土状態を細かくチェックした。この結果、黒色粘質土層の中に微妙に灰色がかった長方形プランが４か所で現れた。中には異様に長いプランもあるものの竪穴住居跡の可能性が強いと判断し、住居跡の仮番号SC03～06を付けて発掘作業を進めた。竪穴住居跡の通常の発掘方法のように土層帯を残しながら四壁と床面を探った。しかしながら上面で識別した輪郭は、住居跡の壁として周囲と明確な差がつかめず、住居内埋め土も一向に変化することがなく、しかも床面と確信できる柱穴もないことなどから最終的には住居跡ではないと断定した。

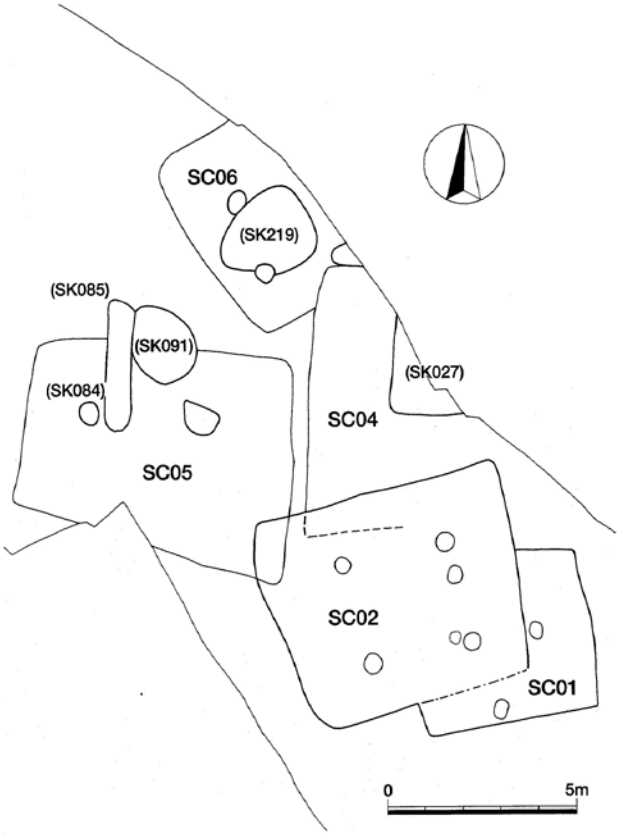


Fig.75　竪穴住居跡の配置図（縮尺１/200）

Fig.76　第Ⅱ面の掘り下げ作業

引き続きこれらの長方形プランの周囲も掘り下げたところ、住居内と同じような遺物の出土状況であることから住居跡の可能性は限りなく否定的になった。つまり第Ⅲ面の遺構を覆う包含層中の自然的な土色の変化に過ぎなかったものを間違って掘り下げたことになるが、小グリッドで取り上げた遺物からは、逆に遺物包含層が面的な広がりの中で均一に堆積した証左にもなるだろう。ここでは仮の住居跡番号をそのままにして、出土遺物の記述をする。遺物のほとんどは、弥生時代前期の土器であるが、石製品や動物遺体も多く、生活の場所を示すとともに隣接地に黒色粘質土が堆積していったことを物語るのであろう。なお土師器も数か所でまとまって出土しており、第Ⅱ面で見落していた遺構があったのだろう。

SC01、SC02下の遺物　1～40は弥生時代前期～中期の土器、41～47は古墳時代の土師器、48～54は石製品と土製品の計54点を図示した。この他にパンコンテナで25箱の遺物が出土している。

土　器　1～18は甕。うち1～7は突帯文土器。体部上半が内傾、直立、外反の三形態に分けられるが、6、7は他と異なる。6の口径は34.6cm、体部上半は内湾しており丸みのある器形となっている。口縁上端は平坦で、その外端に小さな断面三角形の粘土紐を貼り付け突帯としている。刻み目は、この突帯だけではない。口縁内端を斜め上方に小さくつまみ出し、ここにも刻み目を入れている。ただし突帯の刻み目が右方向から均一に刻まれているのに対し、内面はいかにも不規則である。器面の調整は内外面ともヘラ状工具で丁寧な横ナデでミガキ風である。器形、調整法などから甕ではなく鉢とも思えるが、外面下半に煤と思われる付着があり、また胎土も精良土ということではないので甕としておく。7は体部上半が緩やかに外湾しており、口縁部は断面方形のままおさめている。この口

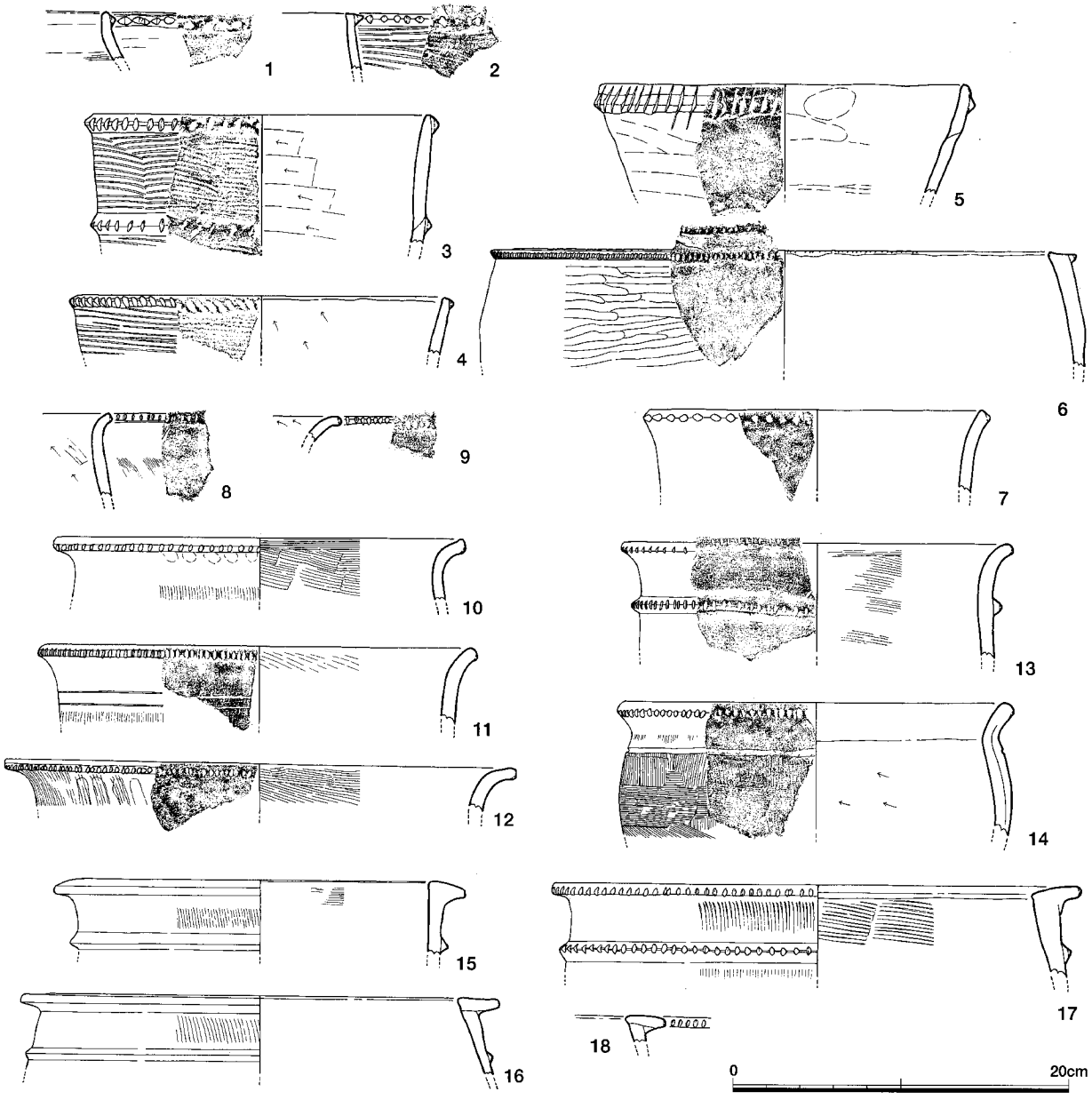


Fig.77　SC01・SC02下の遺物（縮尺1/4）

縁には突帯がなく、口縁下端に直接刻み目を入れている。刻み目は菱形で、板状工具の小口部を押しつけたのか縦の木目痕が付いている。口径は20.4cm、精良土ではないが砂粒の少ない胎土が用いられ、内外面とも薄い茶色となっている。**10**～**14**は如意形口縁をもつ甕。如意形の湾曲度は異なるが同じように口縁下端のみに刻み目が付く。**10**、**12**の如意形口縁の外面には、その整形時と思われる指頭圧痕が横に並んでいる。**11**と**14**には、口縁部外面下には沈線が巡っている。**13**は口径23.2cm、体部はほぼ直立しており、口縁部下約3.8cmに断面三角形突帯を１条貼り付け、ここにも刻み目を入れている。外面は横ナデ、内面は横ハケ目調整。**14**は口径23.4cmの体部に張りのある甕。器壁が厚く、その断面には外面から粘土を貼り付けて成形したようである。口縁部の浅く密に入れられた刻み目には木目痕が見られる。

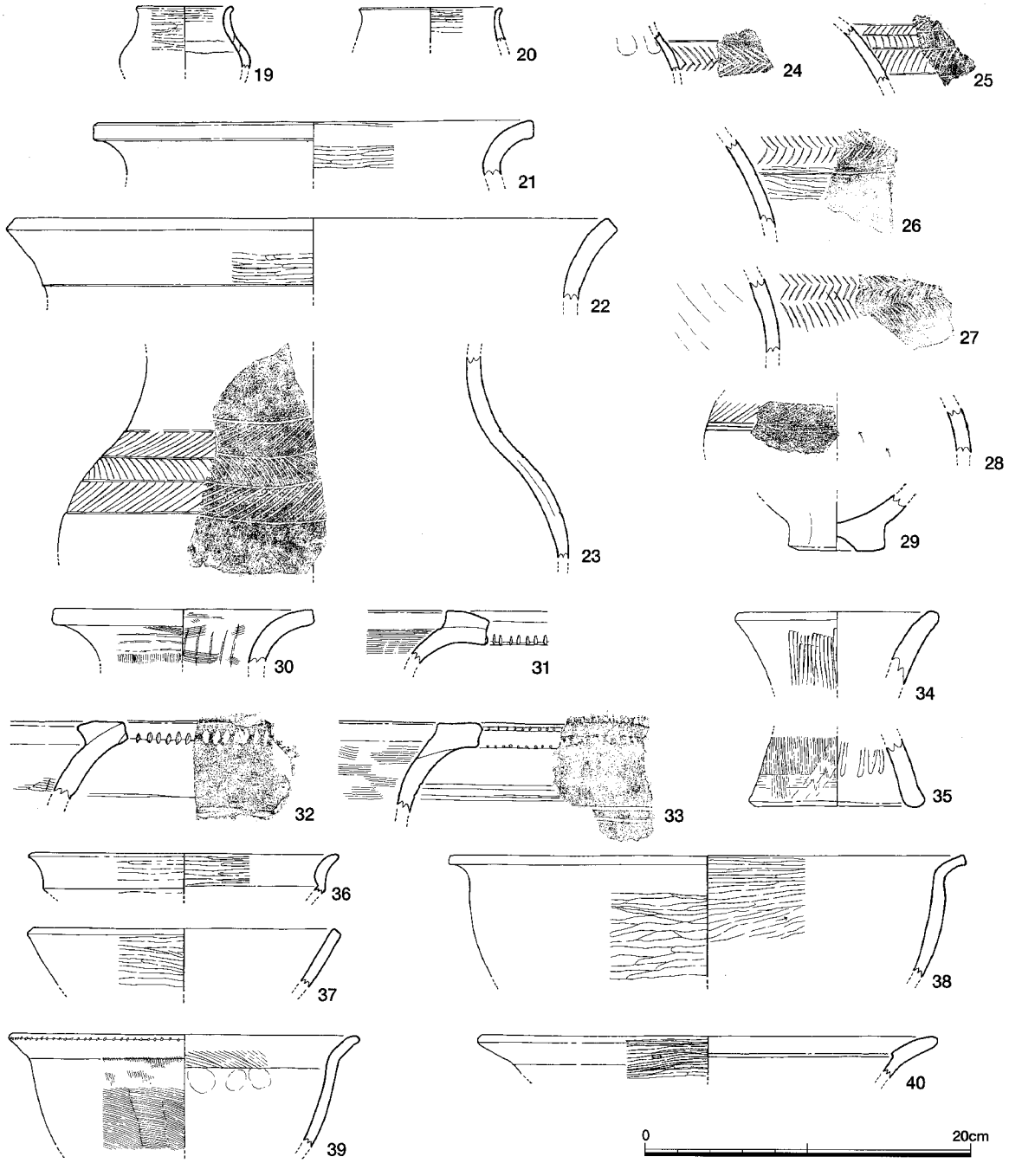


Fig.78　SC01・SC02下の遺物（縮尺１/４）

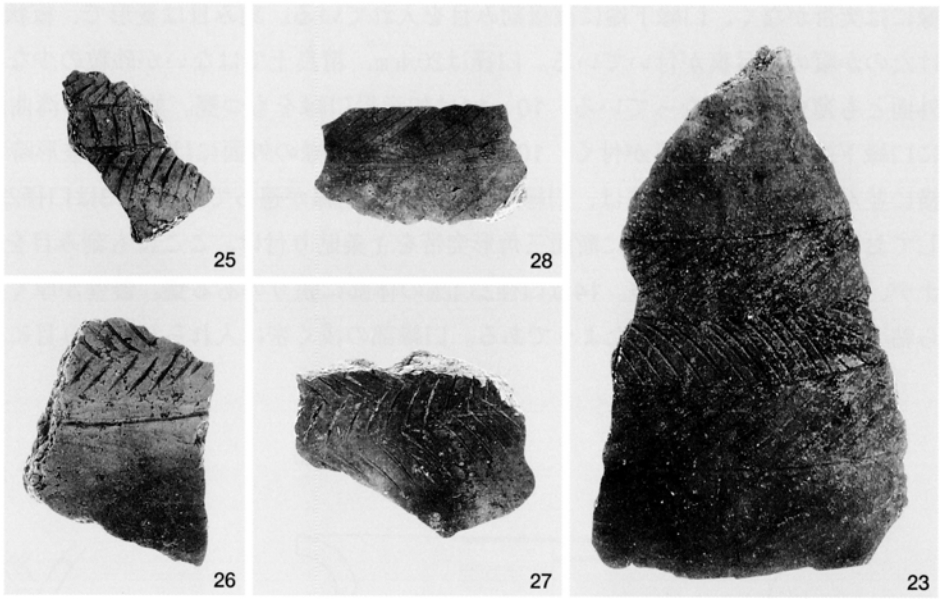


Fig.79　SC01・SC02下の遺物

15～18の３点はＬ字形口縁の甕。**18**以外は外面に断面三角形突帯を１条巡らせる。口縁部の断面を比較すると**15**は口縁外側に断面台形の粘土を貼り付けており、**17**は口縁上面に粘土板を乗せてＬ字形口縁を作っている。**17**は分厚い作りの甕で口径31.4cm。体部上半は直線的に内傾し、口縁上面も内側に傾いているので強い屈曲となっている。内外面ともに粗いハケ目調整。

19～23は壺。**22**の口径は37.4cmあり、口縁端部は断面方形におさめている。大きさから中型壺とした。口縁部は外面にわずかながら段が付いている。外面は横ミガキ調整。胎土には砂粒を含んでおり密ではない。焼成は良好で器面は灰色を呈する。**23**の胴上半部は、有軸羽状文（羽状文）で飾られている。胴部最大径は30.4cm、胴部から頸部へは明瞭な境がなく緩やかに延びている。沈線の斬り合いから文様の順序を復元すると、まず最初に上段に右斜行文を入れ、その上下に横の沈線を巡らせる。上部の沈線は頸部との境に当たる。次に中段に左斜行文を加え、下に横沈線を巡らせる。さらに下段は逆の右斜行文とし同じように下に沈線を入れて文様帯をまとめている。上下の沈線の中に羽状文を埋めるわけではない。**24**～**28**も胴上半部に文様がつく破片であるが、それぞれ施文方法に特徴がある。**34**、**35**は器台。**36**～**39**は鉢。**36**の体部から反転して口縁部となる。**38**、**39**は如意形の口縁で、**39**には刻み目がある。**38**の口径は31.6cm。器面の調整は内外面とも横ミガキで、内面がより細かい。**40**は高坏。口径28.2cm、外面は右上がりの細かなミガキ調整。口縁内端に小さな段を付けて坏部としている。

41～**47**は古式土師器である。**41**は在地系長胴甕の口縁部と思われるが、小破片のために時期は不明。**43**は器厚が薄く胎土も精良であり、小型丸底壷（久住分類Ｉｄ類、重藤分類壷５式）である。**44**も薄い器厚に精良な胎土で、外反口縁鉢（久住分類Ⅲ類、重藤分類鉢３式）で、**43**・**44**ともに重藤西新町４式（久住ⅡＣ～ⅢＡ期相当）あたりの時期のものだろう。**46**も薄い器厚に精良胎土から精製器種の小型丸底壷の胴部だろう。小破片で全体の器形が不明なので時期も分らないが、調整も粗雑化しているので**43**・**44**と同時期のものである可能性が高い。

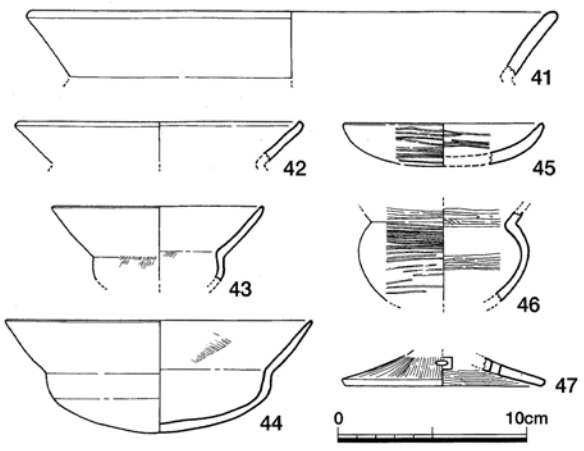
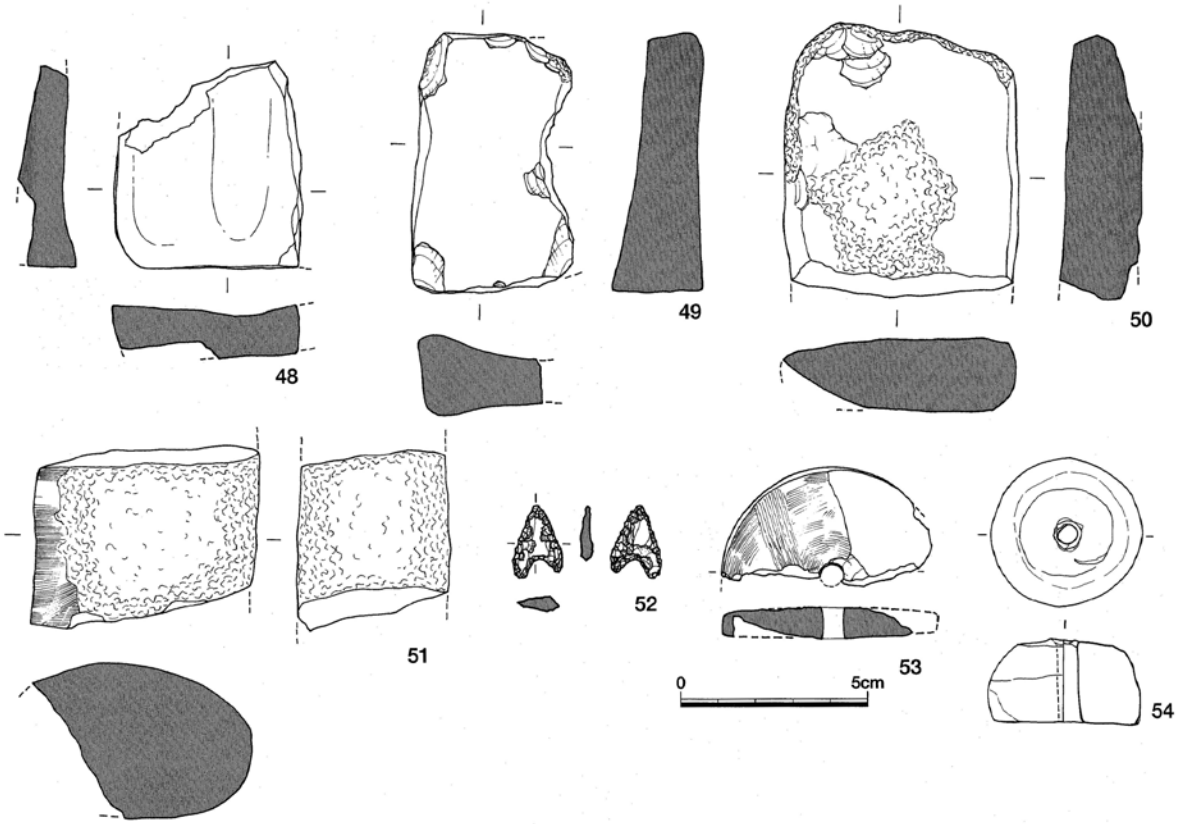
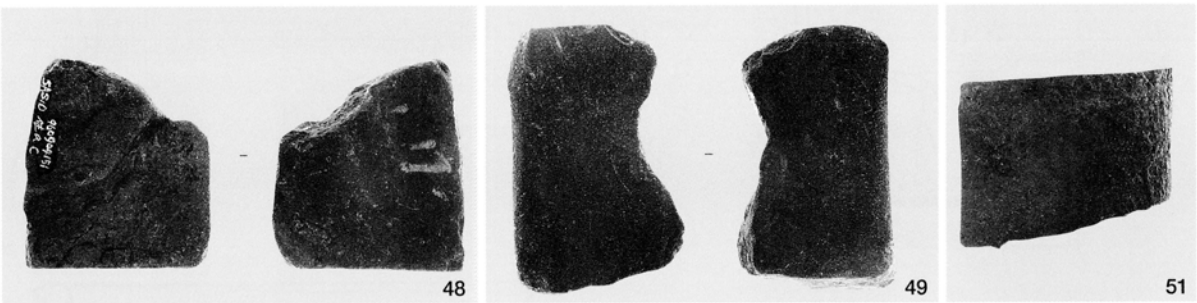


Fig.80　SC01・SC02下の遺物（縮尺１/４）



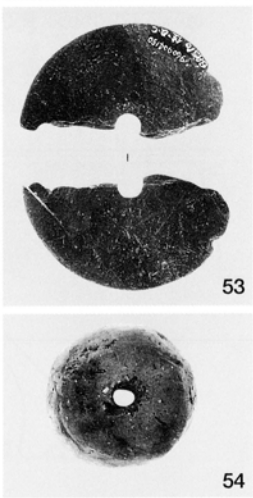
▲Fig.81　SC01・SC02下の遺物（縮尺1/2）

▼Fig.82　SC01・SC02下の遺物



石製品　48～50は砂岩製の砥石。48は厚さ1.1cmの板状で図表面は研ぎによるへこみが激しい。49は図右側が欠けている。2.3cmとやや厚めだが48以上に研ぎの使い込みが著しい。50は図裏面の一部を欠いている。図表面に敲打痕を一部残しているが側面も研ぎ面として使用している。51は玄武岩製の磨製石斧。断面は楕円形で身中央には研磨痕が残るが、大部分は敲打痕のままである。52は黒曜石製の打製石鏃。無茎式で基部の抉りが強い。53は粘板岩製の紡錘車。直径は5.6cm。半分が欠けているが、ほぼ均一な厚さである。

土製品　54は2.07cmの厚さをもつ紡錘車。上半が断面台形状になる。全面丁寧なナデが施され、砂粒の露出はない。



SC04の遺物　SC04と仮称した長方形プランはO・P30・31グリッドに位置する。ここでも１ｍ方眼に区切り遺物の取り上げを行った。パンコンテナに２箱の遺物が出土したが、うち弥生土器、土師器合わせて31点を実測した。

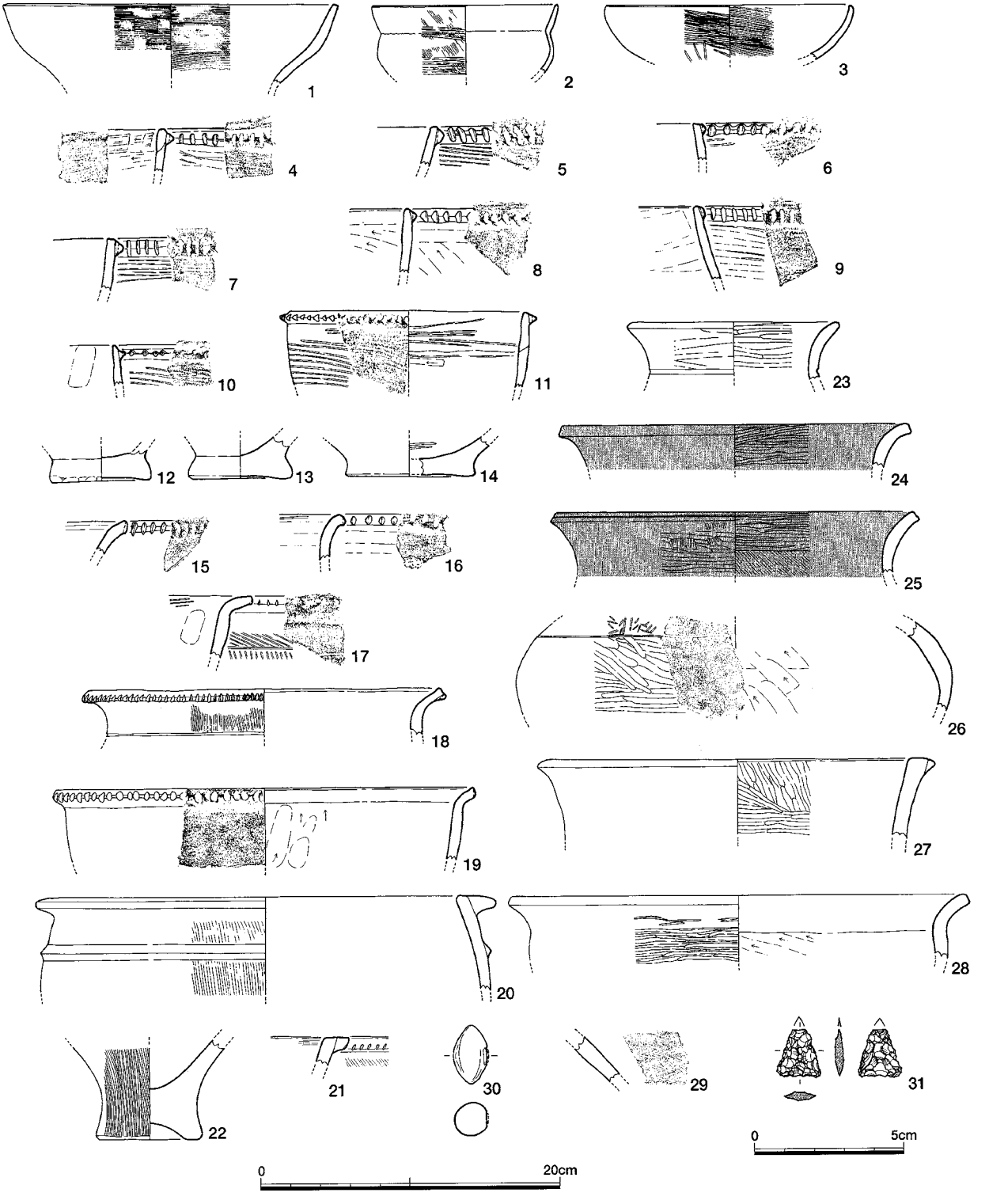


Fig.83　SC04の遺物（縮尺１/４・１/２）

土　器　1の壷口縁は、内外面とも横方向ハケ目仕上げで屈曲部も明瞭でなく、口縁端部も丸く収めるのではなく面取りしているなどから在地系であろう。2の小型丸底鉢は久住Ⅱａ類・重藤鉢1式で、重藤氏の西新町3式後半（久住ⅡＡ～ⅡＢ期相当）となる。3の椀は精良土で作りも丁寧である。

4～11は突帯文土器。4～10は甕口縁部。体部上半が外反、直立、内傾する3様があり、突帯の断面、貼り付け位置などさまざまである。また突帯の刻み方やその工具も多様さがある。4の口縁端部は横ナデで面取りしたような断面をしている。突帯の断面は正三角形に近く、口縁よりわずかに下に貼り付けている。刻み目は細い板状の工具で左方向から深く切れ込んでいる。外面の調整は貝殻条痕ではなく、ヘラ状工具による粗い擦り痕が付く。内面も同様の工具で左方向へナデている。焼成はよく、外面は赤茶色、内面は白色がかった茶色を呈する。7の口縁上端は直線的に外に傾いており、接してやや厚みのある断面三角形の突帯を貼り付けている。長方形の刻み目は左方向から深く入れられている。体部外面は横条痕が付く。砂粒の少ない胎土で、軟質の焼成となっている。8は直立する口縁部で、その上端は横ナデで丸みを帯びている。三角形突帯は口縁に接して貼り付けており、口縁から連続する傾斜となっている。刻み目は左方向から刻んでいるので、左向きの三角形となっている。外面の調整は、体部を左上がりに擦り上げた後に、口縁下だけに横方向にナデている。9は直線的に内傾する口縁部で外面は横条痕、内面はヘラ状工具のナデ。突帯は背の低い台形状である。11は口径17.4cm、貝殻横条痕は外面だけでなく内面にも見られる。刻み目は左向きの三角形であるがその工具は板状、棒状とも異なり、どのような工具を使用したのかいまは分からない。

15～19は弥生時代前期中頃から後半の如意形口縁の甕。18は口径24.6cm、口縁部は雑な作りで内端は上方に小さく突出する。刻み目は口縁下端に密に刻んでいる。外面の調整は縦ハケ目、沈線1条が巡る。焼成は良好だが、胎土に2～3㎜大の砂粒を多めに含み、内面は使用によって器面に砂粒が露出している。19の口径は28.6cm。口縁の屈曲は弱く、内面ににぶい稜線がある。口径が割りに大きく、体部も逆ハ字状にすぼまる器形状から甕ではなく鉢とも思える。丸みのある刻み目は、棒状工具で口縁に対しほぼ直角に押し当てている。外面は細かな縦ハケ目調整。内面はナデ上げ、部分的に指頭圧痕が見られる。20は弥生時代中期前半の甕。体部上半が内湾しながら延びていることから倒卵形の器形となるのであろう。口縁外面に背の高い断面三角形の粘土板を接合し、横ナデを加えてL字形の口縁部を作る。口縁部下の断面三角形突帯は、外面のタテハケ目調整後に貼り付け、横ナデを加える。

23～26、29は壷。23は小型壷の口縁部で口径14.4cm。口縁部と頸部との境には3㎜幅の沈線が巡り段になっている。口縁部は直線ではなく緩やかに外湾する。器面の調整は横ミガキで内面にその痕跡がよく残っている。胎土は精良土が用いられ、よく締まった焼成である。25は口縁部の破片。おそらく頸部との明瞭の境はなかったであろう。外面の化粧土が一部剥離し、調整の順序が分かる。整形後にハケ目で器面を調整し、化粧土を塗り重ね、さらに横ミガキを加え、次に丹塗りを施している。口縁内面の横ミガキは細かく丁寧である。26は壷の胴上半部破片。器壁は厚みがあり、外面にヘラ状工具で文様を付ける。羽状文であるが乱れている。27は直線的に外反している口縁外端に粘土を貼り付け幅広い口縁部を作っている。内面は左上がりのミガキ、外面は横ナデ。広口壷であろう。

28は鉢。口径31.2cm、外面は細かな横ミガキ。小砂粒が混入した胎土で、堅い焼成となっている。内外面とも色調は灰茶色を呈する。29は壷胴部上半の文様。羽状文を5段以上に重ねている。

土製品　30は投弾。両端がわずかに尖る。全長4.1cm、断面は2.27cm×2.32cm。

石製品　31は黒曜石製の打製石鏃。基部は直線で先端を欠いているが二等辺三角形である。

SC05の遺物　N・O29・30グリッドにあり、住居跡の遺構番号を付けたが竪穴住居跡ではない。遺物の出土は多くパンコンテナで9箱になる。このうち土器61点、石製品5点、合計66点を実測、図化した。

1～16は突帯文土器。**1**は直線的に外反する口縁部の破片。突帯は小さな断面三角形で棒状の工具を押して刻み目としている。**2**、**3**も同じように断面三角形突帯を口縁に接して貼り付けている。**5**の体部上半は外傾し、口縁部には突帯がなく、そのまま刻み目を入れている。刻み目は左方向から縦長に深く刻んでいる。精良土に近い胎土であり、焼成もよい。小破片のために口縁の傾斜が不確か

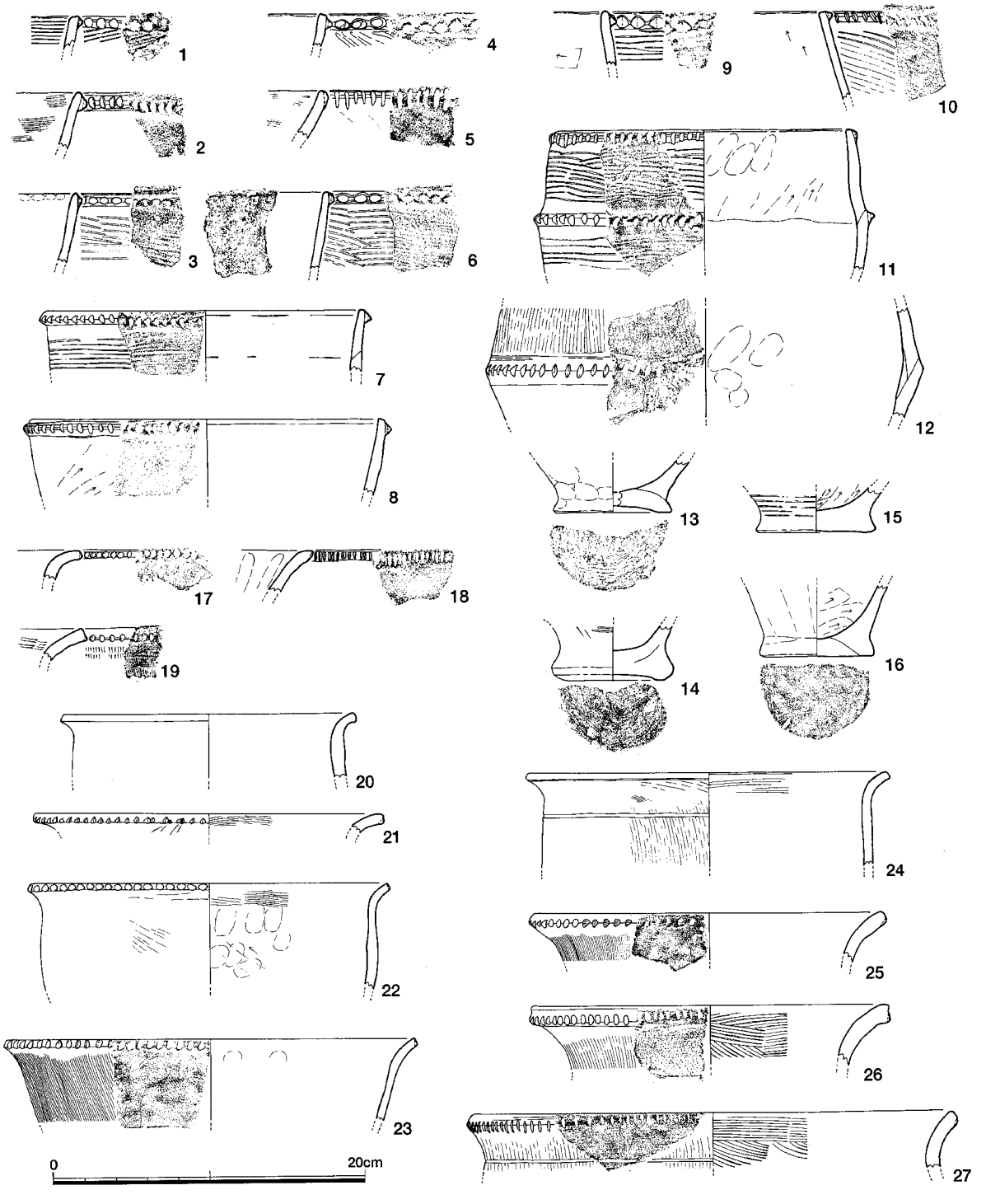


Fig.84　SC05の遺物（縮尺1/4）

だが鉢とすべきか。8は口径23.4cm。背の低い断面三角形の突帯で、口縁端よりわずかに下がって貼り付けている。外面は横条痕ではなく右上がりのナデ調整。10の器壁は他に比べ薄手な作りである。体部上半は内傾が強く、体部は屈曲は反転するのだろう。突帯は小さな断面三角形で、深い刻み目を入れている。外面は黒褐色、内面は灰色である。11、12は体部で反転する甕。11は反転部に断面三角形の突帯を貼り付けて刻み目を入れているが、反転は弱い。またこの部分は粘土紐の接合部にも当たっていることが多いが、本例も例外でない。12の屈曲部も上半の粘土を内側に乗せて口縁部へと立ち上がっているが、さらに内側に粘土を貼り付けて補強している。外面には突帯はなく、屈曲部の角に直接刻み目を施している。13～16は突帯文土器の甕底部。外底は粗く削られ条痕が付くことが多い。14も同様であるが、外縁の張り出しが丸みがあり、また分厚い作りが他と異なる。

17～27は弥生時代前期後半の甕である。20は口径19.0cm、如意形の屈曲は弱く、口縁部の刻み目、外面のハケ目も見られず、また胎土も緻密であることから煮沸用とは思えない。23も26.0cmと大きい口径で、口縁部の屈曲も弱い。口縁部の刻み目は右方向から加えており、わずかに口縁上端まで達している。外面のハケ目は細かい。27の口縁刻み目部は丸みがあり、口縁部下に沈線を１条を巡らせている。28～34は形状がそれぞれ異なるがＬ字形の口縁を持つ甕。28～30のように口径が30cm以下のものと、31～34のように30cmを超すものに分かれる。28～31の口縁部は、断面台形の粘土板を外面に貼り付けたもので、口縁上面が短く分厚い作りとなっている。一方、33、34は粘土板を上面に乗せて接合したもので、幅広のＬ字形となっている。この２点は口縁部が内傾し、倒卵形の体部となっている。35～40は甕の底部。37以外は外底中心が凹み、体部との境は強く締まっている。縦ハケ目調整後に巡らしている。口径31.4cm。内外面とも茶色、外面に黒斑。

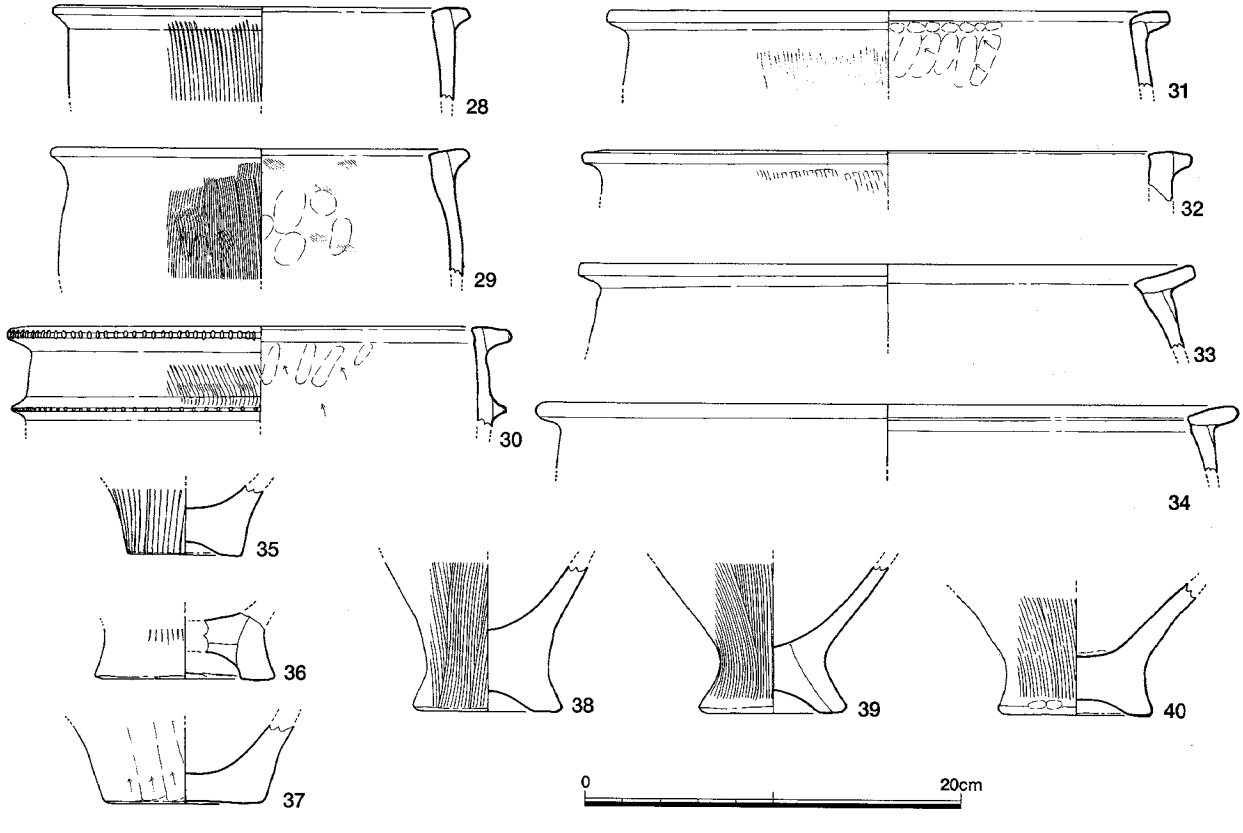


Fig.85　SC05の遺物（縮尺１/４）

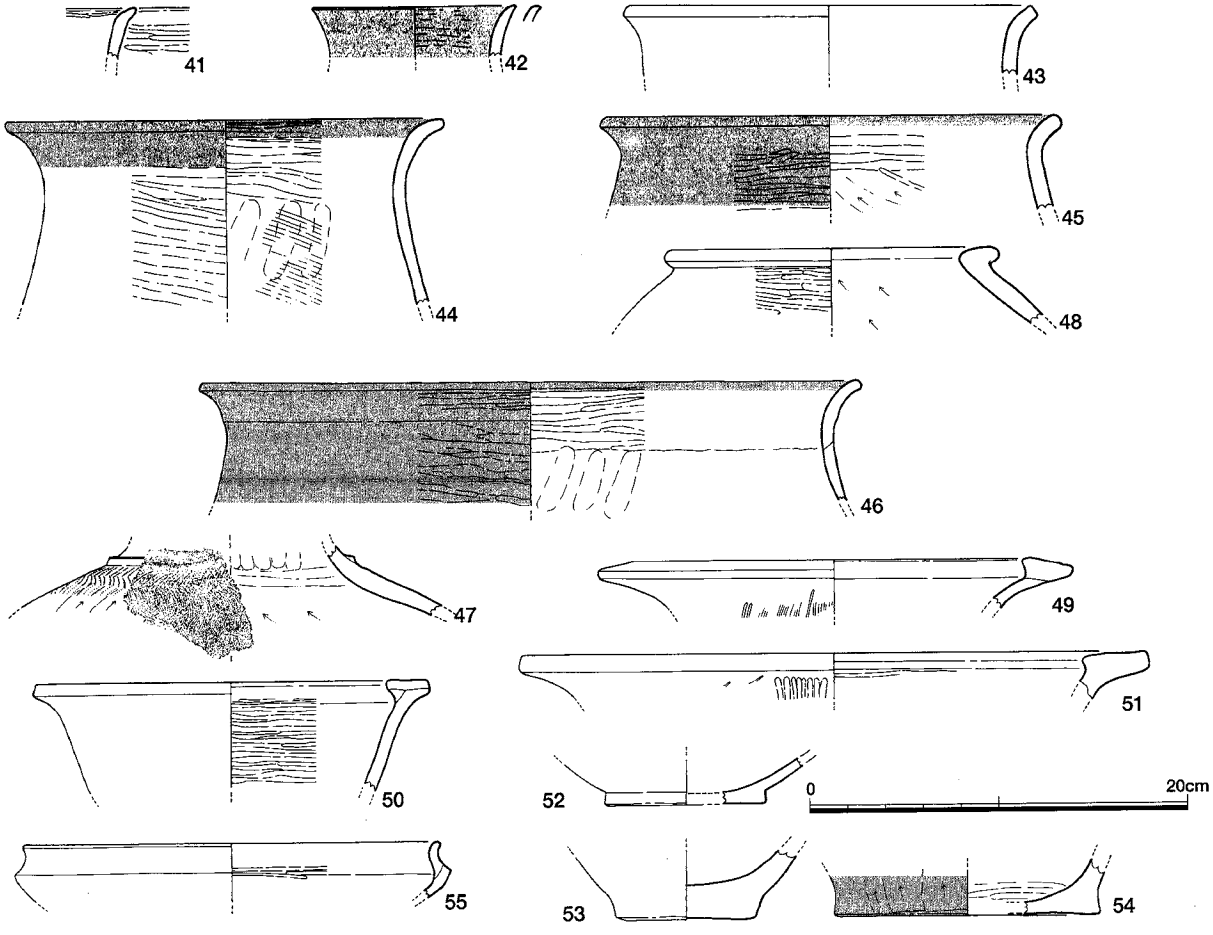
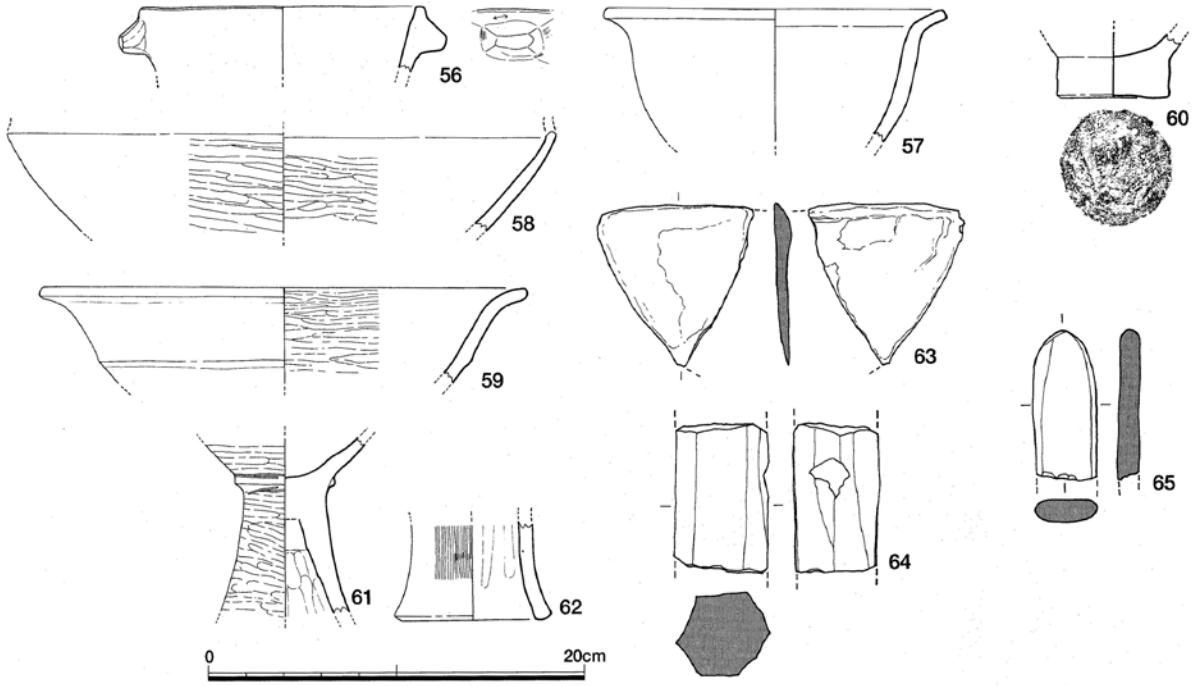


Fig.86 SC05の遺物（縮尺1/4）

41～54は壺。41はわずかに小砂粒を含んでいるが精良土に近い。外面の横ミガキは口縁内面まで及ぶ。壺としたが小破片のために不確か。42の口径は10.6cm、同じように口縁端部が先丸になっているが、本例はきわめてわずかだが外端に小さく摘み出している。内面は細いヘラ状工具で横ミガキ、外面は横ナデ。全面に丹塗り。胎土は精良土で堅緻な焼成である。44は口径23cm。内傾する頸部からそのまま外湾して口縁部となっている。器壁は頸部と同じ厚さで延びていることから頸部との境には段も沈線もない。外面と口縁部内面は横ミガキ、頸部内面は左斜行のハケ目調整後にナデ上げ、縦長の指頭圧痕が並んでいる。丹塗りは内面にも垂れている。46の口径は35.2cmと大きい。頸部から口縁部への湾曲はよく似ているが、口縁部がわずかに厚みがあり、段が認められる。内外面の横ミガキは効果が十分に出ていない。また胎土に砂粒が入り精良土とは言えない。48は無頸壺。球形の胴部上端を強く屈曲させて口縁部としている。口縁部は短く、かつ丸みがあるので外からは丸い帯を貼り付けたように見える。外面の横ミガキ調整の下方にはハケ目痕がかすかに認められる。49～51は広口壺。50の口径は21.2cm。頸部は直線的に大きく開き、その上端に平らに粘土板を乗せ、内側の下方から支えるように粘土を充填させ水平な口縁部を作っている。外面は風化、摩耗し調整痕が残っていないが、内面のような横ミガキだったのであろう。52～54は壺の底部。52の底径は8.4cm、円盤状で内外面とも滑らかな器面となっている。54は底径14.0cmで外面に丹塗り痕が認められる。外面はヘラ状工具でナデ上げている。内面は指で強く押さえて横ナデしている。55～59は鉢。55は口径22.0cm。短く反転して口縁部を作る。精良土で外面は灰茶色、内面は灰黒色である。56は口径15.0



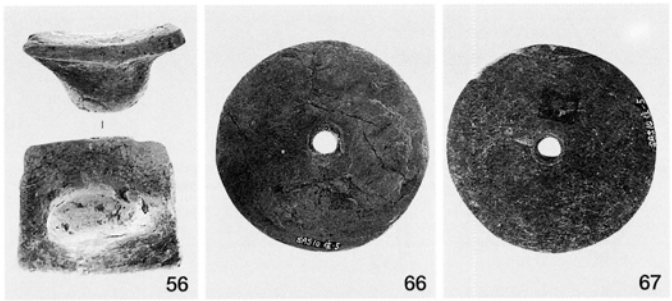


Fig.88　SC05の遺物

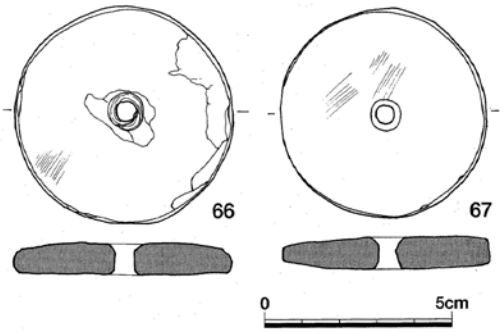


Fig.87　SC05の遺物（縮尺1/4・1/2）

cm。口縁部下に相対して台形状の摘みがある。基部からの長さは1.70cm、基部幅3.30cm、先端幅1.80cm、先端の厚さ0.90cmである。体部への接合は差し込んだ後にナデを加え貼り付けている。外面の色調は黒褐色で、胎土など他の土器と大きく異なることはない。類例は福岡県二丈町曲り田遺跡で知られている。**59**は体部中位で鈍く屈折して長めの口縁部を作っている。口径25.8cm。**60**は厚さ約2cmもある円盤状の底部であることから、壺ではなく鉢の底部だろう。

61は高坏。脚部と坏部の境には三角突帯を貼り付けている。外面は全面に横ミガキ。**62**は器台。

石製品　石包丁（石製穂摘み具）、砥石、紡錘車などが出土した。**63**は石包丁の端部で、全面摩耗し、刃部の研磨痕は見られない。**64**は砂岩質の砥石。六角柱でどの面も同じような頻度で研ぎ面として使用している。**65**も自然石を加工することなく砥石として利用している。**66**、**67**は紡錘車。**66**がわずか2mm程大きい。2点とも丁寧整形と加工をして、正円に近い。

SC06の遺物　SC06はN30・31グリッドにあり、SC04の西に並んでいる。南北に長い平面プランである。遺物はここも多く、パンコンテナ6箱出土した。時間的に可能な限り実測に努めたが、土師器、弥生土器、石製品を合わせて52点に止まった。

土　器　1は外面の左上がり細筋タタキ、内面のケズリ、器壁は薄いなどの特徴からC系甕。一方2は外面が右上がり太筋タタキ、内面にはらせん回りのすだれ状ハケ目の痕跡、分厚い器壁、不安定ながら平底、などからB系甕の底部。3は小型丸底器種が壷と鉢に器種分化し始めた頃の小型丸底鉢（久住Ⅱa類・重藤鉢1式）で重藤西新町3式後半（久住ⅡA～ⅡB期相当）となる。4の高坏は坏部の上下半がはっきり分かれ、厚い器壁で外反するなどからB系。5も同じく外反口縁、屈曲部からB系か。

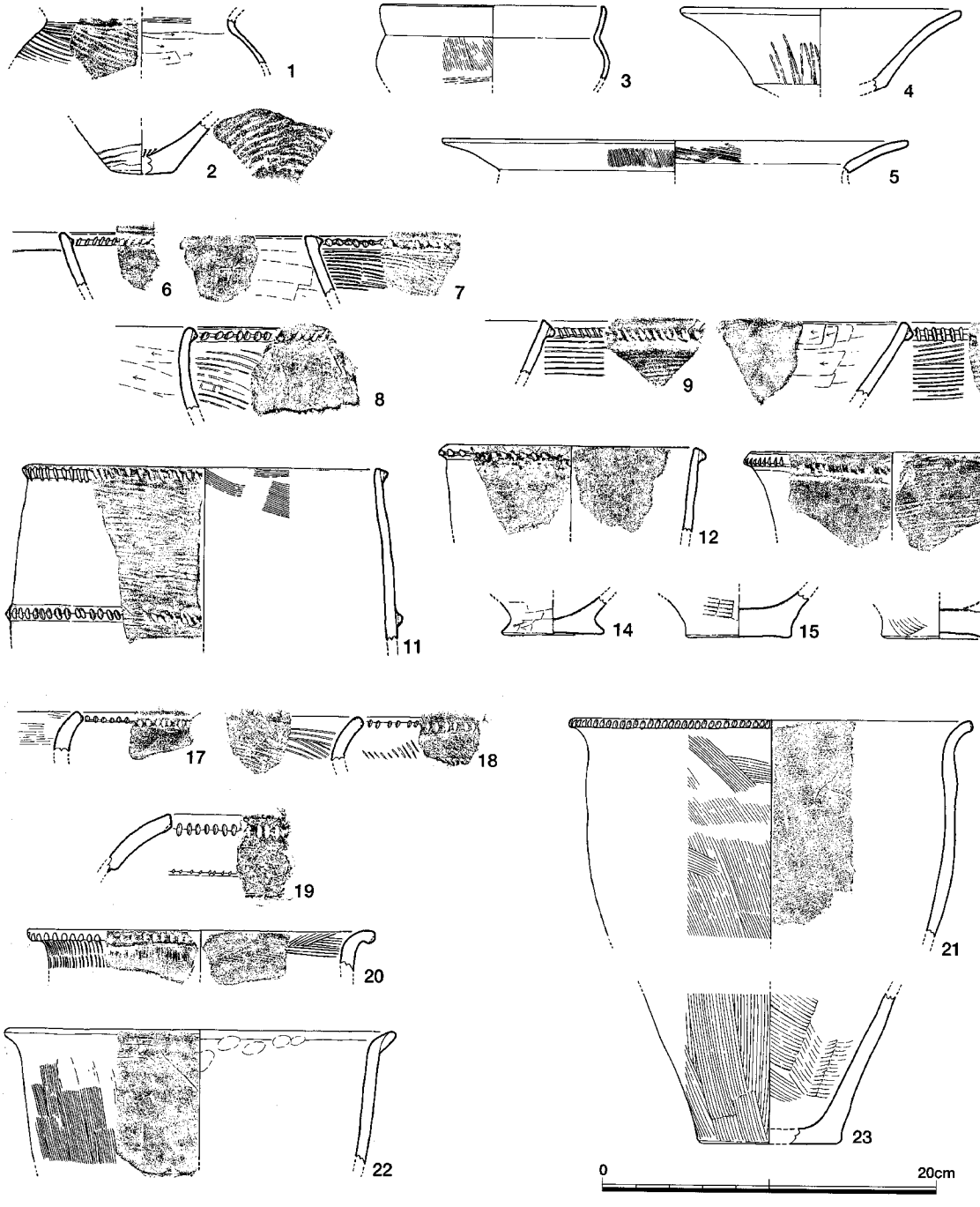


Fig.89　SC06の遺物（縮尺1/4）

6～16は突帯文土器。**6**、**7**、**11**は体部上半が内傾し、**9**、**10**、**13**は直線的に開く。**12**はほぼ直立している。内傾している甕は体部中位で屈曲反転する。**8**の口縁端部の断面は丸みがあり、接して三角形突帯を貼り付けている。外面の貝殻条痕は横ではなく右下がりである。**9**の口縁端部は横ナデで外側に強く傾斜しており、連続して下方に垂れた断面蒲鉾形の突帯を貼り付けている。刻み目は右方向から深く切り込んでいる。**11**は口径21.6cm。外面の横条痕は鋭く、この後に体部中位の突帯

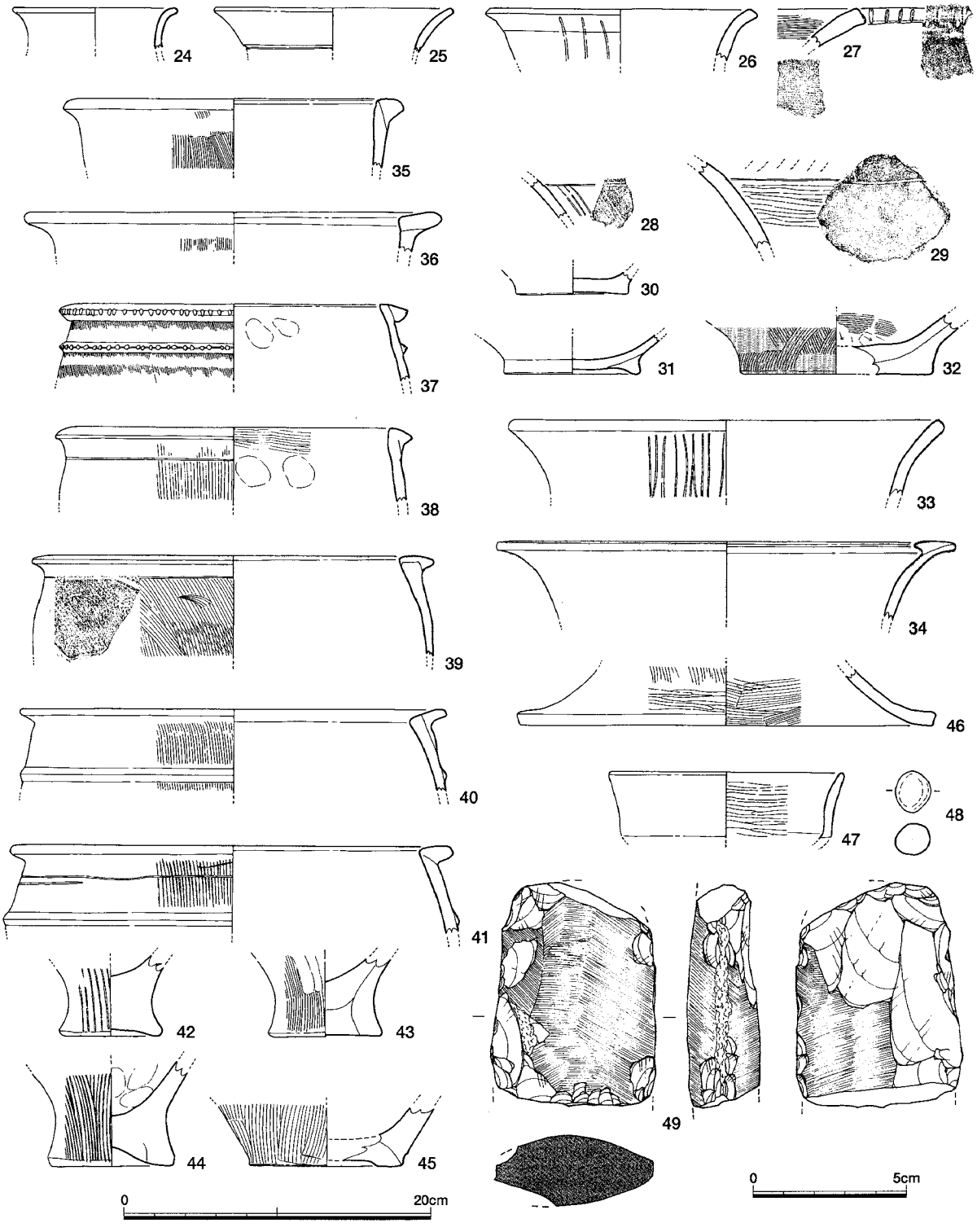


Fig.90　SC06の遺物（縮尺1/4・1/2）

を貼り付けている。**14**～**16**は甕の底部。**14**の底部外縁は外に強く張り出している分、体部への境がよく締まった器形となっている。外底部はナデ調整。ややいびつな円形。

17～**22**の甕はよく類似した如意形口縁である。**17**～**20**の口縁部刻み目は、口縁下端のみで上端までに至っていない。**21**は口径24.2cm。刻み目は口縁部に幅広く入れているが、典型的な板付Ⅰ式土器に比べ体部に張りはなく、砲弾形に近い。刻み目はより幅広く入れている。内外面ともに丁寧なハケ目調整を施している。外面は部分的にナデを加えハケ目を消している。**22**の口径は23.2cm、口縁部の粘土接合が断面観察できる。強く屈曲して内面に稜が付くわけではないが、如意形と言うよりもく字形口縁に近い。また刻み目もない。内面の屈曲部周辺には指頭圧痕が見られる。体部外面はタテハケ目の後、口縁部下方はナデ消している。胎土には１～３㎜大の砂粒が多く混入し、焼成は良好、外面は灰黒褐色、内面は灰茶色で内面には黒斑が付いている。焼成時に付いたとすると焼成方法が興味深い。**23**は甕の底部。底径は8.4cmで平底となっている。体部内面も外面と同じ工具でハケ目調整を行っている。わずかに砂粒を含んでおり、焼成良好。外面は茶色、内面は灰黒色。

24～**34**は弥生時代前期～中期中頃までの壺。**26**は口径17.6cm。精良土ではないが、砂粒のきわめて少ない胎土で堅緻な焼成となっている。器面の調整はミガキ状の丁寧なナデで、外面は上下に暗文風のミガキがほぼ等間隔で付いている。形状から壺でないかも知れない。**30**～**32**は壺の底部。**32**は丸底に粘土を輪状に貼り付けており、高台のような底部となっている。**33**、**34**は広口壺。**34**は口径30.0cm、口縁上面に断面三角形の粘土板を貼り付けいわゆる鋤先状になっている。器壁も薄い作りで全体にシャープな印象を受ける。口縁部は横ナデ、内面はミガキ状の丁寧なナデ調整を加える。

35～**45**はＬ字形口縁の甕。**35**、**36**は外への張り出しは弱く、分厚い口縁部となっている。37は体部上半が内湾し、倒卵形の器形となっている。口縁部には極端に分厚い粘土紐を貼り付けており、異様な口縁部となっている。**38**も同じように断面三角形の口縁部となっている。口縁部下方に沈線１条を巡らせている。**39**は口径26.0cm体部が倒卵形であることから口縁部は内傾して、く字形に屈曲している。外面は左斜行のハケ目調整だが、拓本に示したように重なって絵画のようにも見える。

46は底径27.2cmと大きい。脚裾部ではなく甕の蓋か。外面の調整は上半がハケ目、下半が横ミガキである。胎土にはきわめて小さな砂粒が混入している。焼成良好で内外面とも褐色を呈する。

47の口径は15.4cm。口縁部は微妙に湾曲しながら立ち上がっており、破片ではその下端で内側に屈曲しているようである。器形不明。土師器とも考えたが、内面の横ミガキ、胎土、色調などからここでは弥生土器としておく。

土製品・石製品　**48**は楕円形ではないので投弾と断定はできないが、紐を通す孔もないことから垂飾品ではない。一部に布目状の痕跡がある。長さ2.76cm、断面径は2.03cm×2.31cm。**49**は磨製石斧。中程から折れ、しかも欠損が激しい。断面は扁平な凸レンズ状で両側は敲打のままであるが、欠損部以外は研磨痕が見られる。

Fig.91　第Ⅲ面の検出作業

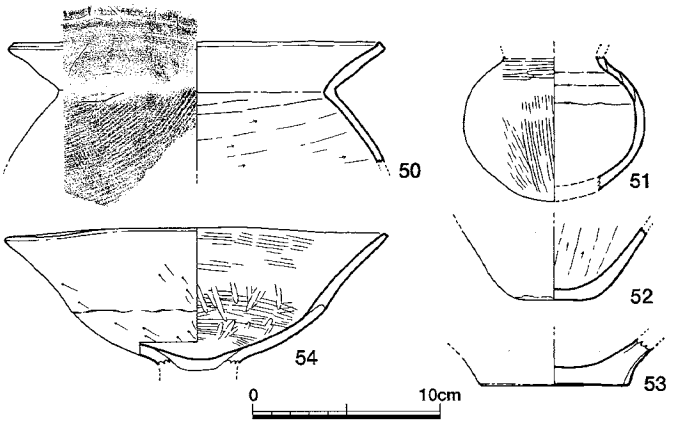


Fig.92　SC06の遺物（縮尺１/４）

土　器　50～53はまとまって出土したことから別にした。**50**は庄内式系（C系）甕である。外面調整は右上がりの丁寧な細筋のタタキで、口縁部の横ナデも丁寧である。内面削りが頸部まで達しており、屈曲もきつい。**51**は胎土が精良ではなく、作りも内面に粘土紐接合痕が残るように雑であることから、精製器種ではない小型の壷である。**52**は壷・甕類の底部と思われるが、器種・系統ともに不明である。内面調整はナデで、底部はもともと平底であったのかそれがナデて潰れたような痕跡がある。**53**は弥生土器である。器壁が厚く、底部径も８cmと大きく、内外面に粘土を貼付けている。弥生中期の壷底部であろうか。**54**は伝統的Ｖ様式変容系（Ｂ系）高坏の坏部である。坏底部にはＢ系技法である充填法（**54**は円板充填と思われる）が見られる。内外面調整とも磨滅している（特に外面）が、外面調整としては珍しく削り痕跡が確認できる。

土器群（SG）

これまでは住居跡と間違った部分の出土遺物について述べてきた。遺物の時期差や器種の組合せなどを度外視しその遺物の数量だけからすると、いかにも何かの遺構であったようにも思えるが、この他の部分の掘り下げについても同様の結果であった。

黒色粘質土は下層になるにしたがいわずかに黒みが薄くなり、黒色粘質土に掘り込まれた遺構との見分けが可能になる。後述するが古墳時代の竪穴住居跡SC01と弥生時代前期のSC07との重なり、さらに黒色粘質土下の青灰色粘質土から円形溝が検出されることから、黒色粘質土層は弥生時代から古墳時代という長い時間をかけて堆積したことになり、各時期の遺構とは別に各種の遺物も包含されていたということである。この黒色粘質土の掘り下げで、遺構には伴わないものの、まとまって出土した遺物について土器群としてその地点を示しながら記述する。なぜまとまって出土するのか、その原因や意味こそ大事だが、生活面の広がりや生活面の標高を把握をするには無視できない。また遺物の時期にも大きな混乱はないので一括資料としての意味は持っている。

SG01　SC01の南東隅付近にある土器群。**1・2**は布留式系（Ｄ系）高坏の坏部である。特に**2**は内外面とも磨滅が著しいが、**1・2**とも調整は雑である。ハケ目の痕跡が明瞭に残っており、ミガキも部分的である。**3**はＣ系小型丸底壷（久住氏分類Ｉｄ類、重藤分類壷５式）であり、重藤氏の西新町４式（久住氏のⅡＣ～ⅢＡ期相当）あたりだろう。

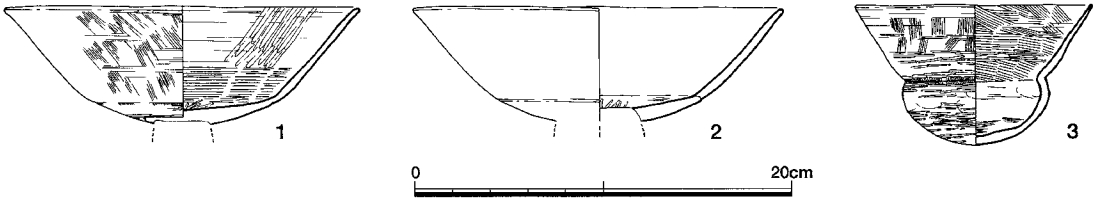


Fig.93　SG01の遺物（縮尺１/４）

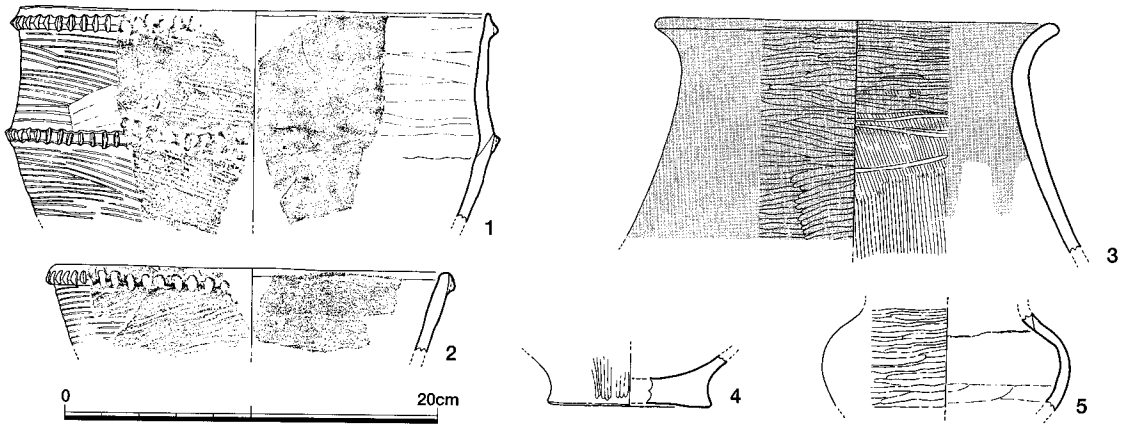


Fig.94　SG02の遺物（縮尺1/4）

SG02　Q30グリッド、SK087に接近して出土した。

土　器　**1**、**2**は突帯文土器の甕。**1**は口径25.2cm、体部中位よりやや上方で屈曲反転する器形で、口縁部の突帯は口縁端より下がった位置に貼り付けている。外面は横条痕で一部がナデ消し。**3**は口径21.6cm、内傾する頸部から緩やかに外湾して口縁部となる。外面から口縁部内面にかけて細かな横ミガキ。外面の丹塗りは口縁部内面にも垂れている。胎土、調整など美しい土器である。**5**は小型壺の胴部で最大径の位置がほぼ中位にあり、15.2cmである。器高は不明だが、張りの強い胴部である。

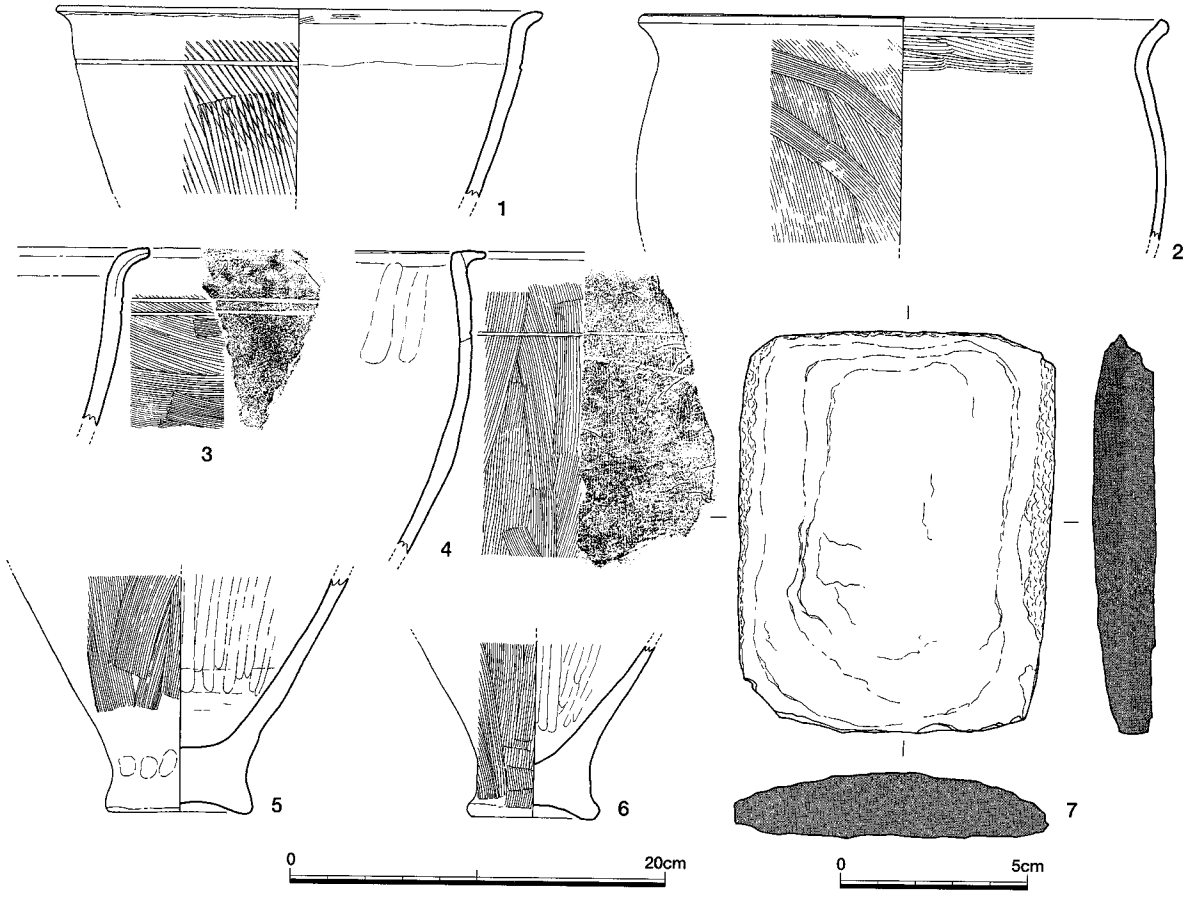


Fig.95　SG03の遺物（縮尺1/4・1/2）

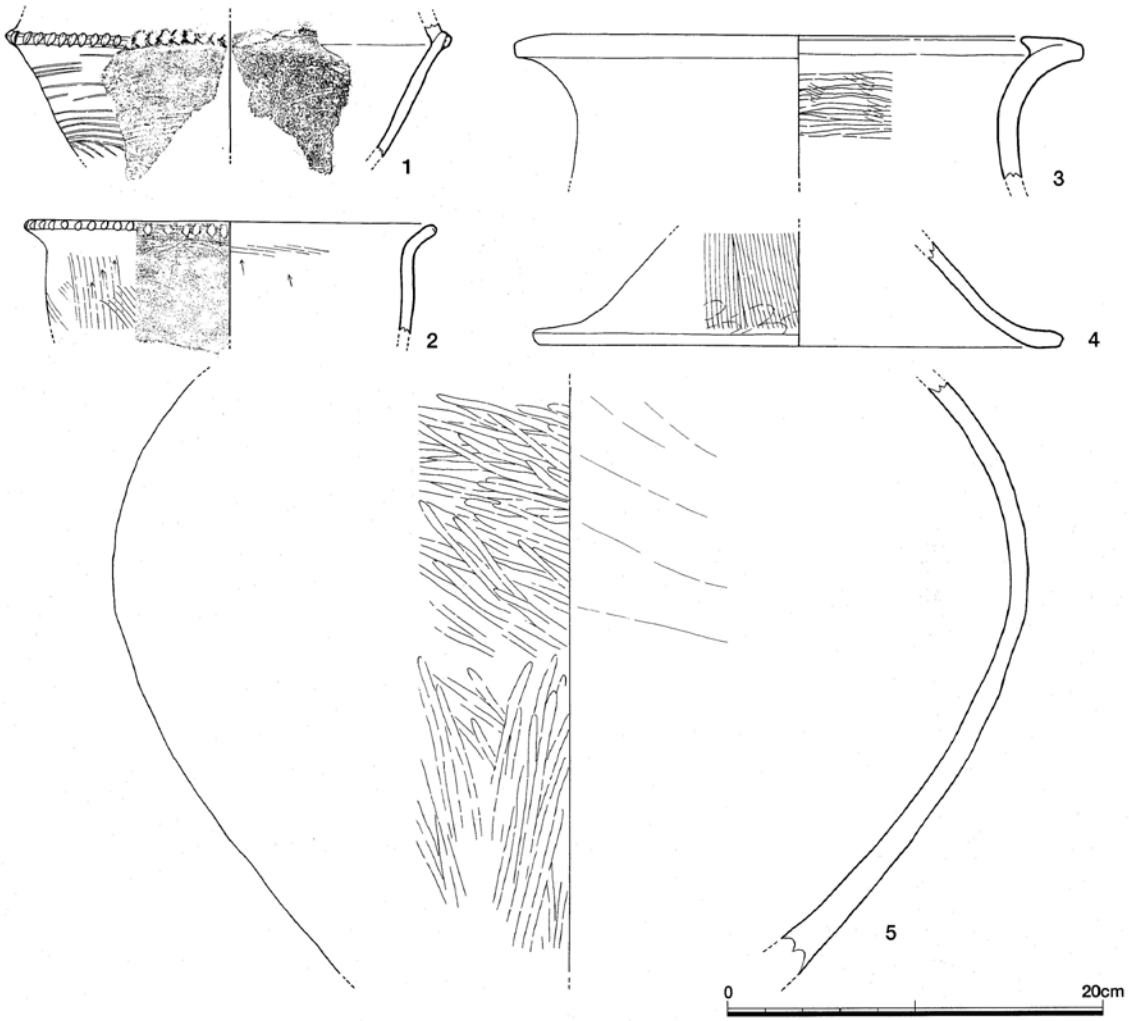


Fig.96　SG04の遺物（縮尺1/4）

SG03　Q33グリッドで出土した。弥生時代前期後半から中期初め頃の甕6点と石製品1点を図示した。**1**は口径25.8㎝、如意形の口縁屈曲は小さく短い。外面のハケ目は粗く鋭い。**2**は口径28.0㎝、張りのある体部である。外面の調整は斜行ハケ目、何度か重ねており工具の幅が分かる。**3**は**1**と同じような口縁部で、外面のハケ目調整後に口縁部下方に2条の沈線を巡らせている。**4**は口縁外端に粘土板を貼り付け、横ナデを加えて水平な口縁部を作っている。

石製品　**7**は玄武岩質の板状の石材に一部敲打を加えるなど加工しているが、用途不明。

Fig.97　SG05の遺物

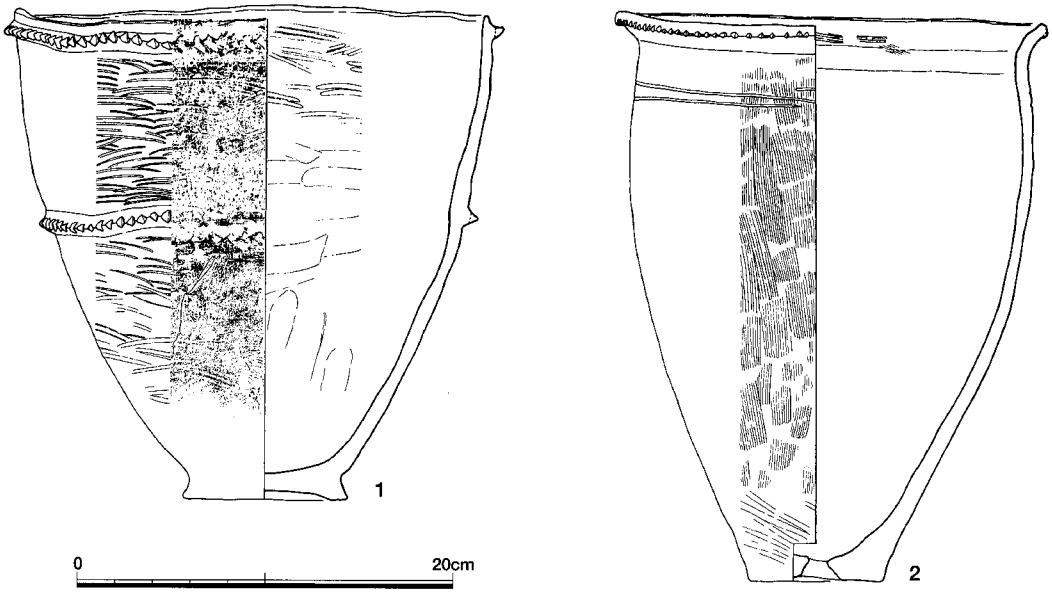


Fig.98　SG05の遺物（縮尺1/4）

SG04　P29グリッドにあり、散乱している状況であった。

土　器　1は突帯文土器。反転部は強く屈曲している。突帯下方の横条痕はまばらである。2は口径21.6cm、如意形口縁の端部断面は方形に近く、刻み目は口縁上端に達している。外面は粗いタテハケ目の後にナデ上げて消している。3は口径29.8cmの広口壺。頸部は口縁部近くで急に大きく開いている。その端部に断面三角形の粘土を貼り付け幅広の口縁部を作っている。4は口径28.0cmの甕の蓋、外面はハケ目調整。内面端部に煤？が付着している。5は壺の胴部。最大径は48.4cmで、中位より上方にある。外面はミガキを加えている。

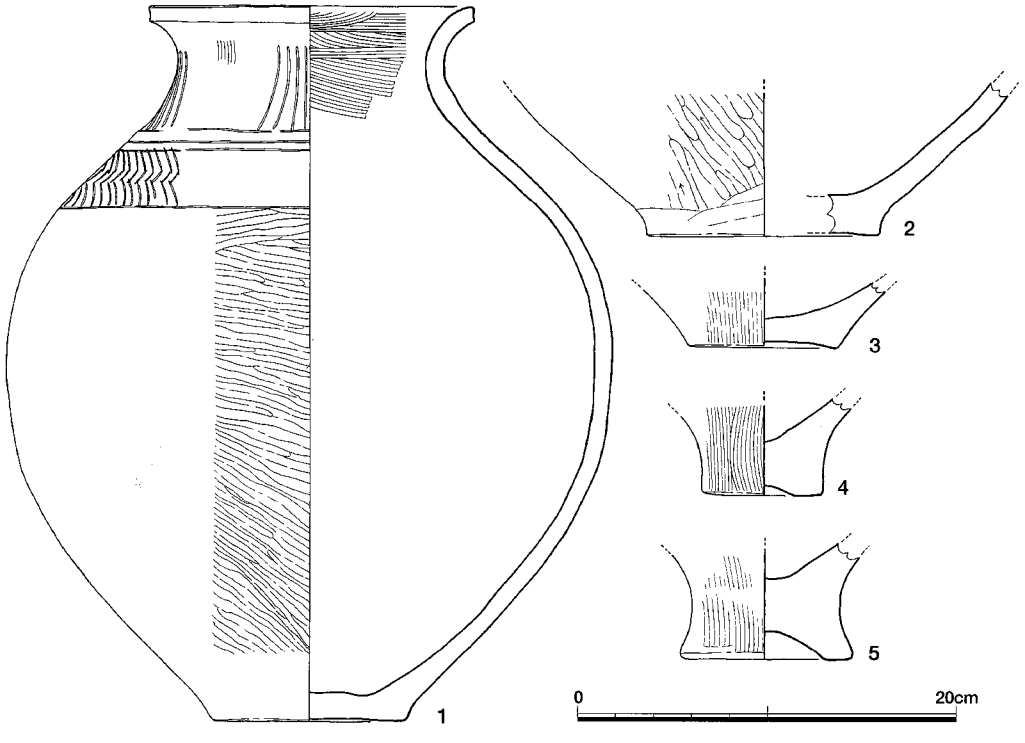


Fig.99　SG06の遺物（縮尺1/4）

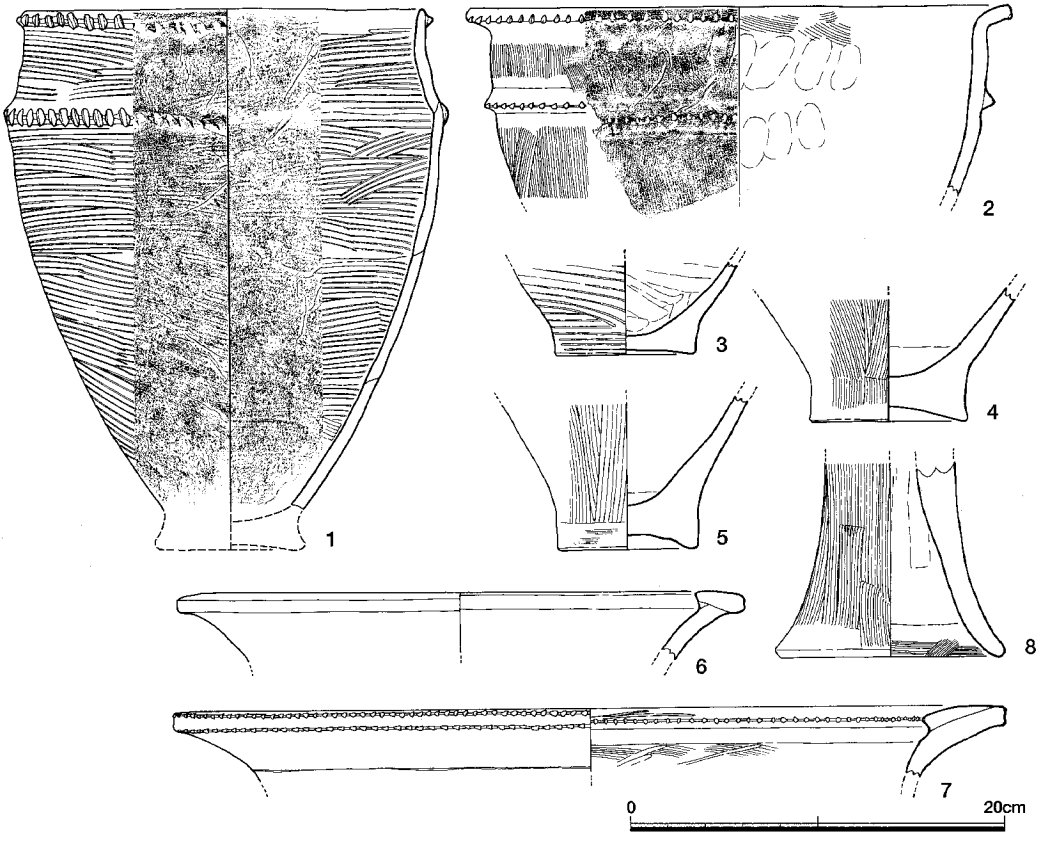


Fig.100 SG07の遺物（縮尺1/4）

SG05 P32グリッドにある。

1は潰れた状態で出土したが写真のように足りない破片もあるが、ほぼ完形品に復元できた。口径25.9cm、器高26.2cm。全体に膨らみがある器形で、突帯は口縁部より下に貼り付けられているが、口縁部と同様に波打っている。刻み目は左方向から鋭く入れている。**2**は板付Ⅱ式の甕で底部に小孔がある。口径20.7cm、器高30.3 cm。体部に張りはなく細身の器形となっている。

SG06 R25グリッド、SK076の西側で出土した。

1～**3**は壺、**4**、**5**は甕底部。**1**は接合復元した壺。口径17.2cm、器高37.8cm、胴部の最大径32.2cm、底径10.2cm。長く延びた胴部上半と頸部に沈線で文様を描いている。

SG07 土壙SK032とSK123のに位置し、分散している。このうち実測可能な刃破片7点を実測、図示した。**1**は突帯文土器の甕。底部を欠いているがほぼ全形を想像することができる。口径22.0cm、推定器高28.8cm。よく整った器形で、体部反転は中位よりかなり上にある。突帯は口縁端部よりわずかに下がって1条貼り付け、左斜行の刻み目を入れている。内外面の全面を横条痕で調整している。**2**は如意形口縁部をもつ甕。体部上方に突帯を巡らせ、口縁部とともに刻み目を施している。**3**は突帯文土器の甕底部。外面は横条痕、内面はヘラ状工具による左上がりのナデ上げ。外底は削り状の擦痕があり、わずかに上げ底気味。ただし外端部の張り出しはない。**4**、**5**は弥生土器の甕底部。どちらも上げ底。**6**、**7**は広口壺の口縁部破片。2点とも大きく外開きする頸部の上端に粘土板を水平に貼り付けて幅広の口縁部を作っている。口径は**6**が30.0cm、**7**が44.2cm。**7**の口縁部には、外端上下だけでなく、内端にも刻み目を加えている。内面の**8**は器台、底径12.2cm。

SG08 P28グリッドにあり、長軸約1mの楕円の中にまとまっている。いずれも破片ばかりで接合完形品になるものはない。写真のように木棺墓SA01の西側に隣接しており、木棺墓が掘り込

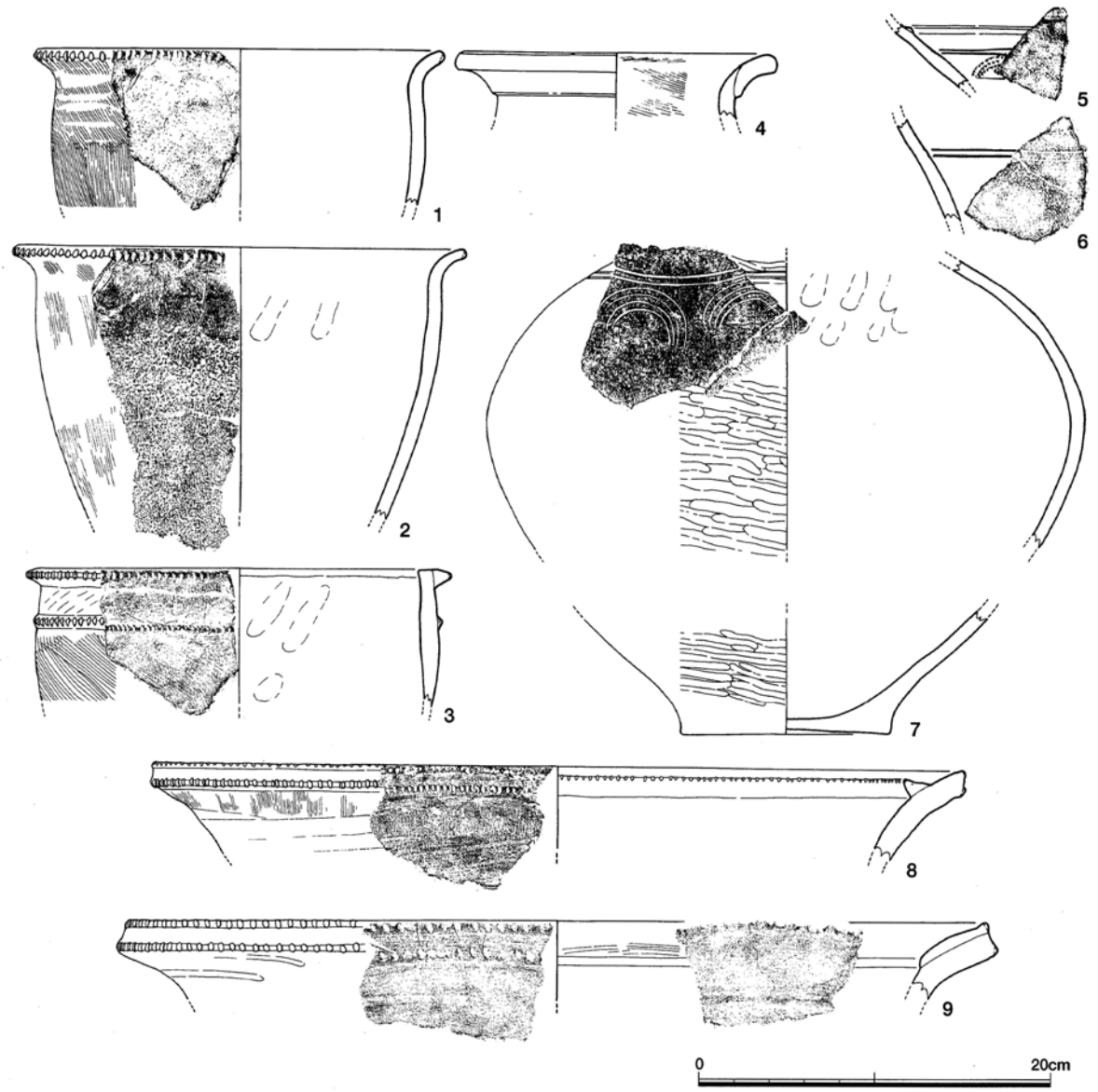


Fig.101　SG08の遺物（縮尺1/4）

Fig.102　遺物出土状況

まれた土層内とも見えて、木棺墓の時期が古いようにも見える。しかし、木棺墓自体が削平されていることを考慮すると、削平後の土器群とも考えられ、直ちに先後関係を決めることはできないが、これらの土器の時期と大きな差はないと推測している。1～3は甕、1、2の口縁部は如意形で下端にだけ刻み目を施して

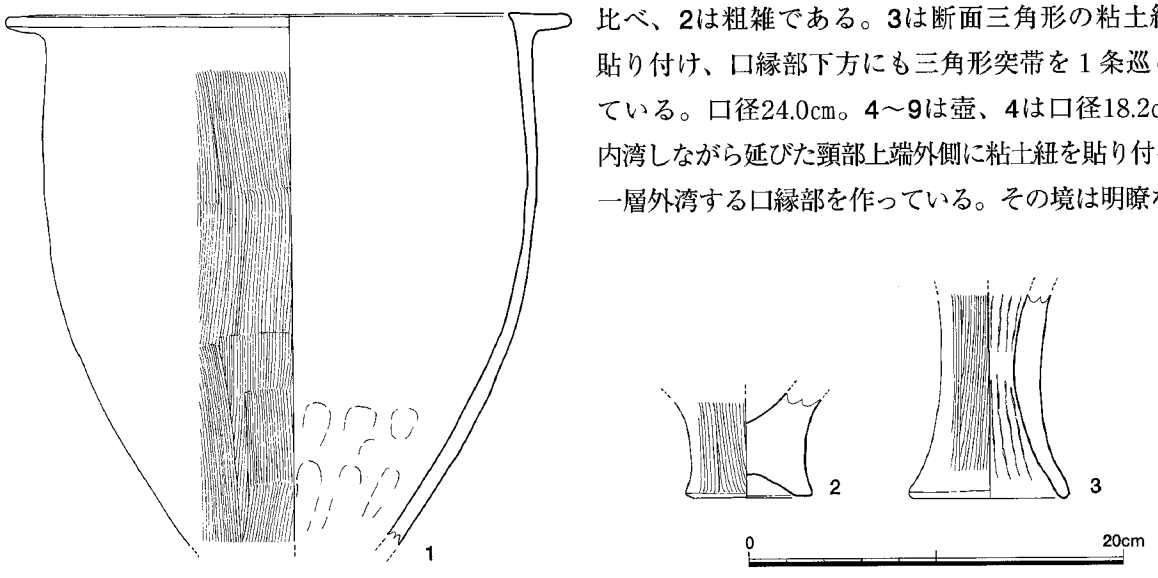


Fig.103　SG09の遺物（縮尺1/4）

いる。口径は23.4cmと25.6cm。外面調整は丁寧な1に比べ、2は粗雑である。3は断面三角形の粘土紐を貼り付け、口縁部下方にも三角形突帯を1条巡らせている。口径24.0cm。4～9は壺、4は口径18.2cm、内湾しながら延びた頸部上端外側に粘土紐を貼り付け、一層外湾する口縁部を作っている。その境は明瞭な段になっている。5、6は胴上半部の文様。破片のために傾きが不正確だが、同じように二枚貝を使って多重弧文を連続させている。7は壺の胴部と底部、同一個体と思われるが、接合しているわけではない。胴部はその最大径の位置が中位よりわずかに上方にあり、さらにその上方に文様をヘラ状工具で描いている。まず頸部との境に2状の沈線を巡らせ、その下方に四重の連弧文を、沈線より上方の頸部には縦の羽状文？を加えている。外面の調整は文様より底部にかけて横ミガキ。8、9は口径46cmを超す大型壺。どちらも口縁外端に刻み目。

SG09　P27グリッドにあり、3点を図示した。1はL字形口縁の甕、口径30.2cm。口縁部下でやや締まっているが、砲弾形に近い器形である。外面は丁寧な縦ハケ目。内面の底部付近は指頭圧痕が2段にわたって付いている。2は甕の上げ底の底部。厚みがあるが底部外縁への張り出しはない。3は器台。軸がやや傾いているが、丁寧な調整をしている。

SG10　P27グリッドの南寄りにある。1は壺底部。平底であるが微妙な凹凸がある。底径8.0cm、胎土は1㎜大の砂粒を多く含んでいる。外面は粗いナデ調整、外底部にかけて黒班がつく。2～5は甕。2の口径は18.4cm。如意形口縁部の刻み目は上端まで達しているが、浅く間隔も不規則である。また外面のハケ目は粗く、器壁も均一差を欠き、粗雑な印象を受ける。3の口縁部は分厚い作りのL字形で、体部上半の内傾が強いことから倒卵形の器形となるのだろう。口径は25.2cm。外面の縦ハケ目調整は、口縁部下が粗く2種の工具を使い分けている。4、5は甕底部。4は上げ底で厚みがあり、底径7.8cmと小さな作りである。5は底部は6.8×6.2cmの楕円形で蛇の目のように周縁を残し中央部がわずかに凹んでいる。体部との境は括れずに直線的に延びている。

SG11　027グリッドの南西隅に当たる。数点だけなので土器群と呼ぶにはふさわしくない。1は壺の頸部破片。胎土には砂粒がほとんどなく、焼成もよい。外面の色調は赤茶色、内面は灰色。

SG12　SK018の西側周辺で出土した。うち1～6の甕、7の壺、8の鉢、計8点を実測、図示した。1～4も甕は如意形口縁を持つがいずれも短く屈曲も弱い。1の口径は17.0cm、口縁部下に細くて浅い沈線1条を巡らせている。外面の調整はハケ目ではなく、ヘラ状工具による真上方向のナデ上げ。内面には対応するように指頭圧痕が見られる。2は体部上半が内側に傾いているがその外側に粘土を貼り付けて厚みを加え、その境には刻み目を入れている。ハケ目調整の工具は粗く、2度重ねをし

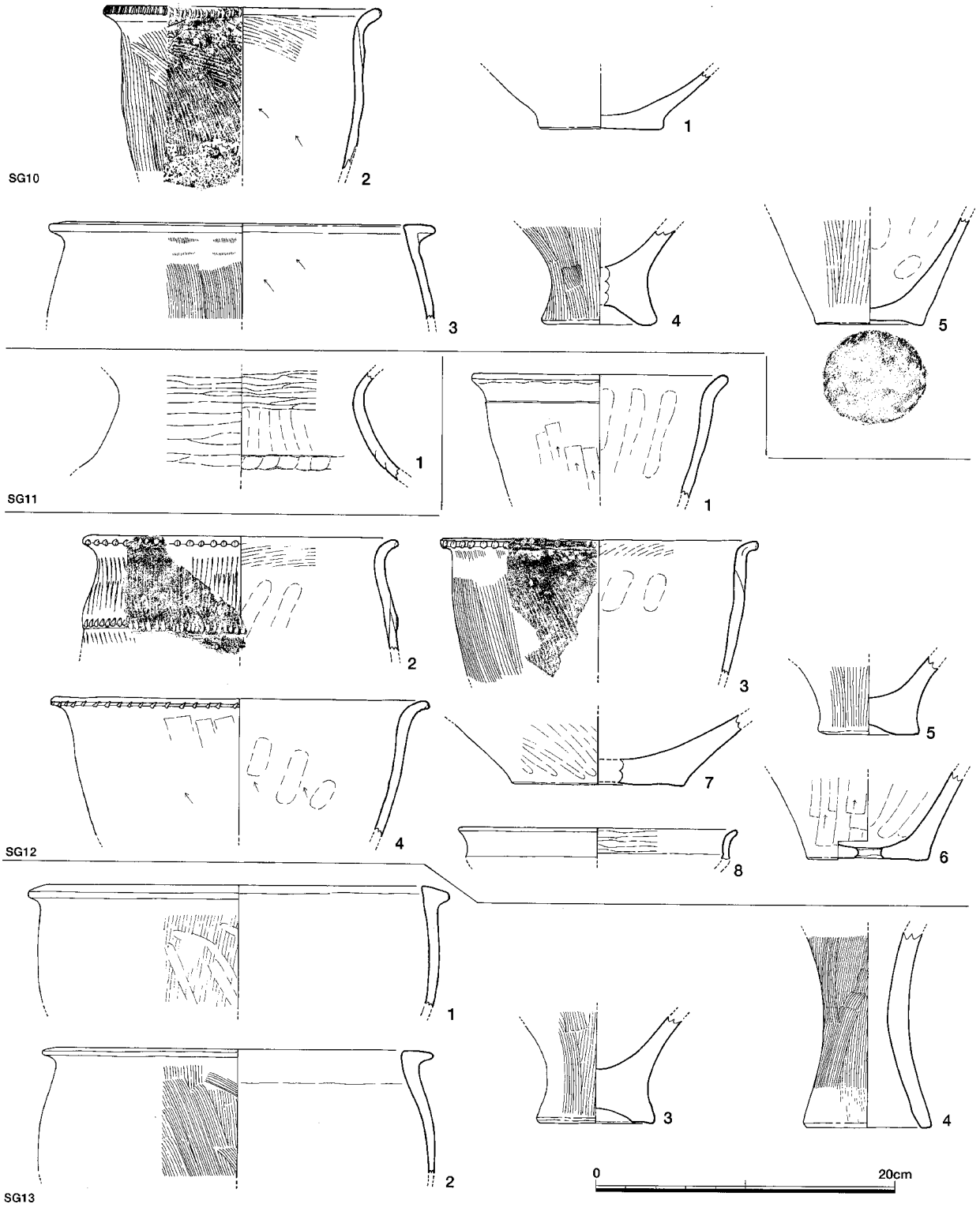


Fig.104 SG10～SG13の遺物（縮尺1/4）

ていない。3はきわめて短い如意形口縁で、口径は21.2cm。口縁部の刻み目は棒状の工具を使い丸みのある六角形をしている。4の体部はやや外開きとなり口径も25.4cmと大きい。口縁の刻み目は左方向より加えられており、小さく、また間隔がある。5、6は甕底部。6には、焼成後に穿った径約1.7cmの小孔がある。甑として使用したのか。外面はヘラ状工具によるナデ上げ調整。7は壺の底

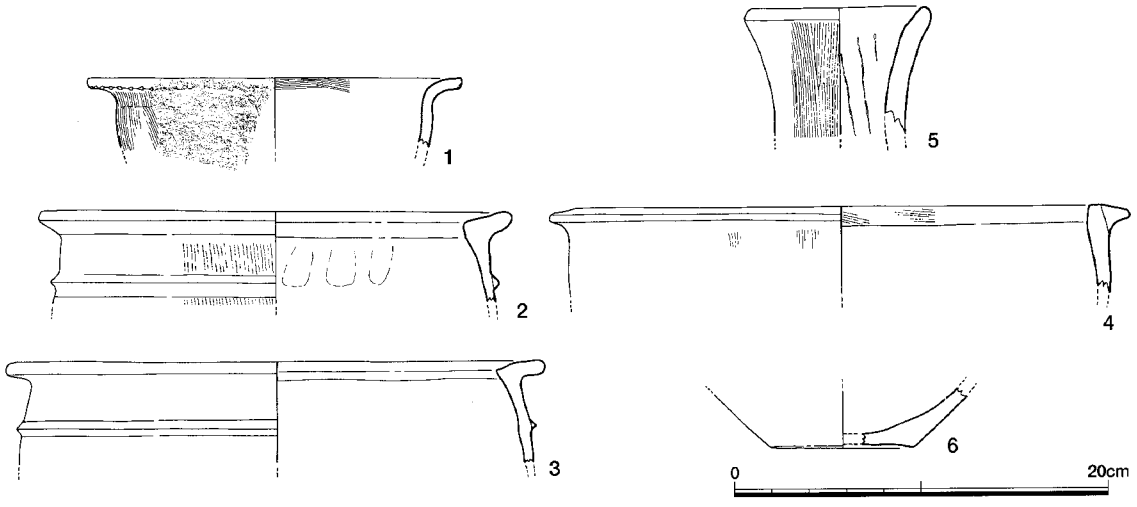


Fig.105　SG14の遺物（縮尺1/4）

部、径は11.4cm。胎土は砂粒が少ないがきめが粗い。**8**は口径18.6cmの鉢。体部から反転して口縁部を作り、端部はさらに小さく外湾する。精良土が用いられ堅緻な焼成である。内外面とも須恵器のような色調となっている。外面は摩耗しているが、内面は横ミガキ調整。

SG13　O28グリッドの南寄りで集中して出土した。**1**～**2**は肥厚して短いL字形口縁の甕。口縁部上面は**2**は水平だが、**1**は外側に傾き、下方に垂れている。**3**は上げ底の甕底部。**4**は器台。1㎜大の砂粒が多いが胎土は密。

SG14　北拡張区のO31グリッドで出土した遺物を一括した。群としてまとまりがあるわけではないが、1点ごと出土位置を記録しながら取り上げている。**1**～**4**は甕。**1**は口径19.8cm、器壁の薄い作りで、口縁部は強く屈曲し、水平に長い作りである。その下端に細かな刻み目を加えている。口縁部内面は横ハケ目、体部外面は縦ハケ目調整。胎土に小砂粒多く、灰色の色調を呈する。

2～**4**の3点はL字形口縁の甕。**2**、**3**は口縁部上面が内傾し、体部上半も内側に傾いていることからく字形に近い。口径は**2**が25.4cm、**3**が28.6cmを測る。どちらも口縁部下に断面三角形突帯を貼り付け、横ナデを加えている。**4**は30.8cmと大きめの口径。断面台形の粘土板を貼り付けて口縁部を作っている。内端部は横ハケ目で微妙に凹んでいる。外面は縦ハケ目の後にナデている。**5**は器台、外面は不明瞭ながら細かなハケ目が施されている。**6**は壺の底部。底径6.6cm。胎土には1㎜大の砂粒を含み、特に精良土と言うことではない。内外面ともナデ調整。外面は滑らかである。

SG15　この3点は031グリッドで出土した。**1**は口径21.6cmの突帯文土器の甕。断面蒲鉾形の突帯には、真上から細い断面方形の工具を用いて左斜行の刻み目を密に入れている。外面は横条痕では

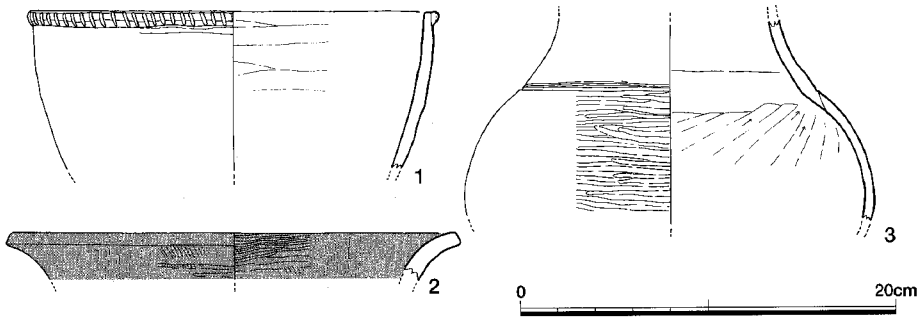


Fig.106　SG15の遺物（縮尺1/4）

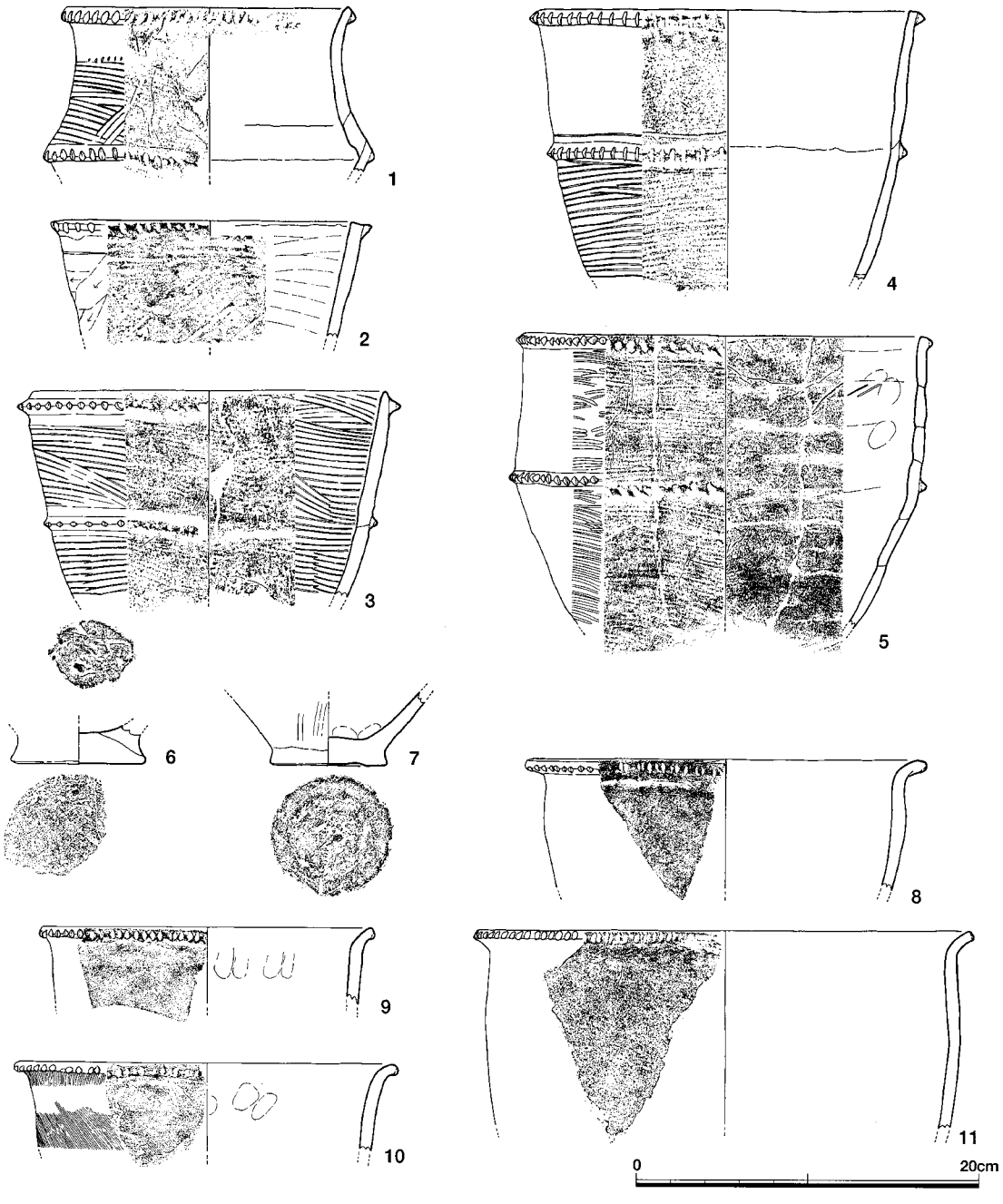


Fig.107 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4）

なくナデ調整。内面はヘラ状工具の横ナデで特徴的である。口縁部は水平ではなく、波打っている。2、3は壺。2は精良土を用いて堅緻な焼成をしている。内外面とも縦ハケ目の後に細かな横ミガキを加え、さらに丹塗りを施している。3は球形の胴部に内傾する頸部が付いている。胴部最大径は21.4cm。胴部の中位に当たるのだろう。頸部への移行部には、沈線を入れて明確な境を表示している。外面は細かな横ミガキで光沢が出ている。胴部内面は右上がりのナデ調整。

その他の遺物

これまで竪穴住居跡と予想した範囲で出土した遺物、及び第Ⅲ面で遺構には伴わないものの群としてまとまりがあるものについて記述してきたが、これらに属さない遺物も多い。中には第Ⅱ面の掘り

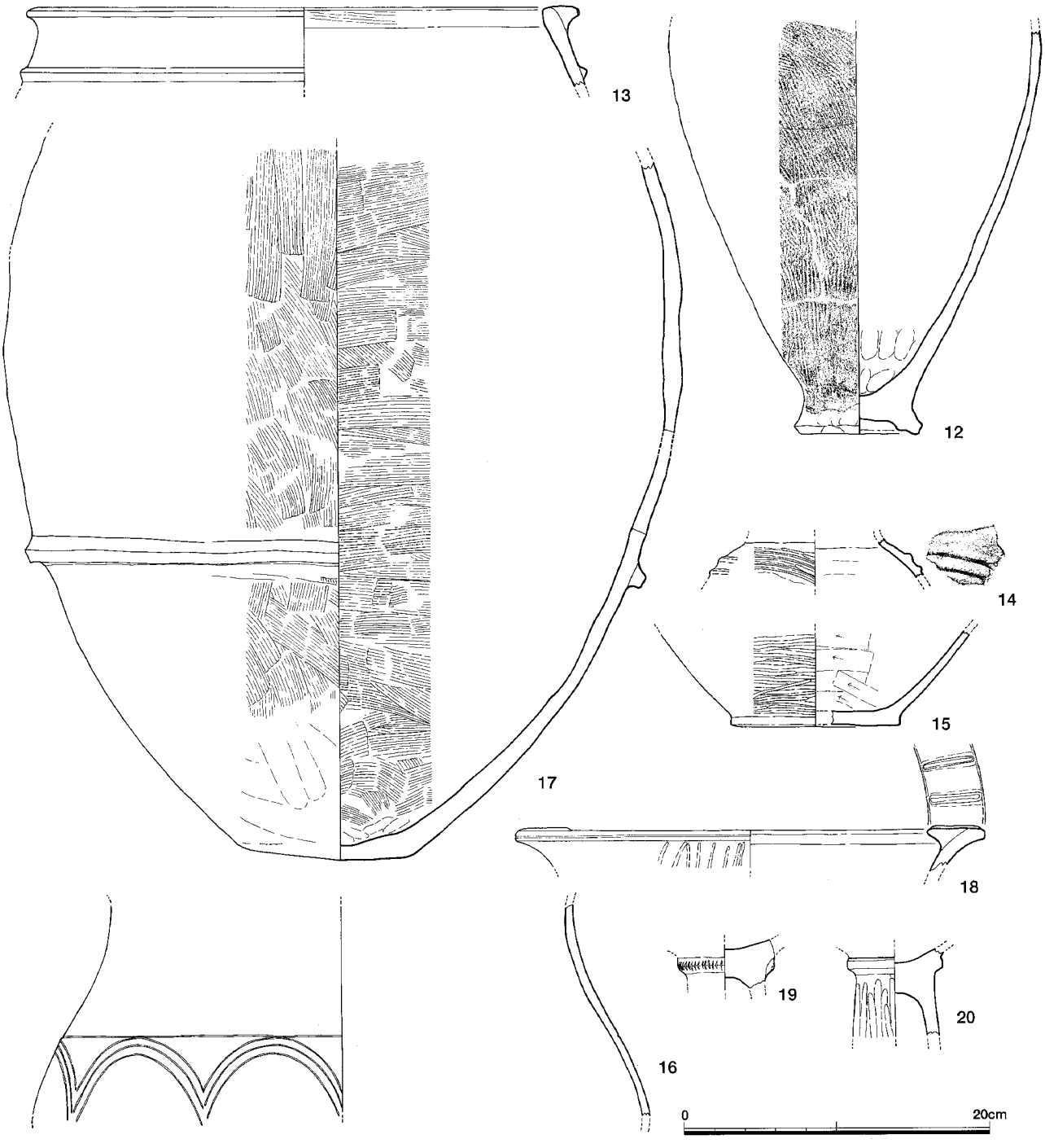


Fig.108　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4）

残しや攪乱などによって古墳時代や弥生時代後期の遺物も含まれているが、数量的にはきわめてわずかであり、突帯文土器と弥生時代前期の土器が大部分を占めている。特に目立ったのが石製品の多さであるが、黒色粘質土の下層に近づくほど弥生前期に絞られ、その時期の遺構検出に期待が高まった。

1～**7**、**12**は突帯文土器。体部の反転、体部上半部の傾き、さらに突帯の貼り付け位置、刻み目の付け方などによっていくつかに分類ができるが、突帯文土器の通常の特徴と言うことができる。**8**から**11**は如意形口縁を持つ弥生時代前期の甕。口縁下端に刻み目を加える。**13**は倒卵形体部の甕、弥生時代中期。**14**～**16**は壺。**14**は胴上半部の小破片。断面三角形の粘土紐を貼り付け文様としてい

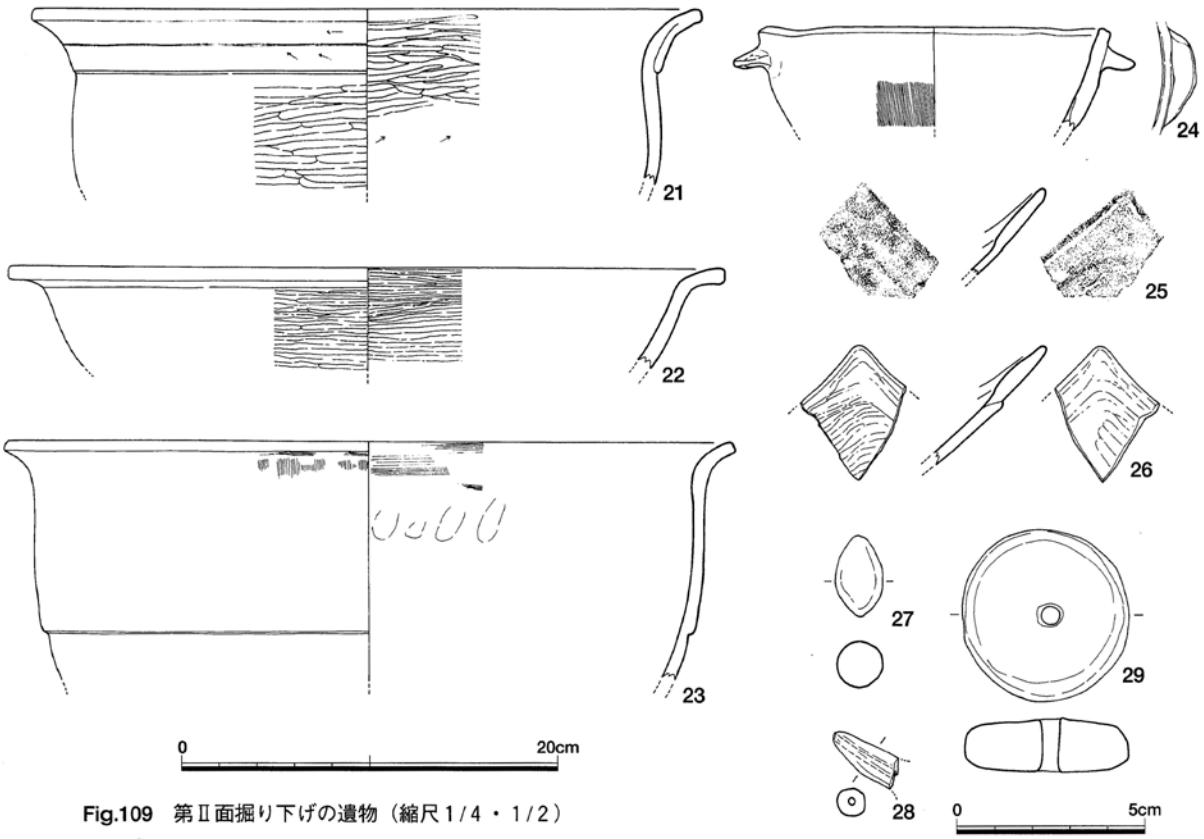


Fig.109　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4・1/2）

る。おそらく土壙SK024出土の壺のような二重連弧文と思われる。**16**は胴部から頸部にかけての破片。その境は明瞭でなく、その移行部下方に三重の連弧文を細い沈線で描いている。**17**は胴部上半を欠いて全形を知り得ないが、器形から弥生時代後期の甕と分かる。底部は丸底に近く、胴部中位と底部との間に断面台形の突帯を1条貼り付けている。**18**は弥生時代中期広口壺の口縁部。上面に2列の貼り付け文がある。**19**、**20**は高坏の脚柱部。坏部との境に断面三角形の突帯を貼り付けている。**21**～**26**は鉢。**21**～**23**は深鉢で40cm前後の広い口縁部は如意形に外湾している。**24**は口縁部下に三日月状の突起を貼り付けている。おそらく相対する位置にもあったのだろう。復元口径は18.2cm。突起は小さく取っ手としての機能は弱い。**25**、**26**は方形浅鉢の口縁部。小片のために傾きは不正

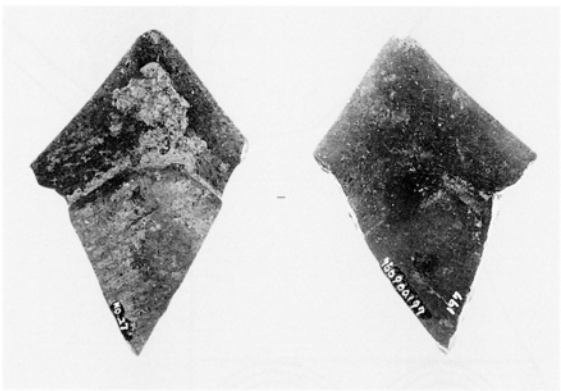


Fig.110　第Ⅱ面掘り下げの遺物

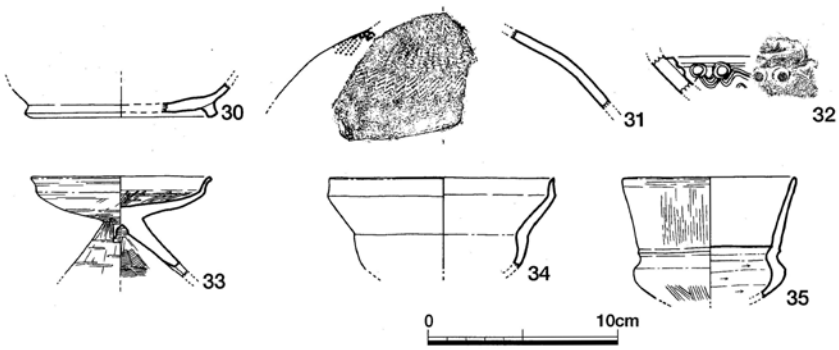


Fig.111　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4）

確であるが、大きく開く器形。２点とも内面にわずかながら段がある。27は投弾。28は本体から剥離した注口。29は土製の紡錘車。直径4.33cm。30は焼きがやや甘い須恵器高台付椀である。高台は屈曲部に貼り付けている。32、33はＣ系加飾二重口縁壷の胴部片だろう。34はＣ系小型器台である。脚頂部内面の凹みは軸芯痕ではなく成形時の痕跡だろう。久住ⅡＣ期以降に見られる形態である。35・36は小型丸底壷だが、35は横ナデ仕上げ、36も精良胎土でなく器壁もやや厚い。

石製品　打製石鏃、磨製石鏃、磨製石剣、石包丁（石製品穂摘み具）、扁平片刃石斧、方柱状片刃石斧、太形蛤刃石斧、砥石、紡錘車など豊富な種類の石製品が出土しており、図化不可能な小片や剥片を除くほとんどの石製品を実測している。1～20は黒曜石製の打製石鏃。1は凹基無茎式。2～16は二等辺三角形で、基部がわずかに凹んでいる。13は主要剥片面を残している。16は出土石鏃の中では大型で、基部の幅が広い。17～20は、柳葉状の細身の石鏃で基部の作りが多様である。20は弱い凹基状で長さ4.6cm。21～26は磨製石鏃。21は柳葉状で両端を欠いているが22のように有茎式だったのだろう。断面は扁平な菱形で、細かな研ぎ出しによって両面とも明瞭な鏑が通っている。22も同じような長手の柳葉状で茎を持つ。関は、身に対して直角ではなく緩やかに湾曲して茎になっている。ただし左右対称ではなく、精巧な作りではない。茎も雑な加工で身からの鏑もとぎれている。再加工品の可能性もある。23は全体に剥離が進んでいるが、丸みのある二等辺三角形の磨製石鏃。24の身の断面は薄い菱形で、その分鋭利な作りとなっている。切っ先と基部を欠いているが、基部近くの両側に小孔のような加工が認められる。これを図では逆刺のように示したが、類例に乏しくやや無理であろう。25は大型の有茎式で全面が風化し、研磨痕は不明。切っ先から茎までの全長は9.95cm、関部が身の最大幅になっており2.8cmである。側辺の刃部は労面から研ぎ出されているが鏑はない。26は先端を失っているが、側辺のカーブからではなく磨製石鏃としておく。風化で研磨痕が残っていな

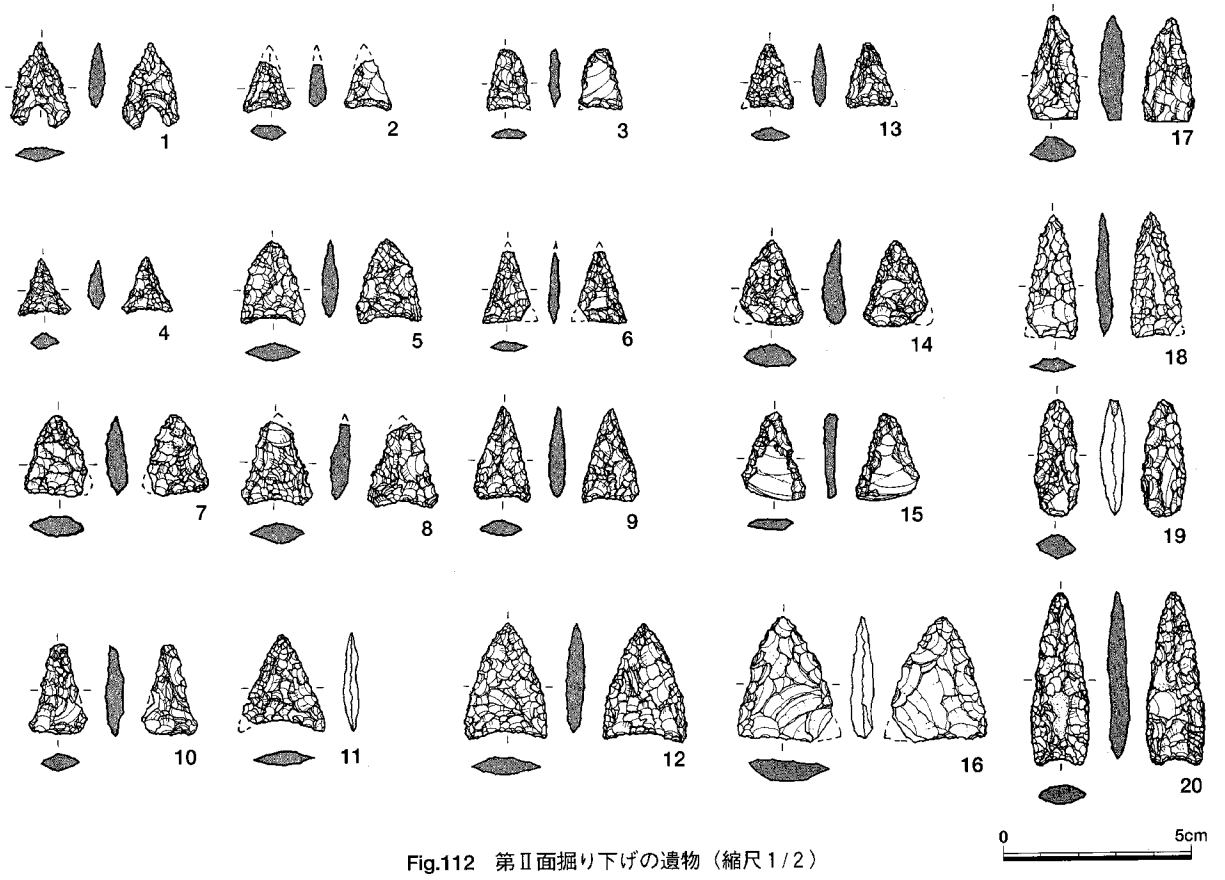


Fig.112　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２）

い。**27**～**29**は磨製石剣、破片のために全形不明。**27**は身の一部、断面は鎬を持つ菱形。風化で研磨痕は観察できない。**28**は身の一部。幅3.5cm、鎬部での厚さは0.7cm。**29**の身はやや厚みがあり、直線的な菱形にはなっていない。石材は輝緑凝灰岩のような小豆色をしている。**30**は大型の石包丁。もともと石包丁という用語は、穂摘み具と考えられるので紛らわしく不適切であるが、**30**はとても穂摘み具とは思えない重量と大きさである。遺構に伴わず出土した。半月形外湾刃式で上辺（背）長は25.95cm。全体に風化、剥離していることもあって刃部は鈍い。身に紐通しの小孔はなく、上辺両側の抉りを利用して手に固定する板枠とか紐などの装置が組み合わさったのだろう。そ

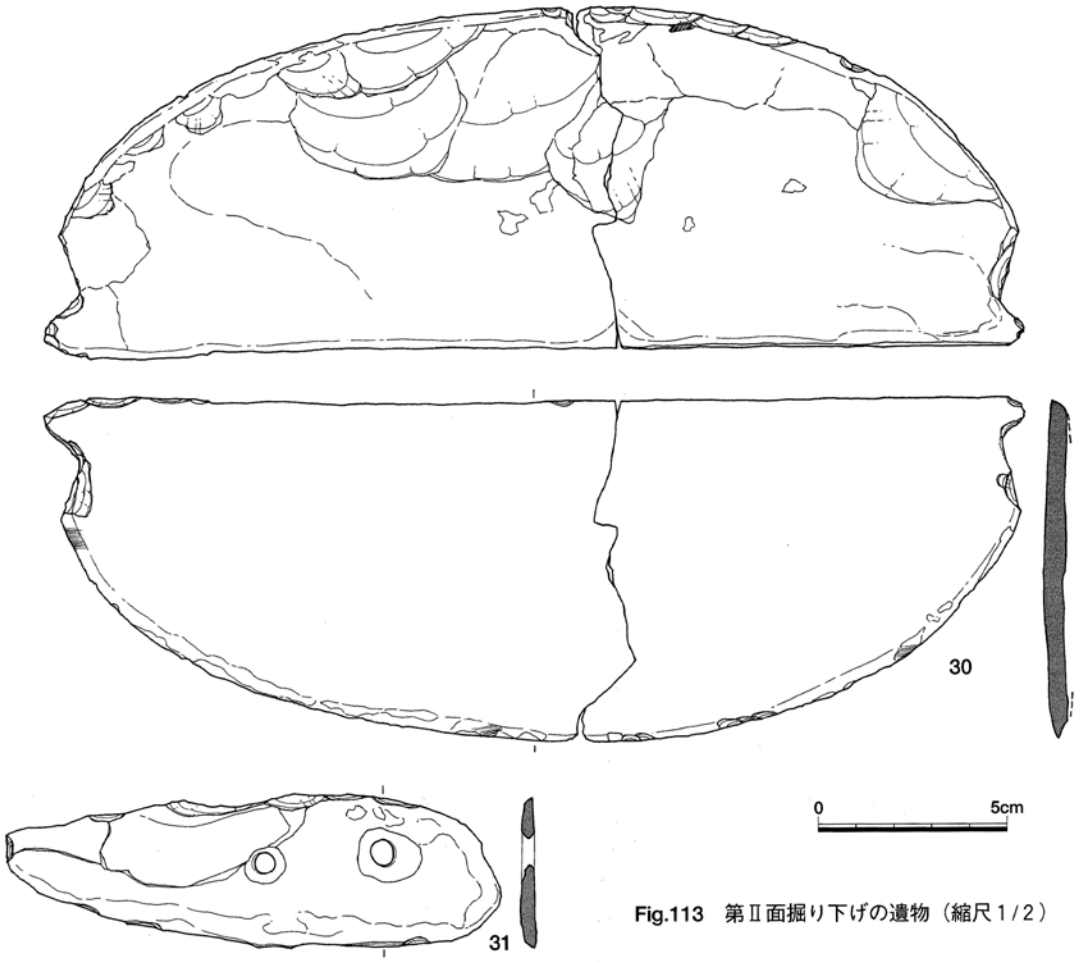


Fig.113　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2）

Fig.114　第Ⅱ面掘り下げの遺物

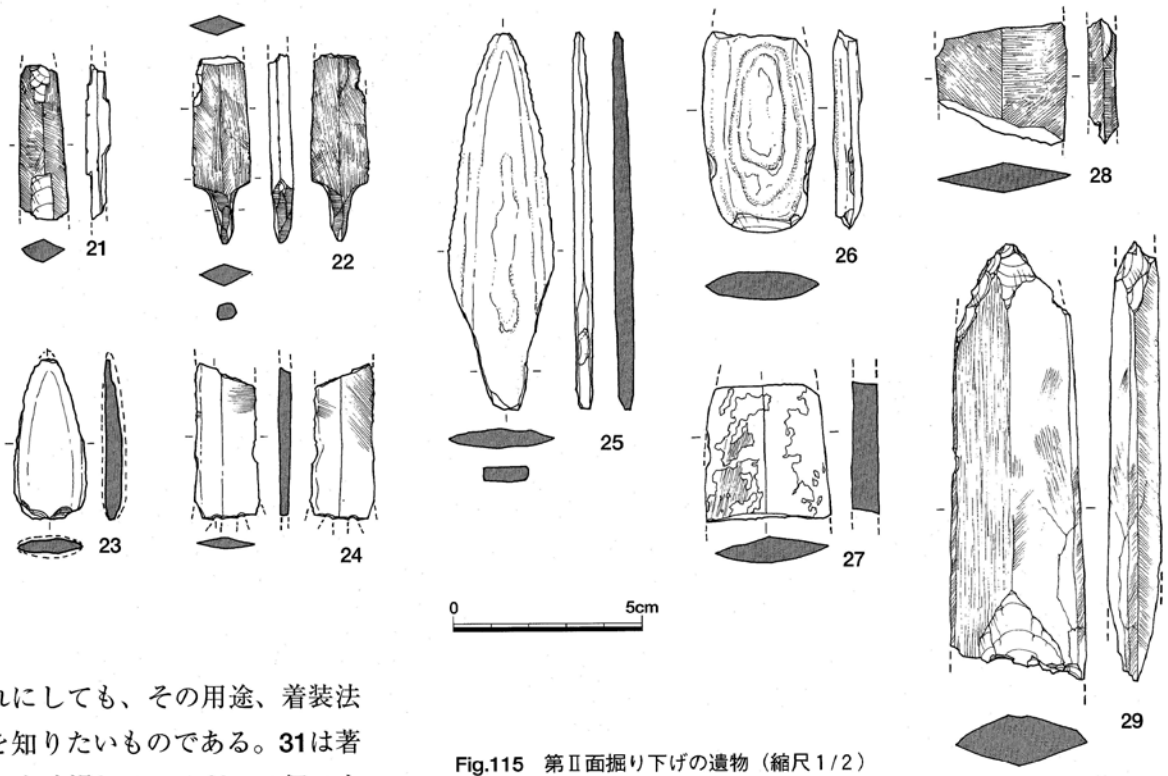


Fig.115　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2）

れにしても、その用途、着装法を知りたいものである。**31**は著しく破損しているが、2個の小孔が残っていることから石包丁とした。小孔は両面から穿たれており、その間隔は3.2cmである。**32**～**36**は扁平片刃石斧。身幅が狭く石のみの呼び名にふさわしいものと、**37**、**38**のように幅広の2種がある。**39**～**45**は方柱状片刃石斧。方柱状の断面であるが抉りはない。**42**～**45**はいずれも頭部を欠いているが、断面は長方形に近い蒲鉾形である。**42**～**44**の刃部が両面から断面三角形状に研磨されるているのに対し、**45**は、一方が直線的な研磨となっている。**42**～**44**はやや軟質の灰緑色頁岩、**45**は硬質の黒灰色頁岩である。**46**～**52**は太形蛤刃石斧。7点の石斧には、断面が円形で重厚なものと、断面が扁平な円形の2種がある。また頭部が丸みのあるもの（**46**、**48**～**51**）や直線

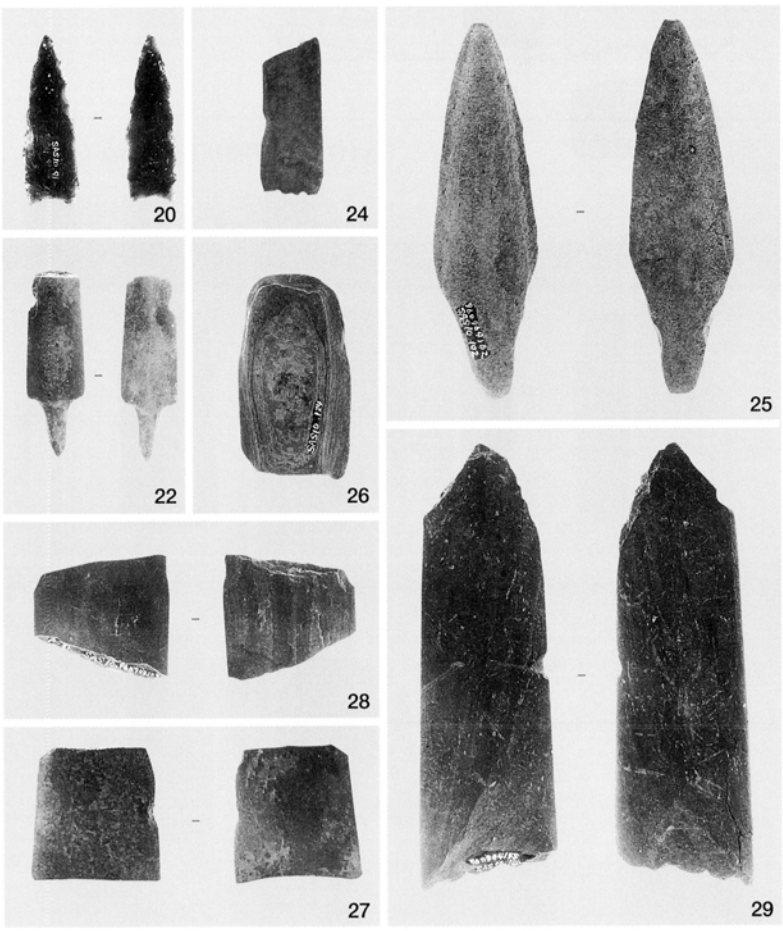


Fig.116　第Ⅱ面掘り下げの遺物

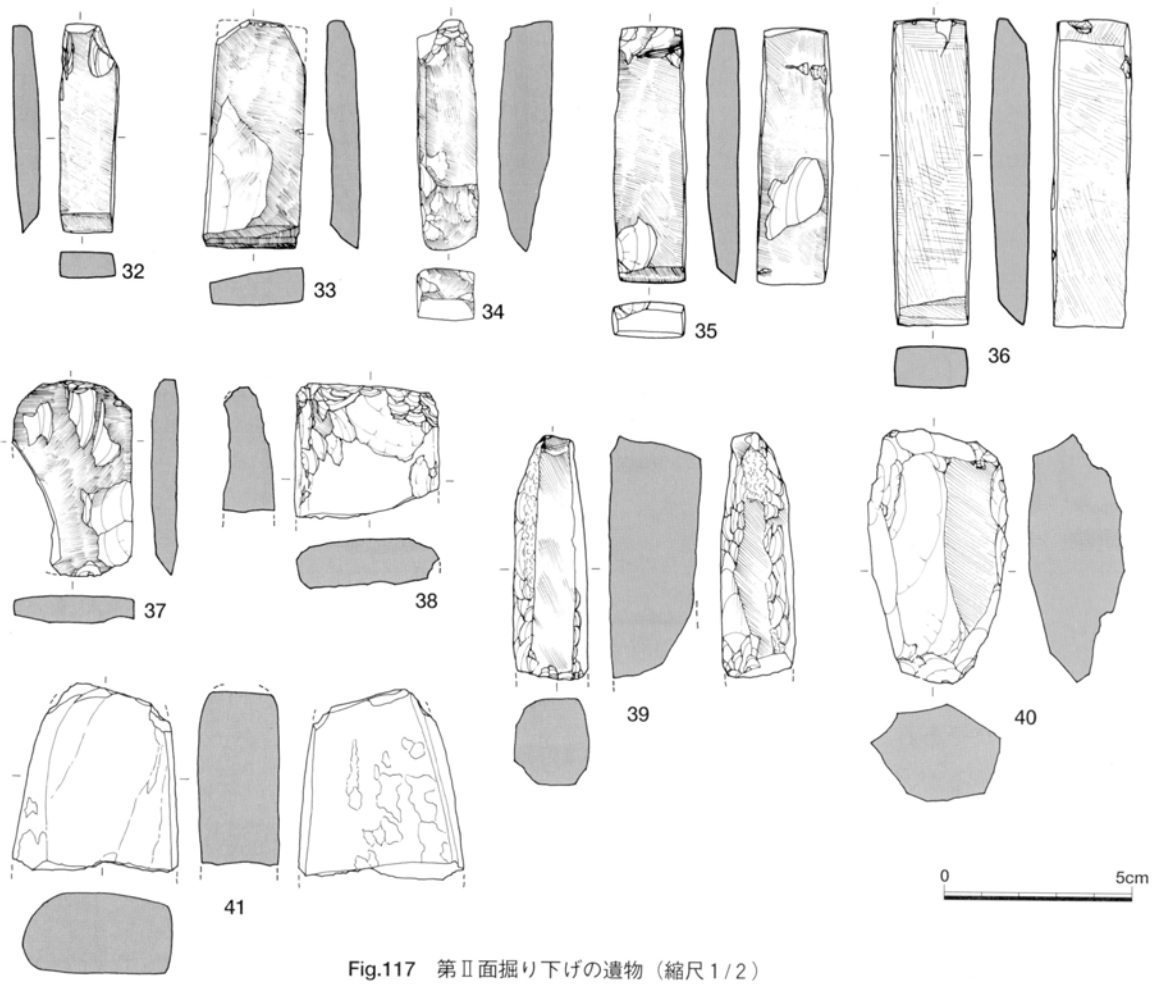


Fig.117　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺 1 / 2）

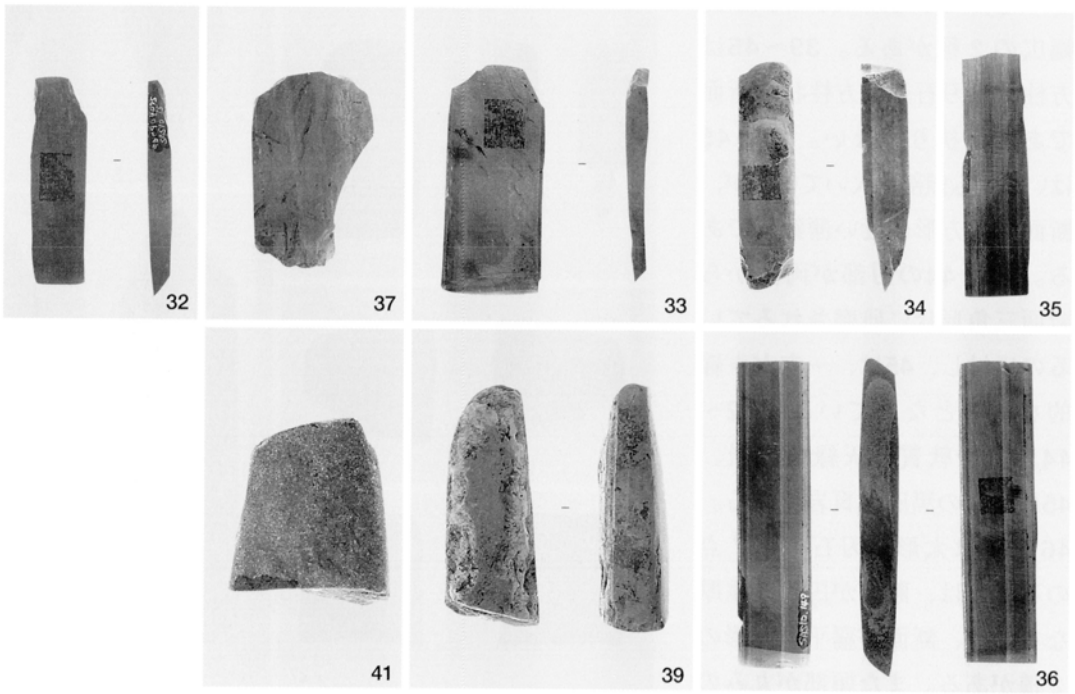


Fig.118　第Ⅱ面掘り下げの遺物

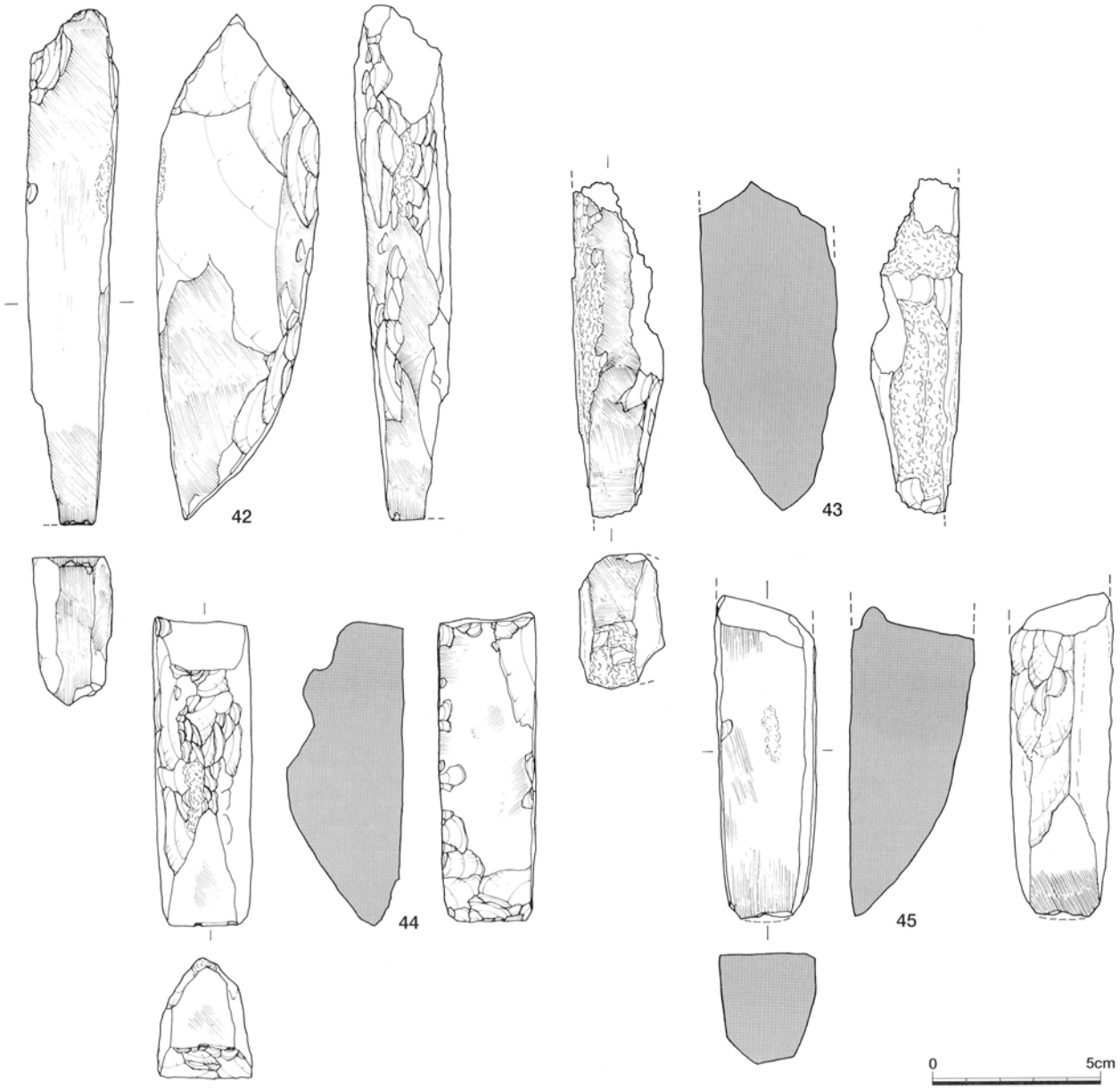


Fig.119　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺 1 / 2）

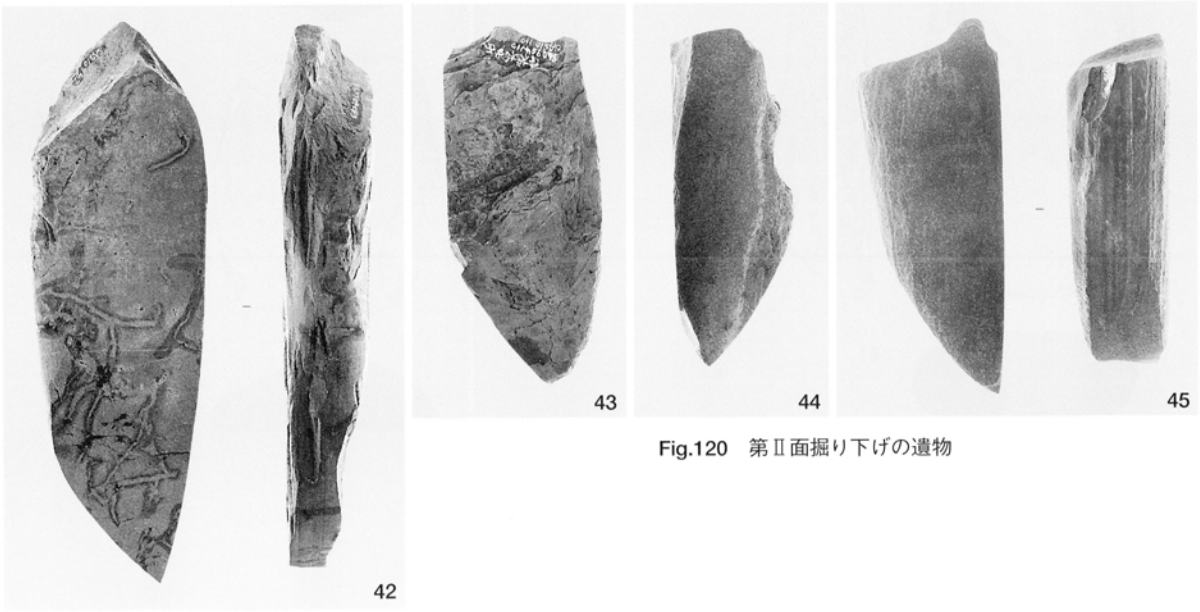


Fig.120　第Ⅱ面掘り下げの遺物

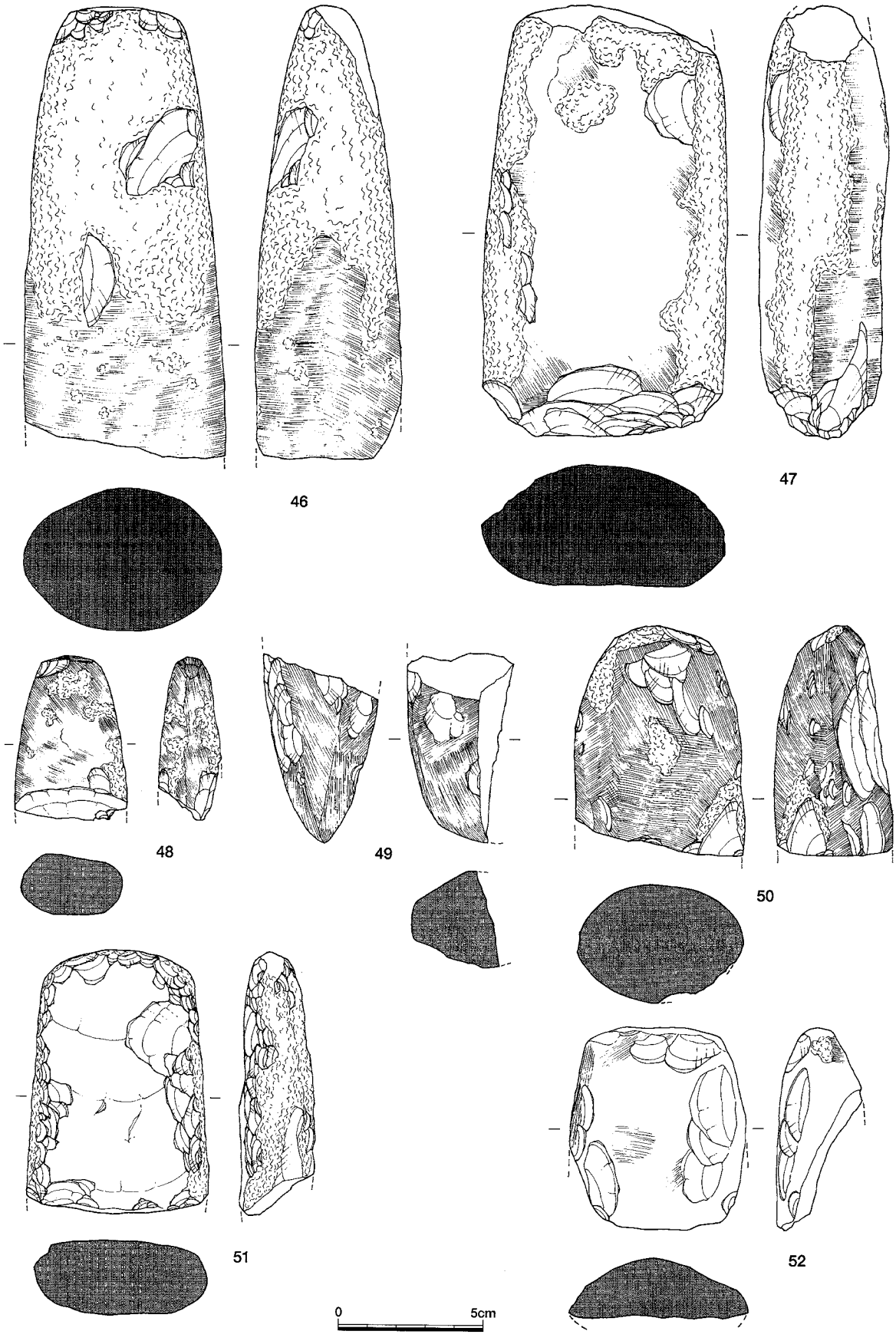


Fig.121 第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2）

Fig.122　第Ⅱ面掘り下げの遺物

に近いもの、さらに側辺が平行なもの（47、52）と刃部に向かって拡がるものがある。53～60は砥石。研ぎ面や研磨痕があることから砥石としたが、54、56、57、59は別の用途も考えるべきであろう。53は砂岩質の丸石を敲打して整え、その一端を両面から研いでいる。研ぎ面が短

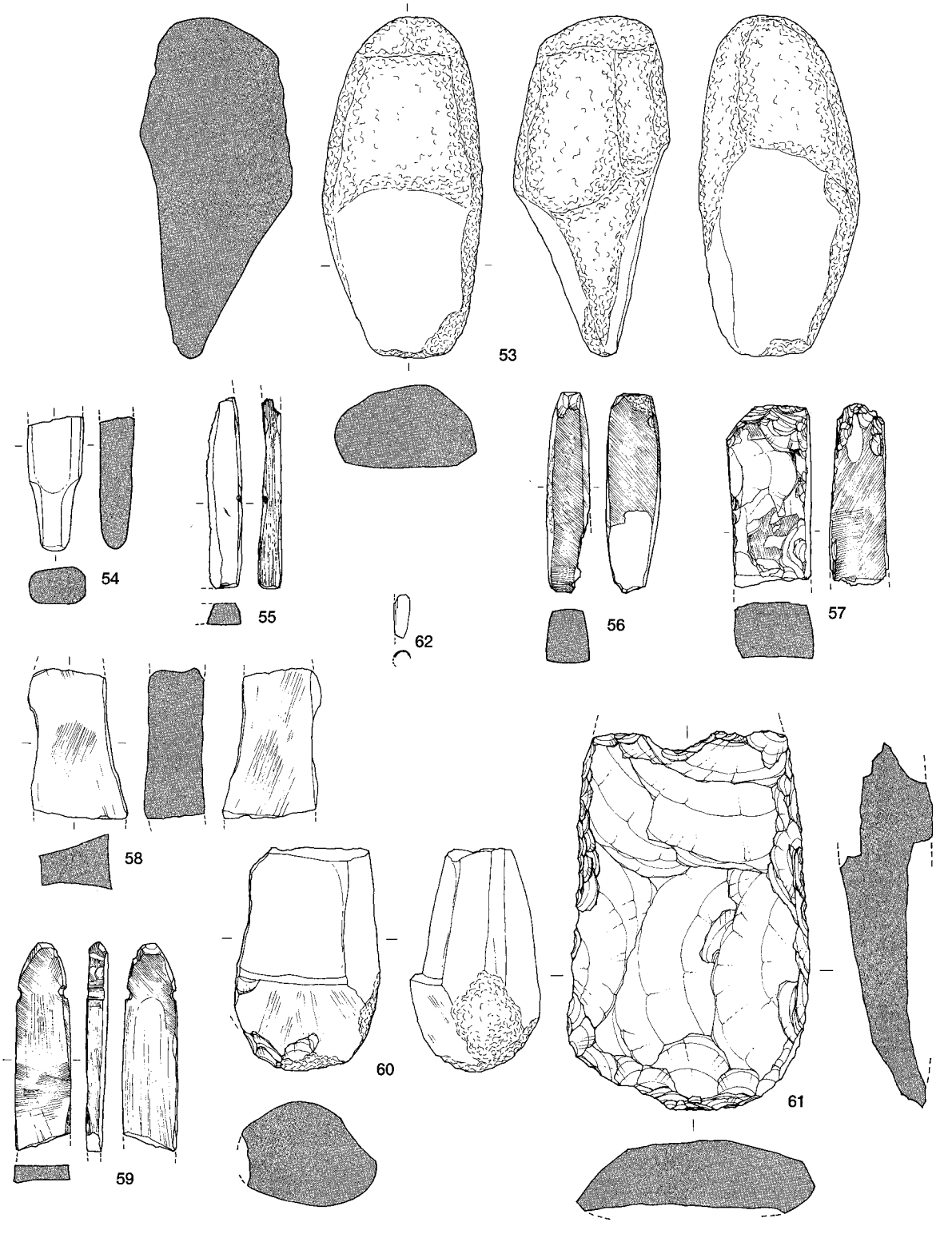
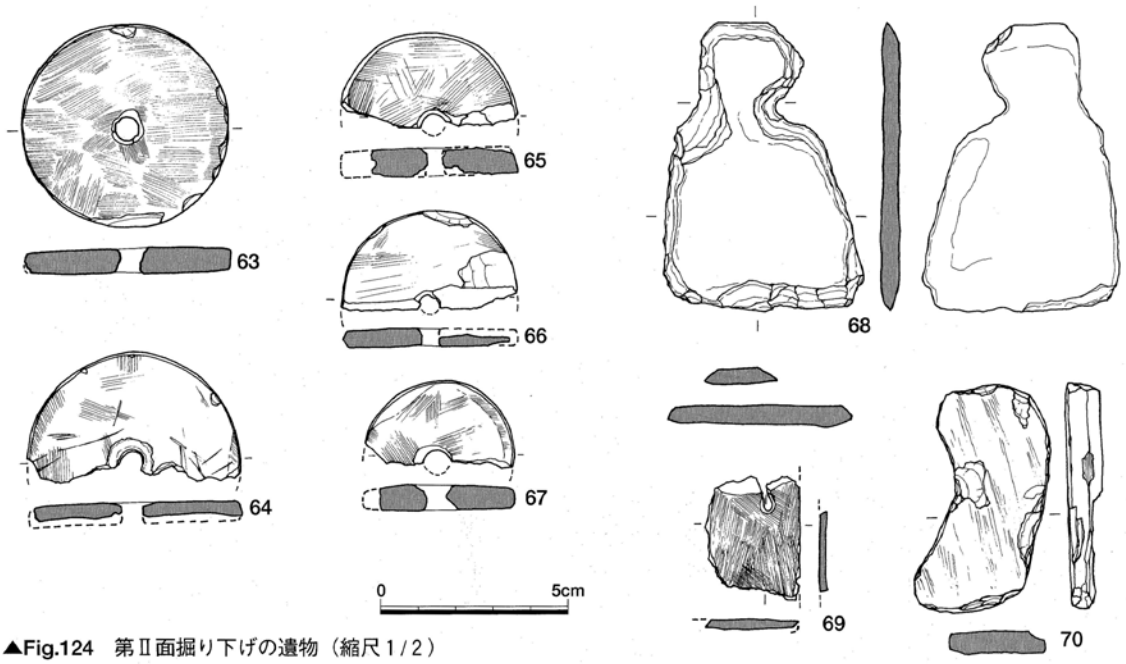


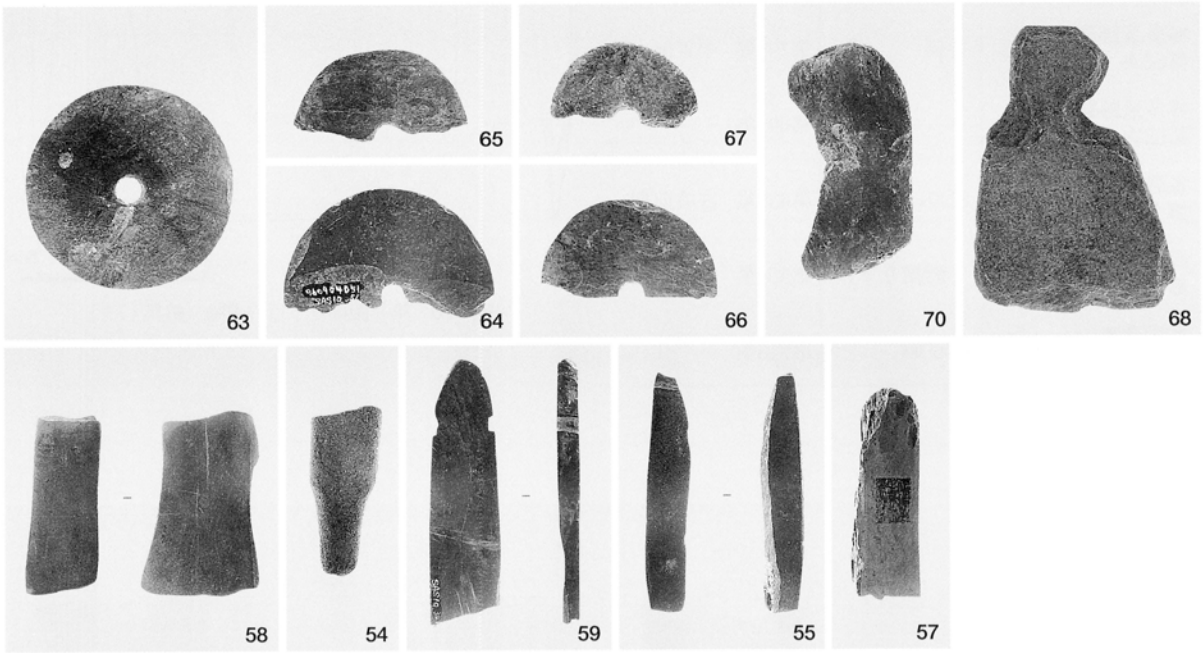
Fig.123　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/2）

く果たして砥石として機能していたのか疑問である。**54**は茎のようにすぼまっていることから握り部という機能か。**56**、**57**は全面に研磨痕があり片刃石斧の可能性も検討したが断面が長方形に近いことから砥石とした。ただし**57**の研磨痕は一定方向ではない。**59**は長方形の扁平な板材の全面に研磨痕がある。側辺に両側から小さな切れ込みがあり、一端も人頭形に加工している。紐擦れ痕はない



▲Fig.124　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺 1 / 2 ）

▼Fig.125　第Ⅱ面掘り下げの遺物



がおそらく紐で結び垂下したのであろう。あるいは漁網、釣り糸などの連結部とも考えられる。**60**も同じように砂岩質の丸石に敲打を加え、全面を研ぎだしている。図下部にかすかに赤色となっているが、顔料などの分析はしていない。**61**は打製石斧。**61**は玄武岩質の石材で階段状に剥離している。図裏面は大きく欠けており、未製品だろう。その形状からここでは打製石斧としておく。長さ12.5cm、最大幅8.15cm。紡錘車は５点が出土した。やや大きさに違いがあるが、滑石製の石材を丁寧に加工している。**68**は用途不明。頭部が摘み状の加工がある。掻器のような用途とすると特別な刃部がない。**69**は剥離片。表面は細かな研磨があり、小孔らしきものがあることからすると垂飾品か。**70**は滑石で未製品。湾曲気味のその形状からすると勾玉を目指していたのか。

青銅製品　貨泉と鋤先が第Ⅲ面の遺構検出作業時に出土した。どちらも遺構から出土したのではない。

貨　泉　O28グリッド、第Ⅲ面の遺構検出作業で発見した。周辺部が欠け、錆化も進行しているが鋳込まれた貨泉の文字は明瞭に残っている。次の出土遺跡一覧表のように福岡市内では７例目である。貨泉は中国後漢14年（天鳳１）初鋳で、鋳造期間が短く年代決定の資料として重要であるが、今回共伴遺物がないことが惜しまれる。

青銅製鋤先　出土はP27グリッド、第Ⅲ面の遺構検出作業で出土した。幅8.8cm、高さ6.5cm、袋部の厚さ1.3cm。刃部が直線でその両端は丸みがあるが、U字形というよりもコ字形に近い形状をしている。

濃い小豆色に変色はしているが、湯バリは鋳上がりのまま残るなど、保存状態はきわめて良好である。刃部から身にかけて垂直方向の細かな傷が認められる。

福岡市内貨泉出土地名表
（福岡市埋蔵文化財センター作成）

遺　跡　名	調査番号	出土遺構	報告書　その他
吉塚遺跡 第１次	8620	６－１Ｆ	第202集
堅粕遺跡 第１次	8823	攪乱除去中	第274集
博多遺跡群 第62次	8963	井側	第397集　中世混入
博多遺跡群 第62次	8963		第397集
雀居遺跡 第７次	9435	SD01最下層	第635集　古墳前期
博多遺跡群 第104次	9766	１面掘り下げ	第594集　中世混入
雀居遺跡 第10次	9609	第Ⅲ面	第746集

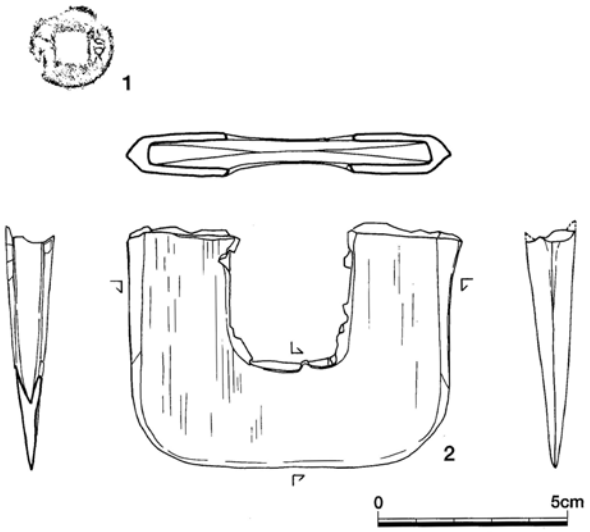


Fig.126　第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺１/２）

Fig.127　第Ⅱ面掘り下げの遺物

第５節　第Ⅲ面（弥生時代中期～前期）の調査

１．概　要

黒色粘質土を掘り下げると土器、石製品をはじめとする各種多様な遺物が出土し、これらが弥生時代中期中頃～弥生時代前期や突帯文土器期が大部分を占めるようになることから、この時期の遺構が存在する確信を持ち、慎重に発掘作業を進めた。黒色粘質土の下層はその下の青灰色粘質土の影響からかわずかに灰色気味となり、遺構の漆黒色の埋め土とは区別が容易となる。後述するが青灰色粘質土は、雀居遺跡第10次調査区の基盤、地山であるが、水平に堆積しているわけではなく起伏がある。またグリッド25ラインを境にして南側は青灰色粘質土が途絶え砂層が堆積している。このため実際の発掘作業は平面的な遺構検出を行うので、第Ⅱ面遺構の直下に現れたり、ある程度の深さで検出される場合もある。遺構配置図作成では第Ⅱ面と第Ⅲ面の時期の異なる遺構が同一平面図に記録されることになりやや混乱を生じた。先にも述べたように資料整理の過程で選り分けている。この結果、第Ⅲ面の遺構としては、竪穴住居跡２軒、甕棺墓２基、木棺墓、土壙墓を各１基、土壙とピット多数を検出した。ピットの中には柱根と思われるものがあるが、竪穴住居跡、あるいは掘立柱建物としてはつかめなかった。これら遺構は、全面に展開しているのではなく、北拡張区とグリッド28ラインより南側に集中し、その間は希薄となっている。また竪穴住居跡、溝、方形プランの土壙などは南北のグリッド線に対し約45度の方向を示しており、ある種の規制があったことを伺わせ興味深い。この方向性は第13次調査区でも共通しているようである。

Fig.128　第Ⅲ面遺構発掘作業

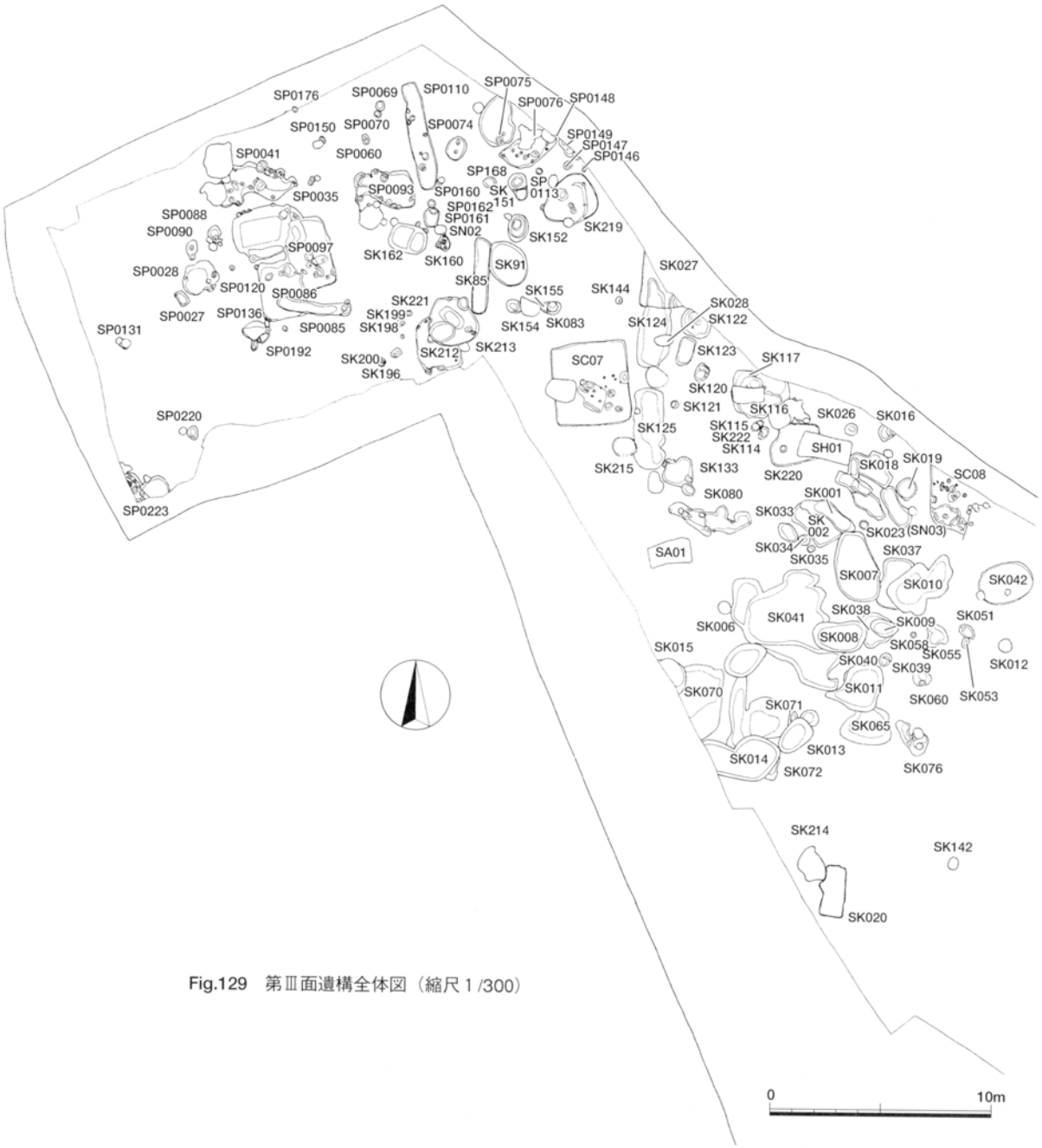


Fig.129 第Ⅲ面遺構全体図（縮尺 1 /300）

Fig.130 第Ⅲ面遺構

2．竪穴住居跡（SC）

第７号竪穴住居跡SC07　弥生時代前期の竪穴住居跡としては、雀居遺跡の全次数を通して唯一の発見である。O・P29・30グリッドにあり、第Ⅱ面古墳時代前期の竪穴住居跡SC01の下部に当たる。壁の高さはわずか５㎝前後しか残っていないが、よく整った方形プランであることから竪穴住居跡とした。四つの壁の長さは、北壁340㎝、南壁333㎝、東壁357㎝、西壁345㎝なので、床面積は約11.8㎡となる。四壁ともほぼ直線で、南東コーナーだけが丸みがある。床面には数個のピットと浅い凹みがあり、本来この竪穴住居跡に伴うものか判断する必要があるが、ピットは不規則な配置である。やや強引だが、東壁に接したP1と東西軸上にあるP2が主柱穴か。ただ２個とも床面から20㎝足らずの深さしかない。むしろP1は屋内土壙の可能性がある。なお南壁は円形溝SS13を切っている。

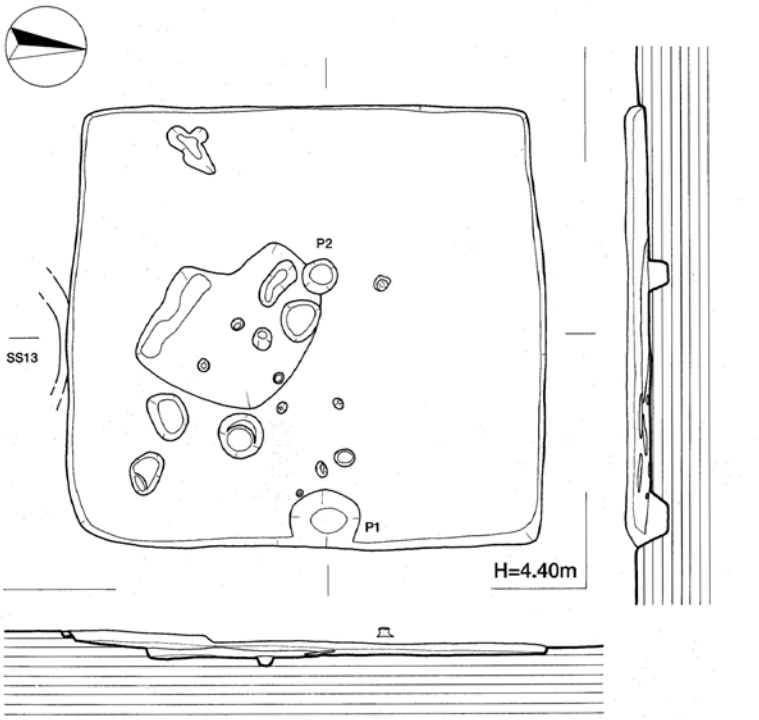


Fig.131　SC07実測図（縮尺１/60）

Fig.132　SC07（北西から）

出土遺物　床面に接して出土したものはなく、すべて住居内の埋め土から出土した。

土　器　1～5は突帯文土器の甕。4は口径22.0cm、体部中位で反転し、大きく開いて口縁部となる。6、7は甕の底部。7の外底には木葉の圧痕がある。8～12は弥生前期後半の甕。13は甕口縁部下の突帯、右から刻み目を入れている。14、15は粘土紐を外側に貼り付けてL字形の口縁部を持つ甕、16、17はその底部で弥生時代前期前半の城ノ越式。18～22は壺。18の外面は横ミガキの後に丹塗り。21、22ともに底部は円盤状ではない。

以上の遺物のうち時期の新しい14、15は埋め土の上部から出土していることから、本住居跡の時期は、弥生時代前期中頃から後半とした。

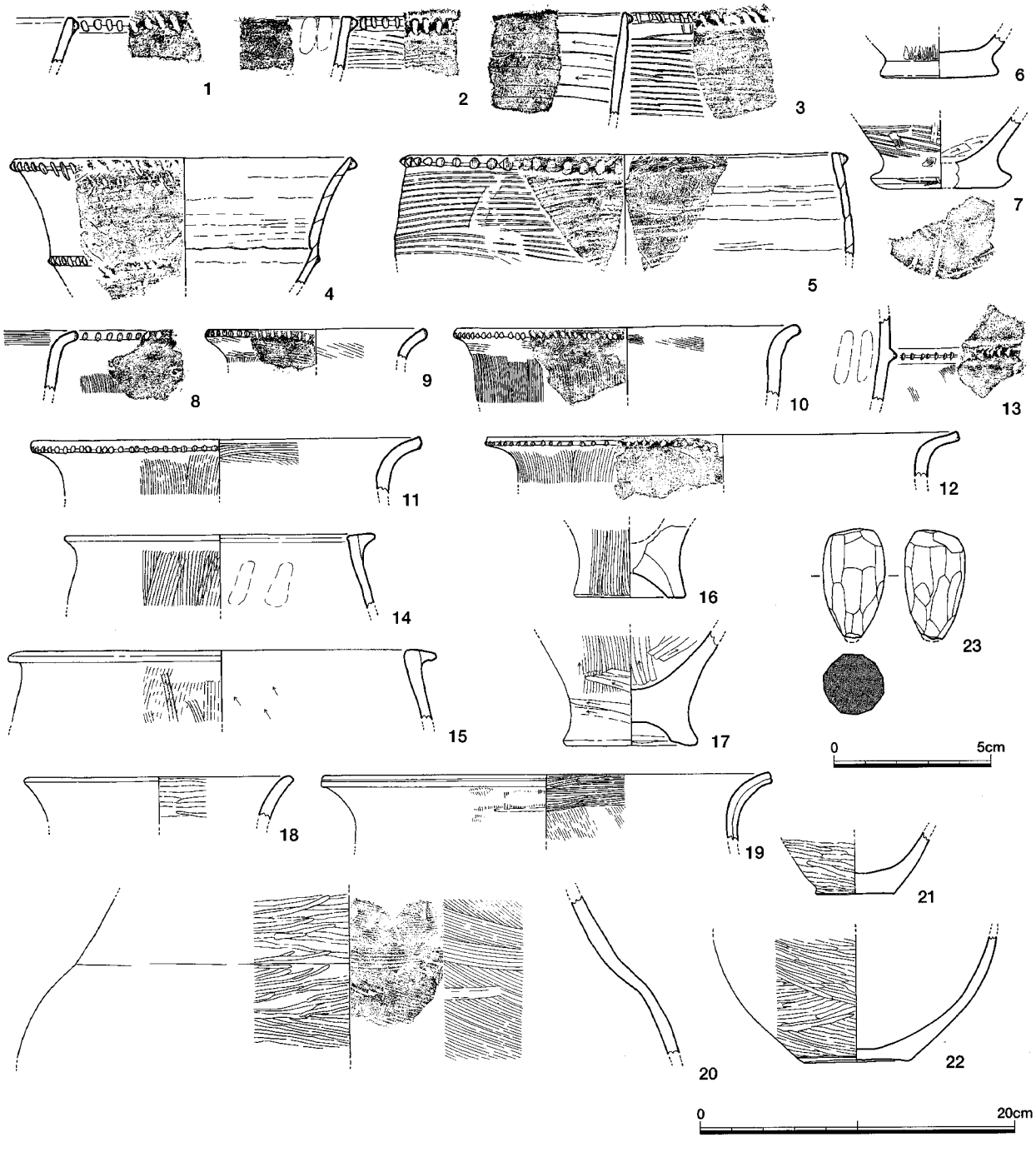


Fig.133　SC07の遺物（縮尺1/4・1/2）

第８号竪穴住居跡SC08　N25グリッドで検出した。ちょうど青灰色粘質土が途切れる場所に当たる。この青灰色粘質土上に遺構が集中していることから、生活空間の南限に位置していることになる。大半が発掘区外に出て全体の４分の１程の検出にすぎず、床面は凹凸が激しく、しかも壁も直線的ではなく、かつ壁立ちも明瞭でないことから住居跡とするには躊躇したが、方形のプランは他の土壙にはなく、SC07とも方向がほぼ同様であることなどから住居跡とした。南西コーナーだけの検出で壁の長さを測定することはできない。コーナーは丸みがある。床面には多くのピットが残っている。すべてがSC08に伴うとは思えないが、選り分けることは困難。壁溝や屋内土壙など付属する施設は別にない。時期の判断は難しいが、住居方向などからSC07とほぼ同じと推定しておく。

出土遺物　SC07と同じように床面に貼り付いた状況で出土した遺物はなく、すべて埋め土出土。

土　器　突帯文土器から弥生時代中期までの土器を含む。**1**、**2**は突帯文土器。**3**、**4**は如意形口縁の甕。**5**のＬ字形口縁の上面は内傾し、横ナデで凹んでいる。

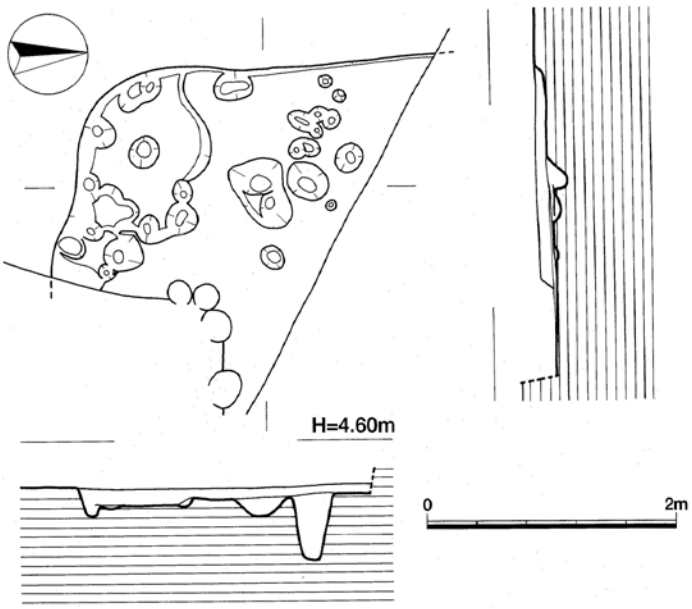
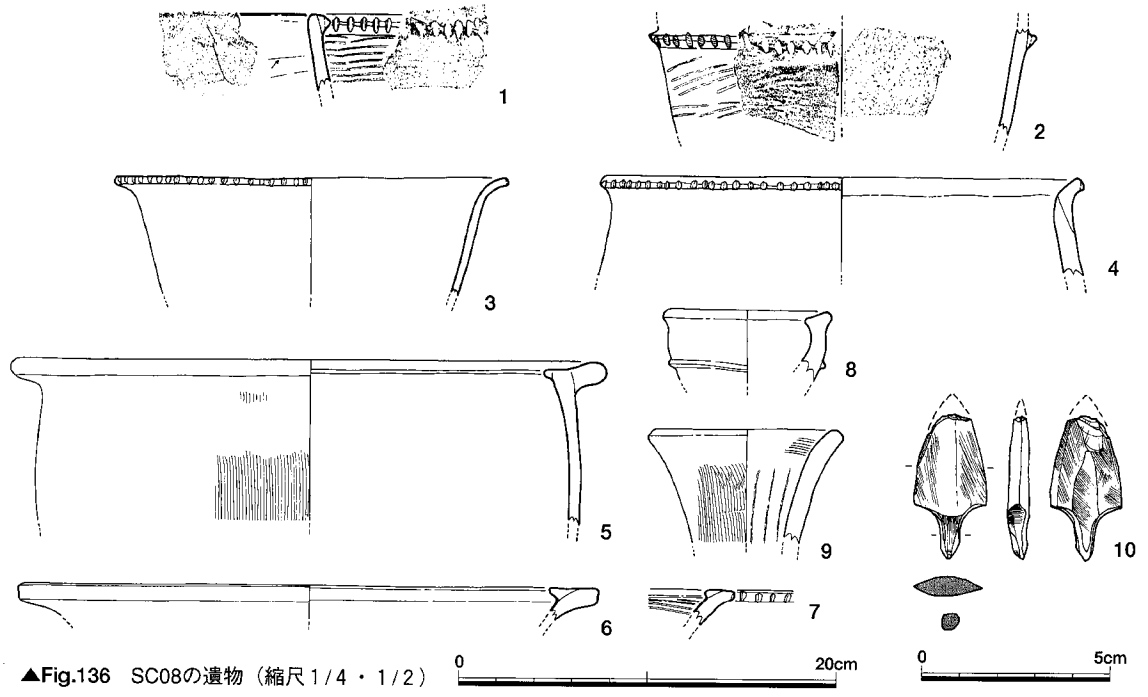


Fig.134　SC08実測図（縮尺１/60）

Fig.135　SC08（南東から）



▲Fig.136 SC08の遺物（縮尺1/4・1/2）

6、7は広口壺の口縁部。6の口径は30.6cm。幅広で水平な口縁部を作っている。7の口縁部外端には刻み目が入る。8は小型の鉢。分厚い作りの口縁部は外側に小さく張り出している。体部中程に細い断面三角形突帯を1条巡らせる。9は器台。外面は縦ハケ目、内面にはシボリ痕が残る。

石製品 10は茎を持つ磨製石鏃。身の断面は凸レンズ状で鏑は両面ともない。

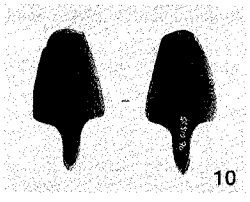


Fig.137
SC08の遺物（縮尺1/2）

3．墓（甕棺墓、木棺墓、土壙墓）

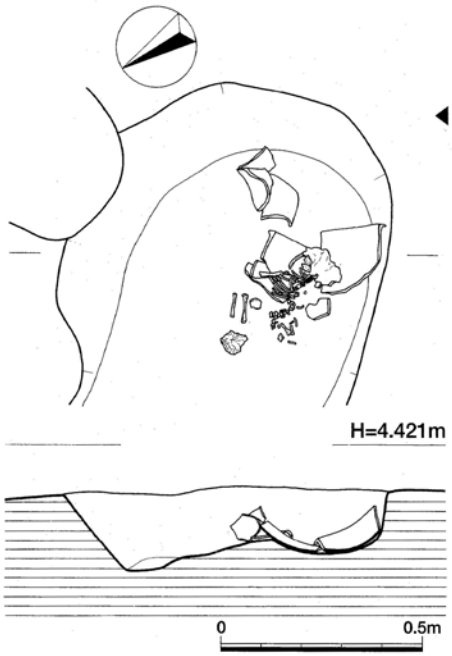
第Ⅱ面の甕棺墓SN01に続いて第Ⅲ面では、甕棺墓、木棺墓、土壙墓各1基を検出し、さらに土壙に投棄したかのような状態で埋葬された人骨が1体あった。これらは生活空間から切り離して一定の範囲を確保したようには見えないので墓地と呼ぶことはできないが、現代人の視覚的な判断に過ぎず、弥生人の意識、意図までは具体的につかんでいるわけではない。ここでは一定の範囲ということではなく、人を手厚く埋葬したという意味で、甕棺墓、木棺墓、土壙墓を一括して墓地と呼んでいる。

第3号甕棺墓SN03 O25グリッドの土壙SK018-④内にある。後述しているように他の土壙のほとんどが自然の窪みと思われるのに対し、SK018-④は整った隅丸長方形プランでほぼ直に掘り込まれていることから、人工的な土壙と判断した。多量の土器が出土し、おそらく生活不用品の廃棄場所として使用されたのだろう。

人骨は、土壙の南端部に片寄った位置で甕の破片の上に潰れた状態で出てきた。近くに動物骨が出ていることもあって最初は動物骨と思ったが、清掃すると小さいながらも脊椎や四肢骨など1体分が揃い、その頭蓋骨から人骨と判断した。このため九州大学大学院中橋孝博教授に取り上げを依頼した。さっそく金宰賢助手と大学院生の大森円さんが派遣され、人骨の出土状況の実測、取り上げに当たっていただいた。第12次、第13次調査でも人骨が出土し、合わせて分析研究の報告をお願いし、その結果を別冊に掲載する事ができた。この人骨の出土状況について、金助手と大森さんの実測図所見の概略を記す。

1．顔は東側を向き、左側頭骨を上にして横たわる。

2．右手は上腕骨だけの出土で不明だが、左は尺骨が肋骨の上に乗っていること、その位置から見て



◀ Fig.138
SN03実測図
（縮尺１/20）

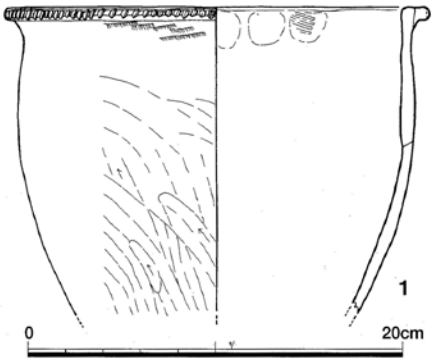


Fig.139▶
SN03の遺物
（縮尺１/４）

曲げていたと考えられる。

３．足は右足の状況から見て折り曲げていたと思われる。

４．四肢骨は外れ、歯は出土していない。

５．人骨の下に甕の口辺部があるためこれに入れて埋葬した可能性がある。

中橋教授の報告では、人骨は生後間もない乳児（０～６月）と見なされている。下の甕に納めることは無理ではなく、甕棺墓の遺構名を付けたが、果たして埋葬という意識があったのか、あるいは不用品の土器等と一緒だったのか、当時の葬送や死生観を知る上で重要な資料である。

1は人骨の下の甕。口径22.6㎝。砲弾形の体部は、上方でわずかにすぼまり、器壁は微妙な凹凸がある。口縁部は断面台形状の粘土を貼り付けており、短いＬ字形となり、いわゆる亀ノ甲式の特徴を持っている。刻み目は板状工具で右に傾けて入れており、板状工具の小口の木目が残っている。調整は外面は板状工具によるナデ上げ、口縁部内面は粗い横ナデ、突帯貼り付けに伴う指頭圧痕が横に並んでいる。焼成も良好。外面は黒灰色、内面は灰茶色を呈する。弥生時代前期後半。

Fig.140　SN03の人骨

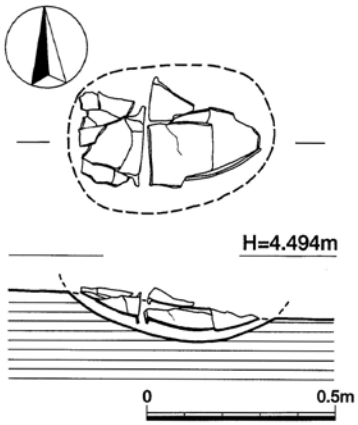


Fig.141 SN02実測図（縮尺1/20）

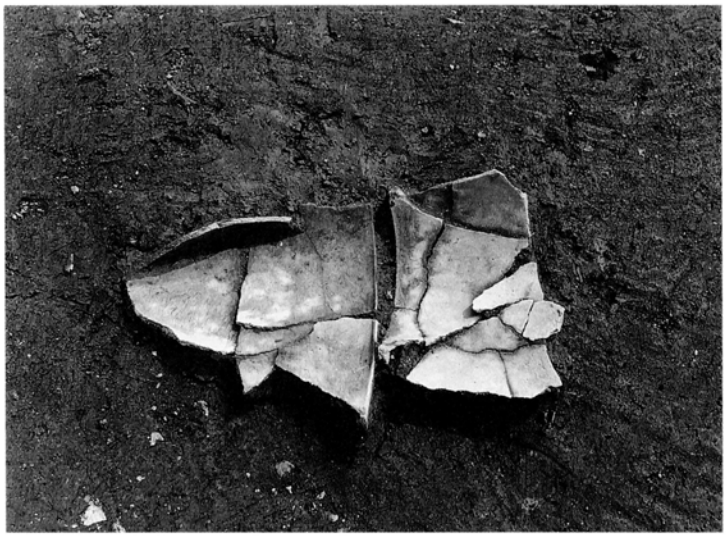


Fig.142 SN02

第2号甕棺墓SN02 P31グリッドにあり、他の墓と離れて位置している。長さ55cmの楕円形の墓壙に日常使っていた大小の2個の甕を合わせ口にして埋置した小児用の甕棺墓である。埋置方位はN－85－W。埋置角は5度検出時には両方の口縁部は離れていたが、元は接口式だったのだろう。目張りの粘土はなく人骨は残っていない。

上　棺　後世の削平で底部を失っているが、復元器高は30.0cm、口径28.6cm。口縁部はL字形で内端は小さく突き出し、丁寧な横ナデを加える。外面は縦ハケ目。口縁部に黒斑があり、わずかだが赤色顔料が認められる。胎土は精良土に近い。

下　棺　同じようにL字形の口縁部をもつ甕。口径34.0cm、器高34.8cm底径7.5cm。口径と器高が1：1でよく整った器形をしている。底部中央は凹み、内面は同心円状に左方向に指で押さえている。外面の調整はハケ目、内面は押さえ気味のナデ。胎土は上棺と同じように1㎜大の砂粒を含むが精良土に近い。焼成はよく、内外面とも橙色がかった茶色となっている。

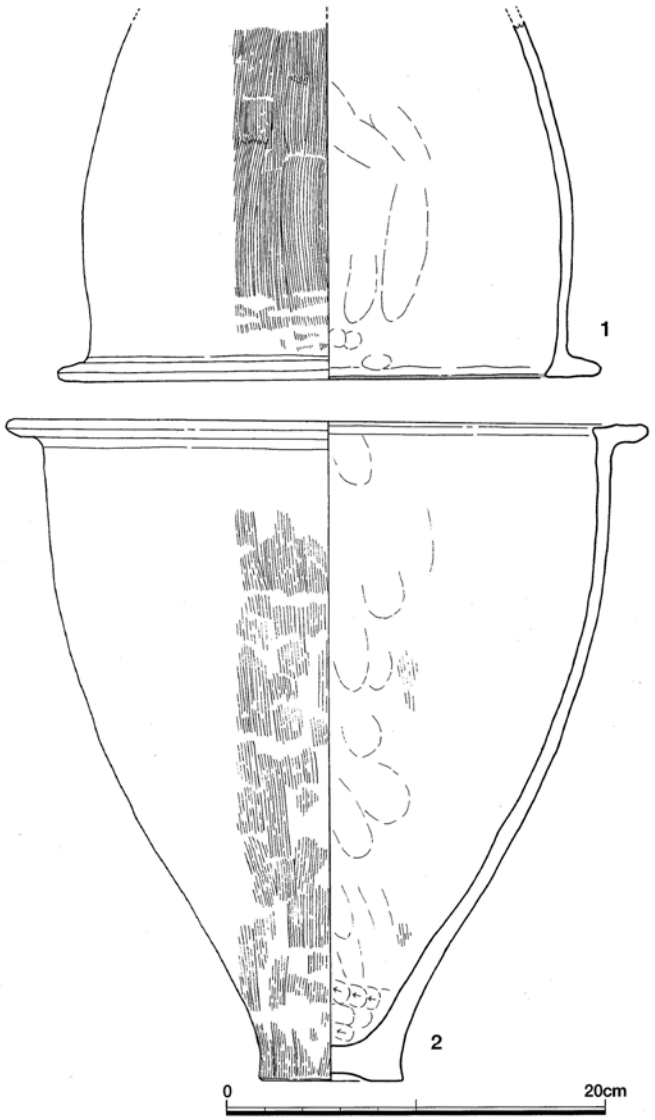


Fig.143 SN02の遺物（縮尺1/4）

第１号木棺墓SA01　P28グリッド南西隅に位置し、竪穴住居跡SC01の南西2.2mに当たる。また弥生時代後期の甕棺墓SN01が写真（Fig.146）のように南東0.8m離れて並んでいる。

黒色粘質土の掘り下げで灰白色粘土がブロック状に出たことから慎重に広げながら粘土をたどった。粘土は長方形に取り囲むように検出され、その内部から人骨も確認できたことから板材を組み合わせ粘土で固定した木棺墓と断定した。本来なら墓壙のプランを最初に確認し、掘り下げるべきだが黒色粘質土のために最後まで見分けができなかった。このため墓壙のラインは推定である。粘土の残りはよく、木棺の大きさや組合せ方を推測することができる。

木棺墓は長さ2.5mと0.8mの四枚の板材の小口を直角に組み合わせたものであるが、側板の高さは不明。当然蓋板もあったと思うが、削平で積極的に裏付ける痕跡はない。長軸方位はN-87°-E。この木棺墓人骨も金助手と大森さんの所見概略を記す。

１．頭位は東側、顔面は北側にした側臥屈葬。

２．右上腕は関節した状態で腐食の時前腕と上腕の関節が分離した可能性あり。

３．左上腕も腐食の段階で原位置からやや下に流れた可能性。

４．肋骨は上身の中央に集中して

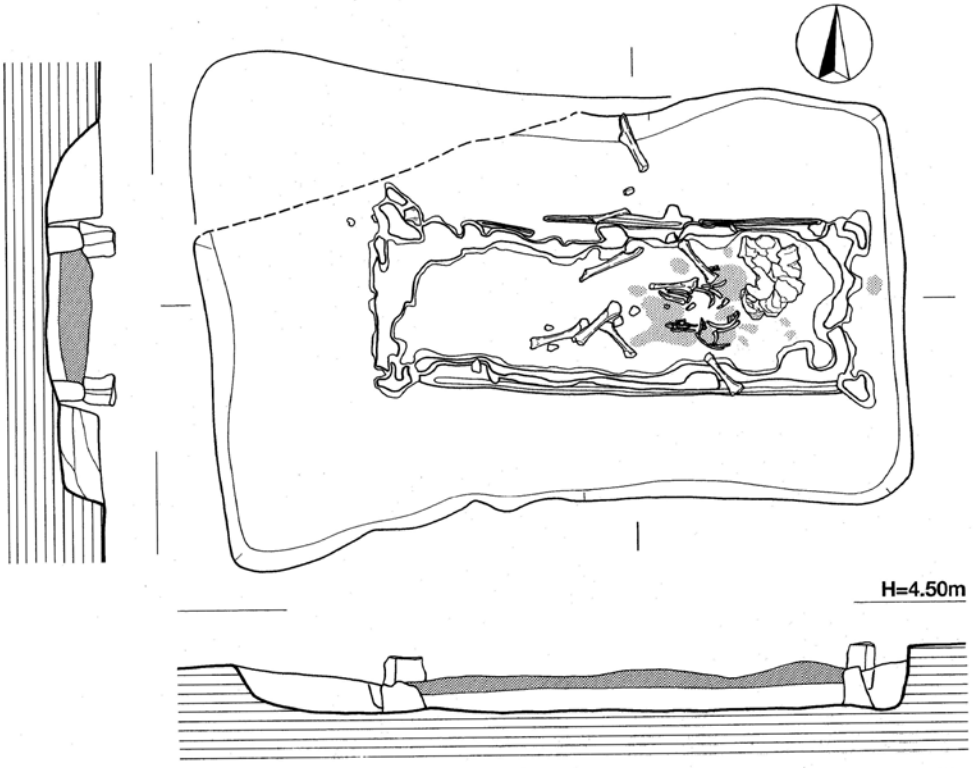


Fig.144　SA01実測図（縮尺１/20）

Fig.145　SA01検出作業

ており、上半身を右向きにした状態であることを見せている。

5．下肢の状態は埋葬当時の推定は不可能であるが、現状態から右下肢は膝蓋関節を強屈し、左下肢は弱屈した可能性あり。

6．大腿骨の骨頭は骨化していない。

中橋教授の報告では、生後1～2年の幼児骨で性別不明。

この木棺墓の時期を直接知る遺物は出土していないが、墓壙内の土器破片、周辺の土器群さらに木棺墓の下で弥生時代早期前後の円形溝が見つかったことなどから弥生時代前期と幅を持たせておく。なお木棺墓内には赤色顔料が認められ、また黒曜石の剥片が多量に出土し興味深い。

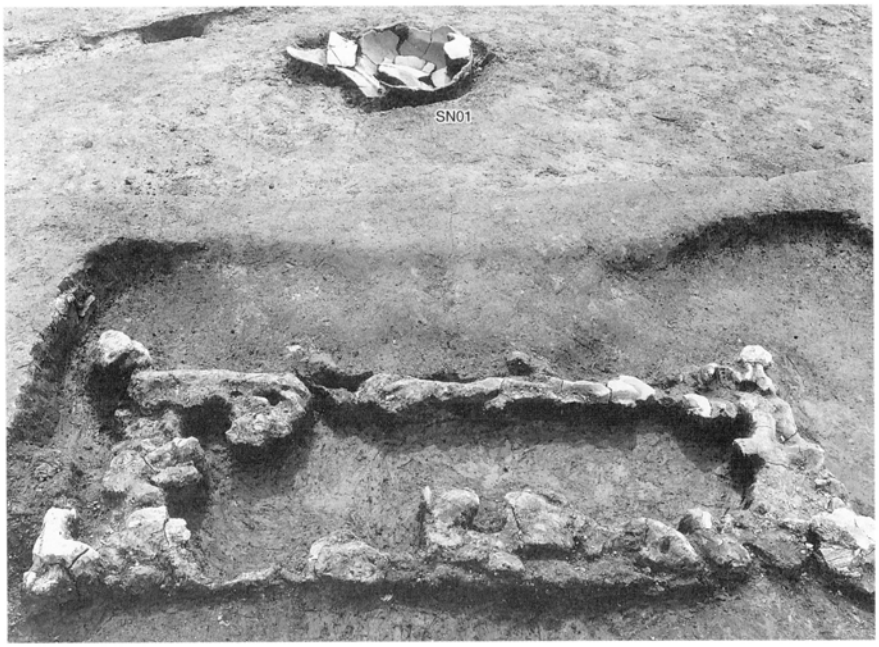


Fig.146 SA01（人骨取り上げ後）

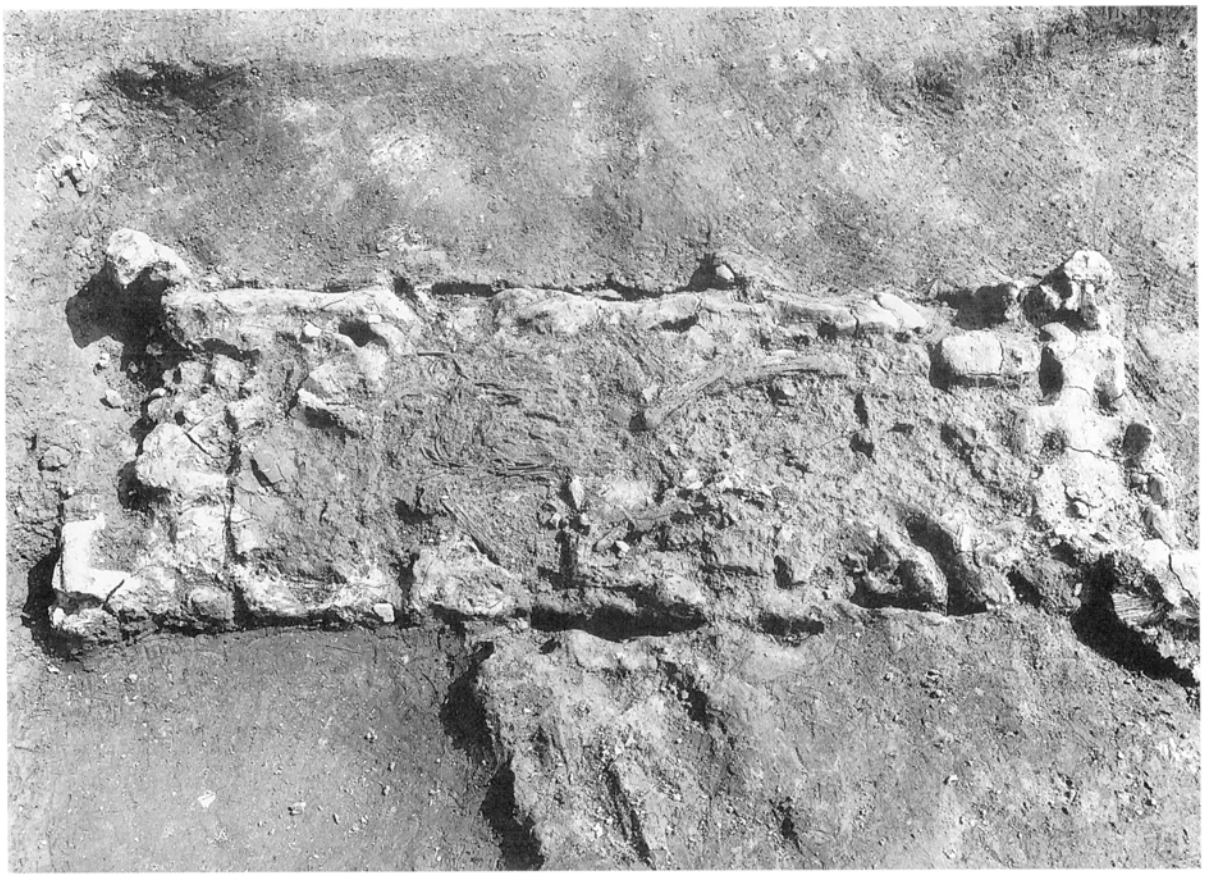


Fig.147 SA01（人骨取り上げ前）

第１号土壙墓SH01　O27グリッド、竪穴住居跡SC01と土壙SK18の間に位置する。墓壙は北側辺がやや広い長方形プラン。長さは202cm、北側辺120cm、南側辺102cmである。深さは10cm足らずしかなく、上部が激しく削平されているが幸いにも人骨の一部が残っていた。長軸方位はN－74°－E。この土壙の東寄りに長軸に平行に埋葬されている。中央部の埋葬でないことから土壙プランの間違いかと何度も慎重に墓壙ラインの確認を試みたが、新たなラインは出てこなっかった。金助手と大森さんの実測所見、さらに中橋教授の報告を合わせると次の通りである。

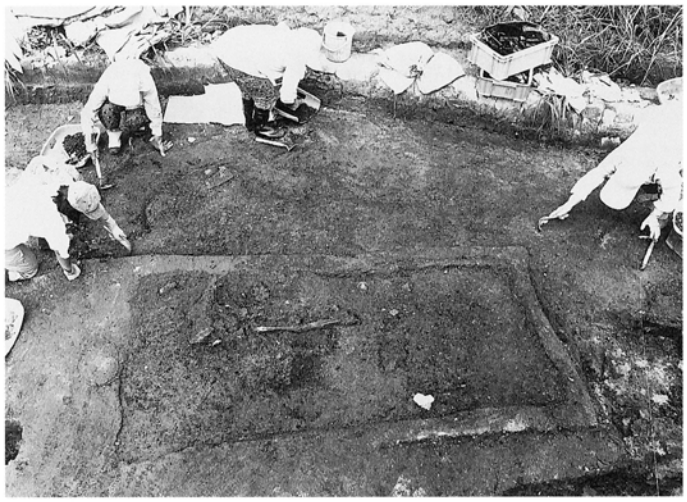


Fig.148　SH01検出作業

１．顔面を右（西）に向けた仰臥位。　２．右上肢は伸展の状態で手は内面を上向きにしている。　３．左上肢は上腕の近位のみが一部残存するが手の骨が胸部の方に位置しており、前腕は屈腕の状態と認める。　４．頭骨は右側頭骨が認められ上顎と下顎の歯一部が認められる。　５．右肋骨は重なっている状態からやや頭骨の方が下肢より高かった可能性がある。　６．熟年に達した男性。
７．頭部の近くに赤色顔料

墓壙からは動物骨が出土したが、時期を示す遺物はない。土壙下には弥生時代前期後半の第220号土壙SK220があることから上限を決めることができる。近くの土壙や土器群などから弥生時代前期後半から中期前半と推測した。

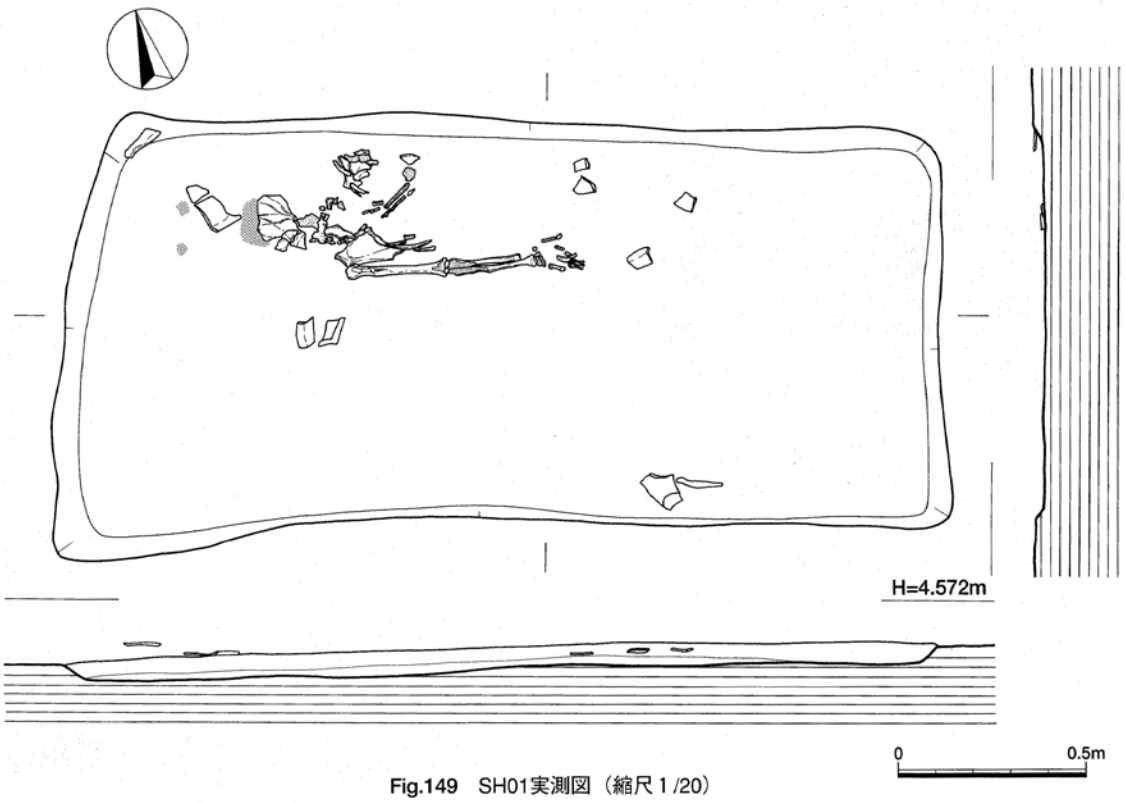


Fig.149　SH01実測図（縮尺１/20）

4．土壙（SK）・ピット（SP）

第10次調査の検出遺構で最も多いのが土壙である。遺物量だけでなく、重要な遺物の出た土壙について、できる限り実測し、図示した。土壙は発掘区の全面にわたって分布しているが、人工的な掘削によるのか、自然の落ち込みを利用したのかを区別することは容易ではない。また埋没した最後の状態を発掘していることになり、土壙本来の機能、用途を明らかにすることはさらに難しい。ここでは82基の土壙について記述するが、遺構番号順であって時期順ではない。

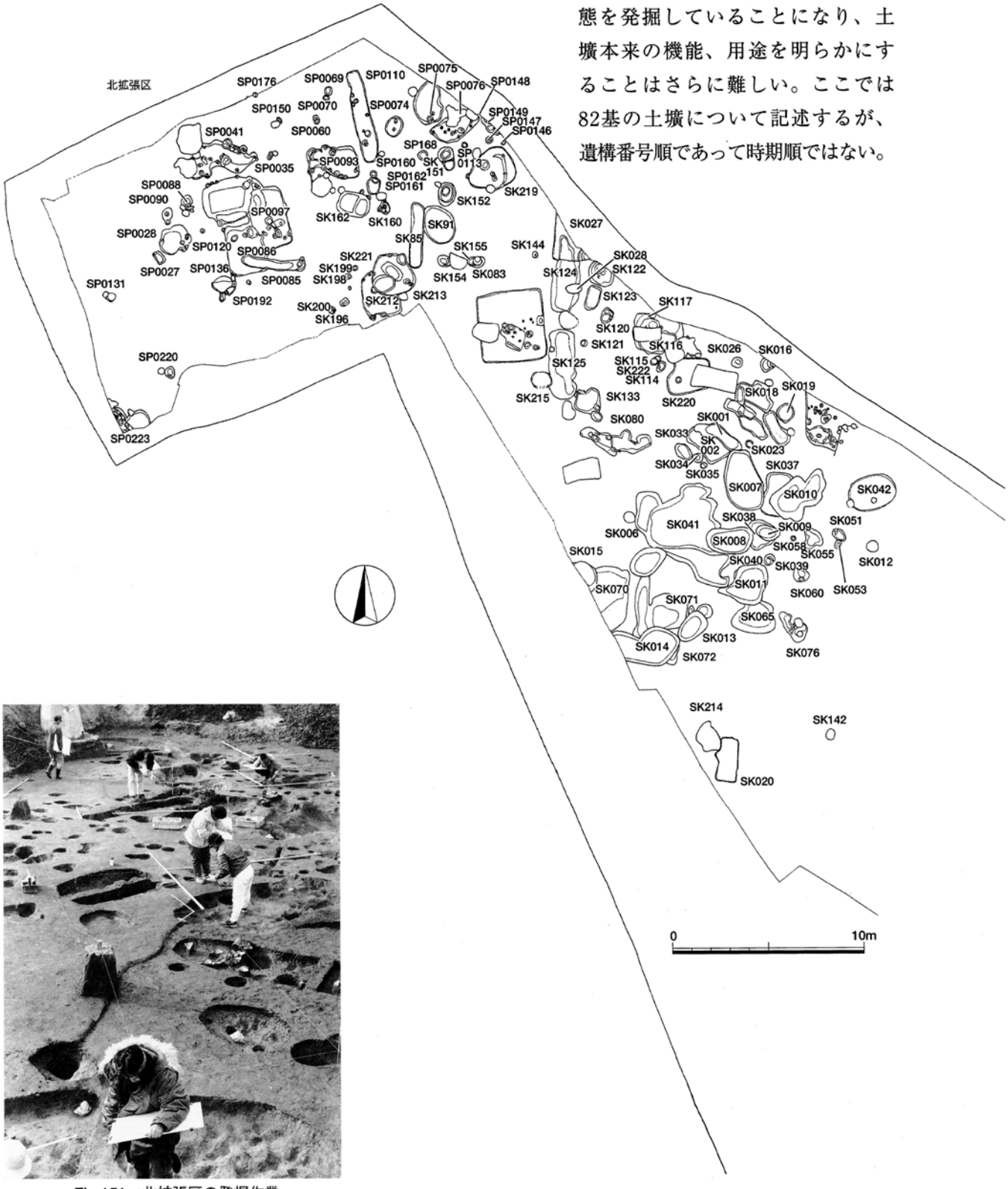
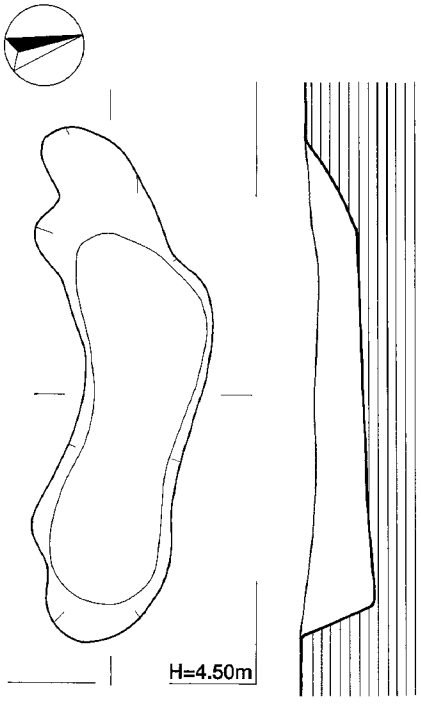


Fig.150　第Ⅲ面土壙分布図（縮尺1/300）

Fig.151　北拡張区の発掘作業



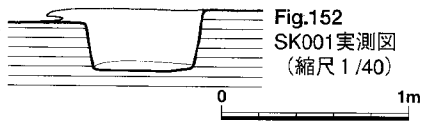


Fig.152
SK001実測図
（縮尺1/40）

第1号土壙SK001　O27グリッドにあり、土壙SK002の東縁と重なっている。平面プランは不整楕円形で左に湾曲している。長軸260cm、幅86cm。中央部の深さは約25cmと浅い。長側辺は直に近い壁であるが、両短側は傾斜がついている。

出土遺物　遺物は埋め土の上下から平均的に土器、石製品、動物骨、魚類骨などがパンコンテナ2箱出土した。このうち石製品3点、土器29点の計32点を実測した。雀居遺跡の第10、12、13次調査で出土した動物骨、魚類骨は国立歴史民俗学博物館の西本豊弘教授に同定と研究を依頼し、その報告を別冊に掲載することができた。

石製品　**1**は方柱状片刃石斧の中央から頭部の破片。細かい敲打を加え凹ませていることから抉入石斧。断面は背の高い蒲鉾形。**2**、**3**は半月形外湾刃の石包丁。刃部は両側からの研ぎ。**2**には小孔が残って大きさを推測することができるが、**3**の破片には見られないことから大きめの石包丁なのだろう。

土　器　**1**～**14**は突帯文土器。**9**は体部の屈曲が上方でなくほぼ中位にあるのが特徴である。反転からわずかに外湾気味に上方に延び口縁部となる。突帯は断面三角形で口縁端に接して貼り付けている。口縁上端も外傾しているので、連続して長めの外傾口縁となっている。この土器の特徴の2点目は器面の調整である。横条痕ではなく細かなハケ目を内外面に施している。反転部より上部は縦、反転部より下方は横ハケ目。**14**は体部が強く屈曲している。屈曲部の径34.2cm。器壁の接合観察から図の上下を決めたが、破片のために傾きは不正確。屈曲部内面は接合を図るために強く横ナデしている。内外面とも横ナデ調整、口径の広い鉢を推測した。**15**、**16**は如意形口縁の甕。**15**は口縁部外側に粘土を貼り付け肥厚させ、段にも刻み目を加えている。口径25.8cm。内外面とも茶色。外面に黒斑がある。胎土に砂粒が多く含まれているがナデ調整で表面には出ていない。**20**～**28**は壺。**20**は口径15.6cm、頸部から口縁部は緩やかに外湾しながら延び口縁部となる。口縁部は頸部より厚めに作りわずかに段が付く。横ミガキは口縁部だけに施されている。胎土に小砂粒を含むが堅緻な焼成となっている。**24**は**20**のようなカーブの壺頸部。外面は細かな弧状の横ミガキを重ねている。内面は横ハケ目、上半は指押さえで強くナデ上げている。ただし内外面ともに短時間で仕上げたようで粗雑な感がする。**25**～**27**は胴部上半の文様帯部。**25**は小片だが屈曲部は鈍い稜となっている。文様は上下に二重の沈線を巡らせた後に3本

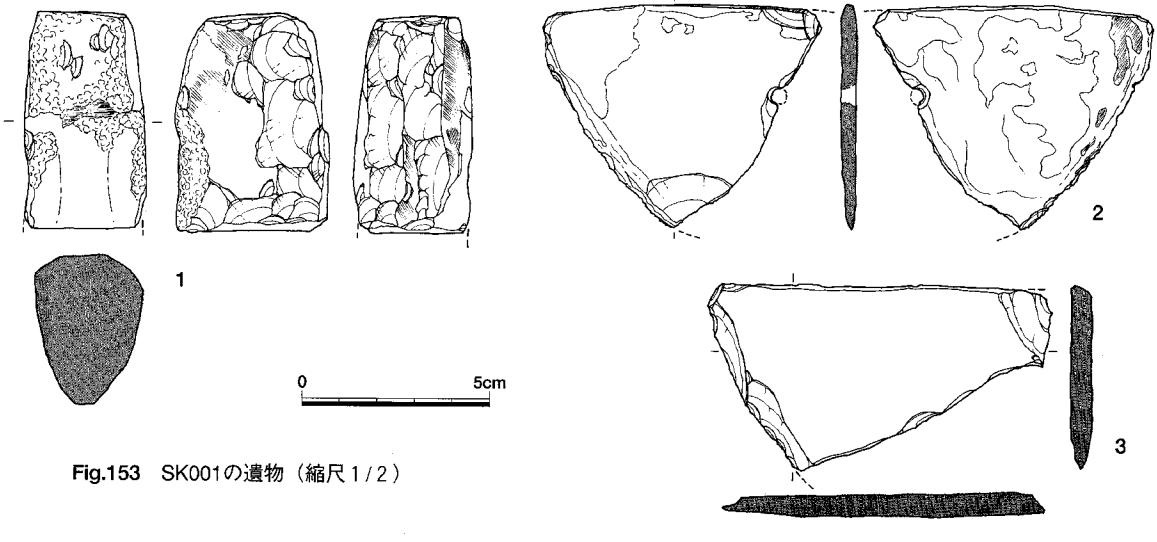


Fig.153　SK001の遺物（縮尺1/2）

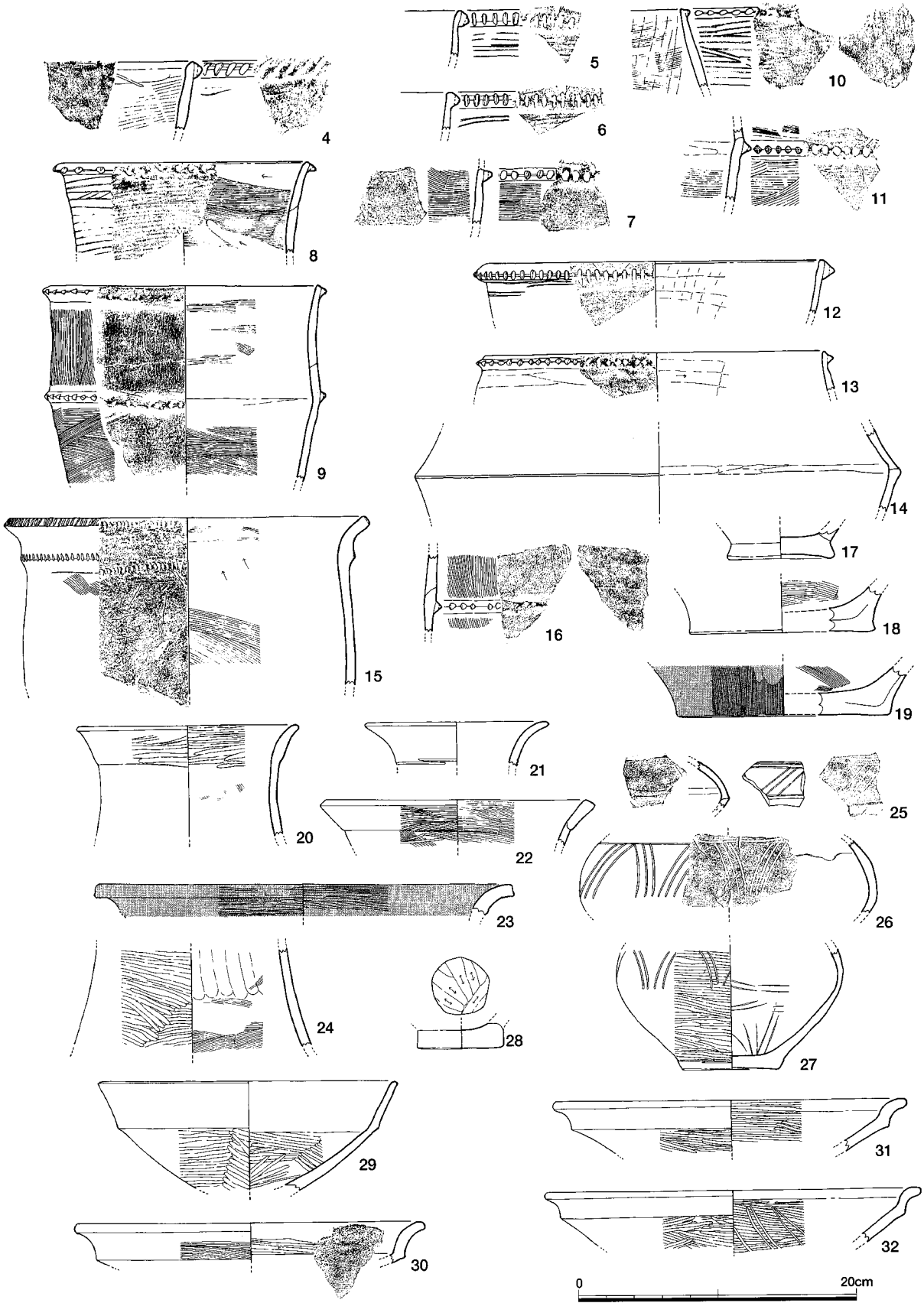


Fig.154 SK001の遺物（縮尺1/4）

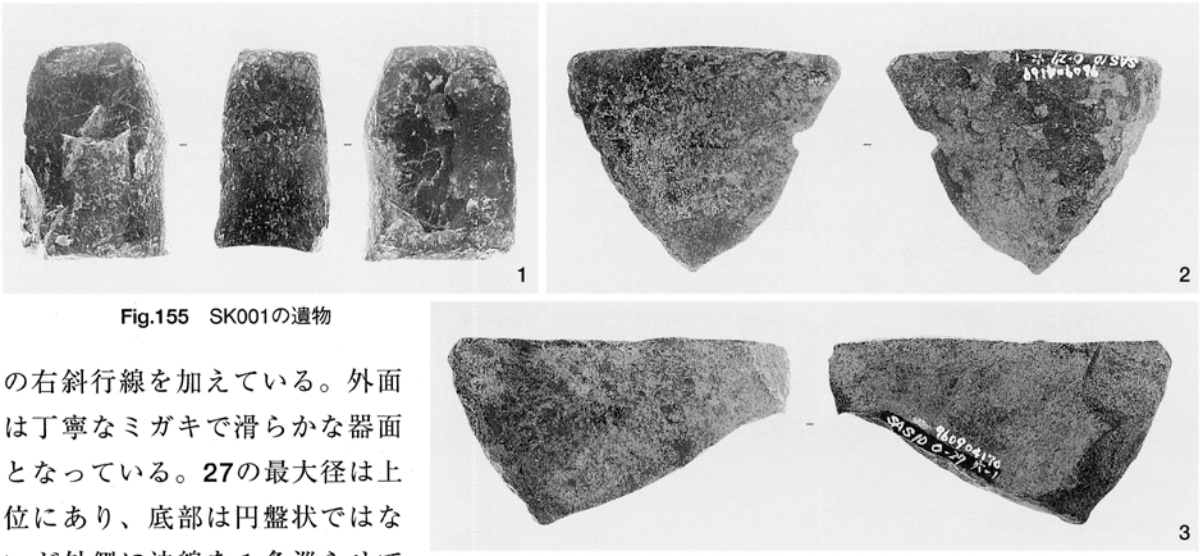


Fig.155　SK001の遺物

の右斜行線を加えている。外面は丁寧なミガキで滑らかな器面となっている。**27**の最大径は上位にあり、底部は円盤状ではないが外側に沈線を１条巡らせている。胴部上半の文様は二重の三角文が簡略化されている。**29**～**31**は鉢。**29**は口径21.2cmの深鉢。体部中位で屈曲し直線的に延びて口縁部となる。屈曲部外面には小さく突出している。剥離しているが横ミガキか。屈曲部より下方は横ミガキ、底部を中心にして短く区切りながら横ミガキしている。**30**～**31**は体部上方で反転して短い口縁部を持つ浅鉢。**30**の口径は24.6cm。**32**は口径27.4cm。内外面とも横ミガキの上に暗文風の横ミガキを加えている。

第２号土壙SK002　平面的には東側を土壙SK001に切られている。長軸230cm、推定幅165cm、不整方形で北側は丸みがある。深さは15cmときわめて浅い。

出土遺物　SK001と同じように動物や魚類、炭化米などさまざまな骨が含まれていた。

土　器　21点を図示した。**1**～**15**は突帯文土器の甕。**3**以外の外面調整は横条痕。**3**は板状工具によるナデ。断面三角形の突帯はきわめて小さい。**6**～**11**は体部上半が内傾するもので直線的に延びている。**10**は胎土に小砂粒を含み焼成は良好。突帯は断面正三角形で刻み目は右から加えている。間隔があり雑。**11**も同じような傾きの口縁部で、突帯の付け方が他と変わっている。小さな断面三角形の突帯は口縁部上端に接して貼り付けているが水平に作っている。**13**～**15**は反転部。いずれも反転は弱い。**17**は胎土に砂粒がほとんどなく堅緻な焼成の口縁部。口縁外端に左側から刻み目を入れている。内傾していること

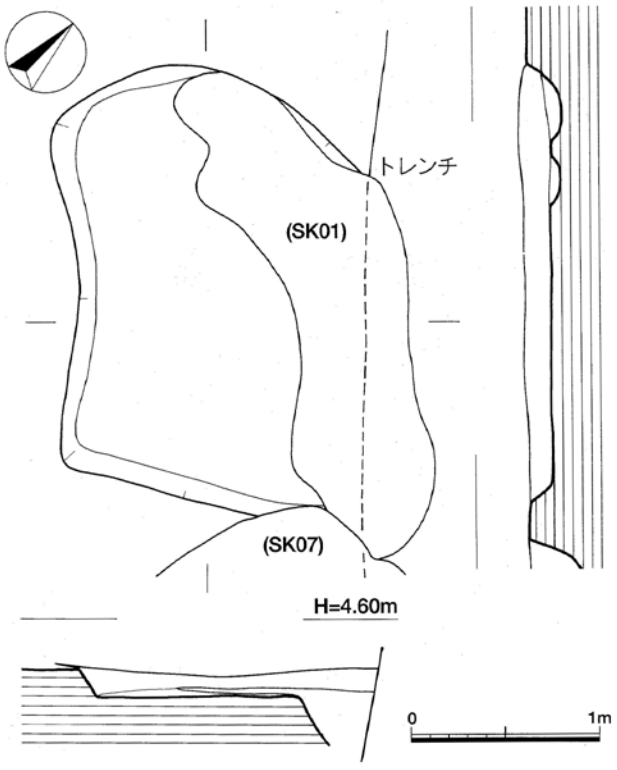


Fig.156　SK002実測図（縮尺１/40）

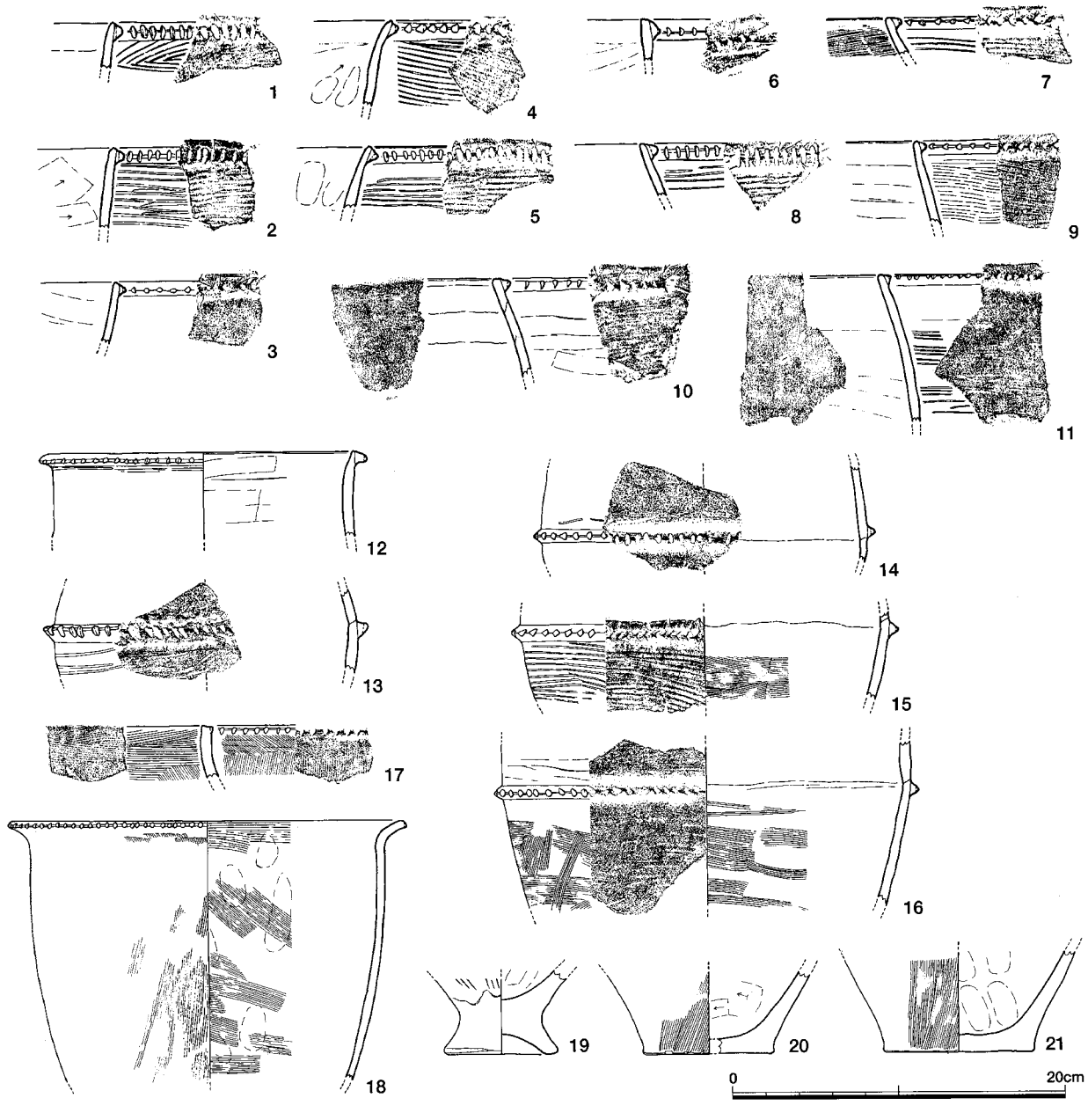


Fig.157 SK002の遺物（縮尺1/4）

から体部で反転して底部に延びると思われるが器形不明。内外面とも鋭いハケ目調整。**18**は口径23.6cm、如意形の甕。外面は細かなハケ目にナデを加えている。**19**～**21**は甕の底部、**19**は突帯文土器甕の底部で、断面ハ字状に開いている。**22**～**28**は壺。**22**は口径9.8cm、締まった頸部から緩やかに外湾し、そのまま口縁部となっている。内外面とも丁寧で細かい横ナデ。胎土も精良土で焼成も堅緻である。頸部外面に一部沈線を入れている。**29**～**31**は深鉢の口縁部。**29**の口径は23.0cm。丸みのある体部に外に開く口縁部が付く。**30**は口径21.0cm、反転してから真上に延び小さく外湾して口縁部を作る。外面は茶褐色。黒斑がある。**32**～**34**は高坏の坏口縁部。**33**は口径40.8cmと大きい。口縁の粘土接合に特徴がある。**34**も同じような粘土接合である。**34**は口縁部の反転が短く厚みがある。**35**は口径37.8cmの深鉢。口縁部内外面は横ミガキ、反転部より下方は細かい横ハケ目。

石製品 **36**は黒曜石製の打製石鏃。二等辺三角形で基部はわずかに抉れている。長さ1.90cm。

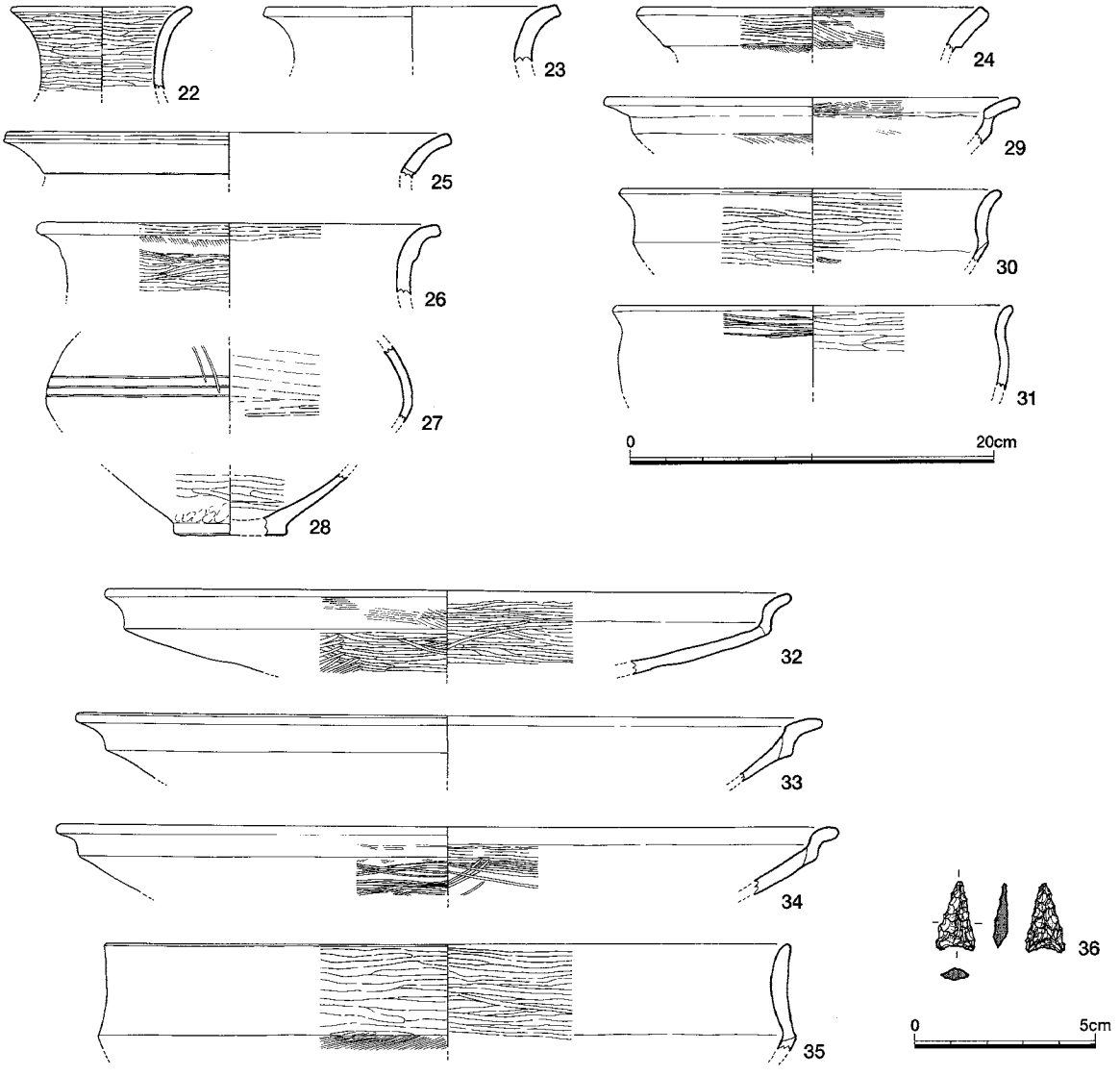


Fig.158 SK002の遺物（縮尺1/4・1/2）

第6号土壙SK006 Q27グリッド南東隅にあり、SK015の南西約3mに位置する。長軸206cm、短軸85cmの楕円形で深さは10cmときわめて浅い。

出土遺物 浅いということもあって遺物は多くない。また小破片となっているができるだけ実測、図示した。

土　器 **1**～**6**は突帯文土器。**7**～**9**は如意形口縁甕。**10**、**11**の口縁部はL字形。**11**は口径47.0cm、端部に刻み目。

石製品 **12**の中央部は敲打され窪む。

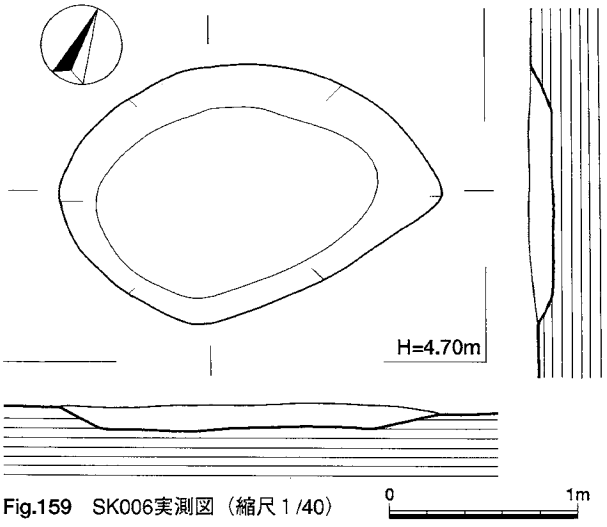


Fig.159 SK006実測図（縮尺1/40）

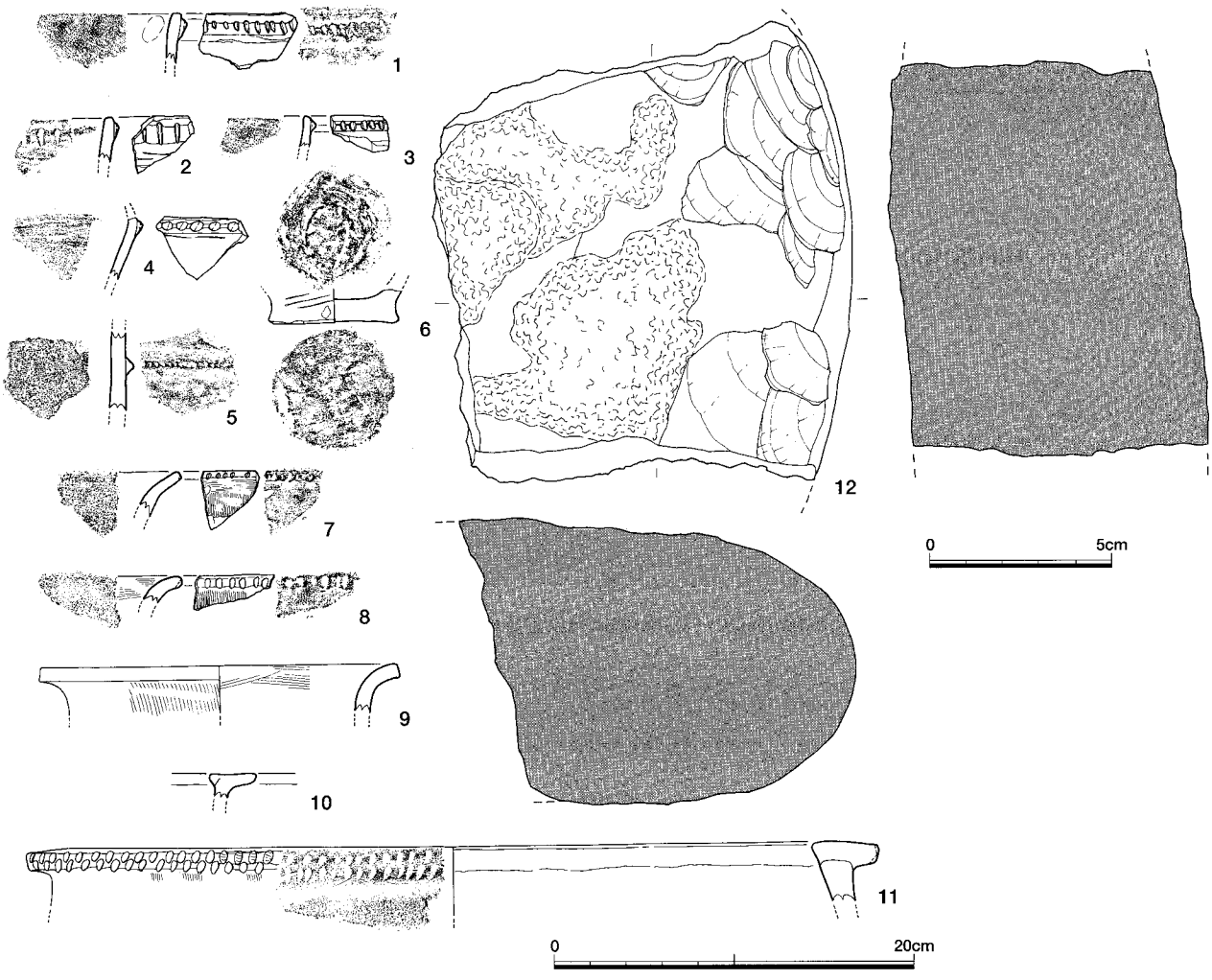


Fig.160　SK006の遺物（縮尺1/4・1/2）

第7号土壙SK007　長軸331cm、短軸190cmの楕円形土壙。深さは中央部で約20cmしかない。

出土遺物　上下の区別なく全面に多くが包含されており、111点の遺物を図示する。

土　器　1～36、39～45は突帯文土器。1～12は口縁部が内傾する。13と17はほぼ直立する口縁。18～29は口縁部が外傾する。それぞれ刻み目突帯を持つ。

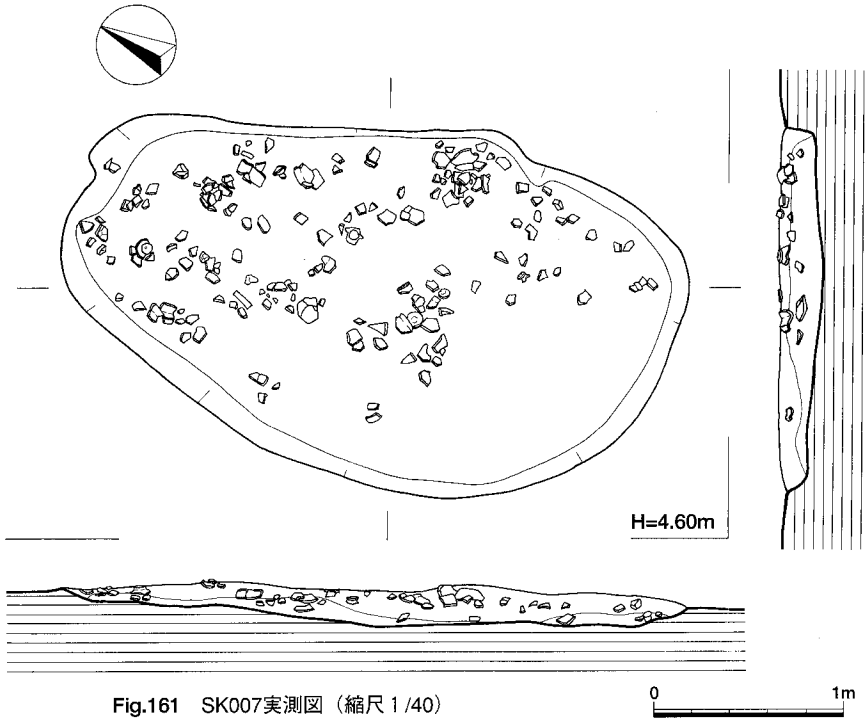


Fig.161　SK007実測図（縮尺1/40）

12は口径29.2cm、体部中位より上方で屈曲し、内傾しながら直線的に延び口縁部を作る。口縁部の突帯は断面蒲鉾形で低く幅広い。反転部より上方の調整は横条痕。下方は縦の条痕。**17**は口径3.8cm、体部中程で緩やかに反転している。外面のハケ目は粗雑。**35**～**36**は焼成後に穿孔している。外底は削り状の強いナデで、**36**には木葉痕が残る。

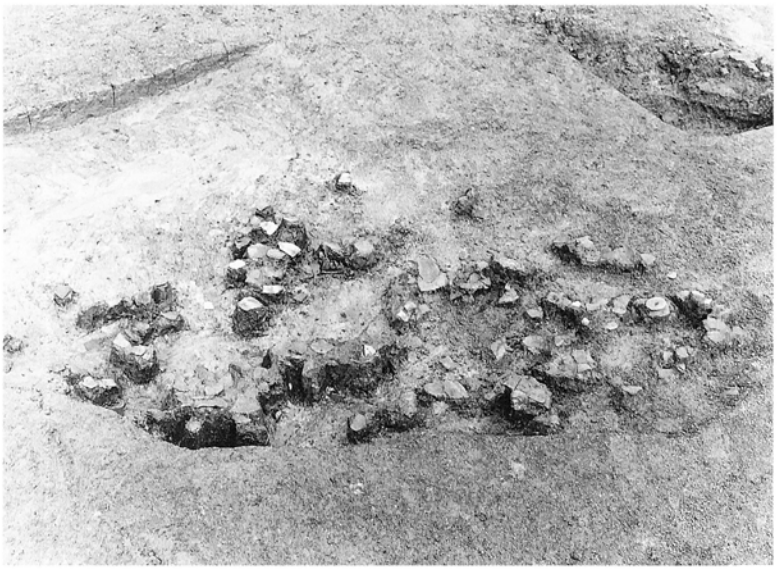


Fig.162　SK007

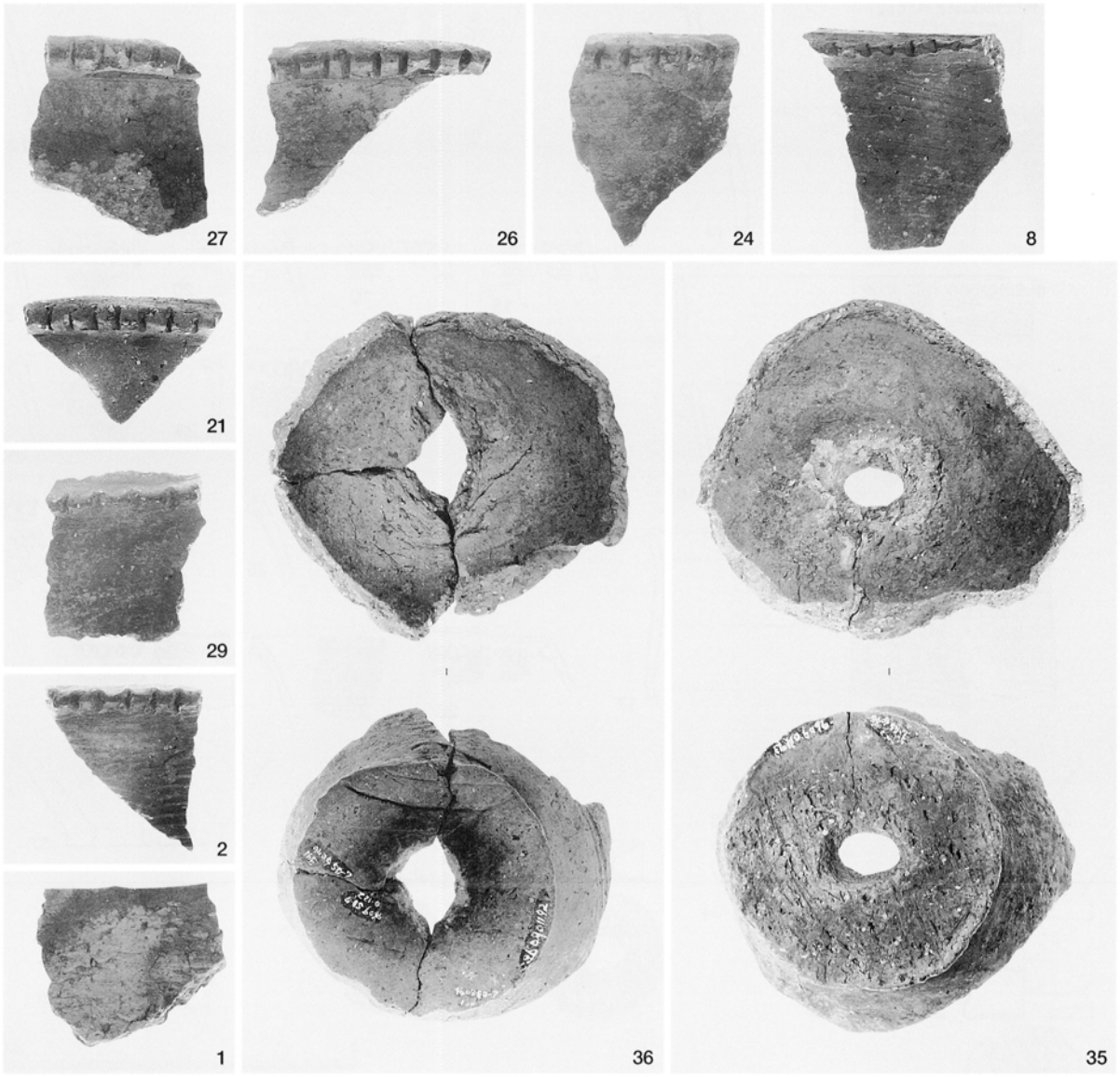


Fig.163　SK007の遺物

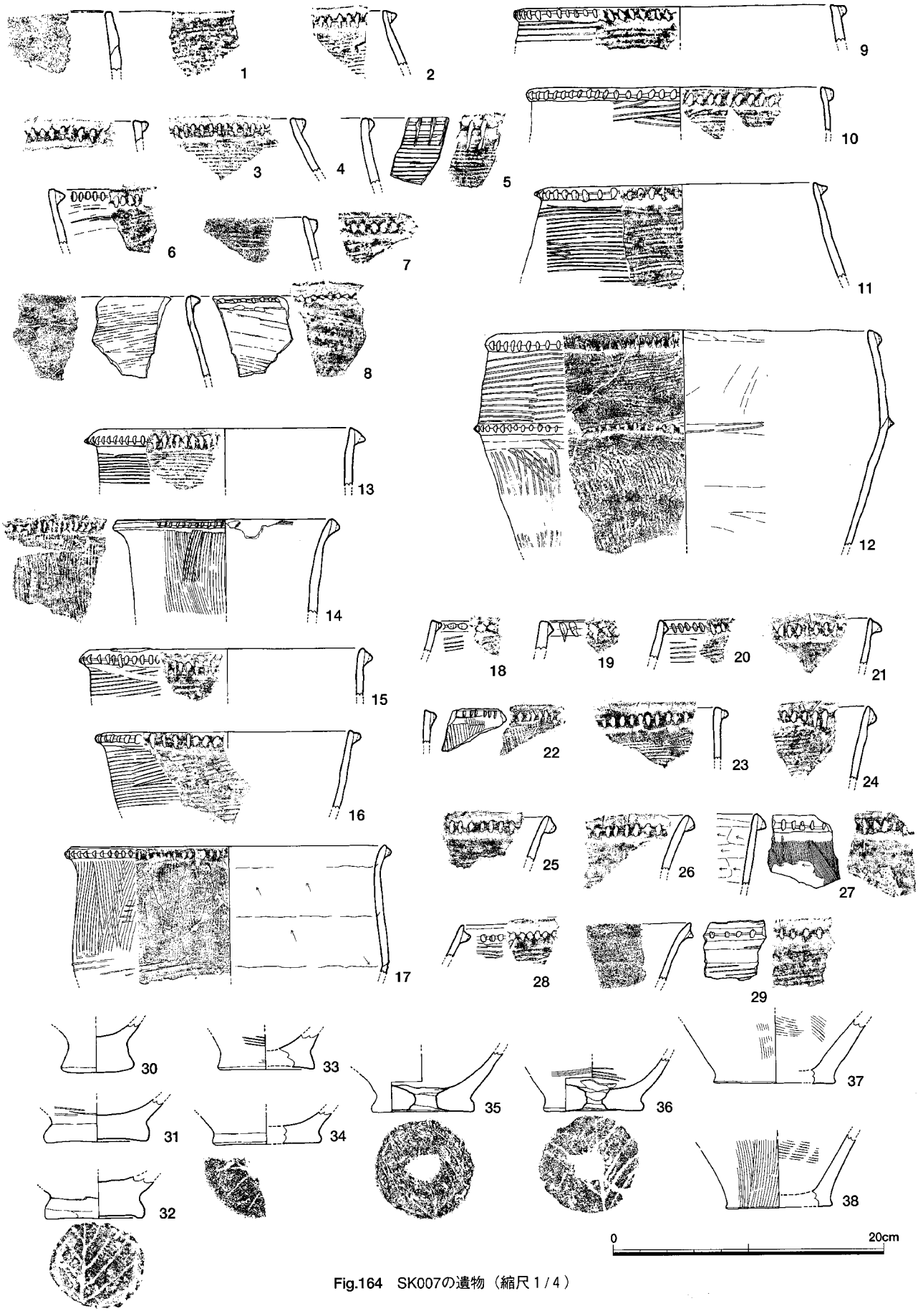


Fig.164 SK007の遺物（縮尺 1 / 4 ）

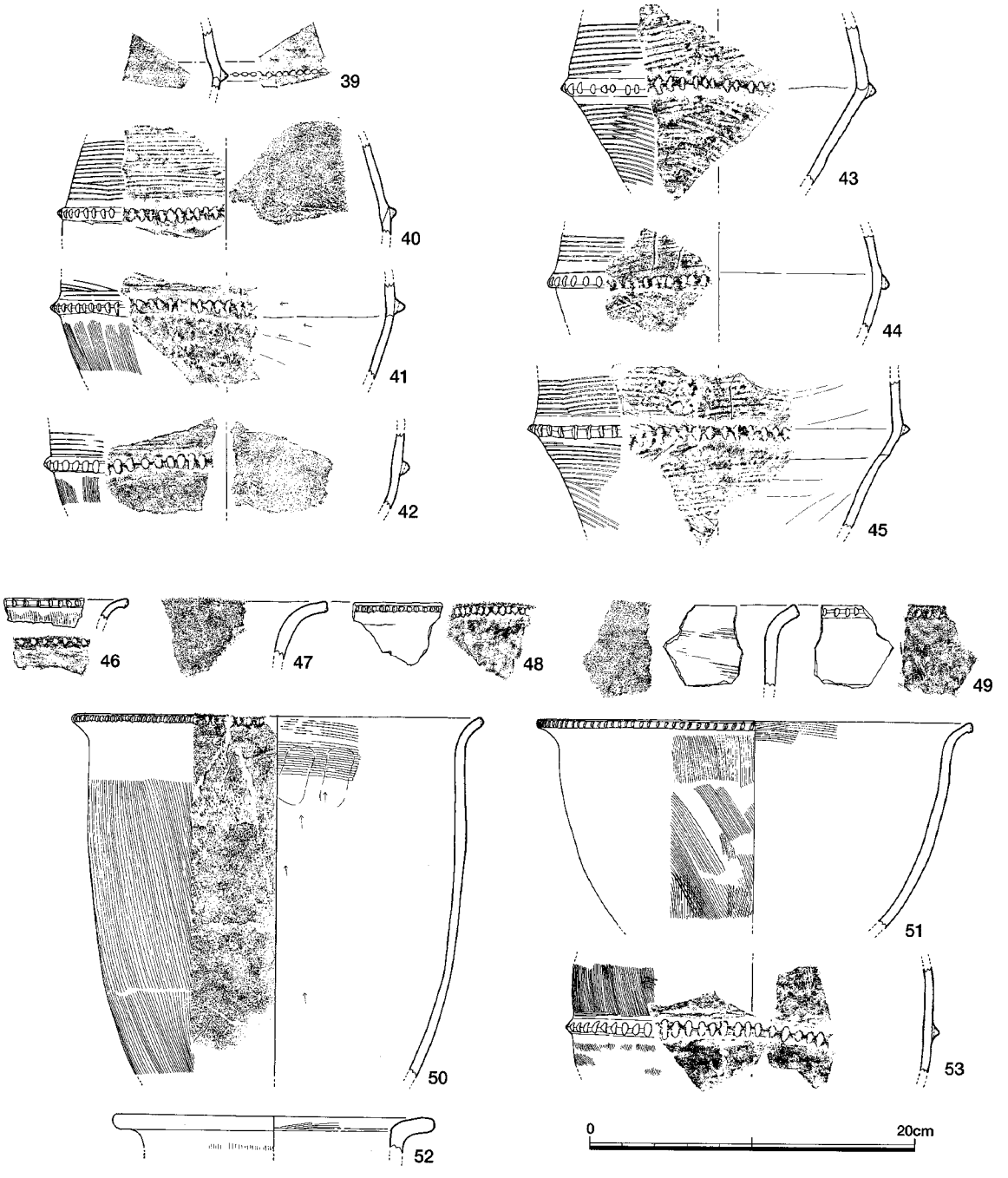
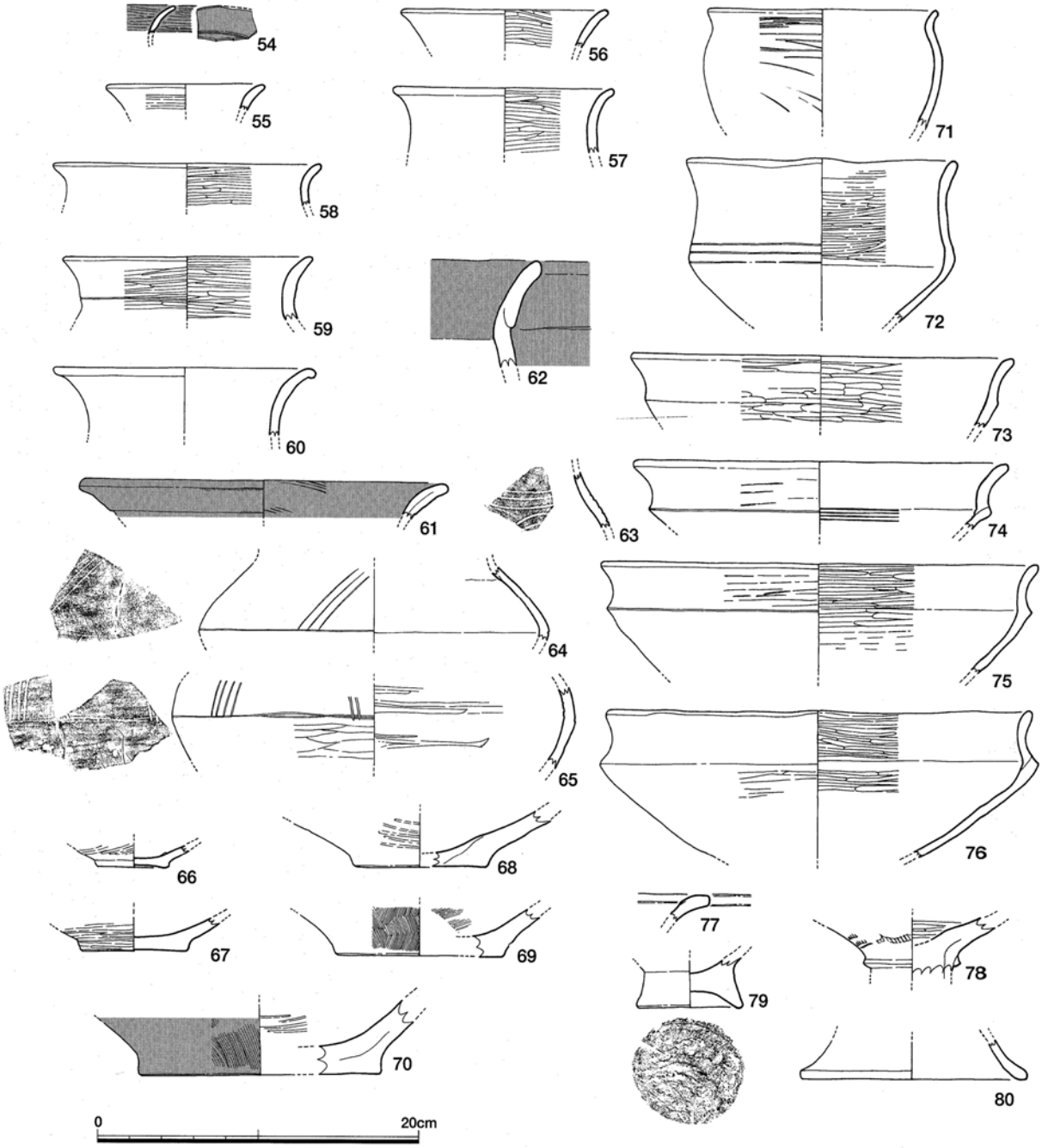


Fig.165 SK007の遺物（縮尺1/4）

46～80は弥生時代前期後半の土器。46～49は如意形口縁部の小破片。口縁下端に細かな刻み目を入れている。50は口径25.0cm、砲弾形の体部は底部を欠いているが長めの体部となっている。如意形口縁は外湾が弱い。口縁端部の刻み目は密に連続して刻んでおりほぼ上端まで達している。体部外面は縦ハケ目。きわめて丁寧な調整である。口縁部内面は横ハケ目。口縁部外面は横ナデでハケ目を消している。51は口径26.4cm、体部の傾きが大きく、甕ではなく深鉢か。

54～70は壺。細かな横ミガキを施しているものが多い。64と65は胴部中程の破片で、上半に沈線による文様がある。2点とも丸みのある胴部ではなく、屈曲し鈍い稜が付く。65には文様の間に魚のような沈線がある。71～76は鉢。71は体部が丸みを持ち、72～76は口縁部が反転している。79は鉢の底部。77は高坏の坏部口縁。78は高坏脚部と坏部の接合部、境に断面三角形の突帯を貼り付



けている。刻み目はない。坏部内面は横ミガキ、外面には粗いハケ目の後に横ナデ調整を加えている。**80**は高坏の脚裾部破片。底径14.2㎝。

石製品　**81**は磨製石剣。柄の形状をしているが断面がレンズ状で側辺が握り部には適していないことから石剣の身とする。

Fig.167
SK007の遺物

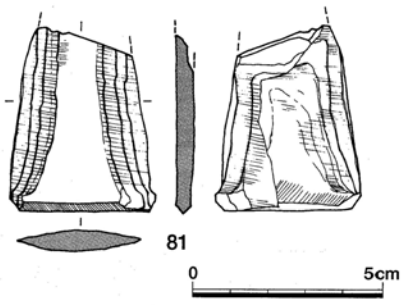


Fig.166　SK007の遺物（縮尺1/4・1/2）

第８号土壙SK008　P25グリッドにあり、SK007とSK011とに挟まれている。東西に長軸をおく楕円形プランで、長軸244cm、短軸124cmを測る。深さは約31cm。壙底はほぼ平坦となっている。

出土遺物　土器11点と骨角製品１点を実測、図示した。

土　器　突帯文土器の割合が少ない。**1**は刻み目突帯を持つ甕口縁部。外に開く口縁部で、端部断面は丸みがあり外端に接して断面三角形の突帯をやや垂れ気味に貼り付けている。刻み目は左側から入れ、細長く、板状工具の木目が残る。**2**は口径25.8cmの如意形口縁の甕。刻み目は口縁下端のみで丸みのある菱形で木目が残っている。**3**も同じような口縁部を持つ甕で、体部上半にわずかに張りがある。口径24.8cm。刻み目は右側から入れているのでD形となっている。**4**は体部中位の突帯部。粘土帯接合部の外側に断面三角形の突帯を貼り付けている。刻み目は深く細い。上半はヘラ状工具のナデで擦痕となっている。**5**は突帯文土器甕の底部。外縁部は外側へ強く張り出している。外底中央部は強い削りで上げ底状になっている。**6**、**7**は平底の底部。２点とも内面に炭化物付着している。**6**の外底には木葉痕があるが、その葉脈が２列になっている。胎土は砂粒少なく、高温焼成されている。**8**～**10**は壺。**11**は高坏の脚裾部。

骨角製品　**12**はサメの歯根部両面を丁寧に研磨しており、その研磨痕が顕著に残っている。穿孔はないが、歯根部に紐を掛けて垂飾品としたのだろう。

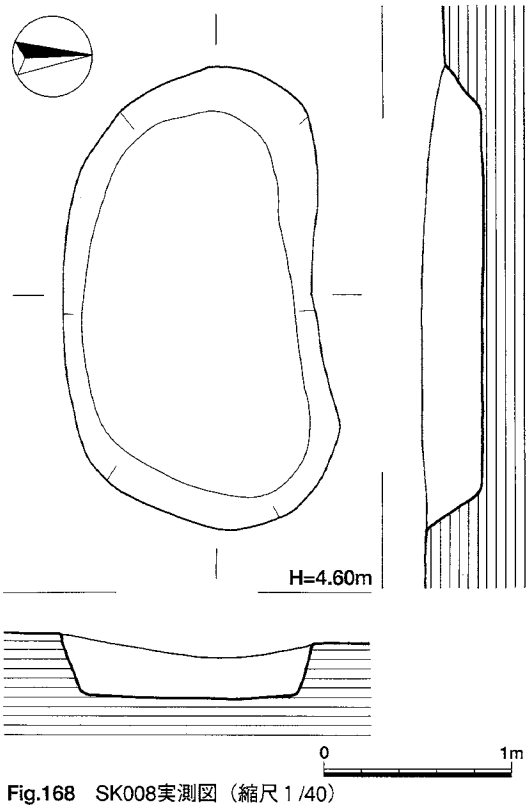


Fig.168　SK008実測図（縮尺１/40）

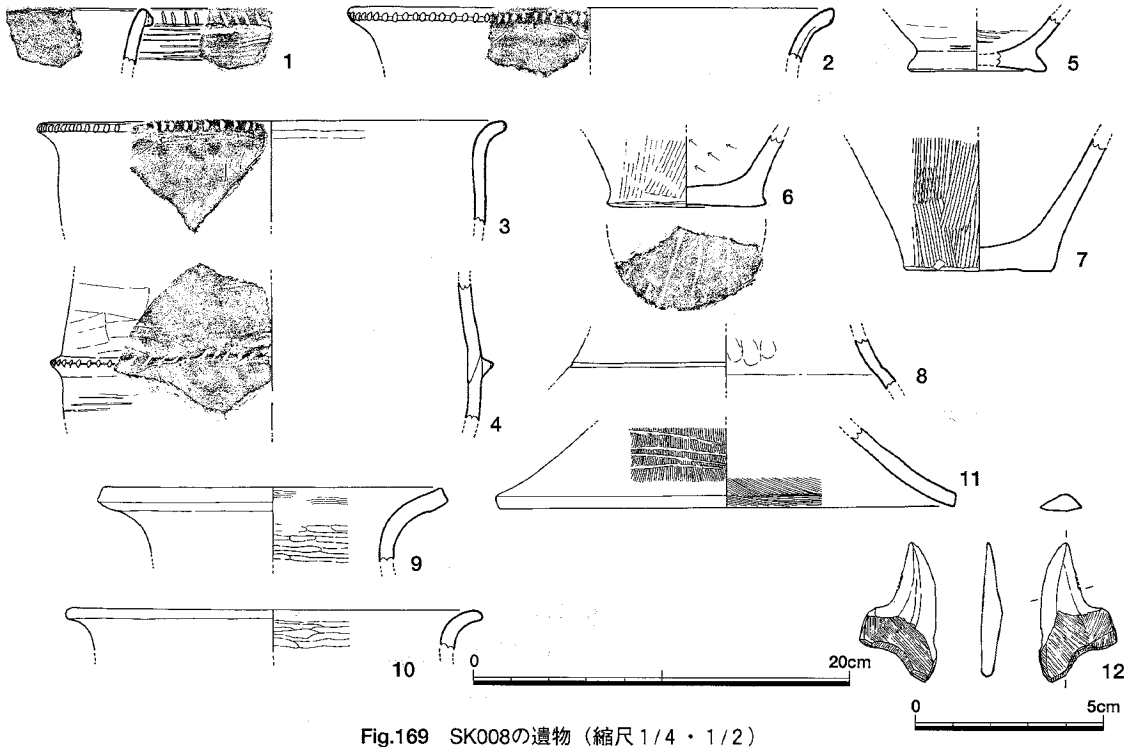


Fig.169　SK008の遺物（縮尺１/４・１/２）

第９号土壙SK009　P25グリッドにあり、SK008の南東0.5ｍに隣接している。長軸を東西におく小さな楕円形の土壙である。長軸125cm、短軸78cm、深さは約10cmしかない。

出土遺物　土壙自体が小さく浅いので出土遺物は少なく２点を図示したにすぎない。

土　器　1は弥生時代中期前半城ノ越式甕の底部。厚底の底部は、外底が深く凹み、体部への境が強く締まっているために断面がハ字形に開いた形状となっている。この部分は逆時計回りのナデ調整。外面は縦ハケ目調整。外面は茶色、内面は灰黒色。調整、器形ともよく整っている。2は底部はわずかに凹んでいる。体部との境はなくそのまま直線的に開いている。

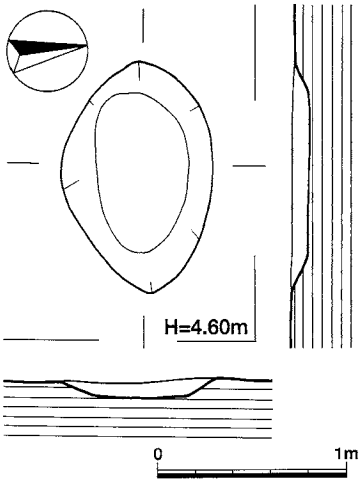


Fig.170　SK009実測図（縮尺１/40）

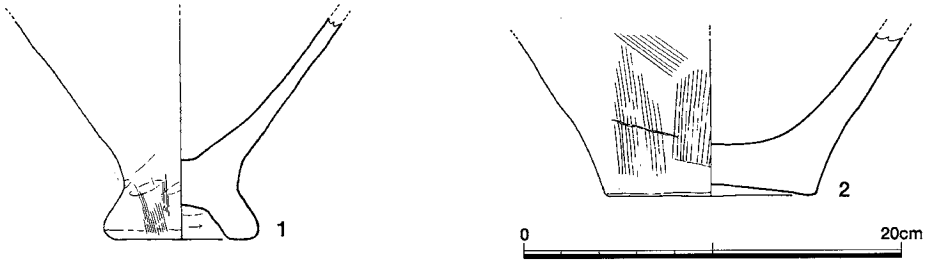


Fig.171　SK009の遺物（縮尺１/４）

第10号土壙SK010　O25グリッド南寄りにある。SK007の南東に位置し、その間隔は１ｍ。平面プランは二つの土壙が合わさったような形状をしているが底部には段がない。いま東西を長軸とすると300cm、短軸は202cmとなる。

出土遺物　パンコンテナ10箱の遺物量で、18点を実測、図示した。弥生時代前期後半から中期中頃が大部分だが、古墳時代の土器は上部から混入している。

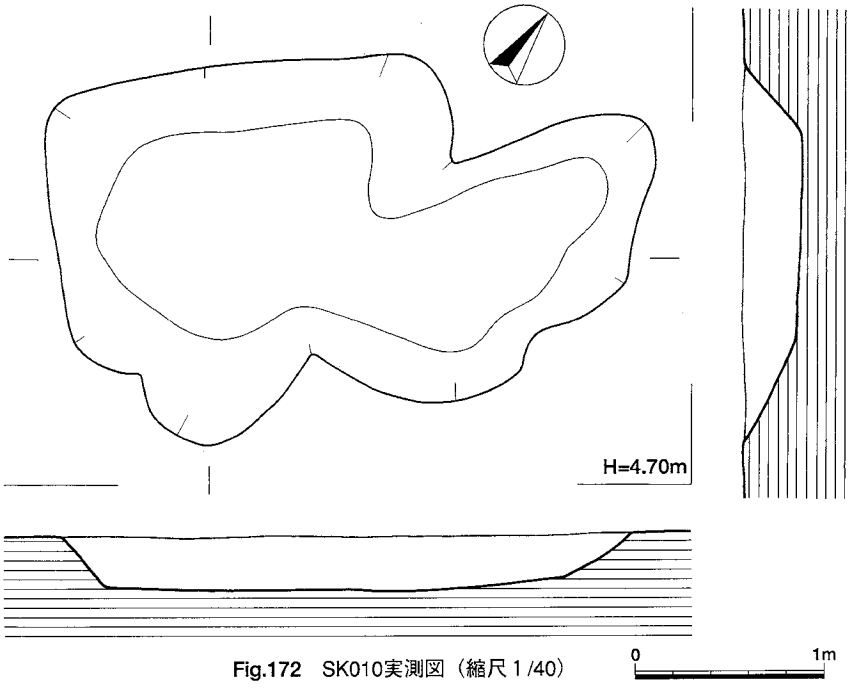


Fig.172　SK010実測図（縮尺１/40）

土　器　1～4は如意形口縁の甕。1は口径19.6cm、口縁部の湾曲は弱く、体部上半にやや張りがある。刻み目は口縁下端のみで間隔をおいて刻んでいる。2は口径22.0cm、口縁の湾曲は強く、長い口縁部となっている。刻み目は右側から入れているが不揃いで大小ある。3は口径28.0cm、口縁部は直線的に屈曲している。口縁部は横ナデ調整のままで刻み目がない。口縁端は断面方形に近い。4は小さく外反した短い口縁部がつく。口縁部下方7.6cmから口縁部にかけて器壁に厚みがあり、この段と口縁部に刻み目がある。内外面と

もナデ調整。外面は濃灰色、内面は灰色。胎土は砂粒少なく堅い焼成になっている。5～7はL字形口縁の甕、5は口径23.6cm、体部は上半に張りがあり、倒卵形（無花果形）の器形。口縁部上面も内傾し、口縁端部は断面方形である。体部外面は縦ハケ目調整。6、7は体部上端の外側に粘土板を貼り付けて水平に近いL字形の口縁部を作る。7は口径33.4cm、口縁部下約4cmに断面三角形突帯を貼り付け横ナデしている。この下方は縦ハケ目調整。胎土の砂粒少なく堅緻な焼成。全体の調整も丁寧である。12、13は壺。14は高坏脚裾部。15は器台。16、17、18は外反口縁に規則的な内面ハケ目、接合痕、粗いタタキ成形などの特徴からB系甕である。

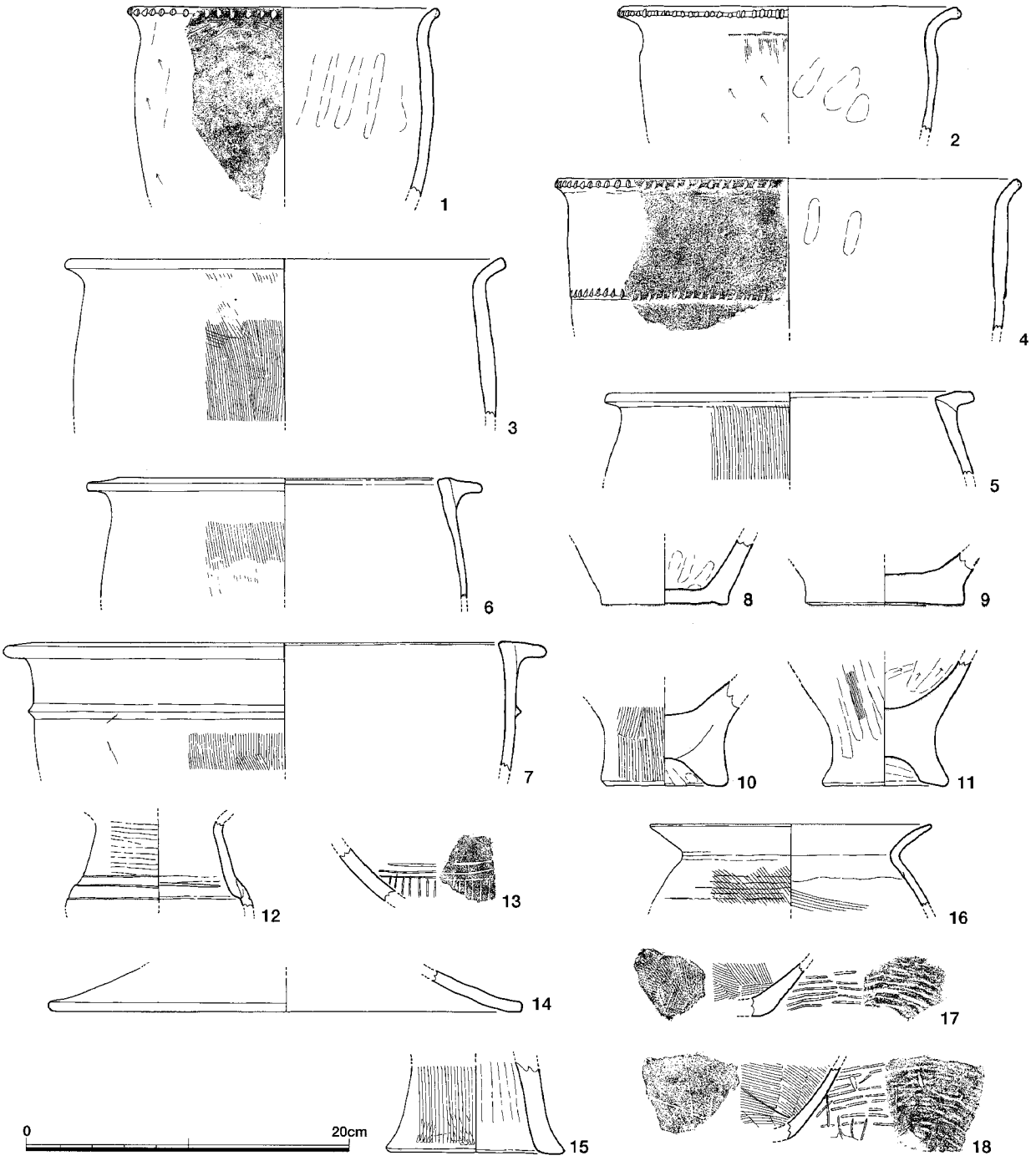


Fig.173　SK010の遺物（縮尺1/4）

第11号土壙SK011　P25グリッドの南西隅にあり、SK008の南側に隣接している。隅丸方形の一つのコーナーが飛び出した平面プランである。深さは約20cm、壙底はほぼ平坦となっている。

出土遺物　パンコンテナ4箱の遺物が出土し、うち土器22点、石製品2点を実測、図示する。

土　器　1～3は突帯文土器の甕。1．2は口縁部が内傾し、3は外に開く。1の突帯は背の低い断面台形で刻み目は左方向から入れている。外面は横条痕、内面は横ナデ調整。2の突帯は小さな断面三角形で大小不揃いの刻み目。内外面との灰茶色。4は如意形口縁の小片。端部断面は丸みがあり、その下端にのみ小さな刻み目を入れている。内外面とも横ナデ調整。5は口径21.6cm、倒卵形の体部上端外側に粘土を貼り付け、幅の狭いL字形の口縁部を作る。さらにその下方に断面三角形突帯を巡らせ横ナデする。口縁外端と体部の突帯に小さな刻み目を施す。外面は粗いハケ目調整。

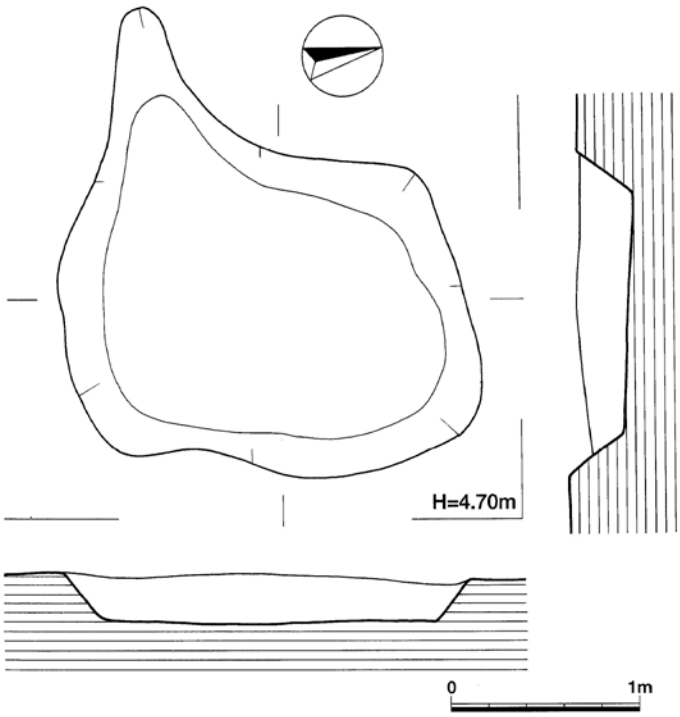


Fig.174　SK011実測図（縮尺1/40）

Fig.175　発掘作業風景

6～11はL字形口縁の甕。**6**は張りのある体部上端に下方に垂れ気味の口縁部が付く。口径28.0cm。外面は縦ハケ目調整をした後に、沈線を巡らせている。**8**の体部は倒卵形で口縁部はく字状になっている。口径36.0cm、口縁部下に背の低い断面三角形の突帯を貼り付けている。**9**も同じように倒卵形の体部で口径34.4cm。**12**～**17**は甕の底部、いずれも分厚い作りで外底中央が凹んでいる。**18**～**20**は壺。**18**は口径17.4cm、頸部上端は強く外湾し、その上に粘土を貼り付け平坦な口縁部を作っている。**22**は脚が離脱したように見えるがその痕跡はなく、上下端とも横ナデしておさめている。

石製品　**23**は砂岩質の砥石。図の表裏の2面を研ぎ面としている。**24**は黒曜石製の打製石鏃。

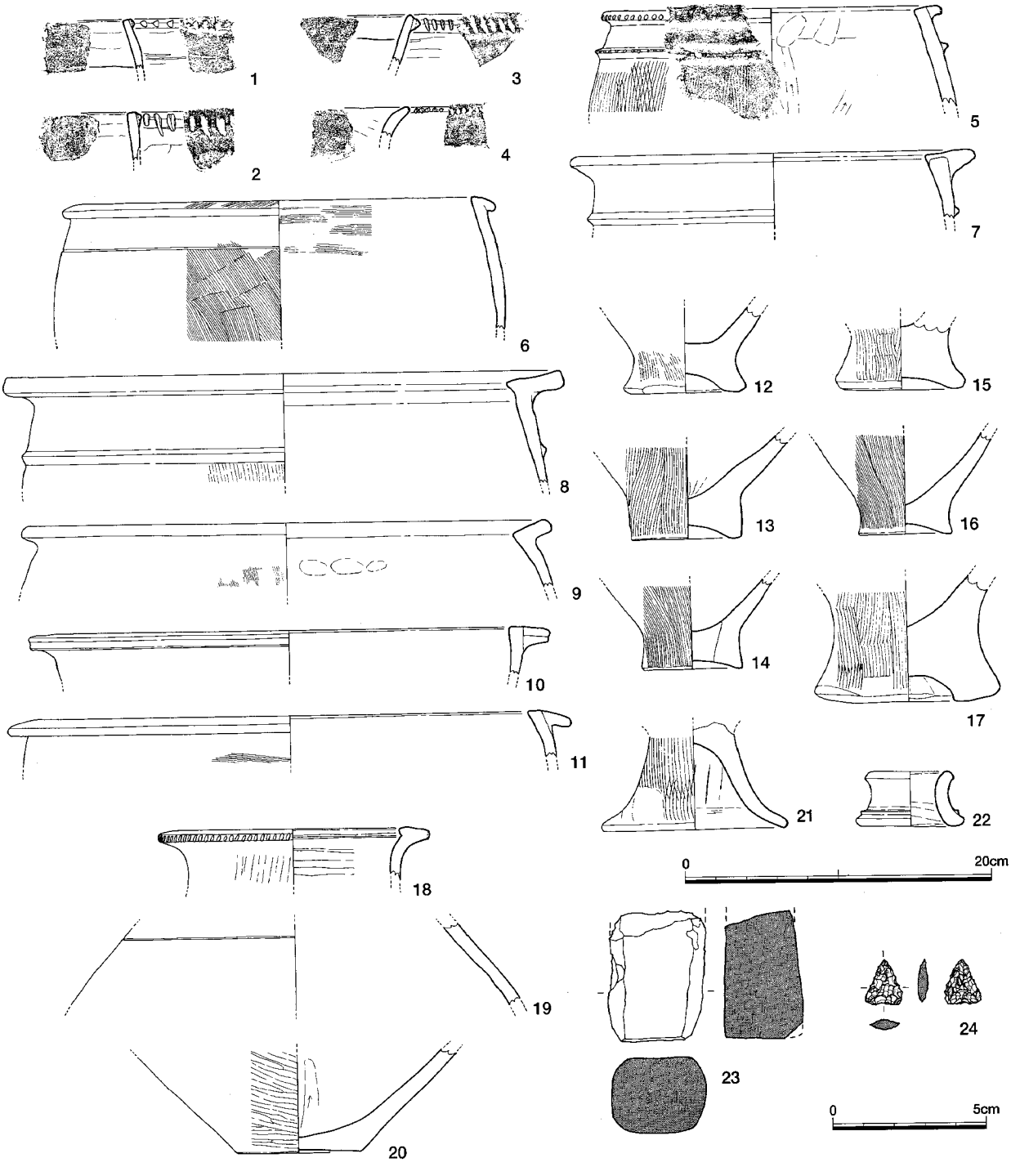


Fig.176　SK011の遺物（縮尺1/4・1/2）

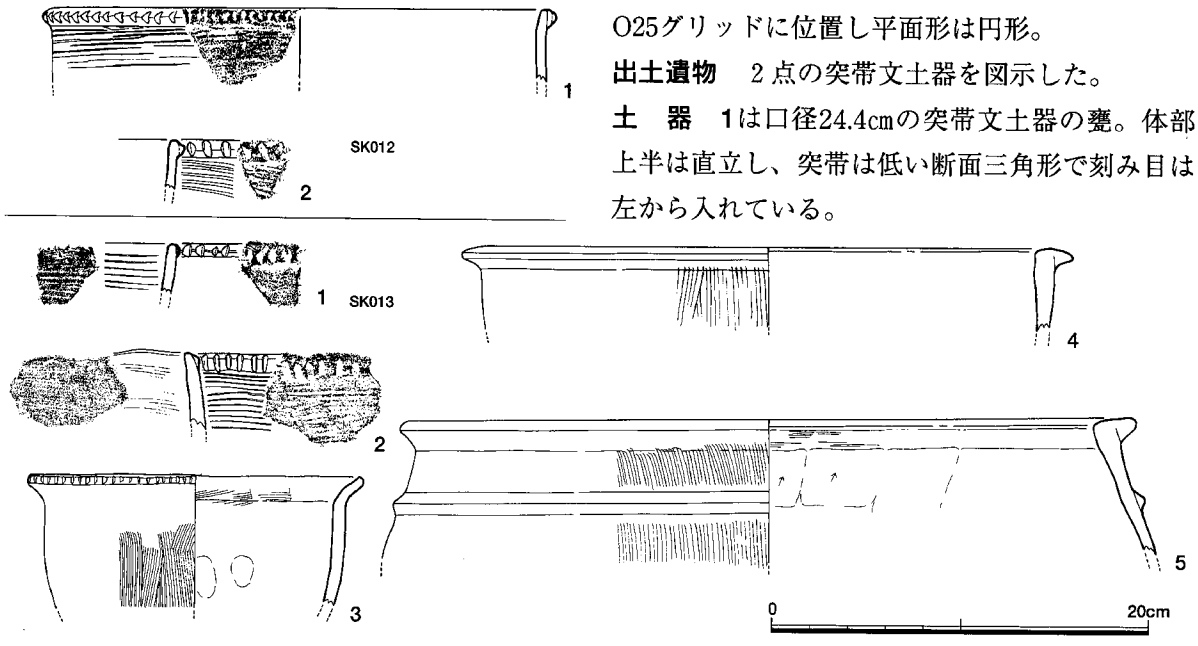


Fig.177　SK012・SK013の遺物（縮尺1/4）

第12号土壙SK012　遺構実測図は略しているが、O25グリッドに位置し平面形は円形。

出土遺物　2点の突帯文土器を図示した。

土　器　1は口径24.4cmの突帯文土器の甕。体部上半は直立し、突帯は低い断面三角形で刻み目は左から入れている。

第13号土壙SK013　Q26グリッドにある。不整楕円形のプランで長軸180cm、短軸115cmを測る。

出土遺物　突帯文土器～弥生時代中期の土器5点を図示した。

土　器　1、2は突帯文土器の甕。1は直立する口縁部で端部は丸くおさめ、小さな突帯を外端に貼り付けている。胎土はほとんど砂粒を含まず焼成堅緻。外面は擦刷痕。2の口縁部はわずかに内傾する。突帯は背が低い断面三角形で縦長の深い刻み目を入れている。内外面とも灰白色、焼成良好。3は口径16.6cm、如意形口縁の甕。外面の調整は細かいハケ目。口縁部内面は横ハケ目調整。4は口径22.4cm、体部上端は厚みがあり方形断面となっており、外側にさらに断面三角形の粘土を貼り付けて幅広の口縁部を作っている。5は口径38.8cm、倒卵形の体部には縦ハケ目調整の後に断面三角形突帯を1条巡らしている。

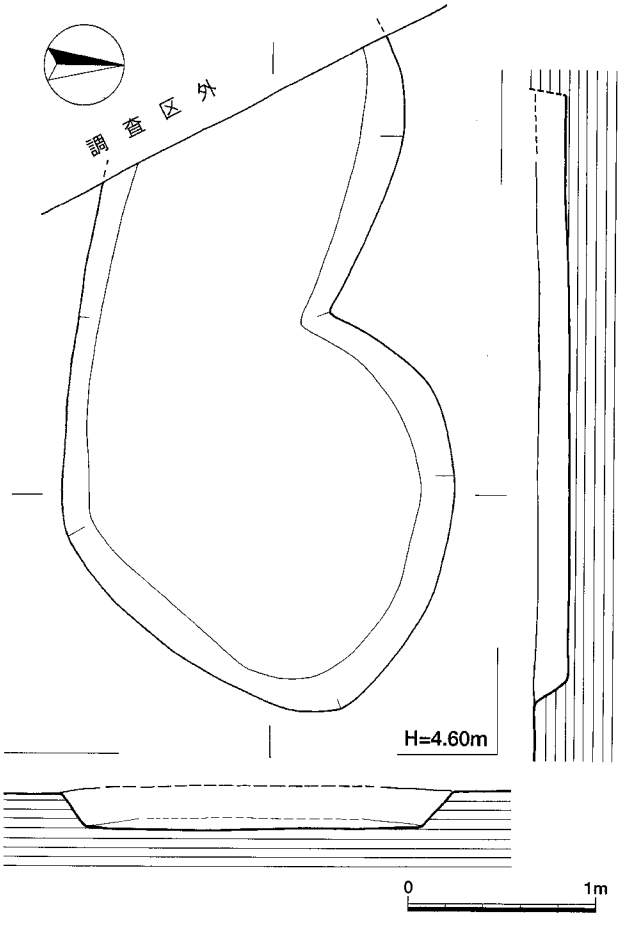


Fig.178　SK014実測図（縮尺1/40）

第14号土壙SK014　Q25グリッド西よりに位置し、SK013の西に隣接する。不整楕円形であるが西端は試掘トレンチに切られている。深さは20cm足らずで壙底はほぼ平坦。

出土遺物　13点の土器と投弾、黒曜石石核の計15点を図示する。土器に突帯文土器を含まない。

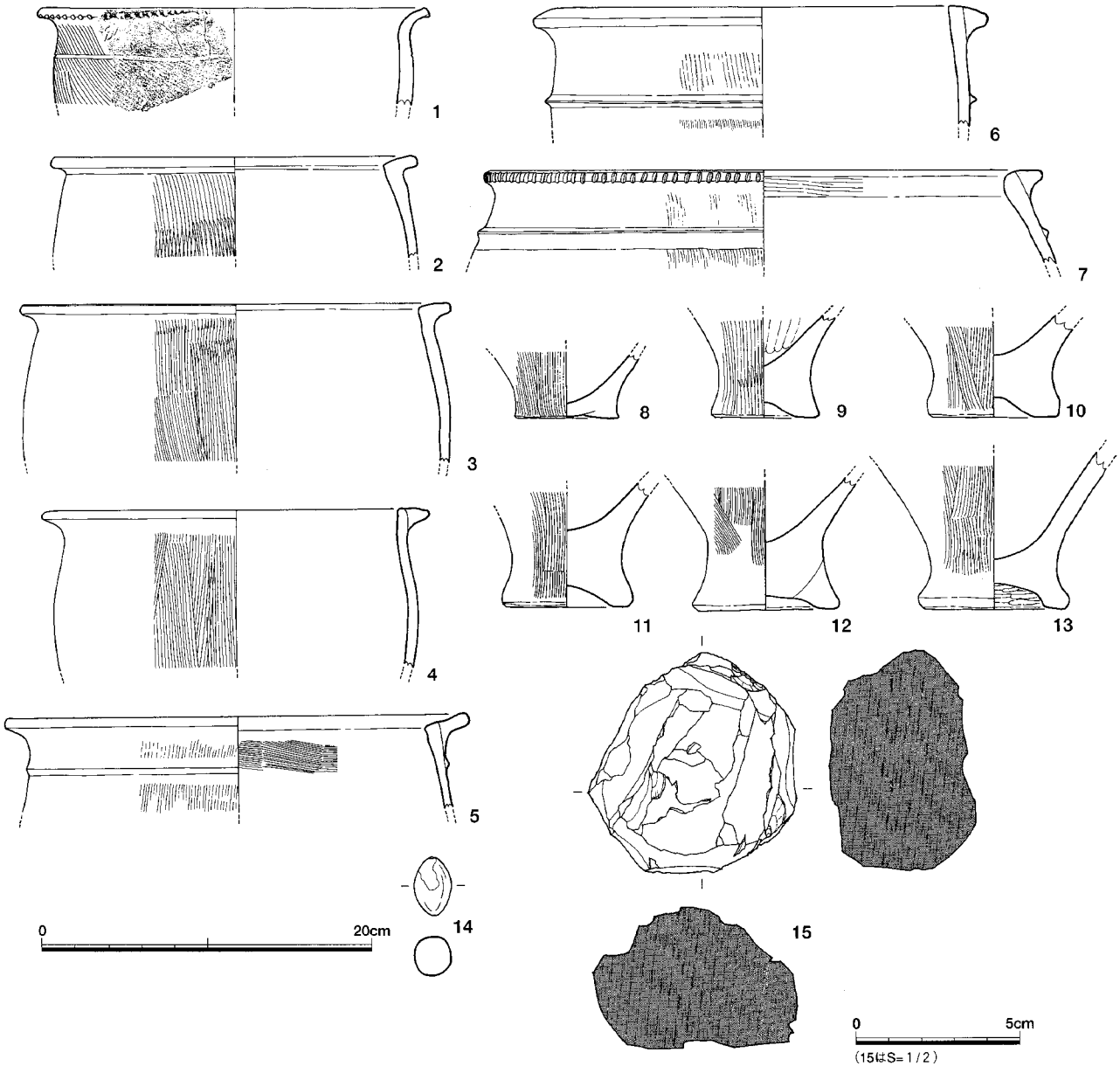


Fig.179 SK014の遺物（縮尺1/4・1/2）

土　器　1は如意形口縁の甕。体部の器壁は厚いが口縁部は薄い作り。刻み目は口縁下端のみ。外面は縦ハケ目。内面は細いヘラ状工具による横ナデ調整。口縁部下方の沈線は浅いが3㎜と通例よりも幅広い。2～7はL字形口縁の甕。6以外は体部に張りがあり倒卵形の器形となる。6は口径27.6 cm、口縁の粘土貼り付けは断面台形で分厚い作りとなっている。外面の調整はハケ目調整であるが口縁部下方の突帯の上下で目の粗い工具と細かい工具を使い分けている。8～13は甕の底部。8は平底。外面は縦ハケ目。9は底径6.4cm、分厚い作りで外底は凹み蛇の目状となっている体部への移行部は締まらず円筒形に近い。10～11も同じように分厚い作りで、底部外縁が外側に張り出している。13は底径8.4 cm、外底の凹みは細かいヘラ状工具の横ナデ。ミガキ状になっている。

土製品　14は楕円形の投弾。長さ3.54cm、中央断面は2.23cm×2.28cmで正円に近い。灰黒色で焼成よい。

石製品　15は黒曜石の石核。石器製作の剥離がなく自然石のままである。

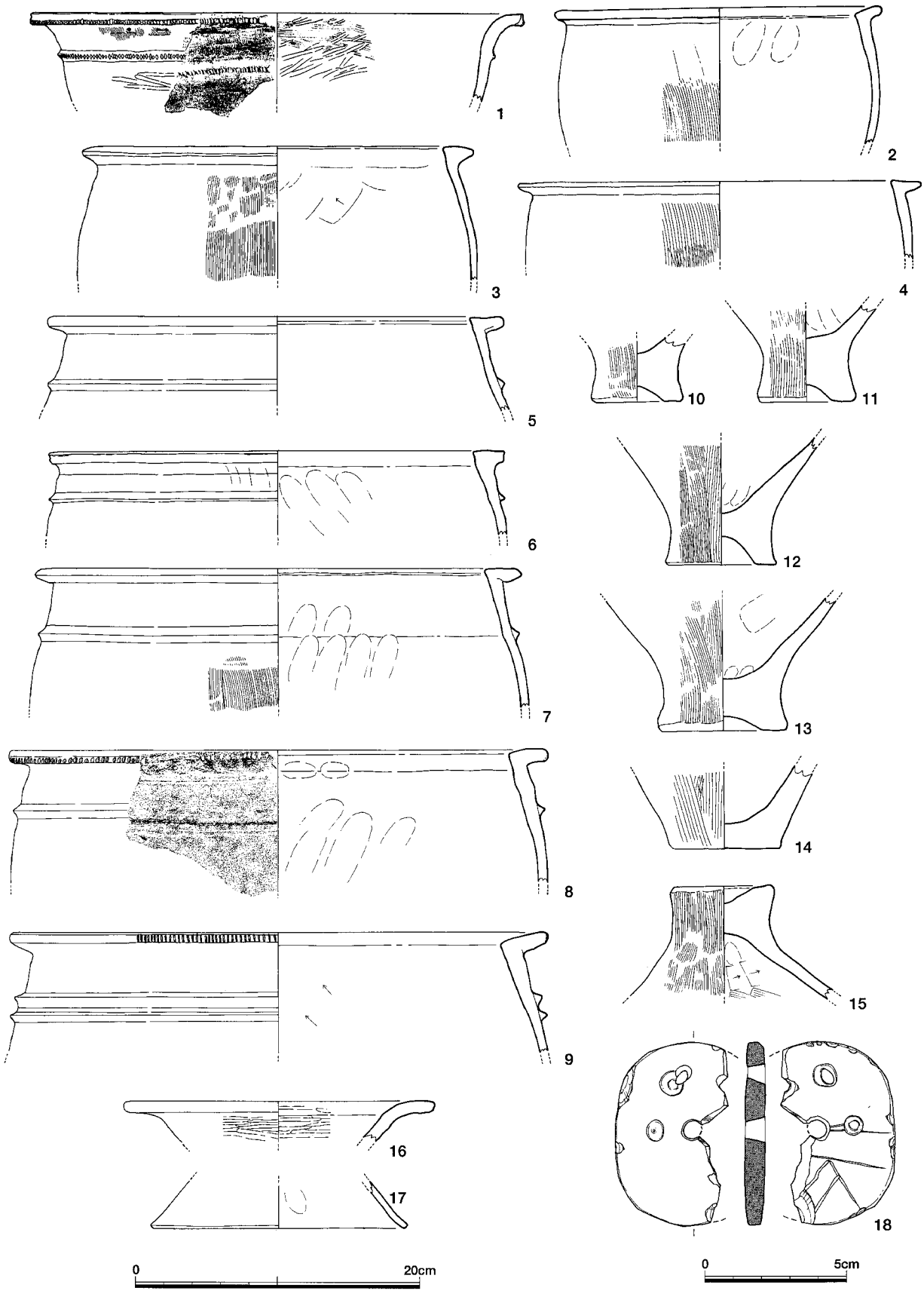


Fig.180 SK015の遺物（縮尺1/4・1/2）

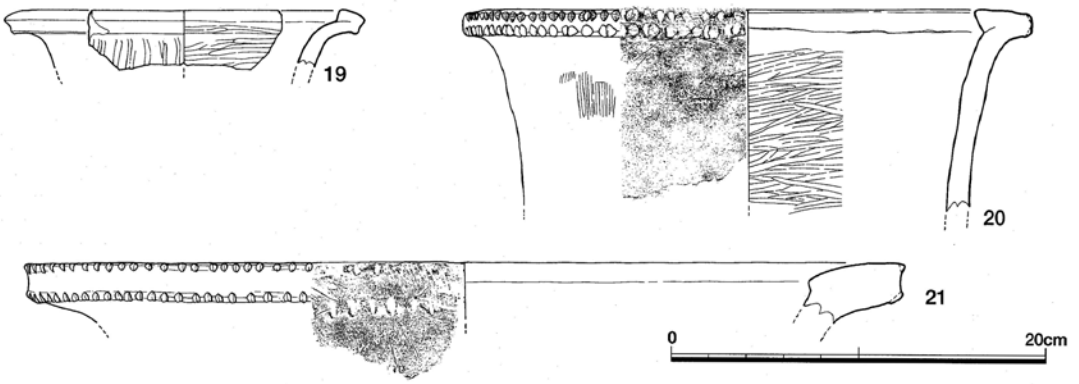


Fig.181 SK015の遺物（縮尺1/4）

Fig.182 SK015の遺物

第15号土壙SK015 Q27グリッド、SK070の北側に位置する。

出土遺物 土器17点と石製品1点の計18点を実測、図示した。弥生時代中期前半の時期が中心である。この他に動物骨と歯がある。

土　器 **1**は如意形口縁で口径35.6cm、体部の湾曲からすると甕とするよりも深鉢か。口縁端は横ナデで口唇状となり、その下端で細かな刻み目を連続させている。口縁部下方約3cmにも断面三角形の小さな突帯を巡らせ、ここにも刻み目を付けている。口縁部内面の調整は横ハケ目の後にヘラ状工具で横ナデ。ミガキの効果が出ている。**2**～**9**はL字形口縁の甕。体部は倒卵形の器形で口縁部は内傾するものと水平の二様がある。**10**～**14**は甕の底部。上げ底と平底がある。**15**は蓋。**16**は浅鉢。**17**は土師器。高坏の脚か。

石製品 **18**は滑石製の垂飾品。3か所に小孔を穿ち、図左面には文様らしき線刻がある。現在は勾玉状になっているが、本来は楕円形だったのだろう。形状や加工から垂飾品とした。

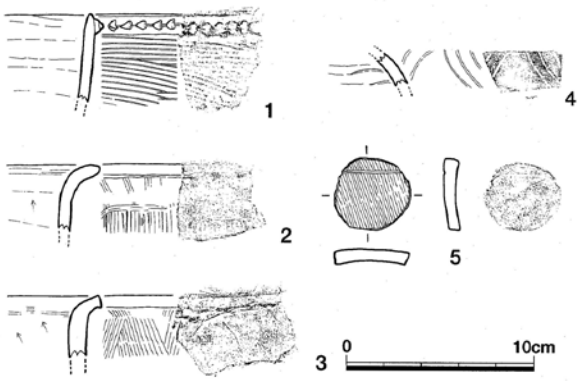


Fig.183 SK016の遺物（縮尺1/4）

第16号土壙SK016 N27グリッドでSK018の東側に位置する。径60cmで円形ピット状であるが出土遺物が多かったことから土壙として記録した。

出土遺物 5点の土器、土製品を図示したが、いずれも小破片となっている。炭化米も出土している。

土　器 **1**はほぼ直立する口縁部の突帯文土器。口縁端部は細丸状で突帯はわずかに下がって貼り付けている。外面は横条痕。**2**、**3**は小さく外湾する如意形口縁の甕。形状はよく類似しているが断面が細丸と方形と異なる。外面の調整は縦ハケ目。どちらも口縁端部に刻み目を付けない。**4**は壺の文様部。ヘラ状工具の沈線で描いている。ただし小片で傾き、上下は不正確である。外面はミガキ調整。色調は外面が灰黒色、内面は灰褐色。

土製品 **5**は土器片を再加工した円盤。外面に細かなハケ目と沈線があることから甕の破片を利用して周囲を研磨し円形としている。

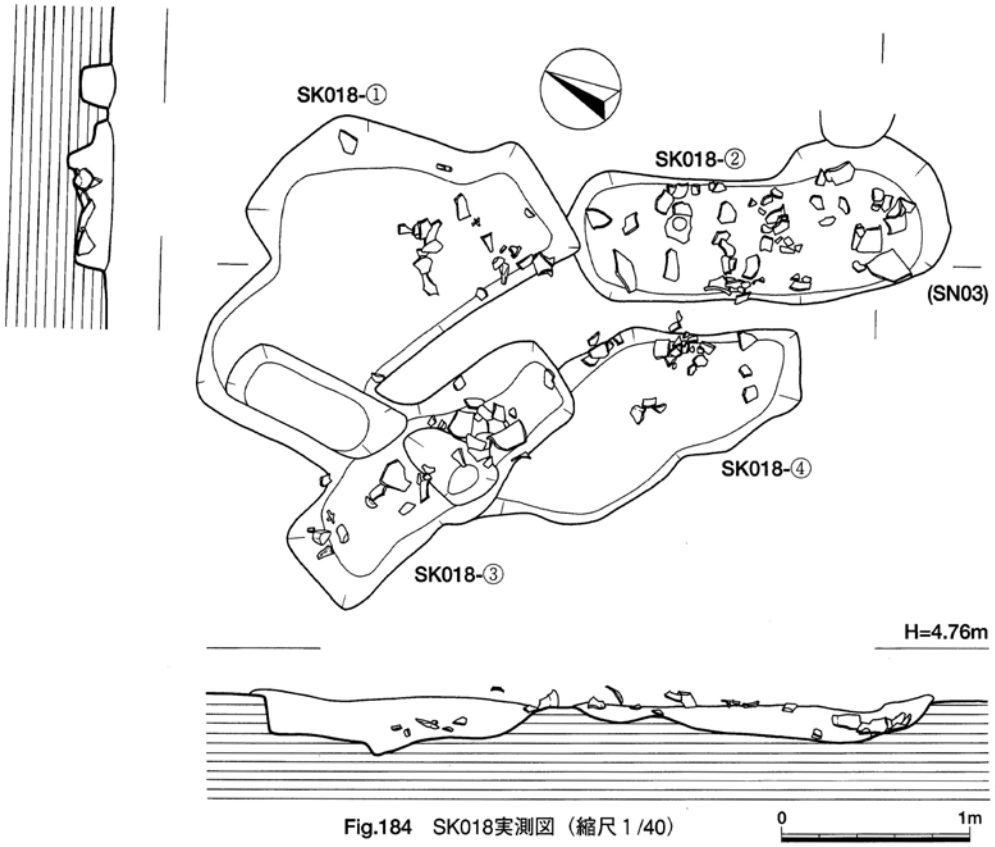


Fig.184　SK018実測図（縮尺１/40）

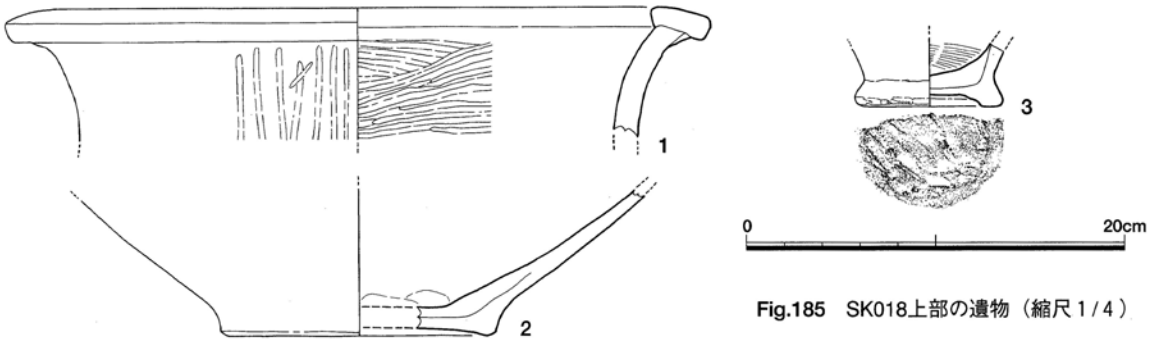


Fig.185　SK018上部の遺物（縮尺１/４）

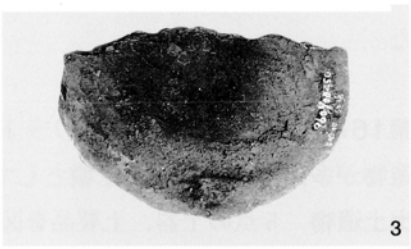


Fig.186　SK018上部の遺物

第18号土壙SK018　第３号甕棺墓SN03と名付けた乳幼児が埋葬されていた土壙である。検出当初は大きな楕円形の落ち込みと判断し掘り下げたが、次第に４つの土壙が切り合って連接していることが分かった。このため枝番号を付け遺物の取り上げを行った。４つの土壙の順序は**2→1**、**4→3→1**であるが、出土遺物では極端な時期差はない。なお人骨の下部にあった甕は先に記述した通りである。

出土遺物　各土壙の前に上部から出土した遺物を先に記述する。

土　器　**1**は広口壺で口径37.2㎝、朝顔状に大きく開く頸部上端に粘土板を乗せ、やや垂れ気味の幅広の口縁部となす。頸部の器壁はやや厚め。口縁外端に刻み目。頸部の外面はナデの後に縦のミガキ、内面は横のミガキ。胎土には小砂粒がわずかに入る。焼成よく色調は茶色。**2**は壺の底部で径14.0㎝。やや上げ底の底部から大きく開いて胴部へと続く。底部と胴部の接合部内面は指頭圧痕が付く。内面は風化で砂粒が露出している。胎土は１～３㎜大の砂粒が多くきめが粗い。**3**は突帯文土器甕の底部。

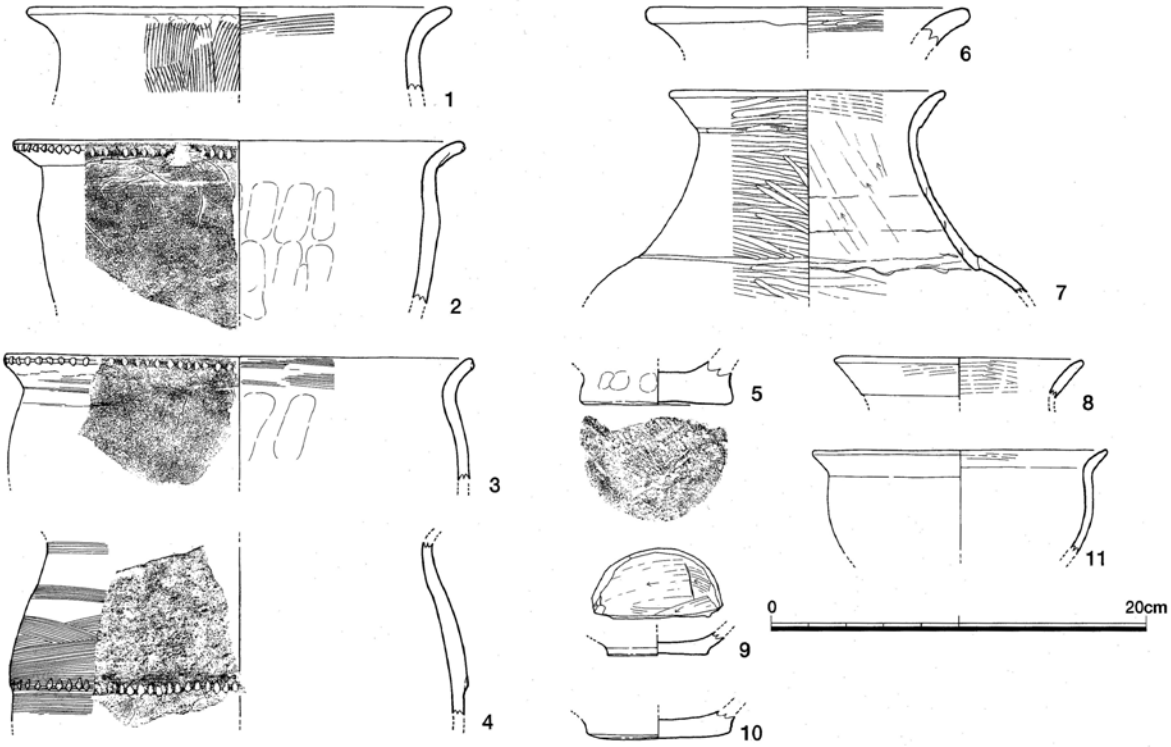


Fig.187 SK018-①の遺物（縮尺1/4）

断面に粘土接合の様子がよく観察できる。内面には部分的に粗いハケ目調整痕が残る。

第18号土壙SK018-① 4つの土壙のうち最も北側にあり、切り合いからすると新しい土壙である。上面プランは不整長方形。側辺のラインが乱れており、上面からの掘り込みが重なっているのだろう。深さは約20cm前後、壙底は凹凸がある。

出土遺物 11点の土器を図示したが、2点の古墳時代土師器は上面からの掘り込みを示すのだろう。

土　器 **1～3**は如意形口縁の甕。**4**は口縁部がないが口縁部下方がややすぼまる甕。**5**の外底はケズリ状のナデ。**6～10**は壺。**7**は口径14.6cm、口縁部は肥厚し頸部に段が付く。頸部と胴部の接合がよく分かる。**9**、**10**は壺の底部。**9**はわずかに円盤状、**10**は外底が平坦でない。

Fig.188 SK018（南より）

第18号土壙SK018-②　長方形プランで、長軸はSK018-①から南に折れている。その西端がわずかに切られていることから、先後関係が分かる。長軸204cm、短軸64cm。深さは20cm前後、壙底は平坦ではなく、人骨がある南側が深くなっている。

出土遺物　4基の中ではもっとも出土量が多く、しかも大きな破片が目立つ。

土　器　1～10は如意形口縁の甕。4は口縁部下方がすぼまり、その分体部に張りがある。器形からすると長めの体部となる。口径23.2cm、口縁の湾曲は小さく弱い。口縁端部の刻み目は浅く不鮮明。外面はかすかに縦のハ

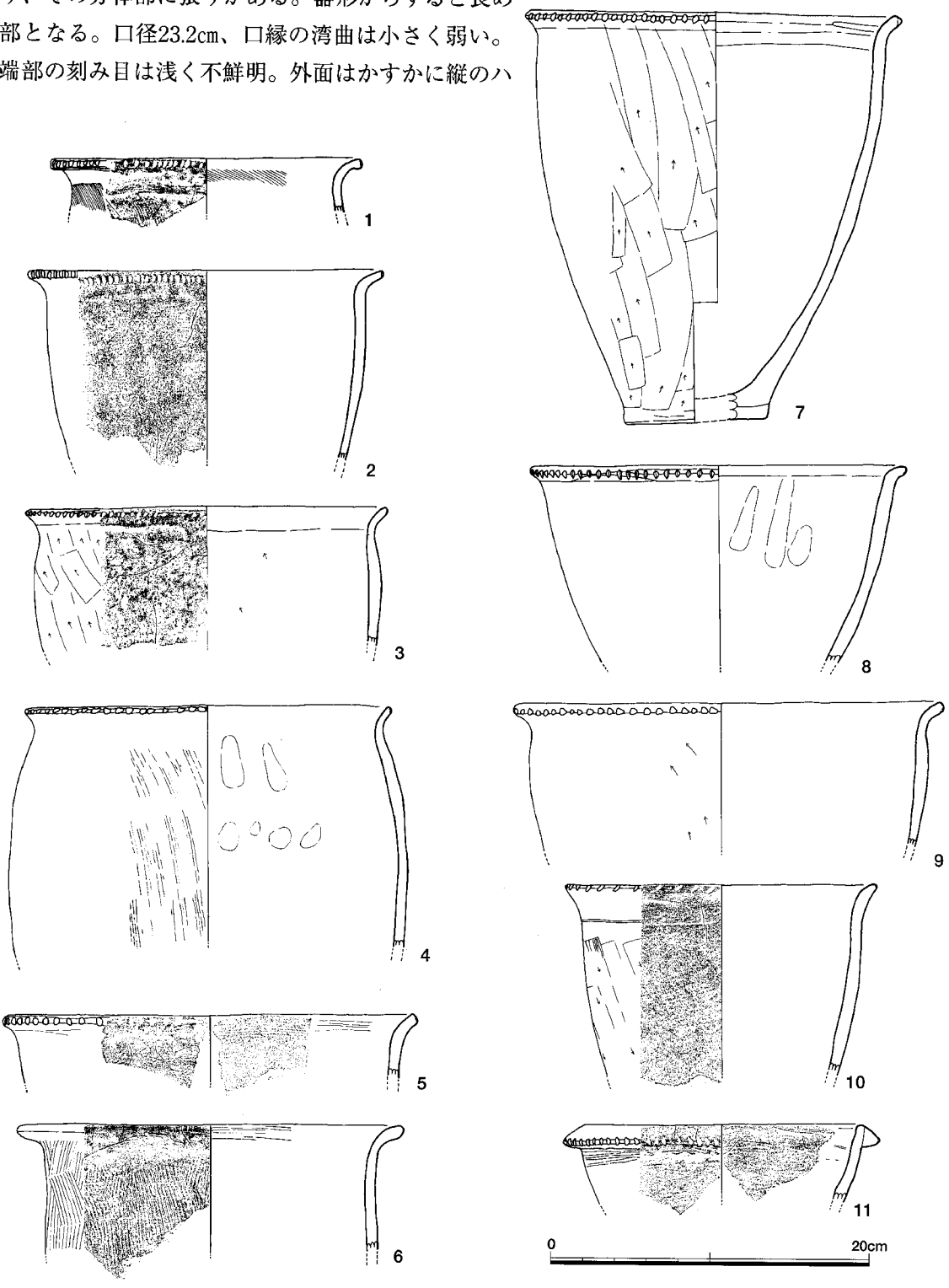


Fig.189　SK018-②の遺物（縮尺1/4）

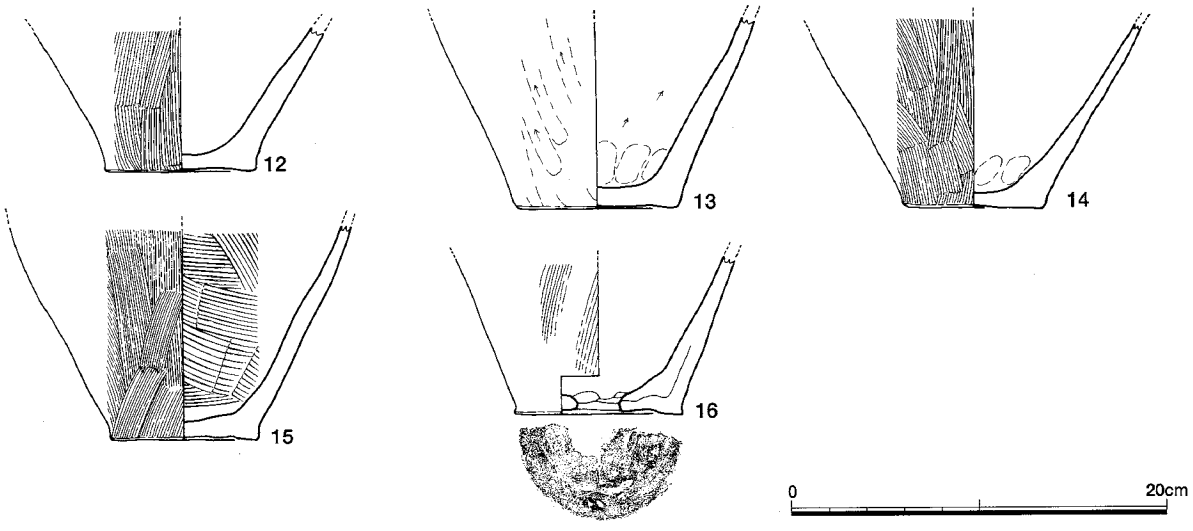


Fig.190 SK018-②の遺物（縮尺1/4）

ケ目調整が残る。胎土には砂粒が多い。内外面の色調は茶褐色。**11**は分厚い断面三角形粘土を貼り付けた口縁部。その頂点に刻み目を入れている。**12**～**16**は甕の底部。**14**は底径7.4cm、平底から逆ハ字形に開く体部となる。内面には指頭圧痕が並び、外面はハケ目を重ねて調整している。胎土には3～4㎜の大きめの砂粒が入る。**17**～**24**は壺。**17**は小型壺の口縁部。口径7.8cm、精良土が用いられ焼成はよい。口縁部と頸部との境は明瞭でない。**19**は底部を欠いているがほぼ全形を伺うことができる。口径10.4cm、胴部最大径14.4cm。胴部は球形ではなく玉葱状になっており、頸部は強く内傾している。外反する口縁部は直線的で長い。先端は細丸におさめている。**25**～**27**は深鉢。**26**は体部中位で反転し、さらに口縁部で外に開く。内外面とも細かな横ミガキ。**28**は口縁部の直線的形態、口縁～肩部の横ナデ、ナデ肩などからD系甕（比恵・那珂タイプ）である。

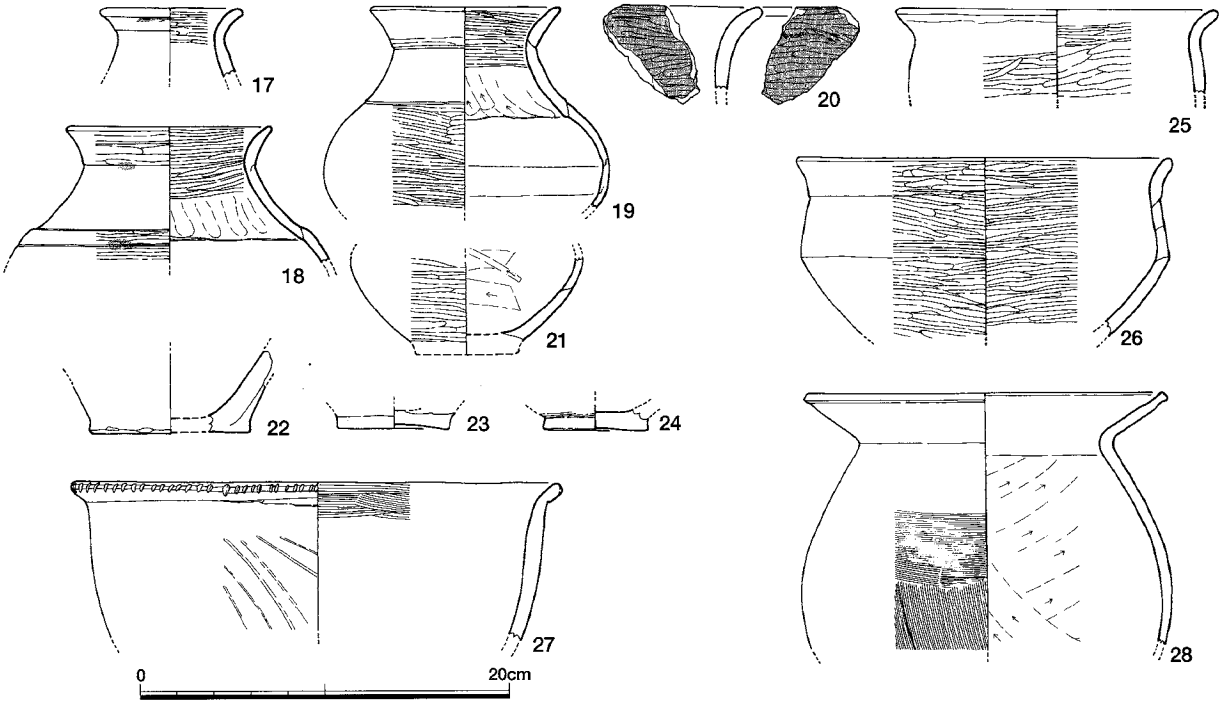


Fig.191 SK018-②の遺物（縮尺1/4）

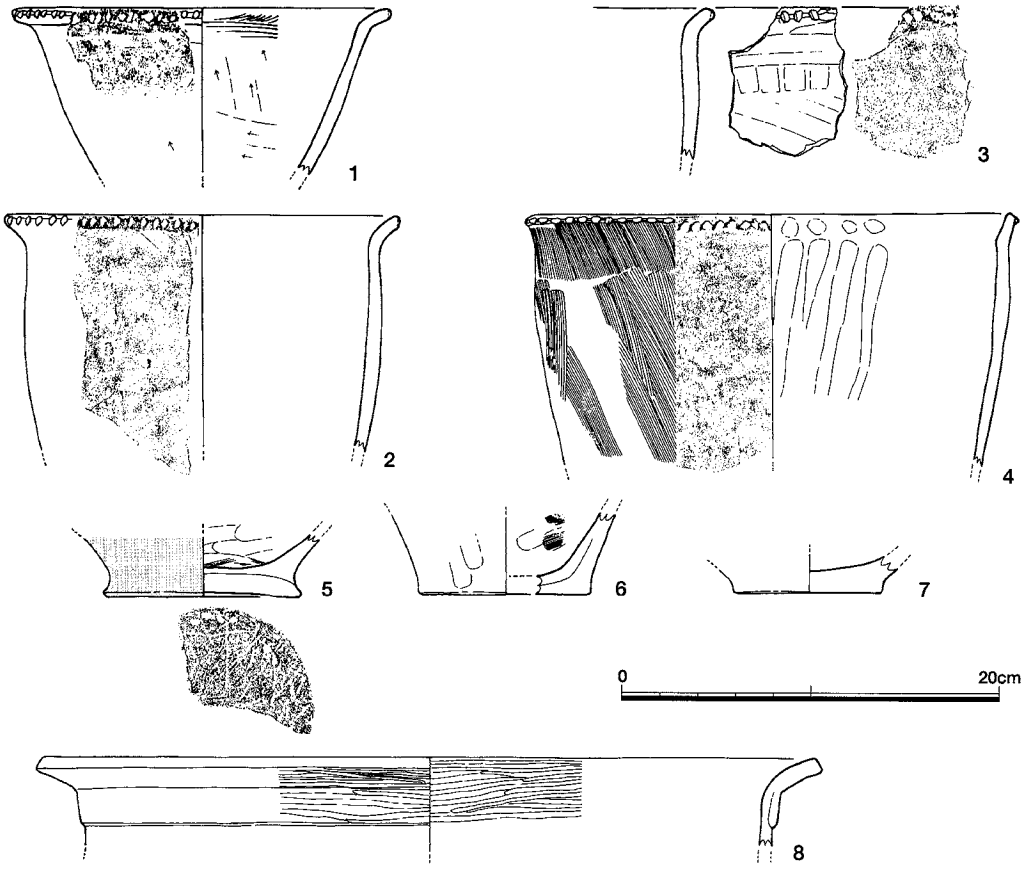


Fig.192 SK018-③の遺物（縮尺1/4）

第18号土壙SK018-③ SK018-②とを繋ぐような長方形の落ち込みがある。南側ではSK018-④を切っている。割りに整った長方形で、長軸171cm、短軸60cm。

出土遺物 1は口径19.8cmで体部は底部から大きく開いており、形状から鉢とした。2、3は如意形口縁の甕。4は口縁部の屈曲はわずかで端部を断面方形におさめ、外端に浅い刻み目を入れている。外面は細かな縦ハケ目。内には指頭圧痕がよく残っている。8は口径41.2cmの鉢。内外面横ミガキ。

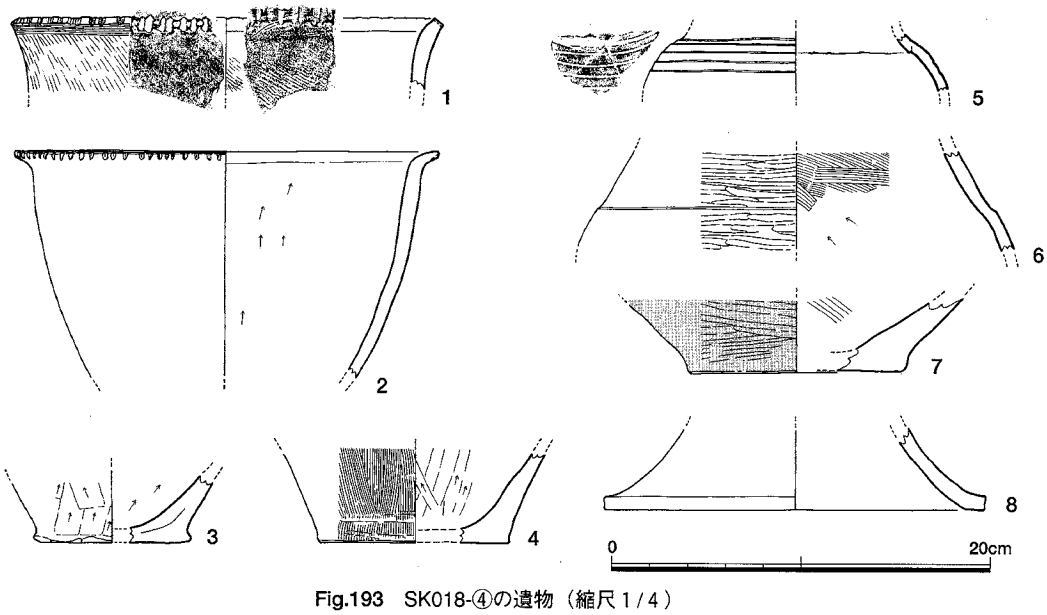


Fig.193 SK018-④の遺物（縮尺1/4）

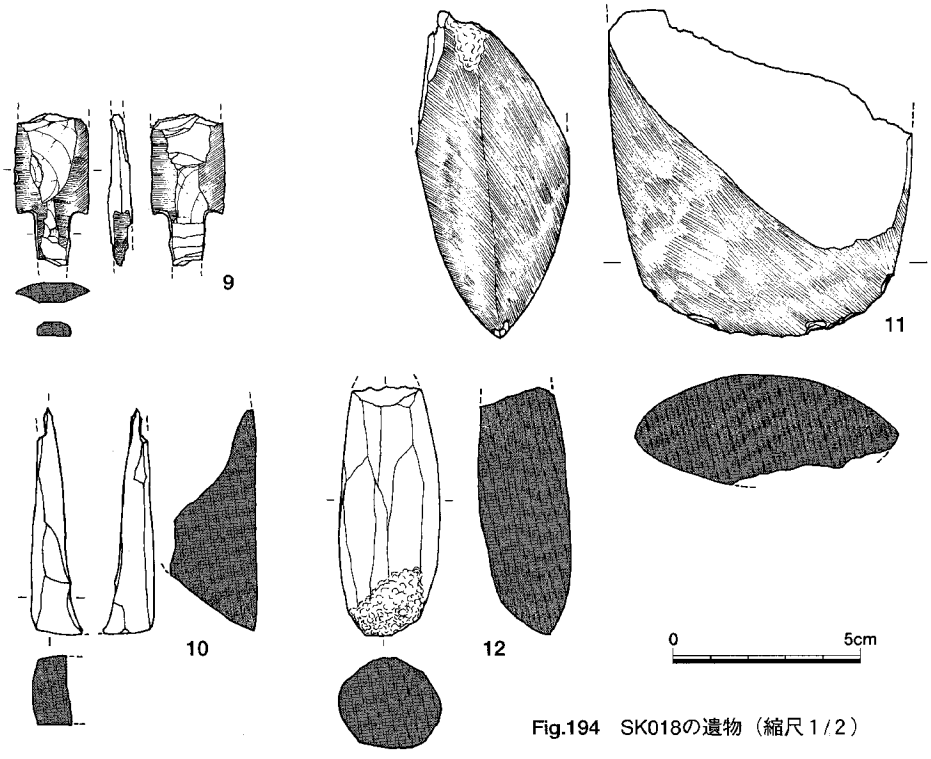


Fig.194 SK018の遺物（縮尺1/2）

第18号土壙SK018-④ 4基のうち最も南西側に位置する。他の土壙が割りに長方形に近いプランだったのに対し、楕円形のプランは整っていない。深さは約20cm。

出土遺物 壙内で偏りがなく土器、石器が出土した。**1**はSK018-③出土の**4**のように甕口縁端部はわずかに外湾し、方形断面となっている。この端部に縦の刻み目を入れている。体部は左上がりの条痕風の粗いハケ目。内面も左上がりのハケ目。**2**は如意形口縁を持つ甕。湾曲は小さく刻み目は口縁上端までには達していない。**3**、**4**は甕の底部、**3**の底部外縁は強くナデている。**5**、**6**は壺の胴部から頸部の破片。**5**には頸部への移行部に5本の平行沈線を巡らしている。**6**の外面は細かな横ミガキ。頸部内面はハケ目調整。**7**は壺底部。**8**は高杯脚部。**9**～**12**は石製品。**9**は有茎磨製石鏃。茎の断面は長方形に近い。身の表裏とも欠損しているので鏑があったかは不明。**11**は蛤刃石斧。全面に細かな研磨痕が見られる。**10**は方柱状方刃石斧、刃部の角度が大きい。**12**は棒状の磨石。

第20号土壙SK020 長さ236cm 幅106cmの長方形プランで、各コーナーはやや丸みがある。各側辺は割りに直線的だが西側辺だけが凹凸がある。深さは約15cm。壙底の北西側に寄って炭化米が5cm前後の厚さで敷き詰めたような状況で出土した。その量から、貯蔵土壙と考えられるが、保存のための特別な工作は認められない。炭化米に混じって数点の土器片が出土したが、図示できるような大きさではなく平底の甕底部片や周辺の土壙配置などから弥生時代前期後半頃と推定しておく。

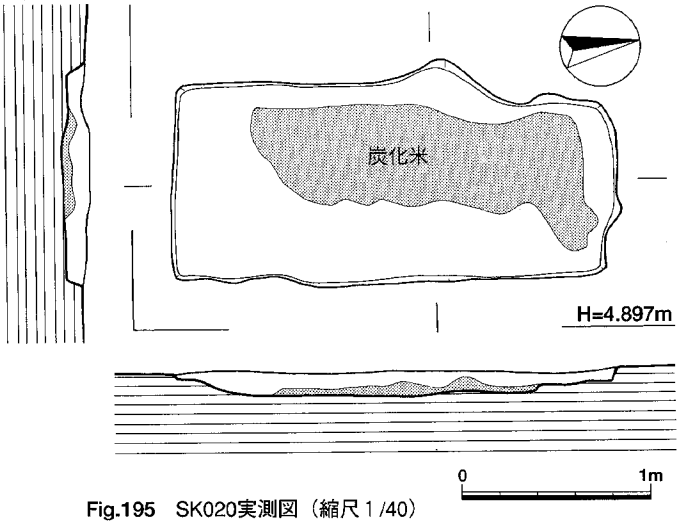


Fig.195 SK020実測図（縮尺1/40）

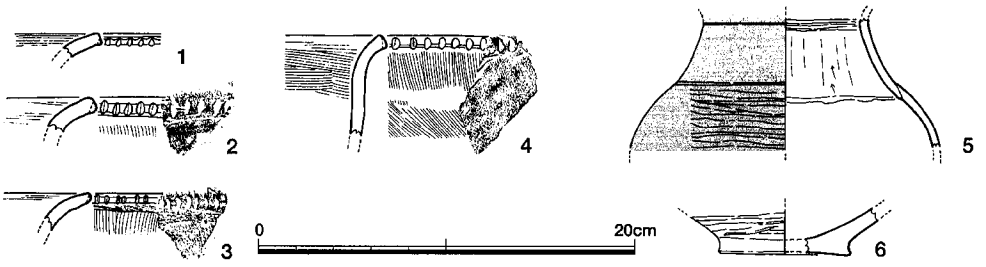


Fig.196　SK019の遺物（縮尺1/4）

第19号土壙SK019　O25グリッド北東隅にある。85cm×90cmの不整円形。

出土遺物　1～4は如意形口縁の小片。いずれも口縁下端に刻み目を入れている。4は直立気味の体部で屈曲はきわめて弱い。5、6は壺。5の胴部最大径は15.2cm。胴部外面は横ミガキ。丹塗りか。

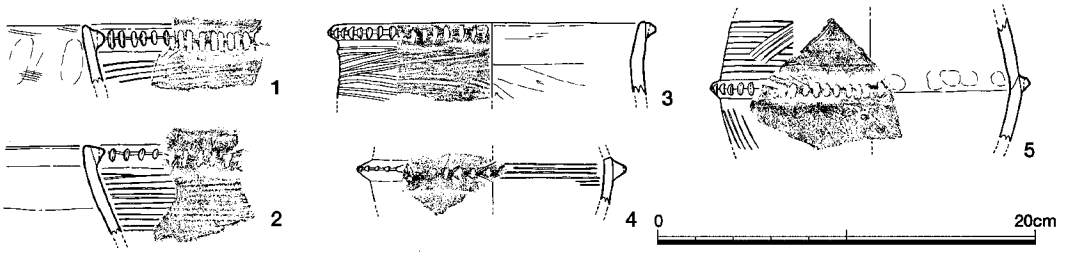


Fig.197　SK023の遺物（縮尺1/4）

第23号土壙SK023　O27グリッドに位置する。40cm×35cmの円形プラン。

出土遺物　1～5は突帯文土器の甕。1、2は口縁部が内傾する。3は外に開く。4、5は体部反転部。1の突帯は口縁端よりわずかに下がって貼り付けている。5点とも外面の調整は横条痕。

第26号土壙SK026　土壙墓SH01の東に位置する。1は広口口縁壺。口径20.0cm、口縁上面は平坦となる。

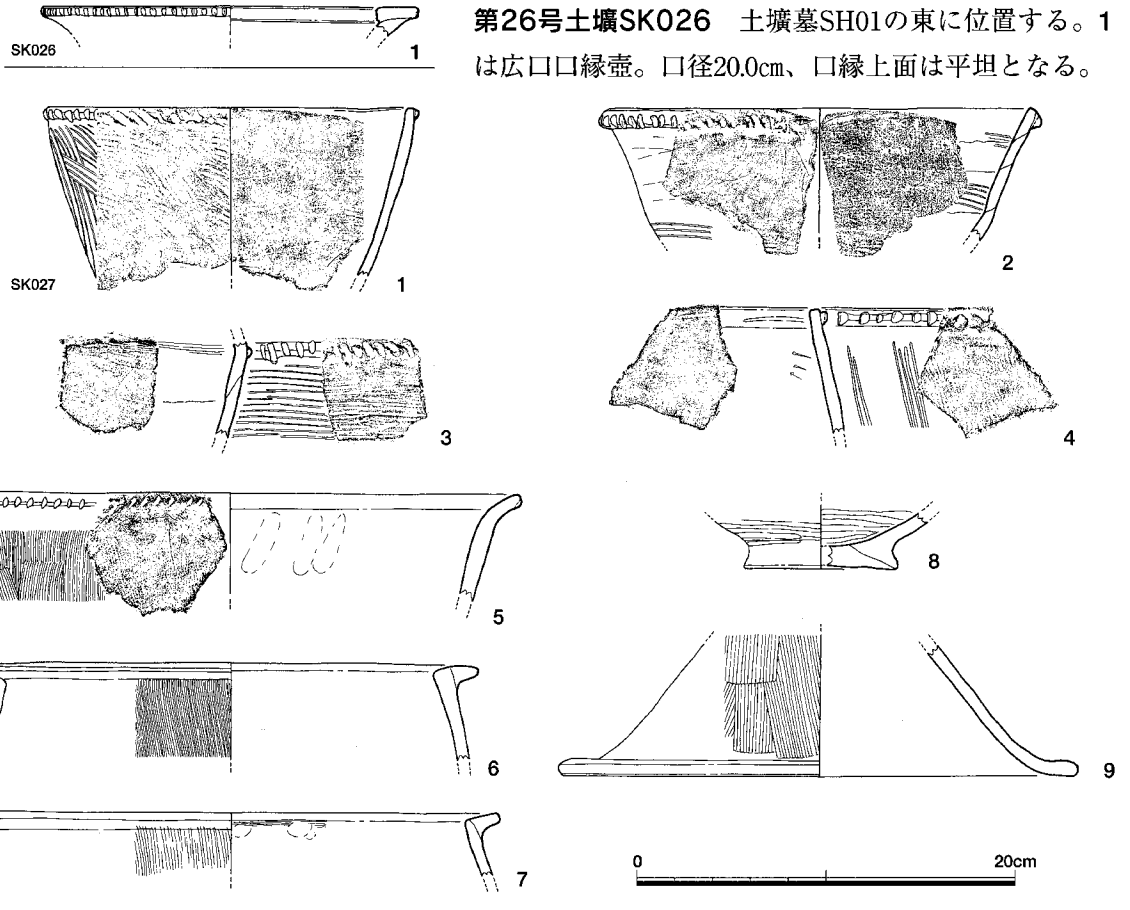


Fig.198　SK026・027の遺物（縮尺1/4）

第27号土壙SK027 N28グリッドに位置する。1～4は突帯文土器の甕。4は体部上半が直線的に内傾し、突帯はやや下がった位置に上向きに貼り付けている。5は口径30.6cm、屈曲は弱く直線的な口縁部で外面は細かなハケ目調整。6、7はL字形口縁、体部は倒卵形。8は壺の円盤状底部。9は口径27.4cmの蓋。

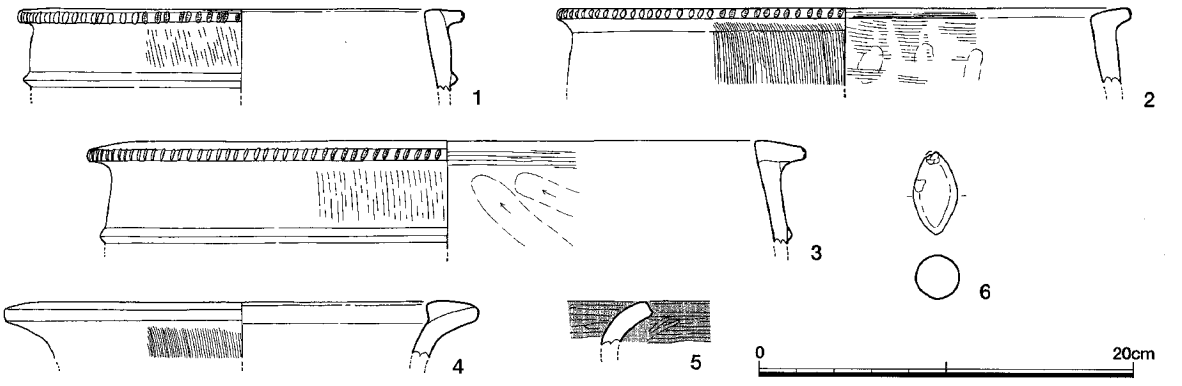


Fig.199 SK028の遺物（縮尺1/4）

第28号土壙SK028 竪穴住居跡SC01の北壁に接したピットで土器片がまとまって出土した。1～3は倒卵形体部にL字形の口縁部が付く。1、2は口縁部下方に断面三角形の突帯を巡らせている。4は広口壺。口縁内面に断面三角形の粘土を貼り付け、平坦な口縁部を作る。5は壺口縁部片。6は投弾。

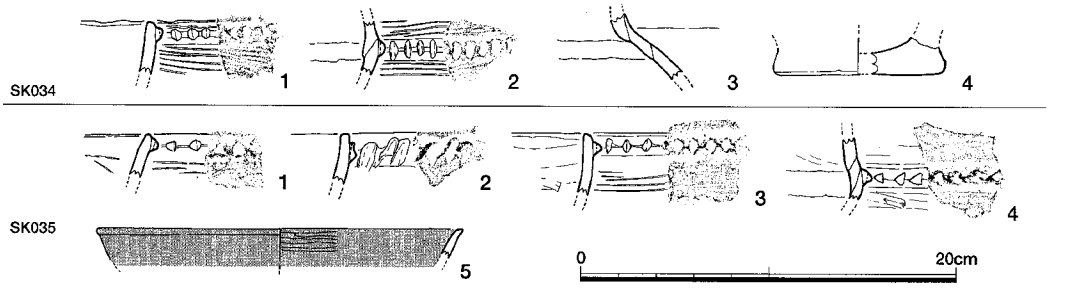


Fig.200 SK034・SK035の遺物（縮尺1/4）

第34号土壙SK034 O27グリッドの西寄り、Pライン上にSK035と並んでいる。直径50cm前後のピット。1、2は突帯文土器の小片。2は壺の胴部上半、外面は丹塗り。粘土の接合がよく分かる。4は底径8.8cm、外底はほぼ平坦、砂粒が多く露出している。

第35号土壙SK035 SK034の50cm南東に位置するピット。1～4は突帯文土器。2、3の突帯は口縁端よりわずかに下がって貼り付けている。2の突帯は粗雑な刻み目で潰れている。

第37号土壙SK037 O25グリッドの南寄りに位置する。隅丸長方形のプランで西側辺がやや括れている。深さは10cm前後と浅い。長軸236cm、短軸144cm。壙底はやや凹凸がある。

出土遺物 遺物のほとんどは壙底より浮いた状態で出土している。

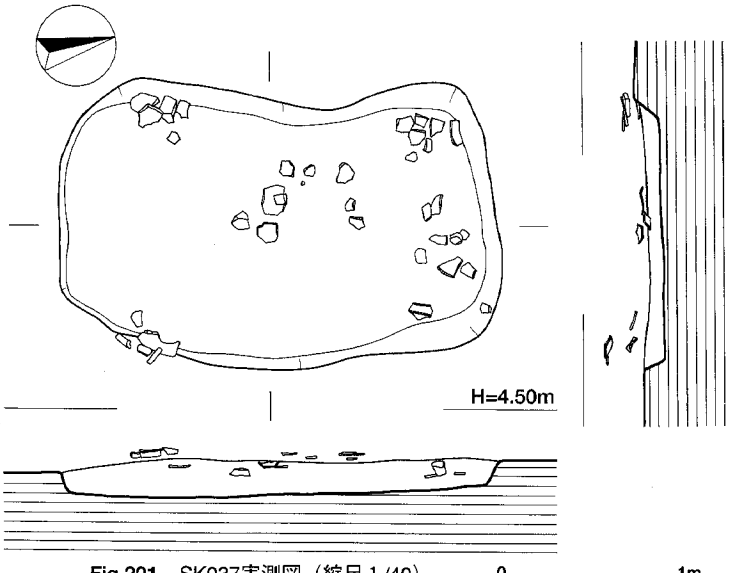


Fig.201 SK037実測図（縮尺1/40）

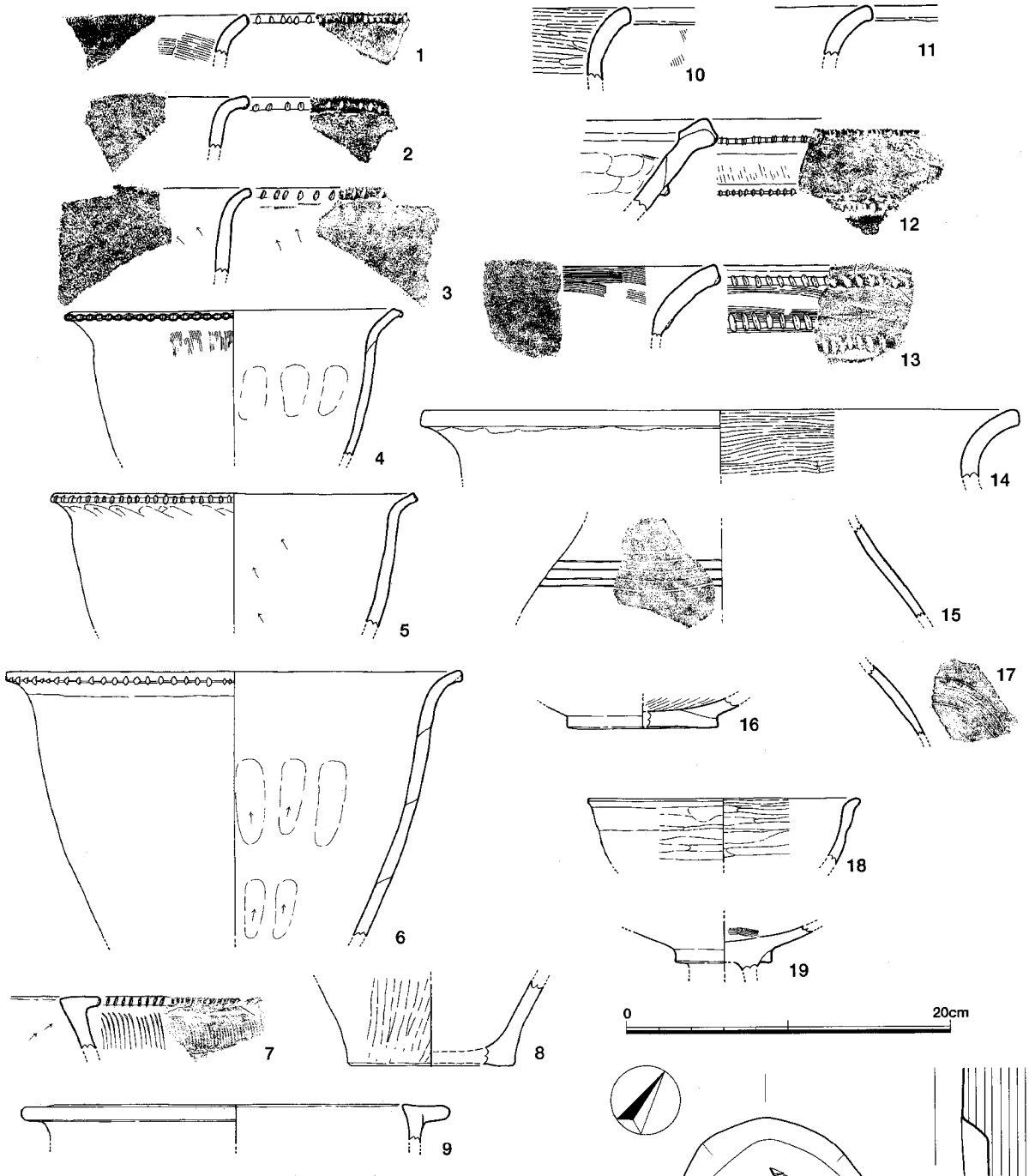


Fig.202 SK037の遺物（縮尺1/4）

1～6は小さく湾曲する如意形口縁の甕。4～6の体部は底部に向かってほぼ直線的に延びており、張りがほとんどない。6は口径28.2cm。口縁端の刻み目は下端に小さく刻む。外面はハケ目ではなくナデ調整。10～17は壺。15は胴部上半の文様部。15は頸部との境に4条の沈線、17は5重の連弧文。16は円盤状の底部。18は鉢。19は高坏。坏部と脚柱部との境に突帯を貼り付ける。下向きで刻み目はない。

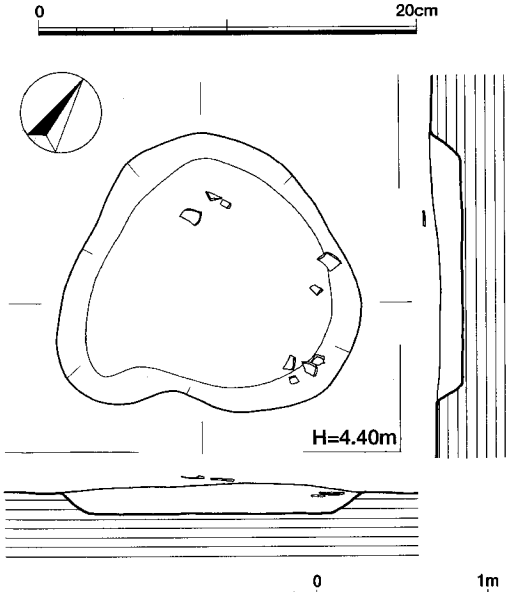


Fig.203 SK038実測図（縮尺1/40）

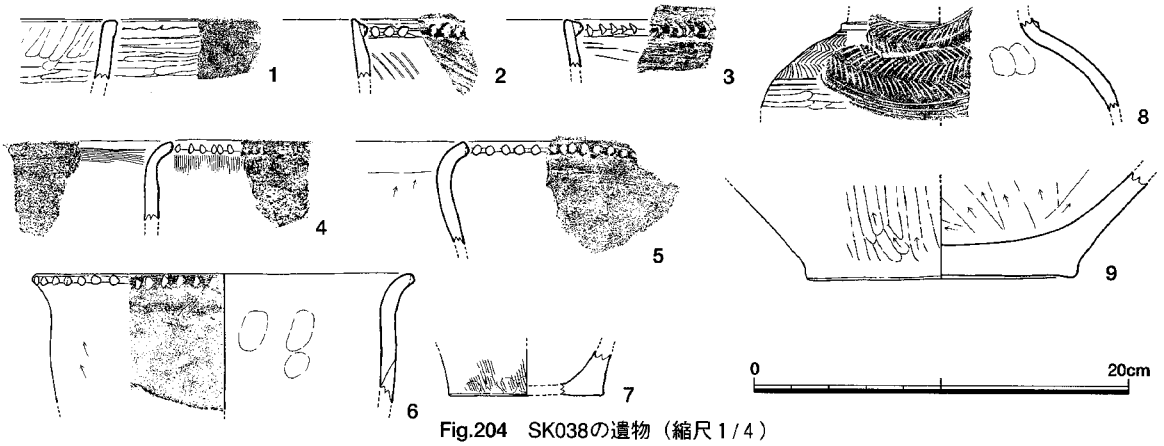


Fig.204　SK038の遺物（縮尺1/4）

第38号土壙SK038　P25グリッド、SK037の西に位置する。ハート形の不整円形プランで、143cm×158cm。約10cmの深さしかない。遺物は埋め土のやや上部から出土した。

出土遺物　1～3は突帯文土器。4～6は如意形口縁の甕。7は甕の底部。8は壺。9は壺の底部。1は口縁部の小片。口縁端の断面は方形ではなく丸みがある。外側に折り返した粘土がかすかに残っている。外面は横ミガキ、内面は横ミガキで、上方は右斜行のミガキ調整。ただし内外面ともミガキの効果は薄い。6は口径20.2cm、器壁は厚めの作りで、如意形の湾曲は弱い。外面は左上がりのナデ。8は胴上半の球形部にヘラで羽状文を描く。文様帯の上に2条、下に3条の沈線で区画する。

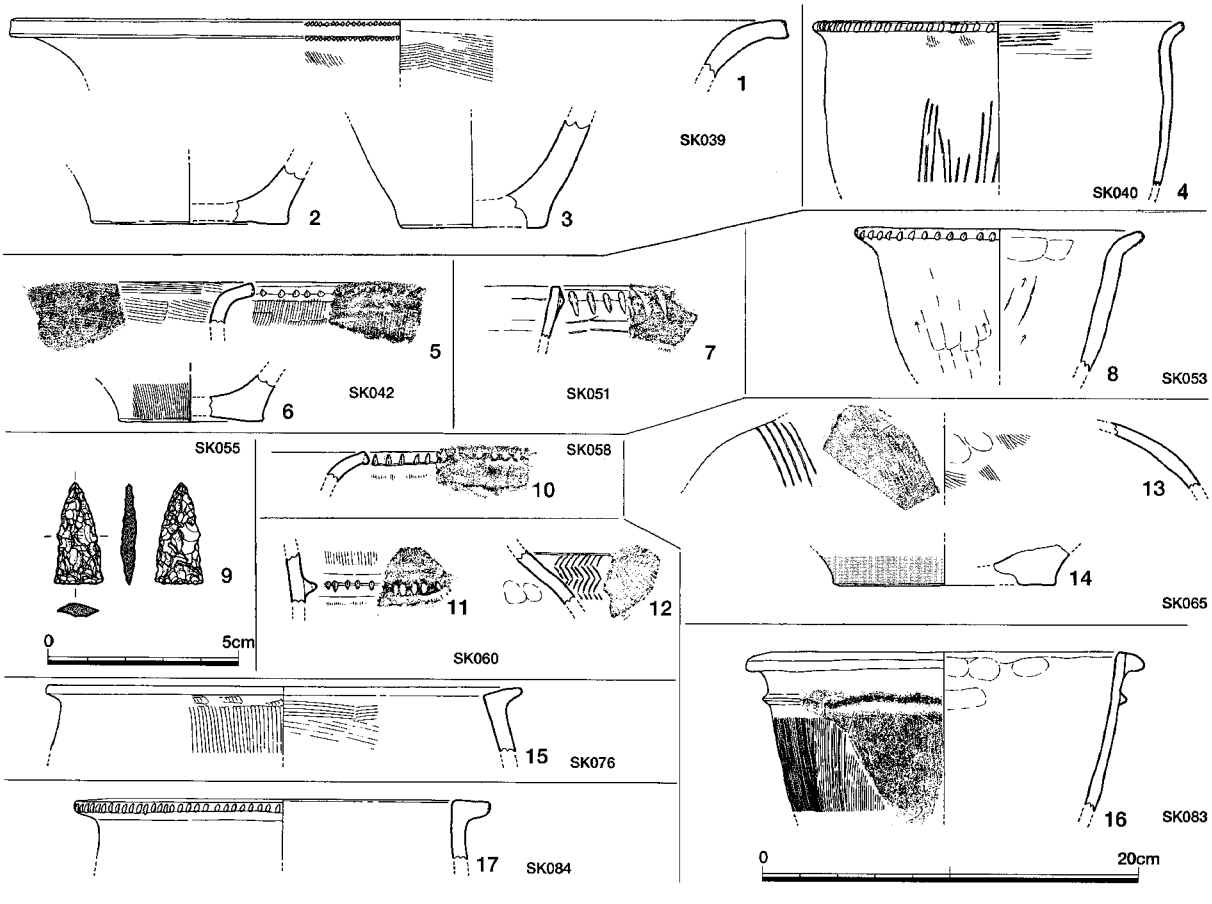


Fig.205　SK039～SK084出土の遺物（縮尺1/4・1/2）

土壙SK039、040、042、051、052、055、058、060、065、076、083、084　SK039～SK084のうち遺物を実測した土壙、あるいは周辺の遺構の時期や性格を考える上で重要な土壙については、可能な限り実測、図化に努めた。

出土遺物　**1**は口径41.2cm、大きく開いた口縁端部は横ナデで口唇状に近く、その上下端に刻み目を入れる。**9**は黒曜石製の打製石鏃。2.7cmと長い二等辺三角形で基部も直線。**12**は壺の文様部の破片。2段の羽状文。**13**は壺胴部上半の文様、細い5本の沈線で描く。山形文か。**16**は口径21.2cmの甕。口縁部の粘土接合に特徴がある。体部の突帯は水平でないことから、一巡しないで鉤形の可能性がある。**18**、**19**はどちらも芯をはずした木取りである。切断面は大きな削り痕があり、その年輪からするとかなり大きな木材だったことが分かる。竪穴住居や掘立柱建物の柱根と思われるが、対になるピットをたどることができず建物として捉えることができなかった。

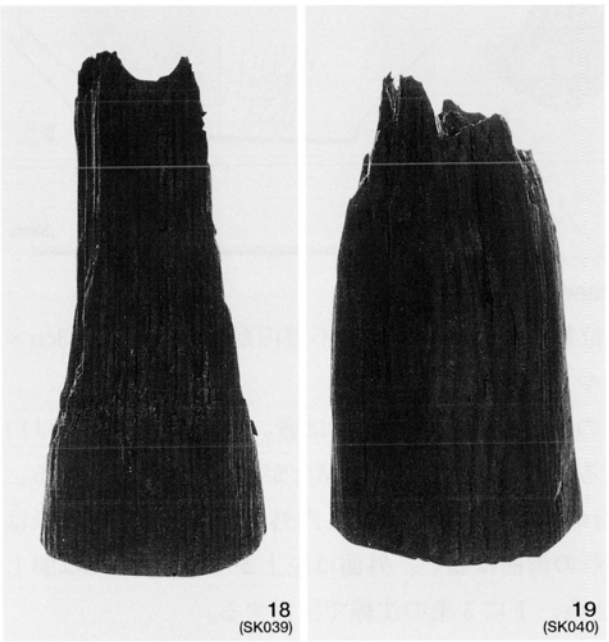


Fig.206　SK039・SK040の遺物

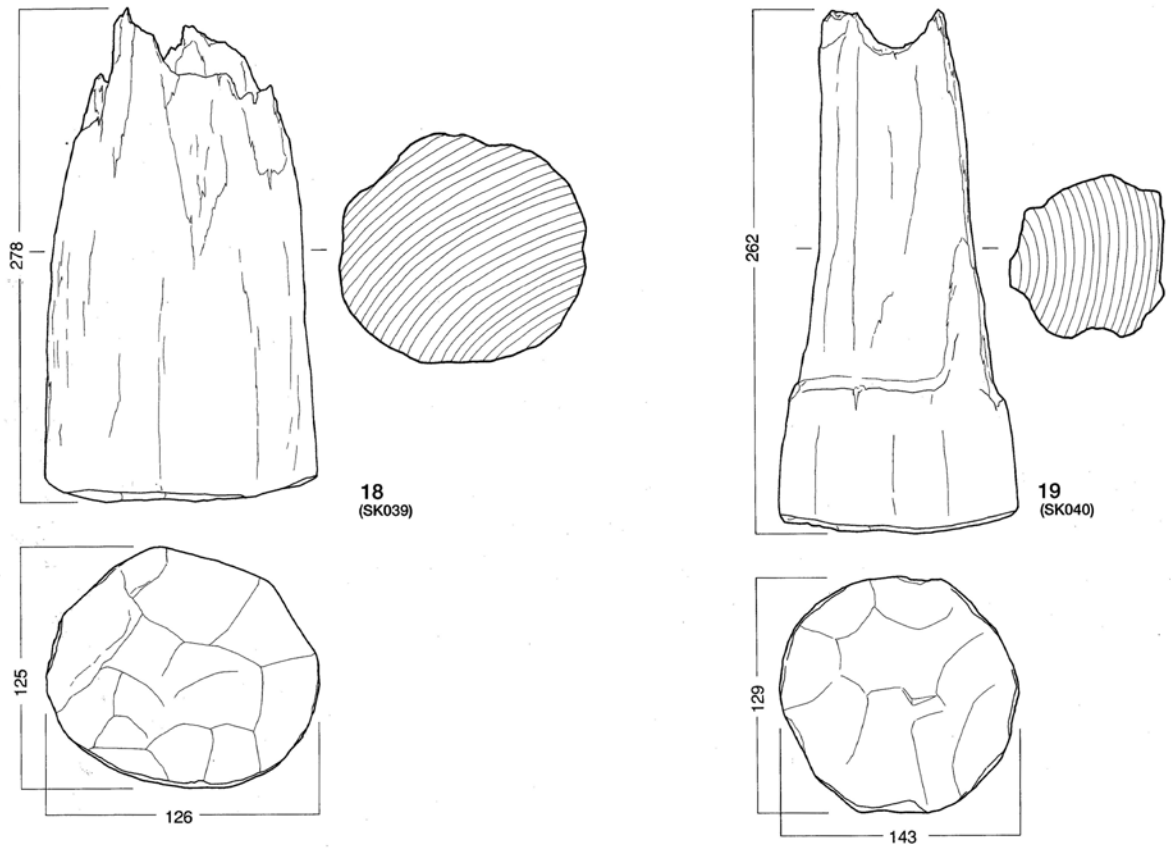


Fig.207　SK039・SK040の遺物（縮尺1/4）

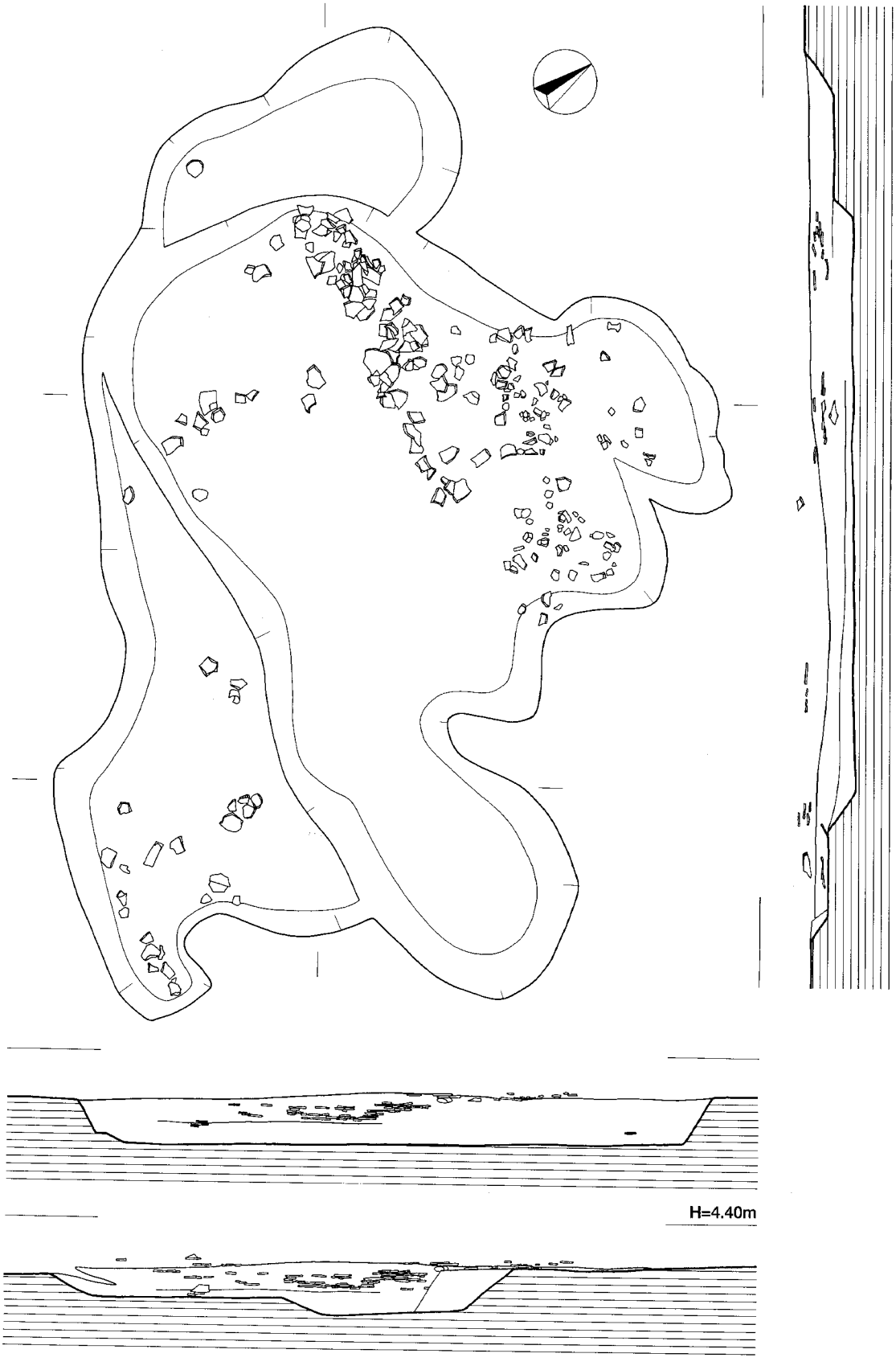


Fig.208　SK041実測図（縮尺1/40）

第41号土壙SK041　P25・26の二つのグリッドにまたがる大きな土壙。中央部が最も深く約35cm。南東と北西側に平面が張り出し一段高くなっている。おそらくいくつか土壙が合わさったのだろう。

出土遺物　土壙内の北側と南側でまとまって出土した。特に北側では集中している。突帯文土器から弥生時代前期後半までの土器計63点と石器１点を実測、図示した。

土　器　1～16は突帯文土器、17～32は如意形口縁の甕、37～55は壺、56～63は鉢。

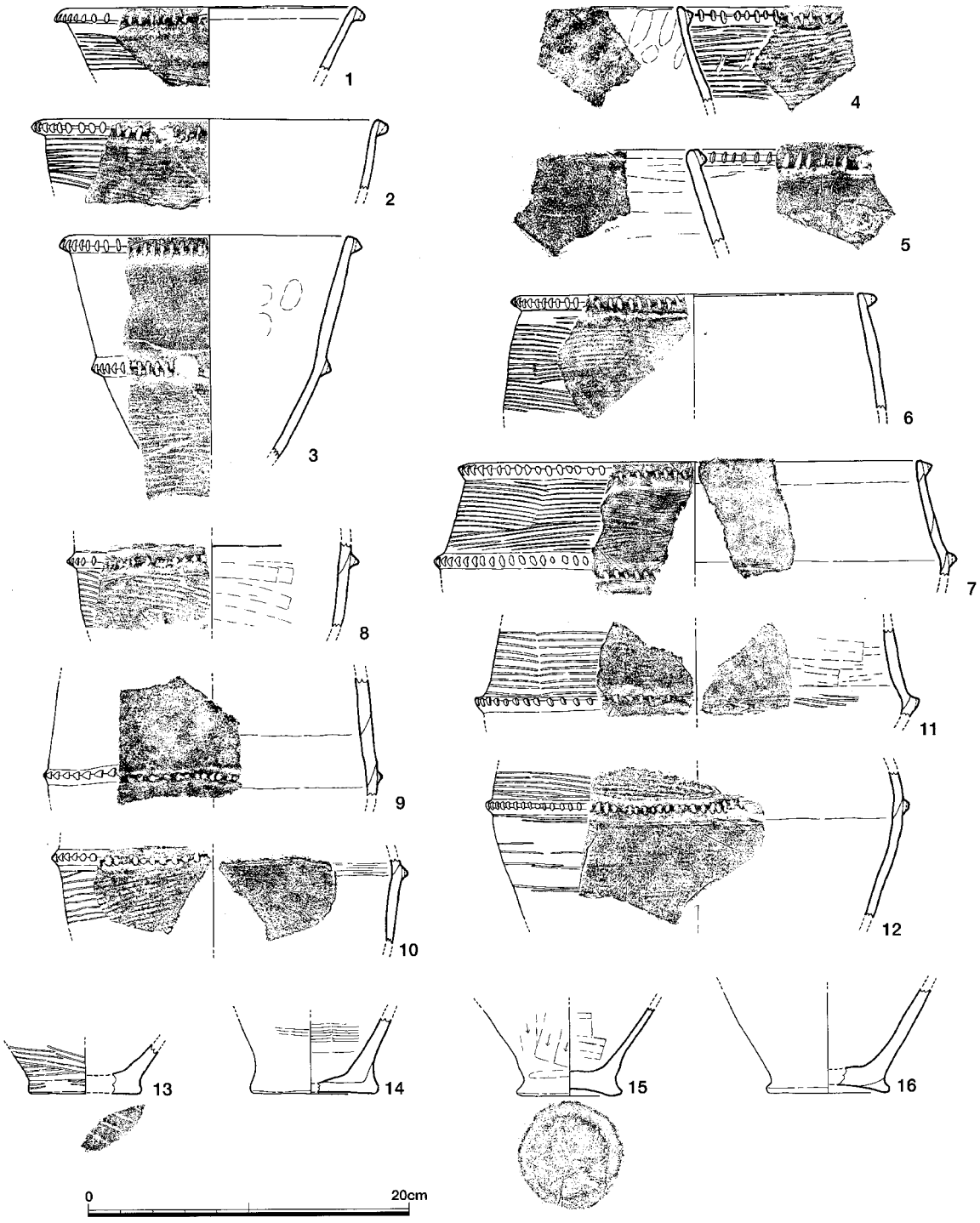


Fig.209　SK041の遺物（縮尺１/４）

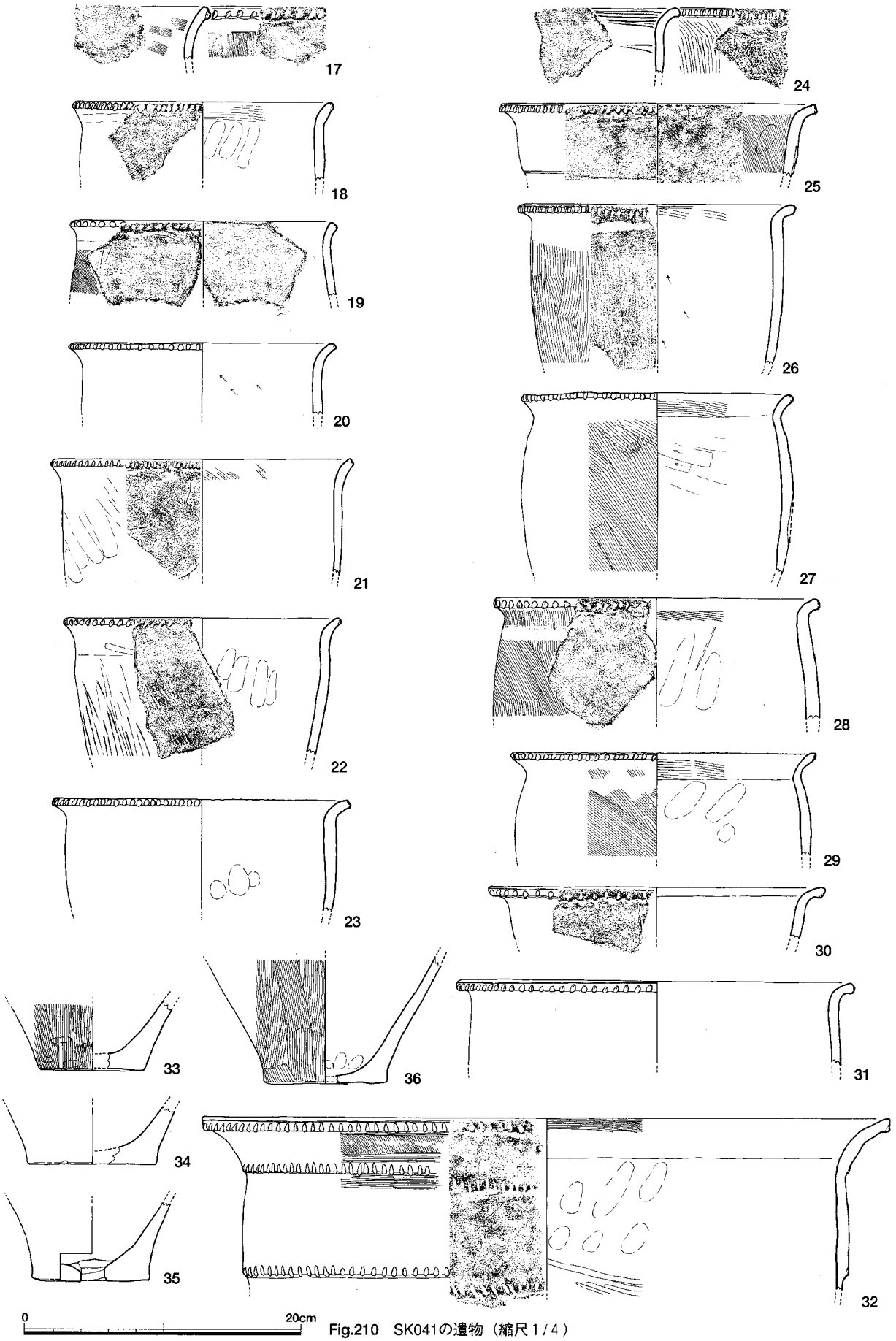


Fig.210　SK041の遺物（縮尺1/4）

39は口径20.4cm、口縁部の粘土貼り付けを外側に継いで、頸部との境に段を付けている。**41**は口径21.6cm、同じように頸部から口縁部へ緩やかに外湾しているが、口縁部の粘土貼り付けが異なる。胴部上半の文様は先に3本の沈線を巡らせ羽状文（綾杉文）を「く」字と同じ筆順で描く。

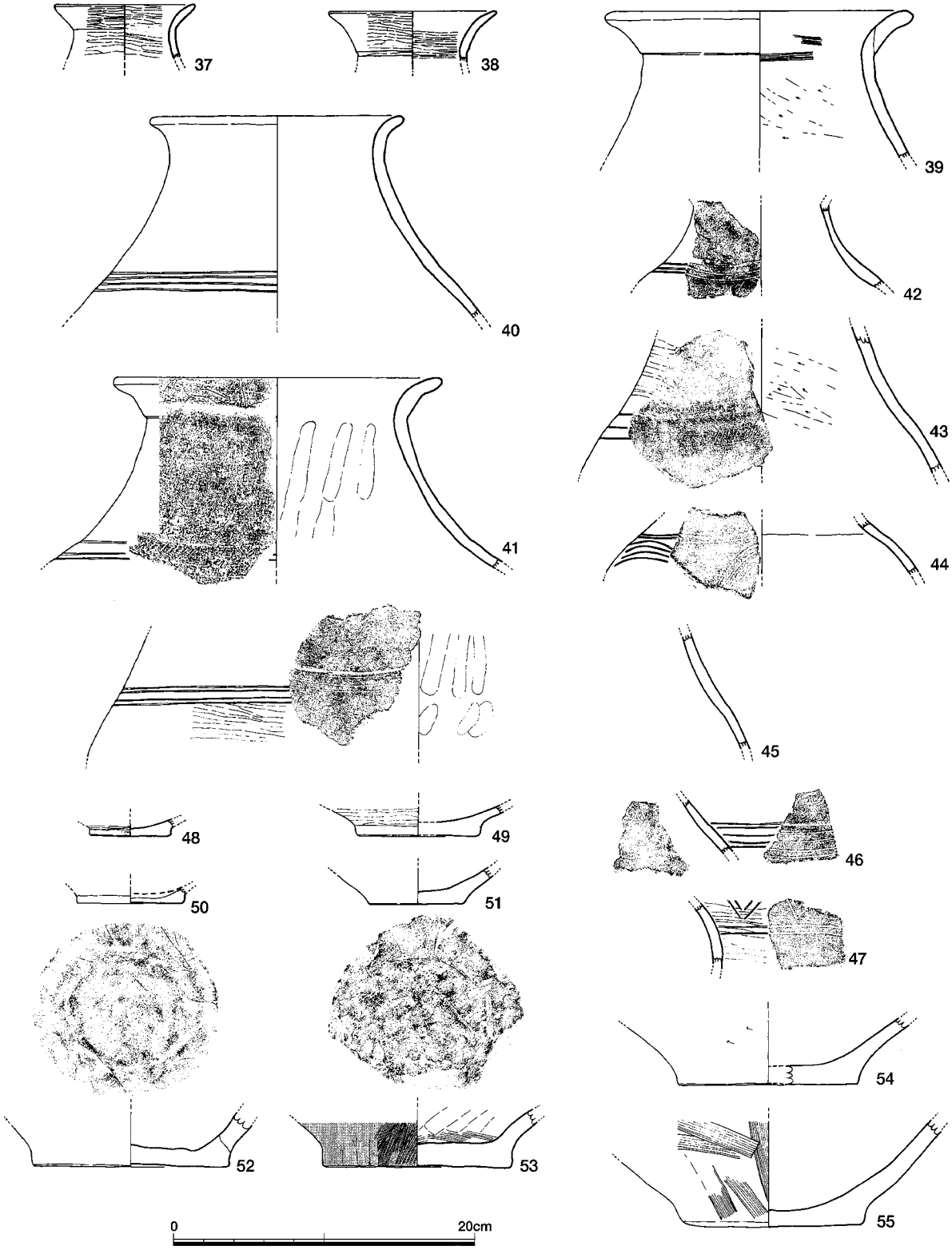


Fig.211　SK041の遺物（縮尺1/4）

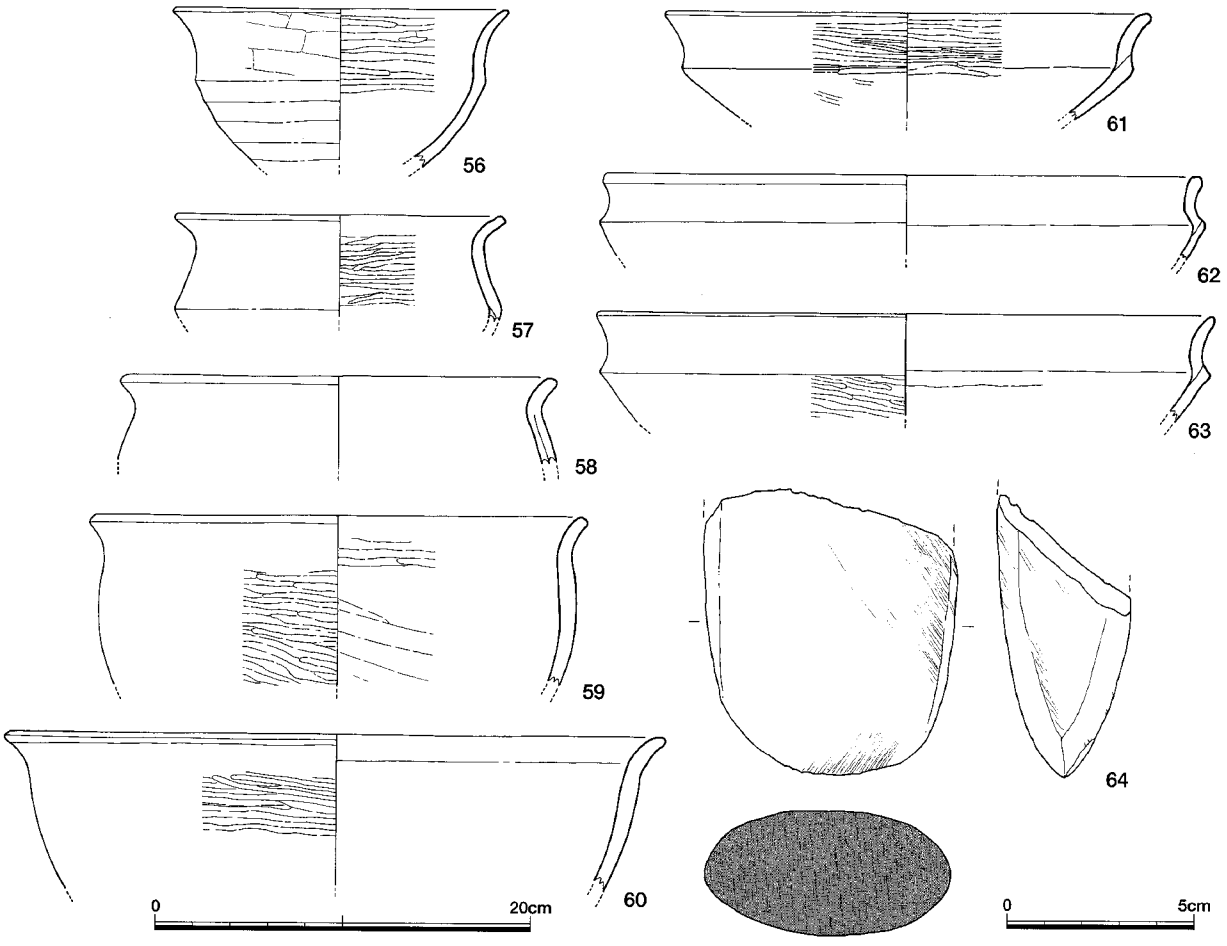


Fig.212　SK041の遺物（縮尺1/4・1/2）

鉢は体部が反転する56～58、61～63と反転しないで半球状の深みのある59、60の2種がある。

石製品　64は磨製蛤刃石斧。頭部を欠いているが側縁は平行な形状である。刃部はよく研ぎ出し、整った弧状をしている。

第70号土壙SK070　Q26グリッドにあり、西側を土層確認トレンチに切られ不明。不整方形か。

出土遺物　1～5、10～15は突帯文土器。6～9、16、17は如意形口縁の甕。18～20は壺。21は脚裾部。22は器台。23は磨製石斧、24は磨り石。突帯文土器から弥生時代中期前半までの遺物が混在する。

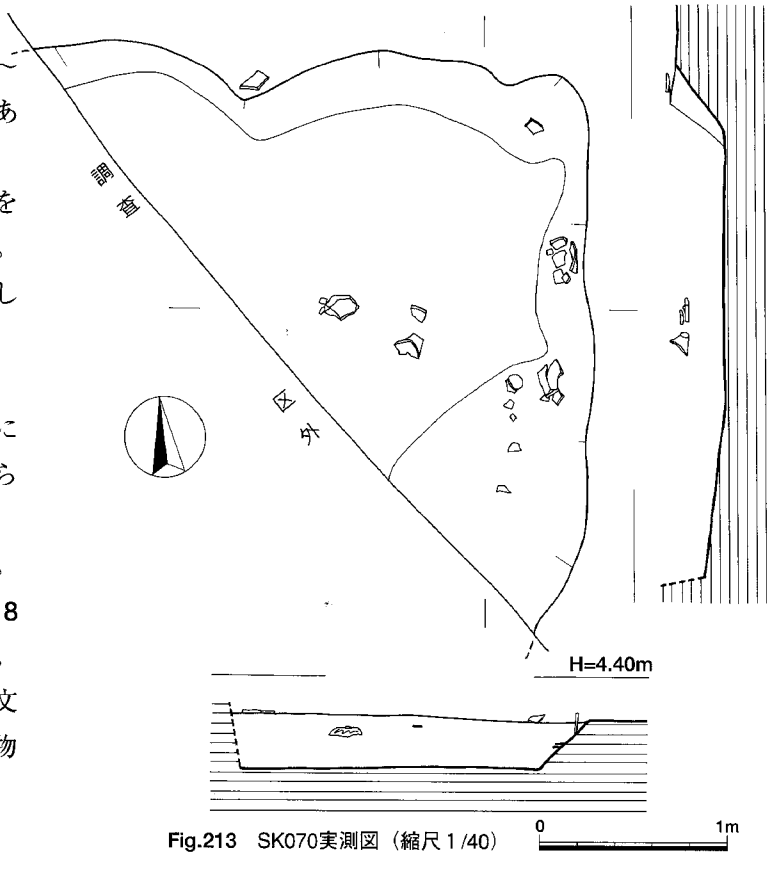


Fig.213　SK070実測図（縮尺1/40）

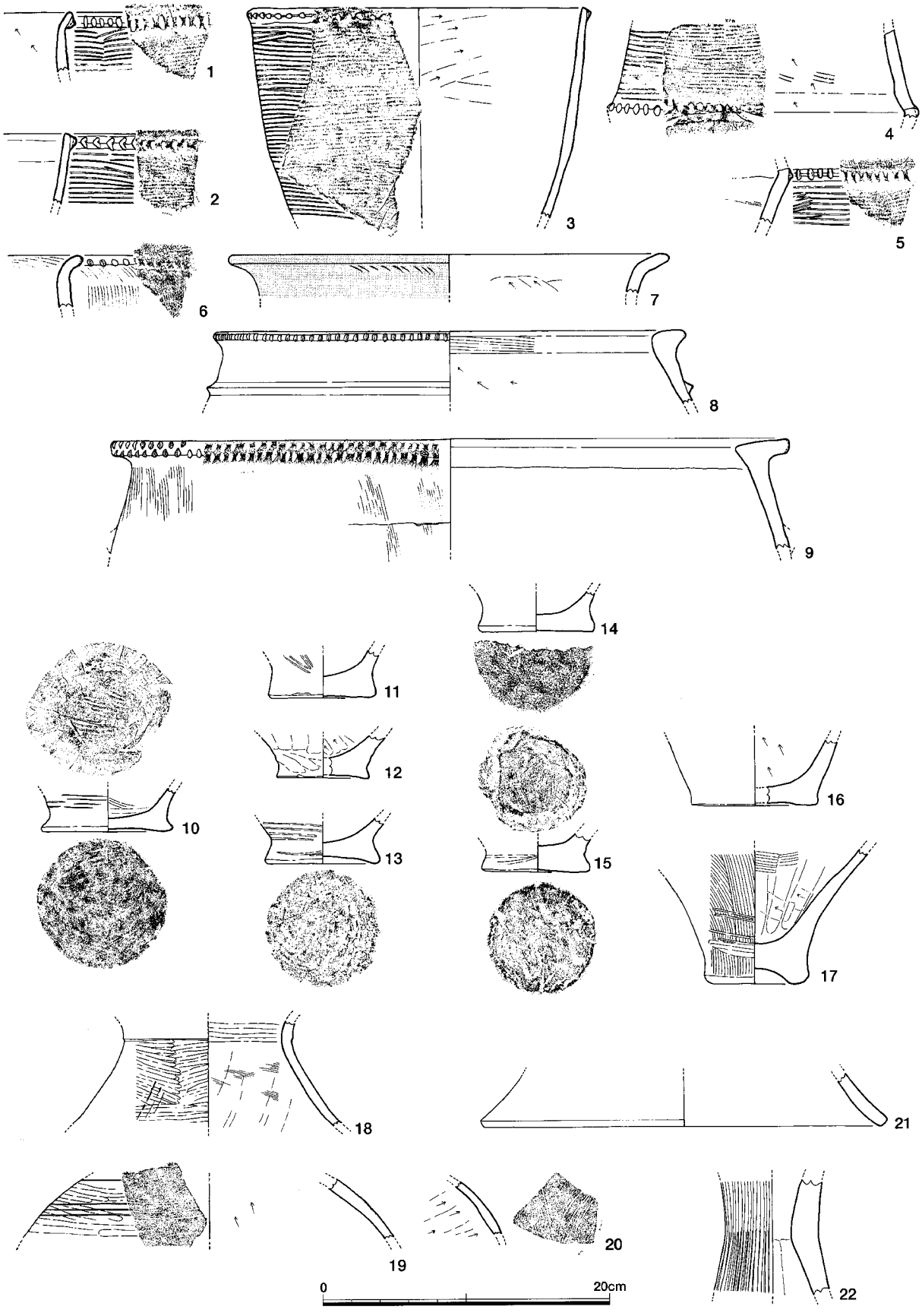


Fig.214　SK070の遺物（縮尺1/4）

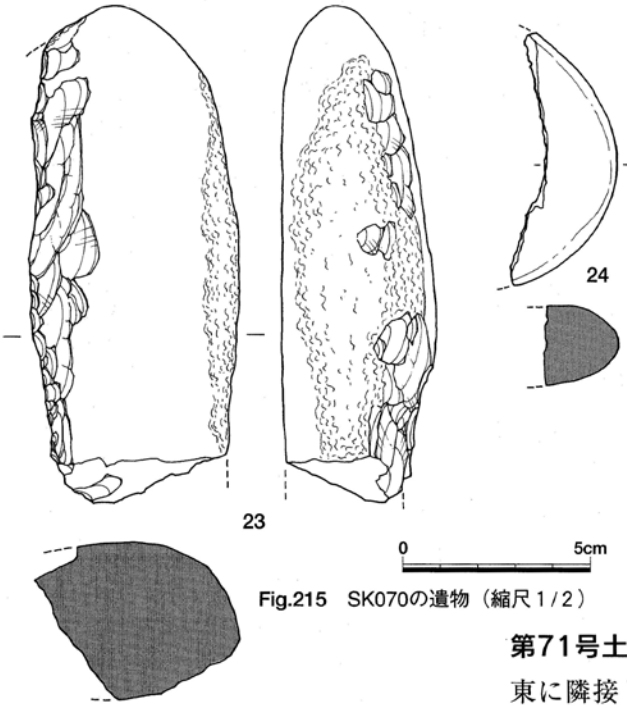


Fig.215 SK070の遺物（縮尺1/2）

Fig.216 SK070の遺物

第71号土壙SK071 Q25グリッドにあり、SK070の南東に隣接している。長楕円形と隅丸方形の二つの土壙が合わさっている。深さは長楕円形が約20cm、隅丸方形が10cm足らずときわめて浅い落ち込みである。

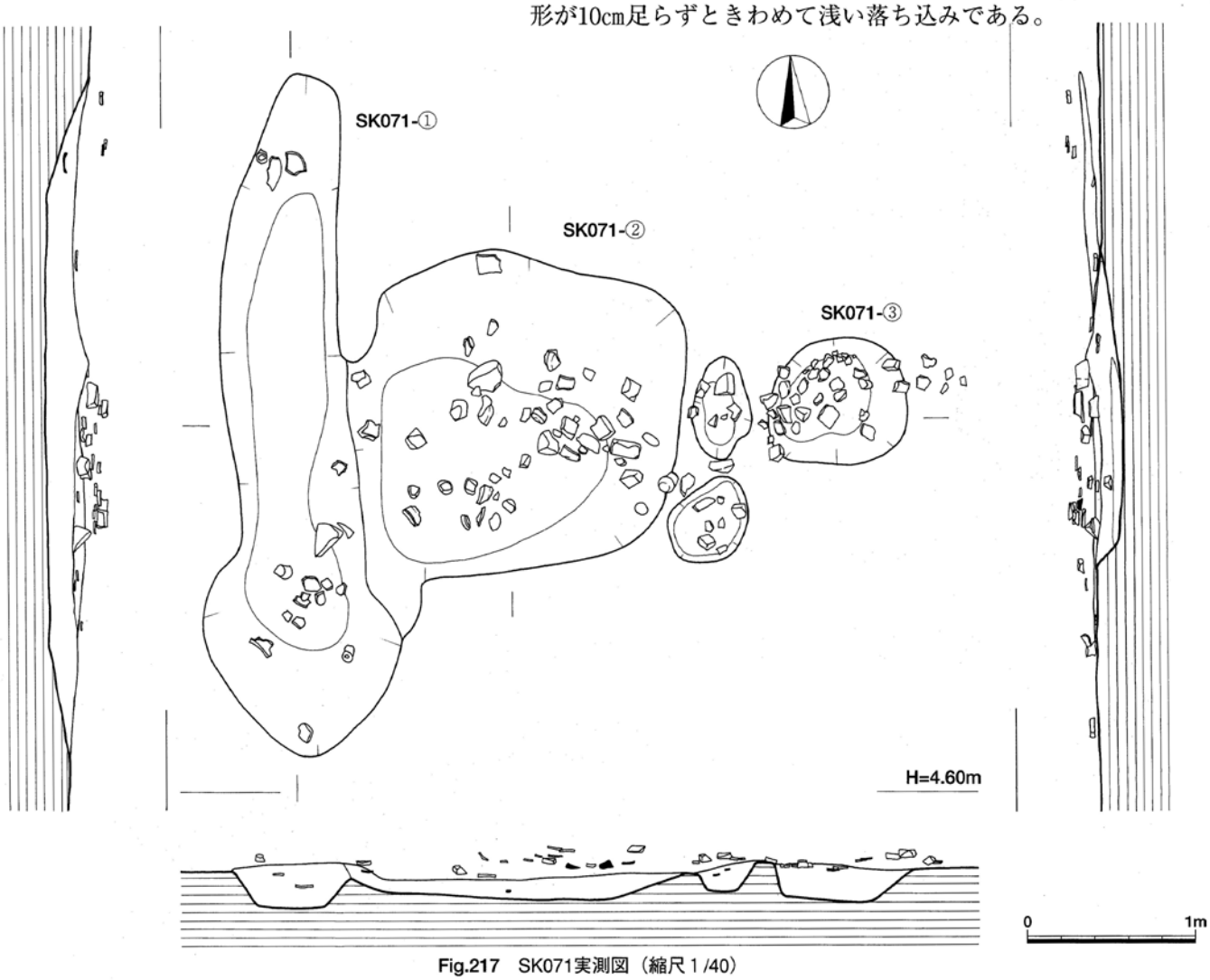


Fig.217 SK071実測図（縮尺1/40）

出土遺物　二つの土壙だけでなく周辺に散布している遺物も一緒に取り上げている。

土　器　**1**～**6**は突帯文土器。**7**～**9**は如意形口縁の甕。**10**、**11**は分厚い断面三角形の口縁を持つ甕。**12**～**15**は城ノ越式甕の底部。**16**は鉢。**17**、**18**は壺。**1**は口径20.0cm、口縁部は小さく外反し、断面三角形突帯がやや下向きに貼り付く。**7**は口径23.4cm、如意形の屈曲は弱く、かつ弱い、口縁端部の断面は方形で浅い刻み目を下端から上端近くまで入れている。**12**～**15**は同じ上げ底だが、底部外縁の張り出しに強弱がある。**16**は口径14.4cm、外湾しながら大きく開いた体部上端の内側に内傾す

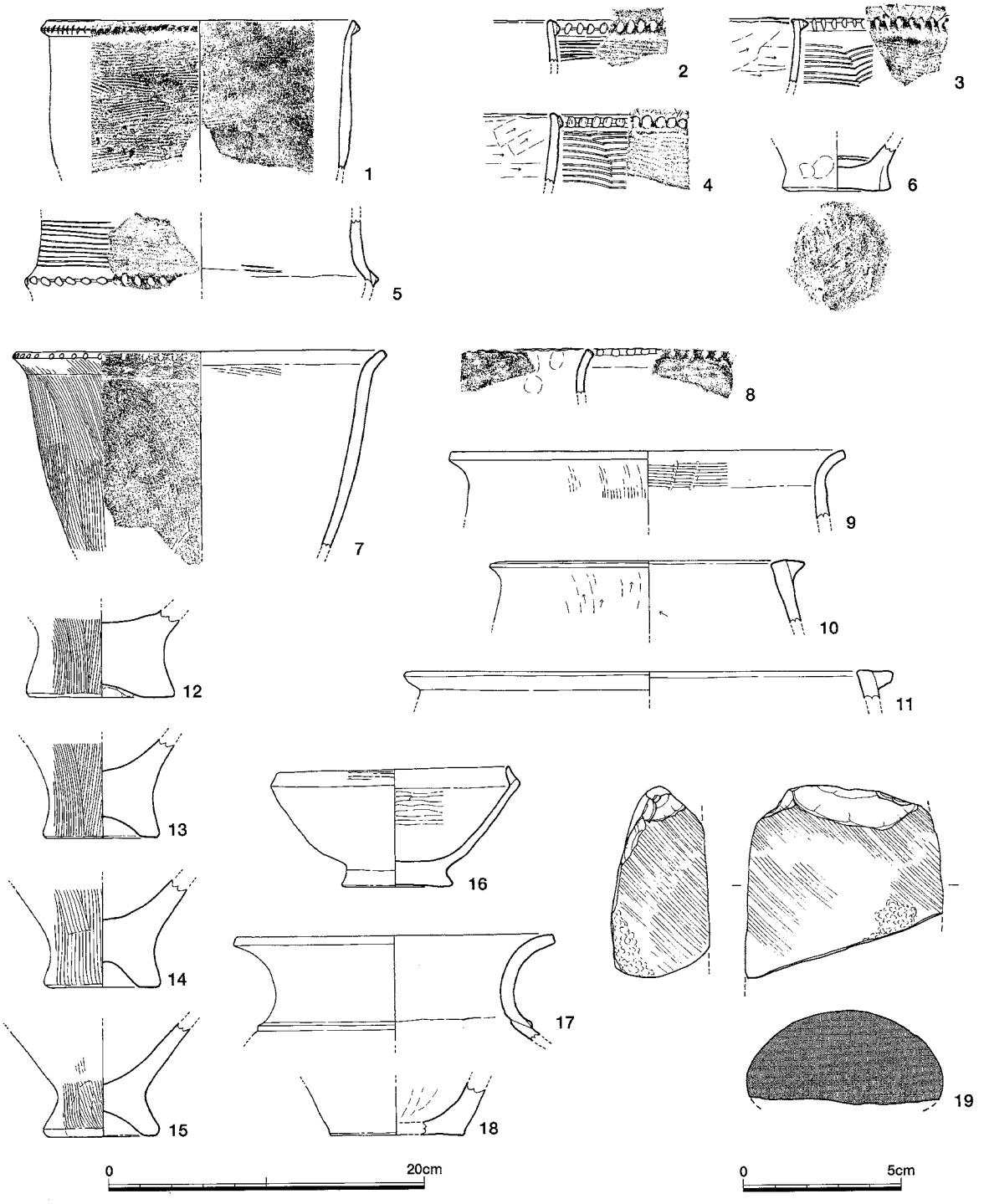


Fig.218　SK071の遺物（縮尺1/4・1/2）

る粘土を貼り付け口縁部としている。その先端は尖り気味の断面となっている。**17**は頸部からそのまま外湾して口縁部となる。頸部と胴部の境には背の低い断面三角形の突帯を１条貼り付けている。口径20.0cm、全体に風化し調整痕不明。**18**は底径8.4cm、外底の周縁１cmが平坦で中央部はわずかに凹んでいる。内面はナデ上げ調整。

石製品　**19**は玄武岩質の石材を加工した磨製石斧の頭部。一部に敲打痕が残る。

第72号土壙SK072　Q25グリッドの南西隅に位置する不整楕円形の土壙。南側がやや窄まっている。深さは約30cmで壁は南が緩い斜面となっている。長軸156cm、短軸101cm。

出土遺物　土壙の中央部から南寄りに壙底から浮いた状態で出土した。ここで押し潰れたような割れ方を示しており、散乱していない。写真のように復元できた。

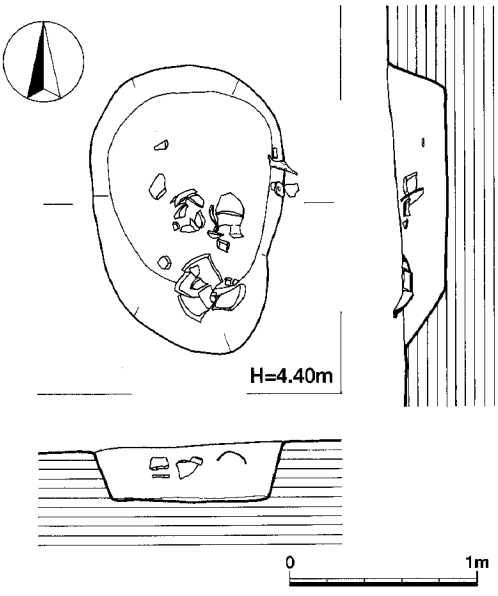


Fig.219　SK072実測図（縮尺１/40）

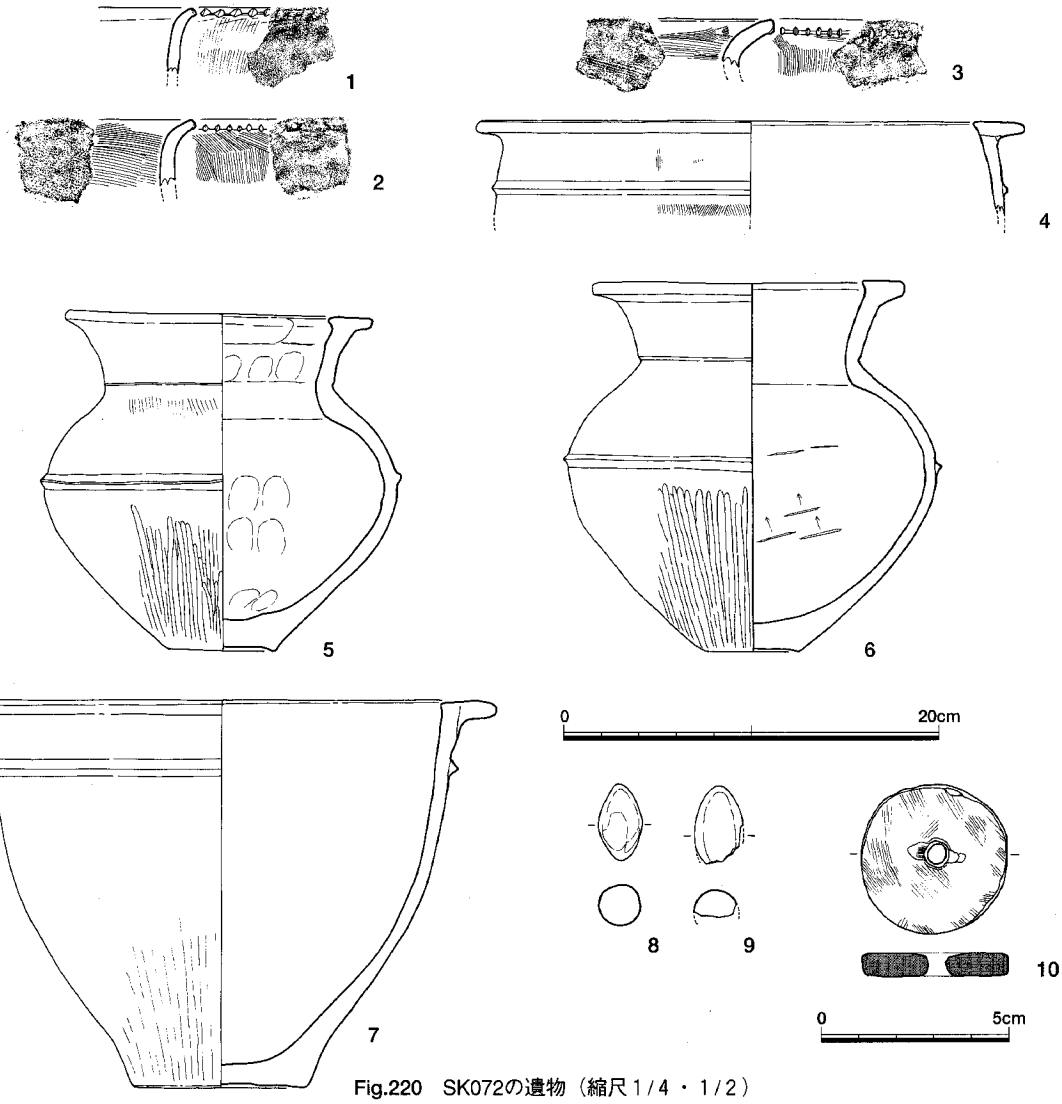


Fig.220　SK072の遺物（縮尺１/４・１/２）

Fig.221
SK072の遺物 ▶

土　器　1～3は口縁部が如意形に緩やかに外湾する甕。1は外湾が弱いが、菱形の刻み目は等間隔で口縁上端にまで達している。2、3の刻み目は小さく口縁下端のみ。3点とも外面は細かな縦ハケ目調整。4はL字形口縁甕。口縁上面は水平で、内端部に小さく突出している。口径29.0cm、口縁部と断面三角形突帯の間は縦ハケ目にナデを加えて消している。5、6は同じような特徴を持つ広口壺。6は口径16.8cm、底径5.2cm、器高19.7cm。胴部は中位よりやや上方に最大径がありここに断面三角形突帯を貼り付け横ナデしている。口縁部は分厚い作りで内端に小さく突出する。胴部下半は縦のミガキ、内面はナデ上げで工具痕がキズ状に残っている。7は口径29.0cm、L字形口縁で下方に断面三角形突帯を貼り付けることは甕と同じだが、体部はすぼまり深鉢となる。

土製品　8、9は投弾。完形品の8は全長4.14cm、中央部の断面は2.24cm×2.21cmの円形。

石製品　10は径3.90cm、厚さ0.70cm。滑石製の紡錘車。

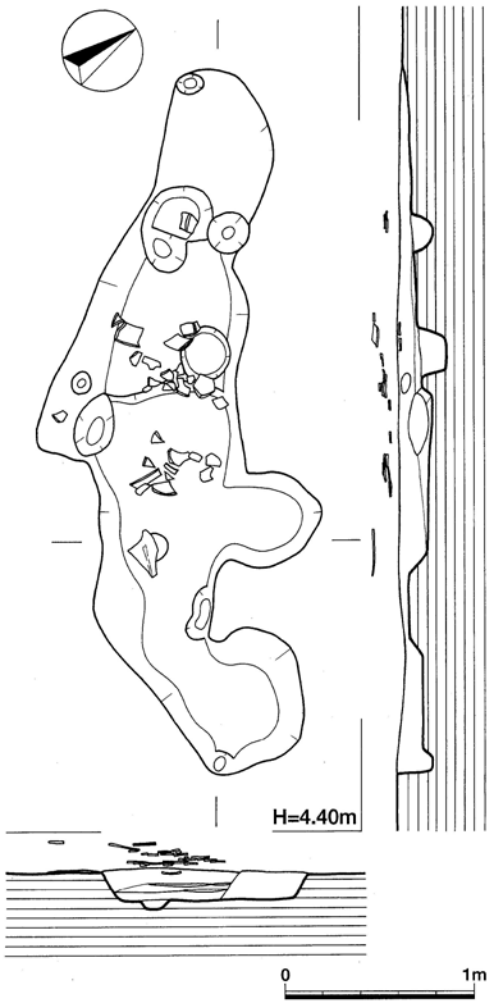
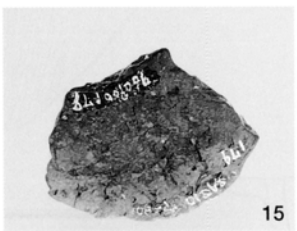


Fig.222　SK080実測図（縮尺1/40）

第80号土壙SK080　P26グリッドにあり、上部土壙など他遺構との重複で輪郭が明確でないが、10cm程の落ち込みに土器が集中することから土壙として記述する。壙底は水平でなく、また小ピットが数個点在している。長軸378cm、短軸107cmを測る。



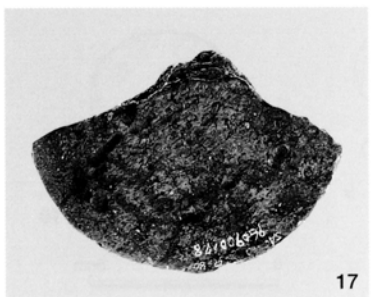


Fig.223　SK080の遺物

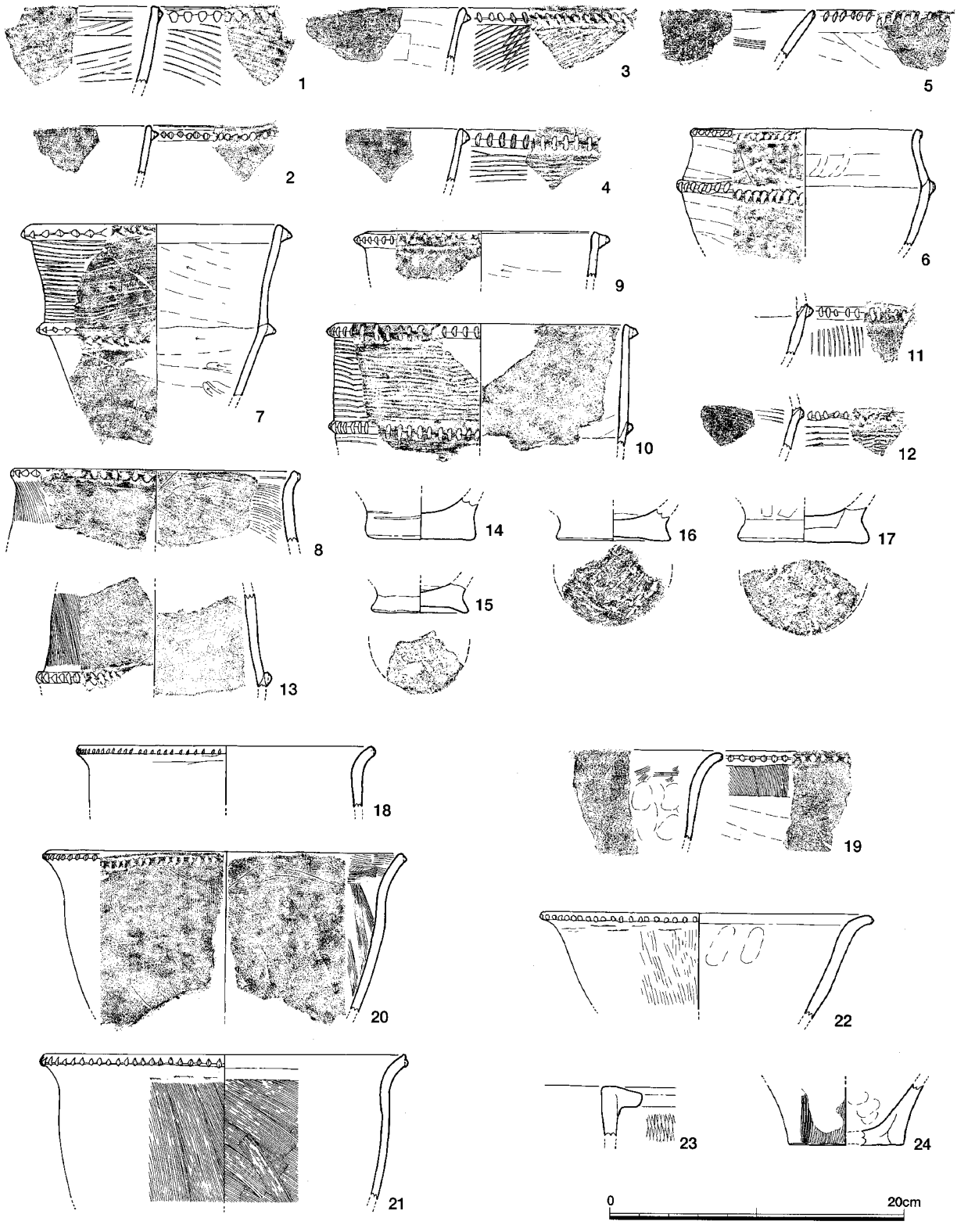


Fig.224　SK080の遺物（縮尺1/4）

出土遺物　弥生時代中期の土器片も混じっているが大半は突帯文土器と弥生時代前期の土器である。

土　器　**1**～**13**は突帯文土器の甕、**14**～**17**は突帯文土器甕の底部。**18**～**22**は如意形の口縁部を持つ甕と鉢。**7**は体部中位で屈曲し口縁は大きく開き口径18.2cmとなる。このため口縁部が体部より

大きい。外面は体部突帯より下方が黒色、上方が茶褐色と色調が異なる。これは下半が二次的な火熱をより強く受けてたためである。内面は茶色。また上半外面だけが横条痕調整。この甕の特徴は屈曲部と口縁部の突帯が大きな断面三角形ということである。また口縁部の刻み目も深くて鋭利、ほぼ等間隔に左から刻まれている。**21**は口径24.8cm、如意形の湾曲は弱く、口縁端部の断面は方形で上下端に小さく突出し、下端だけに刻み目を施している。内外面のハケ目調整は、その目から同じ工具を用いていることが分かる。**25**～**29**は壺、**30**、**31**は壺の底。**25**は口径14.0cm、頸部から口縁部は湾曲、器壁の厚さなど変化なくスムーズに延びているが、頸部との境に深い沈線を巡らしていることからすると、口縁部と頸部とを区別する意図が強かったことを示している。内外面とも細かな横ミガキ調整。精良土で堅緻な仕上がりである。**28**は口径22.0cm、頸部が立ち通常の壺の器形をしていないが、口縁部内面から外面にかけて丹塗りであることから壺とした。口縁端部断面は横ナデで凹んでいる。**29**は口径14.6cm。口縁部はほとんど外湾せず、また肥厚もしていない。内面はハケ目調整の後に横ナデ、外面は横ミガキ調整。調整の丁寧さにしては器壁の凹凸が目立つ。**32**～**39**は鉢。いずれも体部が反転し外湾する口縁が付く。**36**は口径23.8cm、屈曲部が体部上半にあり、外面に稜が付く。下半は器壁が薄くなり、深みがある。口縁部は強く屈曲し、しかも肥厚しているのが特徴。**37**も同じように厚みのある口縁部であるが、体部の屈曲は鈍い。**39**は口径34.8cmという大型品。屈曲部より上半に長く延び口縁部を作っている。**40**は6cm大の破片のために傾き、口径など不正確。復元口径35.2cm、口縁部は反転部からわずかに外湾しながら上方に延びている。器形不明。内面はヘラ状工具による横ナデ調整。横ミガキではない。

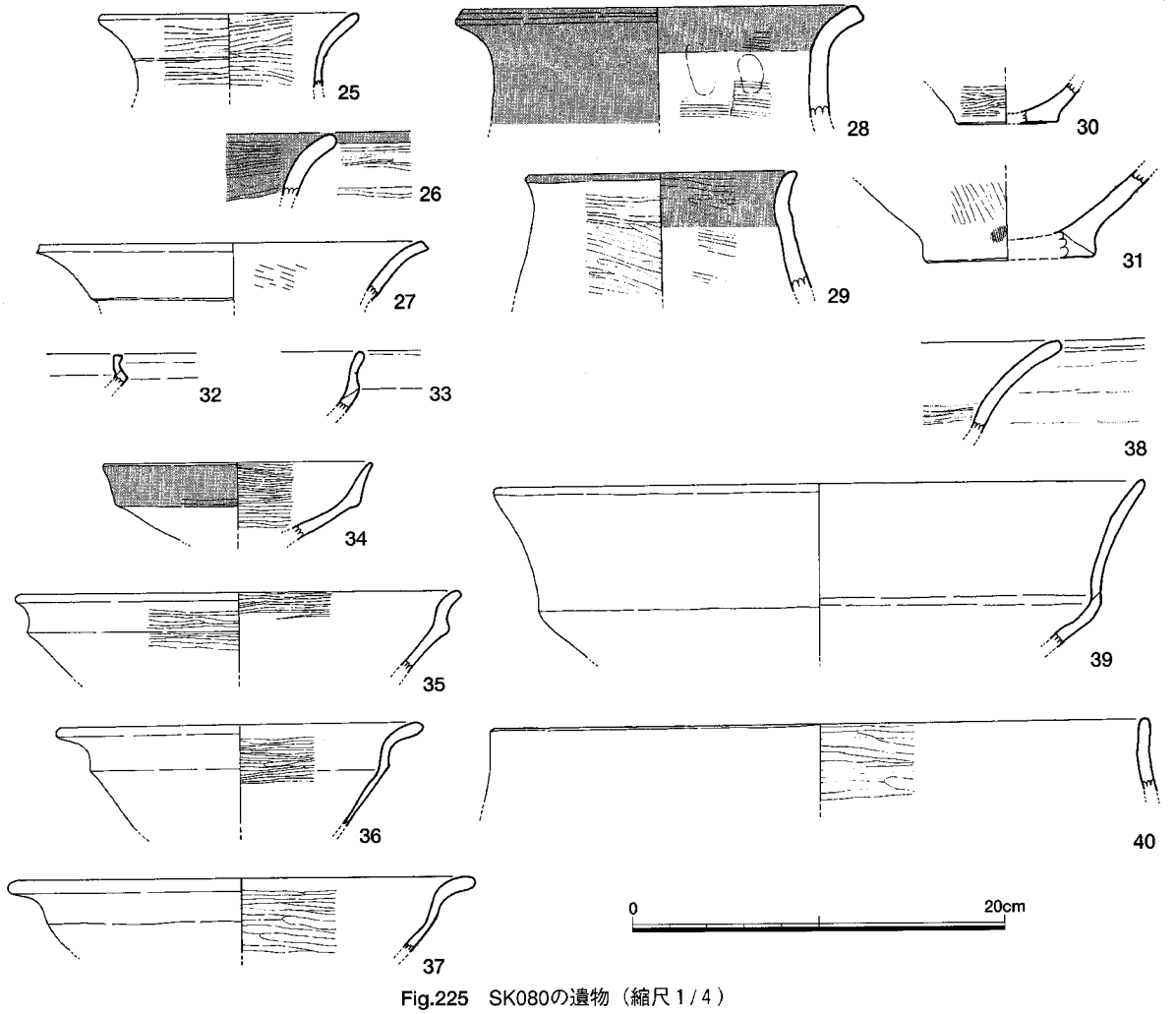


Fig.225 SK080の遺物（縮尺1/4）

第85号土壙SK085　O29グリッドの北寄りに位置する。黒色粘質土の掘り下げ途中に数軒の竪穴住居跡と思われるプランがあった。前記したように竪穴住居跡と認定できなかったが、このうちSC06を切った関係でSK085は見つかった。

出土遺物　**1**は壺の底部。底径8.6cm、外面はミガキ状のナデ調整。**2**、**3**は分厚い作りの弥生時代中期前半の甕。**3**の口縁部は断面三角形。内端部は横ナデで凹んでいる。**4**は砂岩質の砥石。

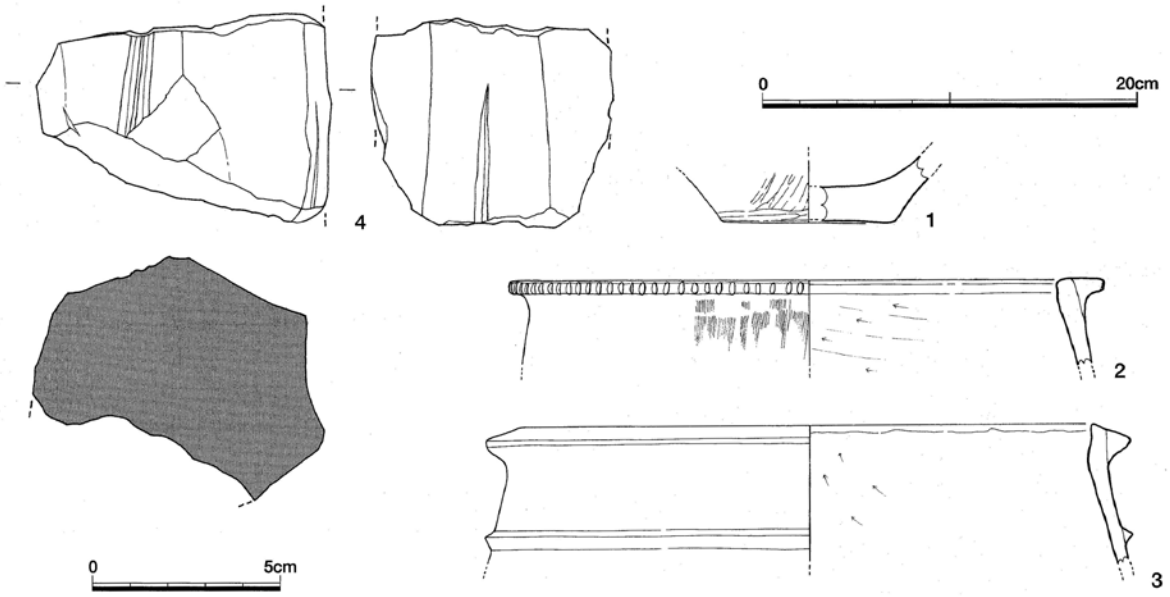


Fig.226　SK085の遺物（縮尺1/4・1/2）

第91号土壙SK091　SK085の東に接した楕円形プラン。**1**はL字形口縁の甕。口縁上面は内傾し、外端部は丸みがある。内端部には鈍い稜が付く。**2**は器台。**3**は磨製石斧。破片だが重量感がある。

第114号土壙SK114　**4**の甕は口縁部が欠けているが、如意形口縁だろう。体部上半はわずかに内傾。

第116号土壙SK116　O27グリッドにあり、南東側が他の遺構と重なり合いプランが辿れない。残りの壁からすると隅丸方形か。**5**は口径19.4cmの鉢。突帯は口縁下に貼り付け、棒状工具で強く押す。

第117号土壙SK117　N27グリッドの小ピット。**6**は壺の底部。堅緻な焼成。**7**は口径24.8cmの鉢。

第120号土壙SK120　O27グリッドにある円形ピット。**8**は小型壺の口頸部。口縁部はそのまま延び先丸の断面となる。**9**の胴部は上位に最大径がくる器形。外面は細かな横ミガキ。頸部と口縁部を区切る沈線を入れているが一巡しないで消失している。精良土で堅緻、内外面とも赤茶色を呈する。

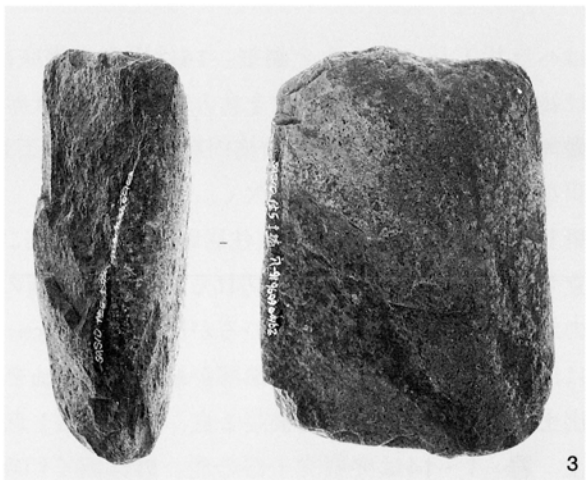


Fig.227　SK091の遺物

第121号土壙SK121　SK120の南西側に隣接する円形ピット。**10**の如意形口縁の甕と**11**のL字形口縁甕が出土した。**10**は口径22.2cm、口縁端部は丸みがあり、浅く小さな刻み目を等間隔で入れる。

第122号土壙SK122　N28グリッド、SK124の東に同じ方向で並ぶ。その東側が発掘区外に出ているが、隅丸方形であろう。**12**は外面丹塗りの壺口縁部。口径14.6cm、全面横ナデ調整。**13**は壺の底部か。外端部の張り出しは、接合を強固にするためにハケ目を施した後に貼り付けている。内面

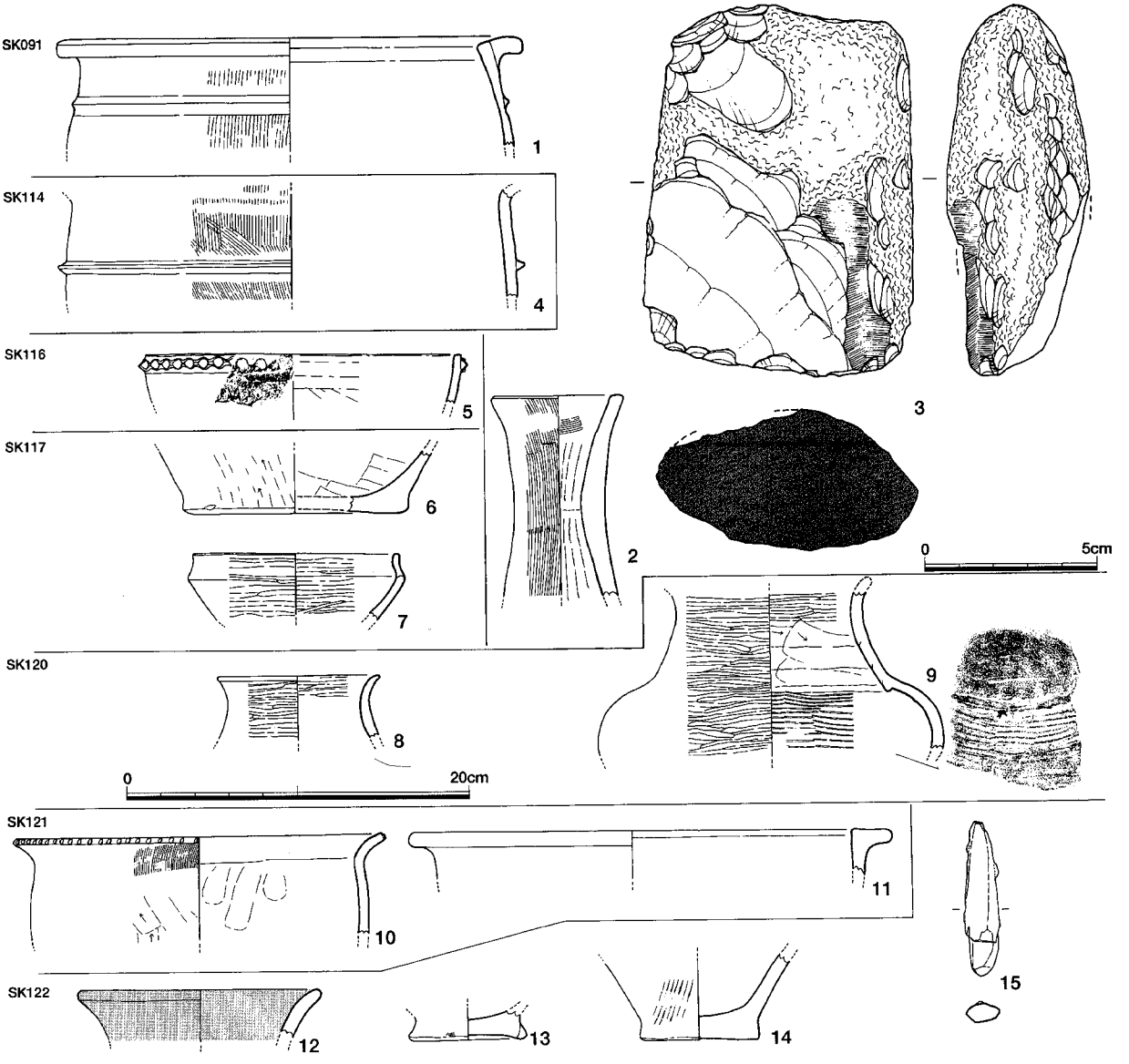


Fig.228 SK091～SK122の遺物（縮尺1/4・1/2）

はヘラ状工具によるナデ調整。14は平底の甕底部。外底は丁寧なナデ調整で滑らか。外面のハケ目は雑である。胎土に小砂粒を含み粗い。外面は赤茶色、内面は黒褐色で内底部は黒みがない。

骨角製品 15は鹿角を断面楕円形の棒状に加工している。全面が風化、剥離している。刺突具や弓弭など想定したが決め手を欠く。

第124号土壙SK124 竪穴住居跡SC07の東側に溝状の土壙が南北に二つ並んでいる。壙底は途中で立ち上がり陸橋のように途切れることから北側の土壙をSK124、南側をSK125と呼び分けた。SK124の北側は発掘区外に延びているが検出長は453cm、南端部付近が幅広くなっており幅145cm。壙底は南に向いて傾斜しており、南端部が最も深く34cmを測る。

出土遺物 土器44点、石製品2点、骨角製品1点を実測、図示する。土器はすべて突帯文土器。

土 器 1～14は突帯文土器の甕。外に開く口縁部。細かく見ると一つとして同じものはない。直線的なもの、口縁端部付近だけが小さく外反するもの、緩やかに湾曲するもの、逆にわずかに内湾す

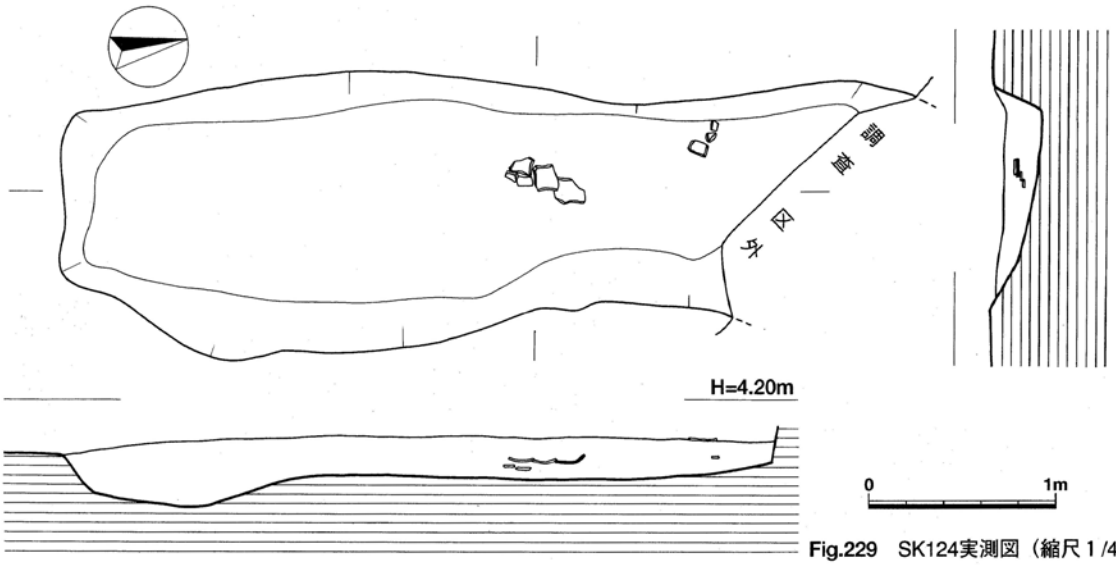


Fig.229 SK124実測図（縮尺1/40）

Fig.230 SK124・SK125（北東より）

るものなどである。突帯も断面形状、貼り付け場所、そして刻み目の工具、刻み方など一様ではない。**6**の直線的に外反する口縁部には突帯がない、口縁端の断面は丸みのある方形で、その外端部に板状工具で口縁に対して直角に刻み目を加えている。刻み目には小口の木目が残っている。外面の調整は左上がりのナデ。口縁部内面は指頭圧痕が並ぶ。その下方は縦のナデ調整。外面は茶褐色、内面は灰白色。**15**、**16**は直立する口縁部。**16**は口径25.8㎝、口縁部はかすかに屈曲し、直線的に短く延び断面方形でおさめている。屈曲部内面には鈍い稜が付く。口縁部に突帯はなく、外端だけに刻み目を入れている。外面はナデ上げ調整、工具の擦刷痕が線状に残る。口縁部内面は左上がりのナデ調整。胎

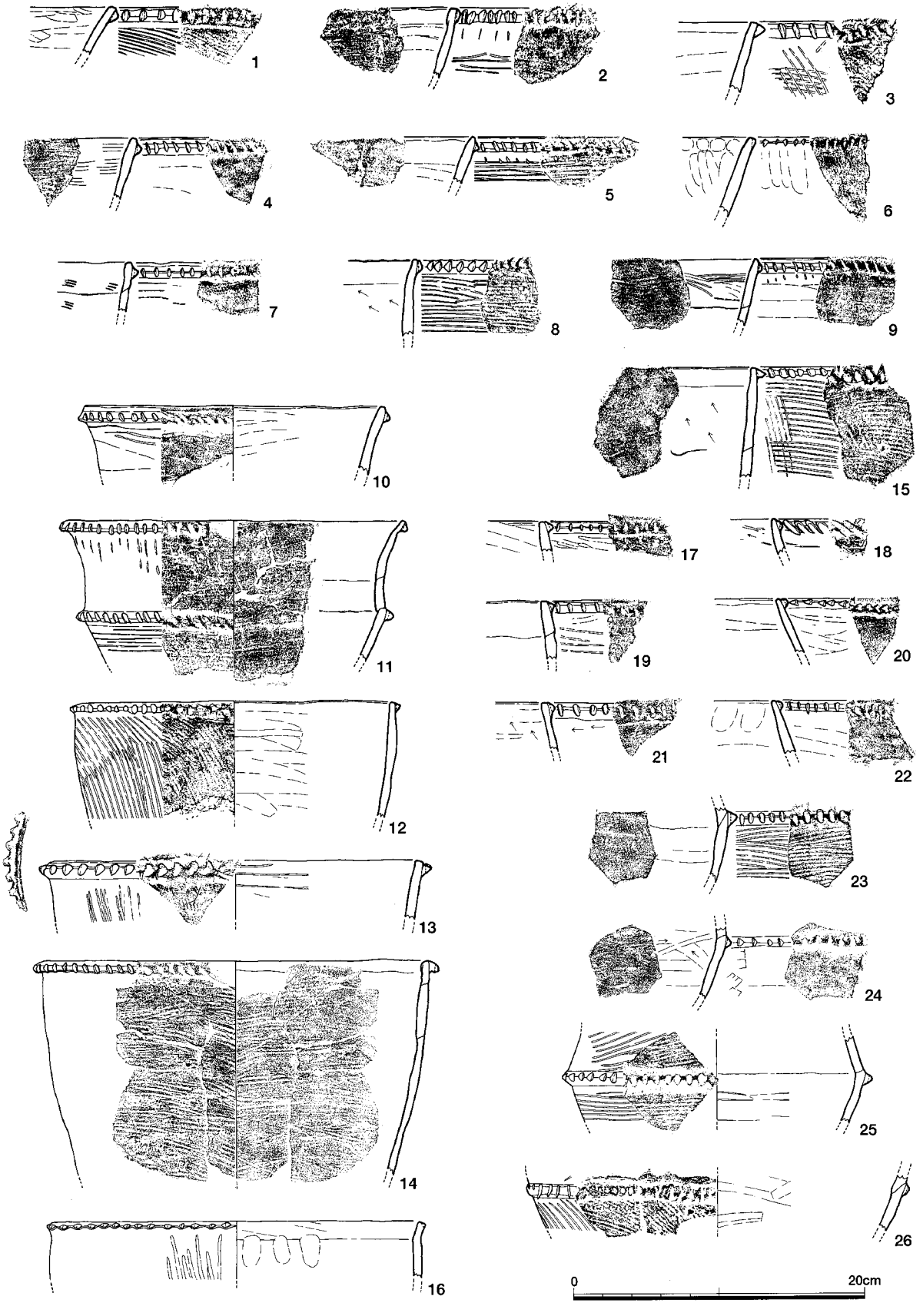


Fig.231 SK124の遺物（縮尺 1 / 4 ）

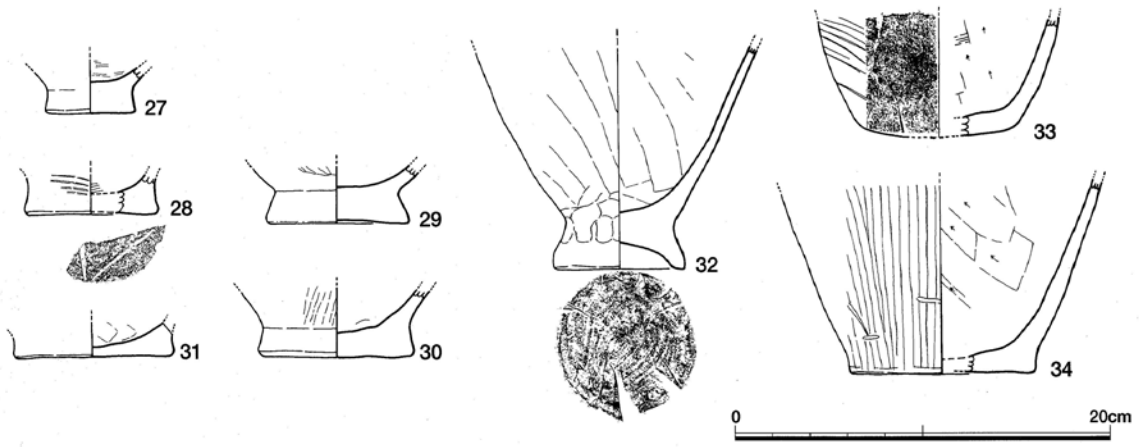


Fig.232　SK124の遺物（縮尺1/4）

土の砂粒はきわめて少なく、焼成良好。17～22の6点は口縁部が内傾する甕。20、22の突帯は断面台形に近い。23～26は甕体部の反転部。屈曲の度合いで口縁部への湾曲や器高に違いがある。27～34は底部。27は底径4.8cm、厚みがあり、外縁への張り出しはなく円盤状に近い。外底は無調整、内面には粗いハケ目が残る。28は底径7.0cm、底部外縁はわずかな張り出しがある。外底には木葉痕が残る。内外面とも横条痕。29、30の底部外縁はさらに強く張り出した分厚い作りである。32は体部下半から底部へかけて破片。外底は粗い削りで深い上げ底となっている。体部との境は強く指押さえされよく締まっていることから、底部外面は断面ハ字形となっている。体部内外面は細い板状工具のナデ調整。内面は丁寧だが外面は粗雑である。33は体部からそのまま丸く湾曲し、特別な底部を作っていない。上半部が欠けて器形不明、長い胴部の壺か。35～38は壺。35は胴部の大きさに比べ頸部が狭まり、径15.4cmと小さな口縁部が付く。滑らかな湾曲で頸部、口縁部の境はない。外面のミガキ調整はきわめて丁寧で細やか。胴部内面はナデ上げと指押さえで凹凸が目立つ。37も胴部最大径が上位にある壺で、外面は丹塗り。外面の調整はさらに細かで、ハケ目の後にミガキを加えている。破片のために傾き不正確。精良土の胎土で雲母片が入る。内面は茶色、下半は褐色。38の胎土は精良土ではないが堅緻な焼成となっている。外面は研磨状の細かなミガキ調整を施し、内面は部分的に横ハケ目調整。この土器の特徴は粘土紐を貼り付けて文様を飾っていることである。胴部中位よりや

Fig.233　SK124の遺物

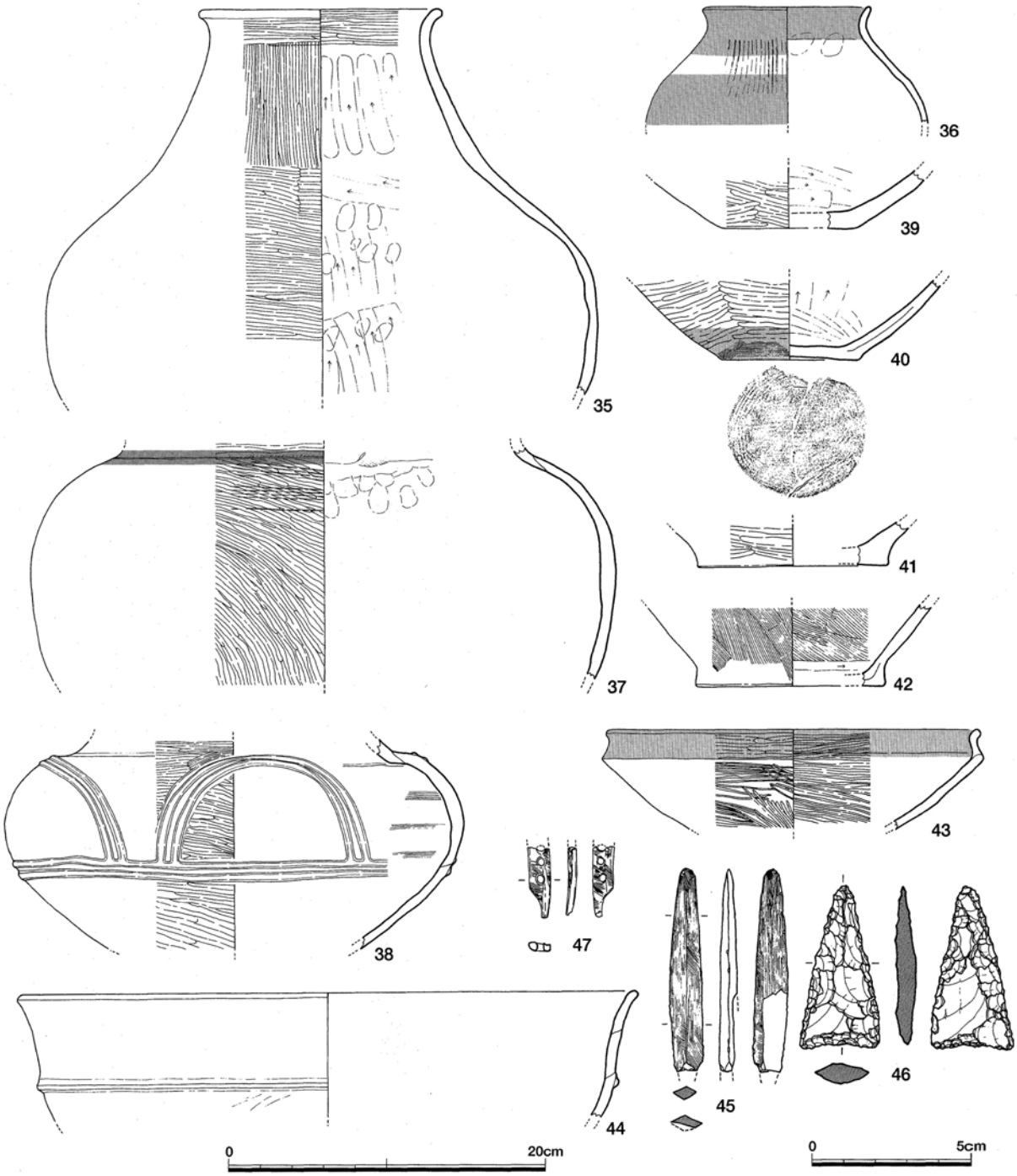


Fig.234　SK124の遺物（縮尺1/4・1/2）

や下方に2条の突帯を巡らし、この上部から頸部との間に二重弧文を連ねている。この突帯にも貼り付け後にミガキを加えている。**39**～**42**は壺の底部。**39**、**40**は胴部器壁と同じ厚さで円盤状とならない。**40**は胴部全周を5分割して横ミガキをした後に丹塗り。外底も細かなヘラ状工具で横ミガキをしている。**42**は底径12.0㎝、内外面とも同じ工具を用いハケ目調整。内面は何

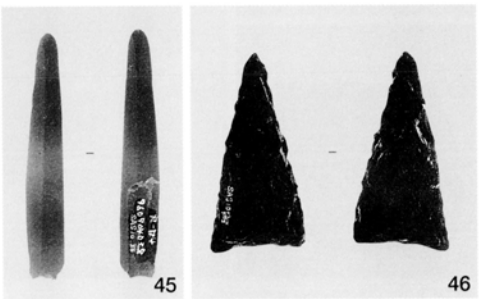


Fig.235　SK124の遺物

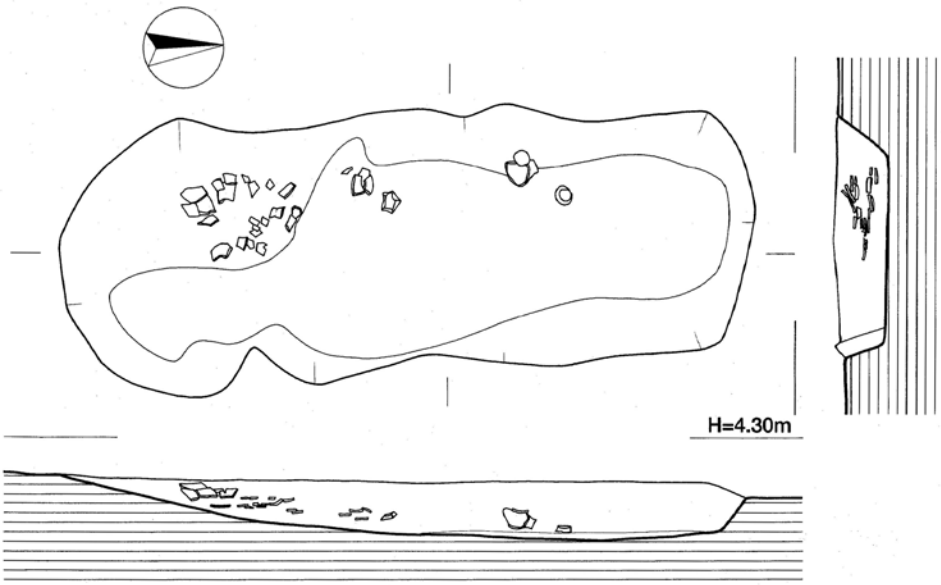


Fig.236 SK125実測図（縮尺1/40）

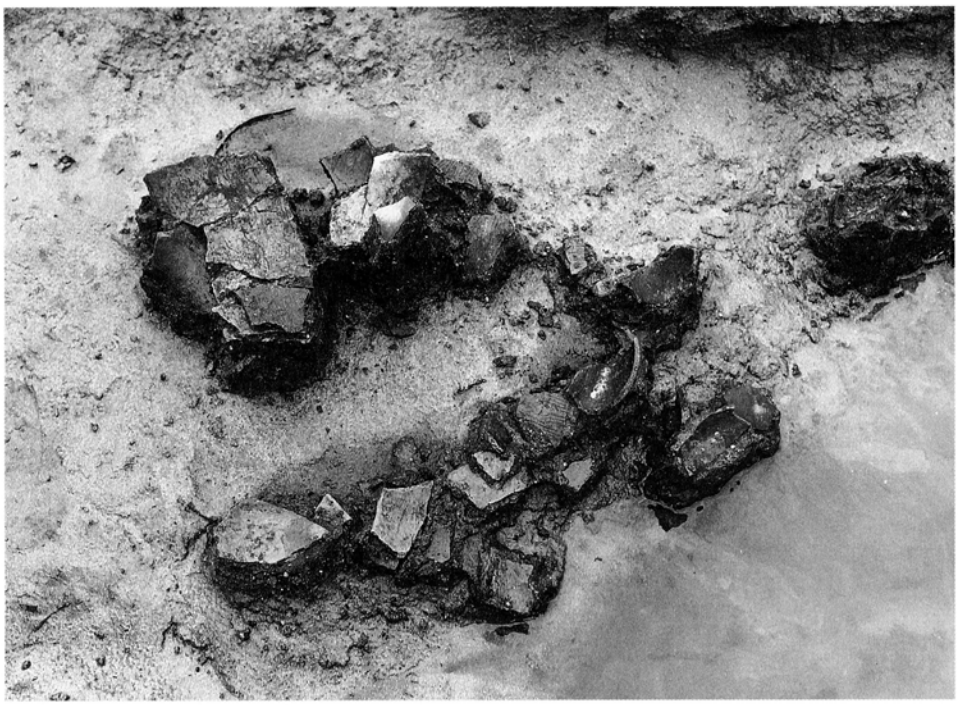


Fig.237 SK125遺物出土状況

度もハケ目を重ねている。**44**は口径40.0cmの大型品。体部の屈曲は弱く、緩やかに外湾して口縁部となる。屈曲部には断面台形の小さな突帯を貼り付けている。

石製品 **45**は粘板岩質の磨製石鏃。先端と基部を欠いているが、わずかに関部が残っていることから茎があったことが分かる。研ぎ出された鏑は茎まで通っていたのだろう。**46**は黒曜石の打製石鏃。

骨角製品 **47**はイノシシの犬歯と推定されている。扁平に加工し一端を細く尖らせている。3個の小孔が並ぶ。両面からの穿孔で、溝は本来のもの。火熱を受けて白色となっている。用途不明。

第125号土壙SK125 SK124より約90cm間を置いて南側に延びる隅丸長方形の土壙。長さ372cm、幅130cm。壙底は北端が25cmと深く南側に向かって上がり、北端部の深さは16cmを測る。

出土遺物　遺物は南寄りに集中しており、図のように壙底に接して出土している。

土　器　1～11は突帯文土器の甕。通例のように口縁部が内傾するもの、直立するもの、外傾するものに大別する事ができる。5、6は低い器高の甕。5は口径17.4cm、突帯は口縁端部より下がった位置に貼り付けている。突帯は断面三角形でその頂点はシャープである、外面は擦刷痕、内面はナデ。6は口径17.4cm、底部から大きく開き、反転しないでそのまま口縁部となる。突帯は断面台形で下方に垂れ気味。外面は横条痕、内面に粘土接合痕が見られる。10は体部が反転する甕。口径24.0

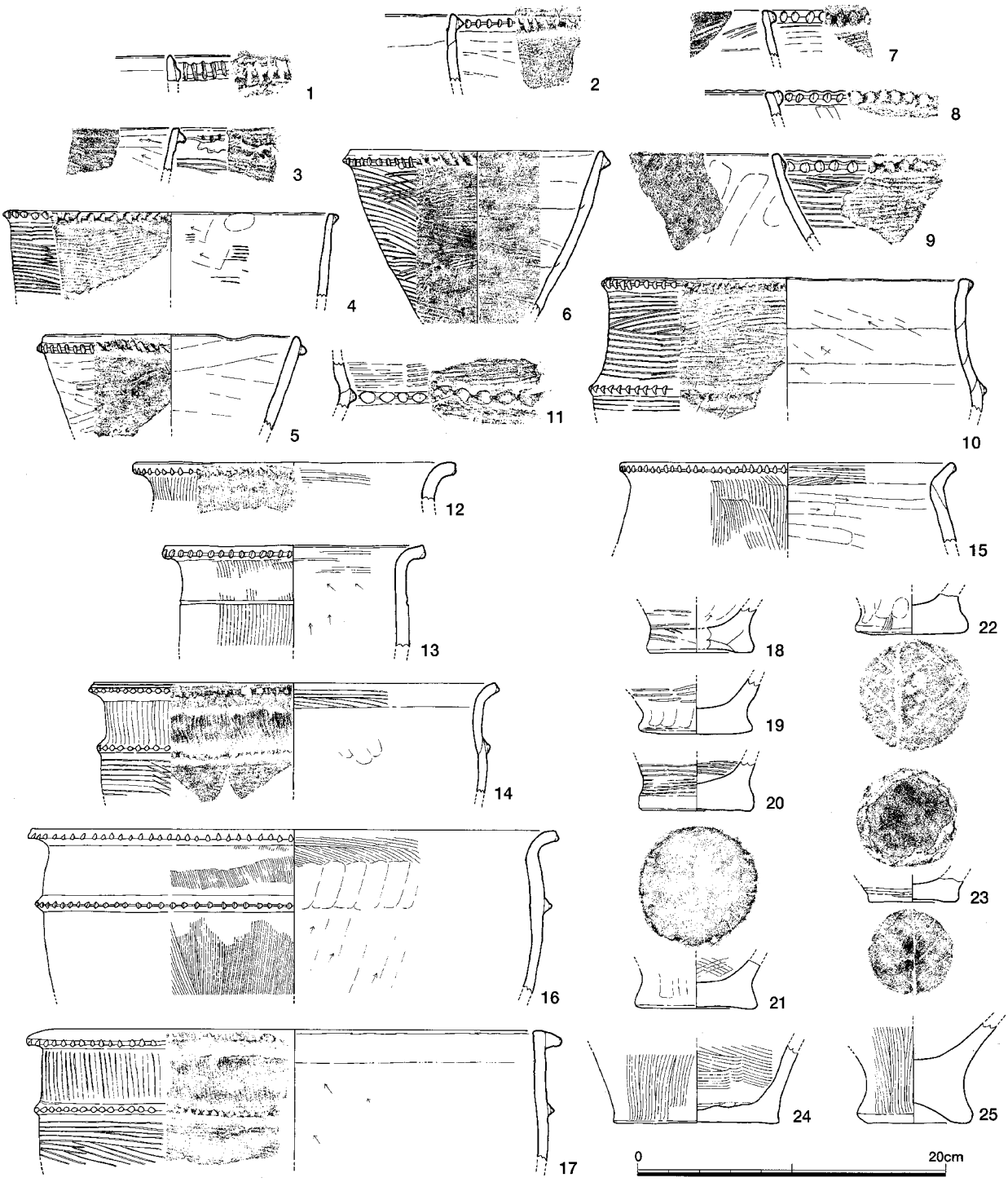


Fig.238　SK125の遺物（縮尺1/4）

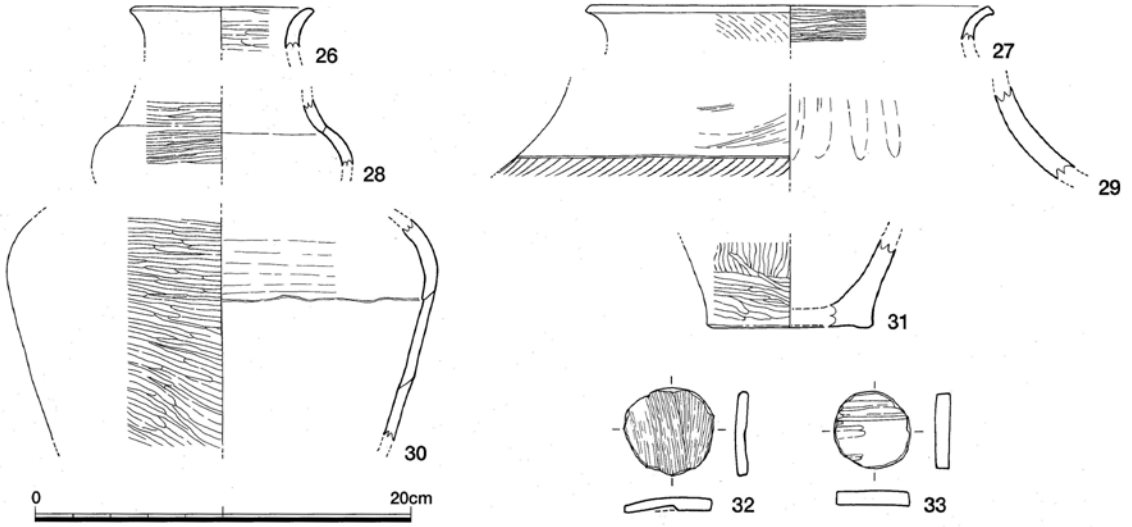


Fig.239　SK125の遺物（縮尺1/4）

cm。口縁部の突帯は小さい断面三角形。外面の色調は反転部より上半は赤褐色。下半は茶褐色。胎土は砂粒少なくきめが細かく、焼成良好。**18**～**23**は突帯文土器甕の底部。**22**、**23**の外底には木葉痕が残る。**12**～**16**は弥生時代前期如意形口縁の甕。**13**は口径26.8cm、口縁部の屈曲は強いが、短い。外面の縦ハケ目調整の後に沈線1条を巡らせる。この上半はハケ目をナデ消ししている。**17**は口径34.6cm、口縁部下方に断面三角形突帯があり、**14**、**15**と同じように刻み目を入れている。**24**、**25**は甕の底部、**24**は平底、**25**は城ノ越式の甕底部。**26**～**30**は壺。**26**は小壺の口縁部で径9.6cm。精良土の胎土で堅緻、調整も丁寧。頸部との境はなく滑らかな湾曲になっている。**27**は口径21.6cm、口縁端部断面は丸みがなく方形。器壁は薄い。内面は細かな横ミガキ、外面はハケ目の後に横ナデ調整。胎土に大きめの砂粒を含む。**28**は頸部と胴上半部の破片。**26**とは接合しない。外面の調整は明瞭でないが滑らかな仕上げとなっている。**29**は頸部の径28.8cm、頸部と胴部との境には細い沈線が巡り、この下方に斜行線文を描く。おそらく羽

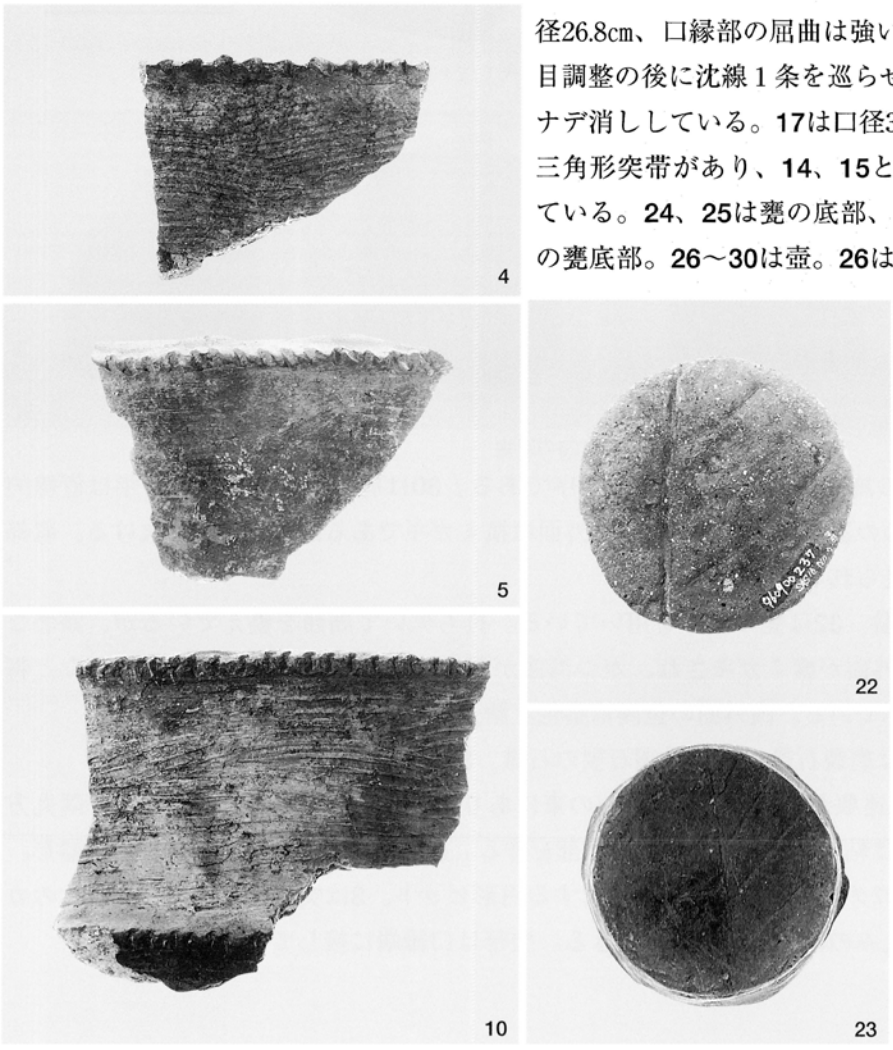


Fig.240　SK125の遺物

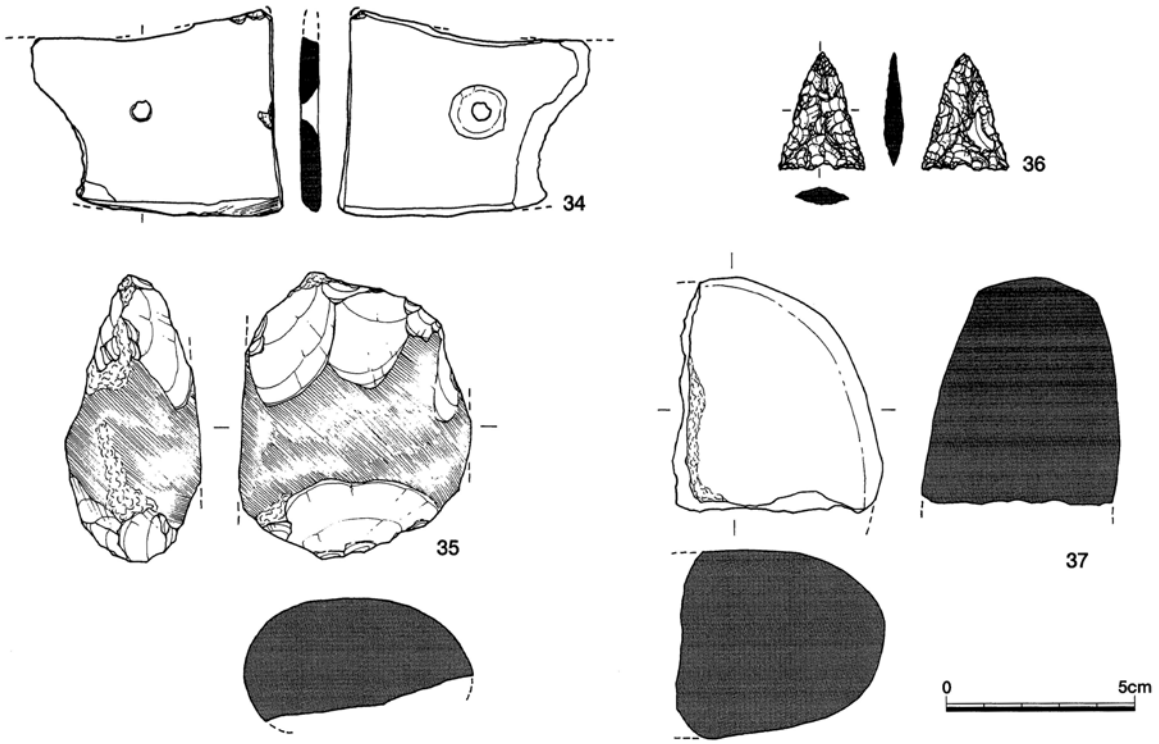


Fig.241　SK125の遺物（縮尺1/2）

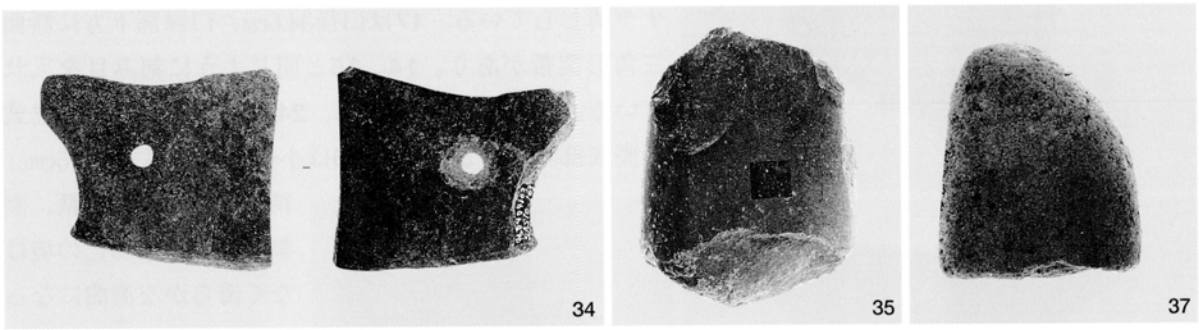


Fig.242　SK125の遺物

状文となるのだろう。この施文は斜行文→沈線の順序である。**30**は肩の張る壺胴部。下半は直線的に底部に延びており、長めの器形となるのだろう。外面は横ミガキであるが、丁寧さに欠ける。肩部内面には粘土繋ぎ目痕が見られる。

土製品　**32**、**33**は土製円盤。**32**は甕の破片を用いている。打ち欠いて周囲を整えているが、顕著な研磨は見られない。**33**は外面が横ミガキされ、かつ湾曲が弱いことから大型壺の破片を用いたと判断した。周囲をよく研磨している。内外面の色調は茶色。胎土は砂粒が少なく、焼成もよい。

石製品　**34**は石包丁。**35**は磨製石斧。**36**は黒曜石製の石鏃。**37**は磨り石。

第123号土壙SK123　記述順が前後するがSK124の東にあり、SK122と一列に並んでいる。隅丸方形の小土壙。**1**の甕口縁部は粘土を乗せて分厚い口縁部を作る。胴部上半は強く内傾し倒卵形の器形。

第132号土壙SK132　Q27グリッドの東寄りに位置する円形ピット。**3**は突帯文土器の甕。破片のカーブからすると内湾して丸みのある器形が想定できる。突帯は口縁端に接していない。

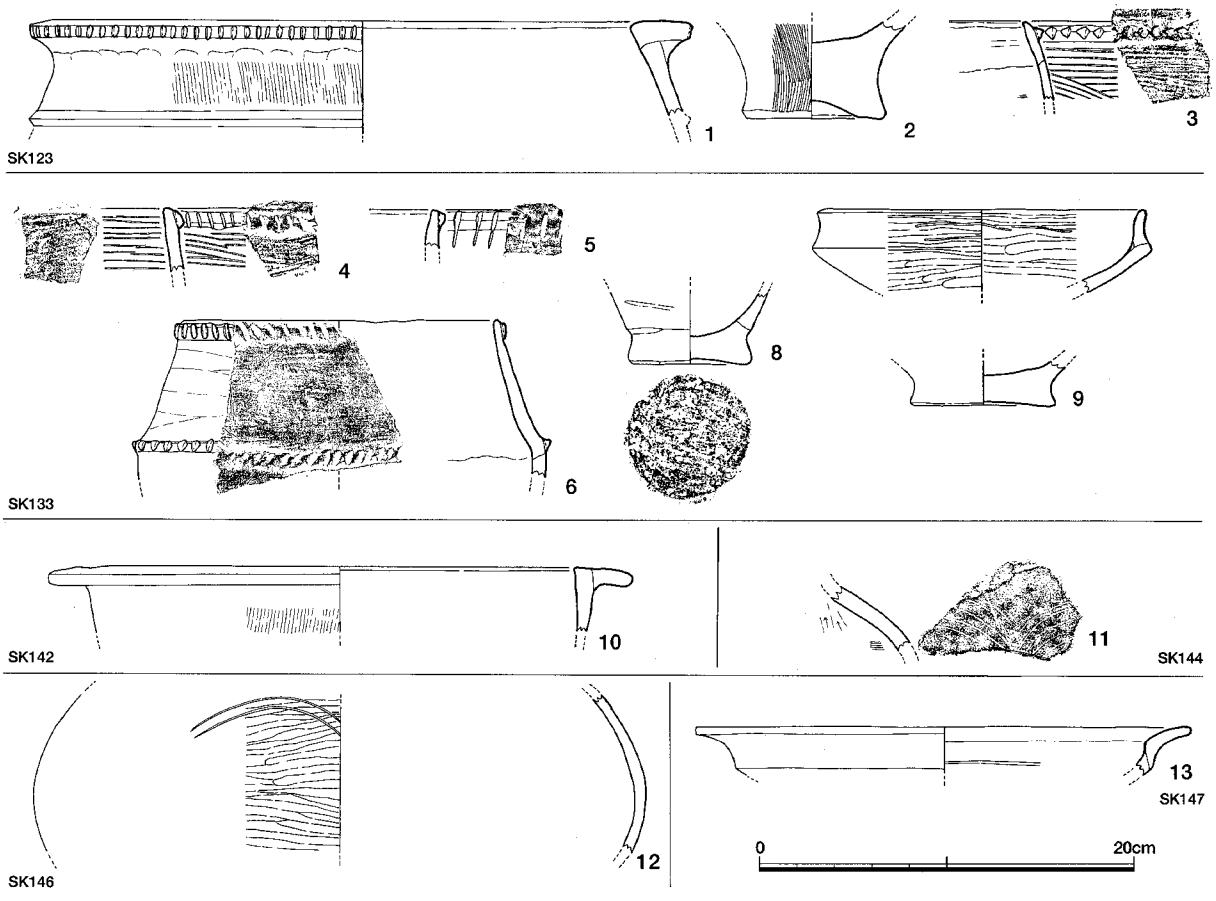


Fig.243　SK123～SK147の遺物（縮尺1/4）

第133号土壙SK133　SK125の東、P27グリッドに位置する。円形に近い楕円形のプラン。**4**～**9**の6点を図示した。**7**は口径17.6cm、口縁部は屈曲部からほぼ直に立ち先端を小さく外湾させている。

第142号土壙SK142　**10**はL字形口縁部の甕。外側に粘土板を貼り付けて幅広で水平な口縁部。

第144号土壙SK144　**11**は壺胴部上半の文様破片。細い沈線で描かれた文様は5重の連弧文。

第146号土壙SK146　**12**は壺胴部。最大径は32.6cm、扁球状の胴部上半に二重の弧文がミガキの後に沈線で描かれる。アーチが弱く、また連続するのか破片のために確認不可。外面黒褐色。内面茶色。

第147号土壙SK147　**13**は鉢。口径26.4cm。内面の屈曲部はにぶい稜となっている。

第151号土壙SK151　N30グリッドに位置する楕円形の土壙。**14**は如意形口縁の甕、口径27.4cm、口縁部はきれいに湾曲し、端部は断面方形におさめている。内面の摩耗が激しいのは使用のためか。

第154号土壙SK154　**17**は口径21.4cm、反転部がなく、突帯は口縁端から離れて巡る。

第155号土壙SK155　O29グリッドのほぼ中央に位置している。**18**は突帯文土器甕の口縁部小片。断面三角形の突帯に縦に刻み目を入れる。**19**は古墳時代土師器の小型器台で上部からの混入。

第160号土壙SK160　口径17.8cmの突帯文土器甕。体部上半は直線的に内傾し、器壁はやや厚い。

第162号土壙SK162　北拡張区O30グリッド、楕円形の土壙。5点の土器と石製品1点を図示した。

第198号土壙SK198　**27**は突帯文土器甕で口径19.4cm。外面は横条痕、内面は板状工具の擦刷痕。

第199号土壙SK199　**28**は甕の反転部。**29**は口径24.8cmの甕。口縁下端には小さな刻み目が密。

第200号土壙SK200　**30**は突帯文土器甕の底部。外縁は小さく突出する。

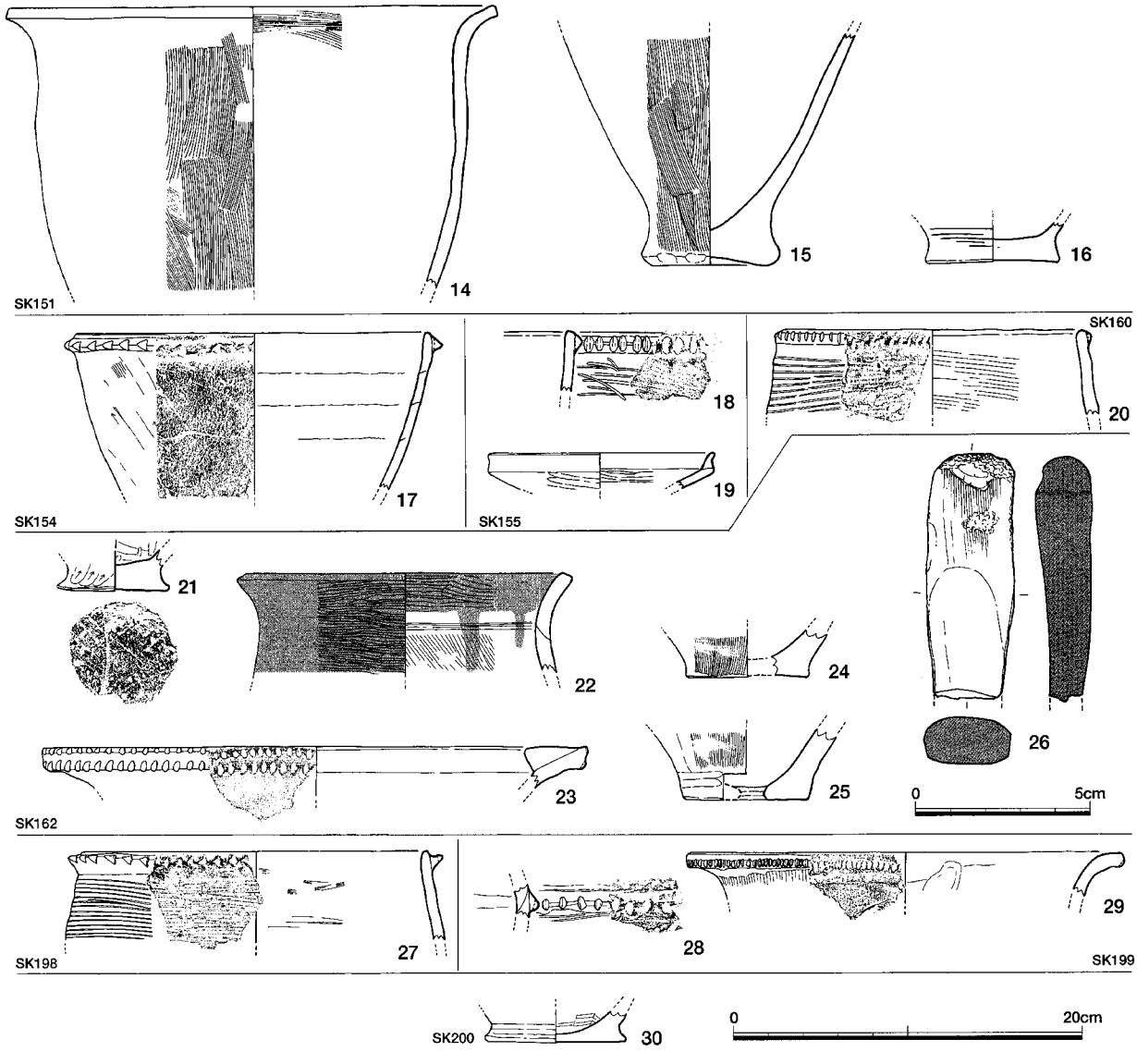


Fig.244 SK123～SK147の遺物（縮尺1/4・1/2）

第152号土壙SK152 O30グリッド南東寄りに位置する。上面プランは楕円形。壁は斜めに掘り込まれ、途中から垂直になり壙底は円形となる。上面で長軸123cm、短軸92cm、深さは72cmである。

出土遺物 円形に掘り込みが変わる部分を中心にして大きめの破片が出土し、計8点を図示した。**1**は口縁部を欠いた小型壺。底部は正円ではなく5.9cm×6.7cmといびつである。分厚い作りで、円盤状にはならず、そのまま胴部に延びている。胴部の最大径は中央にあり15.8cmの大きさ。外面はハケ目の後に短い横ミガキを加える。ストロークが短いのは胴部の球形が小さいからであろう。底部から胴部下半にかけて黒斑。**2**も同じような球形の壺胴部。最大径

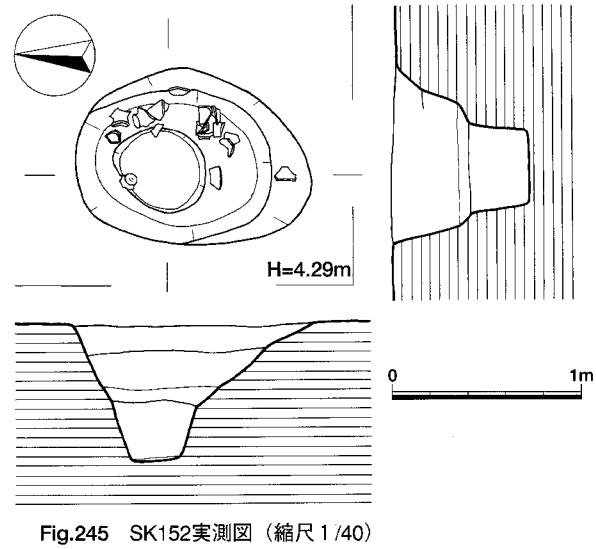


Fig.245 SK152実測図（縮尺1/40）

が40.4cmという大型品。胎土は精良土で微量だが雲母片が混入している。頸部との境に小さな断面三角形突帯を巡らせ、細かな刻み目を密に加える。胴部外面は横ミガキとハケ目を交互に調整している。内面はナデ調整。色調は外面が灰褐色、内面が黄灰白色。焼成はよく、外面上半の所々に黒斑がある。

3～**8**は甕の底部。**3**は底径7.7cm、外底は丁寧なナデで上げ底。体部への移行部はよく締まっていることから、底部外縁はハ字形に開いた形状となっている。**4**は上げ底で深く、かつ外縁が平坦で蛇の目状となっている。体部は大きく開き蓋の可能性もあるが、内面に炭化物状のススが付着していることから甕とした。**5**は底径7.7cm、上げ底の底部は厚みがある。締まりは弱く体部の外反も弱い、長めの体部となるのだろう。

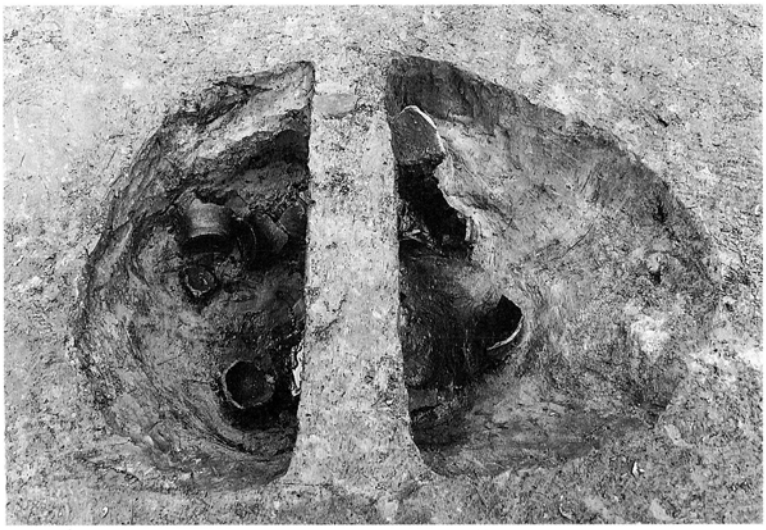


Fig.246　SK152

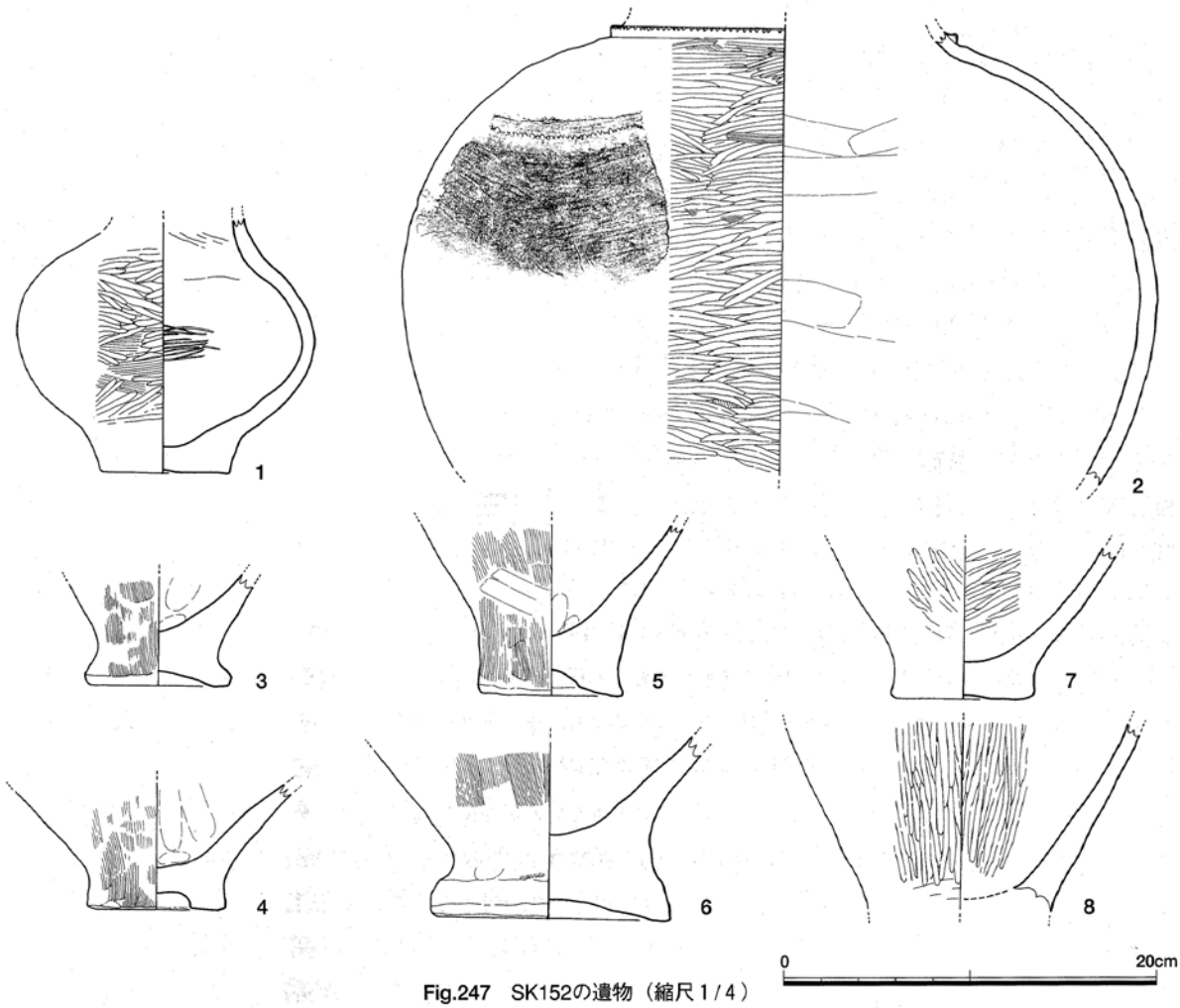


Fig.247　SK152の遺物（縮尺1/4）

Fig.248　SK161の遺物

内面にススが付着し調整痕不明、外面は縦ハケ目後にナデを部分的に加えている。**6**はさらに分厚い作りの底部で、径12.7cm。

第161号土壙SK161　O30グリッドの北よりに位置する不整円形の土壙。75cm×80cm、深さ10cm。

出土遺物　**1**は如意形口縁部の小破片。屈曲は弱く、刻み目は上端にまで達する。内外面ともに横ナデ調整。**2**は突帯文土器の甕で口径19.0cm、口縁端部の断面は三角形状に尖り気味で突帯は断面蒲鉾状、刻み目は左から深く入れる。内外面とも粗い擦刷痕。

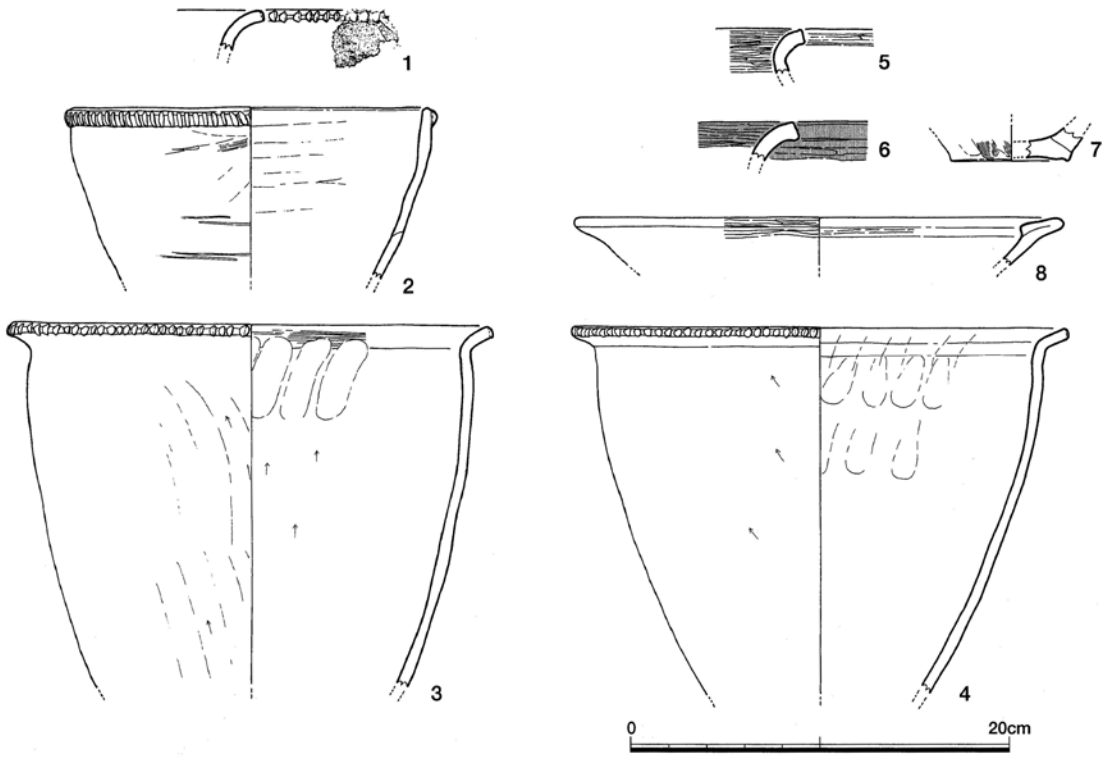


Fig.249　SK161の遺物（縮尺1/4）

3は如意形口縁は屈曲強く、端部はわずかに厚みを持たせている。刻み目は上端までどうにか達している。口径25.4cm、調整は左上がりのナデ、屈曲部内面は指押さえ痕が並んでいる。**4**は口径26.0cm、**3**に比べると体部下半のすぼまりが強い。外面の調整は左上がりのナデ、内面は2段に指押さえ痕がある。**5**、**6**は壺の口縁部。**8**は高坏。口径25.6cm、口縁部内面に粘土を貼り付け、横ミガキで調整している。外面は剥離が激しい。坏内面は濃茶色。

第196号土壙SK196　北拡張区P30グリッドに位置する。北拡張区の西寄りはピットが集中しているがその一つ。**1**は如意形の口縁部。口径19.4cm、口縁に刻み目はなく、外面の調整は縦ハケ目、内面は横ハケ目。口縁部は横ハケ目。外面の色調は黒色。内面は灰茶色。**2**は壺胴部と頸部の破片。その境に横ミガキの後に3本の沈線を入れている。破片のためにこれ以外の文様があったか不明。

第212号土壙SK212　P30グリッドの南よりに位置する隅丸方形の土壙。SK213北隅が重なっている。

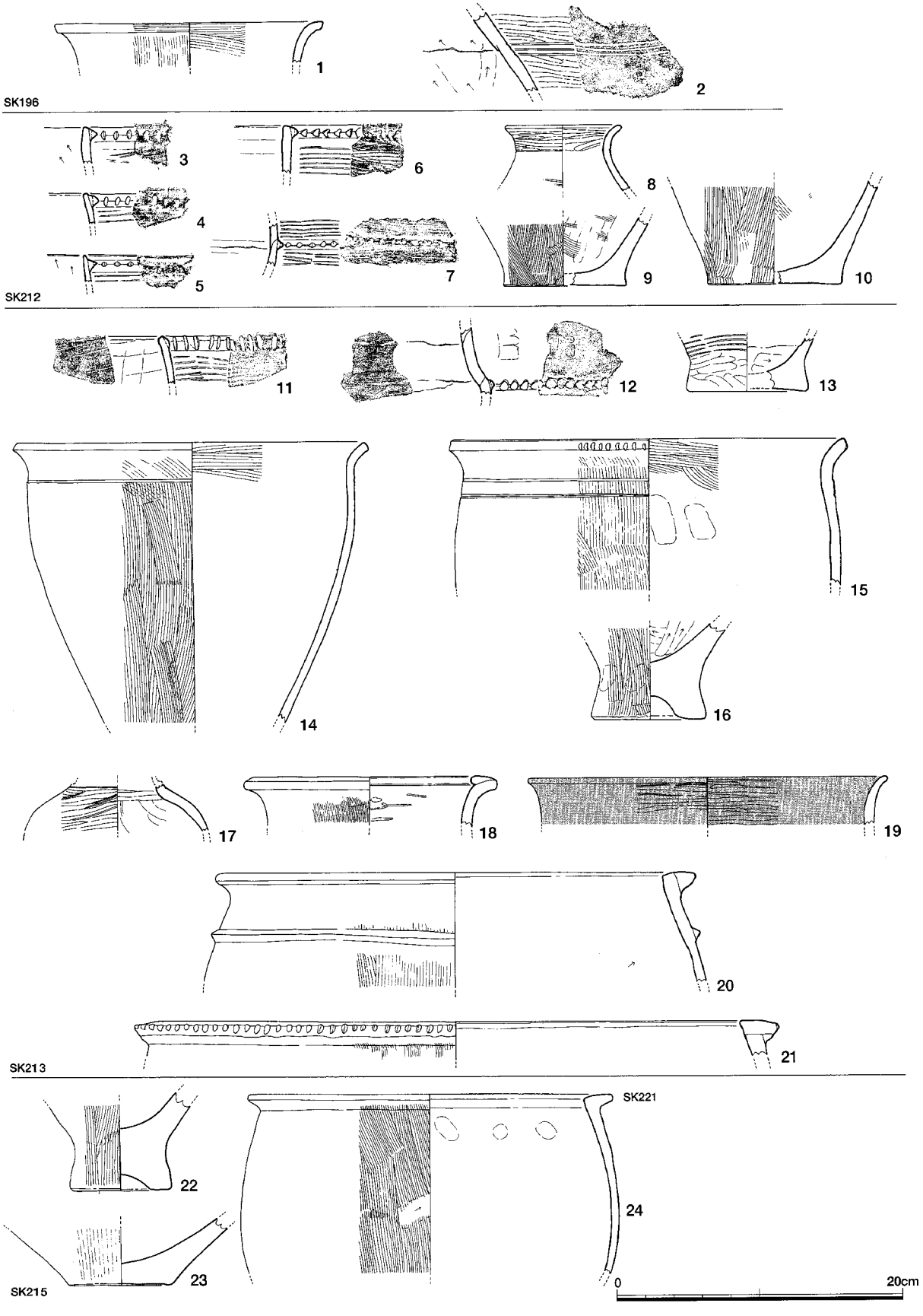


Fig.250　SK196～SK221の遺物（縮尺１/４）

突帯文土器と弥生時代前期の土器が出土した。3～7は突帯文土器の甕。内傾するものと直立する口縁部がある。突帯はいずれも断面三角形であるが、4と5の突帯は、口縁端より離れて貼り付けている。7は体部の反転は弱い。8は径8.2cmの小壺の口縁部。口縁部内外面だけ細かな横ミガキで調整しており、この差が頸部との境になっている。頸部も横ミガキだが滑らかで痕跡はない。胴部への移行付近に沈線が一部残っているが文様かどうか不明。精良土で堅緻な焼成となっている。外面は茶褐色、内面は茶色。9、10は甕の底部で平底。9の底径は8.6cm、10は底径9.6cm。

第213号土壙SK213　P30グリッドの南東隅に位置する。径220cmの円形土壙である。突帯文土器～弥生時代中期前半の土器が出土した。11～13は突帯文土器の甕。11は内傾する口縁部でその先端でさらに内湾して丸みのある口縁部を作っている。突帯は背の低い断面蒲鉾形。14、15は如意形口縁の甕で口縁部下方に沈線を巡らせている。14は口径25.0cm、体部に張りがなくそのまま底部に延びる。体部の縦ハケ目は数度重ねている。外面の上半は砂粒が露出している。15は同じように体部に張りがない。口径28.4cm、口縁部下端にのみ刻み目。左から切り込んでおりほぼ等間隔である。２条の沈線は縦ハケ目の後に入れており、割りに幅広い。口縁部内面のハケは粗い目。外面褐色、内面茶色。17は小壺の上半部、頸部との境に段がわずかにあり、小さな断面三角形の突帯が付くのだろう。胴部外面は粗い横ミガキ調整。18は口径18.0cmの広口壺。如意形に外湾した口縁部の上に粘土を貼り付けやや盛り上がった口縁部を作っている。外面は細かな縦ハケ目。19は内外面とも丹塗りが施され、口縁端部は先丸におさめている。内外面とも横ミガキ調整。外面がより丁寧である。20、21とも分厚い作りの口縁部であるが、粘土の貼り付けが異なる。20は外側であり、21は上に乗せ、さらに下方から支えの粘土を加えている。どちらも倒卵形（無花果形）の体部となる。21の口縁外端には刻み目を加える。20には口縁部下方に断面三角形突帯を巡らせている。

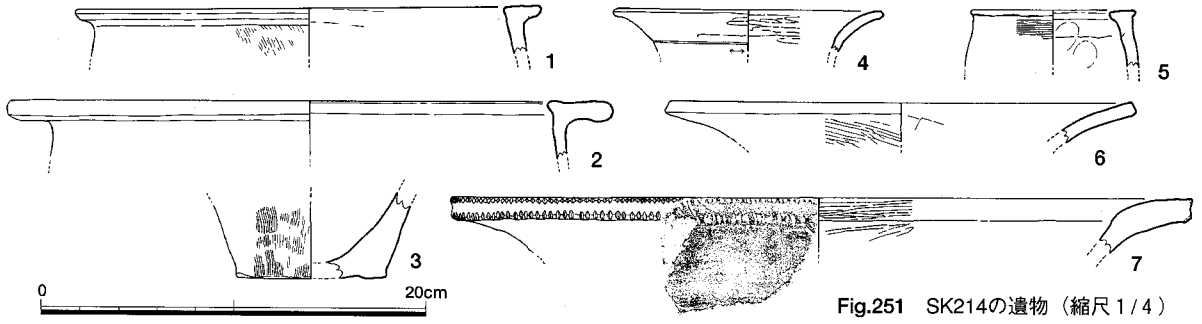


Fig.251　SK214の遺物（縮尺１/４）

第215号土壙SK215　22は城ノ越式甕の底部。底部の締まりは小さく円柱状に近い。外縁は縦ハケ目。23は壺の底部。平坦な底部から円盤状にならずに大きく開くいている。

第221号土壙SK221　１点のみのを図示した。24はＬ字形の口縁部甕で丸みのある体部となっている。口径26.4cm、わずかに内傾する口縁内端部は稜はない。口縁上面は横ナデで微妙に凹んでいる。

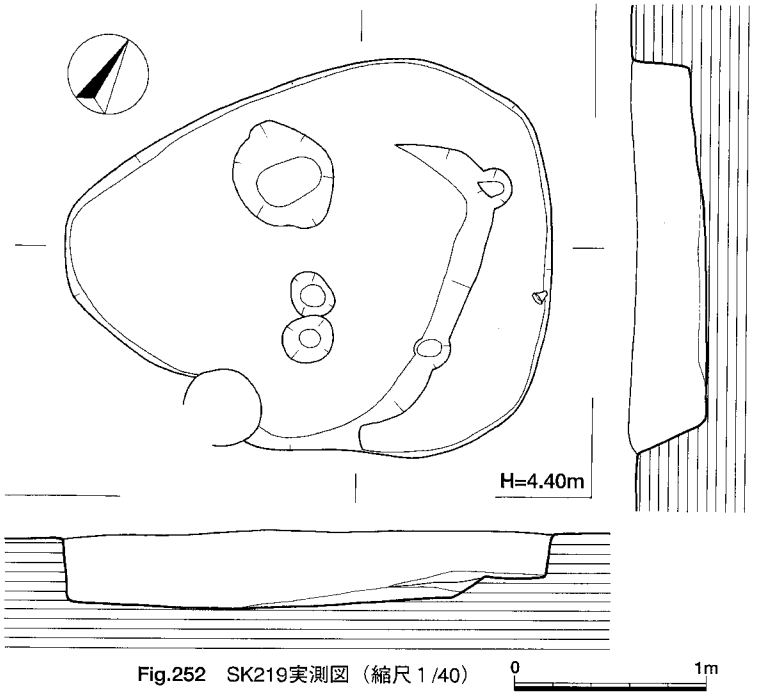


Fig.252　SK219実測図（縮尺１/40）

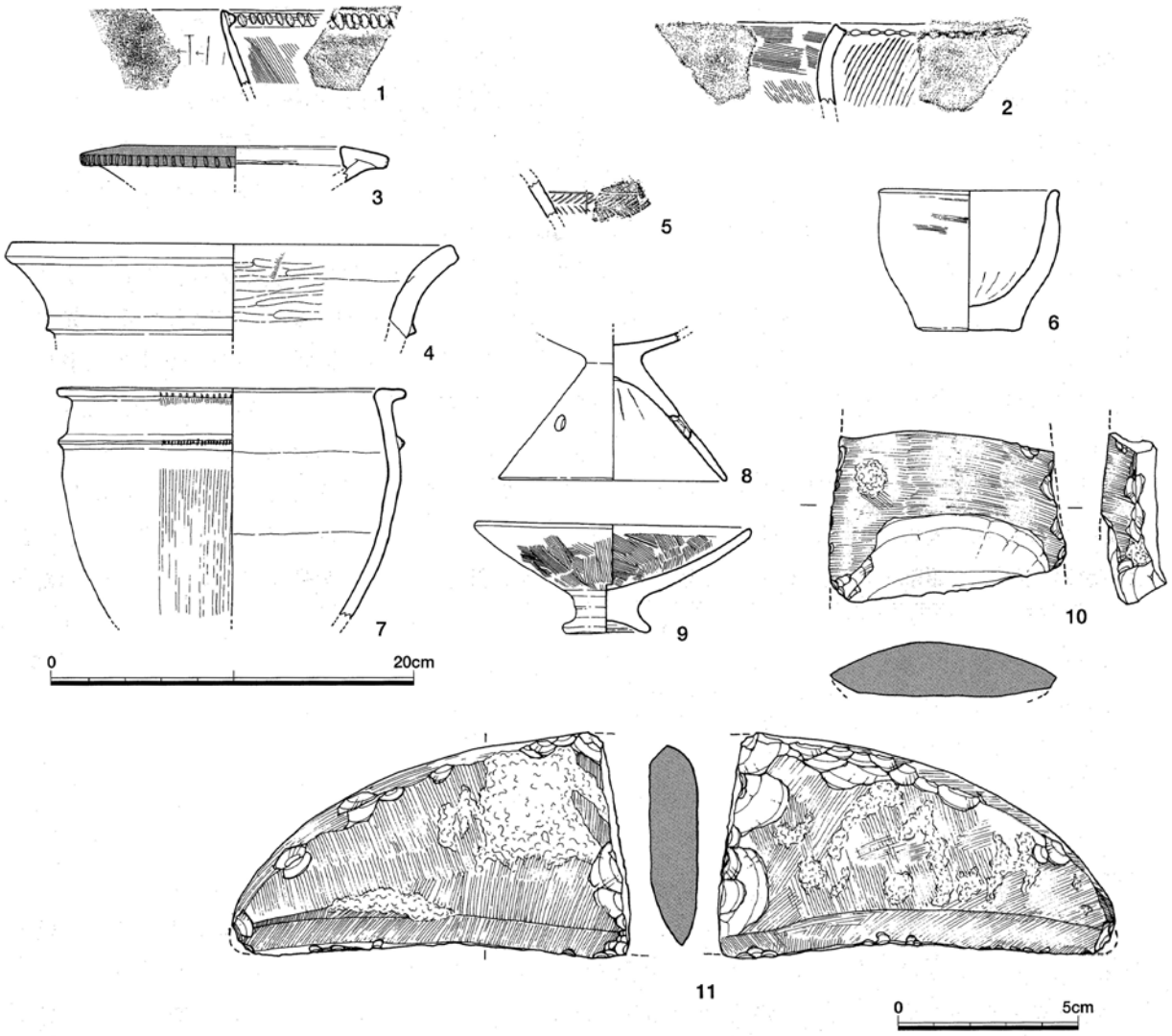


Fig.253 SK219の遺物（縮尺1/2）

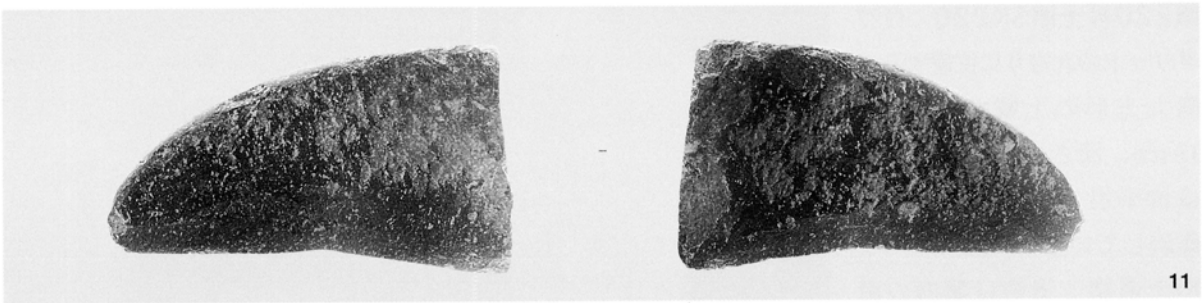


Fig.254 SK219の遺物

第214号土壙SK214 R24グリッドにあり、SK020の北側に隣接している。当初井戸と判断していたが、積極的に裏付けることができず、資料整理の段階で土壙とした。

出土遺物 **1**～**3**は甕の口縁部と底部、**4**は壺口縁部で、頸部との境に沈線を巡らせ散る。**6**は口縁と図示しているが脚裾部か。破片のために確定できない。**7**は口径38.8cmと大型の壺。口縁外端の上下に刻み目を加える。この後に横ナデ調整。胎土には1～3㎜大の砂粒や雲母片などを含む。

第219号土壙SK219 N30・31グリッド。一方が尖った楕円形。長軸258cm、短軸207cm、深さ40cm。

出土遺物 7点の土器と石製品2点を図示する。

土　器　1の内傾する器壁は薄手で口縁端部は細く尖り気味。外面の調整は横条痕ではなく、左斜行の細かいハケ目。突帯は断面蒲鉾形、2の口縁部はわずかに外湾し、断面方形におさめている。突帯はなく口縁部下端だけに刻み目を施している。器面の調整は外面が右斜行のハケ目、内面は上から横ハケ目、次ぎに左斜行のハケ目を加えている。内外面とも調整は雑である。3は口径17.0cmの広口壺。分厚い作りの口縁部上面は外傾し、端部に縦の刻み目を入れている。4は壺口縁部で口径24.8cm、頸部との境に小さな断面三角形突帯を貼り付け横ナデしている。内面は粗雑な横ミガキ。5は壺胴部上半の文様片。精良土の胎土で焼成良好。色調は茶色。文様は先に羽状文（綾杉文）描き、次の上に沈線を巡らせ、さらに文様帯を区画する縦の線を入れている。6は手捏ねの土器。口縁部は斜め上方に小さく摘み上げている。7は口径19.4cm、外面の色調は茶褐色で一部に黒斑。L字形の口縁部内端は、丸みがあり稜はない。体部の突帯にも口縁部と同じように雑な刻み目を加えている。胎土に1～2㎜大の砂粒を含み、器面に露出している。8、9は古式土師器。8の小型器台は形態的にはC系精製器種だが、全面ナデ仕上げで細密横ミガキ調整がみられないこと、脚内面に螺旋状工具調整痕があることから、9のB系低脚坏のようなB系技法の影響も考えられる。

石製品　10は磨製石斧の身中央部の破片。断面は薄いレンズ状、表面に研磨痕がよく残っている。側縁は欠損が目立つ。11は石鎌の先端部。三日月状で刃部は直線に近い。両刃に研磨されているが鋭さはない。弧状の背は丁寧な研磨は施されていない。

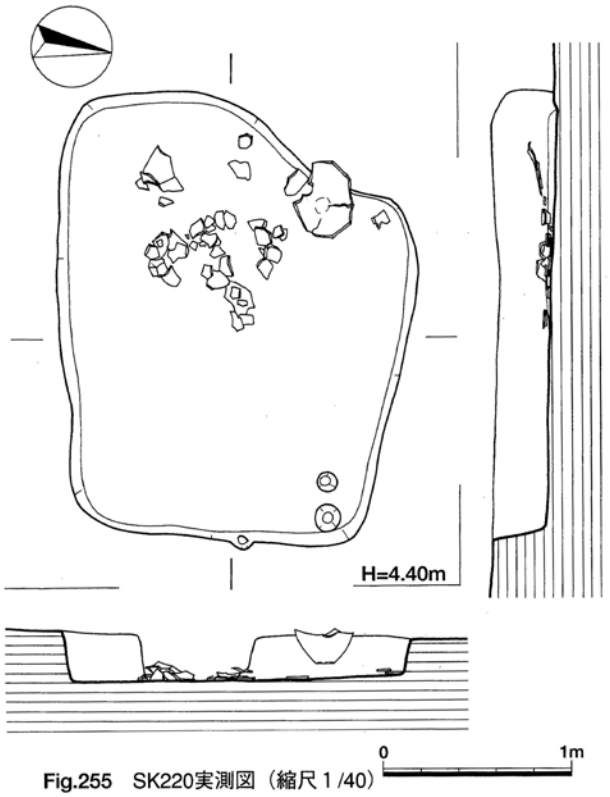


Fig.255　SK220実測図（縮尺1/40）

第220号土壙SK220　O27グリッドの北寄りに位置する。隅丸方形の土壙で238cm×184cm、深さは23cm。壙底はほぼ平坦でわずかに南側に傾斜している。

出土遺物　遺物は壙内の南西部に集中して出土した。

土　器　1は口径16.2cmの鉢。体部はやや長めの体部で口縁端部で小さく内側に傾いている。内外面とも横ミガキでなめらかな器面となっている。2～6は如意形口縁の甕。2、3の口縁部には刻み

Fig.256　SK220

目はない。2は鉢とすべきか。5の口縁部は正円でなく24.5cm×25.4cmといびつ、口縁部の刻み目は上端まで達し、間隔はやや雑。器面の調整は内外面ともナデ上げ。口縁部下方にわずかに張りがある。4は口径28.4cm、口縁部の湾曲は小さくその端部は肥厚している。刻み目は下端のみ。外面はススが付着し黒色、内面は茶色。体部に張りはない。6は口縁部下方の器壁は厚く段がある。口縁部

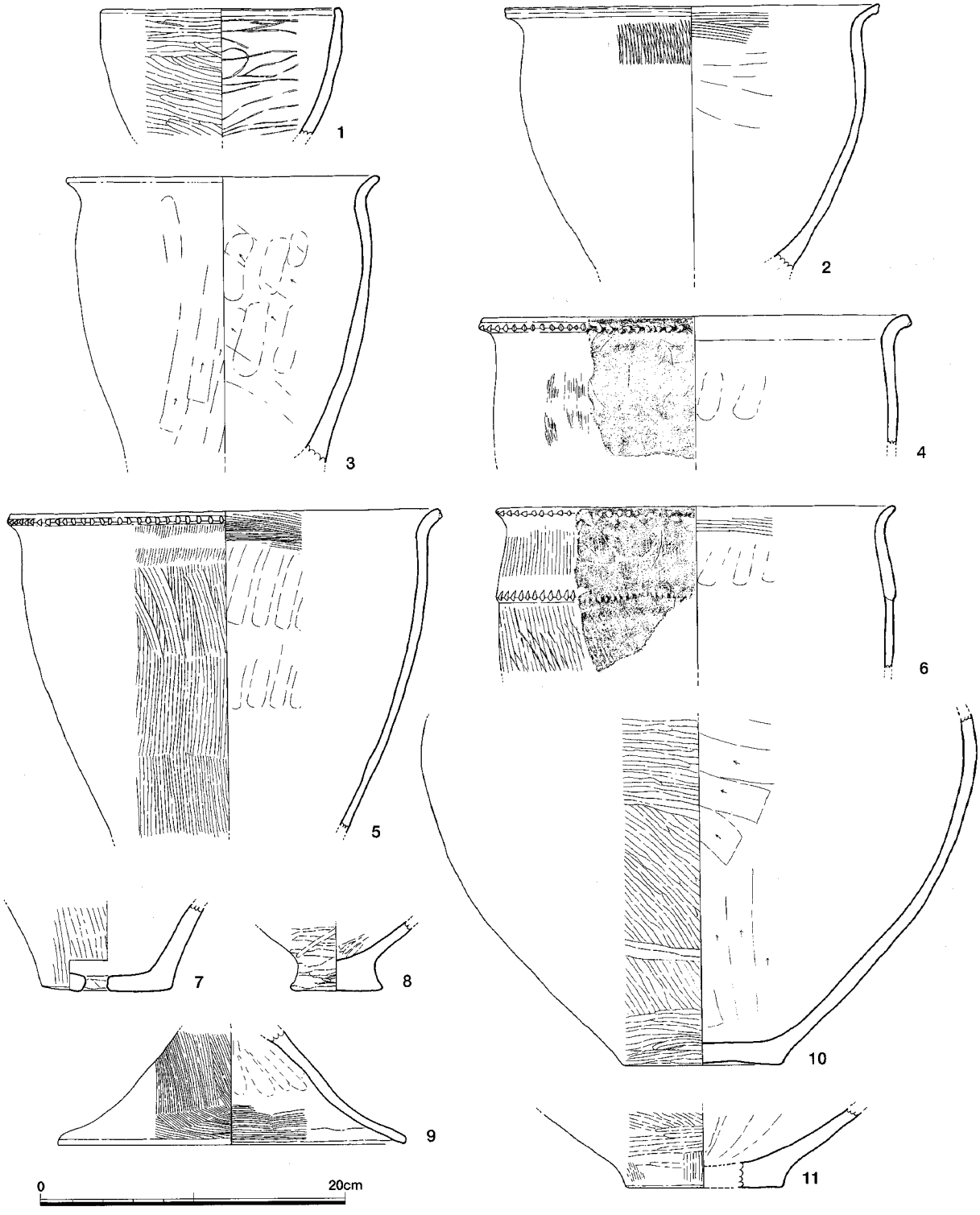


Fig.257 SK220の遺物（縮尺1/4）

とこの段に刻み目を入れる。外面のハケ目は粗い。**7**は甕の底部で、外底中央部がわずかだが盛り上がっており、中央から外れて焼成後の穿孔がある。孔径は約20㎜。外面はヘラ状工具によるなで上げ。外底だけに径５㎝の黒斑がある。**8**は外面に横条痕があり突帯文土器の底部と思われるが、体部への移行部が強く締まり、また底径も小さい。**9**は甕の蓋。内外面とも細かなハケ目調整。口径23.0㎝、内部上半は指押さえ。胎土に砂粒は多いが焼成はよい。**10**は壺の胴部で埋め土の上部で出土した。外面は細かな横ミガキだが痕跡は不明瞭、内面はヘラ状工具のナデ調整。**11**は壺の底部。底径10.2㎝、胎土に砂粒多く、きめが粗い。内面はナデ上げ、外面は左上がりのミガキ状のナデ上げ調整。

第110号ピットSP0110　北拡張区O31グリッドにある南北方向の溝状の土壙。最大幅94㎝、長さ498㎝、中央部の深さ20㎝。長軸の方向はSK124、SK125とほぼ一致している。壙底は平坦でなく、小ピットも数個あり凹凸となっている。

出土遺物　遺物は土器のみで壙内の南寄りに集中する。そのほとんどを実測、図示した。

土　器　**1**～**3**は突帯文土器の甕。**4**、**5**は如意形の口縁を持つ弥生時代前期の甕。**4**はほぼ完形品。口径21.0㎝、器高24.8㎝、底径8.0㎝。口縁部の湾曲は弱く、かつ短い。刻み目は下端のみに

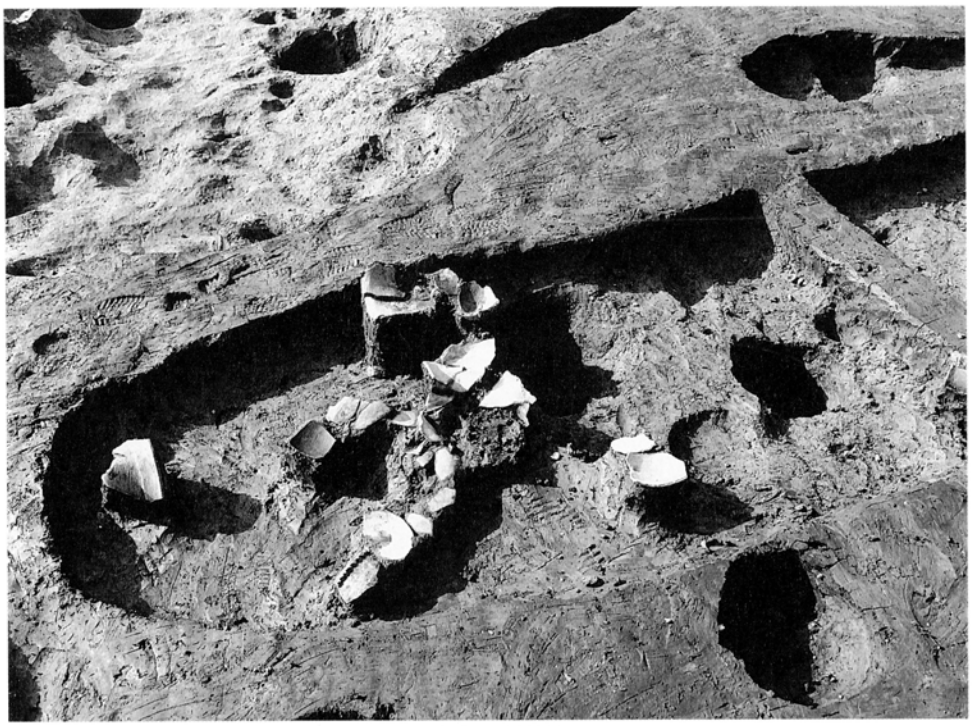


Fig.258　SP0110

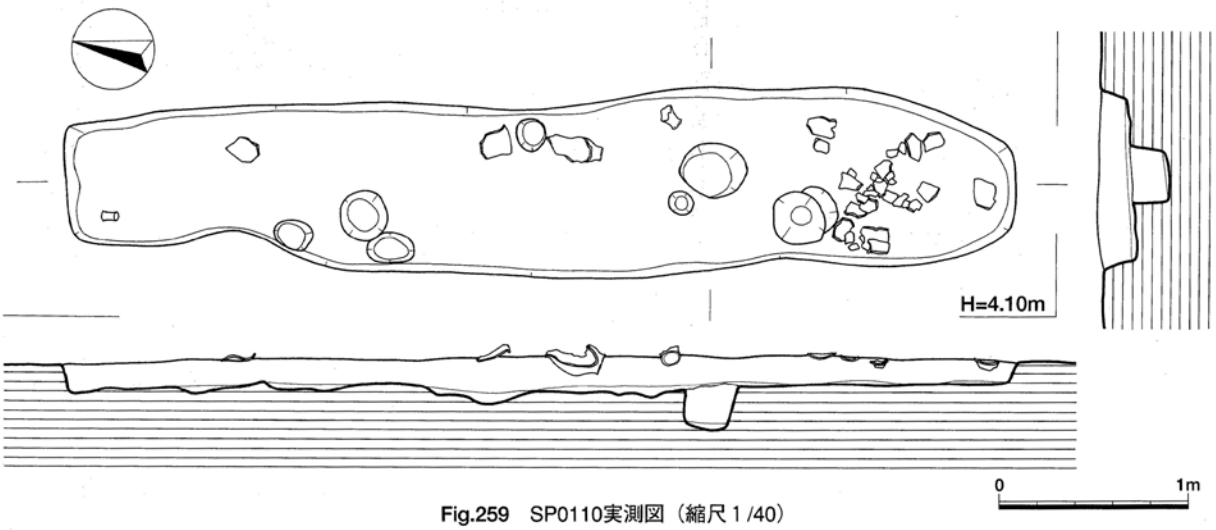


Fig.259　SP0110実測図（縮尺１/40）

入れている。6～9は壺。6は口径12.0cm、底径7.0cm、器高28.0cm。球形で大きめの胴部に内傾の強い頸部が延び、強く外湾して口縁部となる。丁寧な調整に比べると部位のバランスが悪い。口縁部と頸部は同じ厚さの器壁であるが、細い沈線を巡らせ境としている。頸部と胴部の境は明瞭な段を

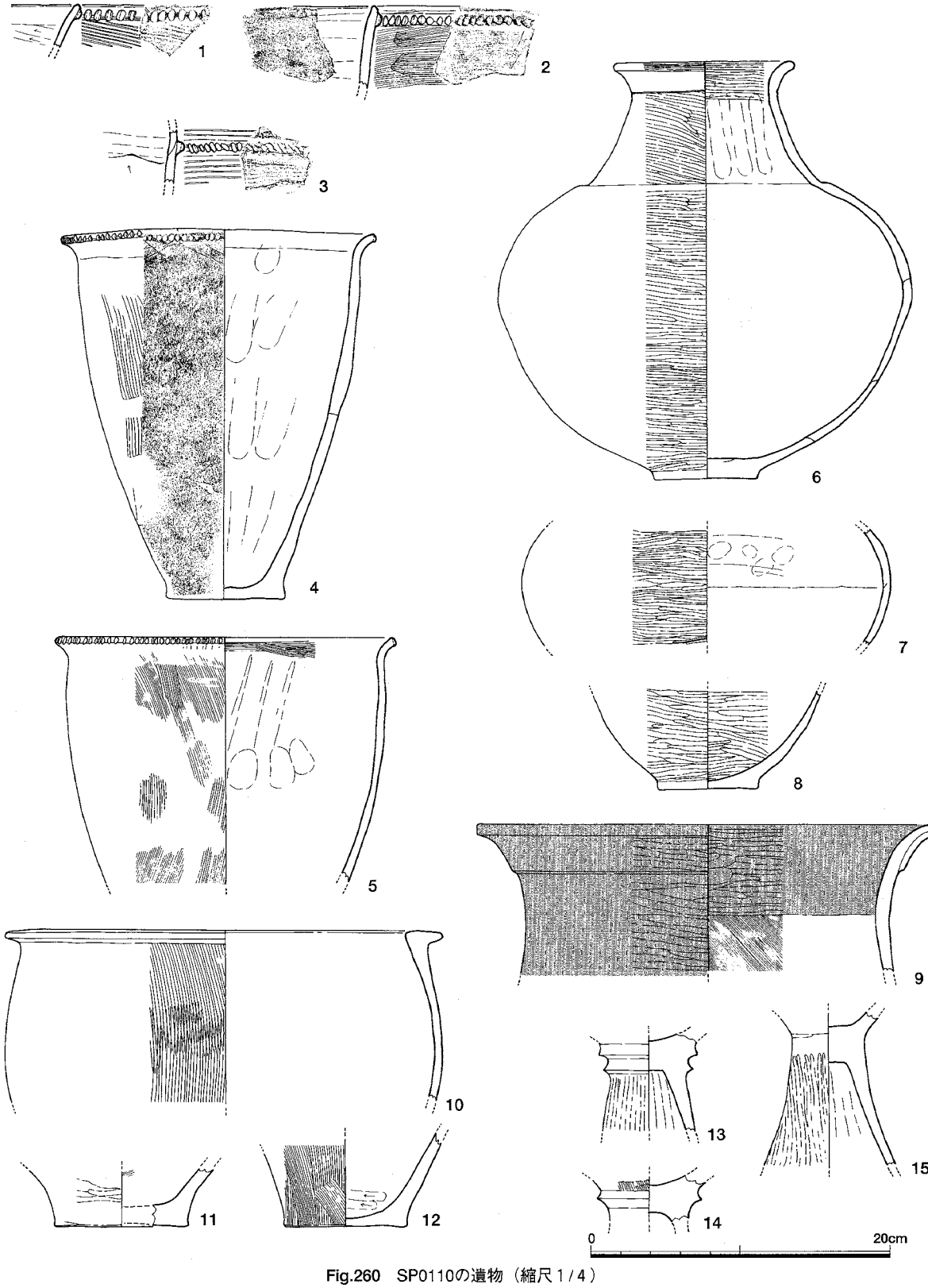


Fig.260 SP0110の遺物（縮尺1/4）

作っている。底部は円盤状に近い形状をしている。8はやや小さな壺胴部下半。内外面とも横ミガキでなめらか。器面は微妙な凹凸がある。9は口径30.6cmの中型の壺口縁部。口縁部は外側に粘土を貼り付け厚みを出し、頸部と段を付けている。内外面ともに最初に細かなハケ目を施し、その後横ミガキを加えている。胎土は精良土に近く焼成もよい。外面はやや剥離が目立つ。

第85・86・97ピットSP0085・SP0086・SP0097　北拡張区の中央、P31グリッドに大きめの土壙が集中している。中でもSP0085、SP0086、SP0097は遺物の出土量が多く、また遺構プランも明確であることからここに記述する。

第85号ピットSP0085　細長い溝状の土壙でSP0086の上に乗る。最大幅55cm、長さ342cm、深さ48cm。

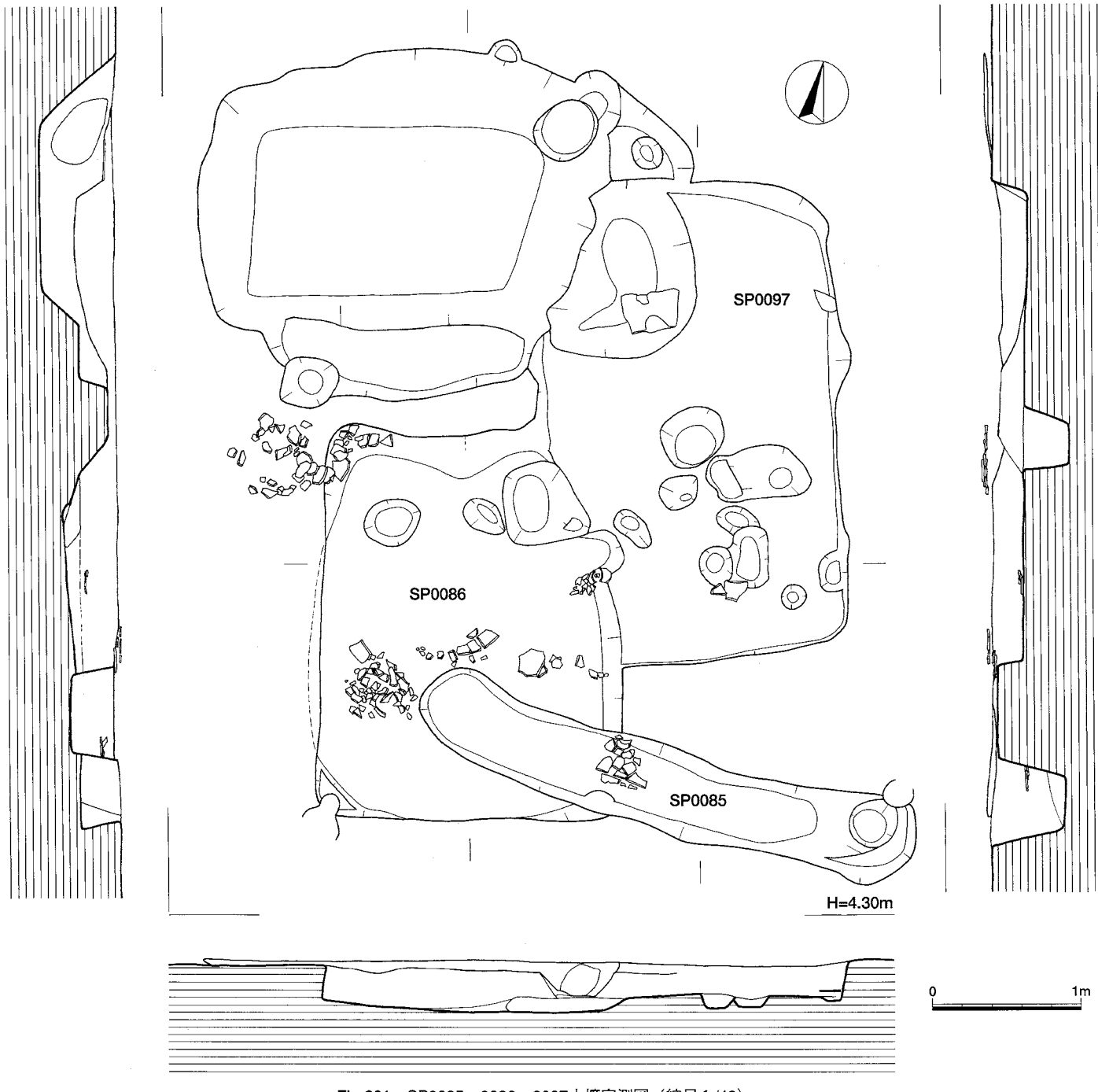


Fig.261　SP0085・0086・0097土壙実測図（縮尺1/40）

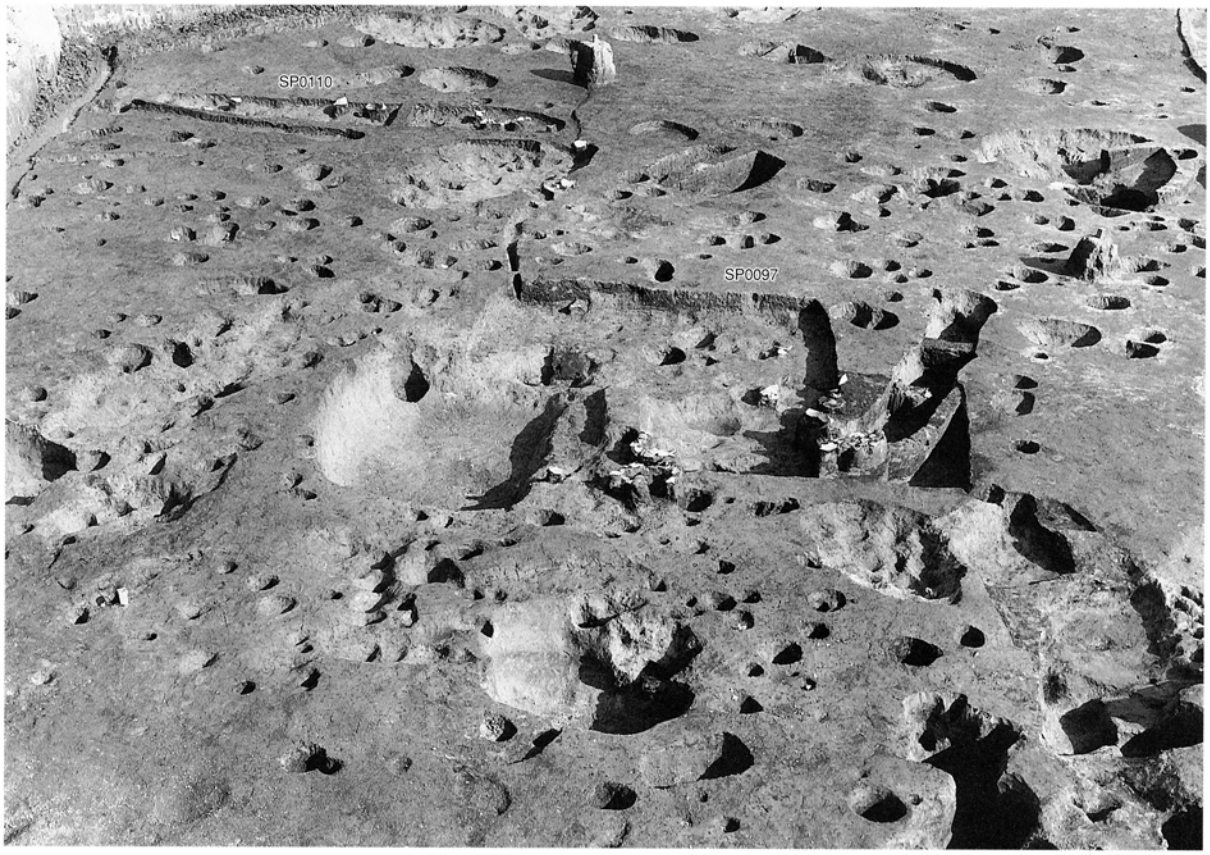


Fig.262　SP0085・SP0086・SP0097

Fig.263　SP0085・SP0086・SP0097（南東から）

出土遺物　出土量は多くないが、中央部より甕が潰れた状況で出土した。**1～5**は突帯文土器の甕口縁部。どれも細片になっている。口縁部が内傾、外傾、直立の三様がある。**5**は直線的な口縁部でわずかに外傾しており、口縁端部は小さく内側に倒れる。突帯は背の高い断面三角形で、細い棒状の工具を押さえ菱形の刻み目となっている。内外面とも横条痕で外面は部分的にナデ消している。**6～8**は如意形口縁を持つ甕。**6**は口径22.0cm、体部に張りはなく、口縁部が最大径となる。刻み目は六角形（亀甲状）で口縁上までには達していない。外面の調整は左斜行のハケ目。外面はススで茶黒色となっている。**8**は接合した完形品に復元できた。口径26.6cm、器高28.8cm、底径7.4cm。口径と器高が一致する口縁は小さく外湾するだけで断面方形におさめている。刻み目は口縁外端のみで間隔、大きさともに不揃いで粗雑。しかし器面の調整はきわめて丁寧である。体部内面はミガキ状のナデ上げ、口縁部内面は横ミガキ。外面は細かな縦ハケ目。突帯は小さな断面三角形でその上下は縦ハケ目を横ナデで消している。外面は茶色で突帯より下方は黒色となっている。実際に火にかけた結果であろう。**10**、**11**は壺。**10**は口径16.8cm、口縁部と頸部との間には沈線を１条巡らして境としているが、頸部からの湾曲は特に変わることなくスムーズに延びている。内外面と細かな横ミガキ、外面は丹塗りが施されている。**11**は胴部から頸部にかけての破片。その境には断面三角形の突帯を貼り付け、刻み目を入れている。突帯部で径27.8cm。**12**、**13**は鉢。**12**は口径25.6cm。反転部から口縁部は直に延び小さく外湾して口縁部を作っている。**13**は同じように内外面横ミガキだが体部は半球形。

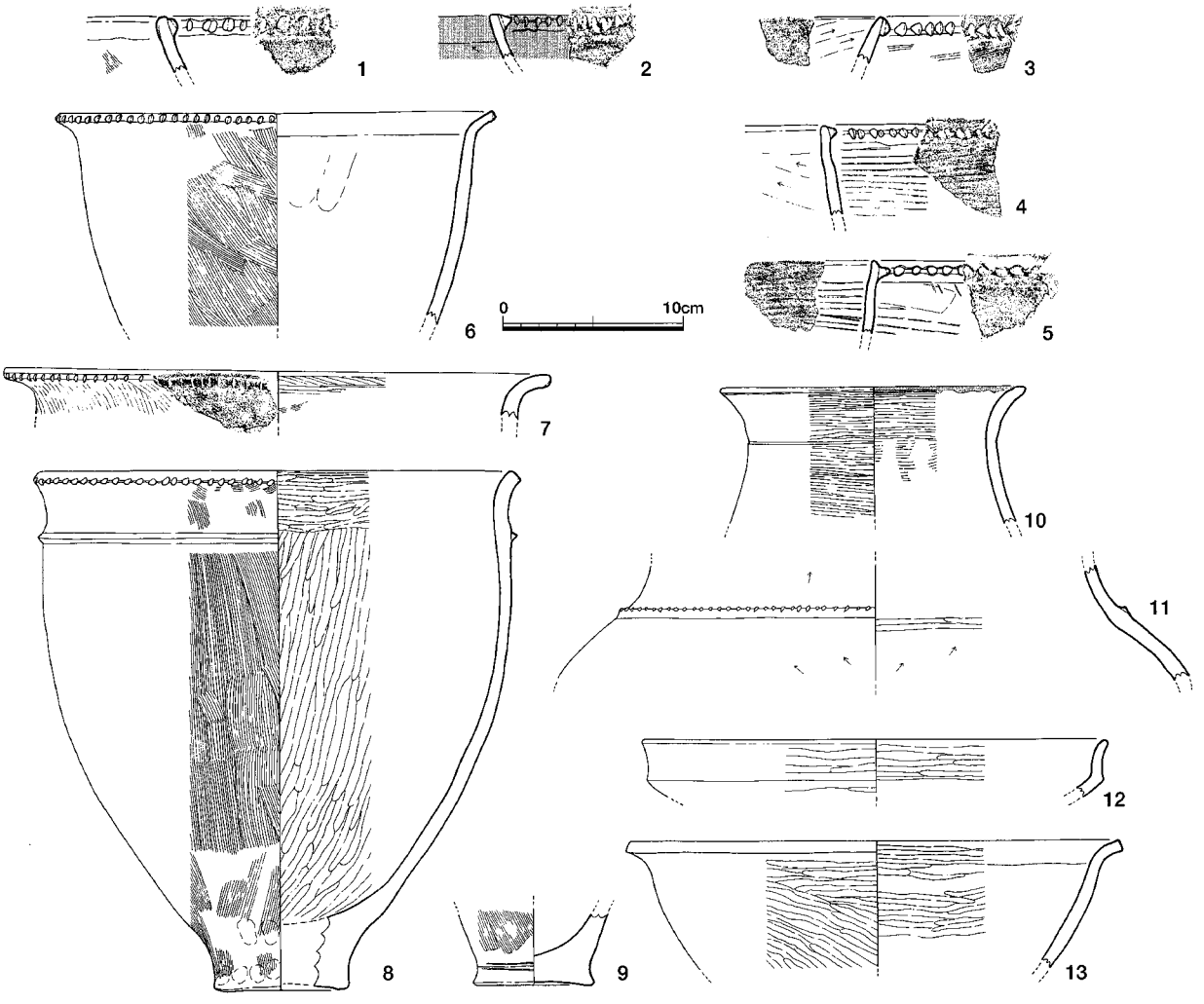


Fig.264　SP0085の遺物（縮尺１/４）

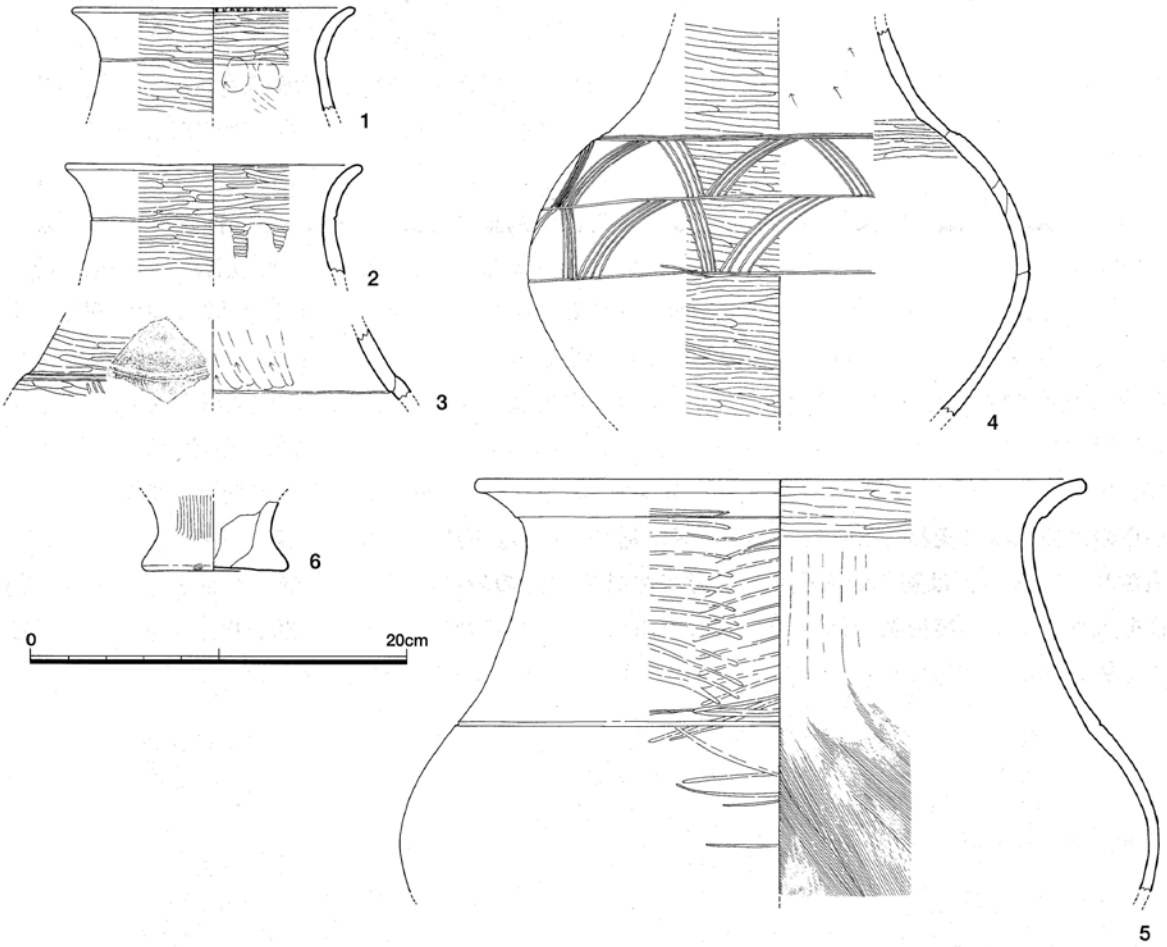


Fig.265　SP0086の遺物（縮尺1/4）

8
(SP0085)

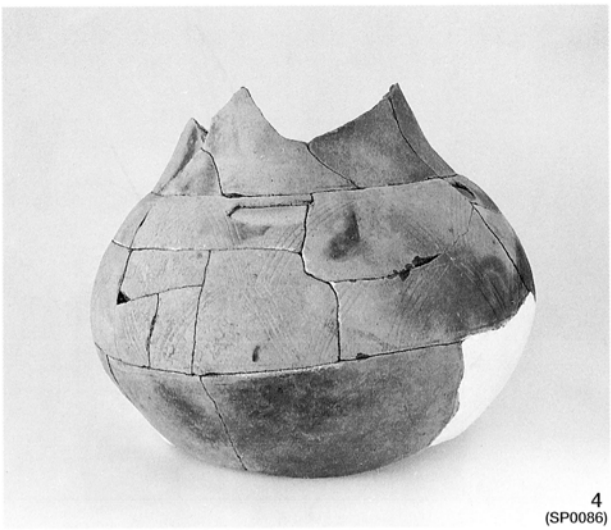

4
(SP0086)

Fig.266　SP0085・SP0086の遺物

第86号ピットSP0086　隅丸長方形の土壙で長側辺258cm、短側辺262cm、深さ33cm。長軸方位はSK124、SK125やSP0110などの遺構とほぼ一致し、計画的な配置を思わせる。壁も一部袋状になっている。

出土遺物　壙底から出土する遺物は少なく、ほとんどが埋め土の上部に集中している。図示したのは6点の土器だが内5点が壺。**1**、**2**は口径、口縁の形状、さらに調整法までよく類似しているが同一個体ではない。**1**は口径15.0cm、口縁部下方に浅い沈線を1条巡らせ頸部との境にしている。内外面とも細かな横ミガキ。口縁内端部に黒色の点状文がある。**2**は口径15.6cm、同じように横ミガキの後に口縁部と頸部との境に沈線を巡らせているが、直線ではなく波打っている。**3**は頸部下端の破片。外面は横ミガキ調整後に2条の沈線を巡らせ、さらに3本の斜行文を入れている。**4**は胴部最大径の位置が中位よりやや上方にあり、頸部との境までに2段の山形文が沈線で描かれている。頸部下

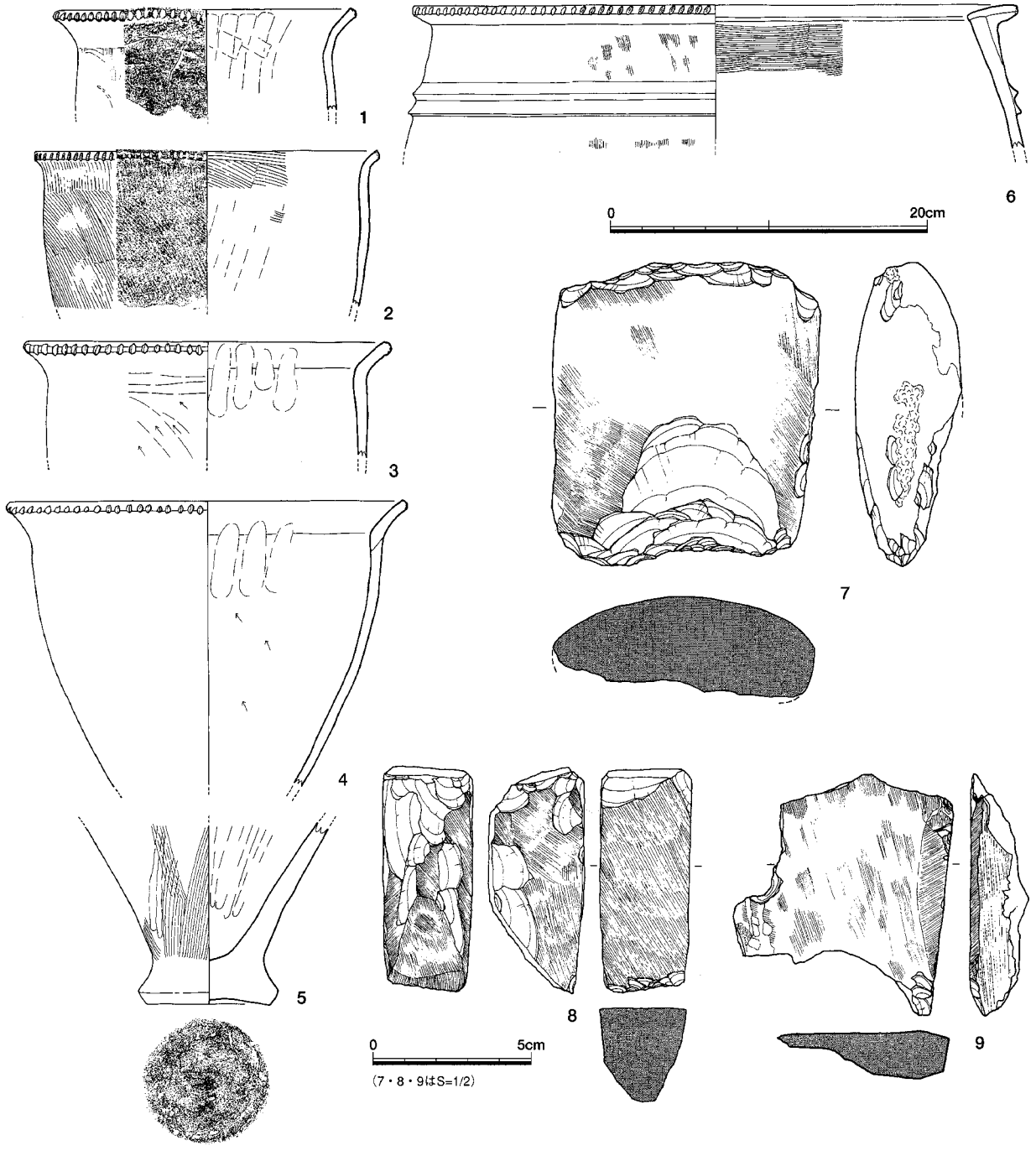


Fig.267　SP0097の遺物（縮尺1/4・1/2）

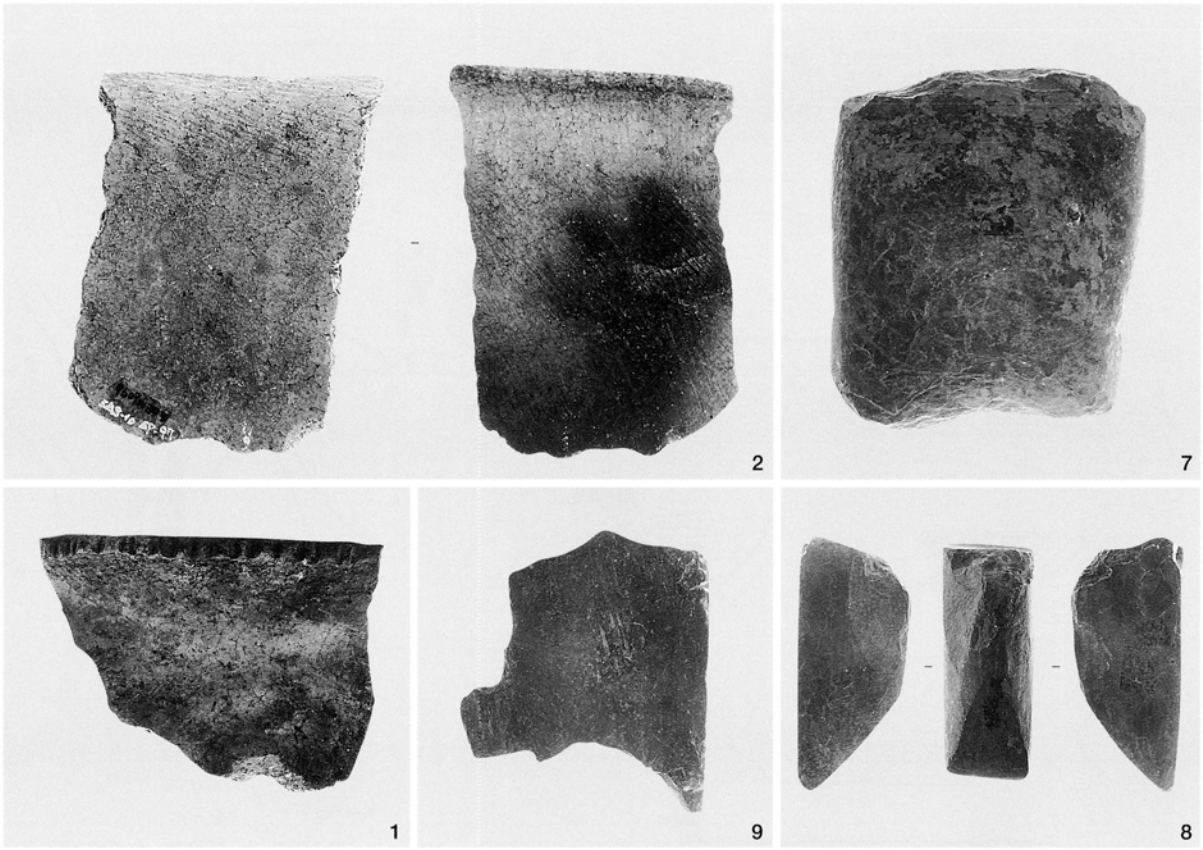


Fig.268　SP0097の遺物

端の径は18.4cm。5は口径32.4cmの大きめの壺。器壁の薄い作りで口縁部を肥厚させ段を作る。頸部と胴部の境には沈線を巡らせる。胴部内面は細かなハケ目。頸部外面は低いアーチ状の横ミガキ。

第97号ピットSP0097　SP0085より一回り大きな隅丸長方形の土壙。長側辺324cm、短側辺202cm、深さ19cm。長軸の方向はほぼ一致し北側にずれて重なっている。SP0097はさらに北西部で隅丸長方形の別の土壙が接続している。

出土遺物　弥生時代前期から中期前半の土器だけで構成されている。

土　器　1～4は如意形口縁部の甕。1は口径19.0cm、口縁部の湾曲は弱いが長く延び、端部は幅広な断面方形とする。刻み目は縦楕円形で木目が付いている。口縁上端までには至らない。内面はヘラ状工具による右上がりのナデ調整。口縁内面は強く押さえている。外面に絵画状の沈線が数か所に見られるが、工具のキズと判断した。2は口径21.6cm、口縁の湾曲は弱く延びも短い。口縁端部は下方に切り取ったような形状で木目痕のある刻み目を施している。体部はほとんど張りがなく、外面は粗いハケ目調整。3、4の口縁部は屈曲部から直線的に長く延びる共通の特徴を持っている。5は底部は体部との境がよく締まり、底部外縁の張り出しも強いが、外底はわずかに凹んでいるに過ぎない。6は口径38.0cm、内傾するＬ字形口縁で、外端部の刻み目は縦楕円形で木目が付いている。口縁部下方の突帯は２条の断面三角形が接し口唇状となっている。外面の調整は、縦ハケ目→突帯貼り付け→横ナデの順。

石製品　7は磨製石斧。側縁がほぼ平行する形状で、断面も厚みのないレンズ状。8は柱状片刃石斧。基端面が折れて全形不明だが、前後の主面と左右の側面ともよく研磨されている。9は砥石。剥離しているが、断面長方形だったのだろう。上面、側面が研ぎ面として使用されている。

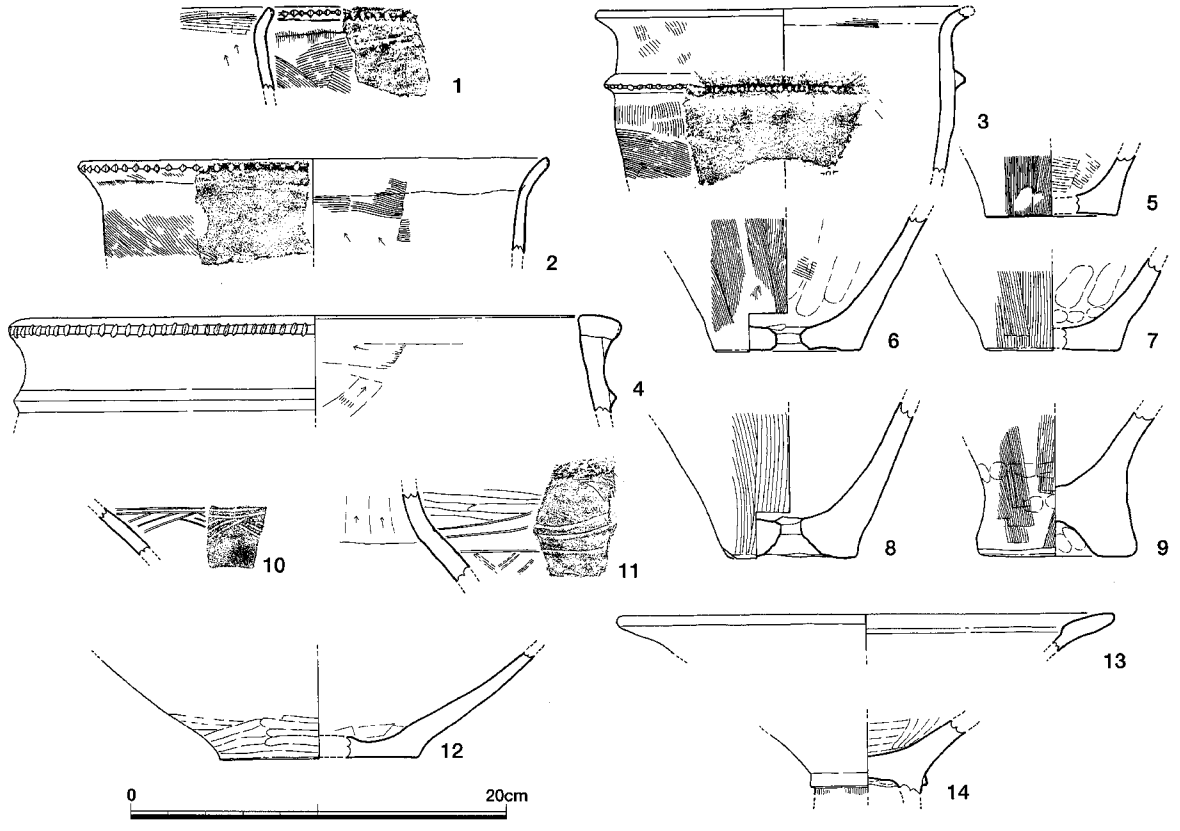


Fig.269　SP0136の遺物（縮尺1/4）

第136号ピットSP0136　P31グリッドにあるいびつな隅丸方形の土壙。127cm×79cm、深さ20cm。

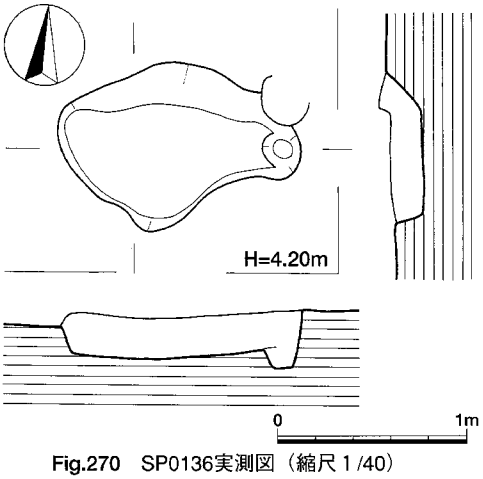


Fig.270　SP0136実測図（縮尺1/40）

出土遺物　弥生時代中期初頭前後の土器が出土した。**1**～**3**は如意形口縁の甕。**1**、**2**の口縁部は如意形の湾曲とは言い難いほど湾曲が弱い。2点とも口縁部下端に刻み目を施している。**2**は口径25.0cm、菱形の刻み目は左方向より切り込んでいる。外面は細かなハケ目調整で口縁部は横ナデを加えている。**3**は体部に断面三角形突帯を持ち、口縁端部は欠損し確かめられないが突帯には刻み目を施す。**4**は口径32.4cm、体部上端に厚みのある粘土板を乗せ、さらに下方から支えの粘土を当てて断面三角形の口縁部を作っている。口縁部下方の突帯は丁寧な横ナデで三角形の頂点はシャープである。口縁端部の刻み目は浅いが、木目が付き等間隔に刻まれている。**5**～**9**は甕の底部。平底と上げ底の2種がある。**6**、**8**は平底の中央部を穿孔している。2点とも焼成後の穿孔で正円ではない。**10**～**12**は壺。**10**は沈線で山形文を描いているが、左斜行線→右斜行線→上部の2条沈線の順に施文している。精良土の胎土で焼成もよい。器面は丁寧な横ミガキで滑らかである。**11**は頸部と胴部の接合部破片。全体が分からないが面白い文様である。頸部と胴部との境に巡っている3本の沈線は、通常は境を平行に巡るが、上2本の沈線は上方にカーブしている。また沈線下方は山形文のように見えるが、沈線ではなく、浅いナデである。**12**の壺底部は円盤状ではなく、そのまま大きく開き胴部となる。**13**は高坏、口径26.4cm。内面の調整は丁寧でなめらかであるが、外面は剥離し調整不明。胎土は小

砂粒を含み、緻密ではない。内外面とも茶褐色。口縁部の小破片のために傾き、口径ともに不正確。
14は高坏の坏部と脚柱部の接合部。境に小さな断面三角形突帯を貼り付けている。刻み目はない。脚柱部は縦ハケ目調整。坏部内外面は細いヘラ状工具によるナデ、内面はミガキ状になっている。

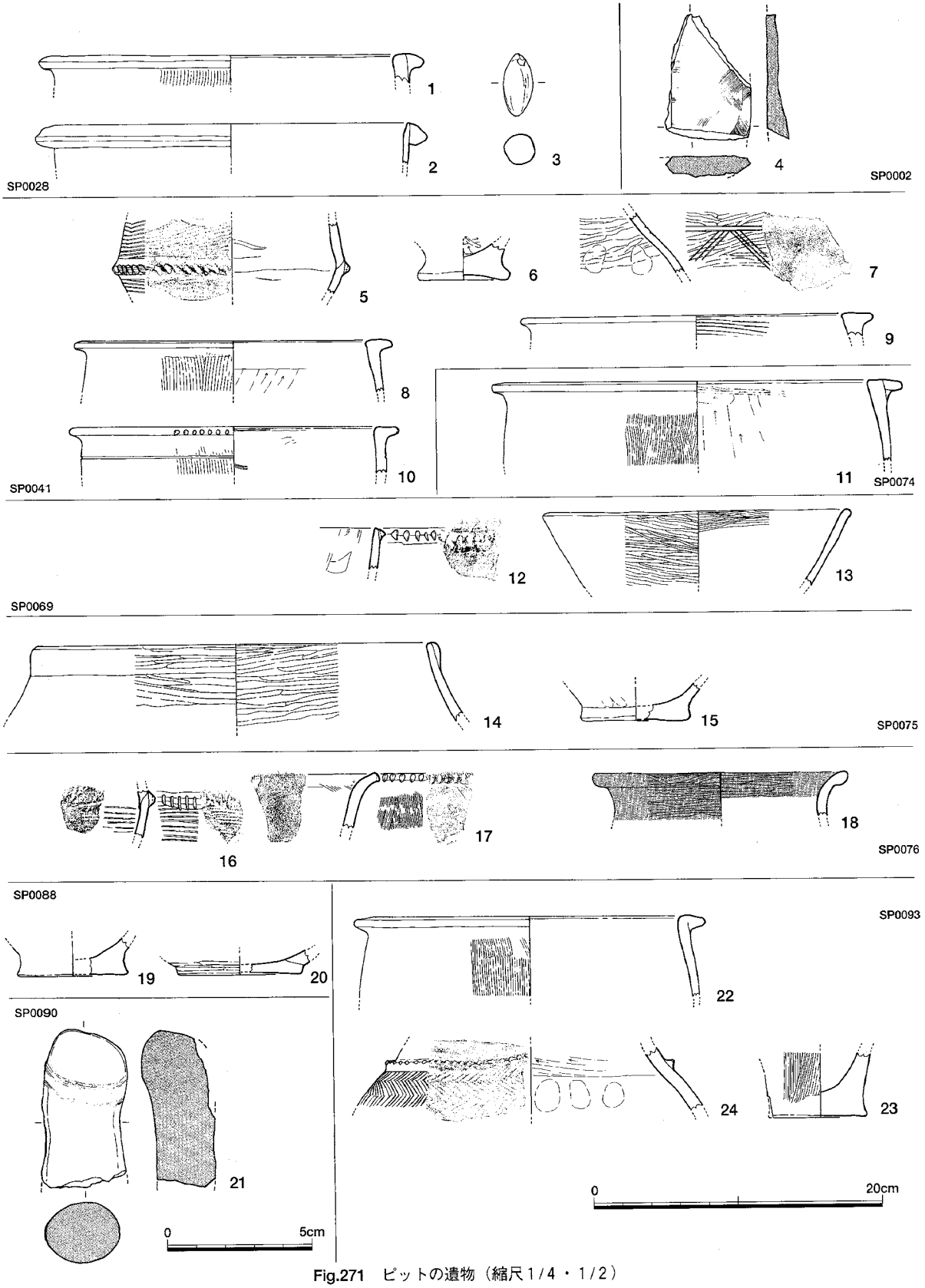


Fig.271　ピットの遺物（縮尺1/4・1/2）

ピット　発掘現場では土壙とピットの遺構名を使い、遺構番号を付け、実測作業や遺物の取り上げ作業を行ったが、両遺構の区別はおおむね直径30cmを境にして大きい落ち込みを土壙とし、小さな穴をピットと使い分けた。しかし厳密に測定しながら区別したわけではない。きわめて曖昧な視覚的なもので、ピットであっても遺物の特殊性や出土量に応じて土壙の遺構名を付けた場合がある。本来は遺構の機能、用途など目的を明らかにして遺構名を決定すべきだが、大概は自然作用によるのか、人工的なものかさえも見分けがつかないことが多い。もちろん柱根が残り明らかに柱穴と判断できるものもある。またその一帯の遺構は配置や時期を決める上で重要なものもあり、これらの出土遺物は可能な限り実測した。

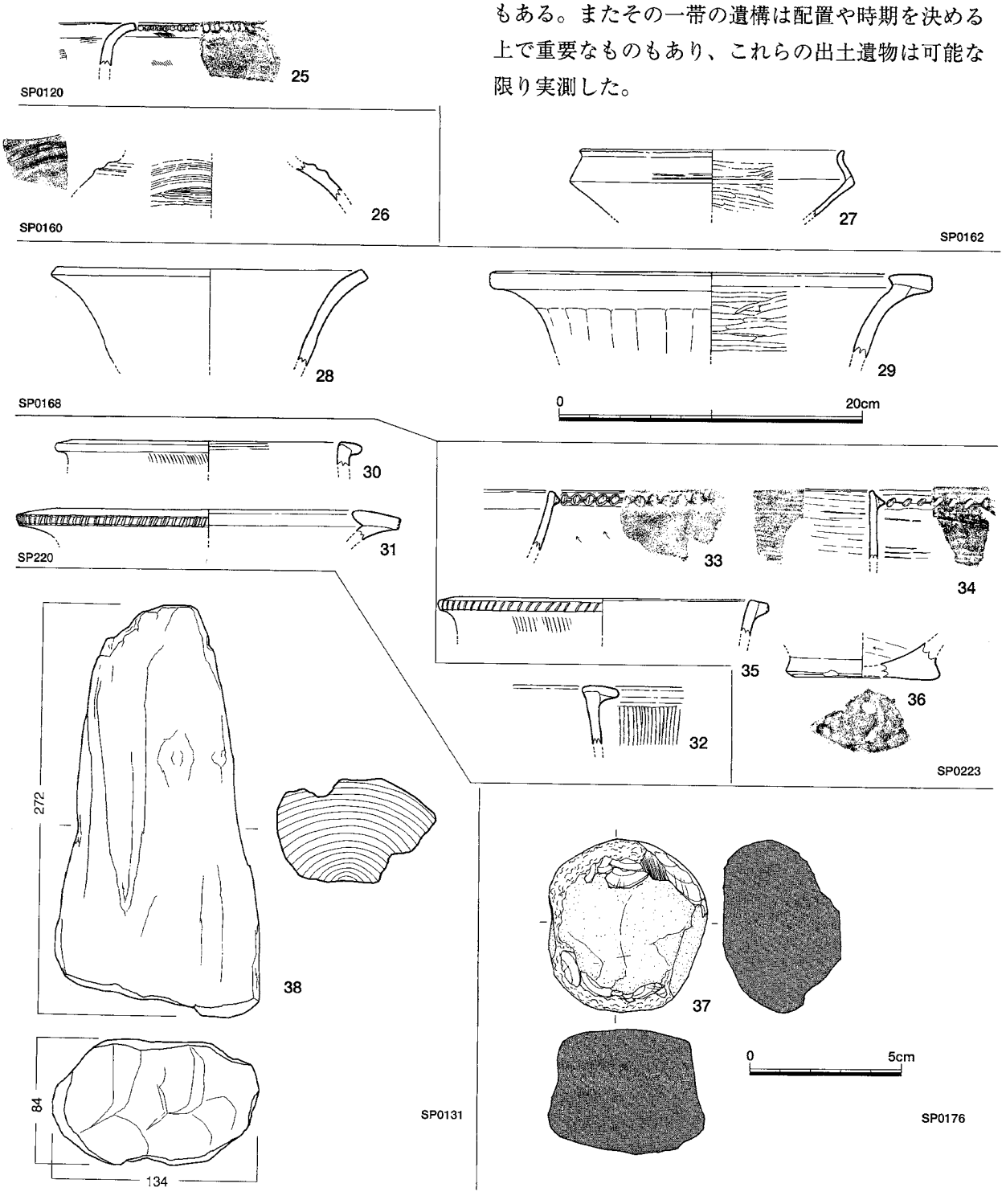


Fig.272　ピットの遺物（縮尺1/4・1/2）

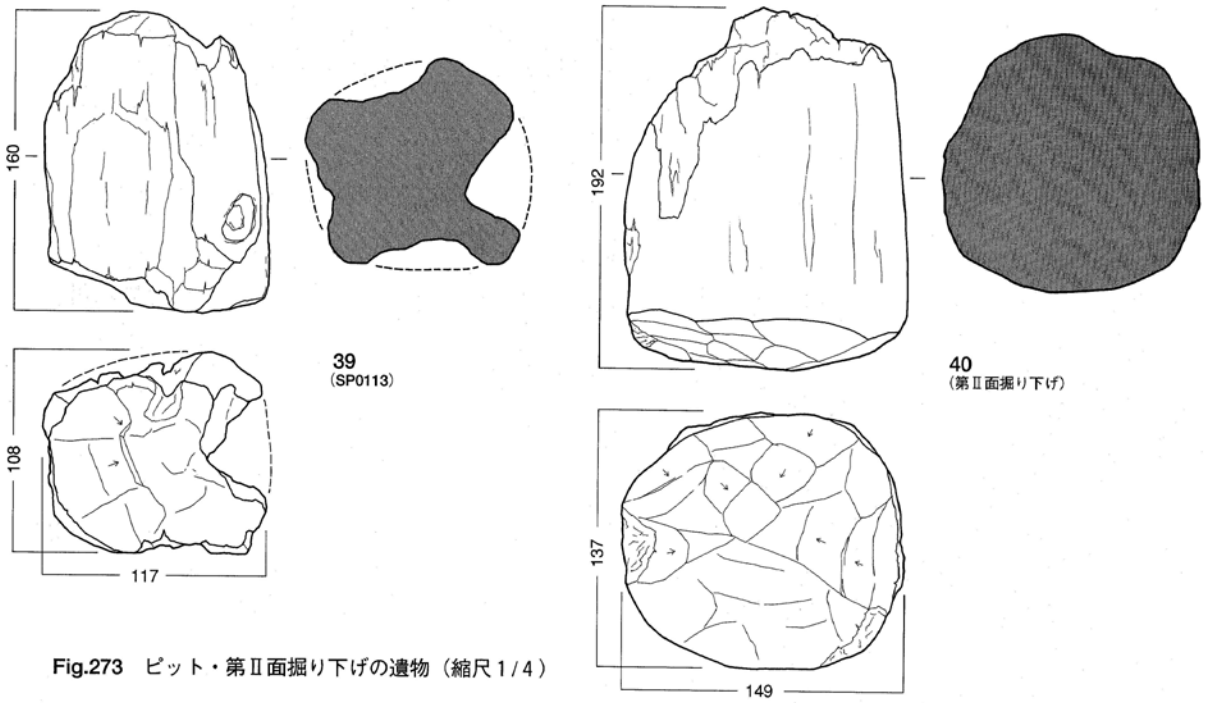


Fig.273 ピット・第Ⅱ面掘り下げの遺物（縮尺1/4）

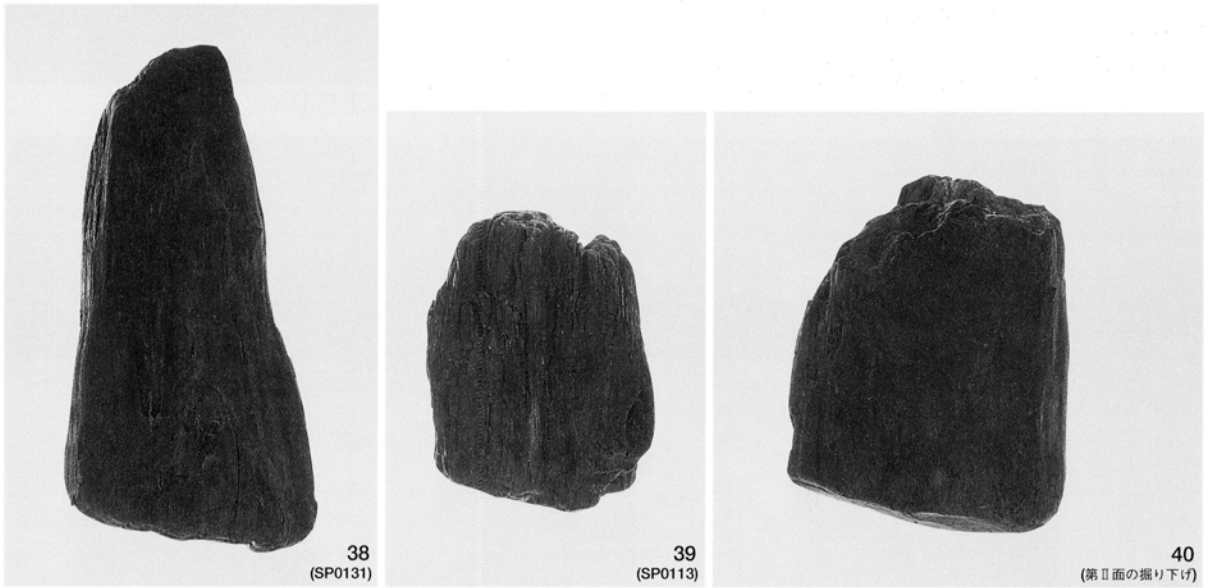


Fig.274 ピット・第Ⅱ面掘り下げの遺物

出土遺物 北拡張区の西寄りに大小さまざまなピットが集中している。遺物はピットの大小に関わらずほとんどから出土している。出土した土器の年代は、突帯文土器から弥生時代中期中頃までに限られ柱根もこの時期の間に入るものと思われる。ここでは柱根のみについて記述する。**38**はSP0131より出土、広葉樹の芯抜き材で、断面楕円形。底面に斜めの切断面が残っている。全面に鉄分が錆びたように付着しており、長く水分の多い地層にあったことを示している。上部は腐食が進んでいる。このような加工、形状から柱根の可能性は強いが、周辺には相対するピットはなく1棟の建物としては把握できなかった。**39**はSP0113出土、広葉樹の芯持ち材、底面はやや凸状に削っている。削り痕は大きいが腐食が進み明瞭ではない。**40**は直径も大きく、底面の削り痕は方向も観察できる。広葉樹の芯持ち材。以上3点の樹種は同定を済ませていない。

第6節 第Ⅳ面（弥生時代前期～早期）の調査

1．概 要

平成7年に実施した試掘や発掘着手後に再確認のために設定した土層トレンチによると黒色粘質土の直下には青灰色粘質土があり、遺物の包含がなく、また遺構の落ち込みも認められないことから青灰色粘質土第10次調査区の基盤（地山）と判断していた。このため青灰色粘質土まで掘り下げ、だめ押しの意味で上部からの掘り残した遺構を記録することによって、第10次調査を完了しようと計画していた。ところが黒色粘質土の最下部で検出した弥生時代前期の竪穴住居跡SC07の周辺を清掃していると青灰色粘質土面に溝状にかすかに土色が異なる部分があることに気が付いた。当初は遺構は存在しないという先入観が影響して、樹木の根や風倒木など自然の痕跡と注意しなかった。ところがSC07の南東側に拡がる土壙群の

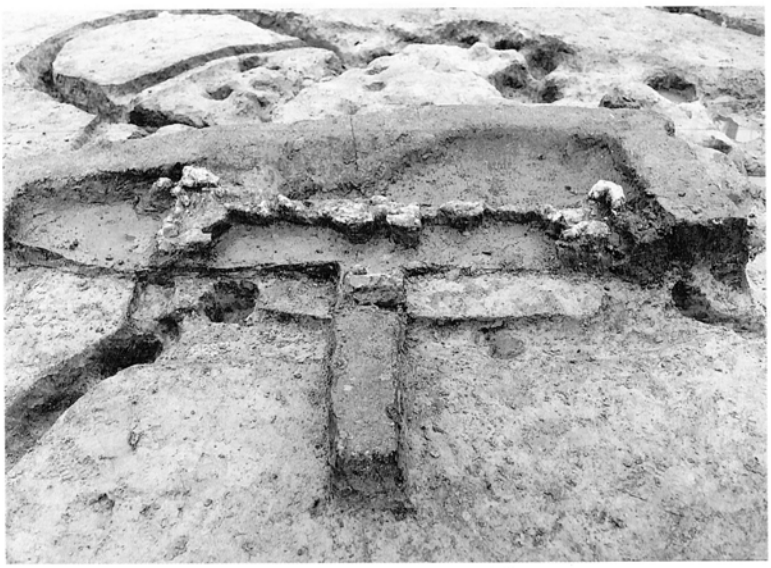


Fig.275 SA01下の円形溝

Fig.276 円形溝全景

掘り下げ部でも、同じような溝状の遺構が断続的に見つかり始めた。木棺墓SA01では壙底の下に潜り込み、SC07は壁に切られ、明らかに時期の古い遺構が存在する可能性が高まった。おそらく日本で最初の経験（最初の発見は昭和51年の博多区板付遺跡か）であることから、果たして人工的な遺構かどうか、時期が判断できるか、そして用途が明らかにできるかなど発掘作業員の皆さんにも発掘の目的や疑問点などを説明、徹底して慎重な発掘作業を行った。

2．円形溝（SS）

この結果、図示したようにP29グリッドから025グリッドまでの約130㎡の中に分布している事が分かった。これより南東側は、全体図に示したように青灰色粘質土が途切れ砂層になるために、青灰色粘質土のある微高地を選んだ遺構と言うことができる。直径約2.2m、溝幅約15cm、深さは10cm前後の溝状で、その壙底には小さなピットが間隔を置いて並んでいる場合もある。これらは上部遺構から何度も切られ全形を留めているものは少ないが、残った溝を辿ると円形か隅丸長方形のプランであったと推測できる。土器も細片ながら出土し、平面プランの規格性、溝の掘削の仕方などから明らかに人工的な遺構であることが判明した。その大きさがある程度分かるものについて記述するが、発見時には遺構の性格については想像もできず、遺構名称について苦慮することになった。今後、発見例が増加し、その性格も究明された時にあらためて適当な遺構名を付けることにして、円形だけでなく隅丸長方形もあるが性格不明という意味を込めてあえて円形溝と呼ぶことにする。

出土遺物　円形溝SS01～SS10付近は、上部に土壙がいくつも重なり、これら土壙を掘り終わると、浅い窪地状になり、円形溝との間には均一ではないがわずかに薄い黒色粘質土が被さっている。遺物はこの間層からも出土し、円形溝の下限を示す可能性があることから、どんな細片でも見逃さないように注意して取り上げた。また各円形溝は削平を受けているためか、その内側で遺物が出土することはなく、溝中で8点の土器片が出土したに過ぎない。遺構の

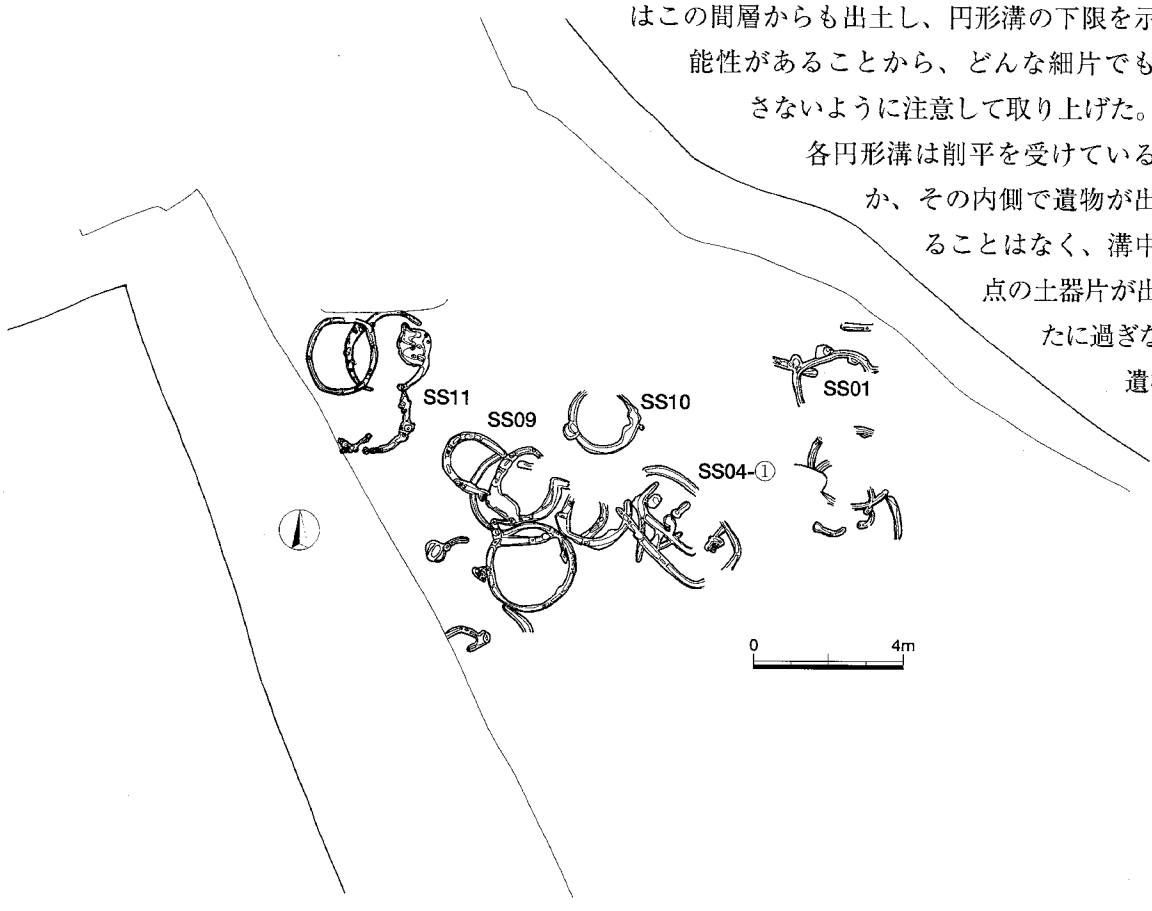


Fig.277　円形溝分布図（縮尺1/100）

数の多さに比べると、出土遺物の数量は極端に少なく、かつ少量であることは、逆に円形溝の性格を示すものであろう。次ぎに上部と溝中出土の遺物についてまとめて記す。

上部の遺物　**1**～**3**はSS02、SS03上部出土の突帯文土器。**1**は口径21.0cm、体部上半が内傾し、口縁部には断面三角形の突帯を貼り付け、その上面を平坦に作っている。体部の突帯と同じように右方向からの刻み目。通常この突帯部で反転することが多いが、まだ下方に延びており、体部下半の器形不明。器形の特異さとともに器面の調整も特徴がある。外面の調整は、細かい横ハケ目だが先に叩き状に左斜行の強いナデ（擦刷痕）を加えている。内面は横ハケ目で一部ナデ消している。**2**は3cmに足りないような小破片。鉢としたが傾き不正確。口縁部で屈曲し、外面は横ミガキ。器面の色調は外面が赤茶色、内面は灰黒色。焼成はよく胎土に小砂粒をわずかに含んでいる。**4**～**8**はSS07～SS09上部出土。**4**は直立する口縁部に低い断面台形の突帯を貼り付けて横ナデ。刻み目は棒状工具で浅く幅広の楕円形となっている。**5**の口縁部はわずかに外湾する。口縁部突帯は断面三角形で上面が平坦に近い。刻み目は雑で不揃い。**6**は底径8.0cm、上げ底で外縁への張り出しが強い。体部外面は左上がりの条痕。内面にも部分的に横条痕。

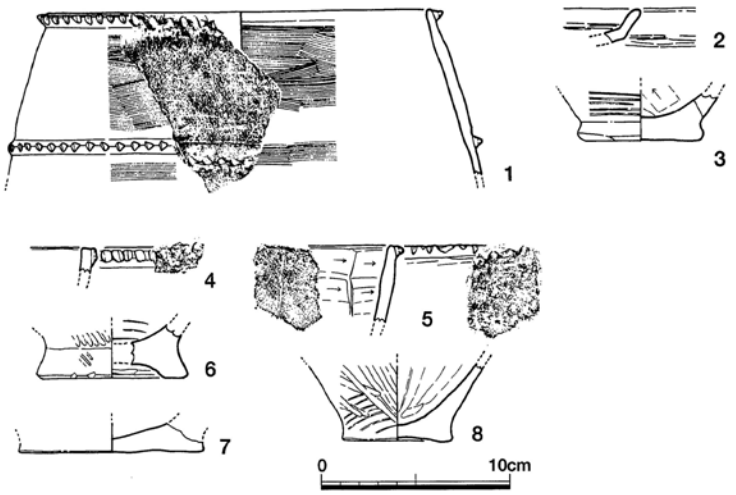


Fig.278　円形溝上部の遺物（縮尺1/4）

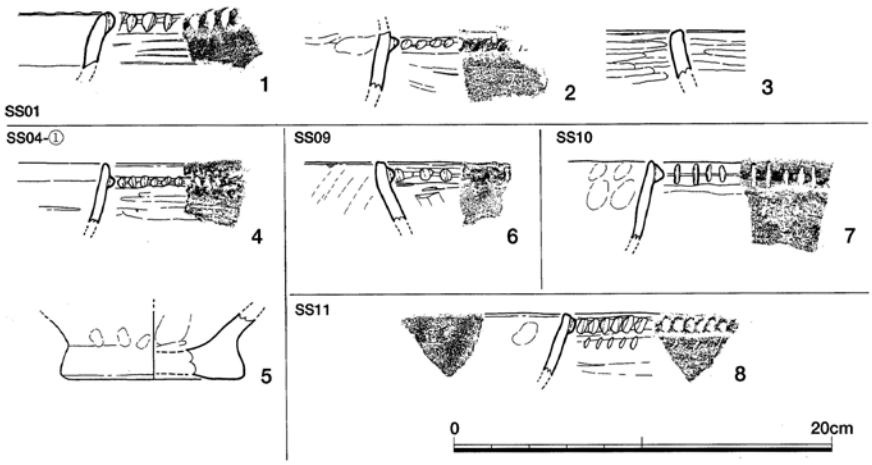


Fig.279　SS01～SS14の遺物（縮尺1/4）

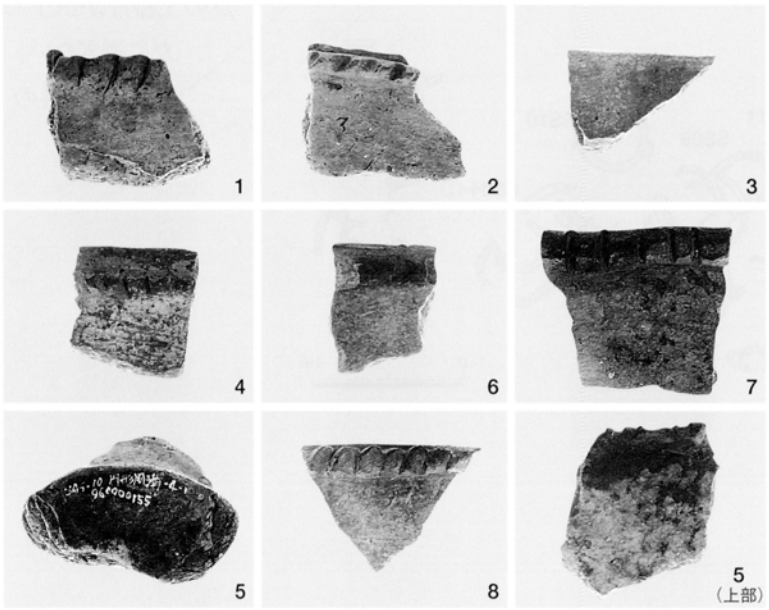


Fig.280　SS01～SS14の遺物

7は体部接合部で剥離している。径12.0cmの平底で外底まで丁寧なナデ調整が行われ、滑らかな器面になっている。胎土は1㎜大の砂粒を含み精良土ではないが、きめ細かく密。壺の底部であろう。**8**は底径5.8cm、平底の底部から体部はわずかに外湾しながら外反する。外面の調整は横条痕の後にヘラ状工具でナデ上げ。高温焼成で外面は赤茶色、内面は灰茶色。

溝中の遺物　**1**～**3**はSS01出土。**1**の口縁部の突帯は断面蒲鉾形でやや口縁部に覆い被さるような貼り付けとなっている。刻み目は左方向から。突帯の下方でやや屈曲しており鉢になるか。外面は横条痕、内面は粗い横ナデ調整。**2**は甕の反転部破片。内面は強く横ナデして凹んでいるが屈曲はほとんどない。刻み目は右方向から入れる。**3**は鉢の口縁部、内外面とも横ミガキだが滑らかでなく、光沢もない。**4**、**5**はSS04出土。**4**の色調は黒褐色、砂粒少なく堅い焼成となっている。口縁端部は丸みのある断面で、突帯は下方に離れて貼り付けている。左方向からの刻み目は鋭利だが均一でなく粗雑である。内外面とも粗い擦刷痕。**5**は径9.6cmの底部。外縁への張り出しは弱く、外底はわずかに凹んでいる。内面はヘラ状工具で押さえ、外面はナデ調整。外面は赤茶色、内面は灰茶色。**6**はSS09出土。内傾する体部は口縁部で小さく屈曲し立ち上がる。低い断面

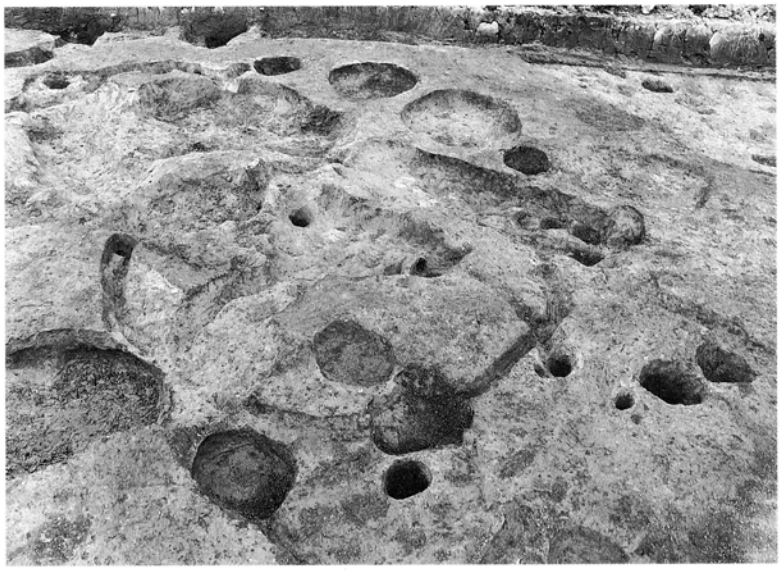


Fig.281　SS01～SS03

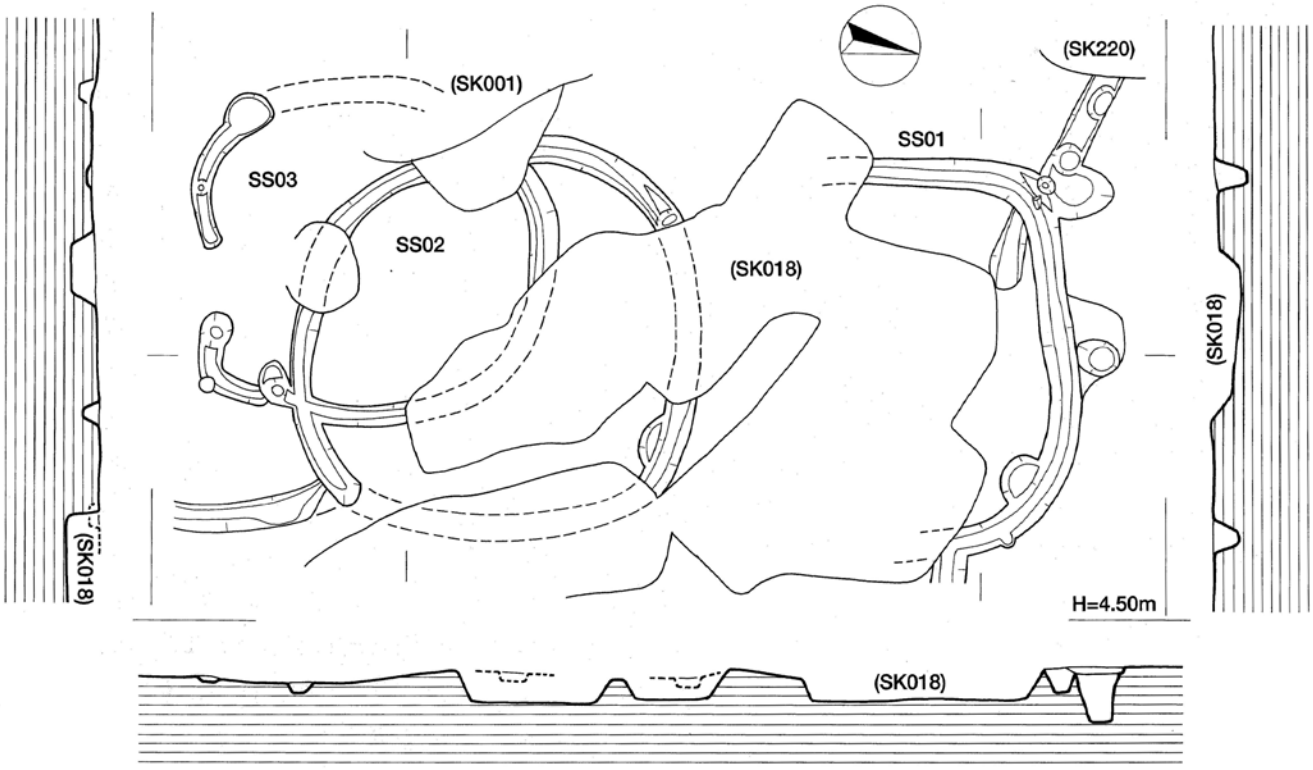


Fig.282　SS01～SS03実測図（縮尺1/40）

三角形突帯は、口縁端部から離れて巡っている。刻み目は右方向からで頂部が潰れている。内面は右斜行のナデ調整。**7**はSS10出土。直線的に外反する体部は、微妙な凹凸がある。口縁部の断面は丸みがあり、やや厚みのある断面三角形突帯が接して貼り付けられている。刻み目は縦に細長く深い。内面は指押さえの後に横ナデ調整。**8**はSS11出土。口縁端部の断面は方形で、突帯は背の低い台形で、刻み目は鋭く下方の体部まで付いている。外面は横ナデ、内面はナデ。

第１～３号円形溝SS01～03　P27グリッドの東よりに位置する。上部にSK004、SK018などの土壙があり、途切れているが、断片的ながら少なくとも３基が重なっていることが分かる。切り合いの先後関係は不明。

SS01は隅丸方形と思われるが全形を復元できない。SS02は217㎝×215㎝の不整円形。溝は最大幅14㎝、深さは８㎝。SS03も不整円形で南側はやや角張っている。

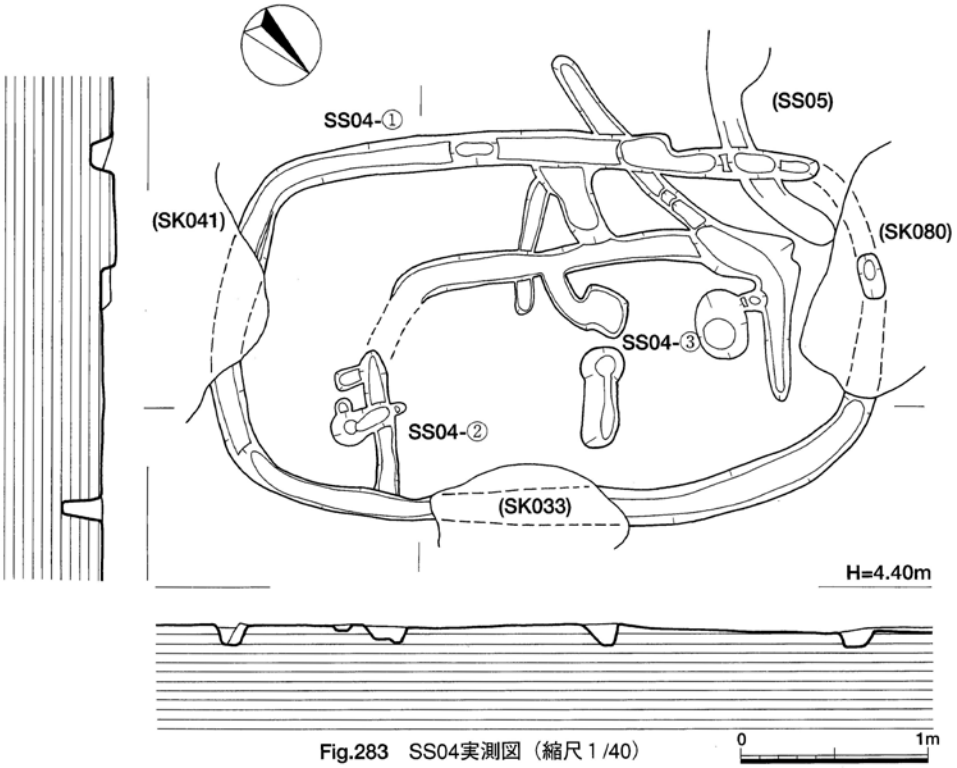


Fig.283　SS04実測図（縮尺１/40）

Fig.284　SS04

南北軸190cm、東西軸185cm、溝の幅や深さなどはSS02と大きな違いはない。

第4号円形溝SS04 隅丸長方形のプランで352cm×210cmを測る。東側辺はSK004に切られ、北西隅はSS05と重なっている。溝の最大幅は18cm、断面逆台形に掘り込まれ17cmと深い。壙底は平坦ではないが小ピットはない。内側には同じような長軸方向の溝があるが、延長部を辿ることができない。

第5・10号円形溝SS05・SS10 SS05はP27グリッドに位置し、SS04の西に隣接している。北側がSK080に切られ南西部だけが残っている。その湾曲から直径210cm前後と推定した。溝の幅の14cm。深さ13cm。溝の中には1個だけ小ピットがある。

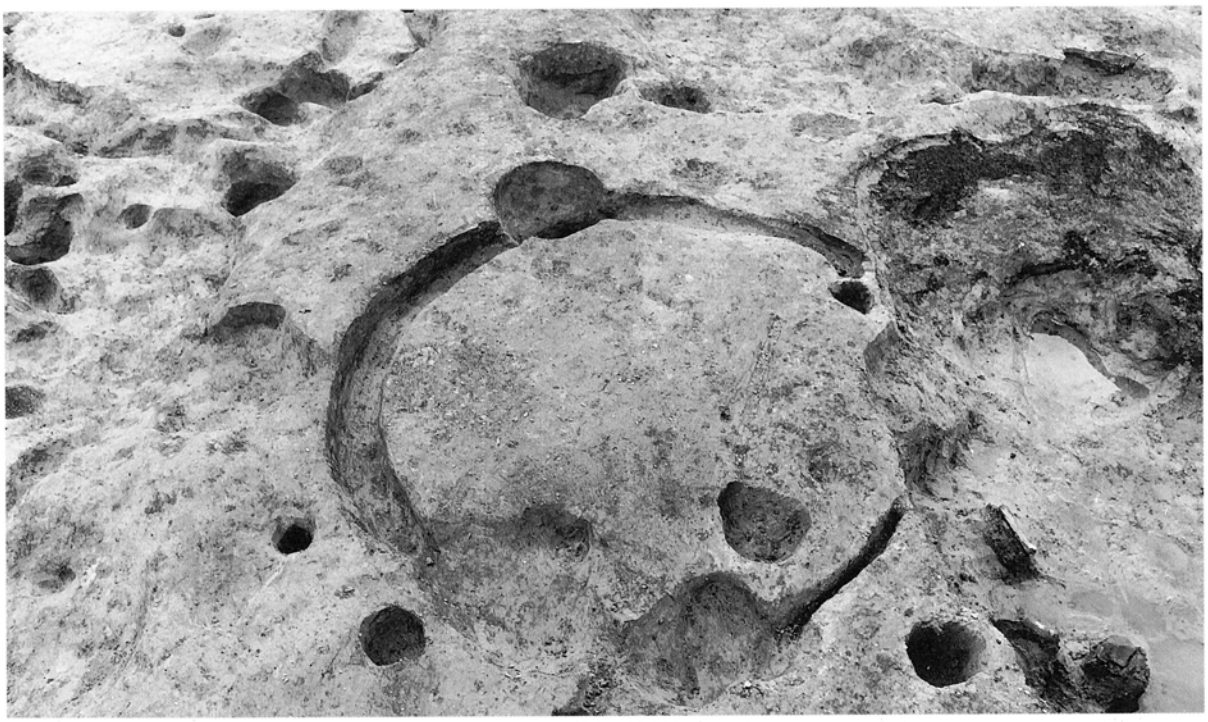


Fig.285 SS10

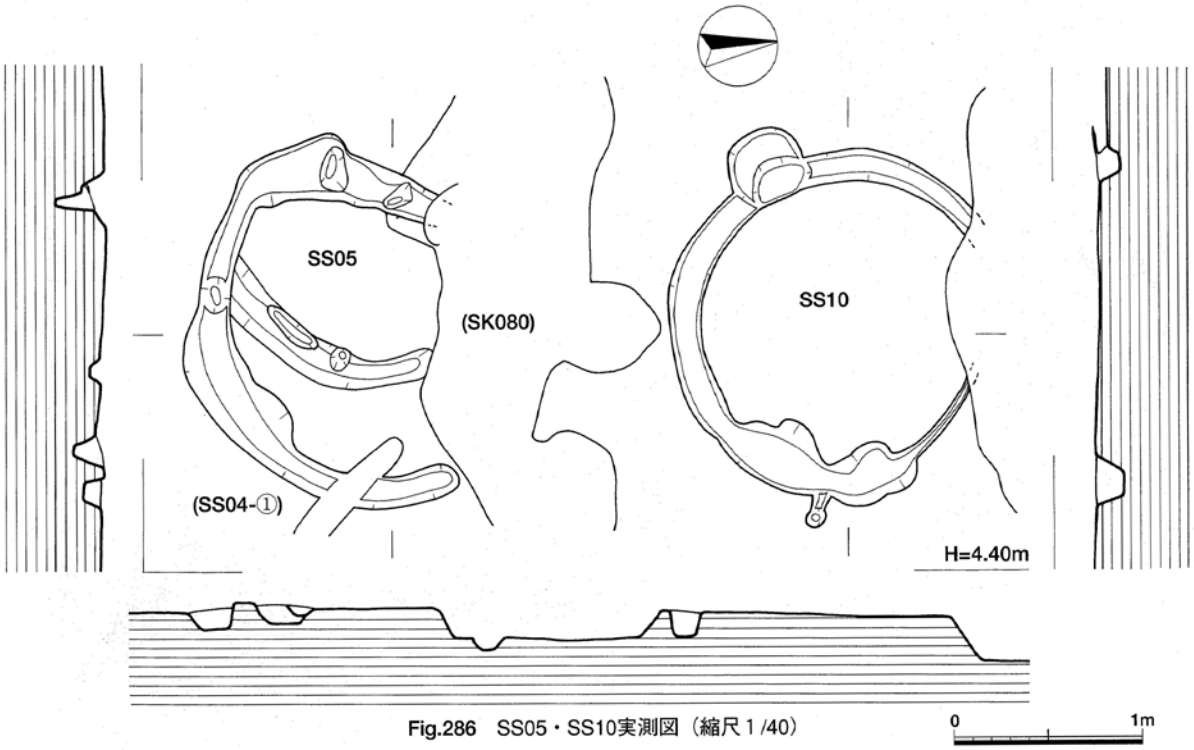


Fig.286 SS05・SS10実測図（縮尺1/40）

SS10は175cm×183cmでほぼ正円に近い。北側を土壙に切られている。溝の幅は16cm。深さ12cm。

第6～9号円形溝SS06～SS09 P28グリッドに4基が集中しており、南側から6、7、8、9と順に遺構番号を付けた。SS06の南側は青灰色粘質土が途切れている。SS06は木棺墓SA01の下部で検出した。232cm×238cmで、溝は正円に巡っている。北側部では直線的な溝が重なっているが、ほぼ原形をとどめている。溝幅は一定し約18cm、深さは約13cm、壙底には小ピットが数個認められる。SS07～09はSS06の北側で重なっている。SS07は東西に長い楕円形で240cm×220cm。溝の幅は東側が幅広く、西側になるに従い狭まっている。壙底も東側が約10cm深い。SS08はSS07内側の溝を呼んだが連続しないので全形不明。壙底には楕円形の小ピットが並んでいる。SS09は4基の中では最も北西部にある。南西側が開いているのでU字形となっている。溝の幅は約20cm、深さ18cmの壙底にはさらに深さ10cm程の小ピットが間隔を置いて並んでいる。

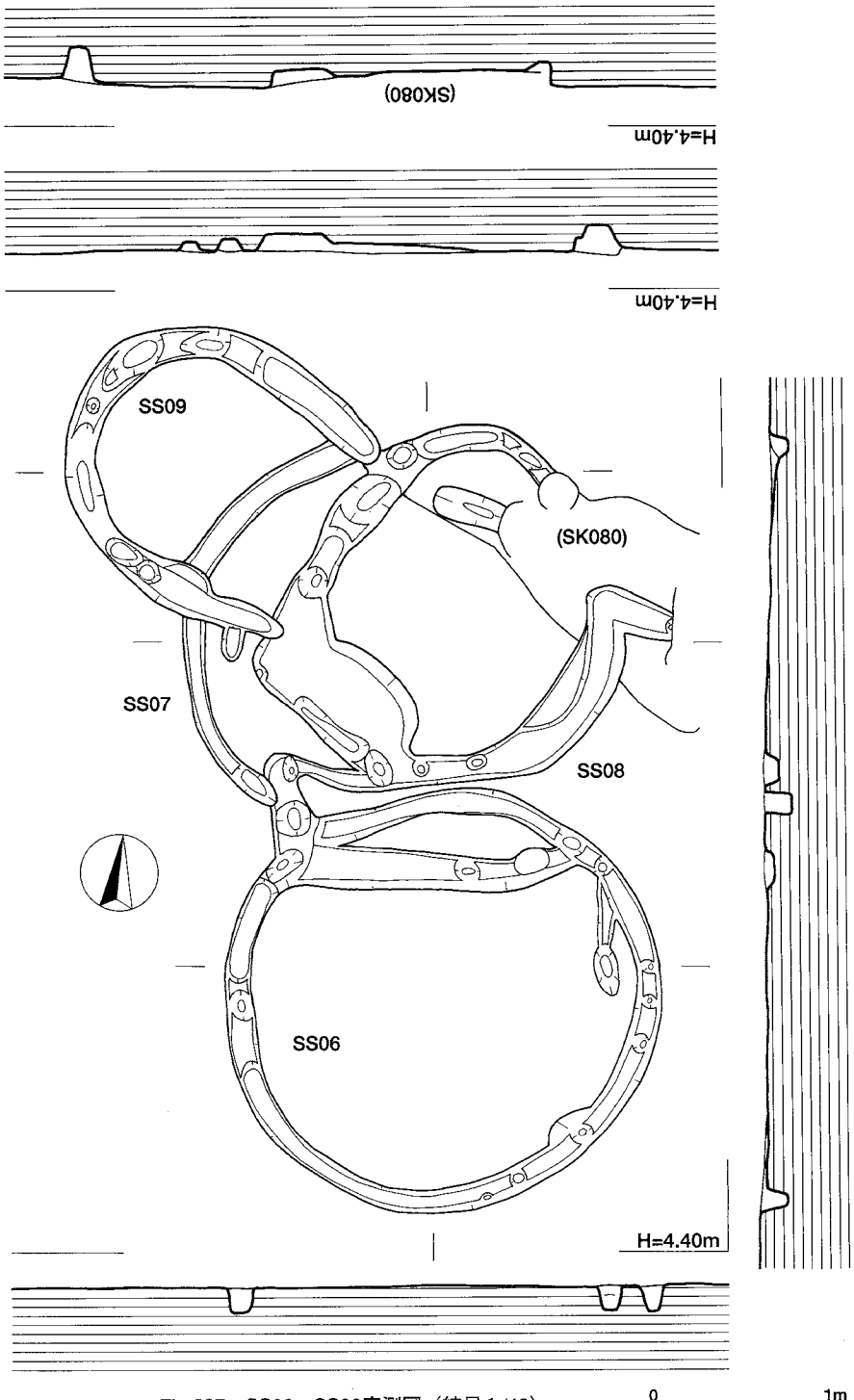


Fig.287 SS06～SS09実測図（縮尺1/40）

Fig.288 SS06～SS09

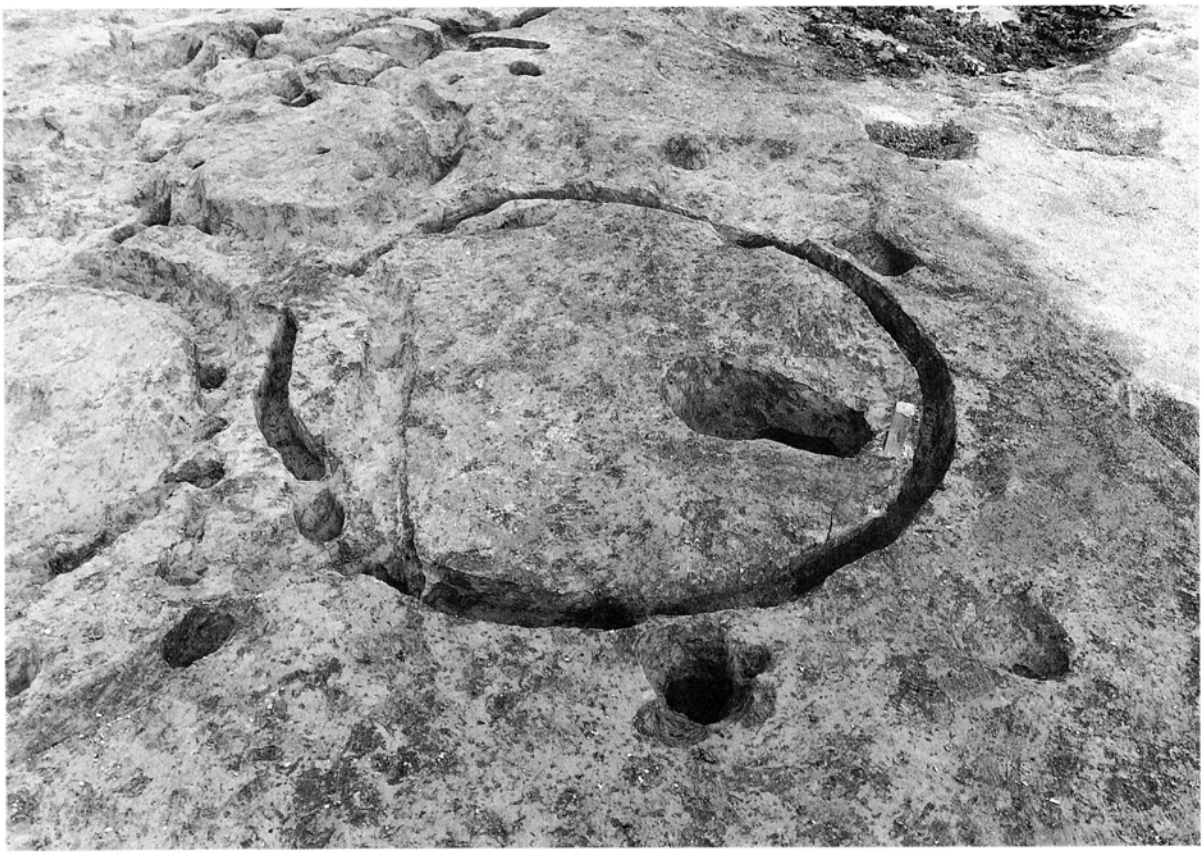


Fig.289 SS06

第11～14号円形溝SS11～SS14は竪穴住居跡SC07の南西側に位置する。4基の円形溝が重なっており、うち2基は全形を知ることができる。SS11は円形の約3分の1だけで、SS12と重なっている西側は残っていない。残存部の湾曲から直径220cm前後の大きさを推定した。溝は小ピットと重なり幅は一定に保たれていない。最大幅15cmで両端ほど細くなっている。SS12は長さ約90cmが残っているに過ぎない。きわめて浅いが、壙底に小ピットがあるなど他の円形溝の特徴を持っていることから円形溝の遺構名を付けた。SS13は5cmと浅いが径215cmの円形に辿ることができる。西側でSS14と重なり、北側の一部は竪穴住居跡SC07より切られている。SS14は円形溝のうち最も残りがよい。203cm×180cmでわずかに東西軸が短い。溝幅は約10cmでほぼ一定の幅で巡っており、壙底の深さは東側が約8cm程深い。

Fig.290　SS11の溝

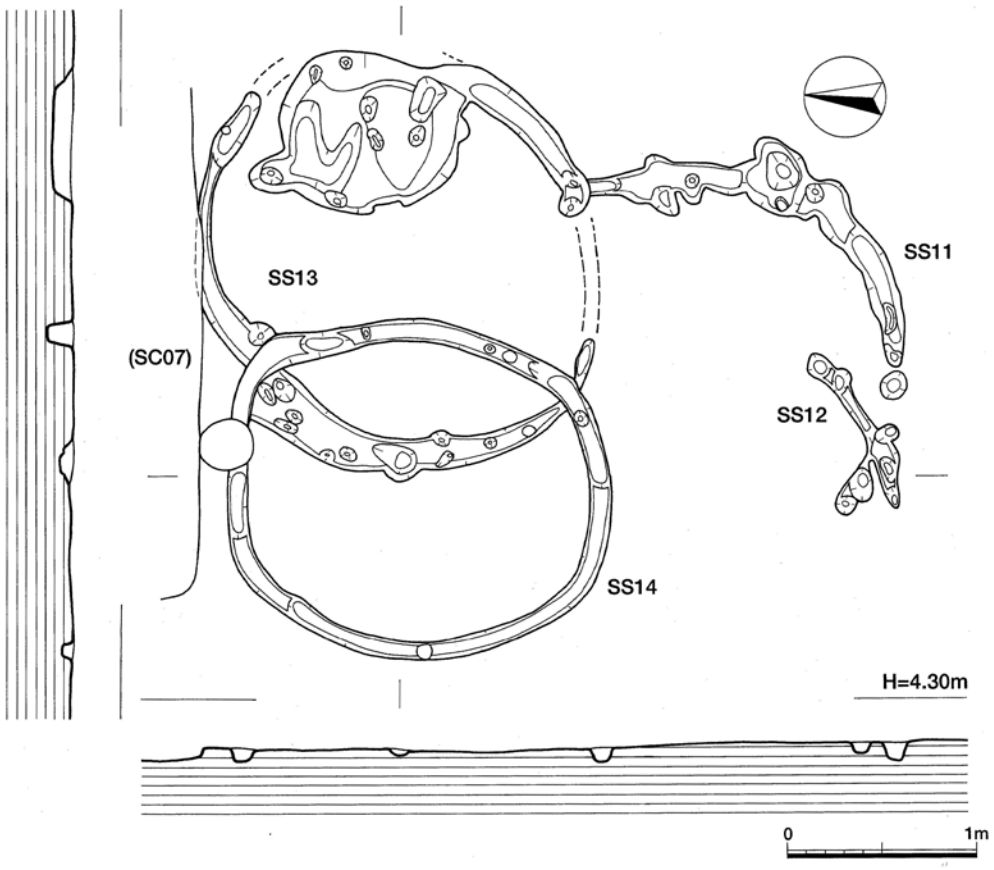


Fig.291　SS11～SS14実測図（縮尺1/40）

Fig.292 SS11～SS14

これまで円形溝の平面プランや出土遺物について記述してきた。平面プランは、円形、楕円形、隅丸長方形と多様性があるが、円形の場合、内側の面積が約3.8㎡前後でそれぞれ大きな違いはなく、一定の規格性のもとに作られた遺構と言うことができそうである。溝底の小ピットはあるものとないものがある。第12、13次の円形溝からすると、本来は一定の間隔を置いて並んでいたと思われるが第10次の場合は、初見の遺構だったために私の指示が発掘作業員に徹底せず掘り間違った可能性が強い。出土遺物や他遺構との切り合い、重複からすると、弥生時代前期後半以前の時期を推定したが、肝心の機能、用途については決め手となる資料を得ることができなかった。福岡県工業技術センターの鳥丸貞恵専門研究員（現 大阪芸術大学教授）よりいただいた中国貴州省撮影のブタ小屋写真や中国吉林大学陳國慶先生の教示などからブタなどの家畜小屋ではないかと推定した。

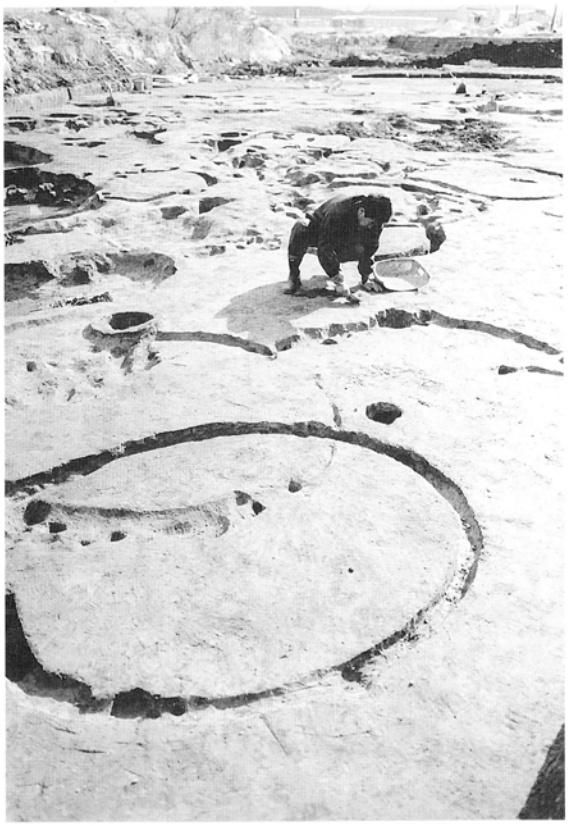


Fig.293 円形溝の検出作業

第3章 おわりに

1．小 結

雀居遺跡の発掘調査によって得られた新しい知見、そして成果は数多いが、最大の収穫は、長い間埋蔵文化財の空白地帯であった福岡空港内で遺跡を確認できたことを上げることが出来よう。13次までの発掘調査面積は、計約31,300㎡で福岡空港の面積3,530,850㎡からすると１％にも満たないが、逆に濃密な遺跡分布が予想される。周辺には板付遺跡をはじめとして赤穂ノ浦遺跡、宝満尾遺跡、下月隈天神森遺跡、金隈遺跡など弥生時代の有名な遺跡が点在しているが、そのほとんどは福岡空港東側の月隈丘陵上に立地しており、しかも墓地、あるいは大型建物や祭祀土壙など、やや生活感の希薄な遺跡のために、弥生時代の集落や人々の暮らしぶりを総合的に把握することが出来なかった。各遺跡の甕棺墓、土壙墓など数の多さや副葬品に圧倒されるたびに、これらを生み出した当時の生産基盤や経済活動、そして集落構成や分布などの確認と関連検討が求められてきた。しかし月隈丘陵から御笠川に至る低平地の大部分を福岡空港が占め、集落と墓地、あるいは集落と水田など総合的な検討が出来ない情況であった。特に御笠川流域が日本における水稲耕作の開始地と目されており、今回の発掘調査は、雀居遺跡という一つの遺跡の解明、把握に止まらず、周辺遺跡との関連や弥生時代の開始と発展という研究命題に迫れるものと大きく期待された。

残念ながら弥生時代水田の確認までには及ばなかったが、雀居遺跡の各次報告書に記述しているように、弥生時代早期から古墳時代前期までの各種遺構、木製品をはじめとする多種多様な出土遺物などによって御笠川東岸低平地における水田開発や定住の時期、水稲農耕の技術的段階などを具体的に描くことが可能となった。もちろんすべて解明できたわけではなく、その倍もの疑問や課題が残された。その主立った成果、今後取り組むべき問題や課題などについては各次報告書に先述しているが、ここでは雀居遺跡での最初の人間の痕跡を示す遺物について記しておく。

1、**2**は縄文時代前期の曽畑式土器である。いずれも表面が磨耗はしているものの、上流から遠く流れ着いたような磨耗ではない。**1**はP23グリッド第Ⅲ面掘り下げで出土した。口縁部の小破片で、胎土に滑石粒を多量に含み、黒みを帯びた茶褐色を呈する。両面のナデ調整後、径2㎜の棒状施文具で沈線文様を施している。左側の沈線は横方向に３本施しているが、右側の文様は間隔を狭くし、おそらく弧状をなすものと思われる。左側の沈線は割りに深い。口縁部の厚さは6.2㎜。小片のために口径は測定できない。**2**は第Ⅲ面の掘り下げで出土した。同じように滑石粒を多量に含み、外面は明るい茶褐色で内面はわずかに黒みを帯びている。器面に滑石粒が露出し、また軽い磨耗のせいもあって滑らかとなっている。破片は片側が次第に厚くなっていることから、丸底の底部付近と思われる。器壁は厚い部分で7.6㎜を測る。胎土、色調などから同一個体の破片ではない。これらの遺物は、縄文時代前期から人々の活動範囲になっていたことを確かに物語る遺物であるが、縄文時代前期土器の出土は第10、12、13次調査ではこの２点のみで定住的には利用されることはなかったようだ。時として御笠川の氾濫原となるこの低平地は縄文人を長く拒み続けるが、水稲という生業の変化がもたらされた縄文時代晩期(弥生時代早期)になって、低平地という土地条件が最大限に活かされることになる。第12次調査のまとめでは、13次に及ぶ調査成果を基にして雀居ムラの復元や人々の暮らしぶりを想像してみよう。

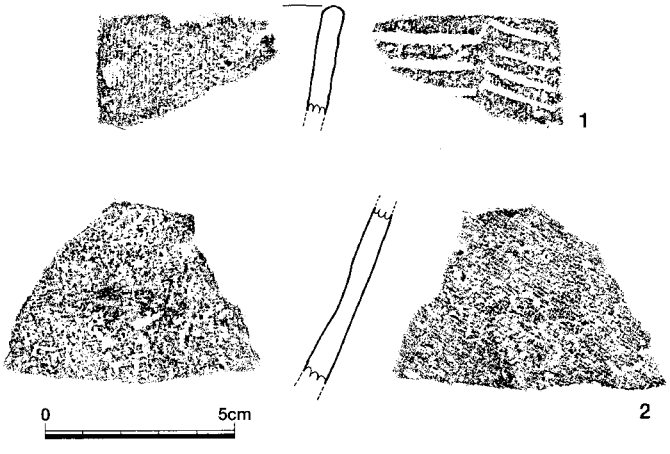


Fig.294 第Ⅱ面の掘り下げの遺物

Sasai Sites Ⅶ: 10th campaign of the excavation

Fukuoka city, which is located in the northern region of Kyushu, has played an important role in Japanese history as an entrance to accept culture, men and things from the Asian continent.

Fukuoka Airport as a gateway of Modern times need a new facility due to rapid increased air traffics; therefore, the rescuer excavations of the Sasai sites was carried out before development.

The Sasai sites are situated at a low terrace on the east bank of Mikasa River, and the area including the Sasai sites is known to the oldest one for the rice cultivation in Japan. Near the sites including the Itazuke site, important sites of the Yayoi period have been found. As a result, the excavation of the Sasai sites was expected to came to light the settlement and rice cultivation of the beginning of the Yayoi period.

The excavations of 1991 through 1998 lasted the thirteen campaigns, and during the campaigns archaeological remains and artifacts belonging to the early Yayoi period (4th century B.C.) through the late Heian period (11th century A.D.) were unearthed. The Sasai sites helped to bring us the important archaeological finds and results.

This is the report of the 10th campaign. Archaeological remains belonging to the Ⅰ through Ⅳ phase were excavated.

Ⅰ phase belongs to rice fields of the 9th through 10th century, and the field were neatly planed in rectangular shape. Unearthed objects and the orientation of the plan indicate the plan based on the Jyori-se system, but the fields were destroyed by flood and covered with thick layer of sand.

Ⅱ phase belongs to the settlement of the late Yayoi through the early Kofun period (3rd through 4th century A.D.). Pit-dwellings and wells were found, and many piled earthenwares in holes seem to be used for religious ceremonies. These remains and objects can help to imagine not only daily life, religious attitude, but also tools of those days.

Ⅲ phase belongs to the settlement of the Early Yayoi through the first half of the Middle Yayoi period (3rd through 1st century B.C.). Pit-dwellings, pits, tombs, and hollows were found. Above all, human bones survived in three tombs. Human bones show a custom of Jomon period such as extracting teeth, and we can see a transitional state to a new area, the Yayoi period. Many animal and fish bones, and carbonized rice grains found in the pits and deposit can assume not only the circumstance of food of those days, but also the extent where people moved around and economical activities.

Ⅳ phase belongs a circular ditch of two meters in diameter. This seems to be a foundation of a small barn to keep pigs. In order to make sure the assumption, scientific analyses of animal bones and soil were carried out. These results appear in the supplement.

（英訳：林田憲三）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第７４６集

福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

笹（ささ）井（い）7

平成15年（2003年）３月31日

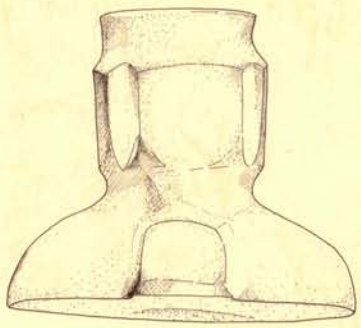
発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１－８－１
電　話　０９２－７１１－４６６７
ＦＡＸ　０９２－７３３－５５３７

印　刷　福博綜合印刷株式会社
福岡県福岡市博多区堅粕3－16－36

Results of the 10th excavation of the Sasai sites

SASAI 7

Report of Archaelogicai Investigations of Fukuoka city, Vol.746



把頭飾
Pommel

March 2003

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN